



全国鳥類越冬分布調査報告

2016 - 2022年

bird-atlas.jp



全国鳥類越冬分布調査報告 2016-2022 年

The Report of the Japan Wintering Bird Atlas: 2016 -2022

植田睦之・奴賀俊光・山崎優佑

特定非営利活動法人 バードリサーチ

公益財団法人 日本野鳥の会

全国鳥類越冬分布調査は、全国鳥類繁殖分布調査と並行して、2016年1月から2022年2月までの越冬期に実施したものです。環境庁により1984-1986年に第3回自然環境保全基礎調査として越冬期の鳥類の分布が調べられており、それと比較することで、現在の鳥の状況と過去からの変遷を明らかにすることができました。調査にあたっては、396人の方にアンケート情報を提供していただき、それにバードリサーチの野鳥記録データベース「フィールドノート」の情報、日本野鳥の会の探鳥会データベース、eBird Japan、環境省のモニタリングサイト1000の情報等をあわせて、分布図を描きました。

その結果、451種を記録し、309種について分布図を作成することができました。また、分布の拡大している鳥、縮小している鳥も明らかになりました。この成果は、今後、レッドリストの改定、保護区の選定、気候変動の鳥への影響を考えていく上でも非常に有用な情報になると思われます。

今回の調査は、調査に直接参加された方、データベースを通じて貢献いただいた方などたくさんの団体、個人の協力をなくして実施することはできませんでした。貴重な時間をさいて調査、観察をし、分布情報の提供にご協力いただいた皆様へ、ここに厚く御礼申し上げます。

2023年2月 バードリサーチ・日本野鳥の会

要約

全国鳥類越冬分布調査は、2016年1月から2022年2月までの越冬期に実施した。396人の調査参加者の協力の元、全国から105,660件のアンケート調査結果が届いた。また、788,148件のデータベース等からの情報をあわせ、451種が記録された。日本を40kmメッシュで区切り、10メッシュ以上の記録のある種あるいは、もともと局所的に分布する種309種について分布図を作成し、1980年代に実施された環境庁の調査結果と比較した。

記録されたメッシュ数の最も多い種は、ヒヨドリ、ハシブトガラス、ツグミ、シジュウカラ、ハシボソガラスの順で、1980年代と上位種の顔ぶれには大きな違いはなかった。

分布拡大が顕著だった鳥は、ガビチョウ、ハクガン、ソウシチョウ、シジュウカラガン、コウノトリが上位となり、外来種や再導入された種が上位を占めた。それ以外の上位種は浅水域や地上で採食する水鳥類が多かった。減少種は、セキセイインコ、ウズラ、ササゴイ、ヤマセミ、チュウサギが上位となり、全国鳥類繁殖分布調査でも減少が示された種が多かった。

樹上性、草原性、森林の地上性の鳥、海鳥、猛禽類では分布に顕著な北上や南下の傾向はなかった。それに対して、開けた場所に生息する地上採食性の鳥や、浅水域を利用する鳥、陸水域でも見られる水中採食の鳥、そして空中採食の鳥は北へ分布を拡大している種が多かった。これらの特性を持つ鳥の多くは積雪や凍結の影響を受けやすいと考えられ、積雪や凍結の減少により、北に分布が広がっている可能性がある。また、空中採食性の鳥は、冬期に食物が減るため、その多くは夏鳥である。温暖化はこうした生活史を持つ鳥が日本で越冬できるようになることにつながると考えられ、それを反映している可能性がある。

目次			
調査方法	1	キジバト	28
調査結果	2	キンバト	28
エゾライチョウ	3	アオバト	29
ライチョウ	3	ズアカアオバト	29
ウズラ	4	アビ	30
ヤマドリ	4	オオハム	30
キジ	5	シロエリオオハム	31
サカツラガン	5	コウノトリ	31
ヒシクイ	6	カツオドリ	32
ハイイロガン	6	ヒメウ	32
マガン	7	カワウ	33
カリガネ	7	ウミウ	33
ハクガン	8	サンカノゴイ	34
シジュウカラガン	8	リュウキュウヨシゴイ	34
コクガン	9	ズグロミゾゴイ	35
コハクチョウ	9	ゴイサギ	35
オオハクチョウ	10	ササゴイ	36
ツクシガモ	10	アカガシラサギ	36
オシドリ	11	アマサギ	37
オカヨシガモ	11	アオサギ	37
ヨシガモ	12	ムラサキサギ	38
ヒドリガモ	12	ダイサギ	38
アメリカヒドリ	13	チュウサギ	39
マガモ	13	コサギ	39
カルガモ	14	クロサギ	40
ハシビロガモ	14	トキ	40
オナガガモ	15	ヘラサギ	41
シマアジ	15	クロツラヘラサギ	41
トモエガモ	16	ソデグロヅル	42
コガモ	16	カナダヅル	42
オオホシハジロ	17	マナヅル	43
ホシハジロ	17	タンチョウ	43
アカハジロ	18	クロヅル	44
メジロガモ	18	ナベヅル	44
キンクロハジロ	19	アネハヅル	45
スズガモ	19	シマクイナ	45
コスズガモ	20	オオクイナ	46
シノリガモ	20	ヤンバルクイナ	46
ビロードキンクロ	21	クイナ	47
クロガモ	21	シロハラクイナ	47
コオリガモ	22	ヒクイナ	48
ホオジロガモ	22	バン	48
ミコアイサ	23	オオバン	49
カワアイサ	23	ヒメアマツバメ	49
ウミアイサ	24	タゲリ	50
コウライアイサ	24	ケリ	50
カイツブリ	25	ムナグロ	51
アカエリカイツブリ	25	ダイゼン	51
カンムリカイツブリ	26	ハジロコチドリ	52
ミミカイツブリ	26	イカルチドリ	52
ハジロカイツブリ	27	コチドリ	53
カラスバト	27	シロチドリ	53
		メダイチドリ	54
		オオメダイチドリ	54
		ミヤコドリ	55
		セイタカシギ	55
		ソリハシセイタカシギ	56
		ヤマシギ	56
		アマミヤマシギ	57
		アオシギ	57
		タシギ	58
		オオハシシギ	58
		オオソリハシシギ	59
		チュウシャクシギ	59
		ダイシャクシギ	60
		ホウロクシギ	60
		ツルシギ	61
		アカアシシギ	61
		コアオアシシギ	62
		アオアシシギ	62
		クサシギ	63
		タカブシギ	63
		キアシシギ	64
		ソリハシシギ	64
		イソシギ	65
		キョウジョシギ	65
		ミユビシギ	66
		トウネン	66
		ヨーロッパトウネン	67
		オジロトウネン	67
		ヒバリシギ	68
		ウズラシギ	68
		ハマシギ	69
		エリマキシギ	69
		タマシギ	70
		ミフウズラ	70
		ミツユビカモメ	71
		ユリカモメ	71
		ズグロカモメ	72
		ウミネコ	72
		カモメ	73
		ワシカモメ	73
		シロカモメ	74
		セグロカモメ	74
		オオセグロカモメ	75
		ニシセグロカモメ	75
		オニアジサシ	76
		ハシブトウミガラス	76
		ウミガラス	77
		ケイマフリ	77
		ウミスズメ	78
		カンムリウミスズメ	78
		ウトウ	79
		ミサゴ	79
		カタグロトビ	80
		トビ	80

オジロワシ	81	シジウウカラ	107	タヒバリ	134
オオワシ	81	ヒバリ	108	アトリ	134
カンムリワシ	82	ツバメ	108	カワラヒワ	135
チュウヒ	82	リュウキュウツバメ	109	マヒワ	135
ハイロチュウヒ	83	イワツバメ	109	ベニヒワ	136
ツミ	83	シロガシラ	110	ハギマシコ	136
ハイタカ	84	ヒヨドリ	110	ベニマシコ	137
オオタカ	84	ウグイス	111	オオマシコ	137
サシバ	85	ヤブサメ	111	ギンザンマシコ	138
ノスリ	85	エナガ	112	イスカ	138
ケアシノスリ	86	ムジセッカ	112	ウソ	139
クマタカ	86	キマユムシクイ	113	シメ	139
オオコノハズク	87	メグロ	113	コイカル	140
リュウキュウコノハズク	87	メジロ	114	イカル	140
フクロウ	88	オオセッカ	114	ユキホオジロ	141
アオバズク	88	セッカ	115	ホオジロ	141
トラフズク	89	キレンジャク	115	ホオアカ	142
コミミズク	89	ヒレンジャク	116	コホオアカ	142
ヤツガシラ	90	ゴジウウカラ	116	カシラダカ	143
カワセミ	90	キバシリ	117	ミヤマホオジロ	143
ヤマセミ	91	ミソサザイ	117	ノジコ	144
アリスイ	91	ギンムクドリ	118	アオジ	144
コゲラ	92	ムクドリ	118	クロジ	145
コアカゲラ	92	コムクドリ	119	シベリアジュリン	145
オオアカゲラ	93	カラムクドリ	119	コジュリン	146
アカゲラ	93	ホシムクドリ	120	オオジュリン	146
クマゲラ	94	カワガラス	120	コジュケイ	147
アオゲラ	94	トラツグミ	121	インドクジャク	147
ヤマゲラ	95	クロツグミ	121	コクチョウ	148
ノグチゲラ	95	マミチャジナイ	122	コブハクチョウ	148
チョウゲンボウ	96	シロハラ	122	カワラバト(ドバト)	149
コチョウゲンボウ	96	アカハラ	123	シラコバト	149
ハヤブサ	97	アカコッコ	123	セキセイインコ	150
サンショウクイ	97	ツグミ	124	ホンセイインコ	150
モズ	98	ノハラツグミ	124	サンジャク	151
アカモズ	98	アカヒゲ	125	ガビチョウ	151
オオカラモズ	99	ノゴマ	125	ヒゲガビチョウ	152
カケス	99	ルリビタキ	126	カオグログビチョウ	152
ルリカケス	100	ジョウビタキ	126	カオジログビチョウ	153
オナガ	100	ノビタキ	127	ソウシチョウ	153
カササギ	101	イソヒヨドリ	127	ハッカチョウ	154
ホシガラス	101	(ニシ)オジロビタキ	128	インドハッカ	154
コクマルガラス	102	イワヒバリ	128	ベニスズメ	155
ミヤマガラス	102	カヤクグリ	129	シマキンバラ	155
ハシボソガラス	103	ニューナイスズメ	129	ギンバラ	156
ハシブトガラス	103	スズメ	130	ヘキチョウ	156
ワタリガラス	104	ツメナガセキレイ	130	ブンチョウ	157
キクイタダキ	104	キセキレイ	131	1. 日本の越冬鳥の現状	158
ツリスガラ	105	ハクセキレイ	131	2. 分布の増減とその要因	160
ハシブトガラ	105	セグロセキレイ	132	3. データの公開	163
コガラ	106	マミジロタヒバリ	132	引用文献	164
ヤマガラ	106	ビンズイ	133	調査協力者	167
ヒガラ	107	ムネアカタヒバリ	133		

調査方法

全国鳥類越冬分布調査は、全国鳥類繁殖分布調査と並行して、2016年1月から2022年2月までの越冬期に実施したものである。環境庁により1984-1986年に第3回自然環境保全基礎調査として越冬期の鳥類の分布が調べられており(環境庁 1988), それと比較することで、現在の鳥の状況と過去からの変遷を明らかにした。

調査はバードリサーチと日本野鳥の会が事務局を務め、自然保護助成基金より助成を受けて実施した。全国鳥類繁殖分布調査参加者に2016年1月から2022年2月の越冬期の観察情報の提供を呼びかけ、Web サイト(<https://www.bird-atlas.jp/winter.html>)から、情報提供を依頼した。また、バードリサーチ会員、モニタリングサイト1000調査の参加者等にも呼びかけを行なった。

これらの情報だけでなく、データベース等からの情報も収集した。データベース情報としては、バードリサーチの野鳥記録データベース「フィールドノート」の情報、日本野鳥の会の探鳥会データベース、eBird Japan の情報を利用した。「フィールドノート」の情報および eBird Japan の情報には、識別あるいは入力の違いと思われる情報が含まれていた。「フィールドノート」の情報については、できるだけ観察者に問い合わせて修正をしたが、問い合わせへの回答のないものや、eBird Japan の情報のうち、本来の分布域でないと考えられたものについては、事務局の判断で削除した。また、環境省のモニタリングサイト1000の鳥類調査の結果、各種文献の情報等も収集した。

これらのデータを標準地域メッシュ2次メッシュ16個を束ねた約40km四方のメッシュ(図1)に集約し、分布図にした。分布図の作成に当たっては、少数が不定期に渡来する種を除外するために、この40kmメッシュで10メッシュ以上の記録のある種、および島に生息する種やツル類のように、もともと局所的に分布する種を対象とし、309種について分布図を作成した。

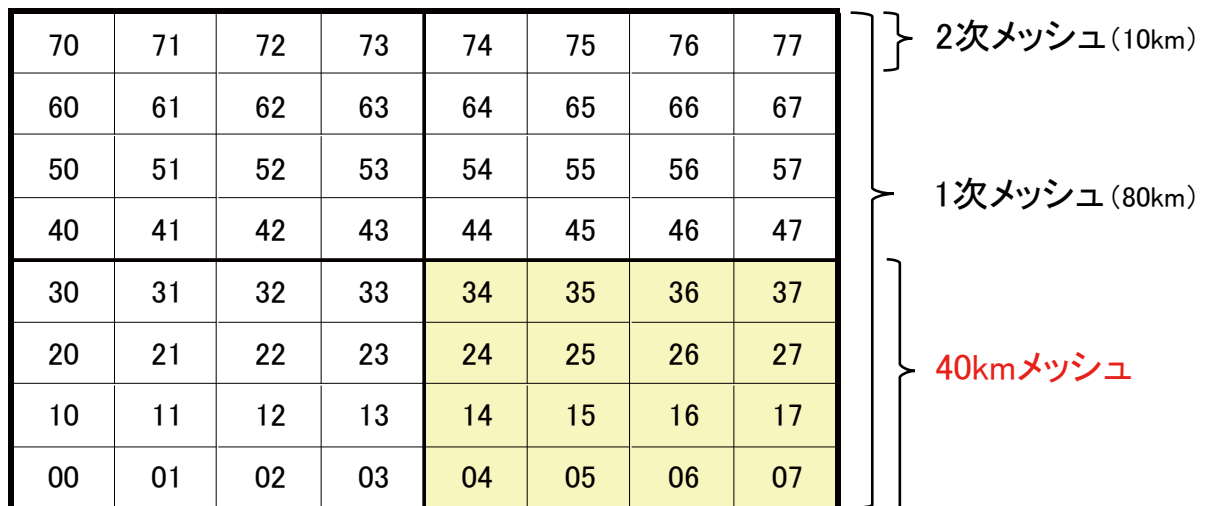


図1 本調査で使用した40kmメッシュと1次メッシュ、2次メッシュとの関係

調査結果

合計 396 人の調査参加者から 105,660 件の越冬情報が寄せられた。それに、バードリサーチの「フィールドノート」のデータ 383,269 件, eBird Japan のデータ 316,113 件, 探鳥会データベースのデータ 61,124 件, モニタリングサイト 1000 および文献等のデータ 27,642 件をあわせて集計した。

その結果, 451 種が記録された。このうち, 10 メッシュ以上の分布がある種に島など局所的に分布する種をあわせた 309 種について分布図を作成し, 次頁以降に示した。1984-1986 年(以下 1980 年代とする)は現地調査を実施しており, 今回の 2016-2022 年(2010 年代とする)の調査は普段の観察データの収集と, データの質に差があり, 詳細な比較が難しいため, メッシュサイズを 40km メッシュと大きくとって集約することで, この問題の緩和をはかった。ただし, 1980 年代は 338 メッシュの情報に基づいており, 2010 年代は 370 メッシュに基づいており, 対象メッシュ数が違うこと, また 1980 年代は, 種子島, 屋久島, 奄美大島, 徳之島, 伊豆諸島の多くの島で調査が行なわれていなかったため(図 2), 分布図の比較においては注意が必要である。

分布図ページに示されている各種の計測値の出典や, 写真の撮影者は巻末の付表で確認することができる。出典は, 1 がバードリサーチの生態図鑑によるもの(詳細は QR コード参照), 2 が JAVIAN データベース(高川ほか 2011)によるもの, 3 が榎本(1941), 4 が国立環境研究所(online), 5 が del Hoyo et al. (1994), 6 が RSPB (online) に基づくものである。

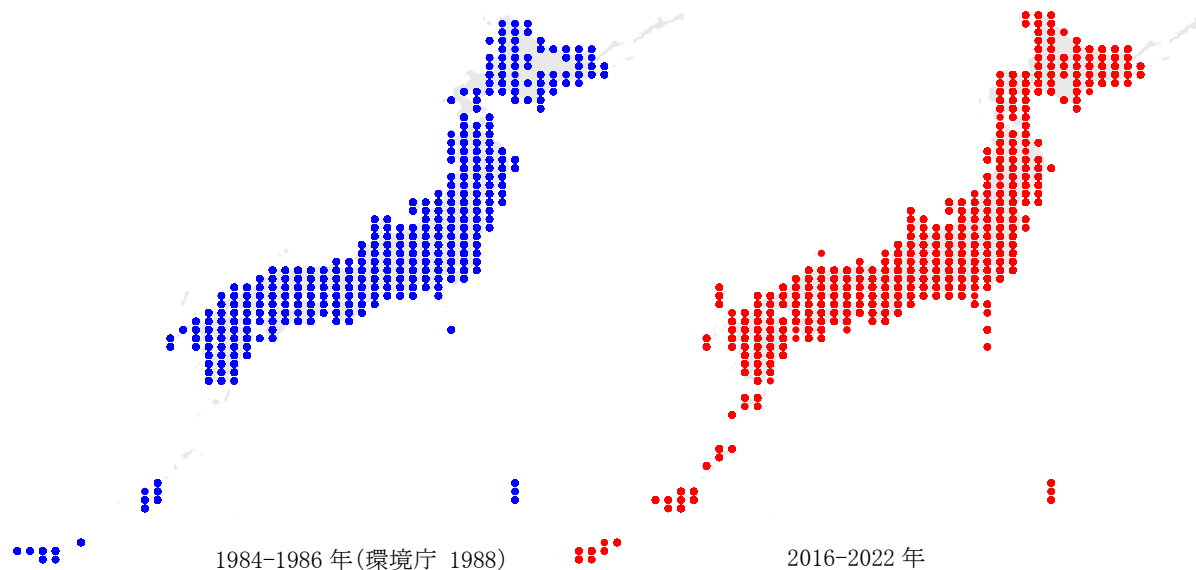
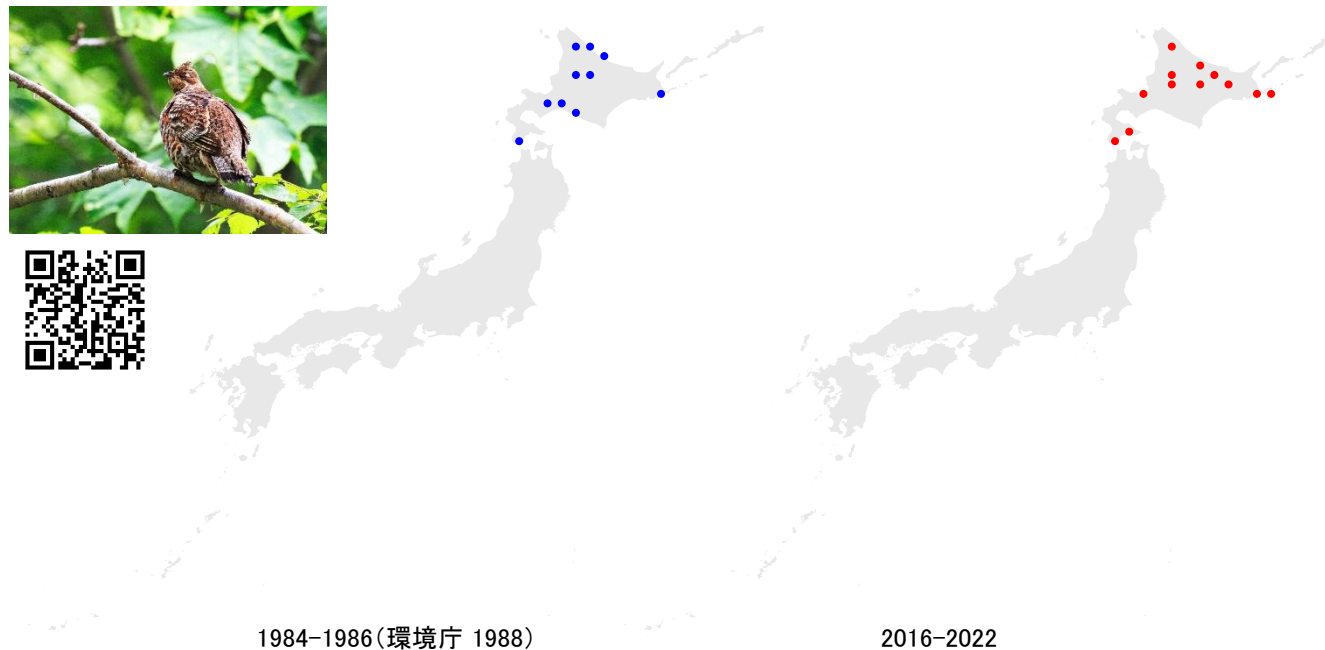


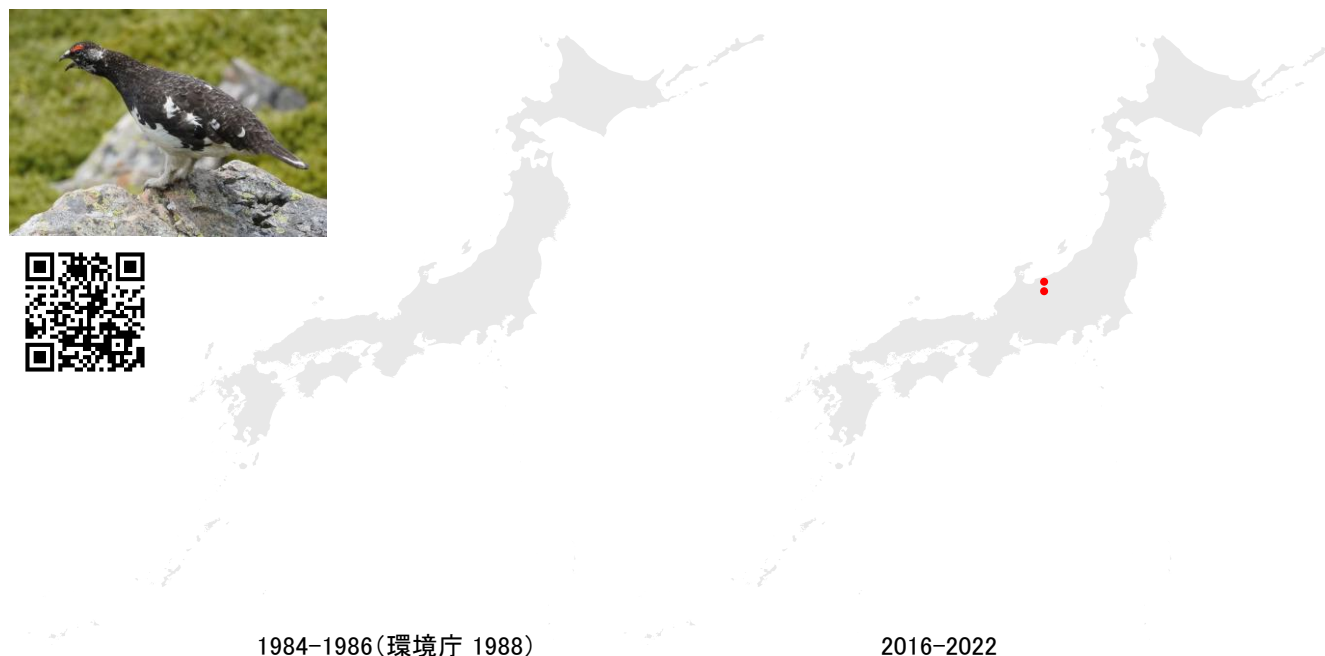
図 2 1980 年代, 2010 年代調査で情報の得られたメッシュ

エゾライチョウ *Tetrastes bonasia* 全長：36cm 体重：♂339-432g ♀319-421g



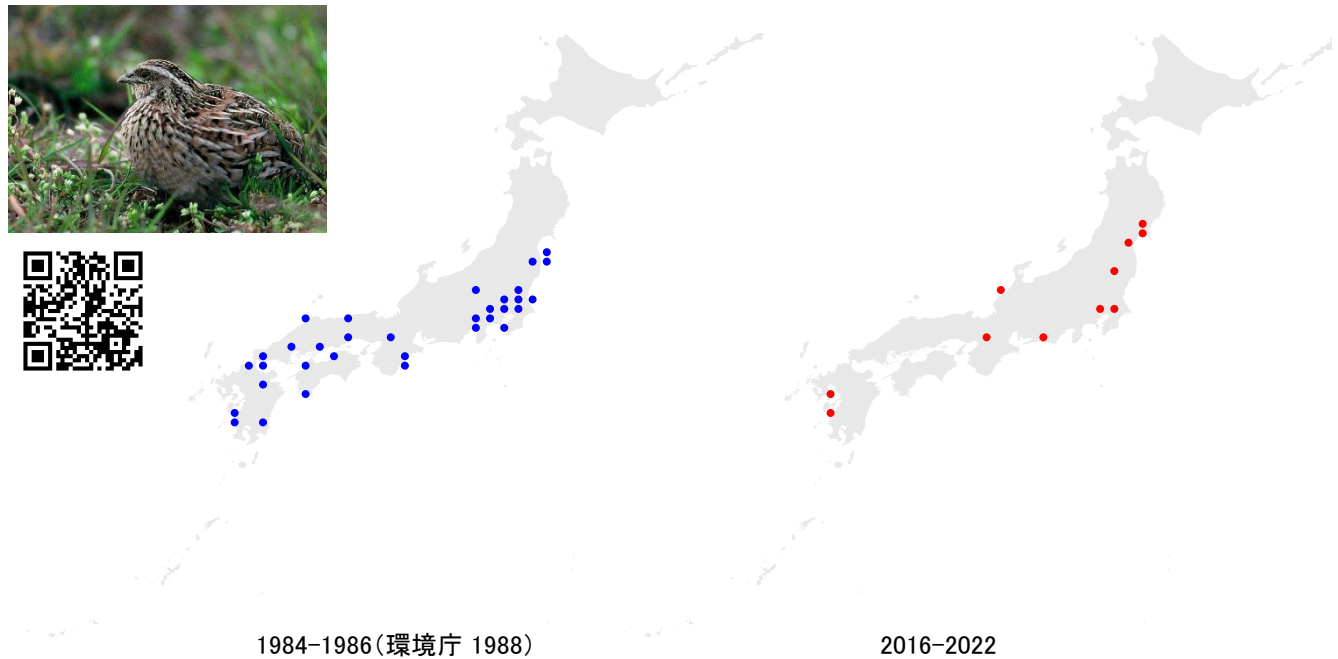
北海道に留鳥として分布する。1980年代と2010年代で記録メッシュ数にも大きな変化はなく、分布にも大きな変化はなかった。

ライチョウ *Lagopus muta* 全長：35.0-37.8cm 体重：424.9-604.1g



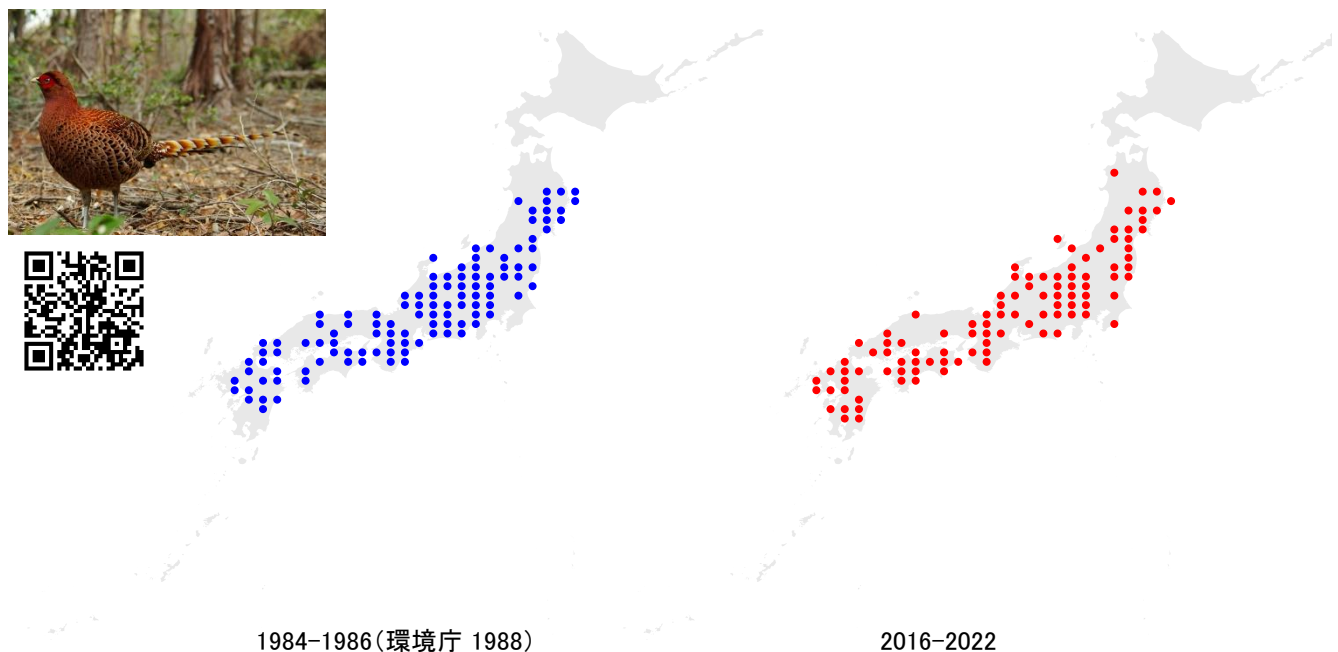
中部山岳地帯の高山帯に生息する。越冬期は高山帯からやや標高を下げ亜高山帯で越冬することが知られているが(小林・中村 2018), 調査・観察の困難な場所に生息しているため、分布情報は少ない。1980年代に分布情報がなく、2010年代も情報が少ないのはそれが原因である。

ウズラ *Coturnix japonica* 全長：17-19cm 体重：♂84-114g ♀90-115g



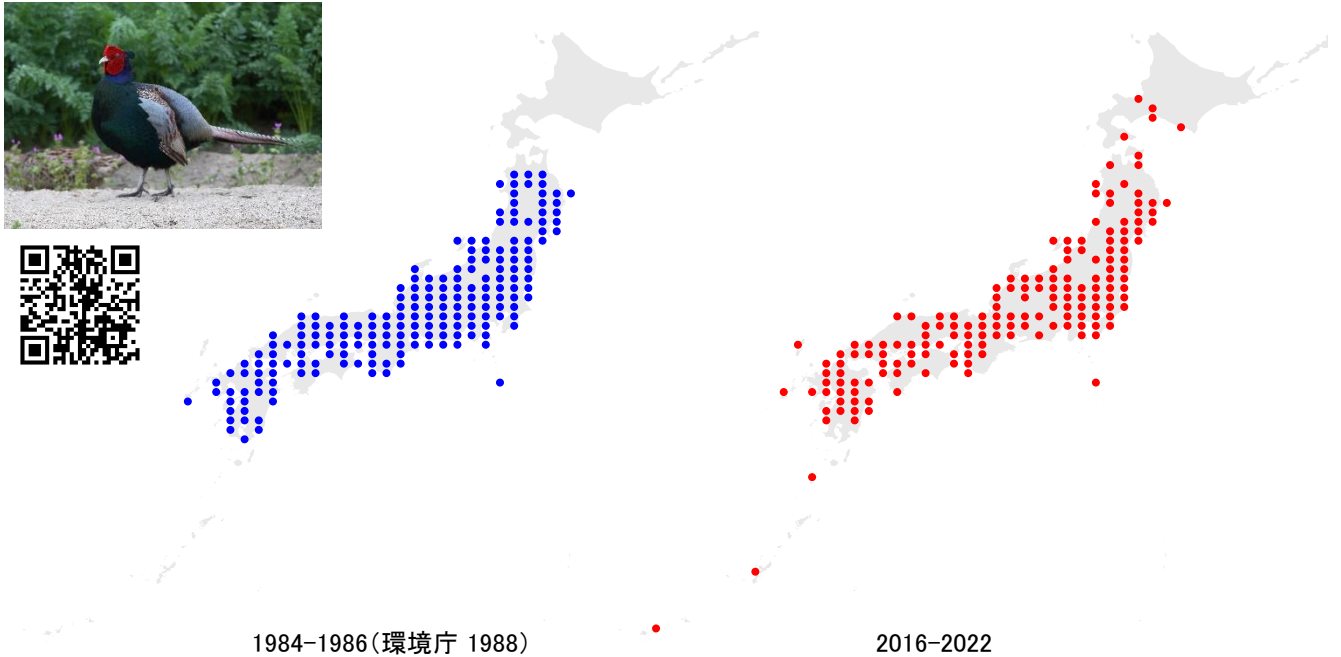
本州中部以北で繁殖し，東北以南で越冬する。1980年代と2010年代では記録メッシュ数は約3分の1に減少したが，繁殖分布が1990年代から2010年代にかけて拡大した(植田・植村 2021)のと同様に，各地の情報を聞くところでは，近年はやや回復傾向にあると思われる。

ヤマドリ *Syrmaticus soemmerringii* 全長：♂125cm ♀55cm 体重：♂943-1348g ♀745-1000g



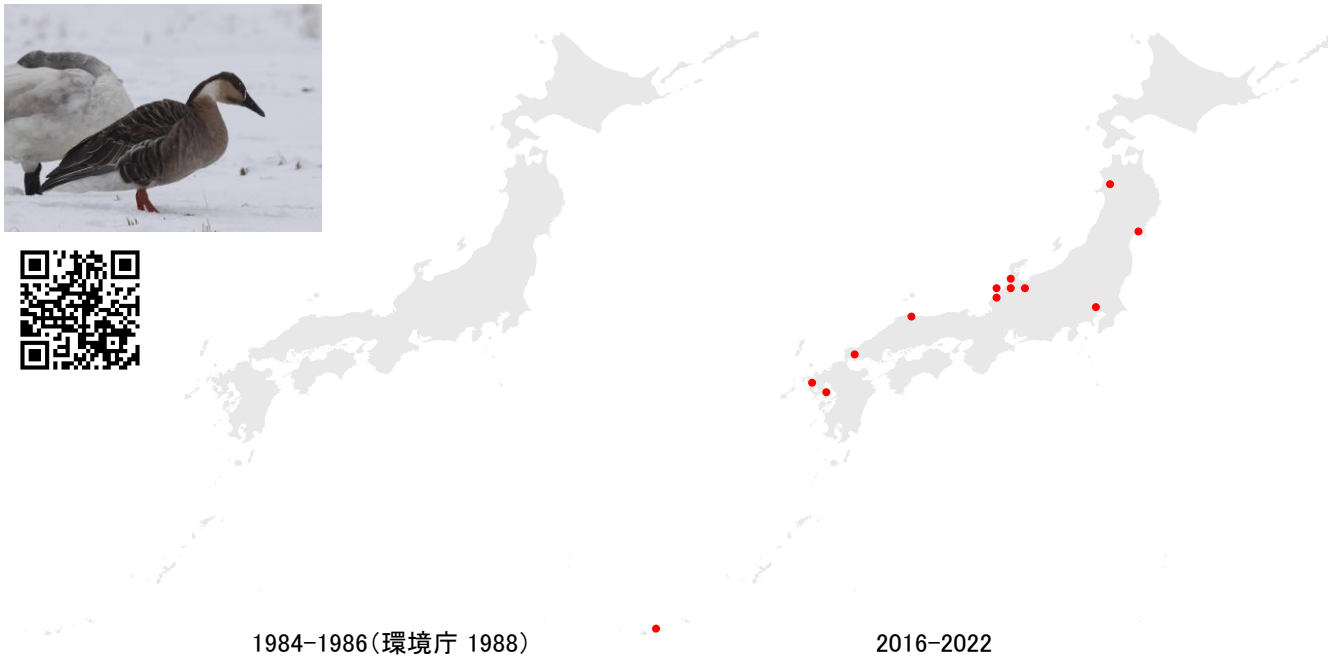
本州，四国，九州に留鳥として生息し，5亜種に分けられている。繁殖期の分布は1970年代から1990年代にかけて記録メッシュ数が減少し，1990年代から2010年代にかけて拡大していたが(植田・植村 2021)，越冬期の分布には大きな変化はなかった。

キジ *Phasianus colchicus* 全長：60-80cm 体重：♂847-1387g ♀692-970g



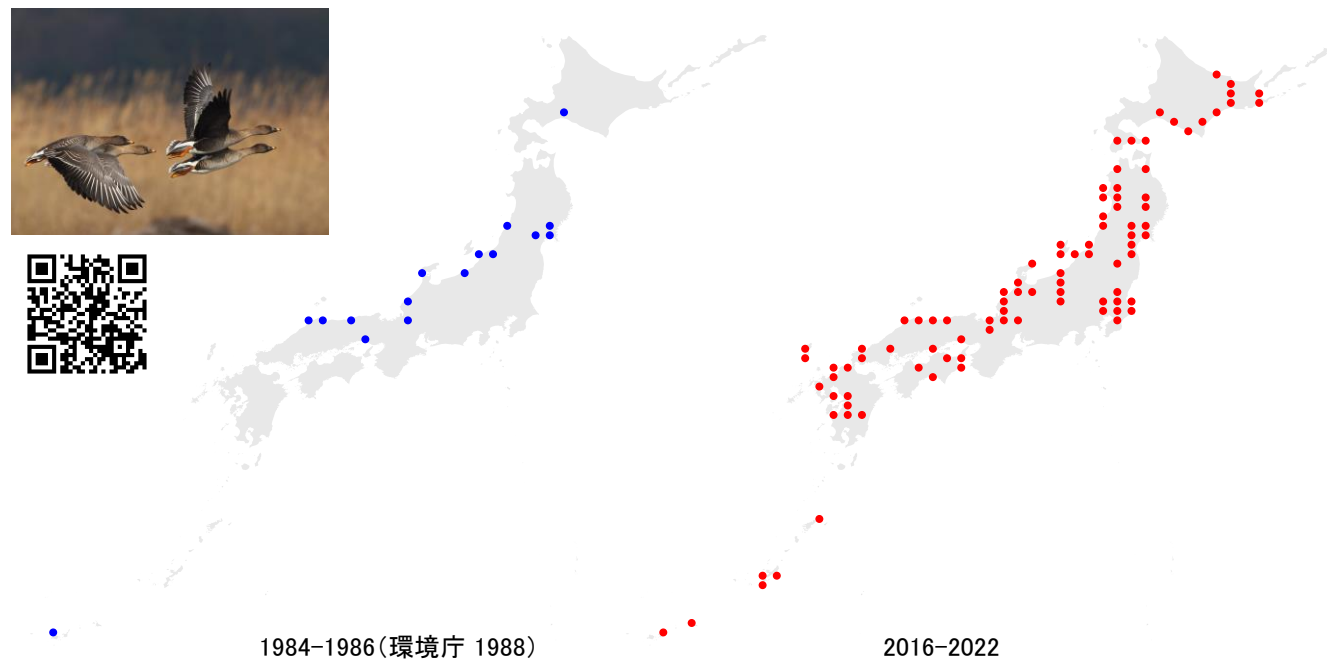
本州，四国，九州に生息する。こうした自然分布のほかに北海道や対馬，南西諸島，伊豆諸島に放鳥されたキジが定着している。繁殖期の分布は北日本など積雪の多い地域で拡大していたが(植田・植村 2021)，越冬期にはそのような傾向はなかった。季節移動しているのか，冬は目立たないためなのかは不明である。

サカツラガン *Anser cygnoides* 全長：81-94cm 体重：2800-4200g



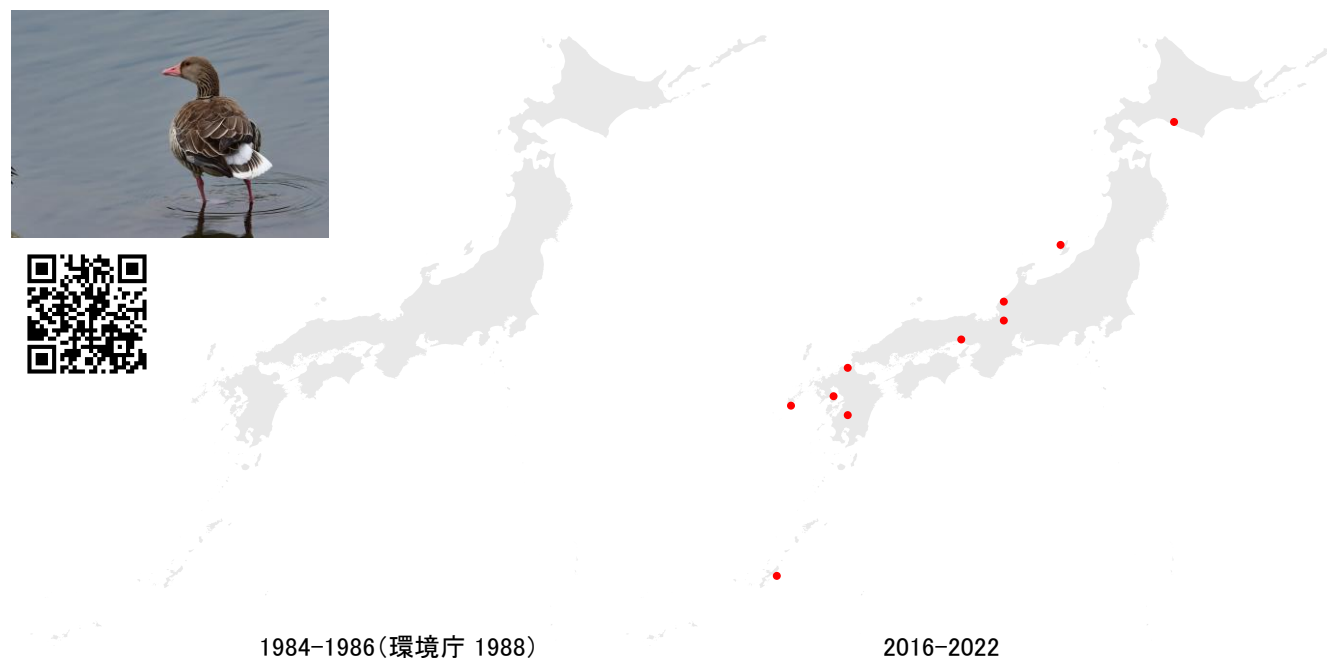
主に中国南部で越冬する。日本ではかつては東京湾などにも渡来していたが，現在は稀に渡来する冬鳥で，1980年代には記録がなかったが，2010年代東北地方から南西諸島にかけて，局所的に記録された。

ヒシクイ *Anser fabalis* 全長：78-89cm 体重：2800-4200g



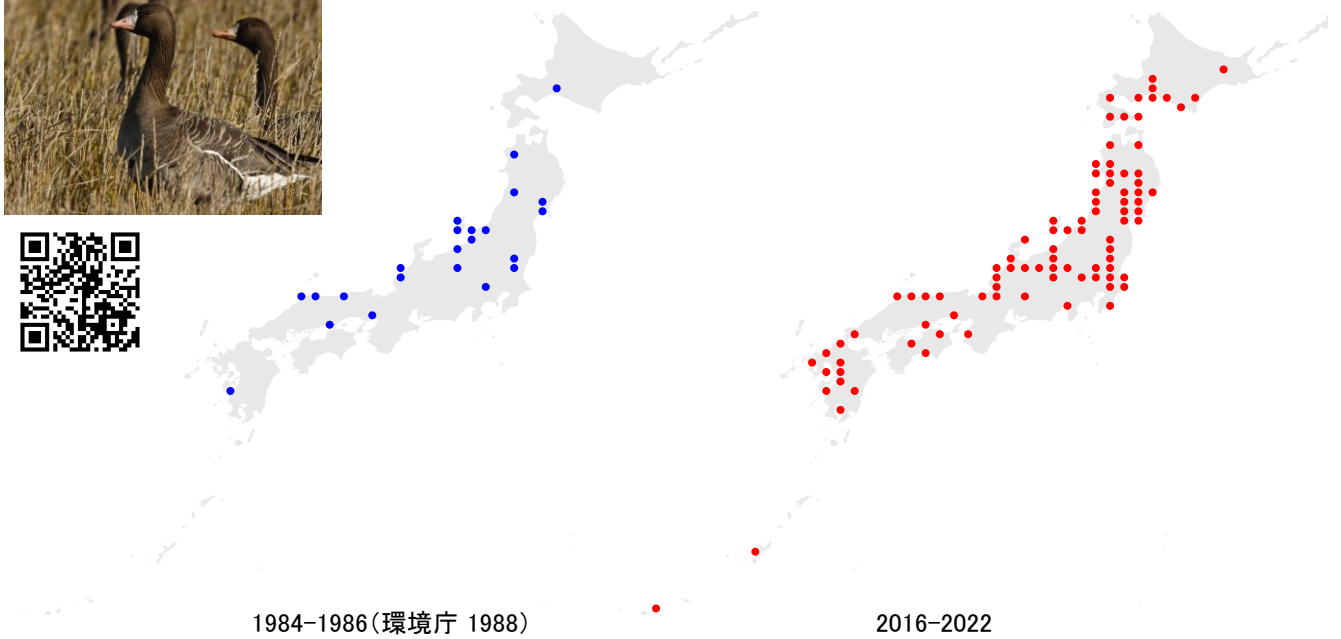
湖沼や河川，内湾に生息する。1980年代は主に北海道や本州北部や日本海側に分布していたが，2010年代には分布が拡がり，四国・九州・沖縄でも記録された。

ハイロガン *Anser anser* 全長：75-90cm 体重：2000-4500g



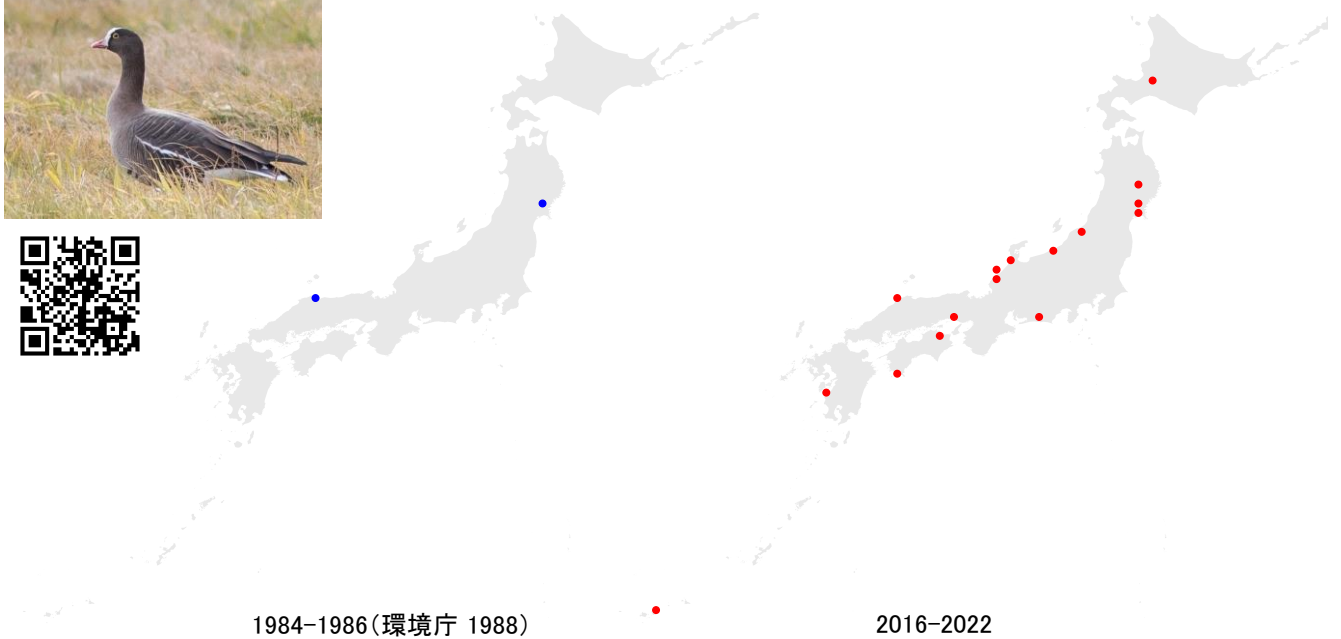
アフリカからユーラシア大陸にかけて広く越冬し，東アジアでは中国南部で越冬する。日本では稀に渡来する冬鳥で，1980年代には記録がなかったが，2010年代は局所的に記録された。

マガン *Anser albifrons* 全長：66-86cm 体重：2265-3205g



1970年代に狩猟禁止など保護対象となって以降、個体数は増加しているが、渡来地数は2000年代まではあまり増えていなかった(牛山・天野 2006)。しかし2010年代は1980年代と比較して大幅に分布が拡大していた。ただし、特定の地域に個体数が集中する状況は変わっていない(環境省 2022)。

カリガネ *Anser erythropus* 全長：53-66cm 体重：1400-2500g



湖沼、河川、内湾などで越冬しており、マガンの群れに混じって行動することが多い。局所的ではあるが、分布が拡大している。しかし世界的には個体数が減少傾向で、IUCN レッドリストでは絶滅危惧 VU に指定されている(BirdLife International 2018)。

ハクガン *Anser caerulescens* 全長：36-45cm 体重：♂2292g ♀1932g

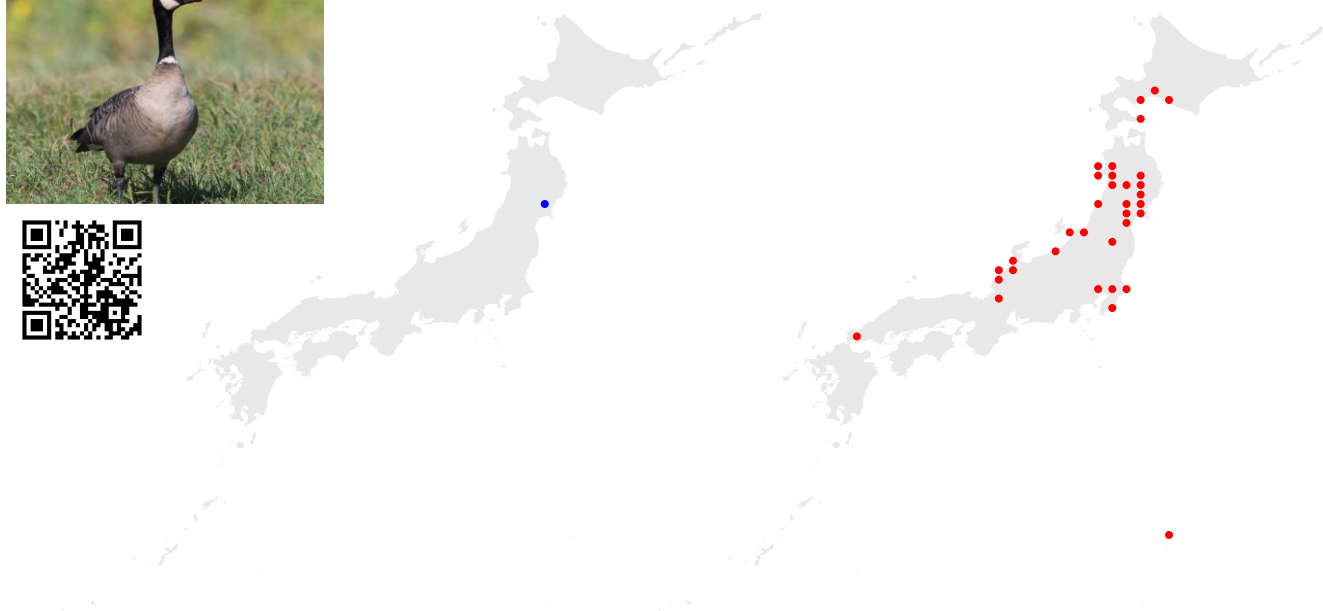


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

繁殖環境の破壊などが原因で、個体数が激減していたが、1993年に日米ロの研究者たちによって、ロシアのウランゲル島で再導入が行なわれ、その後、日本での越冬個体数が増加してきている(佐場野 2013)。分布も東北地方を中心に複数の場所で記録されていた。

シジュウカラガン *Branta hutchinsii* 全長：56-68cm 体重：2000g

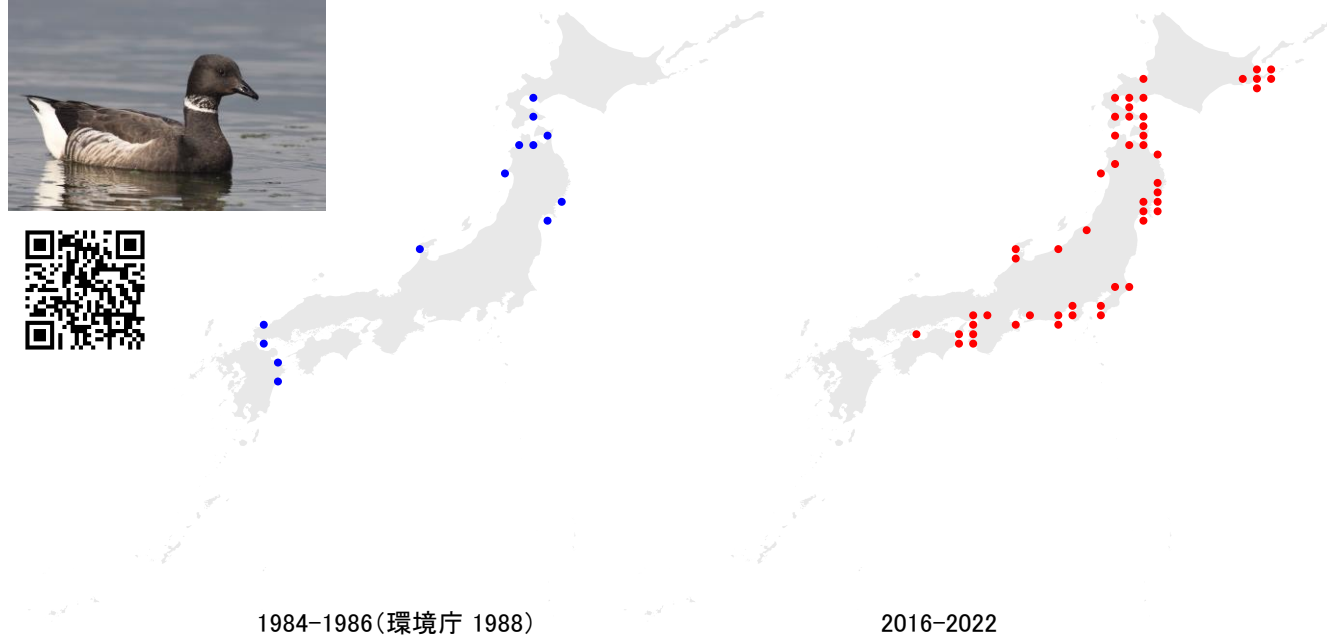


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

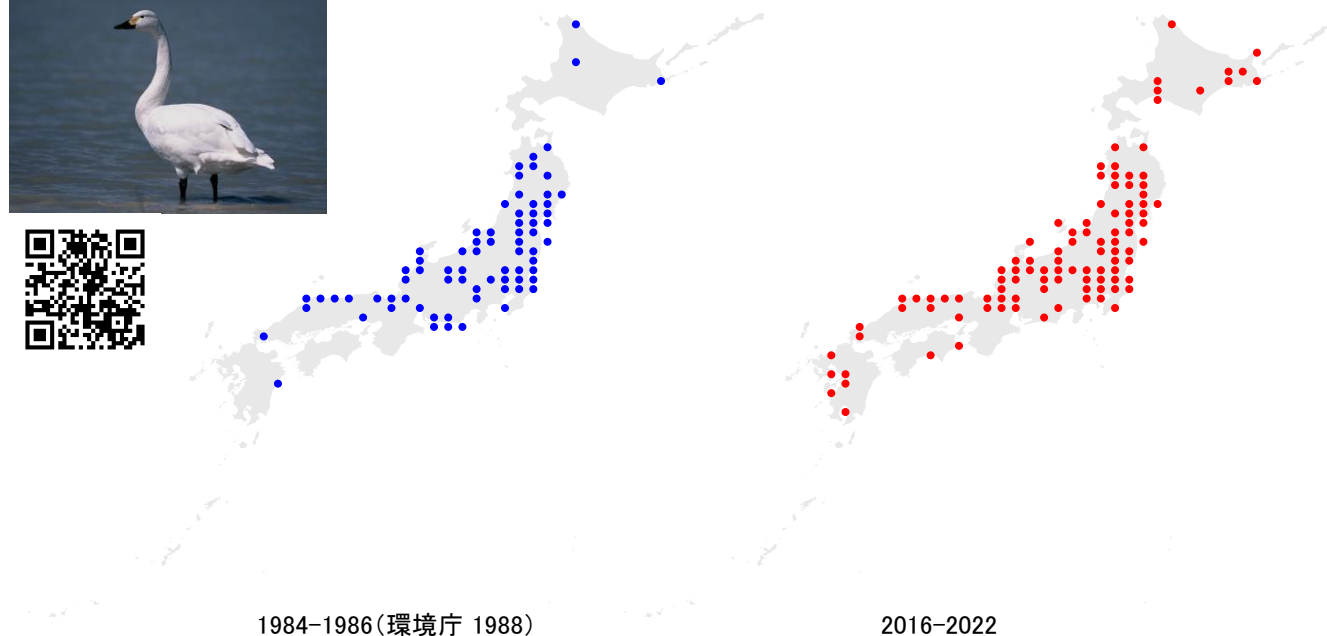
千島列島やアリューシャン列島で繁殖しており、かつては繁殖地での養狐業などが原因で絶滅の危機に瀕していたが、人工繁殖個体の再導入によって個体数は回復傾向にある(神山 2018a)。分布も1980年代は1地点のみだったが、2010年代は東北地方を中心に各地で記録されていた。

コクガン *Branta bernicla* 全長：56-63.7cm 体重：1167-1827g



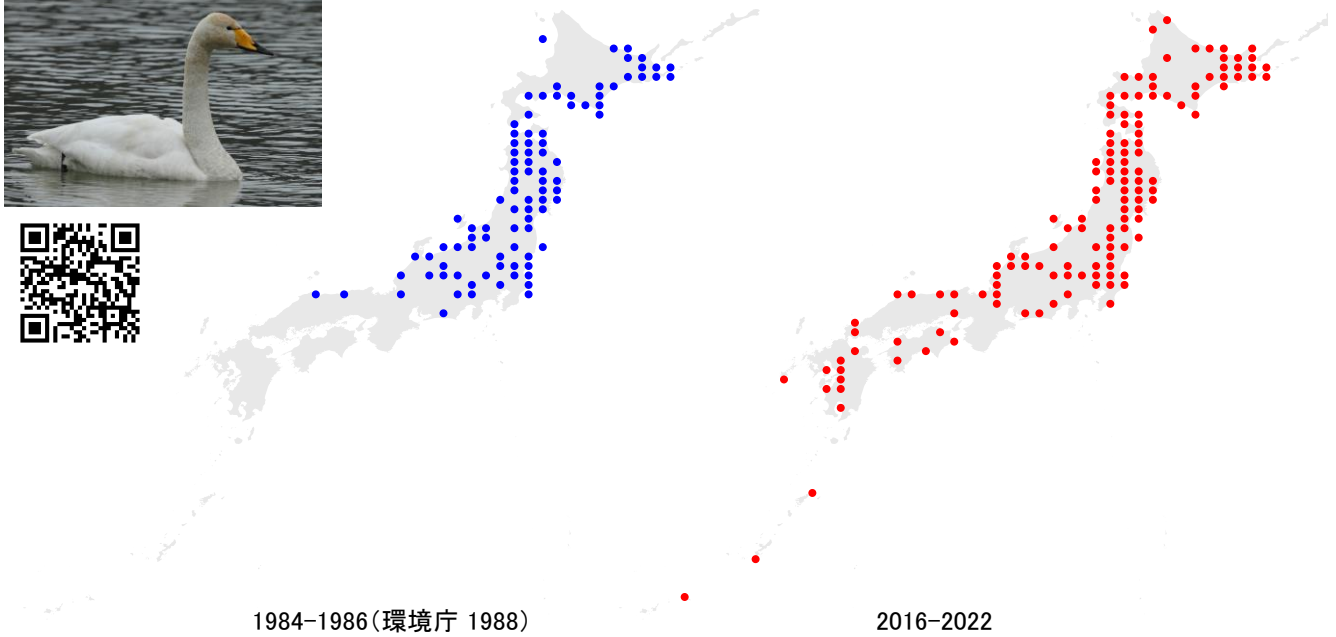
内湾や漁港・沿岸などに生息し、アマモ類や海藻などを食べる。1980年代と比較して、2010年代は、全国的に記録地点数が増加していたが、1980年代には記録された九州地方での記録はなかった。

コハクチョウ *Cygnus columbianus* 全長：115-127cm 体重：♂4900-7800g ♀3400-7200g



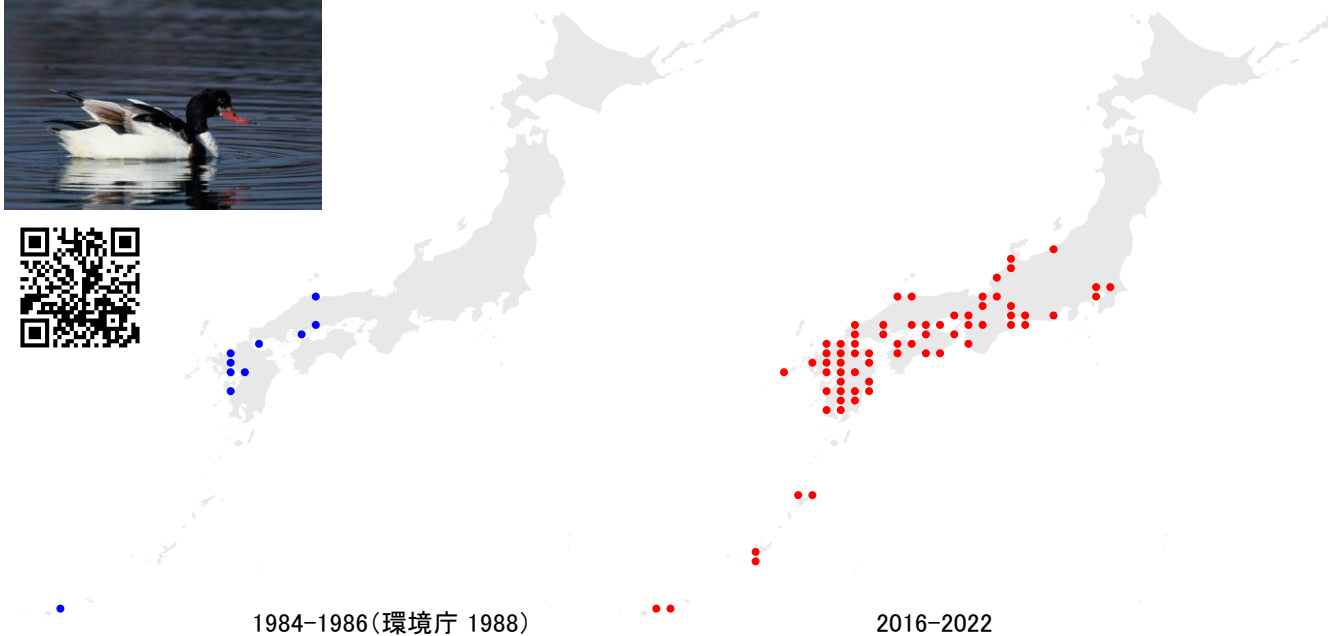
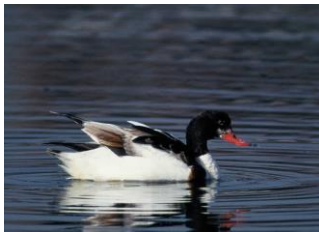
主に本州で越冬し、新潟県が特に多い(環境省 2022)。積雪が減り、稲刈り後の水田が採食場所として利用できるようになったことなどが理由として考えられている(渡辺 2010)。1980年代の記録と比較して、2010年代は北海道や西日本で記録地点が増加していた。

オオハクチョウ *Cygnus cygnus* 全長：127.9-152.6cm 体重：6750-12637.5g



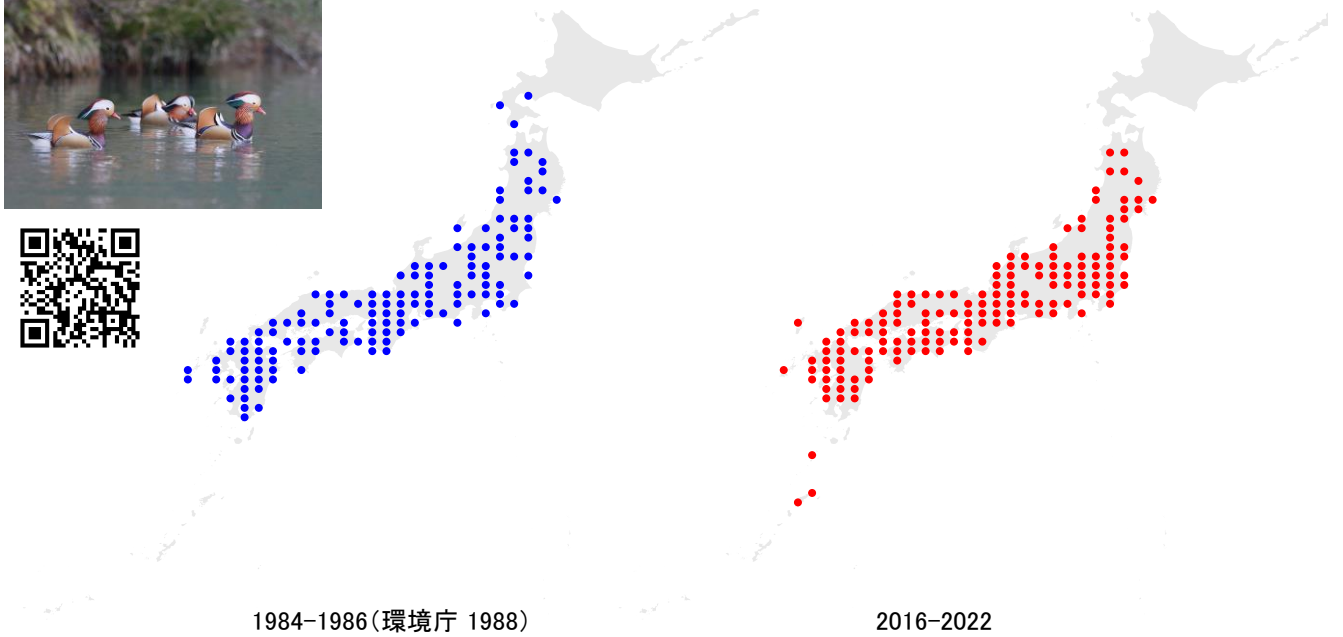
主に北日本で越冬する鳥だが、1980年代の記録と比較して、2010年代は、西日本などでも分布が拡大していた。北海道では農耕地でも採食を行なうようになっており、採食場所が増加していると考えられている(神山 2021a)。越冬個体数は2005年度まで増加していたが、その後は、減少している(環境省 2022)。

ツクシガモ *Tadorna tadorna* 全長：51-56cm 体重：700-900g



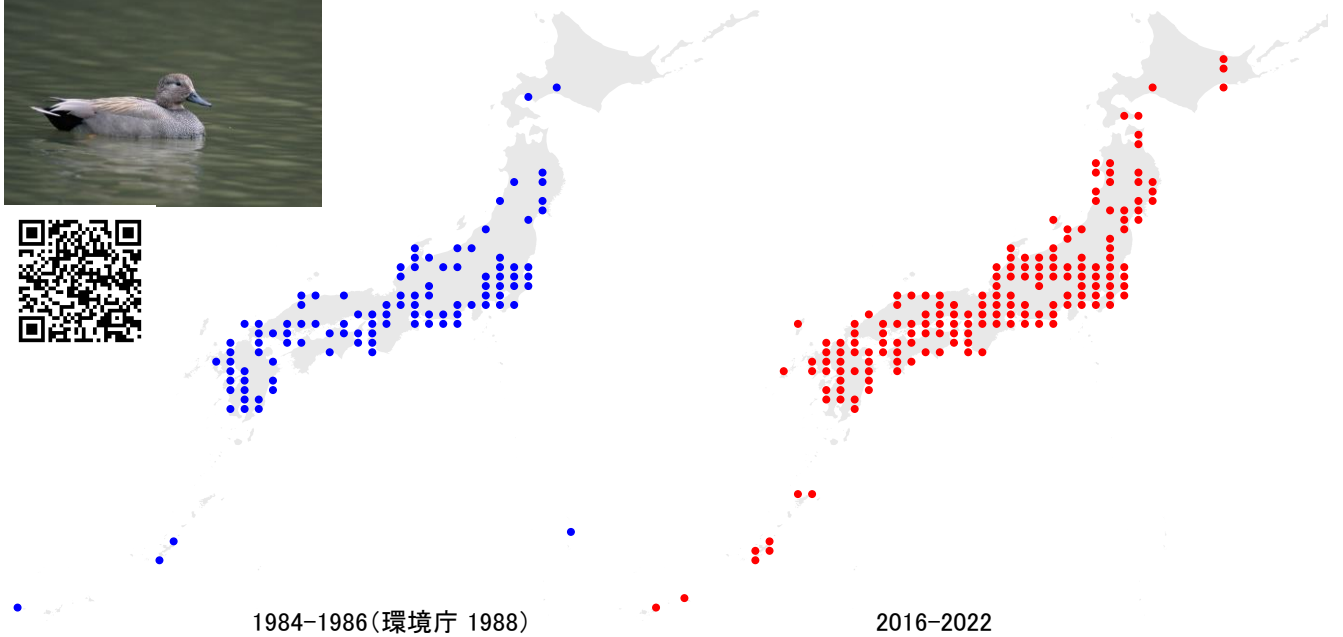
1980年代は有明海を中心に九州・中国地方で記録されていたが、2010年代は、これらの地域ほど個体数は多くないが、北の方へ分布が拡大していた。個体数は環境省の「ガンカモ類の生息調査」では、2009年度以降増加傾向となっている(環境省 2022)。

オシドリ *Aix galericulata* 全長：45cm 体重：443-550g



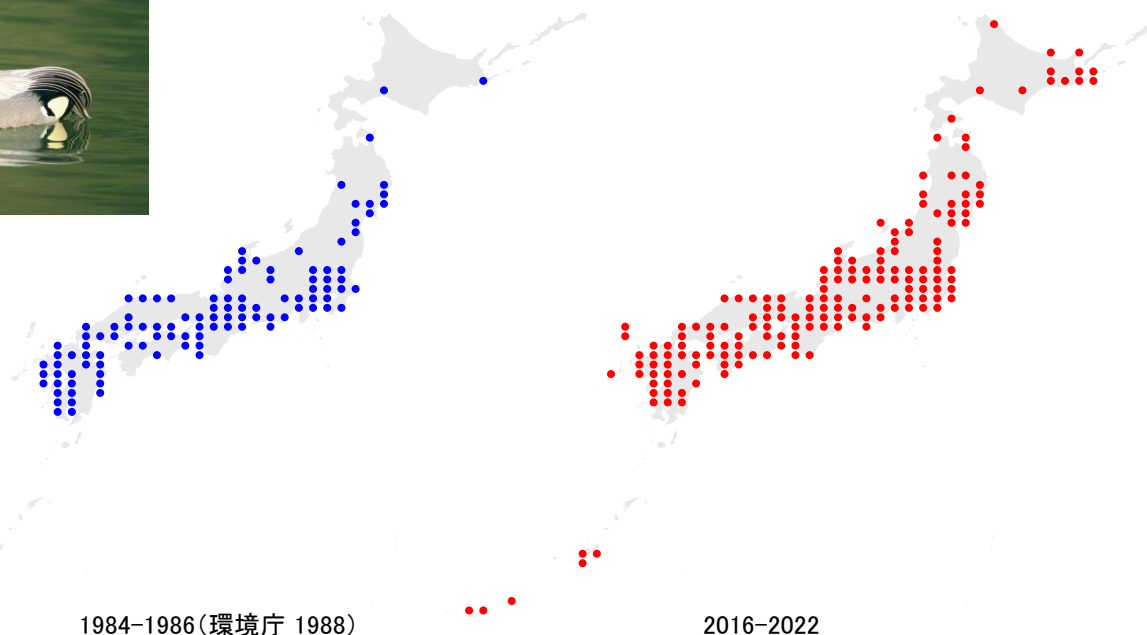
1980年代から全国各地で分布が報告されており、分布に顕著な変化はなかった。ただし、繁殖分布は1990年代から2010年代にかけて拡大していることが報告されている(植田・植村 2021)。

オカヨシガモ *Anas strepera* 全長：48-58cm 体重：850-990g



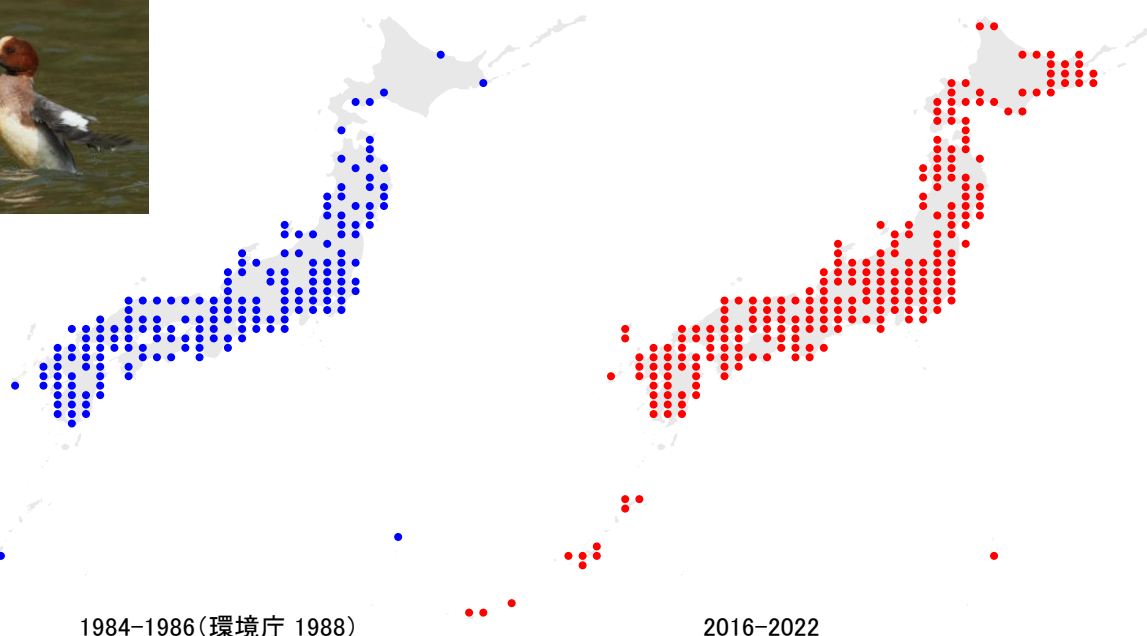
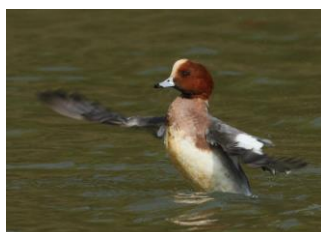
関東以西で多い種で、1980年代と比較して、2010年代はやや分布が拡大した。環境省の「ガンカモ類の生息調査」では、1980年度以降個体数が増加している(環境省 2022)。水草を主に食べ、皇居では、水質の浄化で水草が増え、オカヨシガモも増えており、全国でもそのようなことが起きているのかもしれない。

ヨシガモ *Anas falcata* 全長：46-53cm 体重：580-710g



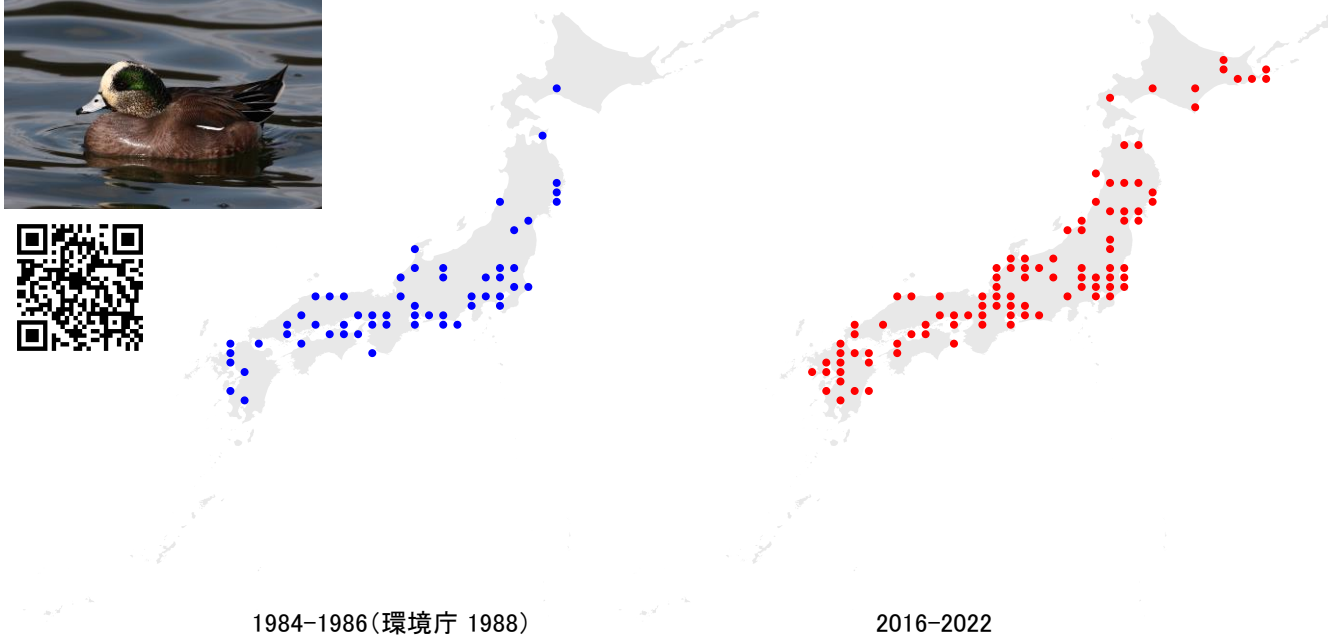
関東以西に多い鳥だったが、1980年代の記録と比較して、2010年代は主に北海道や本州の日本海側で分布が拡大していた。越冬個体数は環境省の「ガンカモ類の生息調査」では、最近の15年間は10,000-15,500羽で推移している(環境省 2022)。

ヒドリガモ *Anas penelope* 全長：43-53cm 体重：566-944g



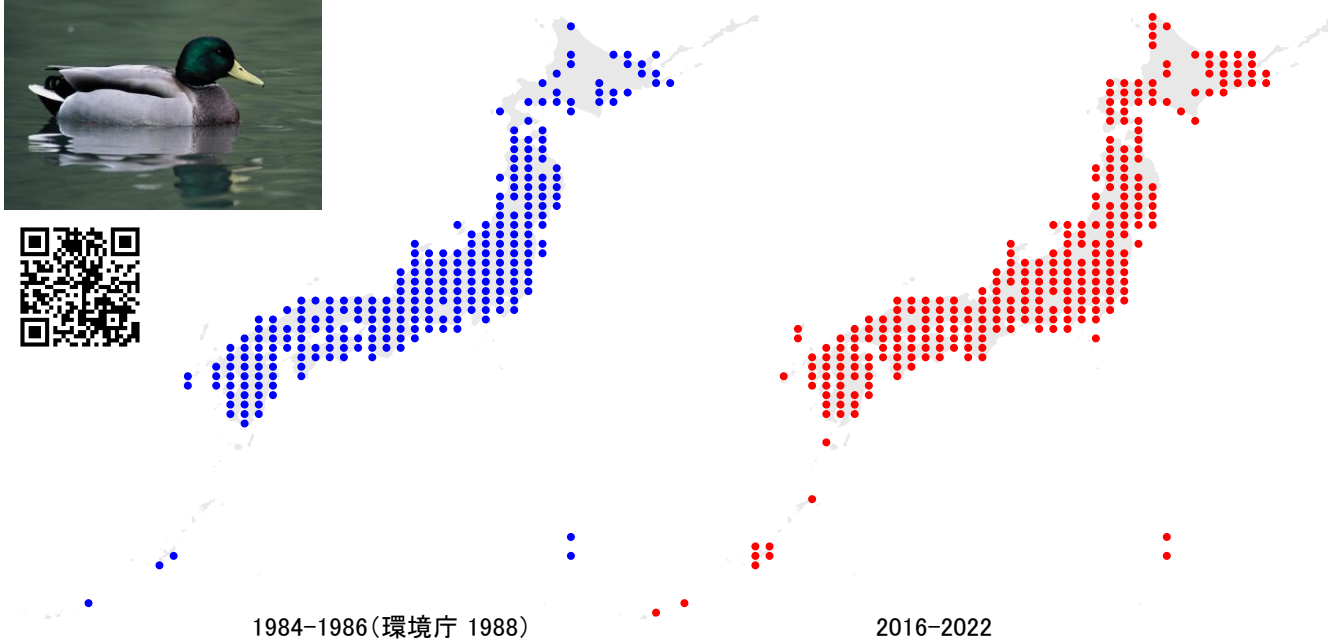
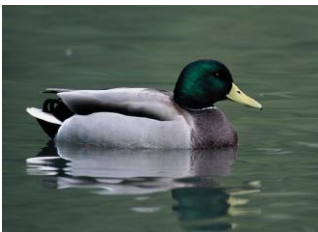
陸上の草を食べることが多く、そのため、南日本で個体数の多い種である(環境省 2022)。1980年代の記録と比較して、北海道で分布が大きく拡大しており、冬の寒さの緩和で北に分布を拡大した可能性がある。ただし、越冬個体数は、2007年度に20万羽以上に増加したが、それ以降は減少傾向にある(環境省 2022)。

アメリカヒドリ *Anas americana* 全長：46-58cm 体重：680-770g



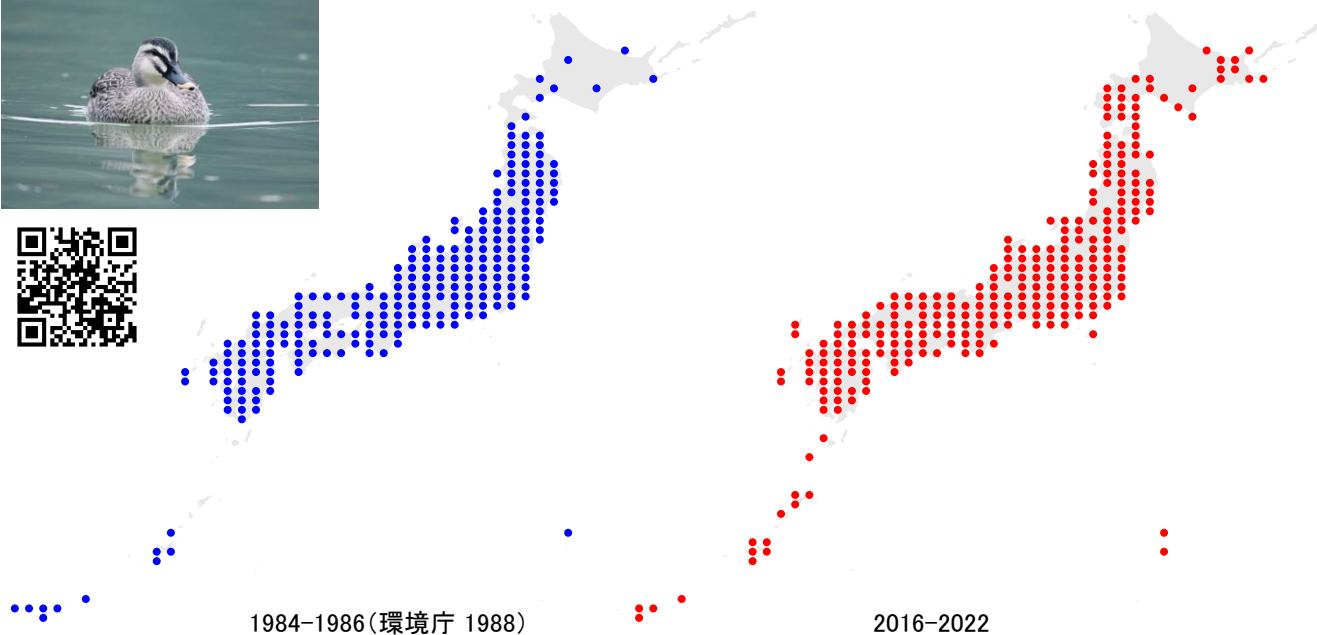
主に北米に分布する種で、日本でも少数が越冬する。1980年代の記録と比較して、2010年代は記録地点数が増加していた。ヒドリガモとの雑種も見られることがある(神山 2016)。

マガモ *Anas platyrhynchos* 全長：56-65cm 体重：690-1500g



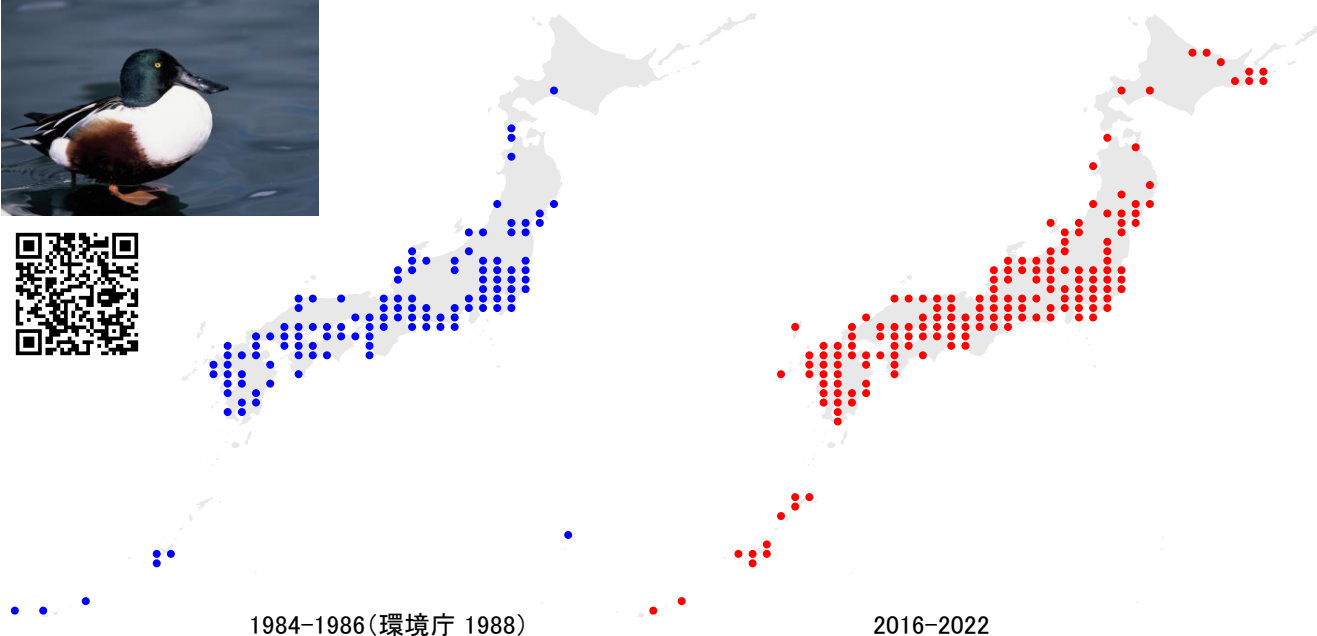
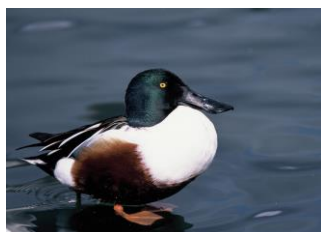
全国各地で越冬している。2010年代の調査では北海道での分布がやや拡大していた。越冬個体数は環境省の「ガンカモ類の生息調査」では、カモ類の中では最も多いが、近年はやや減少傾向となっており、2020年度は40万羽を下まわっていた(環境省 2022)。

カルガモ *Anas zonorhyncha* 全長：51.5-64.5cm 体重：750-1156g



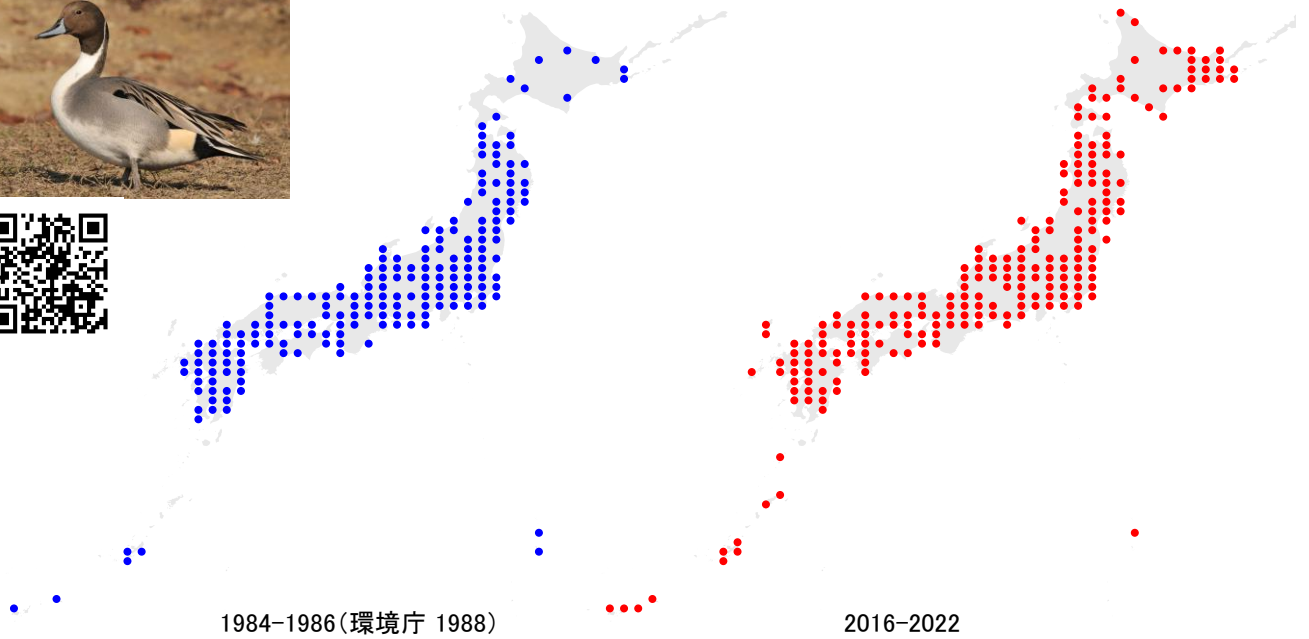
本州以南の各地で越冬している。1980年代と比較して2010年代は北海道での分布が拡大していた。越冬個体数は環境省の「ガンカモ類の生息調査」では、2012年度までは減少傾向にあったが、その後はやや増加しており、近年は約20万羽で推移している(環境省 2022)。繁殖期の分布も拡大している(植田・植村 2021)。

ハシビロガモ *Anas clypeata* 全長：43-56cm 体重：410-1100g



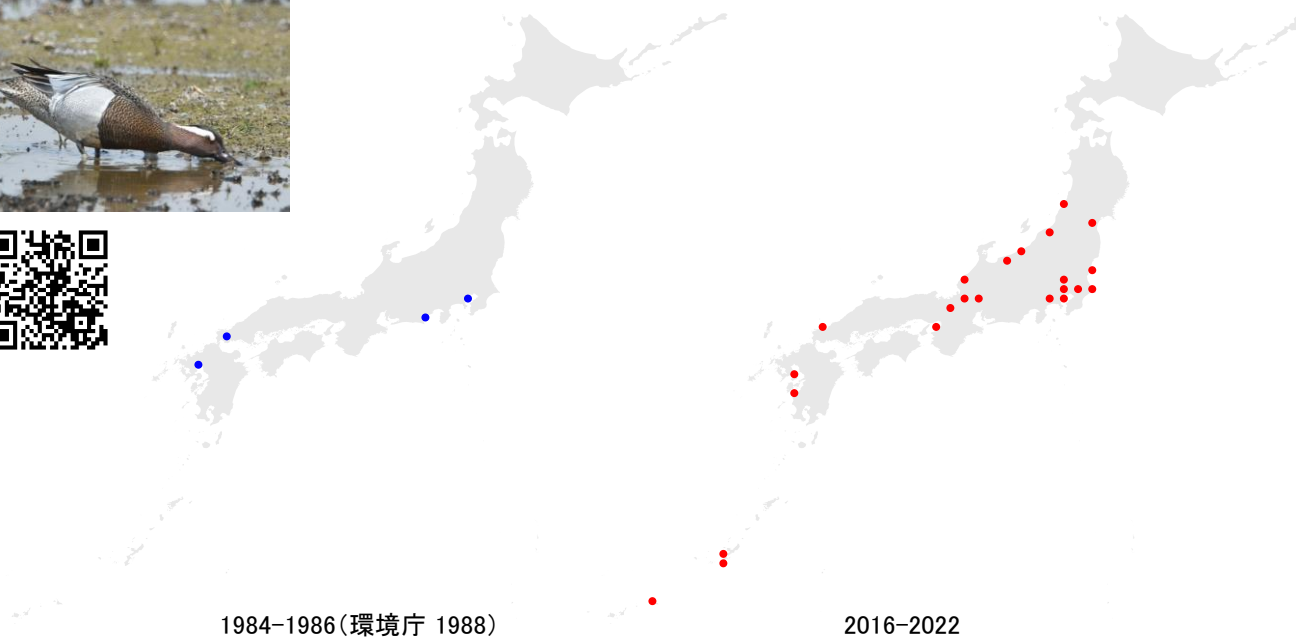
主に南東北以南で越冬していたが、2010年代では北日本での記録も増えていた。越冬個体数は環境省の「ガンカモ類の生息調査」では、2000年代以降、約15,000-20,000羽で推移している(環境省 2022)。

オナガガモ *Anas acuta* 全長: ♂57.7-73.0cm ♀51.0-58.1cm 体重: ♂765-1143g ♀630-982g



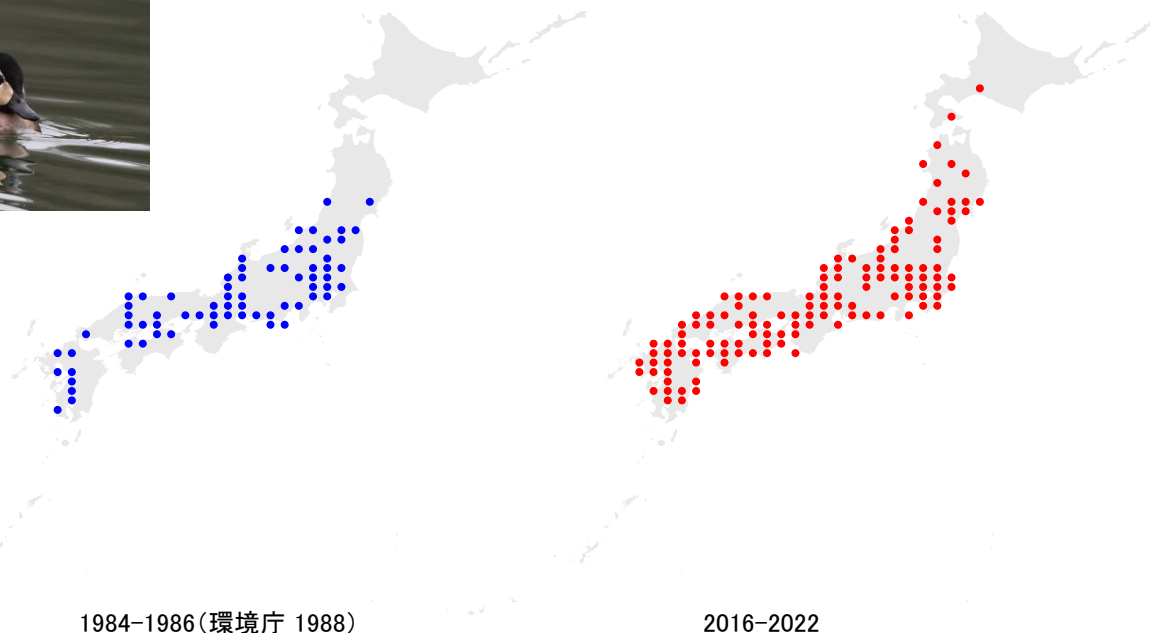
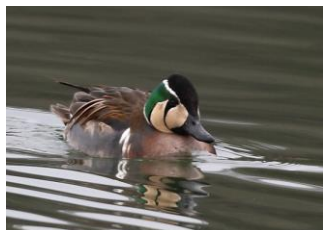
1980年代と比較して2010年代は主に北海道での分布が拡大していた。反面、給餌への依存度が高い種であり、鳥インフルエンザに伴う給餌の自粛で、北日本の個体数が減少し、関東で増加する傾向がある(神山2018b)。「ガンカモ類の生息調査」での越冬個体数は、近年は15-20万羽で推移している(環境省2022)。

シマアジ *Anas querquedula* 全長: 38cm 体重: 220-520g



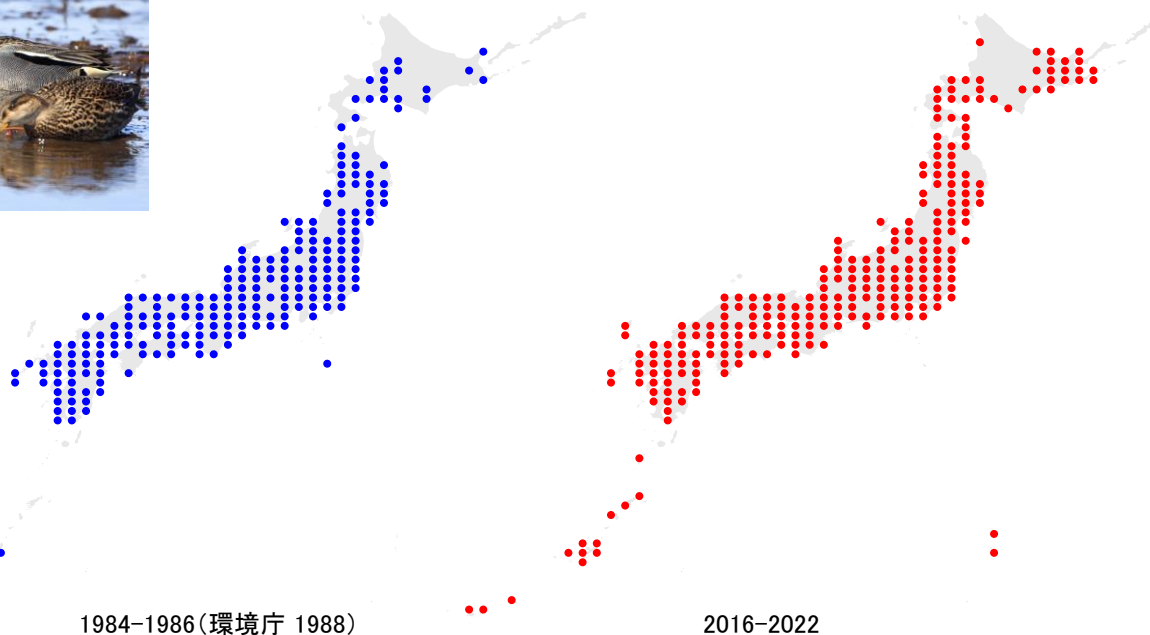
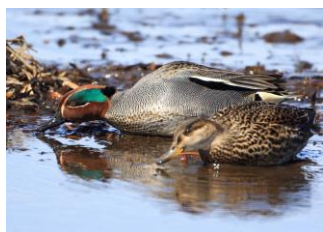
アフリカからパプアニューギニアにかけて越冬し、日本では主に旅鳥として春や秋に見られるが、本州を中心に越冬個体が目撃され、その確認メッシュ数は2010年代に増加していた。

トモエガモ *Anas formosa* 全長: ♂39.8-43.8cm ♀38.3-42.3cm 体重: ♂375-551g ♀383-499g



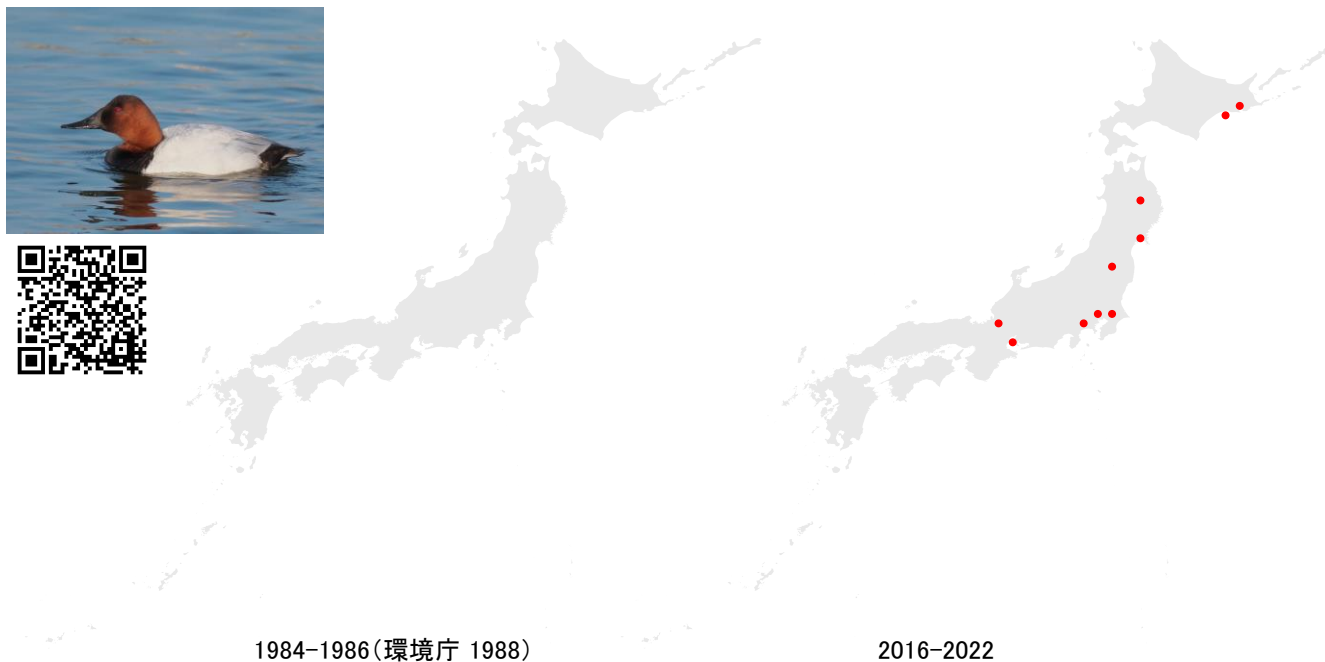
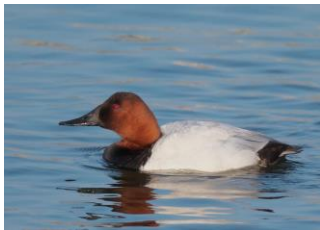
東アジアでのみ越冬し、かつて日本での越冬個体数は減少していた(神山 2021b)。環境省の「ガンカモ類の生息調査」では、近年は年によって変動が大きいものの個体数が多くなってきている(環境省 2022)。分布も1980年代の記録と比較して、2010年代は拡大していた。

コガモ *Anas crecca* 全長: 38cm 体重: 320-330g



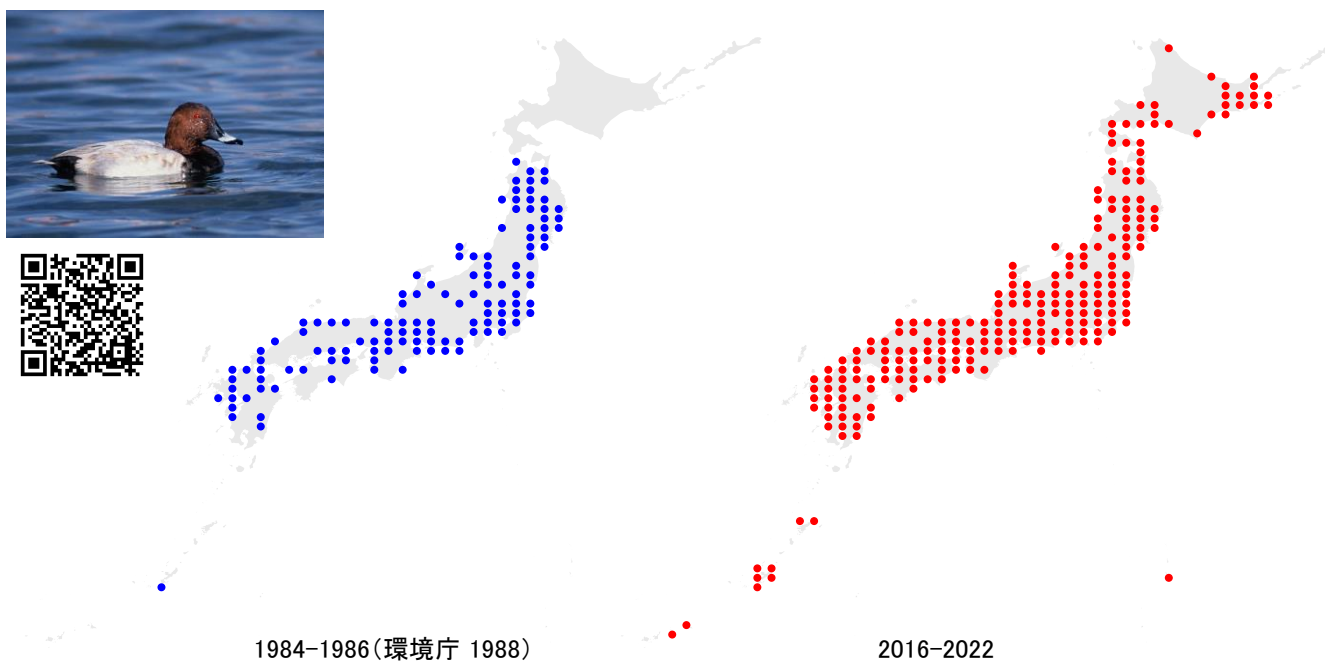
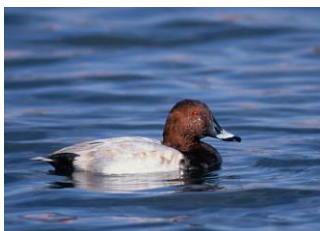
1980年代は主に北海道中部以南で越冬していたが、2010年代は北海道東部でも広く記録されていた。越冬個体数は環境省の「ガンカモ類の生息調査」では15-20万羽で推移している(環境省 2022)。

オオホシハジロ *Aythya valisineria* 全長：48-61cm 体重：1150-1250g



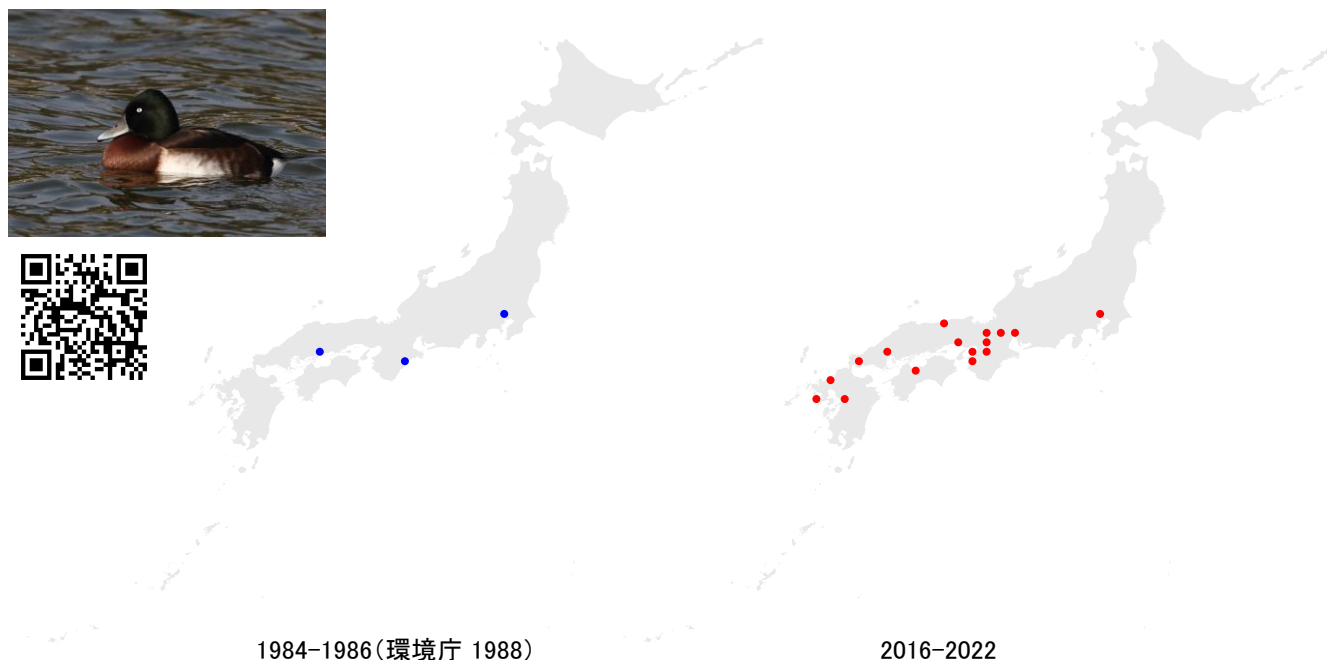
北米に分布する種であり、日本には稀な冬鳥として渡来する。以前と比べて観察記録が増加しており、1980年代は記録はなかったが、2010年代には北海道や本州で越冬個体が確認された。しかし個体数は多くない(環境省 2022)。

ホシハジロ *Aythya ferina* 全長：43.0-48.3cm 体重：180-250g



本州・四国・九州の各地で越冬している。2010年代は北海道や南西諸島でも越冬するようになっていた。越冬個体数は環境省の「ガンカモ類の生息調査」では、1999年度に約20万羽が記録されているが、それ以降は減少し、現在はその半分程度になっている(環境省 2022)。

アカハジロ *Aythya baeri* 全長：46cm 体重：680-880g

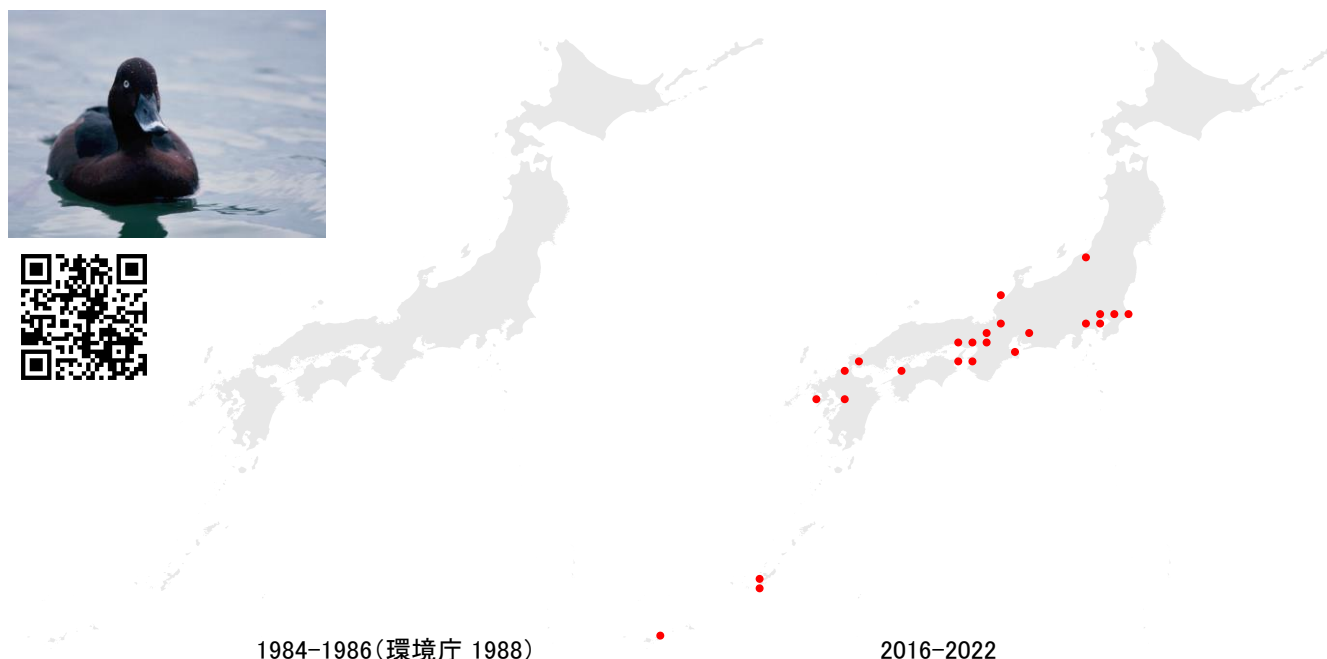
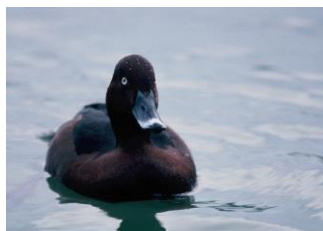


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

中国や東南アジアなどで越冬し、日本には数少ない冬鳥として、主に西日本で記録された。日本での記録は増えているが、世界的に個体数が減少しており、メジロガモとの交雑も問題となっており、IUCN のレッドリストでは CR に指定されている (BirdLife International 2019)。

メジロガモ *Aythya nyroca* 全長：41cm 体重：520-580g

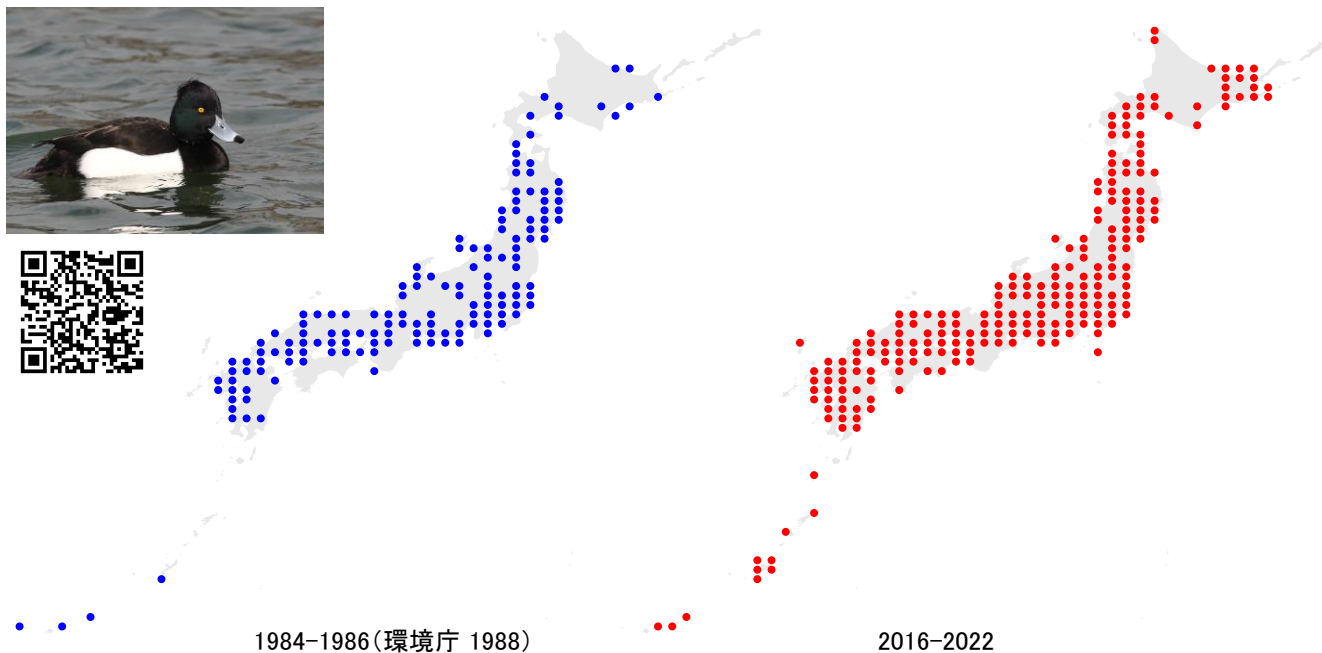


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

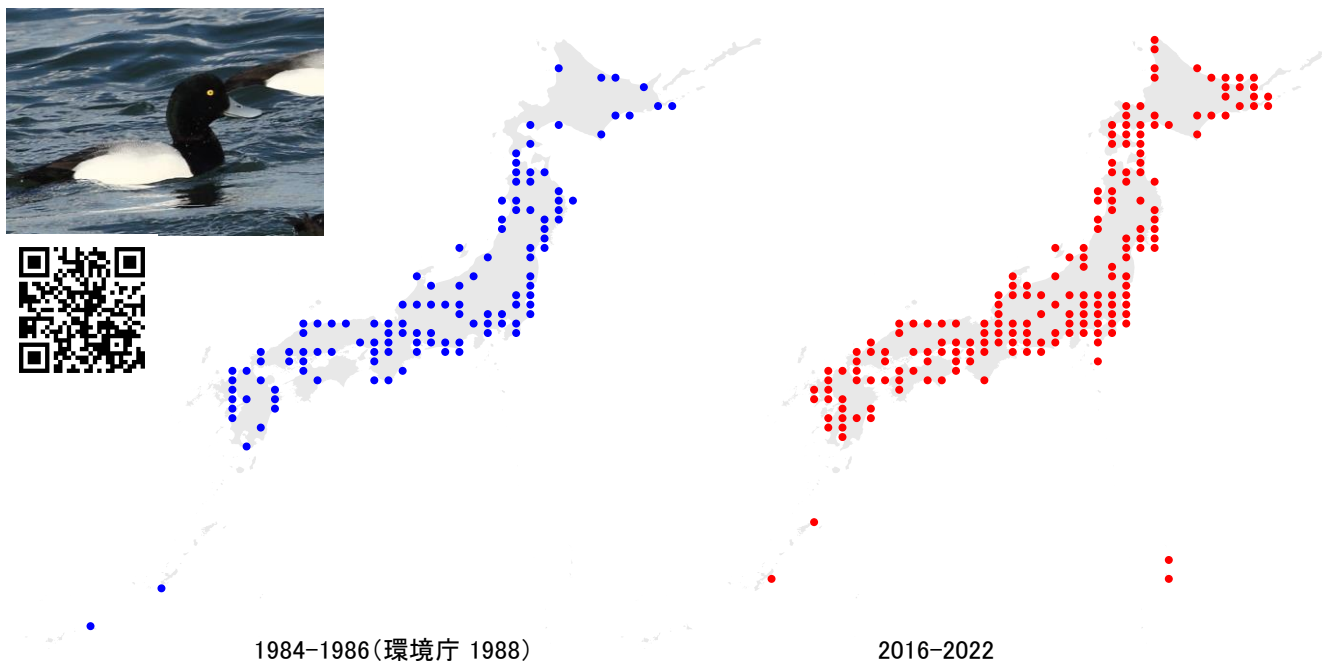
アフリカから中国南部にかけて越冬し、日本には数少ない冬鳥として渡来する。以前は稀に観察される種だったが、越冬記録は増加し、2010 年代には、北海道以外の各地で記録されるようになった。しかし個体数は少ない(環境省 2022)。

キンクロハジロ *Aythya fuligula* 全長：40-50cm 体重：1000-1400g



冬鳥として全国に渡来する。2010年代には、主に北海道や中部地方の内陸部などで分布が拡大していた。越冬個体数は環境省の「ガンカモ類の生息調査」では、2009年度までは10万羽以上記録されていたが、それ以降減少傾向となっており、近年は約6-8万羽となっている(環境省 2022)。

スズガモ *Aythya marila* 全長：♂43.5-46.5cm ♀40.0-45.5cm 体重：♂744-1372g ♀690-1312g



冬鳥として全国に渡来し、内湾では大きな群れで越冬する。1980年代と比較して2010年代は、北海道や関東地方では内陸部、西日本では主に沿岸部で分布が拡大していた。越冬個体数は環境省の「ガンカモ類の生息調査」では、1970年代後半以降、10-27万羽で変動している(環境省 2022)。

コスズガモ *Aythya affinis* 全長：38-48cm 体重：800-850g

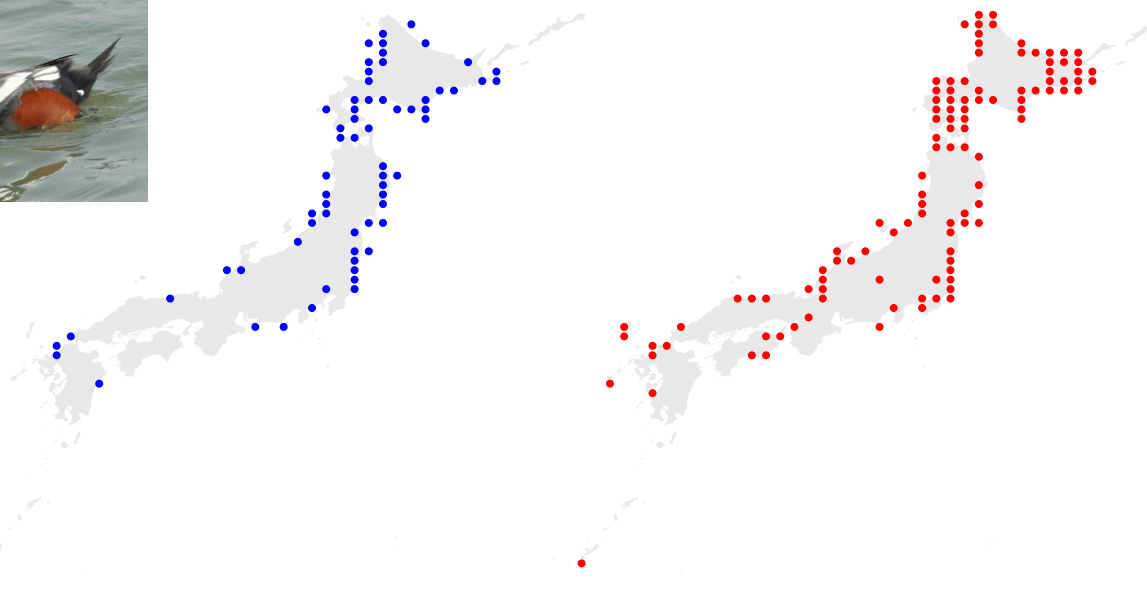
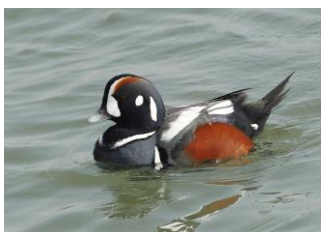


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

北米に生息する鳥で、日本には稀な冬鳥として渡来する。1980年代は記録されなかったが、2010年代は、北海道の東部や本州の複数の場所で記録された。

シハリガモ *Histrionicus histrionicus* 全長：38-51cm 体重：540-680g

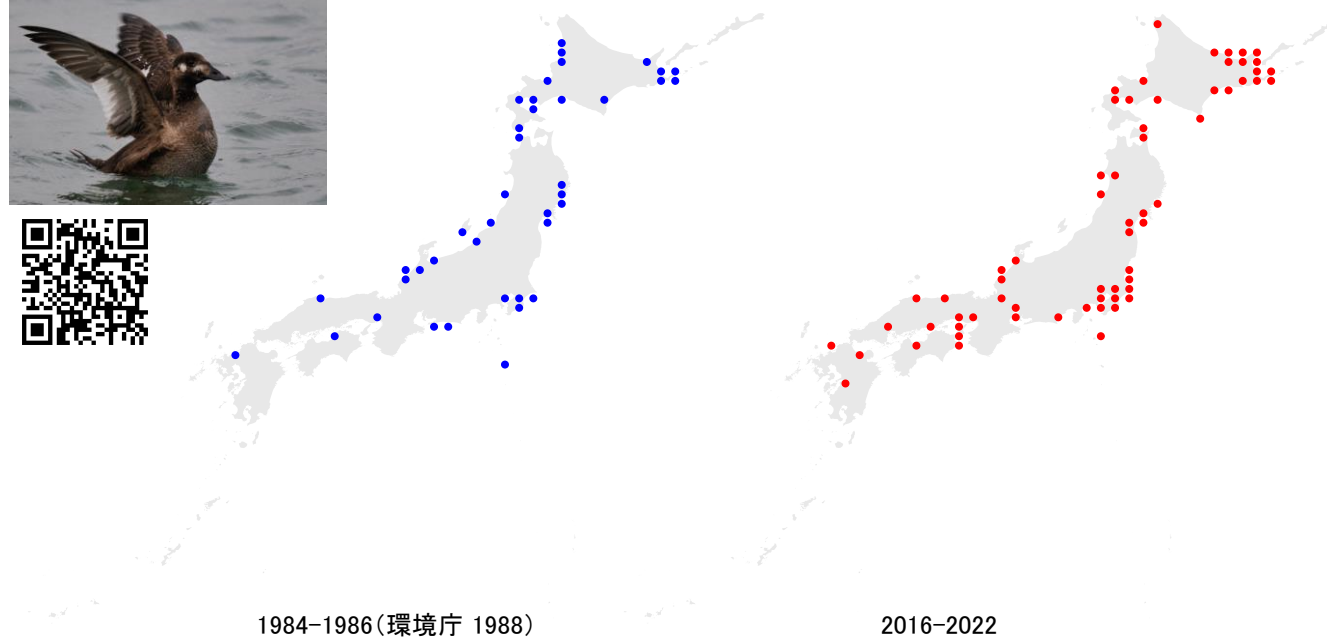
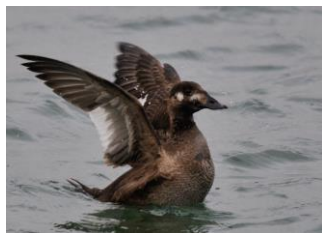


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

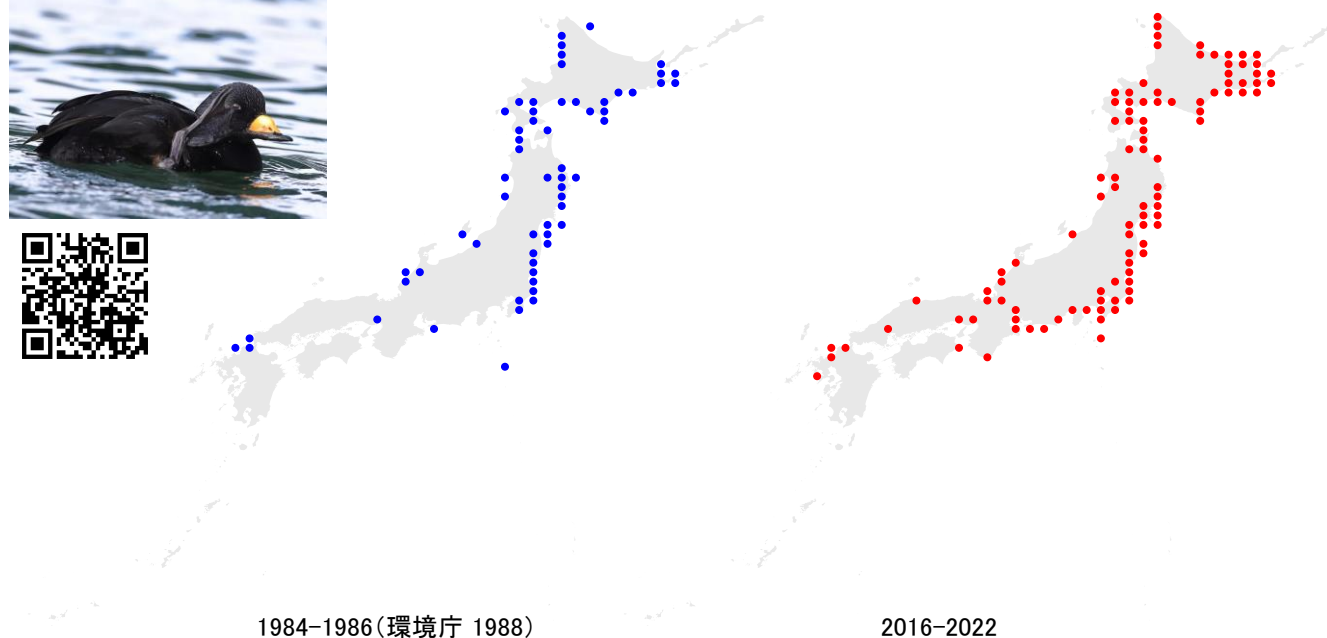
冬鳥として主に北日本の岩礁の多い海岸で越冬する。1980年代と比較して、北海道や西日本で分布が拡大していた。1980年代と比べ、海岸で海鳥類を観察する人口が増えており、実際の分布拡大を示しているのか、それとも観察人口の増加の影響を受けているのかは明らかでない。

ビロードキンクロ *Melanitta fusca* 全長：50cm 体重：1200-1700g



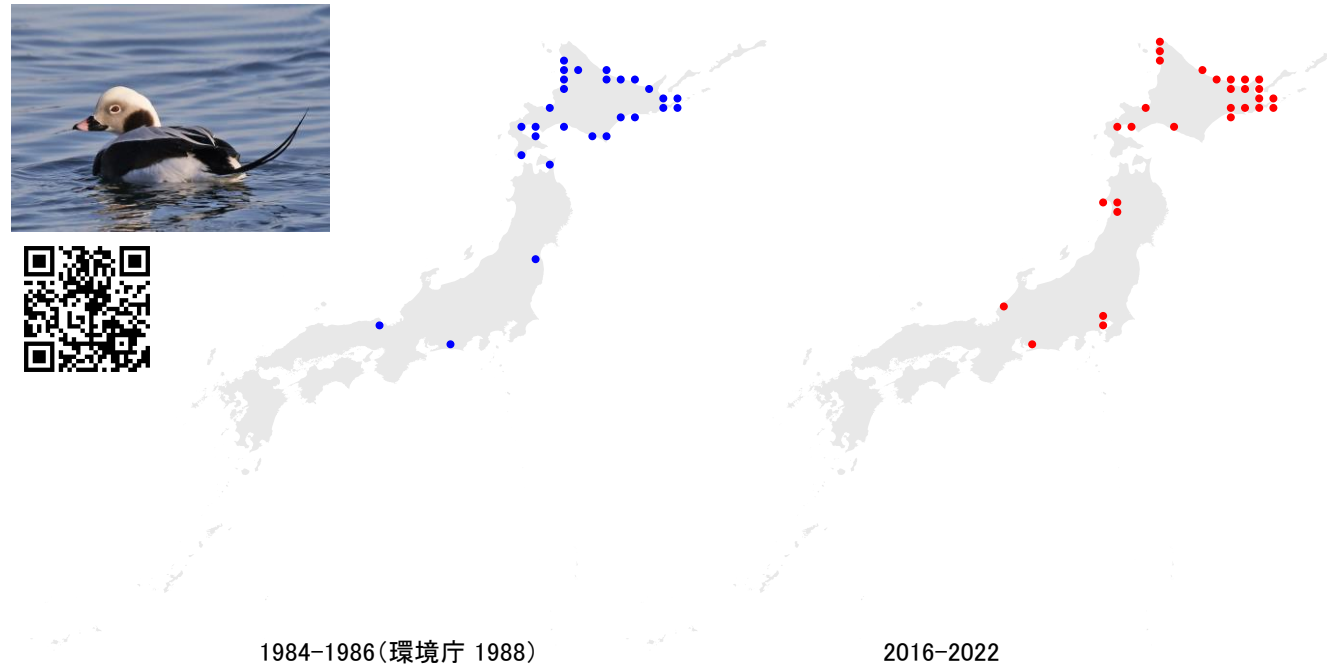
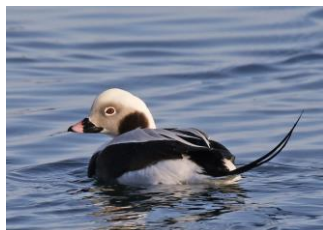
冬鳥として主に海に渡来する。東日本の日本海側ではやや分布が縮小していたが、北海道や関東地方、西日本などの地域の沿岸部では拡大していた。海鳥類の観察人口の増加も影響していると考えられ、分布の変化についてはよくわからない。

クロガモ *Melanitta americana* 全長：50cm 体重：950-1268g



冬鳥として主に関東以北の海岸に渡来する。北海道や関東地方以南で分布が拡大していた。海鳥類の観察人口の増加も影響していると考えられ、分布の変化についてはよくわからない。

コオリガモ *Clangula hyemalis* 全長：38-58cm 体重：650-800g

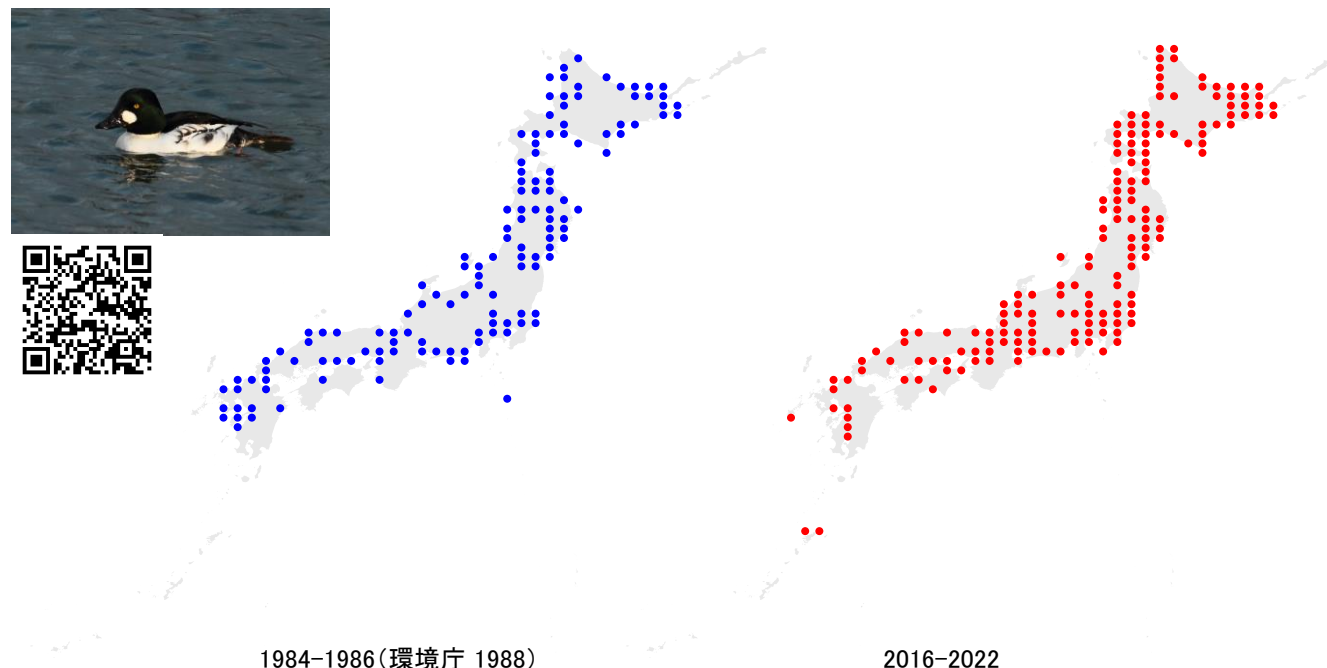


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

主に北海道で越冬しており、本州の一部でも記録されていた。本州で記録されたほとんどの地点が1980年代と2010年代では同じメッシュではなく、安定した越冬地はないと考えられる。

ホオジロガモ *Bucephala clangula* 全長：40-51cm 体重：710-1200g

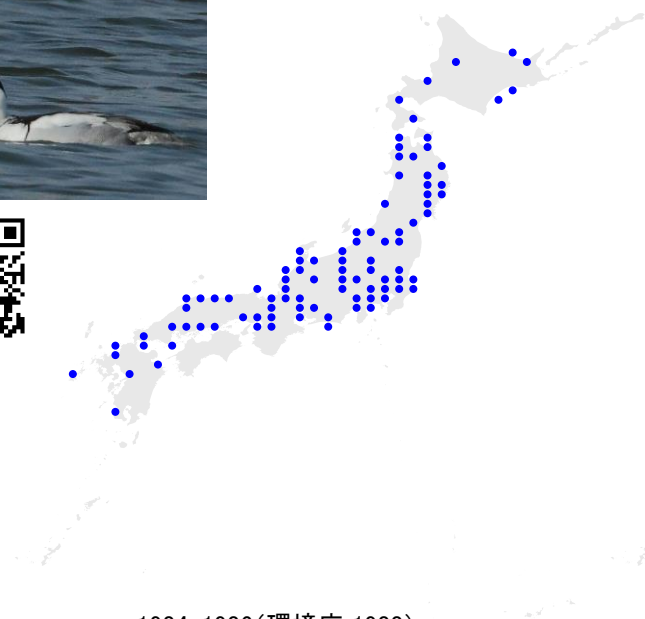


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

海岸、湖沼、河川などで越冬し、1980年代と比較して、2010年代は全国的に分布が拡大していた。越冬個体数は環境省の「ガンカモ類の生息調査」では、近年は3,000-4,000羽で推移している(環境省 2022)。

ミコアイサ *Mergellus albellus* 全長：35-40cm 体重：515-935g



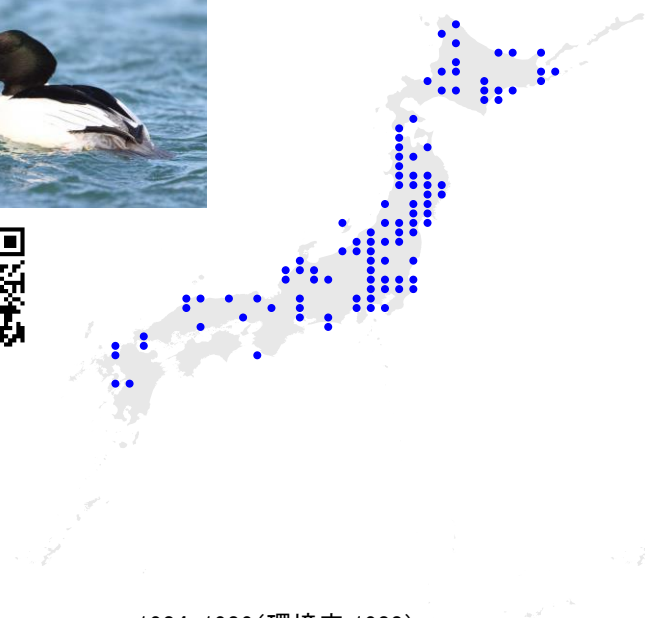
1984-1986(環境庁 1988)



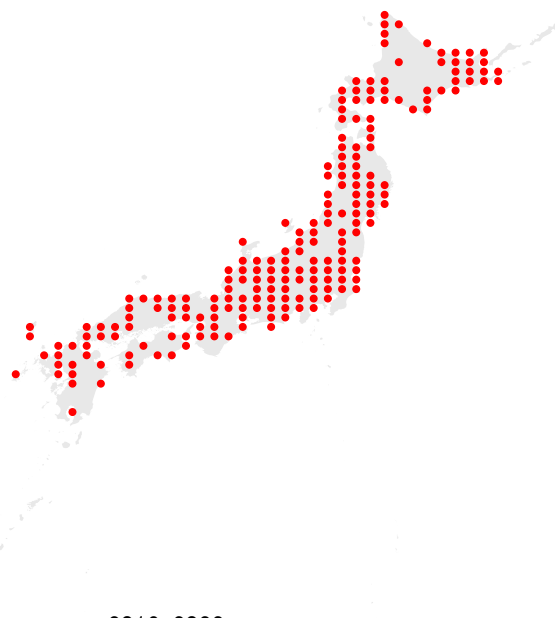
2016-2022

全国に主に冬鳥として渡来する。1980年代は四国では記録がなかったが、2010年代は瀬戸内海周辺で記録された。そのほかの地域でも全体的に分布が拡大していた。越冬個体数は環境省の「ガンカモ類の生息調査」では1970年代以降増加傾向だったが、2008年度以降は3,000-5,000羽で推移している(環境省 2022)。

カワアイサ *Mergus merganser* 全長：51-68cm 体重：1500-1700g



1984-1986(環境庁 1988)



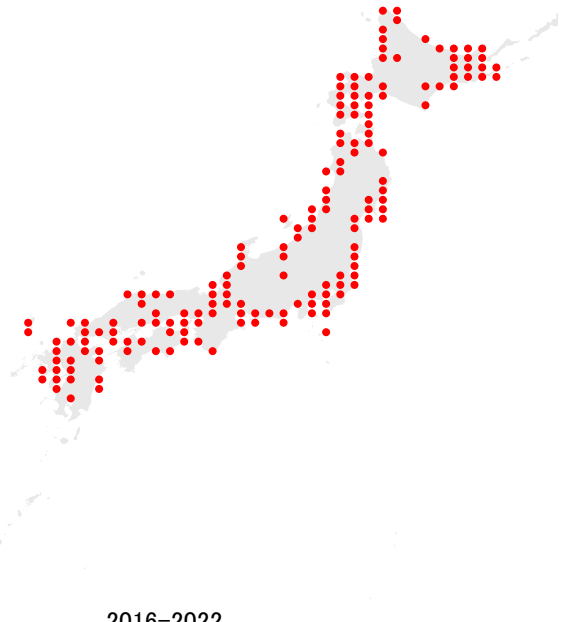
2016-2022

主に冬鳥として渡来する。2010年代は全国的に分布が拡大しており、特に西日本では大幅に拡大していた。北海道では繁殖もしており、繁殖期の分布も拡大している(植田・植村 2021)。越冬個体数は環境省の「ガンカモ類の生息調査」では、2006年度以降4,000-7,000羽で推移している(環境省 2022)。

ウミアイサ *Mergus serrator* 全長：48-66cm 体重：900-1200g



1984-1986(環境庁 1988)



2016-2022

全国の湾や河口部に冬鳥として渡来する。1980年代は関東地方ではあまり記録がなかったが、2010年代は複数の地域で記録された。また北海道でも分布が拡大していた。越冬個体数は環境省の「ガンカモ類の生息調査」では、2003年度以降は3,000羽以下で推移している(環境省 2022)。

コウライアイサ *Mergus squamatus* 全長：55cm



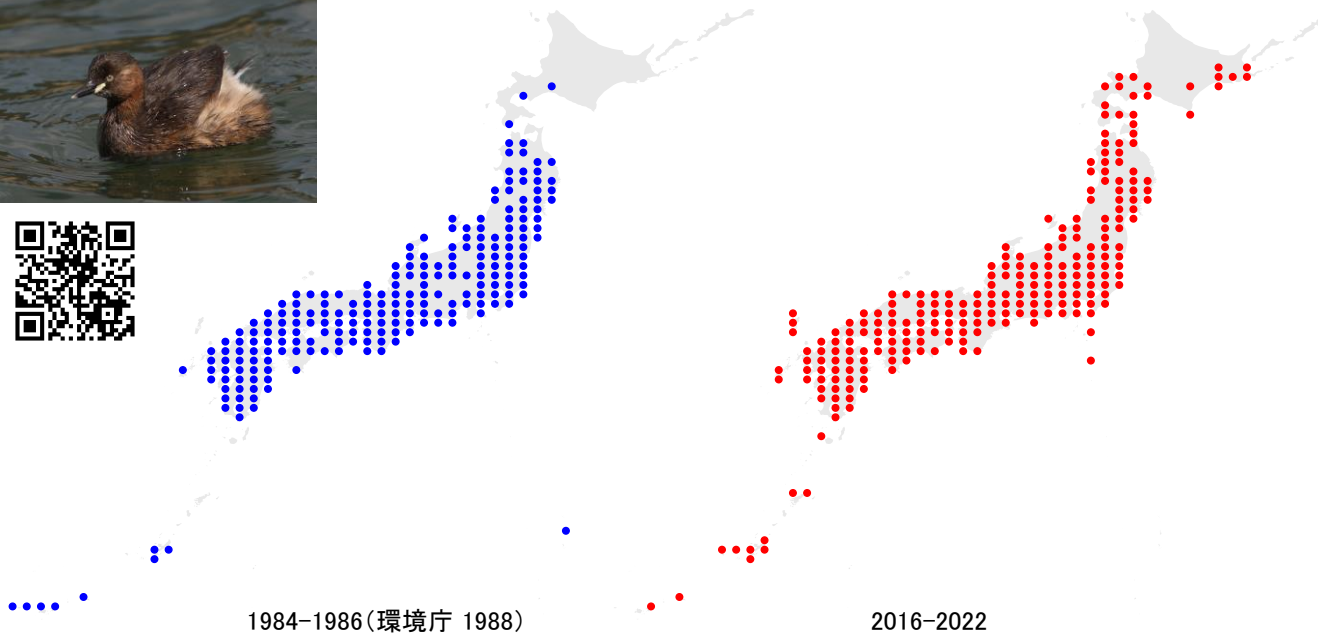
1984-1986(環境庁 1988)



2016-2022

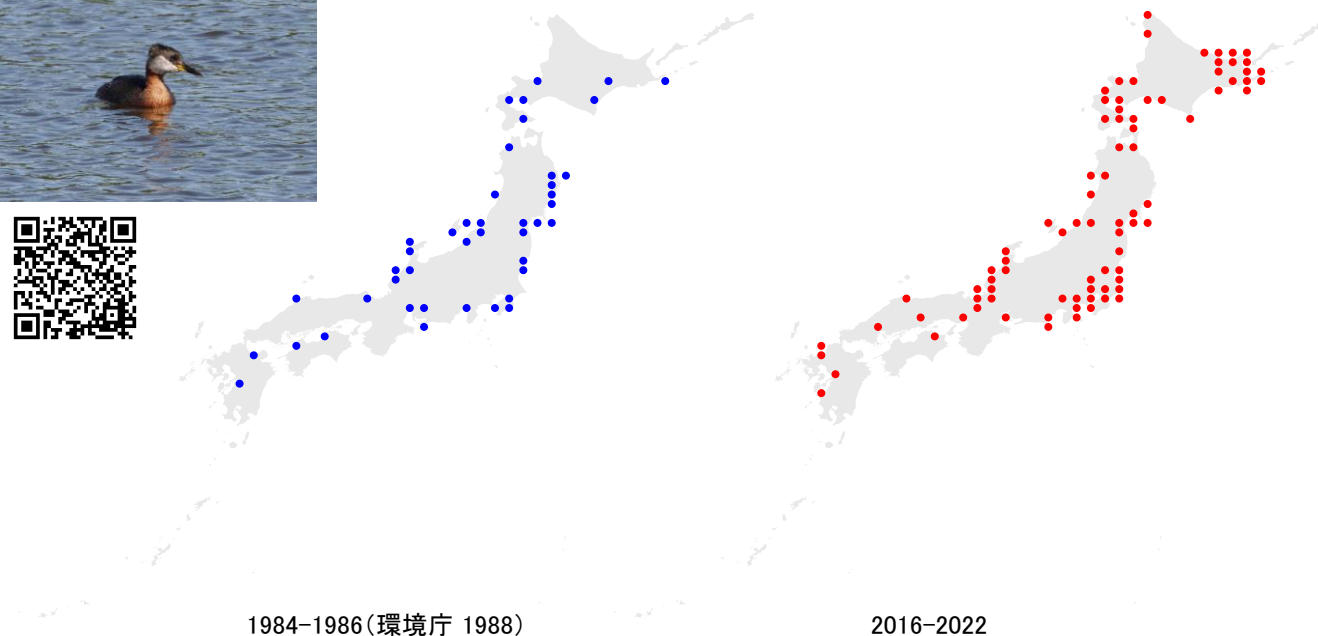
中国南部で越冬し、日本には稀な冬鳥として渡来する。1980年代は記録がなかったが、2010年代は西日本の一部で記録された。

カイツブリ *Tachybaptus ruficollis* 全長：26-33cm 体重：160-214g



全国で繁殖し、主に本州以南で越冬する。1980年代には北海道ではほとんど越冬していなかったが、2010年代には北海道南部および太平洋側で記録され、越冬分布が拡大していた。繁殖期は逆に分布が縮小しており、外来魚等の影響で食物となる小型の魚が減少していることが原因と考えられている(植田・植村 2021)。

アカエリカイツブリ *Podiceps grisegena* 全長：40-50cm 体重：806-925g



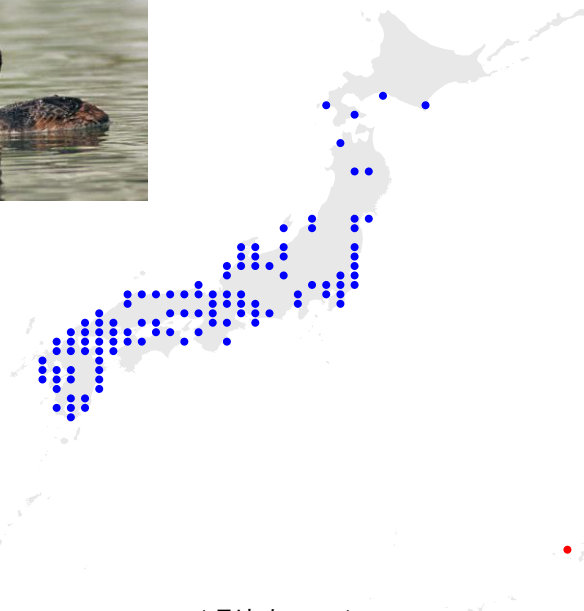
北海道の湖沼で繁殖し、全国の海岸や湖沼などで越冬する。1980年代と比べて記録メッシュ数が大きく増加しており、越冬数が増えている可能性があるが、海でバードウォッチングをすることが増えたための可能性もある。

カンムリカイツブリ

Podiceps cristatus

全長：46-51cm

体重：♂596-1490g ♀568-1380g



1984-1986(環境庁 1988)



2016-2022

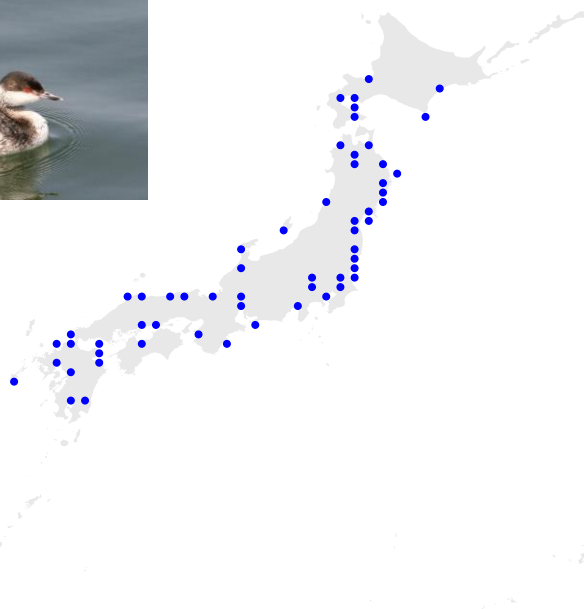
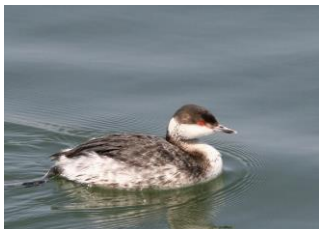
全国の海岸、湖沼、河川などで越冬する。1980年代と比べて、大きく分布が拡大していた。越冬個体数も大きく増加している(中濱 2013)。以前は青森でのみ繁殖していたが、近畿地方以北の湖沼で繁殖するなど、繁殖分布も大きく拡大している(植田・植村 2021)。

ミミカイツブリ

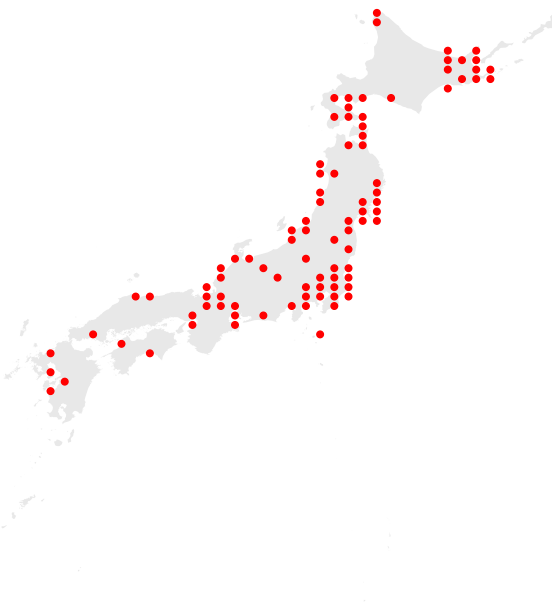
Podiceps auritus

全長：31-38cm

体重：300-470g



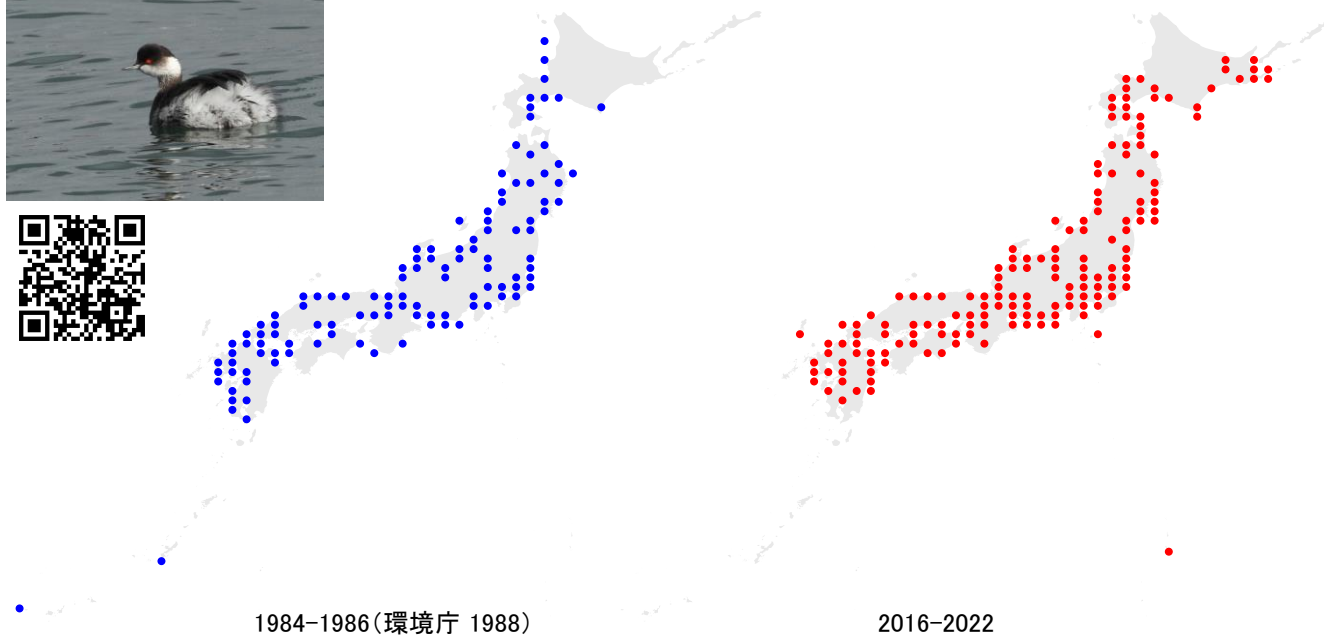
1984-1986(環境庁 1988)



2016-2022

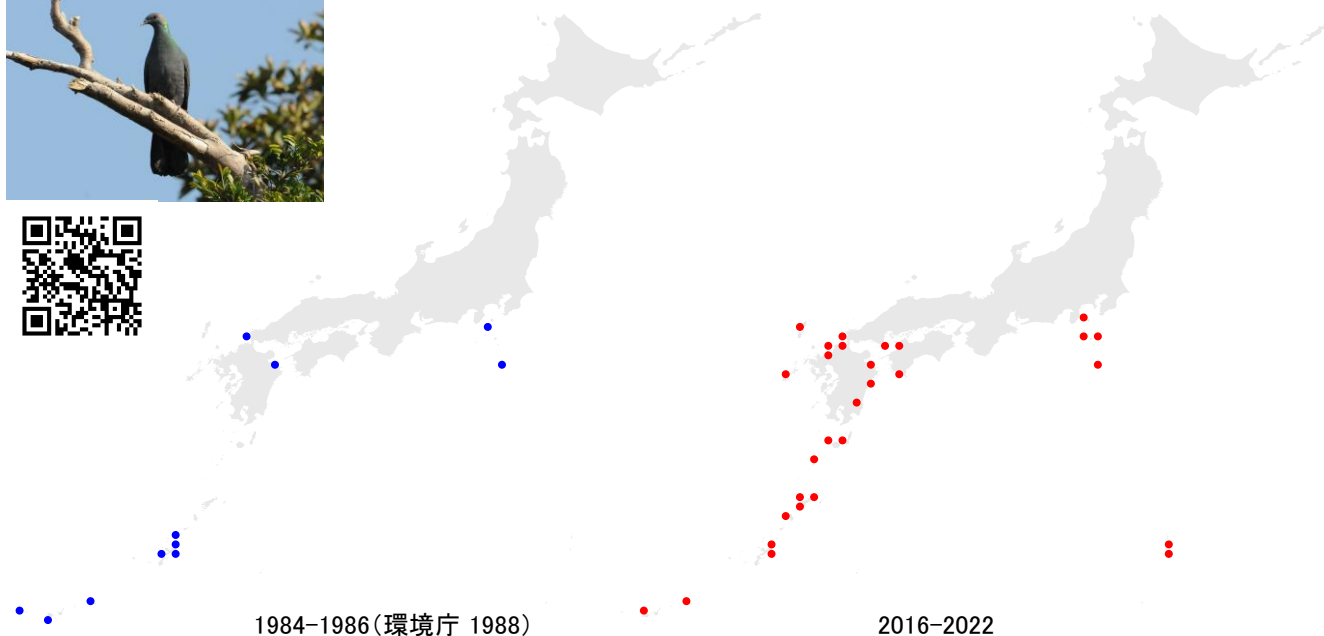
全国の海岸や湖沼などで越冬する。カイツブリ類 5 種の中ではもっとも見る機会が少ない。1980年代には記録のなかった道東や道北地域でも 2010年代には記録されるようになった。

ハジロカイツブリ *Podiceps nigricollis* 全長：28-34cm 体重：265-450g



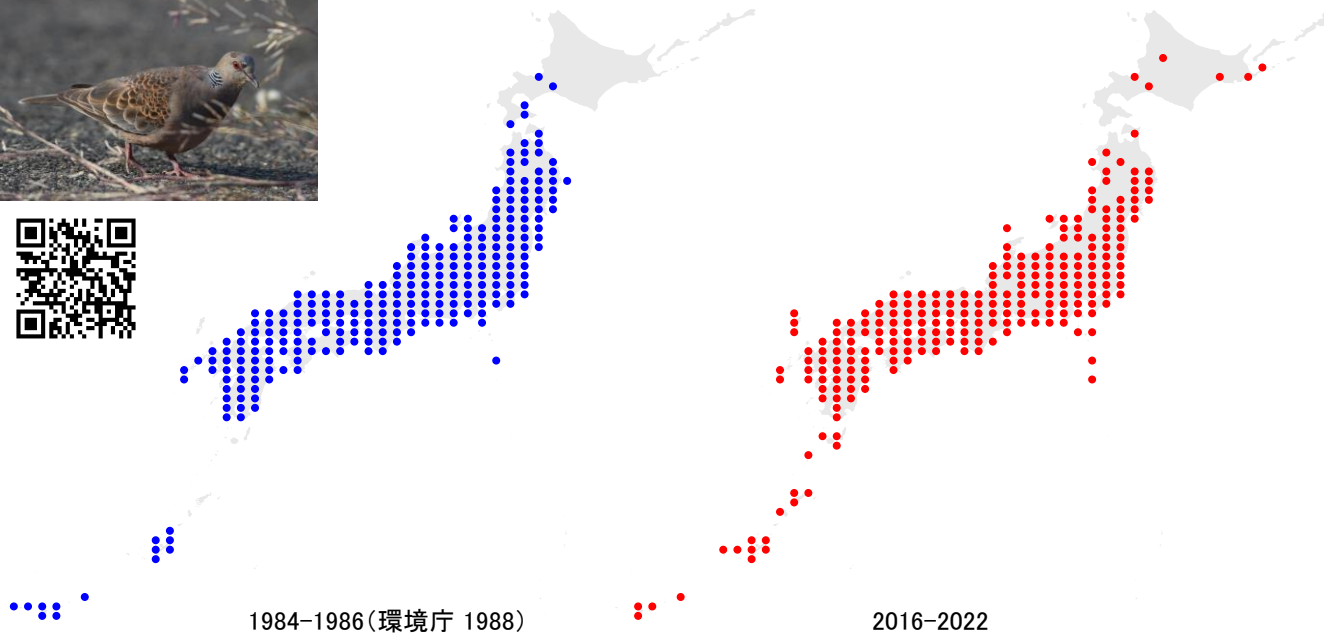
全国の海岸や湖沼などで越冬する。1980年代と比べて記録メッシュが大幅に増加しており、1980年代には記録のなかった道東でも2010年代には記録されるようになった。

カラスバト *Columba janthina* 全長：37-43.5cm 体重：500g



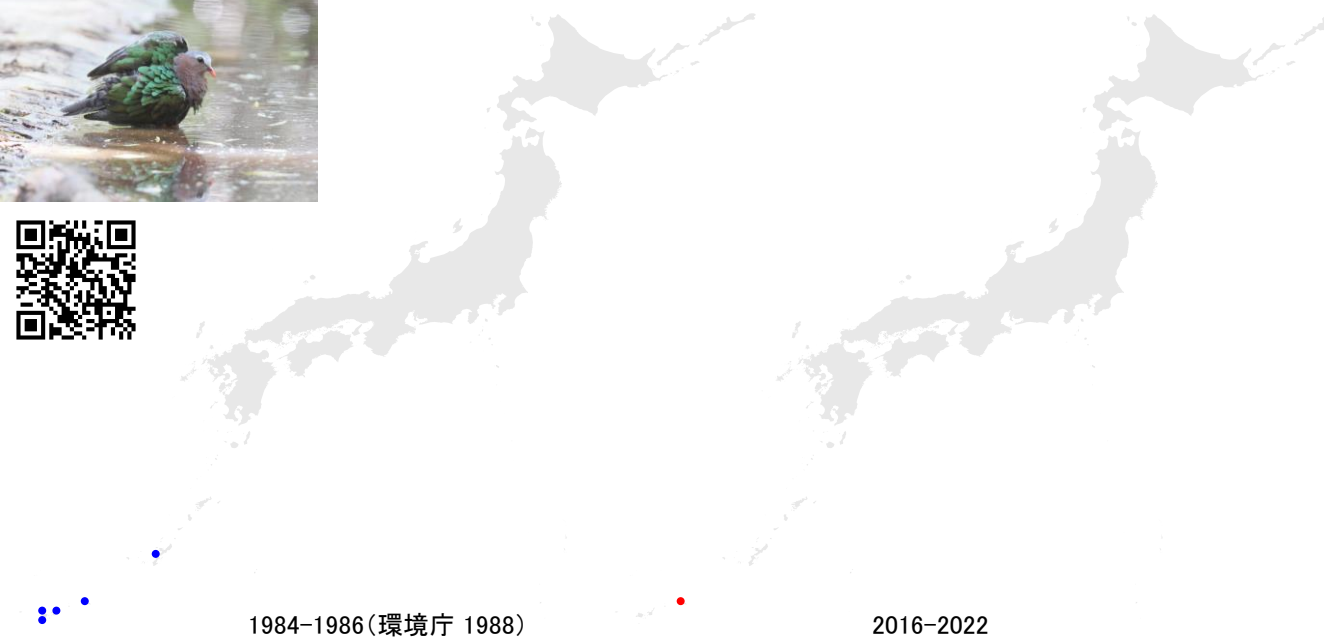
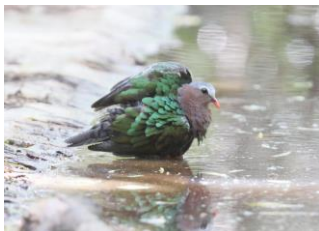
本州中部以南の島嶼に留鳥として分布する。記録メッシュ数は大きく増加していたが、島での観察情報の増加がその主要因と考えられる。また、小笠原ではノネコによる在来種の捕食に対する保全対策が進められ、亜種アカガシラカラスバトが観察される機会が増えたのもその一因と考えられる。

キジバト *Streptopelia orientalis* 全長: 33-35cm 体重: 165-274g



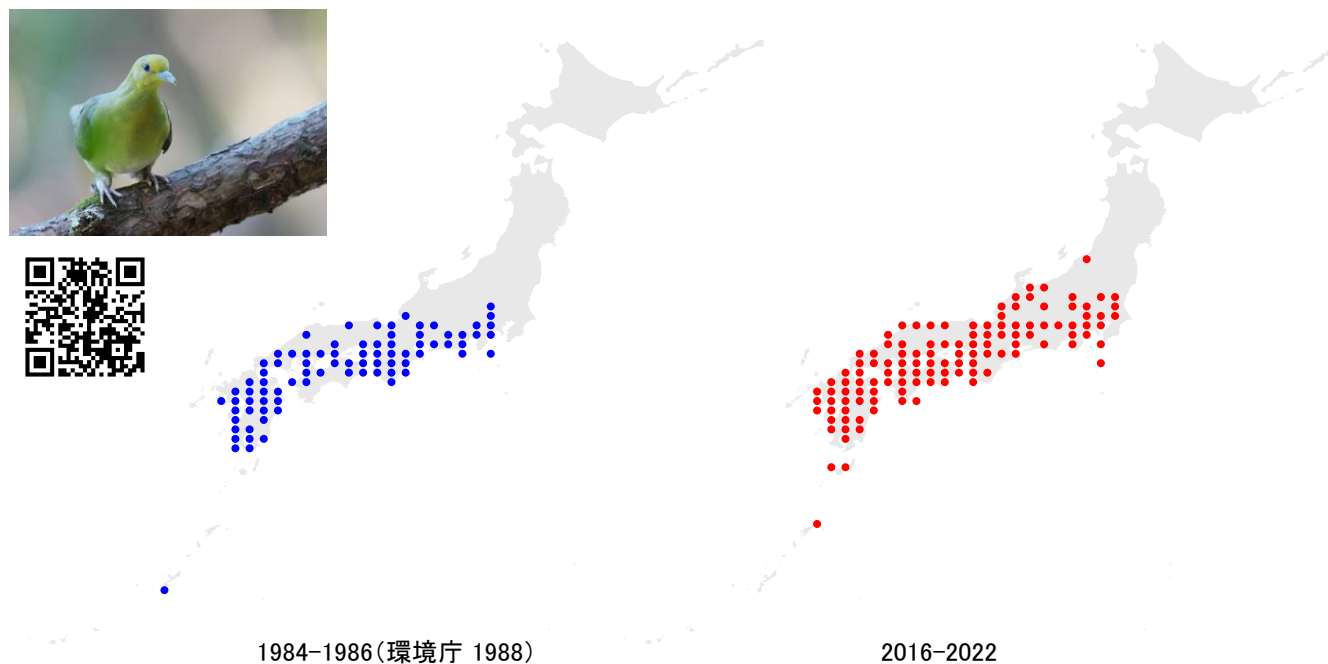
全国で繁殖し、本州以南で越冬する。2010年代には北海道道央部・道東部での観察記録があったが、それほど多くはなかった。

キンバト *Chalcophaps indica* 全長: 25cm 体重: 110-130g



先島諸島に留鳥として生息する。繁殖期の記録は増加しているが(植田・植村 2021), 越冬期の記録メッシュは、反対に減少していた。

アオバト *Treron sieboldii* 全長: 31.5-34.8cm 体重: 217-300g

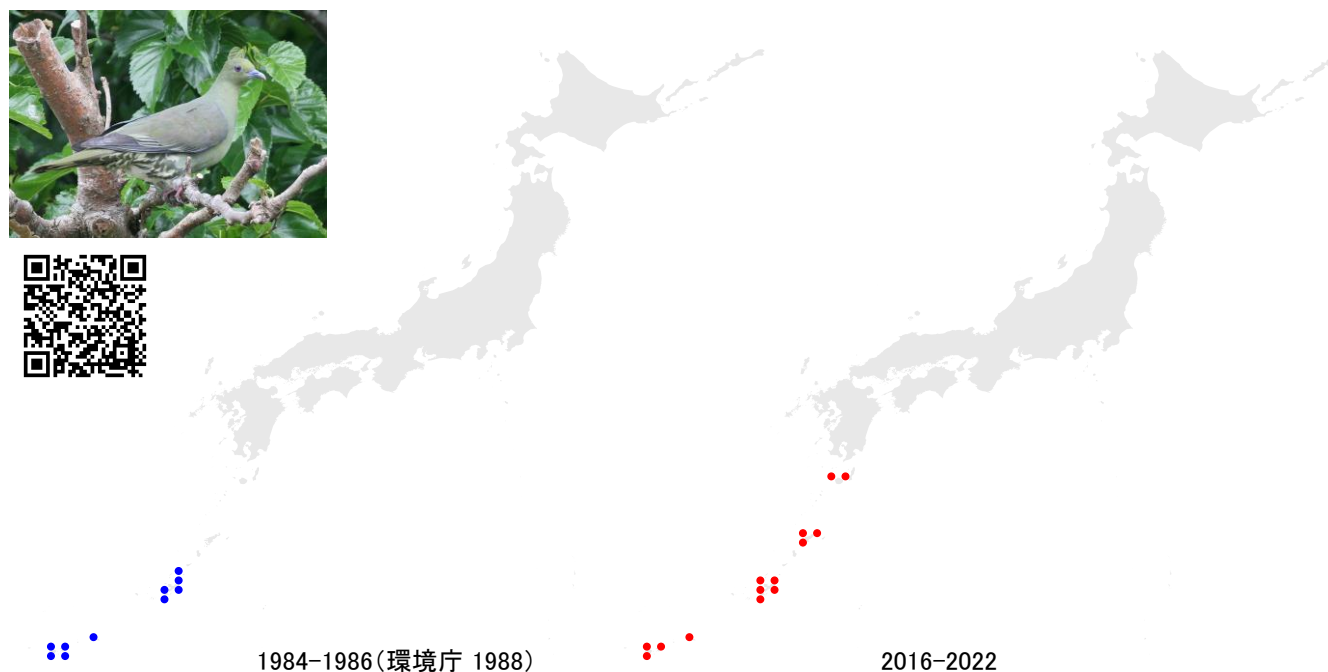


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

九州以北の全国で繁殖し、本州中部以南で越冬する。1980年代は日本海側の地域では記録が少なかったが、2010年代には日本海側でも広く越冬するようになっていた。繁殖期の分布も顕著に拡大しており、森林の成熟がその一因と考えられている(植田・植村 2021)。

ズアカアオバト *Treron formosae* 全長: 35cm 体重: 250-270g

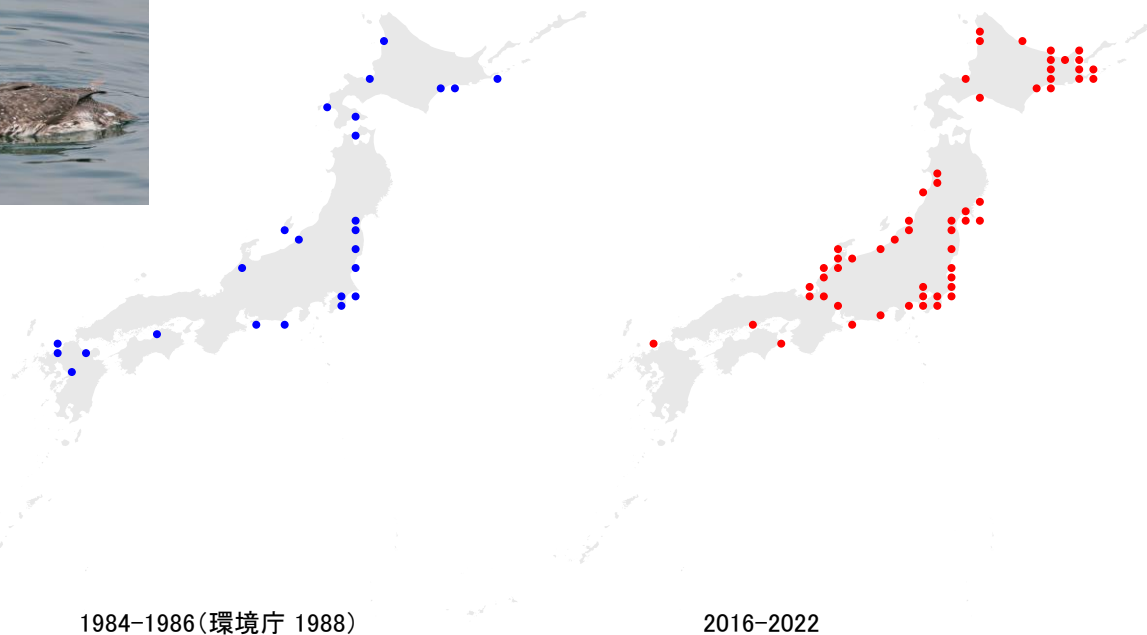


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

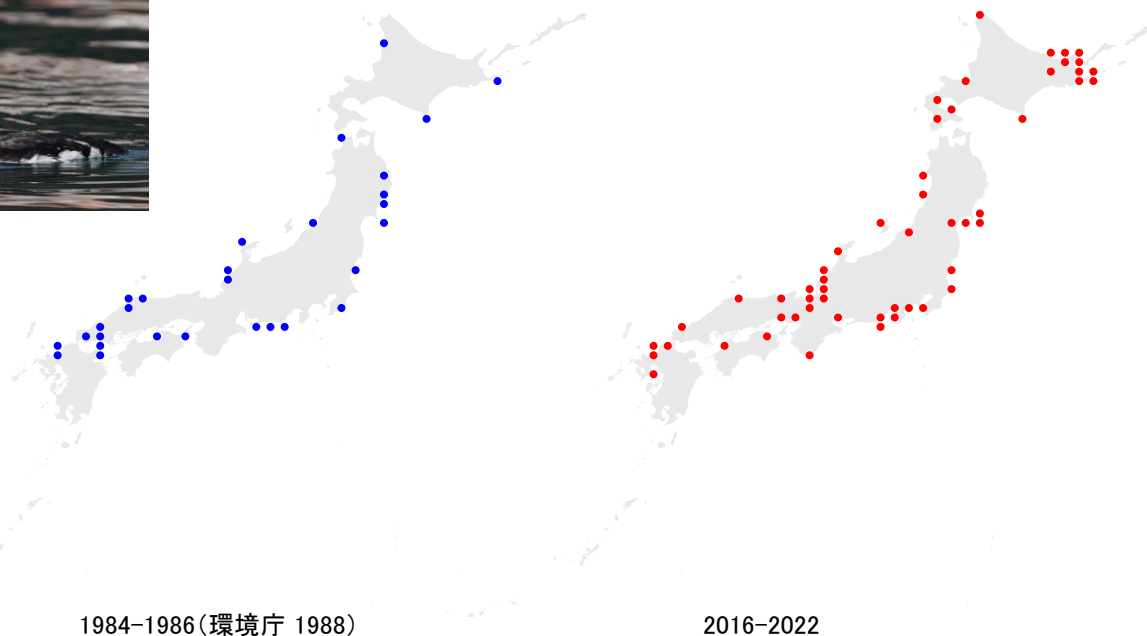
南西諸島に留鳥として生息する。分布図からは、分布が北上しているように見えるが、1980年代には、種子島、屋久島、奄美大島、徳之島では調査が行なわれていないため、分布が北上していることを示しているわけではない。

アビ *Gavia stellata* 全長：59.8-63.8cm 体重：1314.4-1857.8g



全国の海岸で越冬する。1980年代と比べて記録メッシュ数が大きく増加していたが、海でバードウォッチングをすることが増えたための可能性がある。

オオハム *Gavia arctica* 全長：68-74cm 体重：1951.5-2820.4g



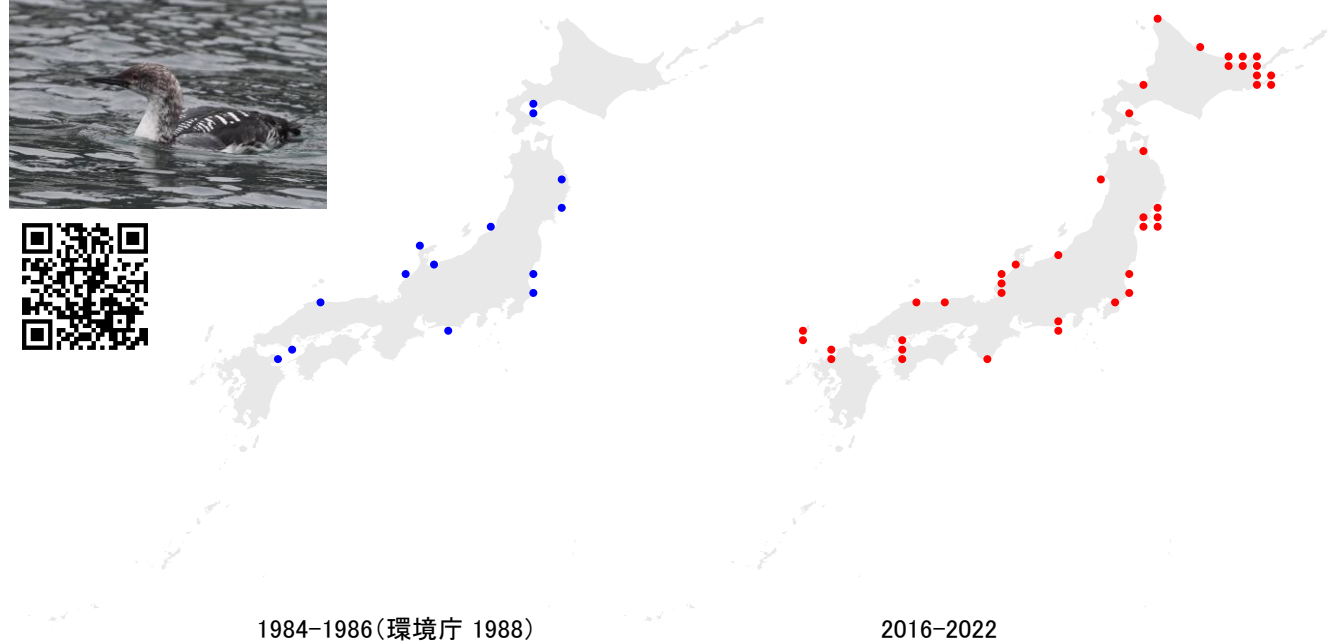
全国の海岸で越冬する。1980年代と比べて記録メッシュ数が大きく増加していたが、海でバードウォッチングをすることが増えたための可能性がある。

シロエリオオハム

Gavia pacifica

全長：62.1-66.9cm

体重：1476.8-2167.5g



1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

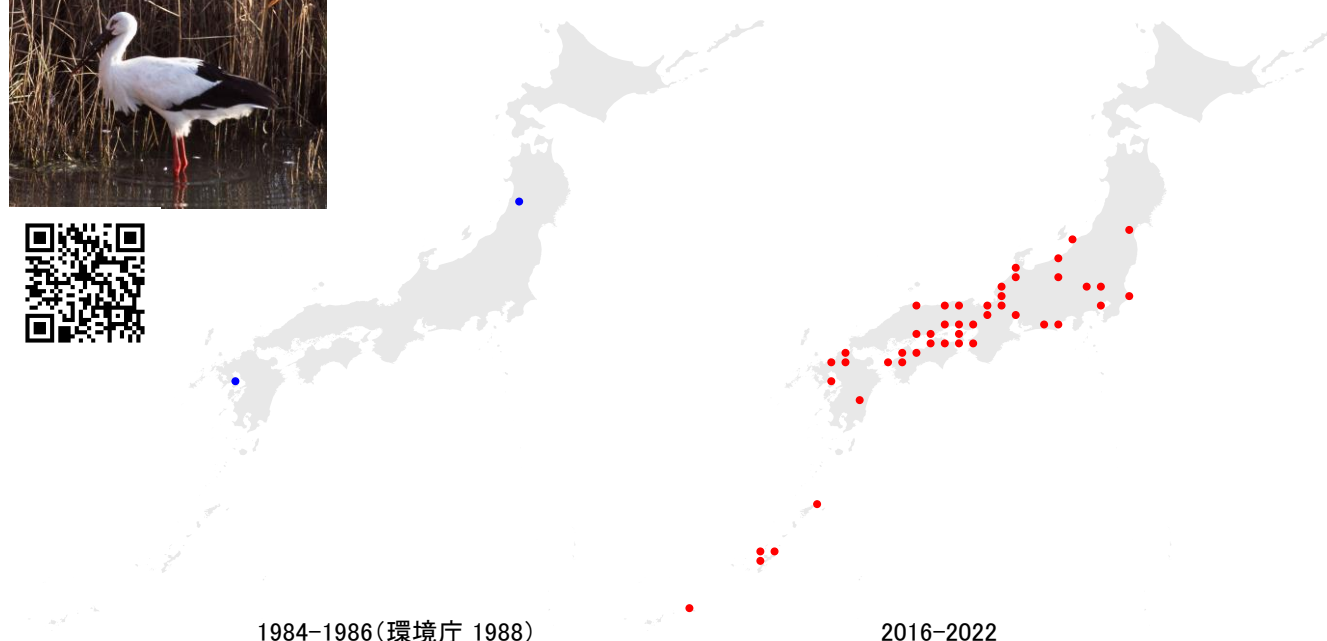
全国の海岸で越冬する。1980年代と比べて記録メッシュ数が大きく増加していたが、海でバードウォッチングをすることが増えたための可能性がある。

コウノトリ

Ciconia boyciana

全長：110-115cm

体重：5000g

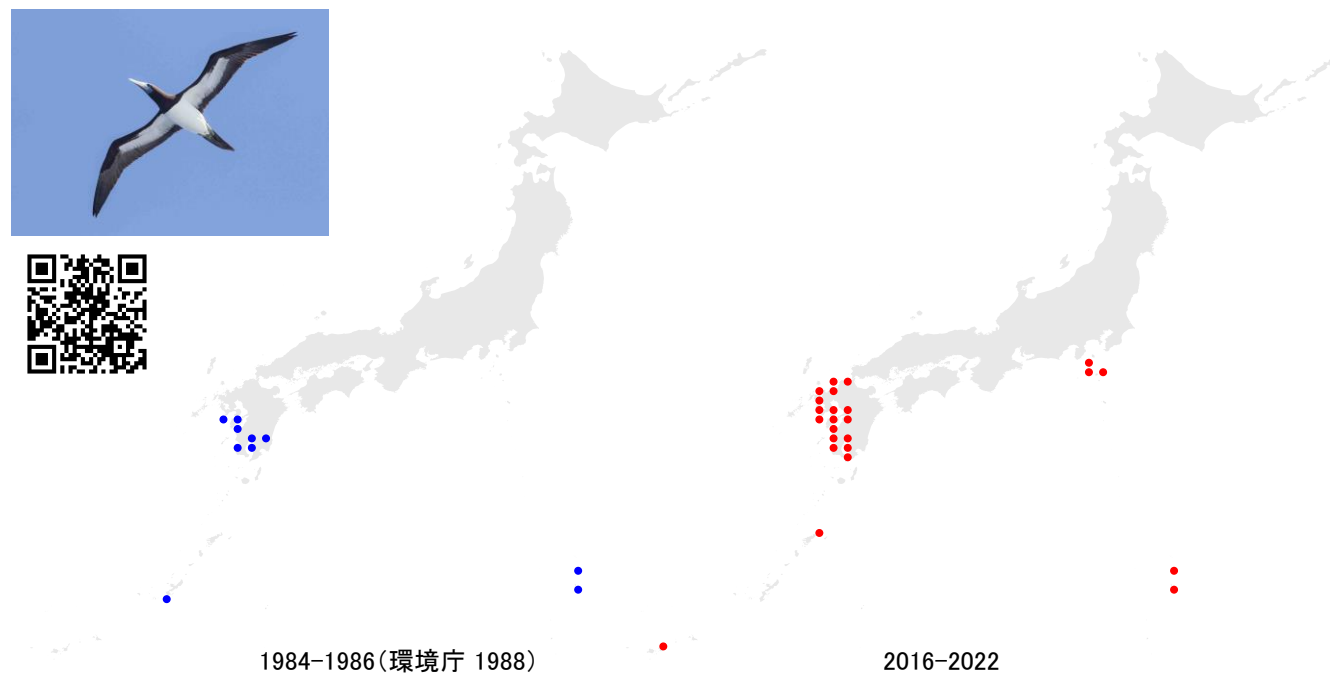


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

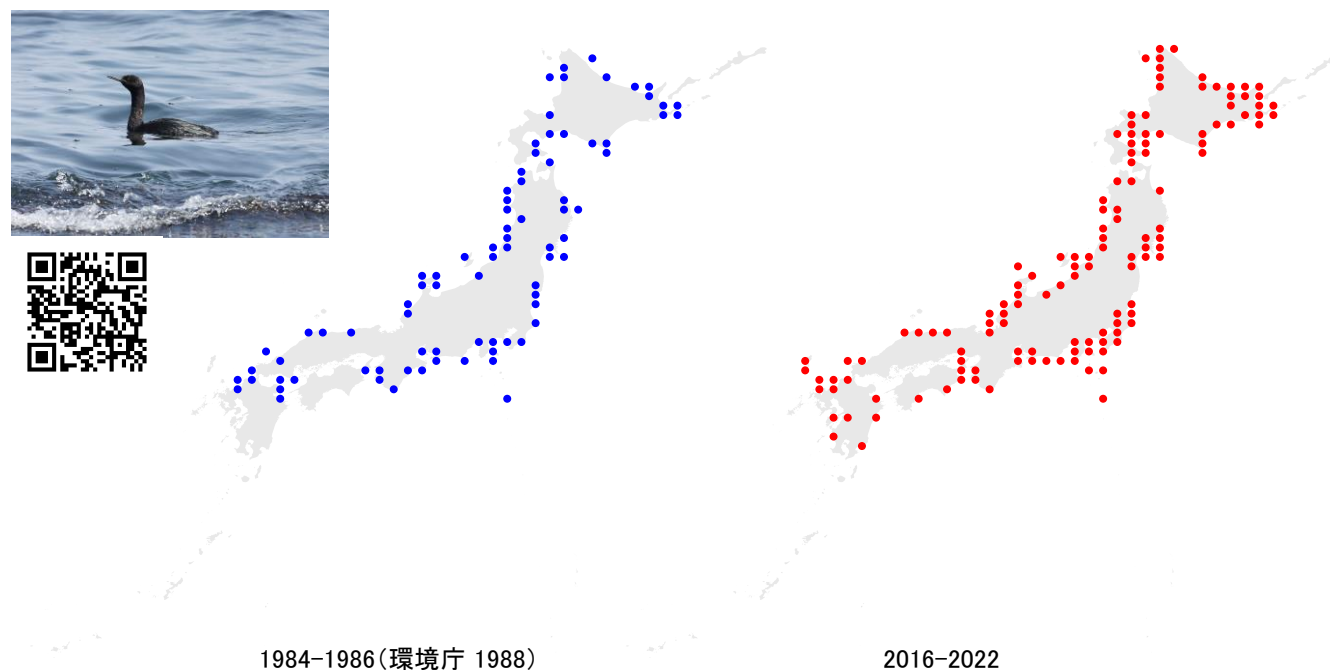
かつては日本全国で繁殖していたが、1971年に繁殖個体はいなくなり1980年代の記録は大陸から越冬に飛来した個体である。2005年に野生復帰事業が始まり、2017年には野外個体が100羽を超えるまでになっており(江崎・大迫 2019)、2010年代にはそれらの個体が記録された。

カツオドリ *Sula leucogaster* 全長: ♂73-80cm ♀ 76-83cm 体重: ♂850-1190g ♀970-1480g



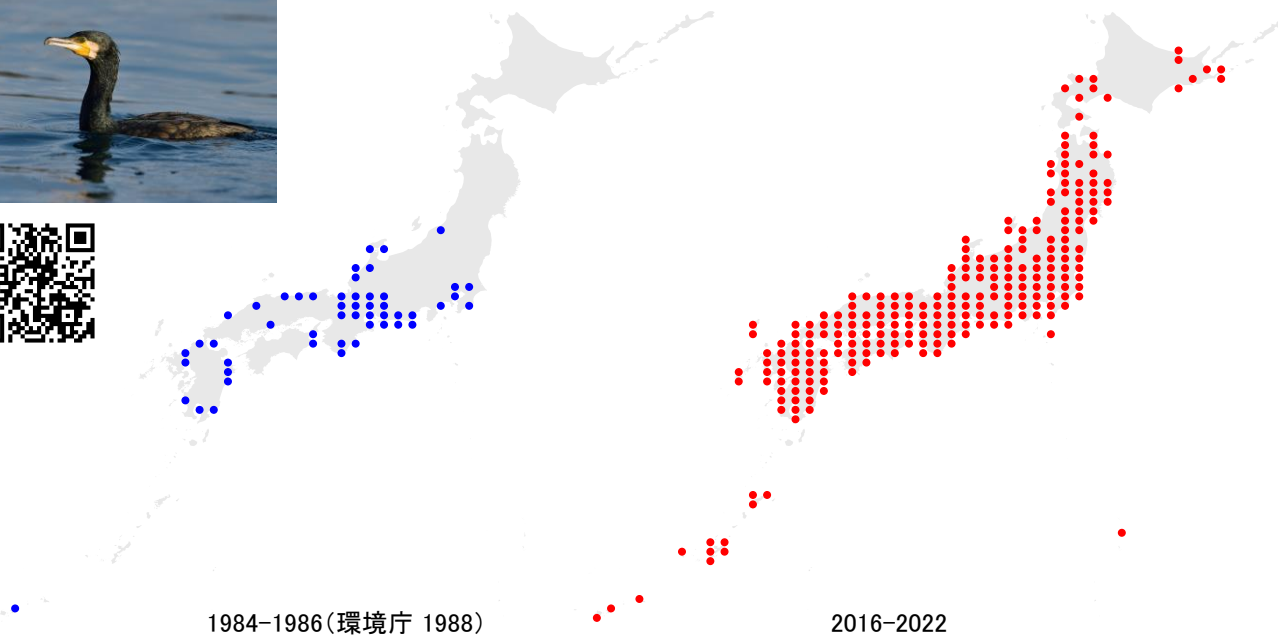
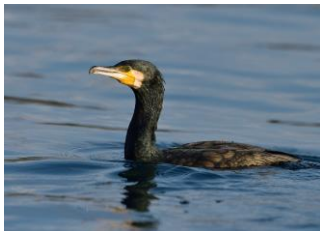
九州以南および伊豆諸島以南の島嶼部で繁殖し、冬期は九州沿岸でも見られる。1980年代の九州の越冬域は南部沿岸のみだったが、2010年代には北部沿岸でも見られるようになった。

ヒメウ *Phalacrocorax pelagicus* 全長: 73cm 体重: 1200-2000g



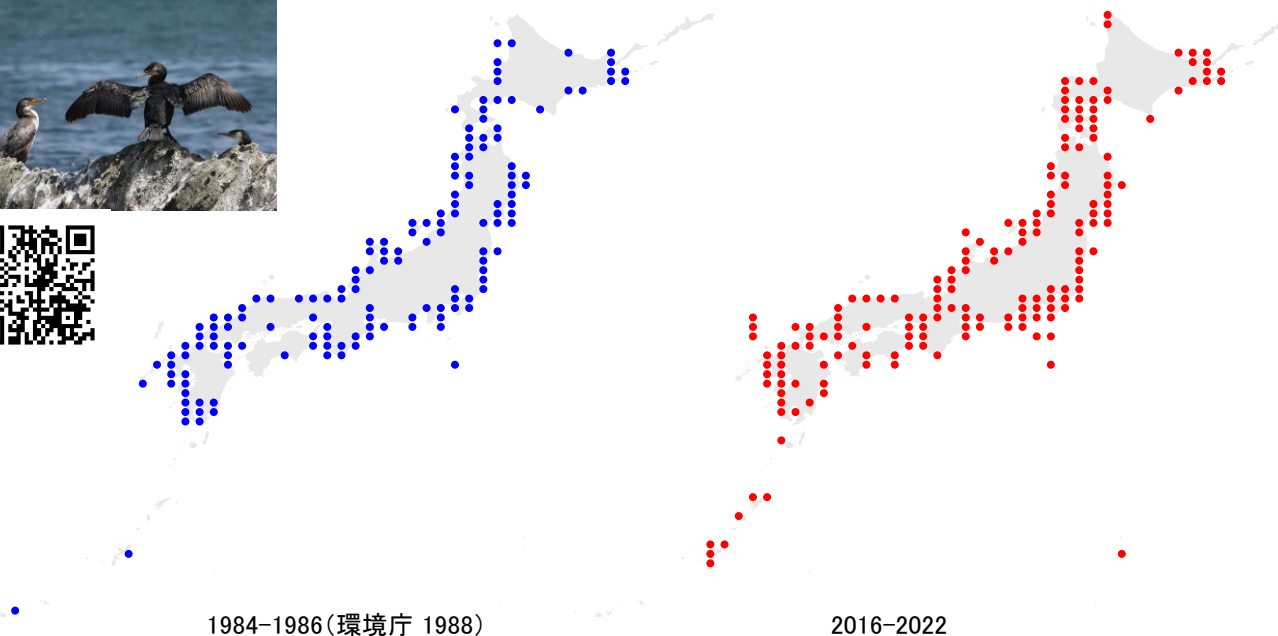
全国の海岸で越冬する。1980年代と比べて記録メッシュ数が大きく増加していたが、海でバードウォッチングをすることが増えたための可能性がある。

カワウ *Phalacrocorax carbo* 全長：80-90cm 体重：1400-2400g



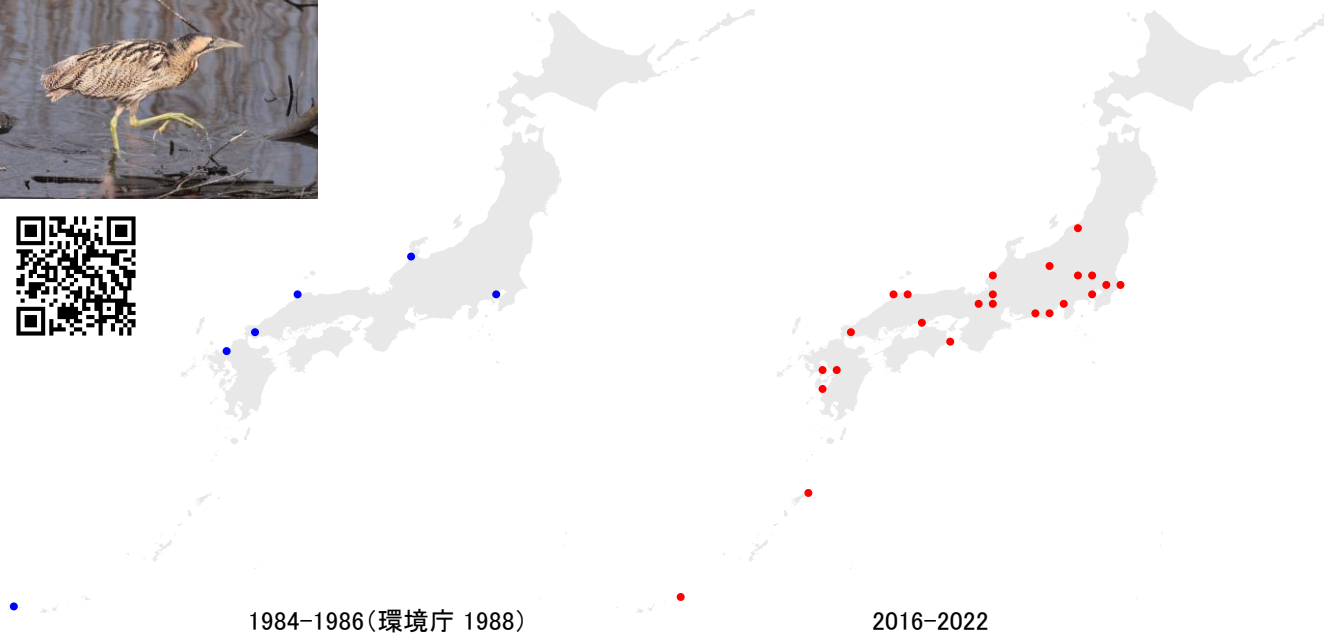
全国の河川、湖沼、内湾などに生息する。1980年代は関東以南で越冬していたのが、本州全域、そして北海道でも記録されるようになった。繁殖期も同様に全国で記録されるようになっており(植田・植村 2021)、内水面漁業やコロニー・ねぐらでの糞の被害との共存が課題となっている(環境省 2004)。

ウミウ *Phalacrocorax capillatus* 全長：80.0-86.5cm 体重：♂3100±180g ♀2500±180g



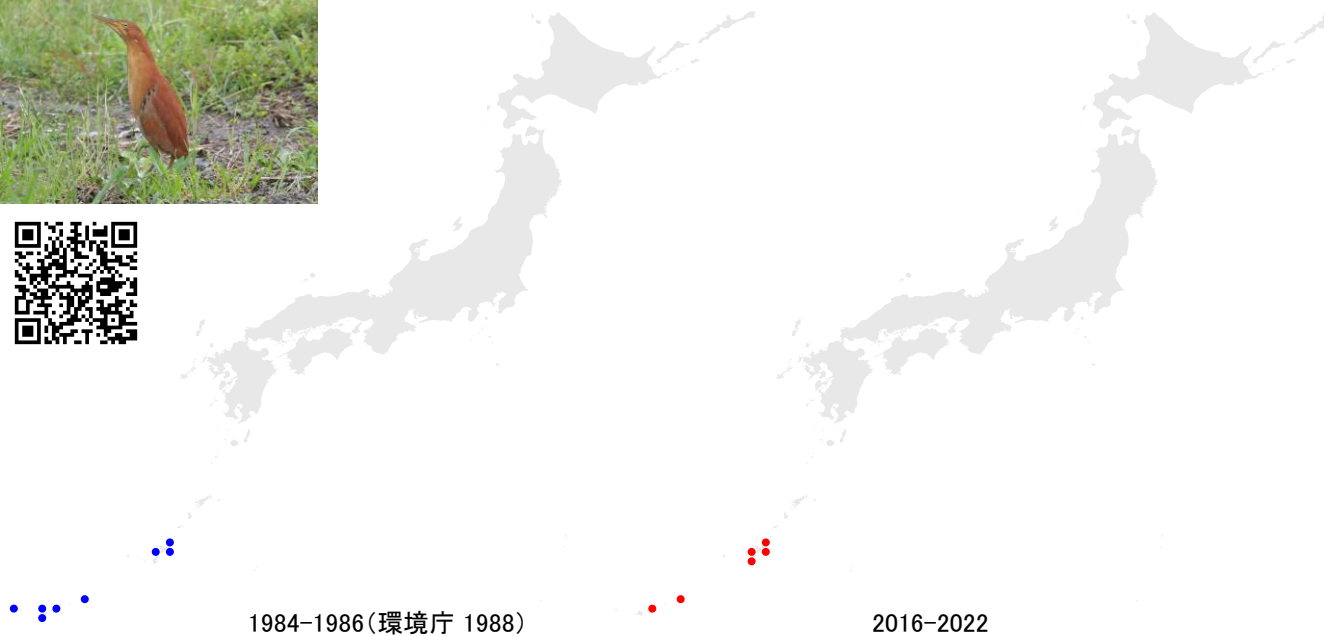
本州中部以北で繁殖し、越冬期は全国の海岸に生息している。1980年代と比べて記録メッシュ数は増加していたが、分布に大きな変化はなかった。記録の増加は海でバードウォッチングをすることが増えたための可能性がある。

サンカノゴイ *Botaurus stellaris* 全長：70cm 体重：1000g



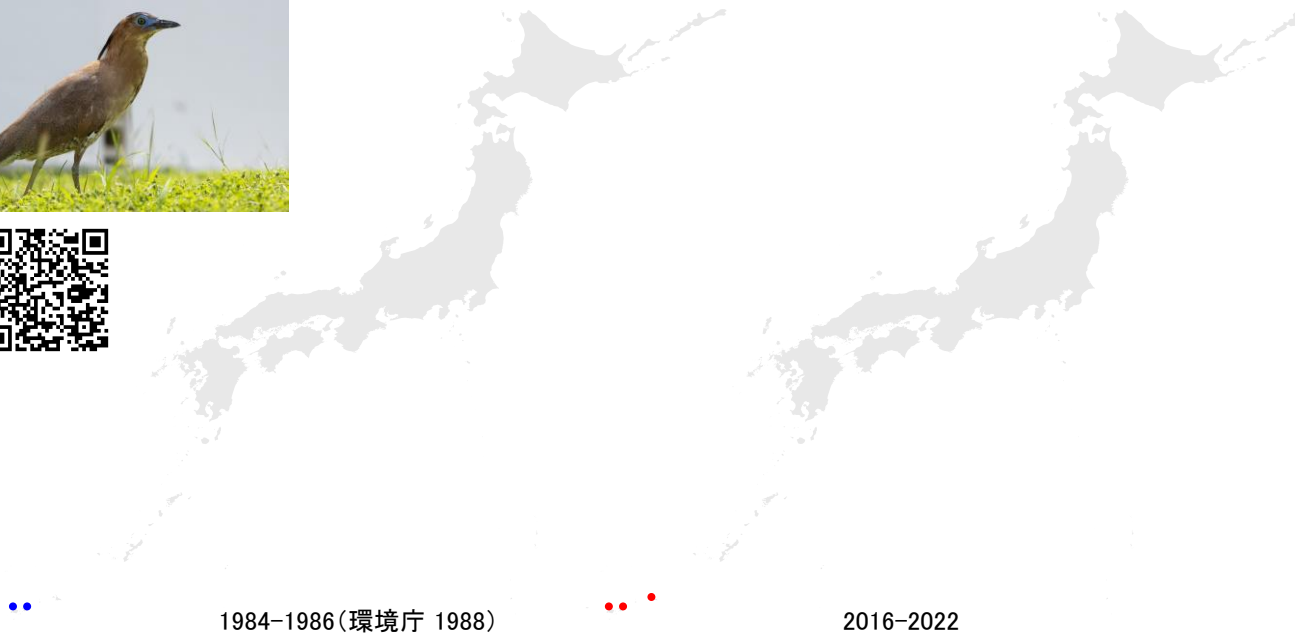
本州中部以南で越冬する。1980年代に比べて記録メッシュ数は大きく増加していた。繁殖期の分布には変化がなく(植田・植村 2021), 個体数が減少している生息地もあること(平野 2018), ヨシ原の中に生息し観察しにくいことなどから, 生息知見の蓄積により記録が増え, 分布が拡大したように見えているだけの可能性もある。

リュウキュウヨシゴイ *Ixobrychus cinnamomeus* 全長：40cm 体重：130-148g



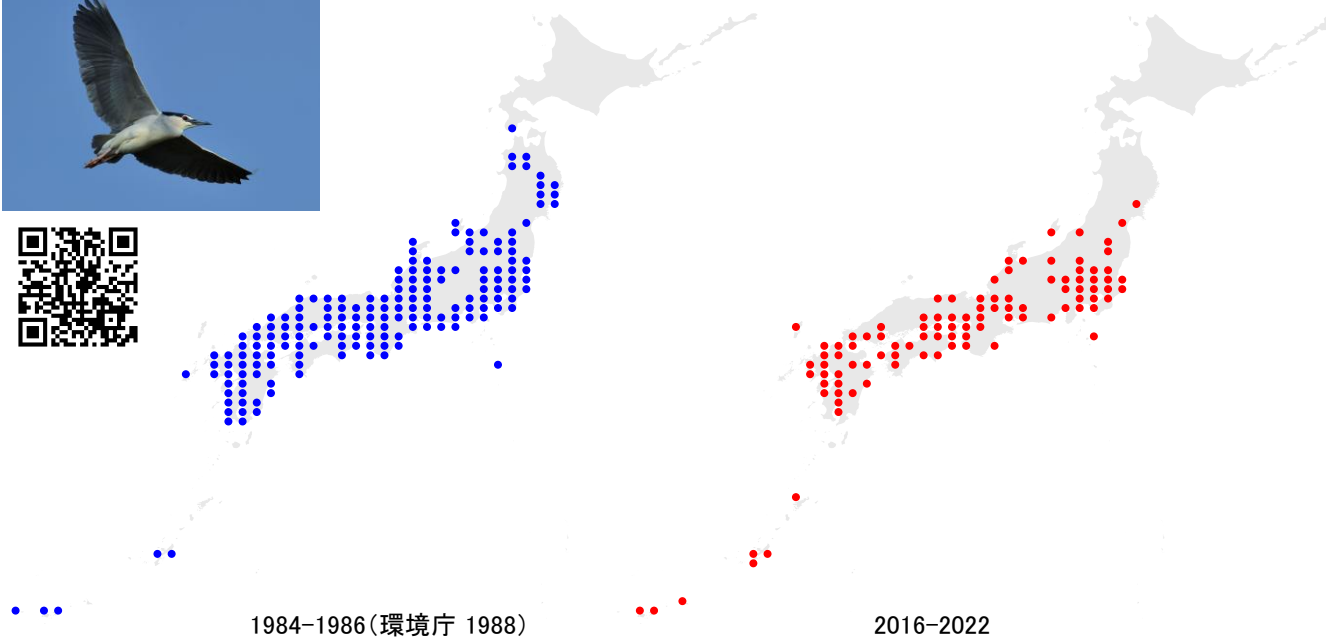
東南アジアに広く分布し, 日本では南西諸島に留鳥として生息する。1980年代と2010年代の分布には大きな変化はなかった。

ズグロミゾゴイ *Gorsachius melanolophus* 全長：49cm



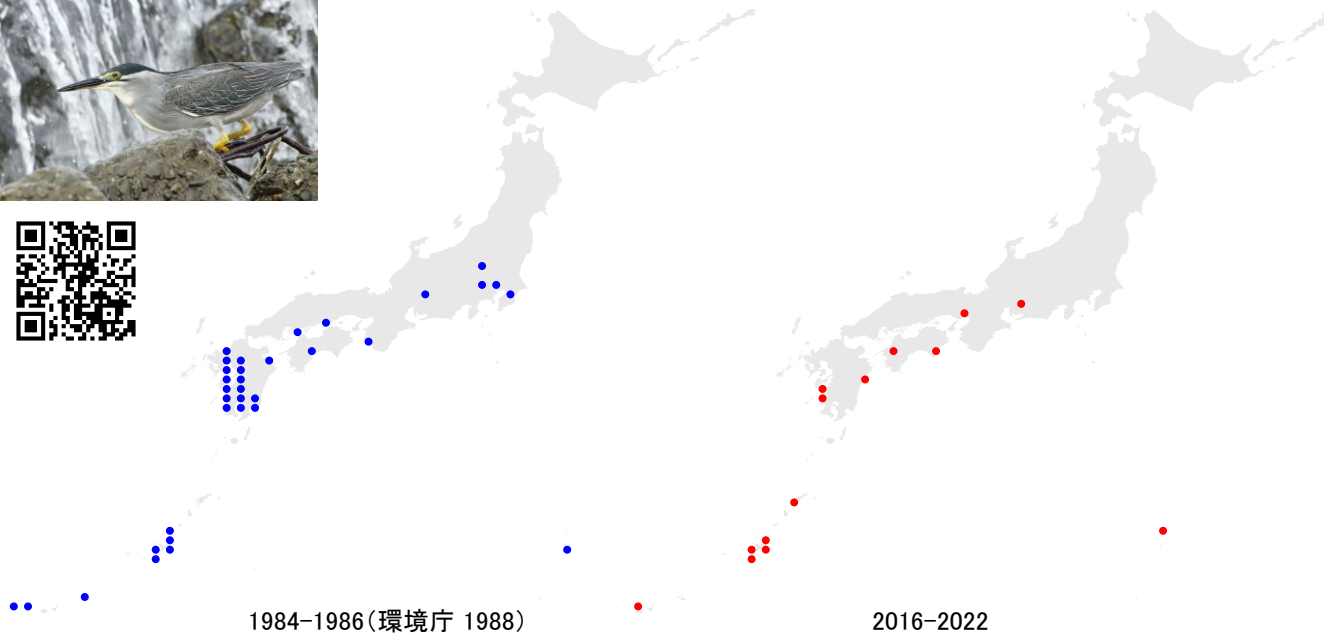
八重山諸島で留鳥として繁殖する。1980年代と2010年代の分布には大きな変化はなかった。

ゴイサギ *Nycticorax nycticorax* 全長：57.5cm 体重：485-683g



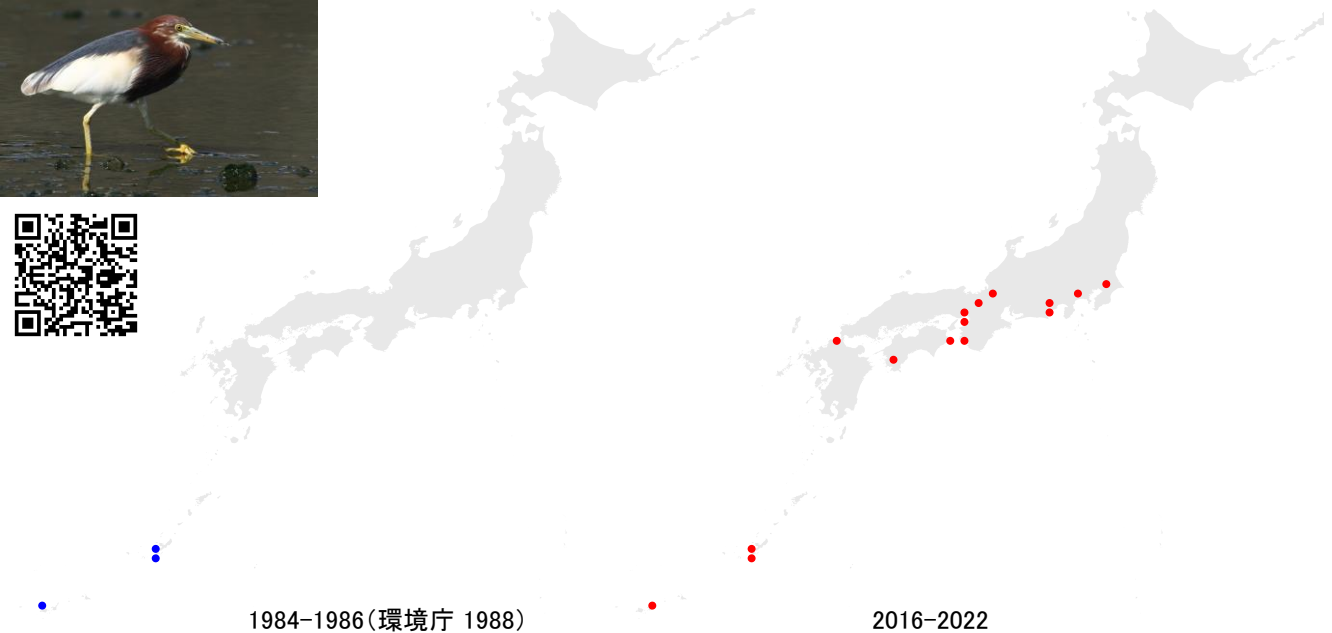
全国で繁殖し、南東北以南で越冬する。1980年代と比べて、記録メッシュ数は大きく減少しており、減少率では全種の中でも上位に入っていた。繁殖期にも大きく減少していることが知られており(植田・植村 2021), こうした減少が越冬期の分布の縮小にもつながっていると考えられる。

ササゴイ *Butorides striata* 全長：52cm 体重：135-300g



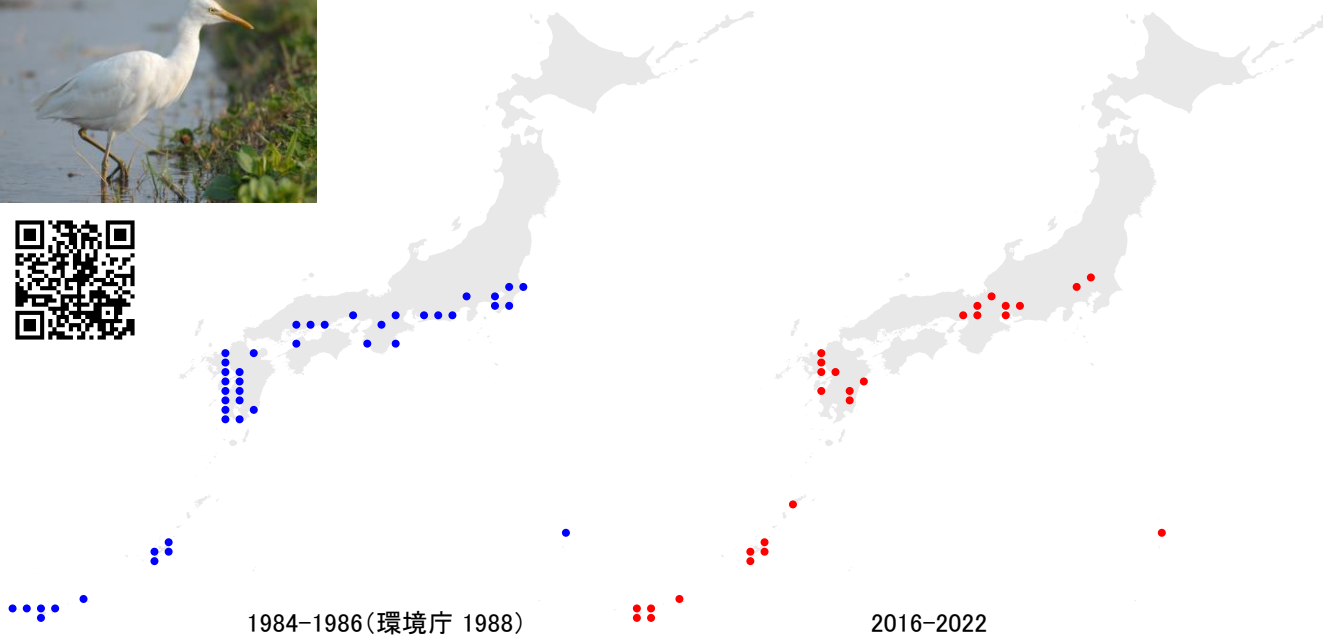
本州以南で繁殖し、南日本を中心に一部が越冬する。1980年代と比べて、記録メッシュ数は大きく減少しており、減少率では全種の中でも上位に入っていた。繁殖期にも大きく減少していることが知られており(植田・植村 2021)、こうした減少が分布の縮小につながっていると考えられる。

アカガシラサギ *Ardeola bacchus* 全長：45cm 体重：220-380g



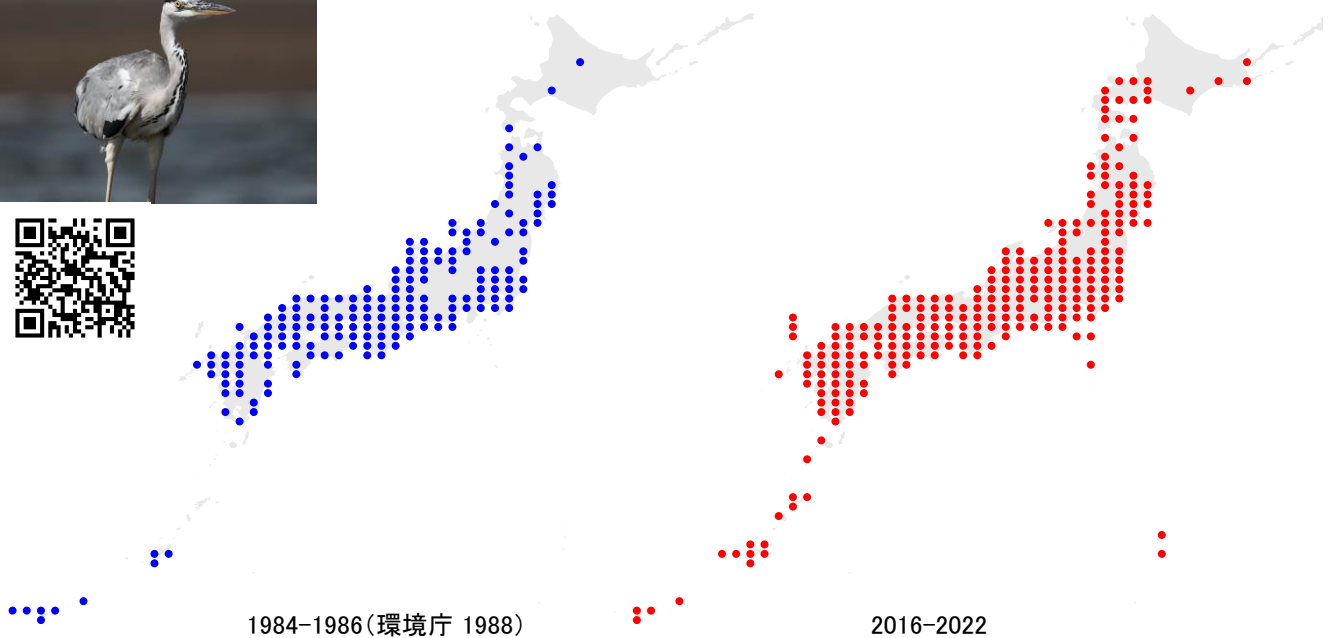
東アジアの温帯から熱帯域に分布し、日本でもまれに繁殖することがある。越冬記録は1980年代と比べて増加しており、関東以南で局所的に記録されていた。

アマサギ *Bubulcus ibis* 全長：46-56cm 体重：♂311g ♀304g



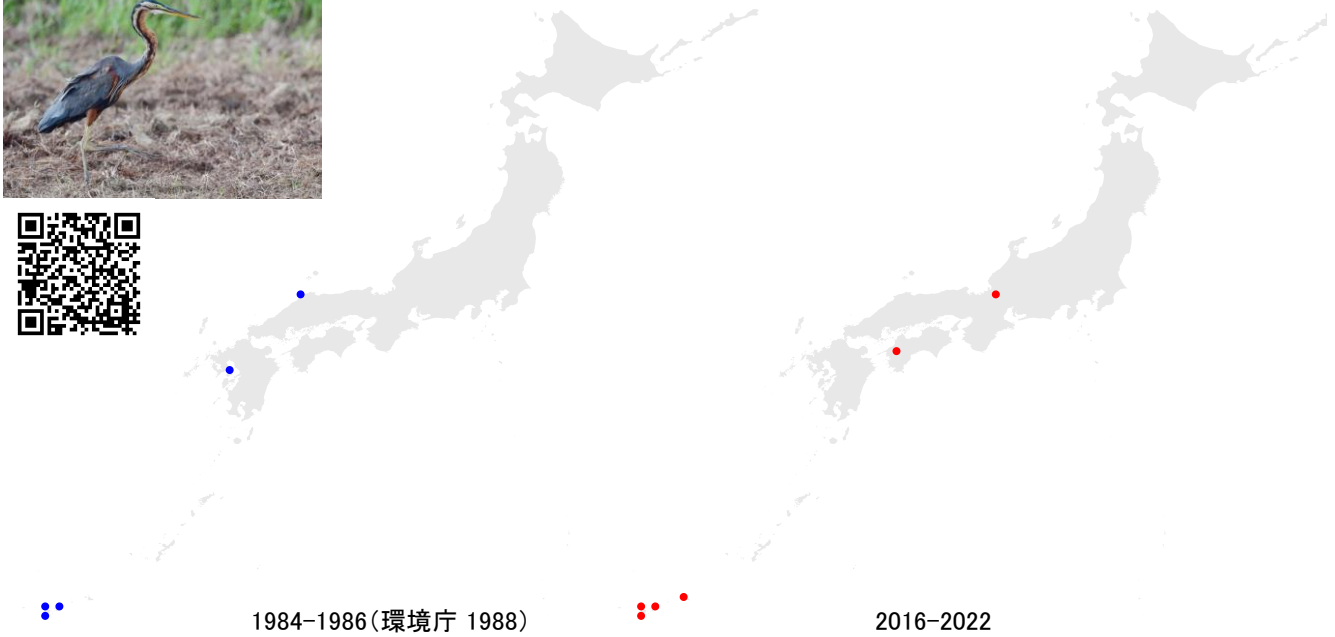
主に本州以南で夏鳥として繁殖し、関東以南で越冬する個体がいる。1980年代と比べて、記録メッシュ数は大きく減少しており、減少率では全種の中でも上位に入っていた。繁殖期にも大きく減少していることが知られており(植田・植村 2021)、こうした減少が分布の縮小につながっていると考えられる。

アオサギ *Ardea cinerea* 全長：90-98cm 体重：♂1071-2073g ♀1020-1785g



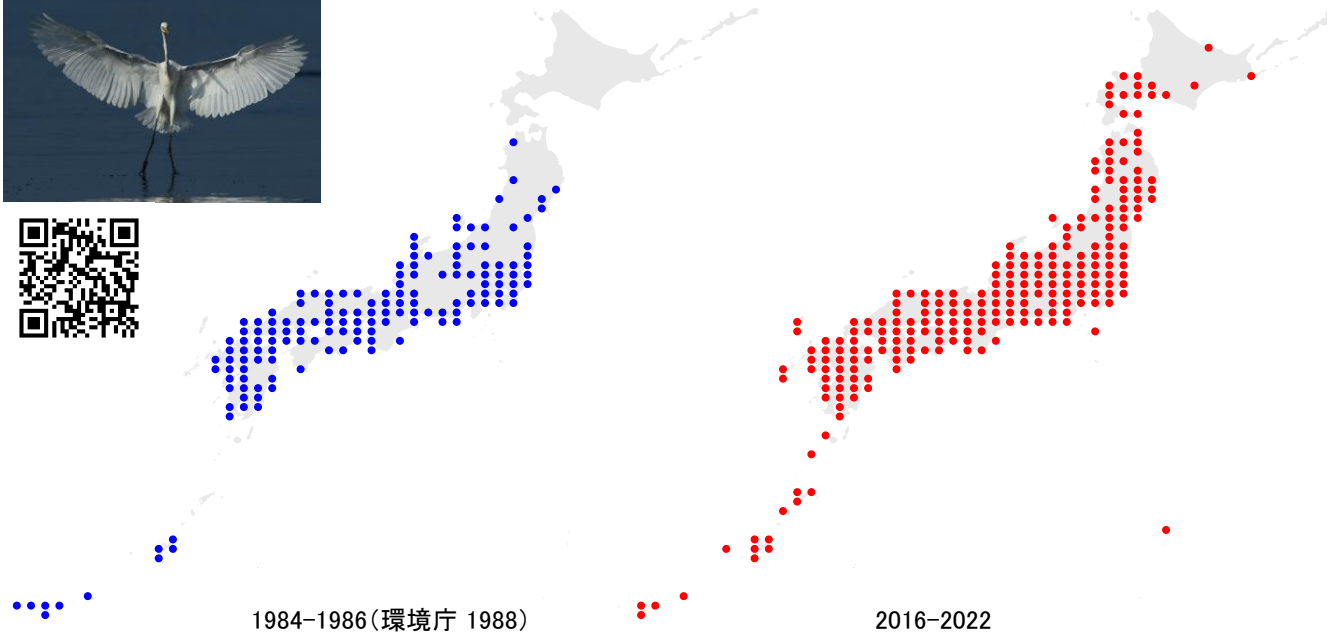
留鳥として全国で繁殖する。1980年代と比べて記録メッシュ数が大きく増加しており、特にその傾向は北日本で顕著だった。繁殖期にも増加しており(植田・植村 2021)、小型のサギ類が減少しているのとは対照的であった。

ムラサキサギ *Ardea purpurea* 全長：78-90cm 体重：525-1345g



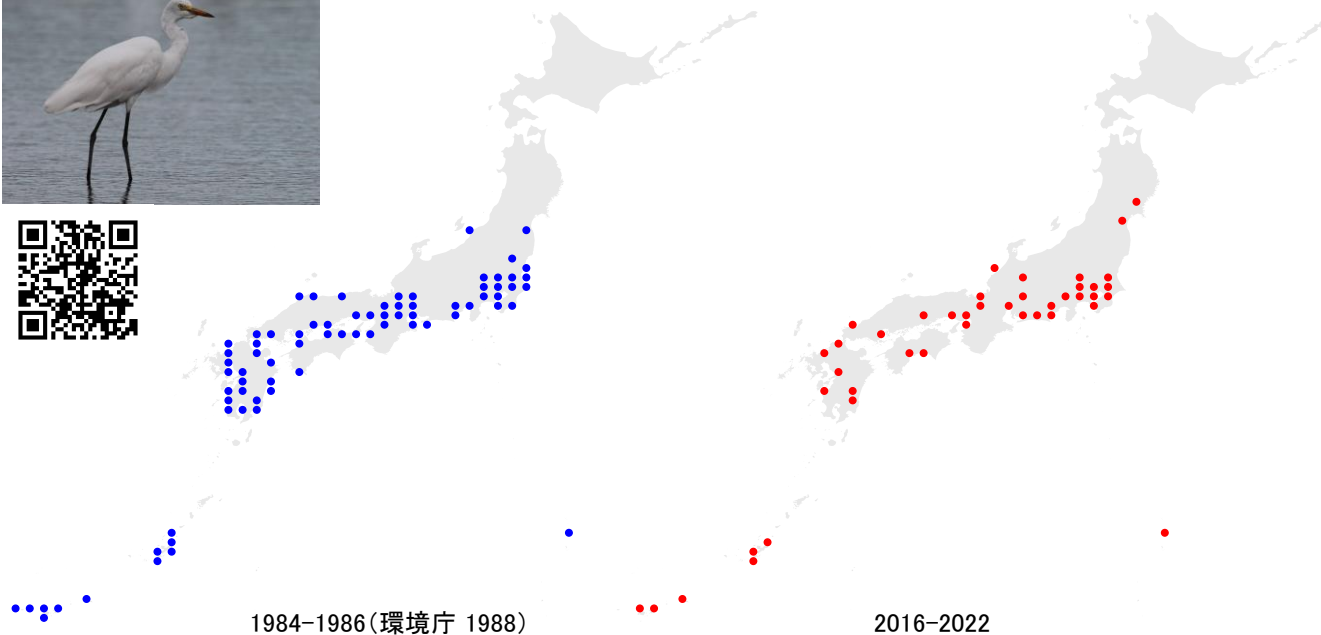
八重山諸島など南西諸島に留鳥として生息し、本土部でも記録されることがある。2010年代も四国と近畿での観察記録があった。

ダイサギ *Ardea alba* 全長：84-94cm 体重：700-1200g



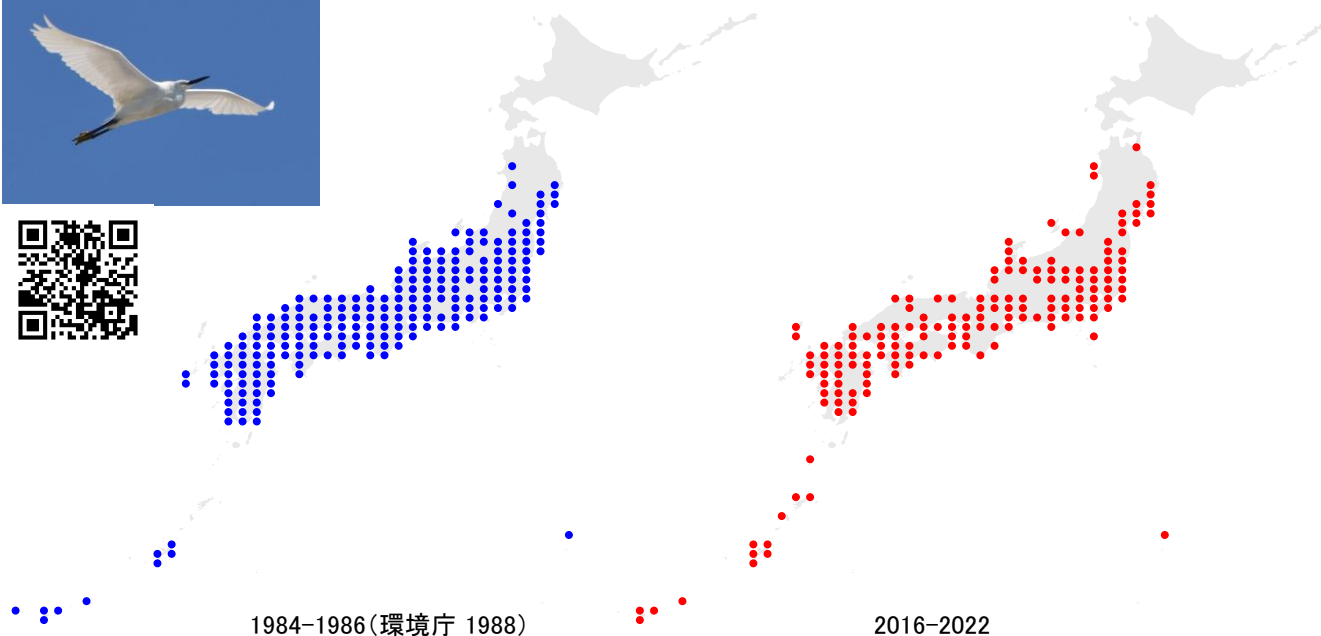
主に本州以南で繁殖し、北海道でも繁殖する。越冬分布は1980年代と比べて記録メッシュ数が大きく増加しており、特にその傾向は北日本で顕著だった。繁殖期も増加しており、これはダイサギだけでなく大型の魚食性鳥類に共通する傾向である(植田・植村 2021)。

チュウサギ *Egretta intermedia* 全長：65-72cm 体重：430-630g



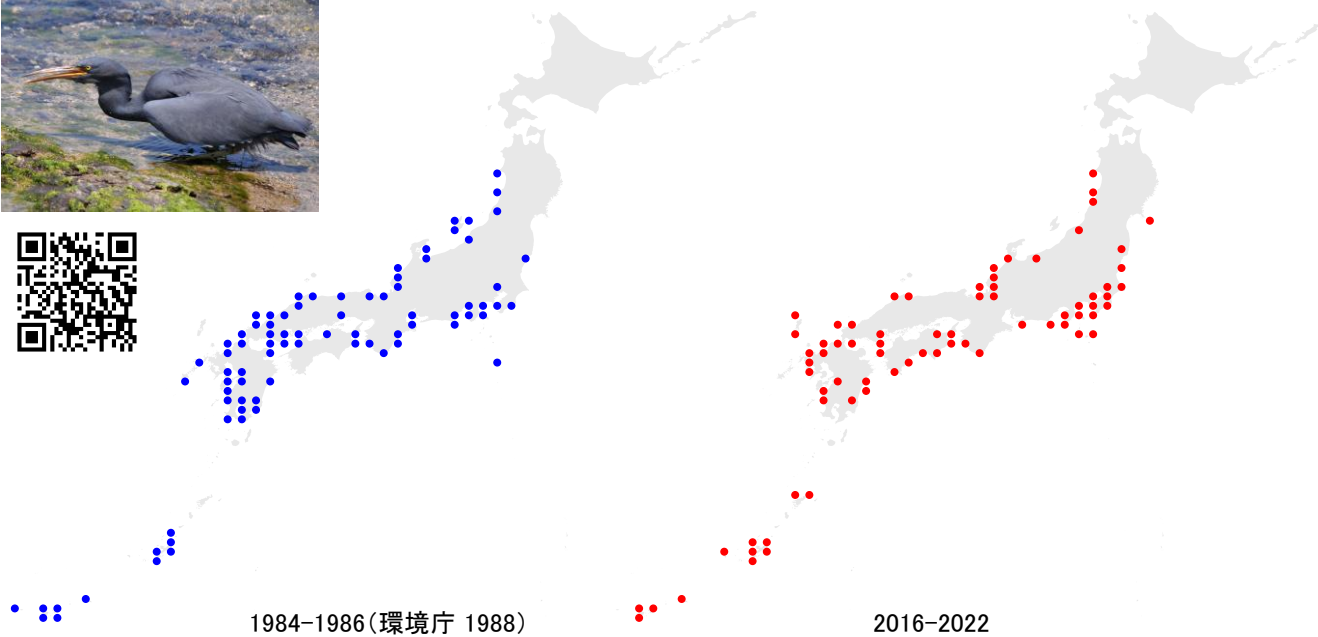
主に本州以南で夏鳥として繁殖し、関東以南で越冬する個体がいる。越冬分布の範囲には大きな変化はないが、記録メッシュ数は減少しており、減少率では全種の中でも上位に入っていた。繁殖分布には、大きな変化は見られていない(植田・植村 2021)。

コサギ *Egretta garzetta* 全長：♂62cm ♀58cm 体重：♂604.5±20.40g ♀487.2±16.10g



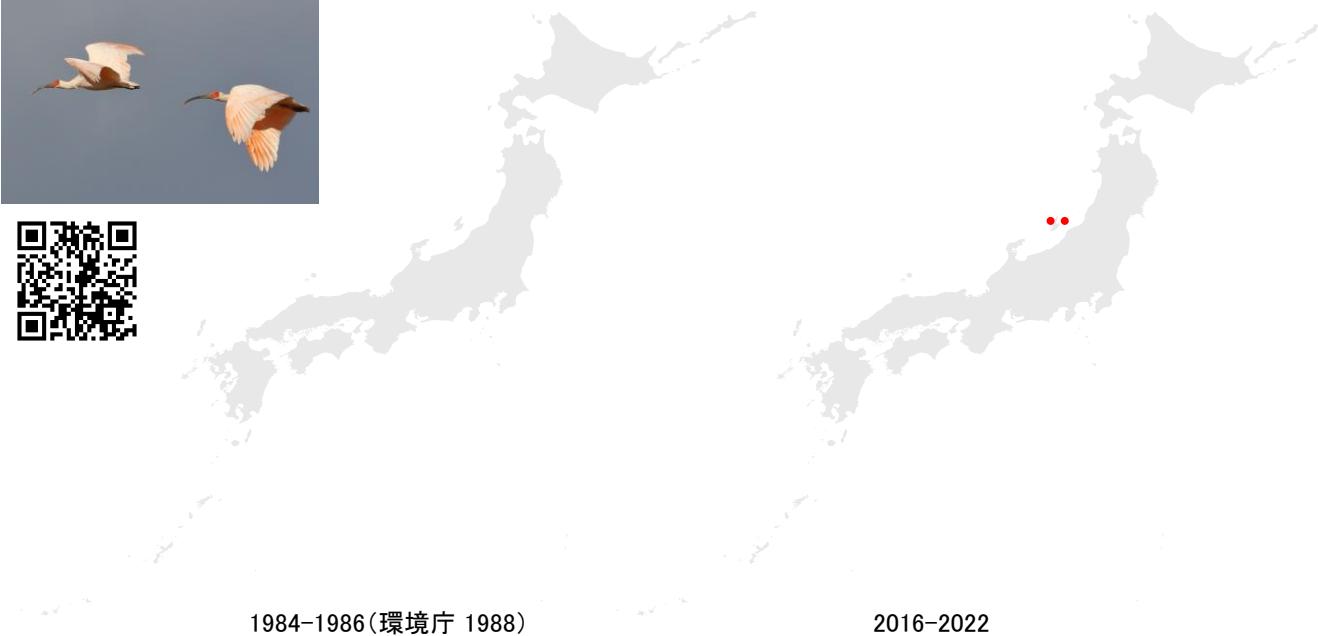
主に南東北以南で越冬する。分布範囲は 1980 年代と変化はないが、記録メッシュ数が大きく減少しており、減少率では全種の中でも上位に入っていた。繁殖期にも激減しており(植田・植村 2021)、それを反映していると考えられる。

クロサギ *Egretta sacra* 全長: 58-66cm 体重: 330-700g



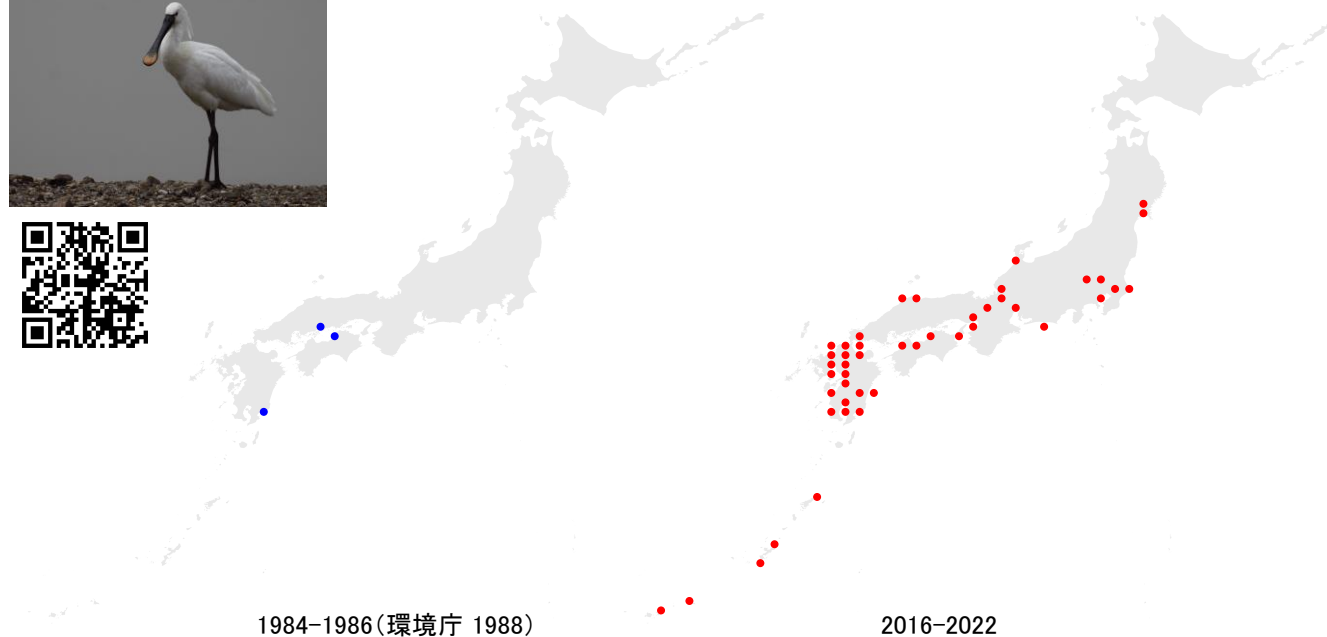
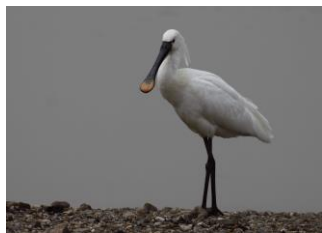
本州以南の海岸に留鳥として生息する。黒色型と白色型があり、白色型は南西諸島以南に多い。越冬分布に大きな変化は見られなかった。

トキ *Nipponia nippon* 全長: ♂777±3.3cm ♀73±2.7cm 体重: ♂1776±120g ♀1545±107g



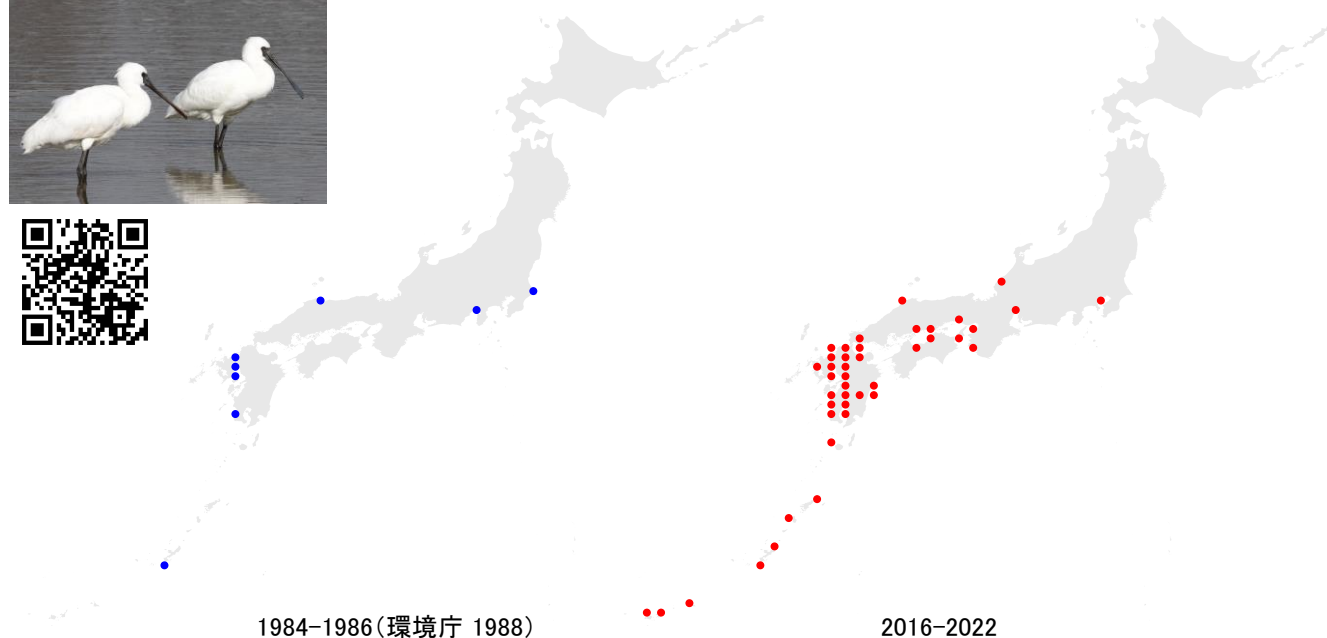
かつては日本で繁殖していたが、1981年に佐渡島に残っていた5羽を飼育繁殖のために捕獲し、野生絶滅した。その後、2008年に佐渡島に再導入され、2015年には150羽が生息していると推定されている(岡久ほか 2017)。2010年代にはそれらの個体が記録された。

ヘラサギ *Platalea leucorodia* 全長：86cm 体重：1130-1960g



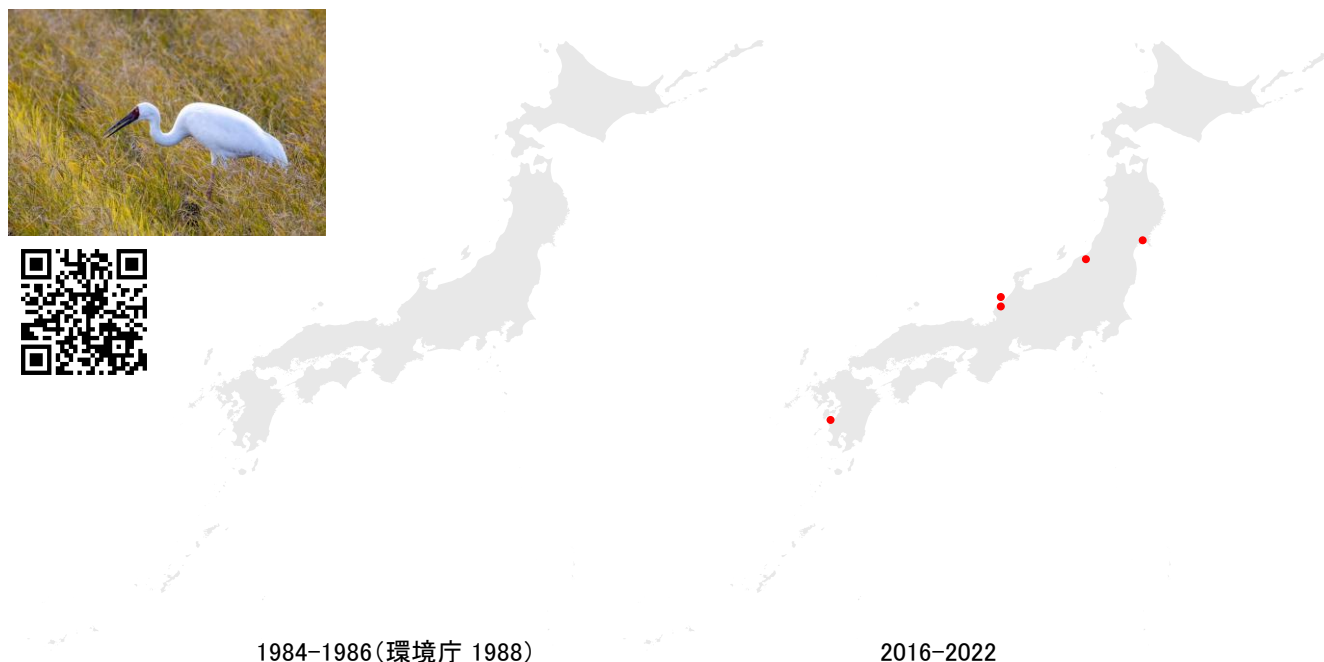
1980年代は西日本に局所的に記録される冬鳥だったが、2010年代には東北以南で見られ、九州では広く見られる冬鳥となった。クロツラヘラサギも同様の傾向にある。

クロツラヘラサギ *Platalea minor* 全長：68.8-77.7cm 体重：1470-1900g



かつては九州の干潟に局所的に越冬する鳥で、世界的にも香港や台南に大きな越冬地がある程度だったが、その生息数は急激に増加している(日本クロツラヘラサギネットワーク・日本野鳥の会 online)。国内の分布や生息数も同様に増加、拡大傾向にあった。

ソデグロヅル *Grus leucogeranus* 全長：140cm 体重：5670-8620g

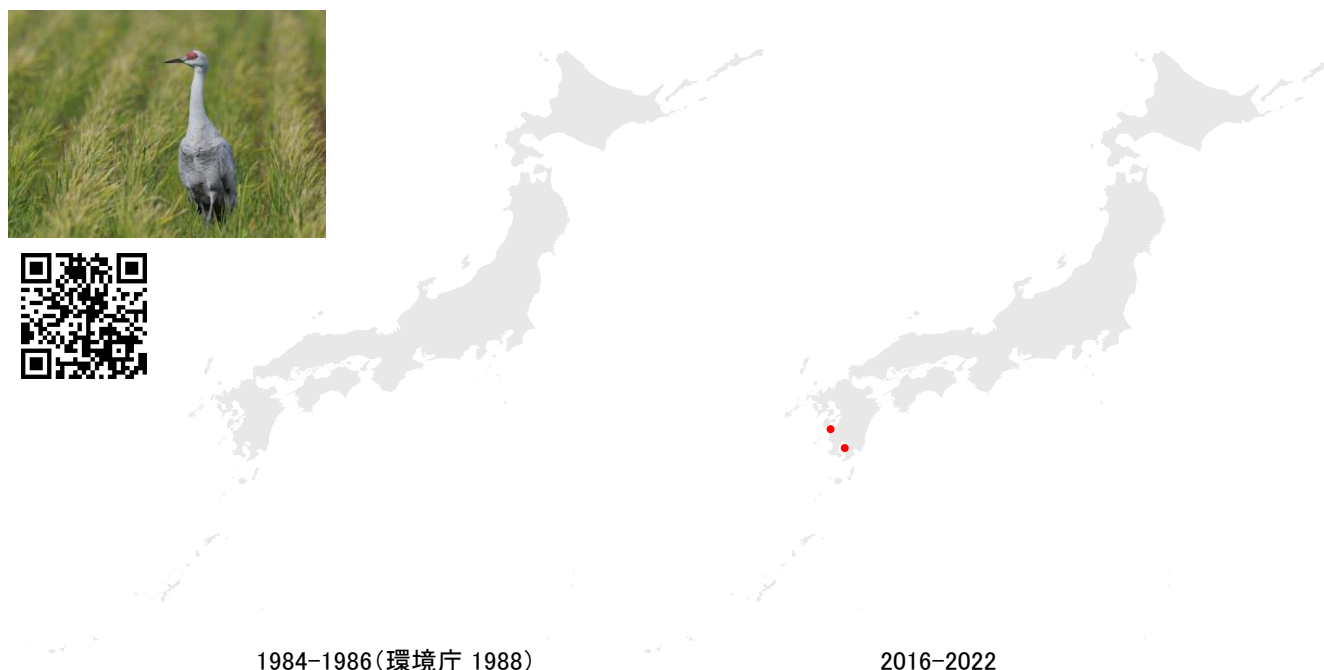


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

ロシアの北極圏で繁殖し、その多くは中国の揚子江中流の鄱陽湖で越冬する(Kanai et al. 2002)。日本には、鹿児島県の出水などで不定期に越冬する。近年は出水以外の場所に飛来することも増えてきており、2010年代には本州の4メッシュで記録された。

カナダヅル *Grus canadensis* 全長：100cm 体重：3200-3500g

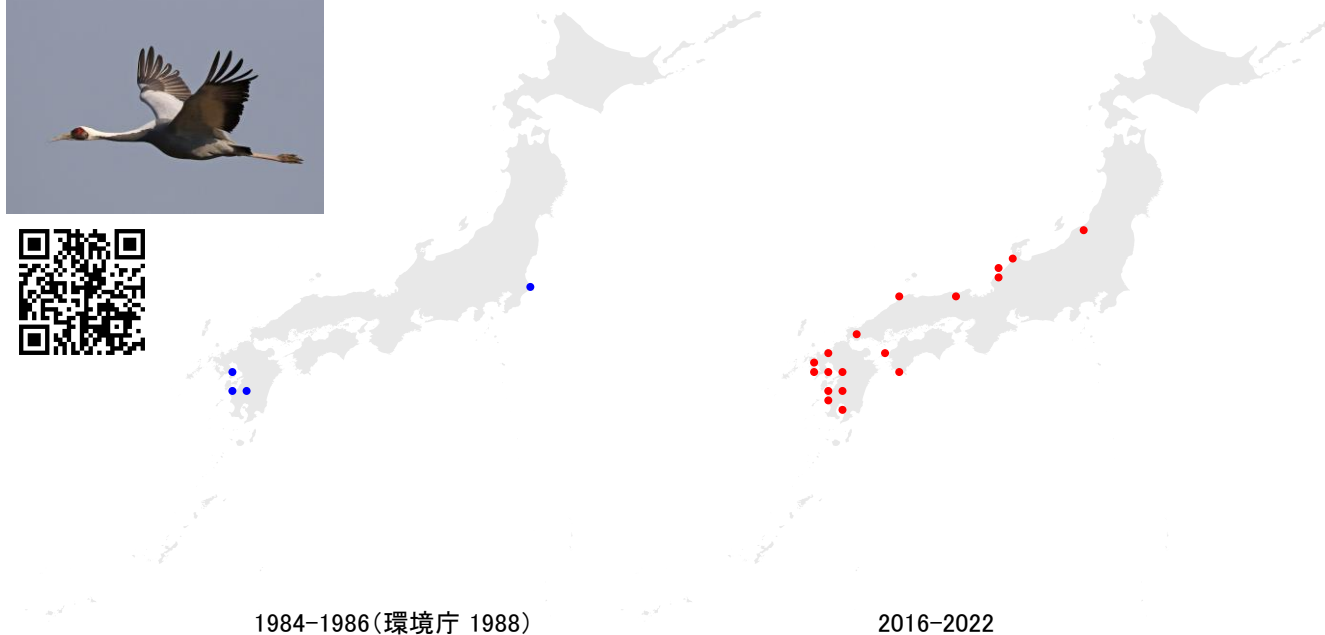


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

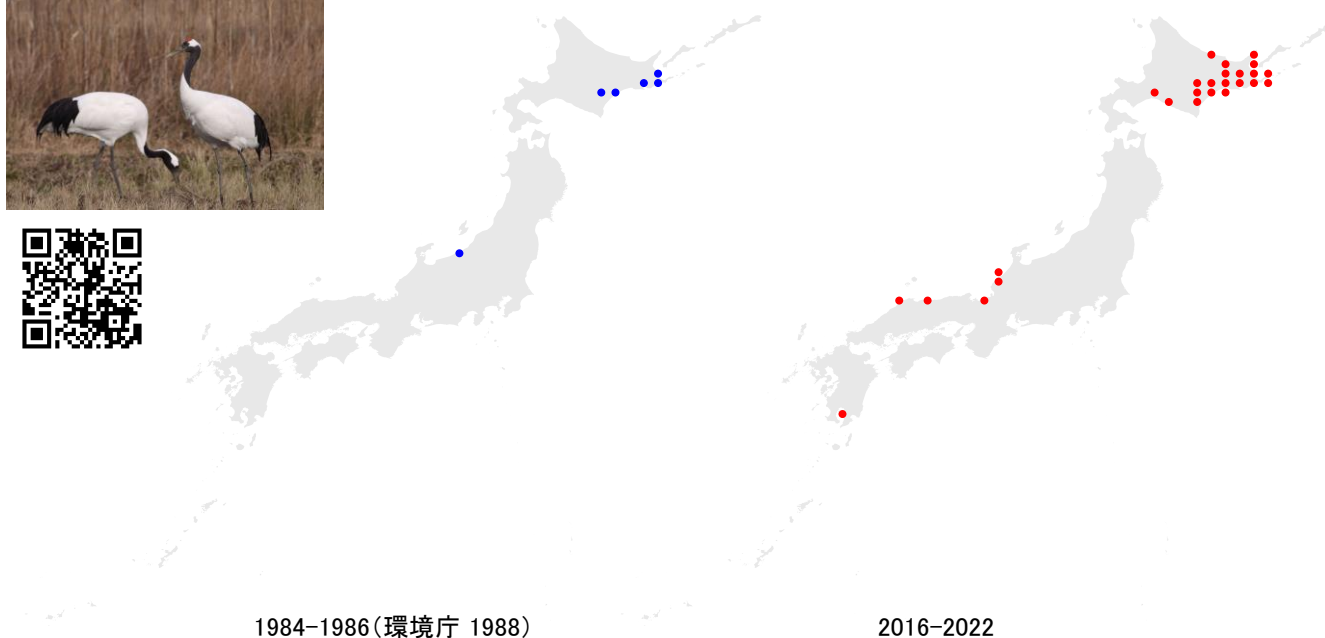
主に北米で越冬する鳥で、日本には数少ない冬鳥として渡来し、主に鹿児島県の出水で少数が越冬する。2010年代には九州の2メッシュで記録された。

マナヅル *Grus vipio* 全長: 125cm 体重: 5100-6000g



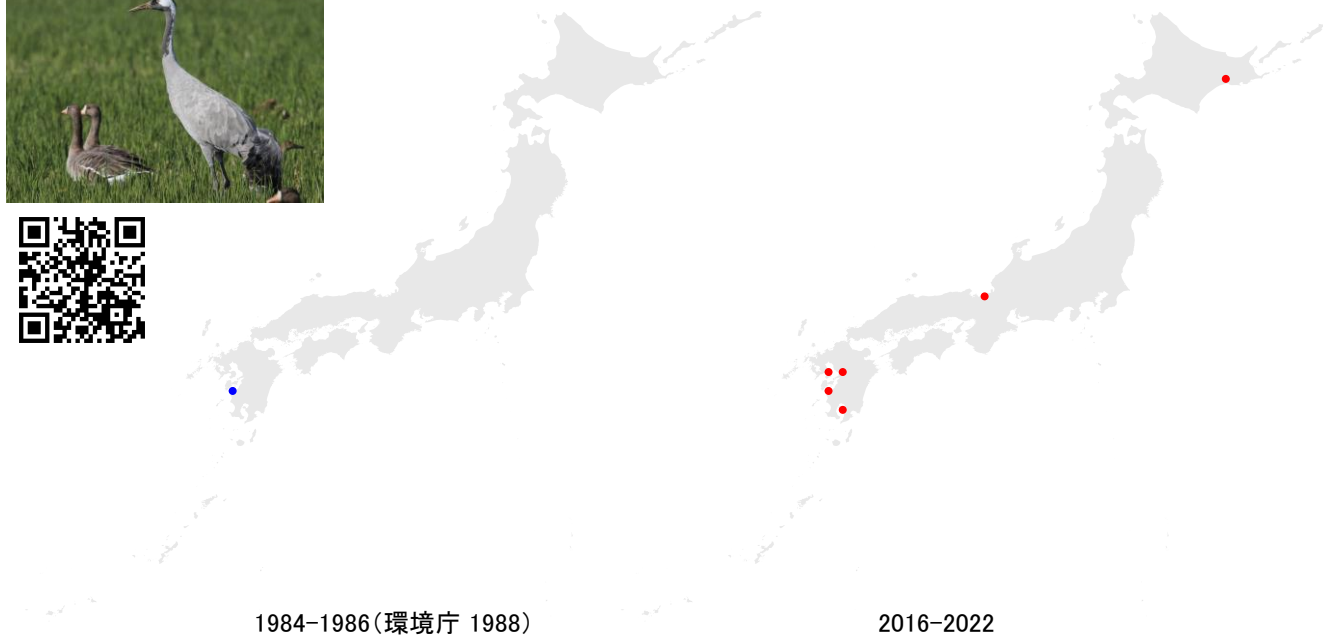
鹿児島の出水, 長崎の諫早干拓などで越冬する。2010 年代には, 四国や日本海側の地域を中心に, 出水・諫早以外の地域での越冬記録も増加していた。

タンチョウ *Grus japonensis* 全長: ♂136.5cm ♀124.7cm 体重: ♂8137±138g ♀7321±133g



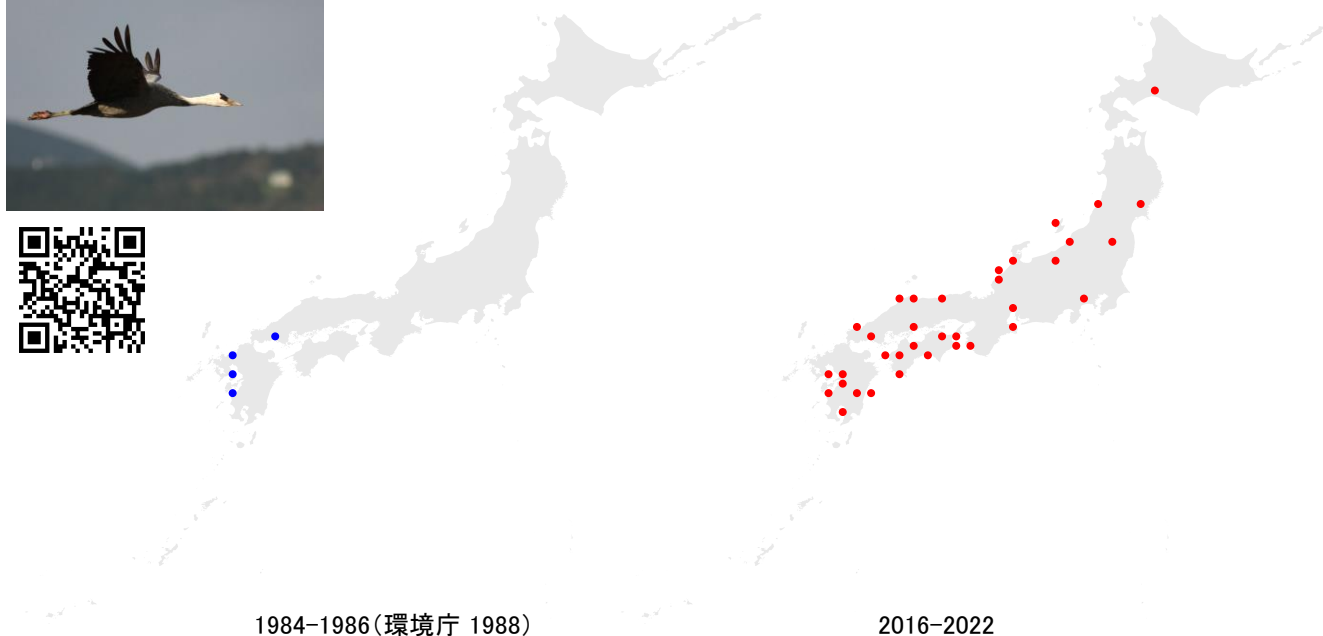
北海道道東部に留鳥として生息し, 越冬期には給餌場に集まるものが多い。近年は道北や道央にも繁殖分布が拡大しており, 道央では越冬もするようになった。本州以南での記録は, 大陸の繁殖個体が渡ってきたものと考えられる。

クロヅル *Grus grus* 全長：110-125cm 体重：3000-6000g



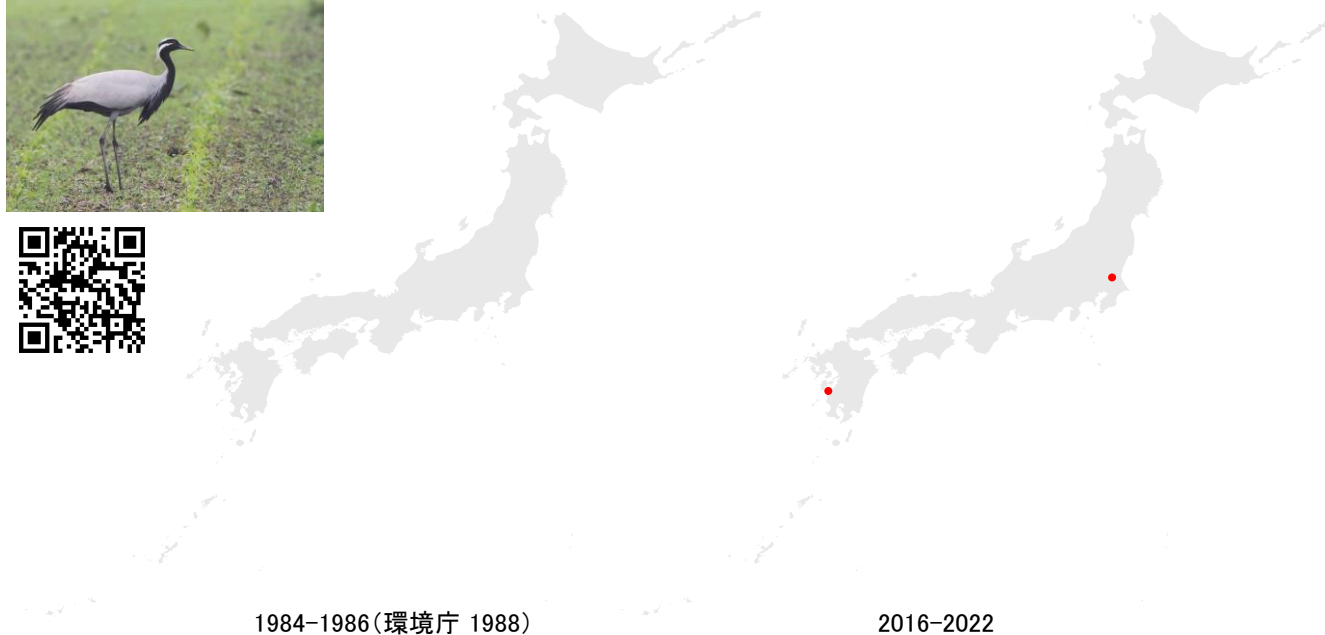
世界では最も多いツル類の1つだが、日本では鹿児島島の出水で少数が越冬し、それ以外の場所には不定期に渡来するのみである。2010年代には九州の4メッシュと本州・北海道の各1メッシュで記録された。

ナベヅル *Grus monacha* 全長：100cm 体重：♂3280-4870g ♀3400-3740g



鹿児島島の出水、長崎の諫早干拓などで越冬する。日本で世界の総個体数の大半が越冬する。2010年代は、出水や諫早以外の地域での記録も増加していた。

アネハヅル *Anthropoides virgo* 全長：90cm 体重：2100-2500g



1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

ヒマラヤを越えるツルとして有名で、中央アジアで繁殖し、インドなどで越冬する。日本には鹿児島島の出水などで不定期に越冬し、2010年代には2メッシュの記録があった。

シマクイナ *Coturnicops exquisitus* 全長：12cm 体重：36g

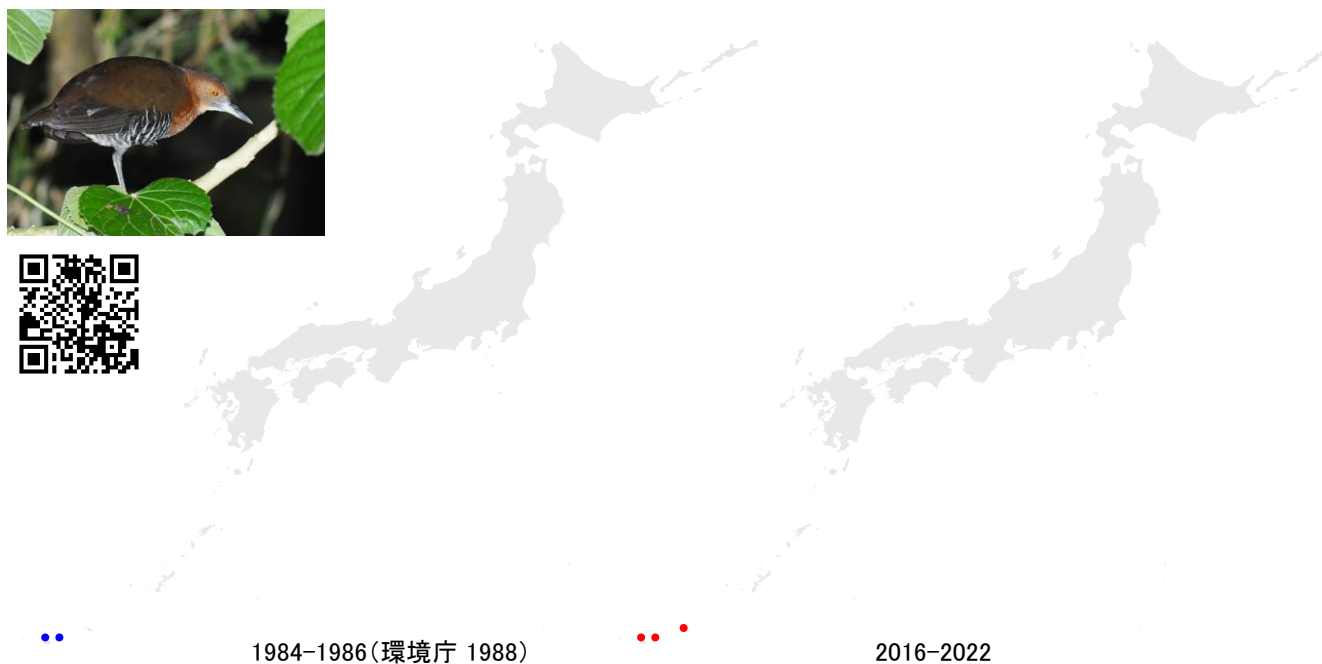
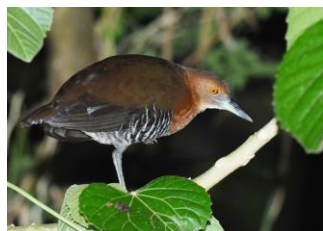


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

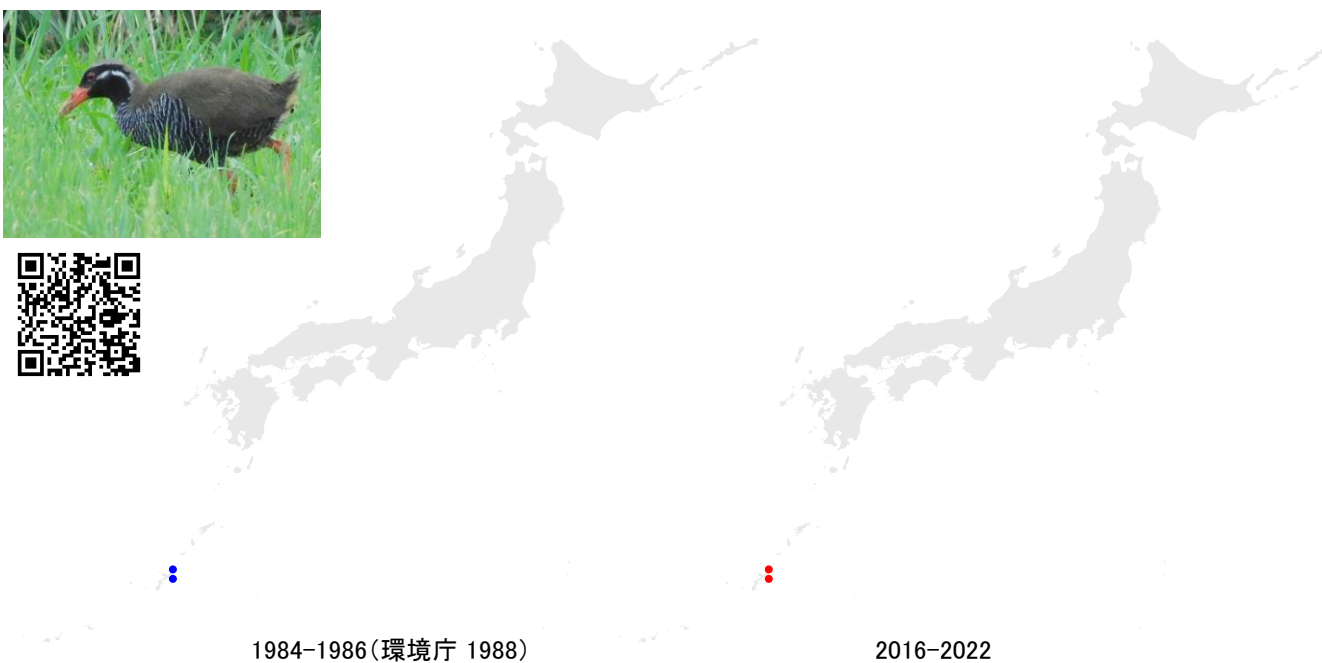
1980年代には記録はなかったが、2010年代には関東から九州で記録された。希な冬鳥だと考えられていたが、プレイバックによる調査手法が確立し、広く越冬していることが明らかになっている(高橋ほか 2018, 北沢・吉岡 2021, 松宮・沼野 2022)。

オオクイナ *Rallina eurizonoides* 全長：25cm



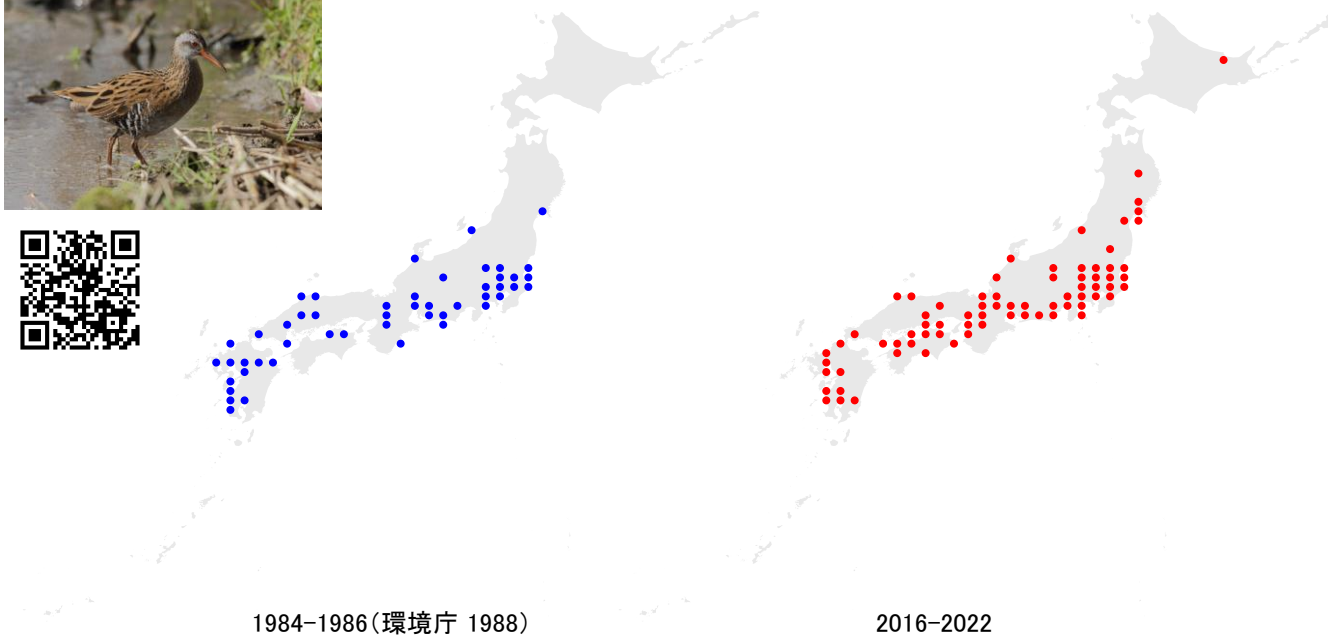
南西諸島南部に留鳥として生息する。繁殖期の記録はやや増加しているが(植田・植村 2021), 越冬期のメッシュ数には大きな変化はなかった。

ヤンバルクイナ *Gallirallus okinawae* 全長：29-33cm 体重：340-430g



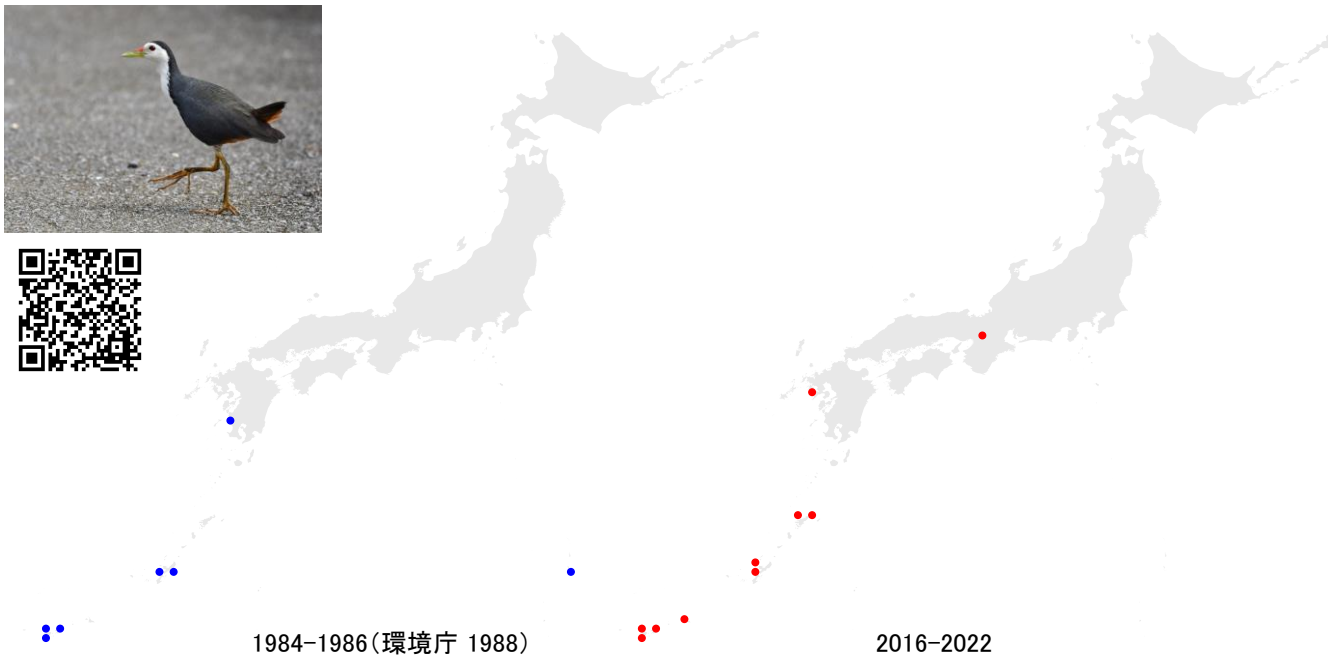
沖縄北部に留鳥として生息する。局所的に分布する種のため、分布変化は明らかでない。

クイナ *Rallus aquaticus* 全長：29cm 体重：85-190g



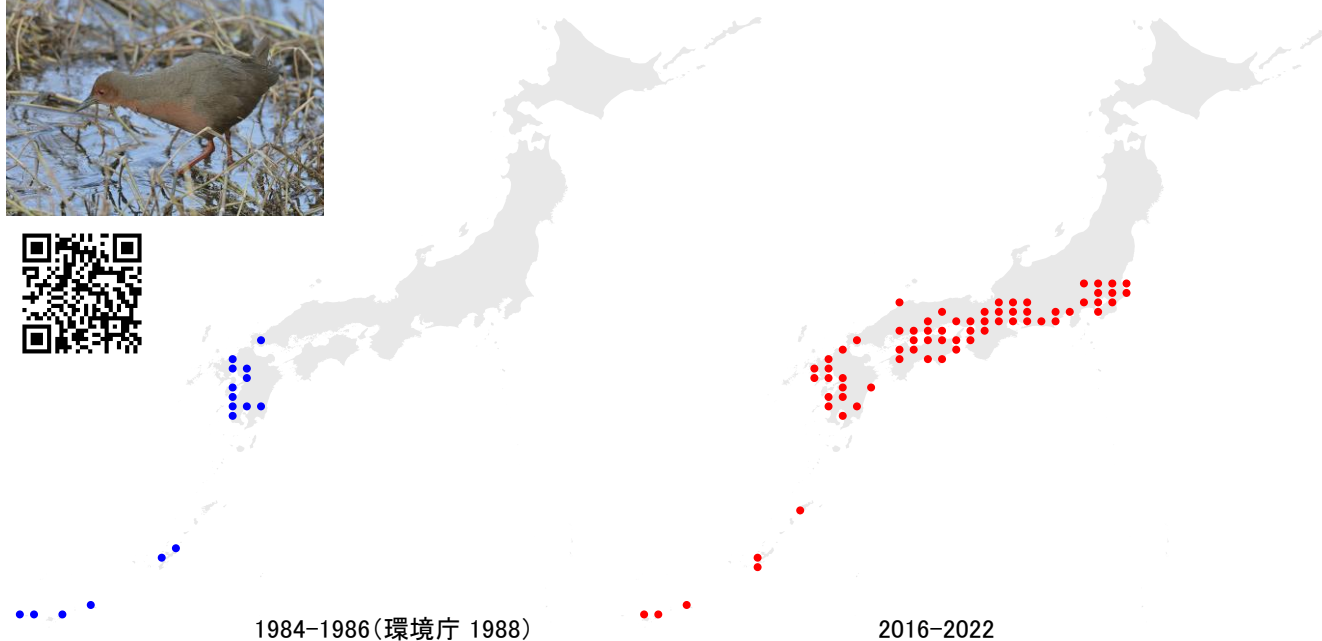
北海道では夏鳥として繁殖し(植田・植村 2021), 本州以南で越冬する。1980年代と比較して2010年代は本州の太平洋側と四国地方で分布が拡大しており, 中国地方では減少していた。

シロハラクイナ *Amauornis phoenicurus* 全長：32cm 体重：170-330g



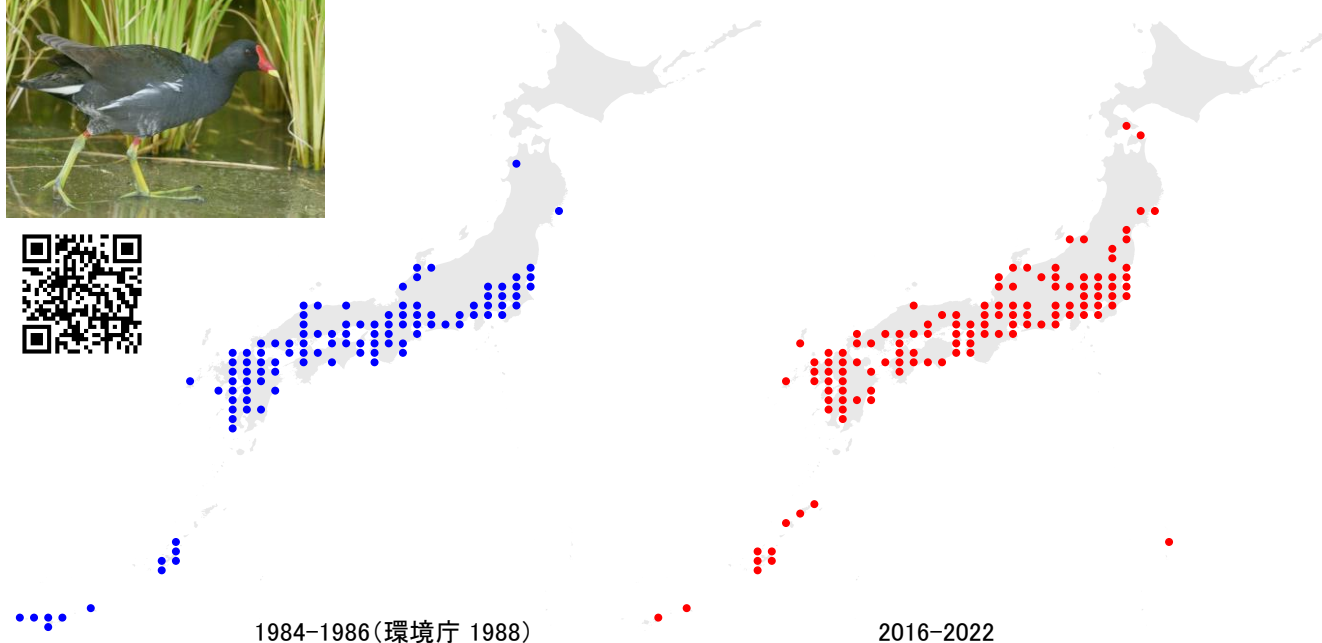
南西諸島に留鳥として生息する。以前から通常の分布域とは異なる九州以北に飛来し, 繁殖することがあり, 分布の北上が示唆されてきた(中村 1987)。今回も, 九州や近畿地方での記録があったが, 現在のところ, 定着した場所はない。

ヒクイナ *Porzana fusca* 全長：22.7cm 体重：77.5g



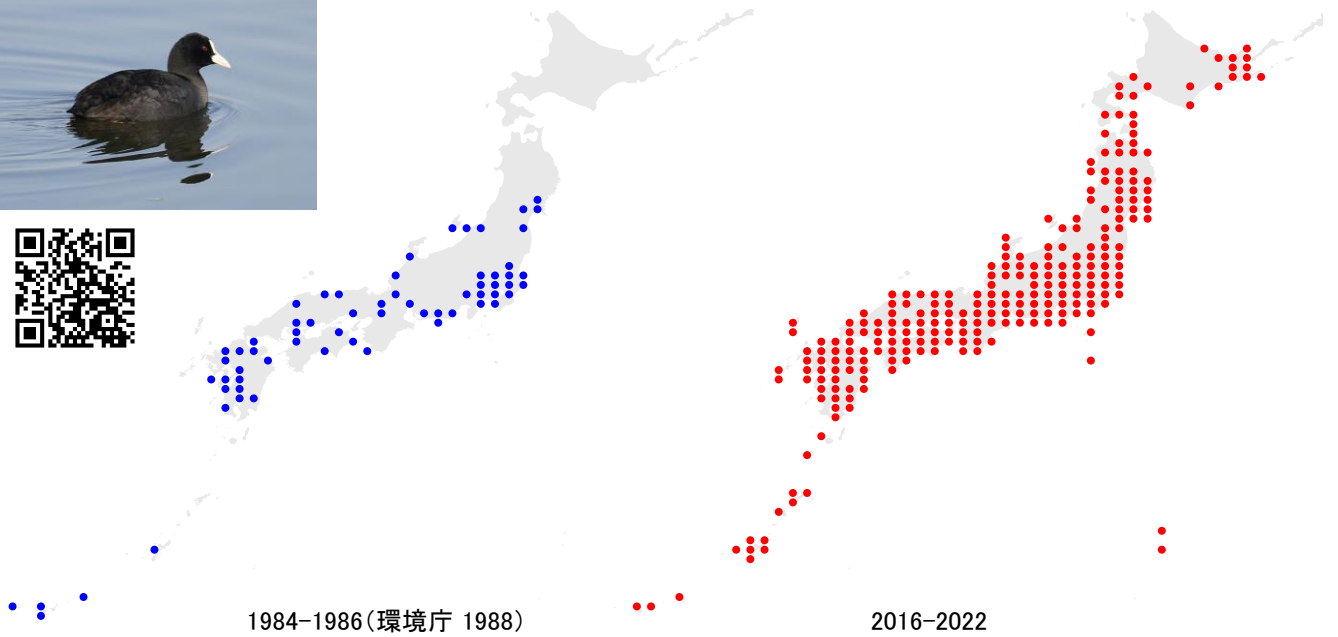
かつては九州地方と南西諸島以外では夏鳥とされていたが、2010年代は、関東以南の太平洋側に分布が拡大していた。この分布は同時期に行なわれた繁殖分布調査の結果と類似しており(植田・植村 2021), 1年中同じ場所に生息しているのかもしれない。

バン *Gallinula chloropus* 全長：32cm 体重：200-450g



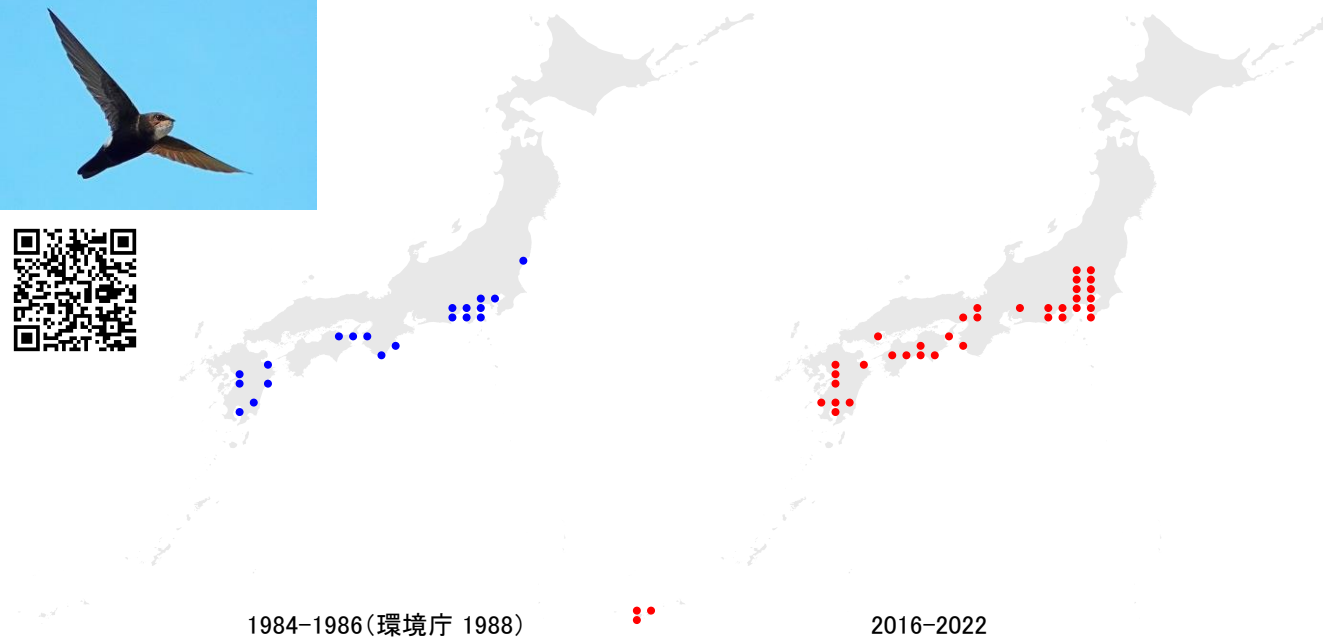
全国鳥類繁殖分布調査では分布も個体数も1970年代から一貫して減少している(植田・植村 2021)。しかし、越冬分布にはそれほど大きな変動は見られず、むしろ中部地方や東北地方では分布が拡大していた。冬期の寒さの緩和や積雪の減少が影響しているのかもしれない。

オオバン *Fulica atra* 全長：36-45cm 体重：♂610-1200g ♀610-1150g



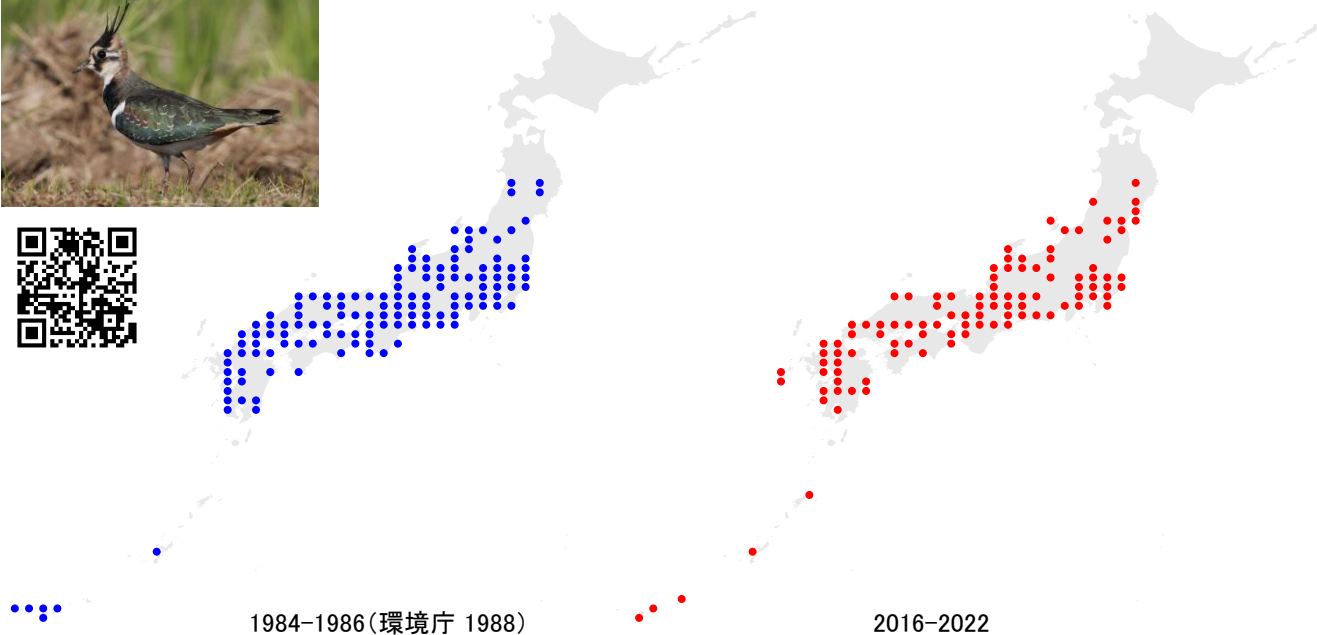
1980年代と比較して2010年代は分布が大幅に拡大しており、本州以南では幅広く生息し、北海道東部でも記録された。これは温暖化によって凍結しなくなった湖沼が増えたこと、中国などで越冬していた個体が日本で越冬するようになったことなどが考えられている(橋本 2013)。

ヒメアマツバメ *Apus nipalensis* 全長：15cm 体重：28.8±2.5g



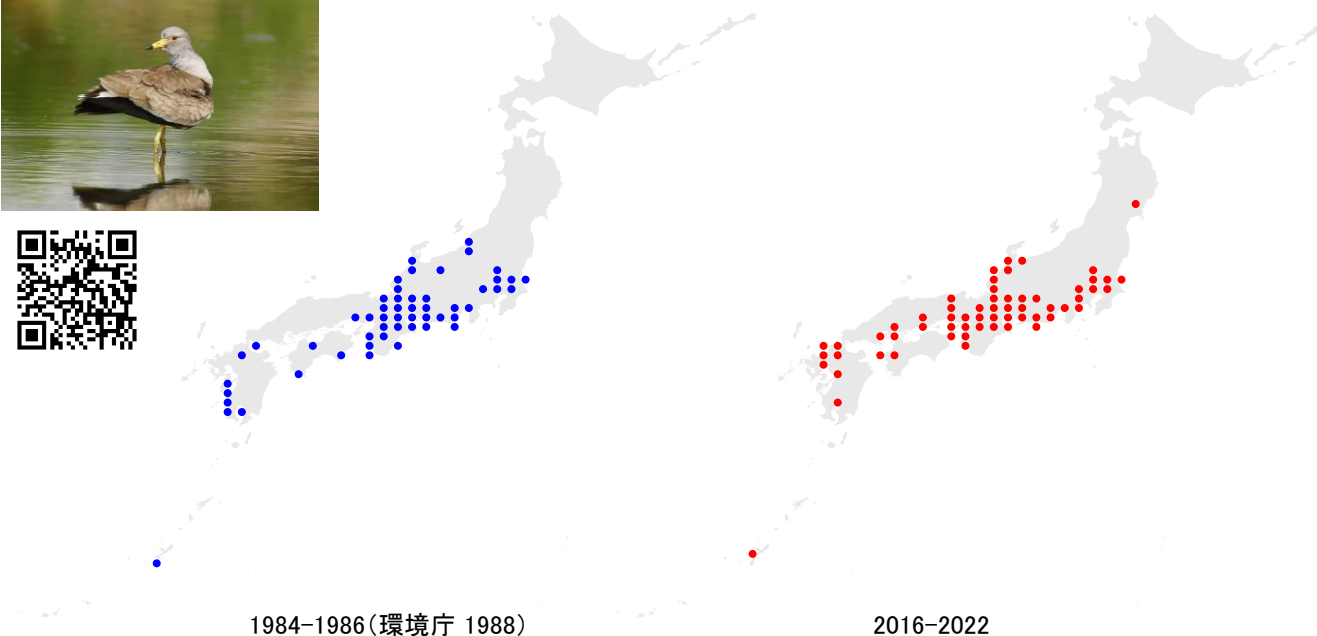
関東以南の太平洋側の地域に留鳥として生息する。1980年代から分布域に大きな変化はなかったが、分布の北限の関東の記録メッシュ数が増加していた。繁殖期の分布も同様の傾向にあるが、全国的には減少傾向にある可能性が指摘されている(植田・植村 2021)。

タゲリ *Vanellus vanellus* 全長：31cm 体重：180-270g



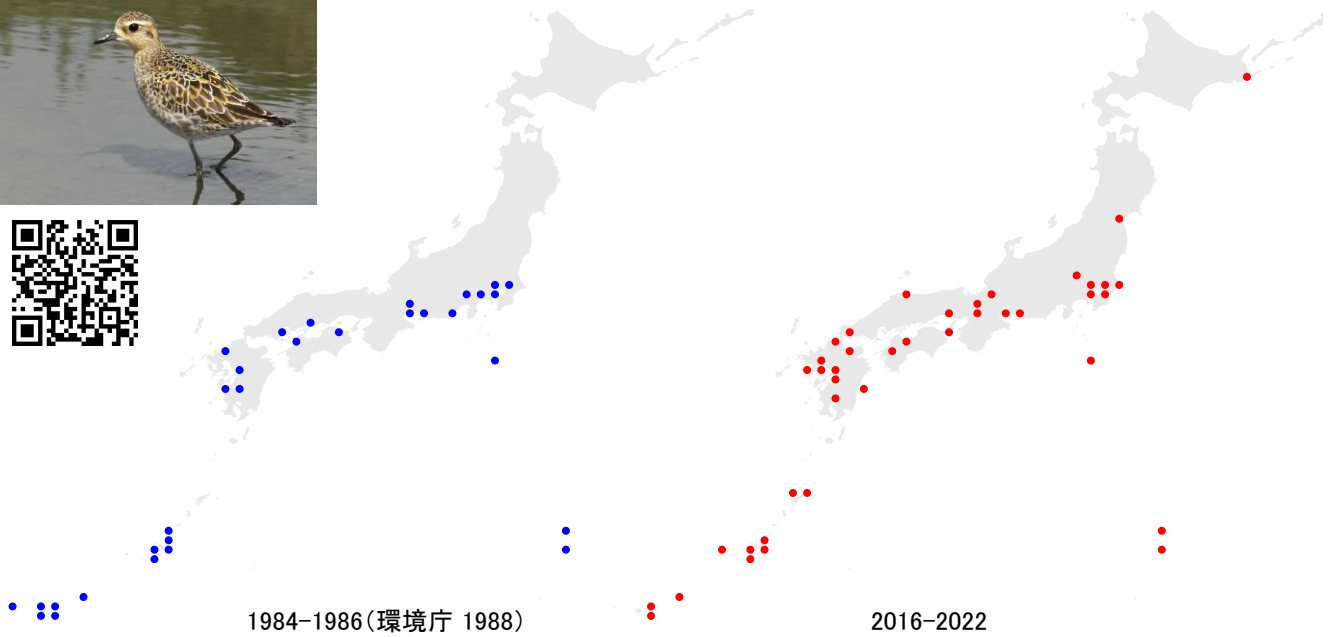
冬鳥として本州以南の水田地帯に渡来する。1980年代と2010年代で記録メッシュ数は2割弱減少した。減少の一因として、水田面積の減少等による生息環境の悪化が考えられる(環境省自然環境局生物多様性センター 2020)。

ケリ *Vanellus cinereus* 全長：♂34.2cm ♀33.6cm 体重：♂280.1g ♀266.6g



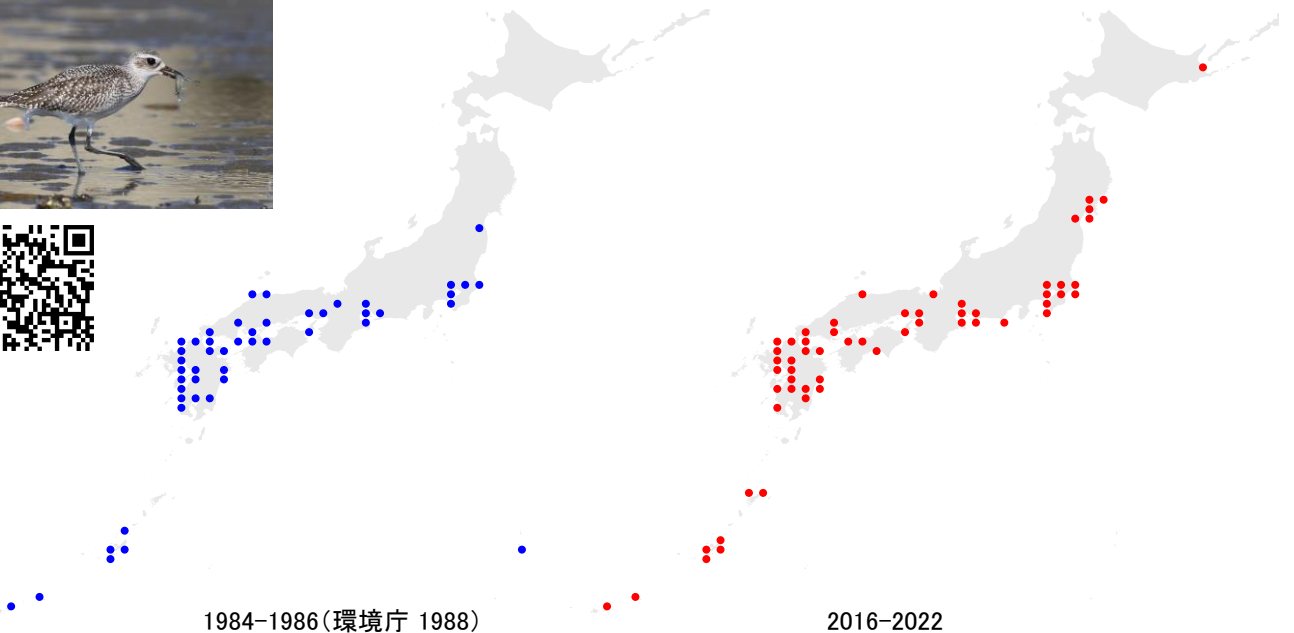
主に本州以西の水田や農耕地に留鳥として生息する。1980年代と2010年代で記録メッシュ数に大きな変化はなく、分布にも大きな変化はなかった。繁殖期の分布は広がっているが、減少している地域もあり、地域によって異なっていた(植田・植村 2021)。

ムナグロ *Pluvialis fulva* 全長:22.2-25.9cm 体重:93.8-177.4g



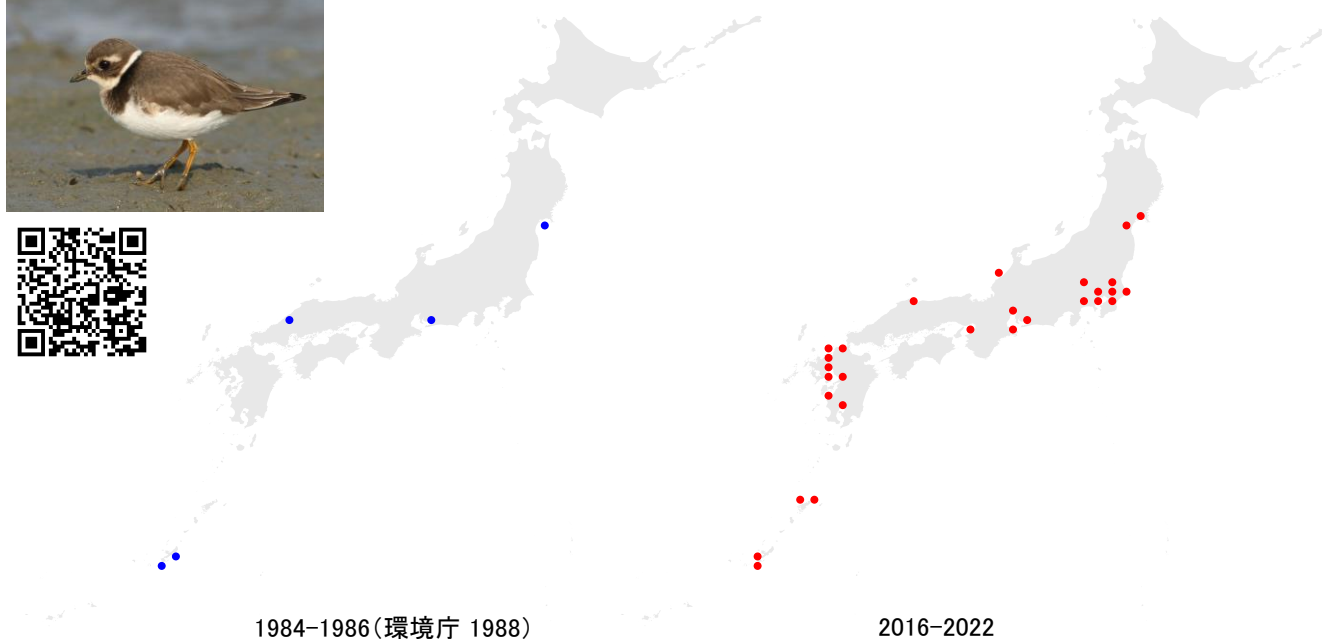
旅鳥として、春と秋に水田や農耕地、干潟などに渡来するが、主に本州以南で少数が越冬している。越冬期の分布は、西日本での記録が増えたため、1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増加していた。

ダイゼン *Pluvialis squatarola* 全長: 29cm 体重: 180-350g



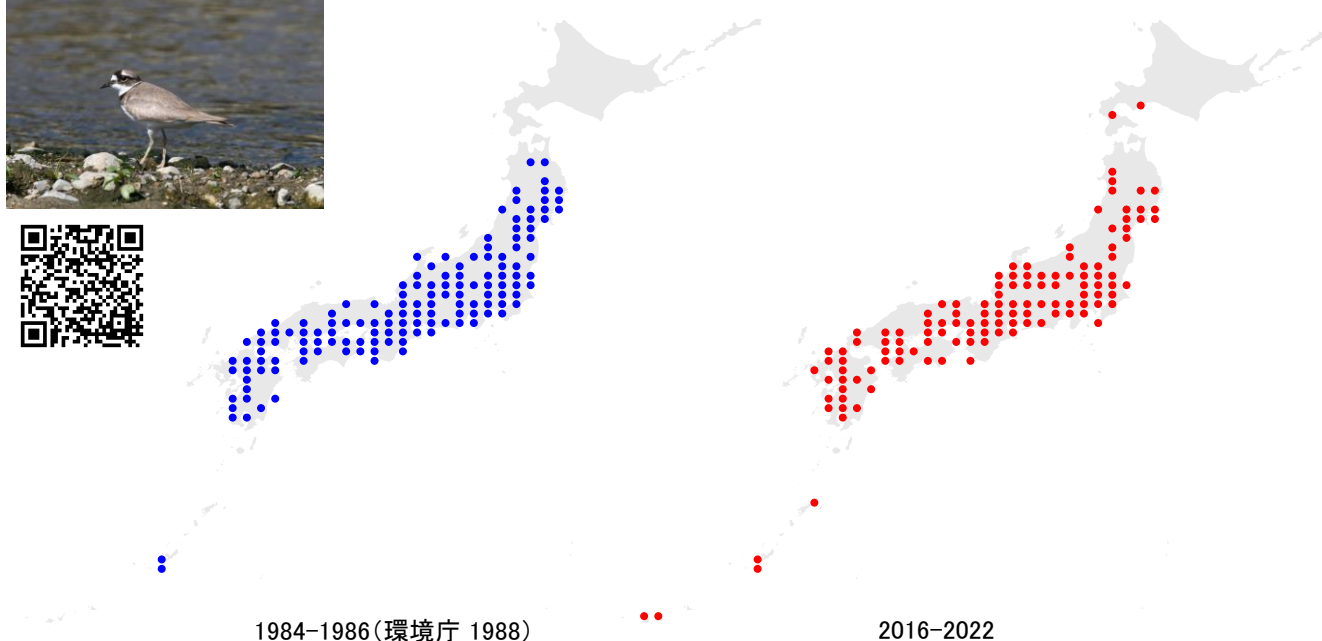
冬鳥または旅鳥として干潟や砂浜に渡来する。春、秋の個体数は減少傾向にあるが、越冬期は変化が少ない(環境省自然環境局生物多様性センター 2020)。北海道や東北で記録数が増えたため、1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増加し、分布は北よりに広がっていた。

ハジロコチドリ *Charadrius hiaticula* 全長: 18-20cm 体重: 53-60g



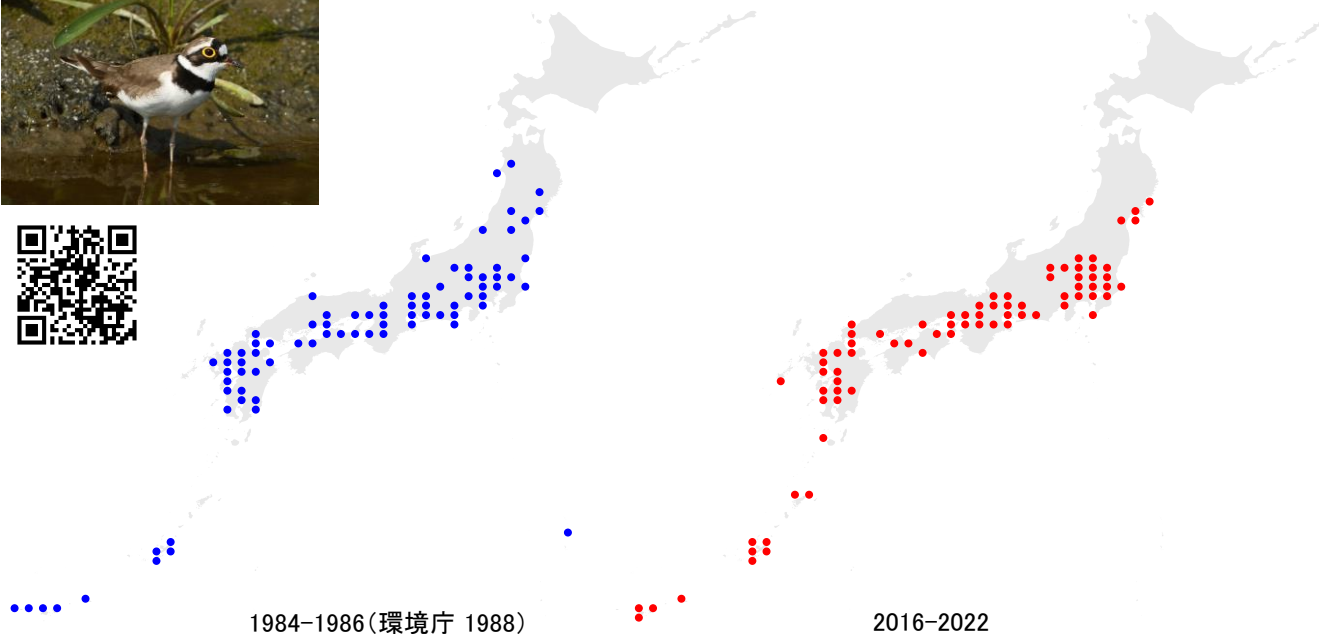
冬鳥または旅鳥として、干潟や水田に少数が渡来する。各地で記録が増えたため、1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増加していた。近年は観察記録が増加傾向にある。

イカルチドリ *Charadrius placidus* 全長: 19.7-22.2cm 体重: ♂63.6±3.3g ♀68.1±4.2g



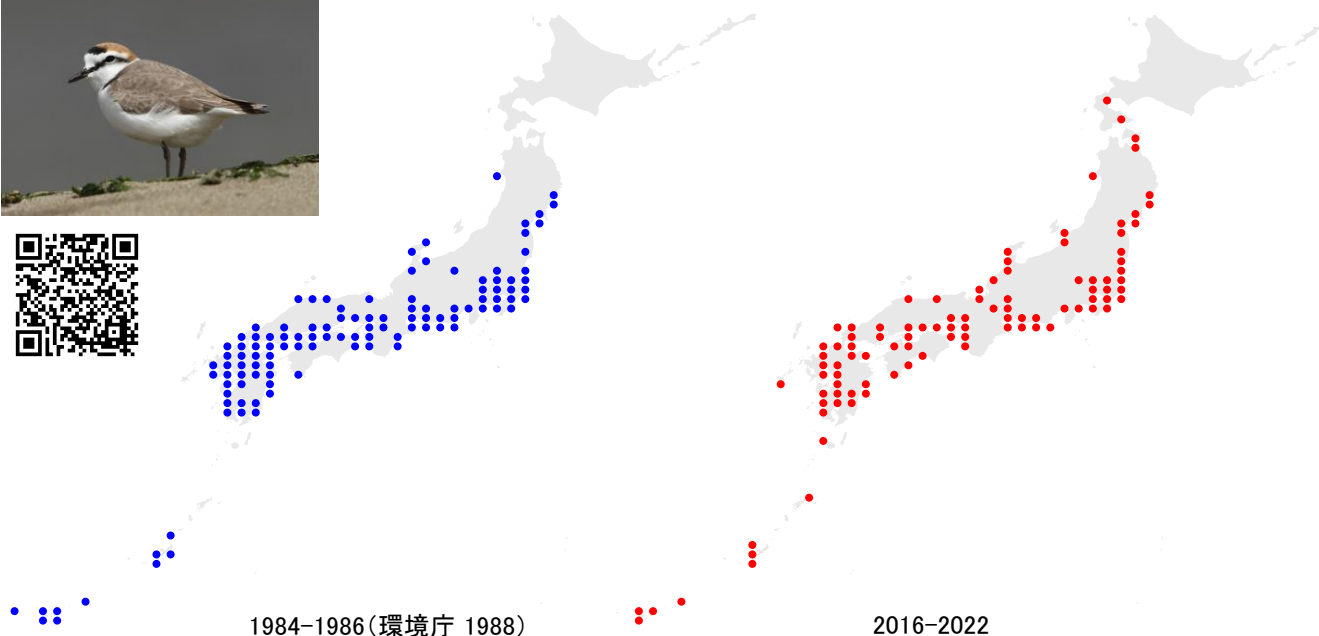
留鳥として全国の河川の河原などに生息する。越冬期は下流域に移動したり、水田地帯でも見られるようになる。1980年代と2010年代で記録メッシュ数はわずかに減少していたが、北海道や南西諸島で記録され、分布は広がった。

コチドリ *Charadrius dubius* 全長：14-17cm 体重：♂36.8g ♀38.4g



夏鳥として全国の砂浜、河原、造成地、農耕地などに渡来する。越冬期は主に水田に生息する(Kasahara et al. 2020)。1980年代と2010年代で、東北や日本海側での記録が減ったため、記録メッシュ数はわずかに減少していた。

シロチドリ *Charadrius alexandrinus* 全長：15.0-17.5cm 体重：32-56g



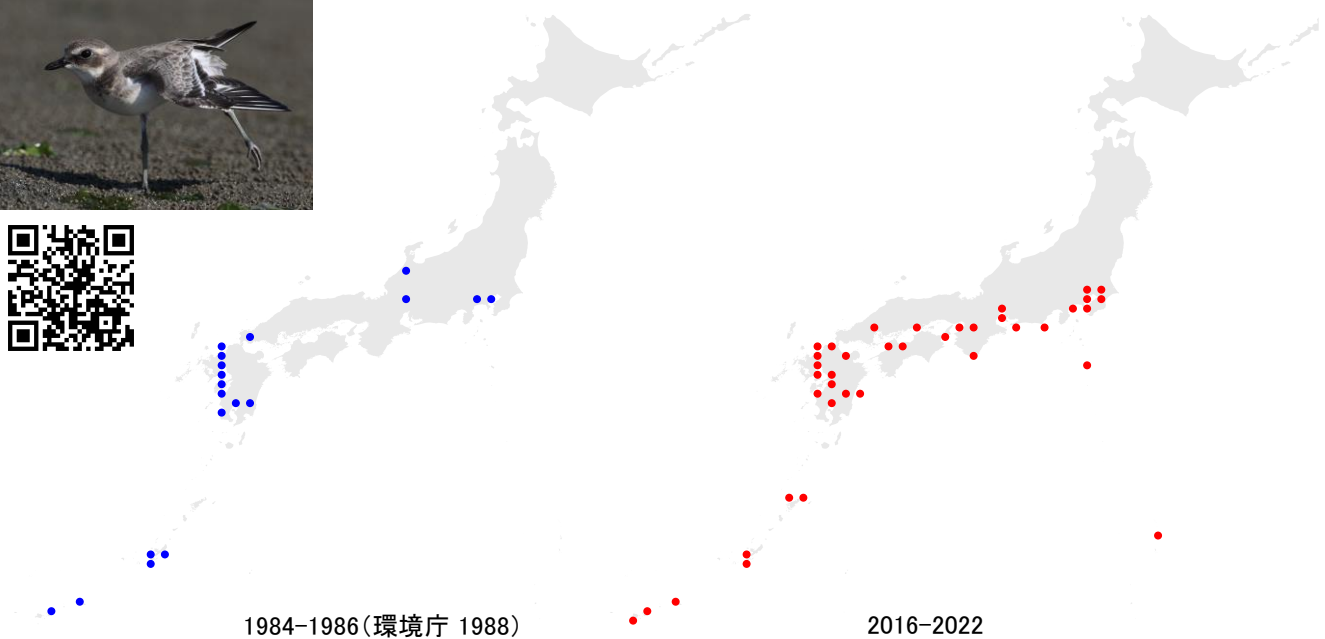
全国の海岸付近に生息する留鳥。繁殖後、越冬地へ移動する個体もいるが、ほとんどの越冬地は国内である。1980年代と2010年代で記録メッシュ数はやや減少した程度だが、個体数は激減しており(環境省自然環境局生物多様性センター 2020)、今後の分布の縮小も懸念される。

メダイチドリ

Charadrius mongolus

全長：17.8-20.7cm

体重：45.0-88.1g



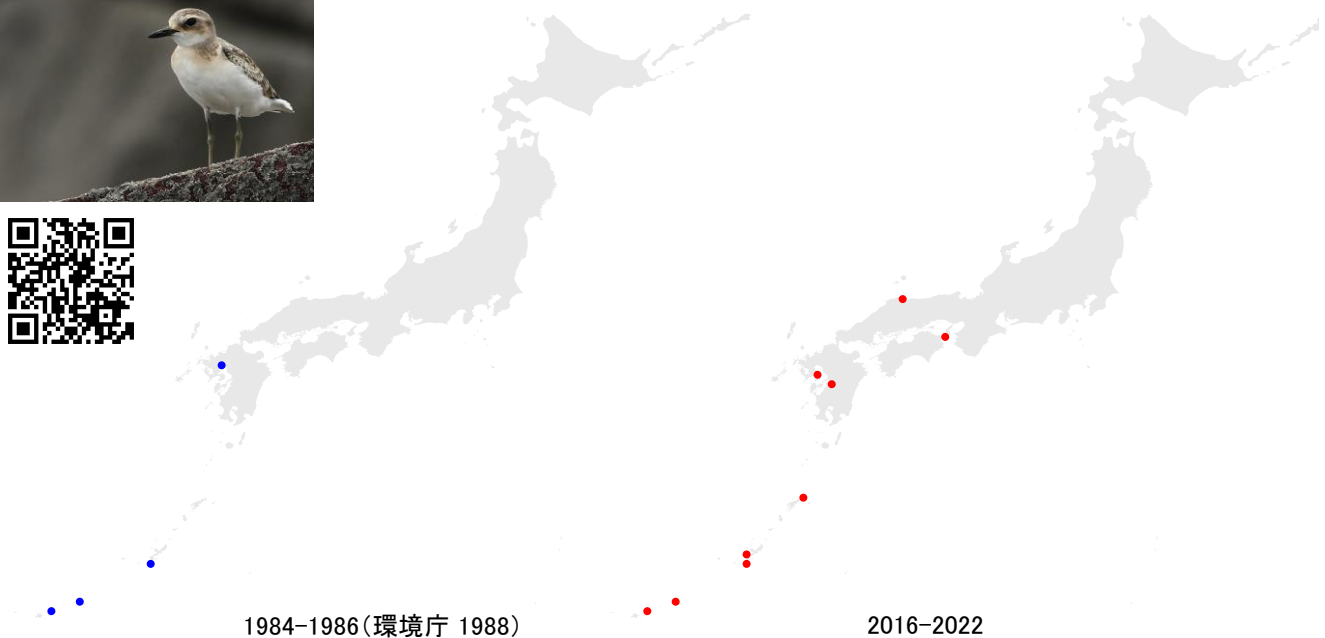
春と秋に干潟などで見られる旅鳥。関東以西の記録が増えたため、1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増加した。越冬個体は増加傾向にあると考えられる。

オオメダイチドリ

Charadrius leschenaultii

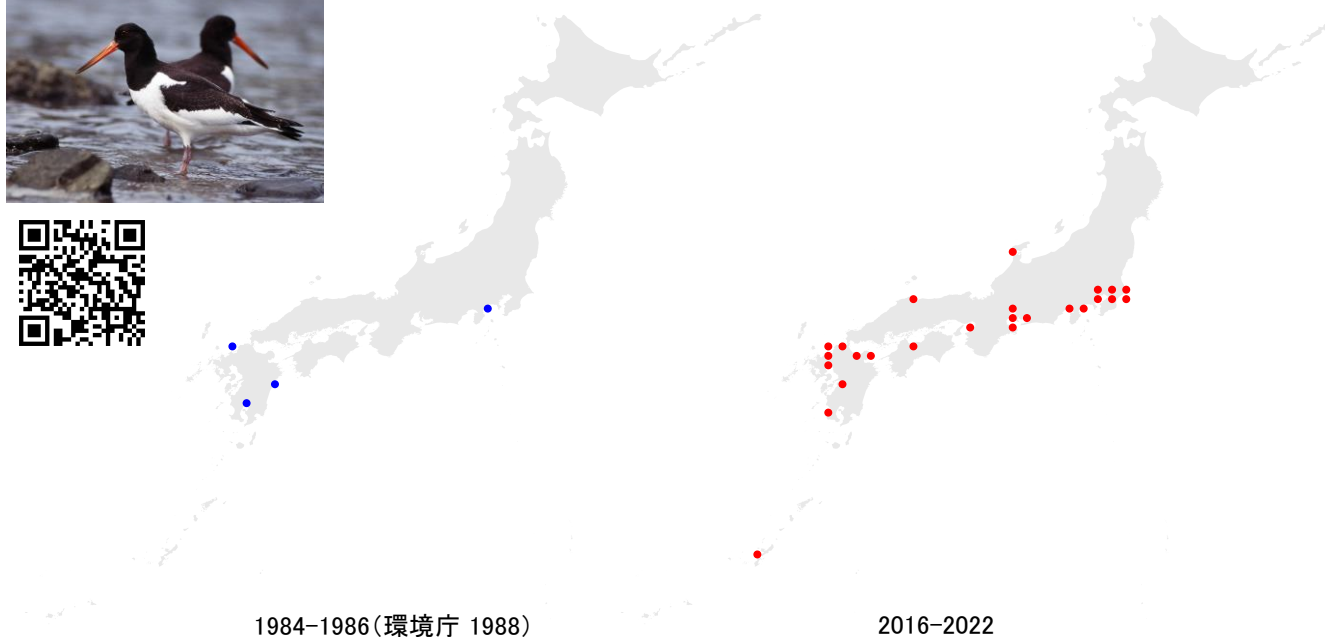
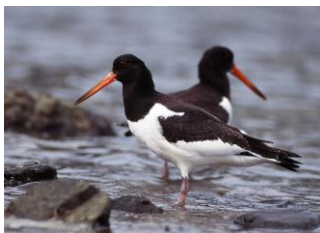
全長：22-25cm

体重：73-100g



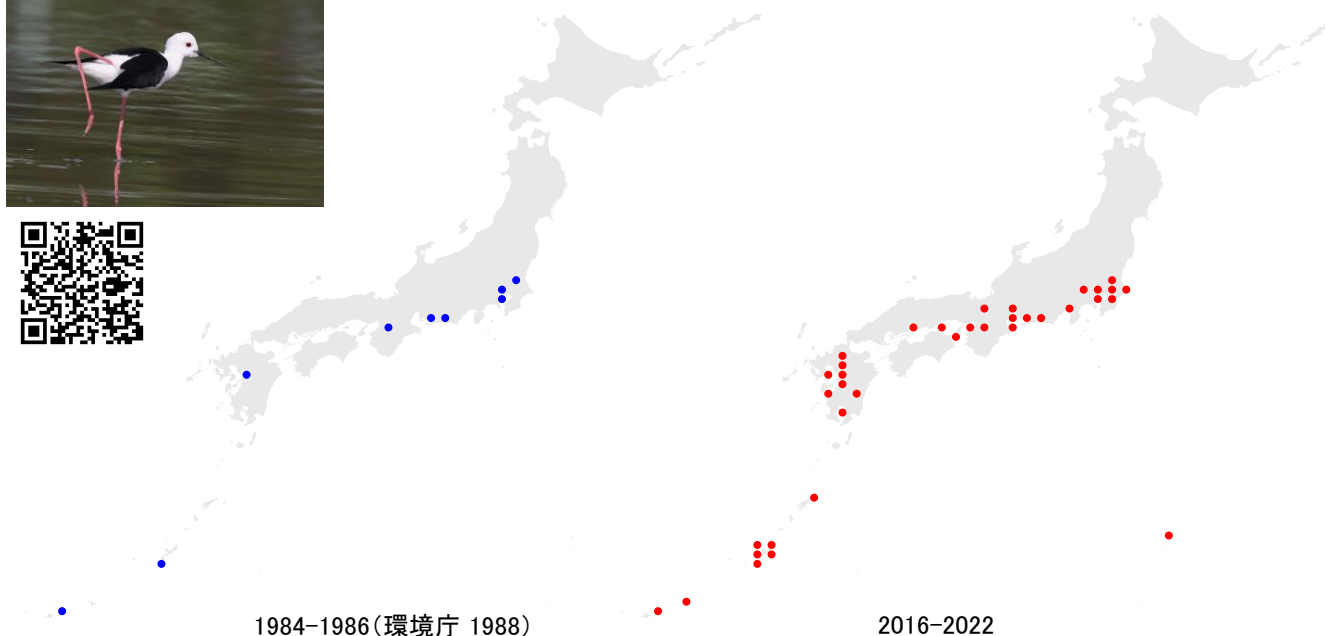
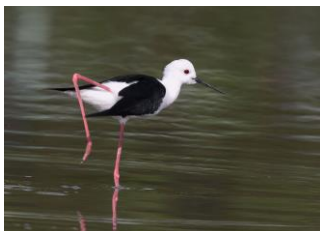
旅鳥として干潟や砂浜などに少数が渡来する。1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増加したが、もともと記録が少ないため、分布に変化があったかははっきりしない。近年の越冬期の個体数も増減はない(環境省自然環境局生物多様性センター 2020)。

ミヤコドリ *Haematopus ostralegus* 全長: 41.8-48.0cm 体重: 487.5-642.8g



1980年代は冬鳥または旅鳥として少数が渡来する程度であったが、近年、東京湾、伊勢湾を中心に個体数が増加しており(澤 2016)、1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増加した。個体数増加の原因はよくわかっていない。

セイタカシギ *Himantopus himantopus* 全長: 35.0-40.0cm 体重: 112-223g



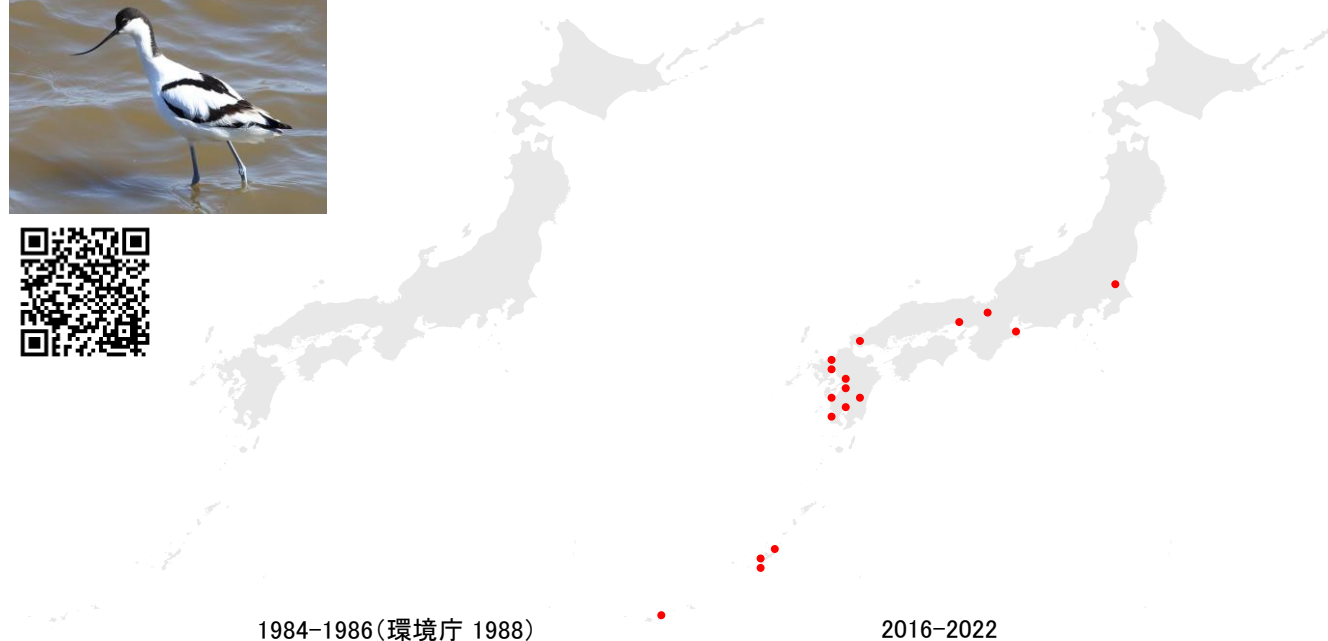
愛知県や千葉県で繁殖が確認されて以降、東京湾、伊勢湾、九州などを中心に局所的に繁殖し、記録が増えたため、1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増加した。かつては旅鳥であったが、現在は、一部が留鳥化している(松井ほか 2022)。

ソリハシセイタカシギ

Recurvirostra avosetta

全長: 43cm

体重: 225-397g



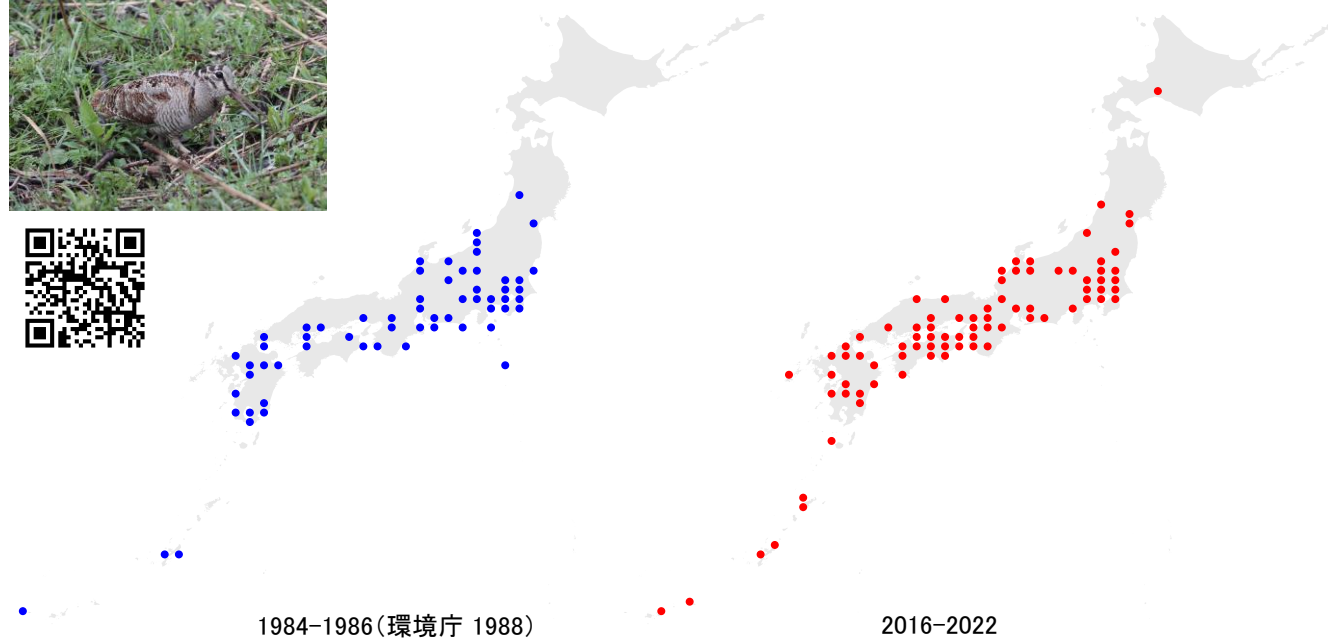
アフリカから中国南部にかけて越冬し、日本にはまれな旅鳥や冬鳥として干潟や河口などに渡来する。近年、関東以西で記録が増えており、2010年代の記録メッシュ数は増加していた。

ヤマシギ

Scolopax rusticola

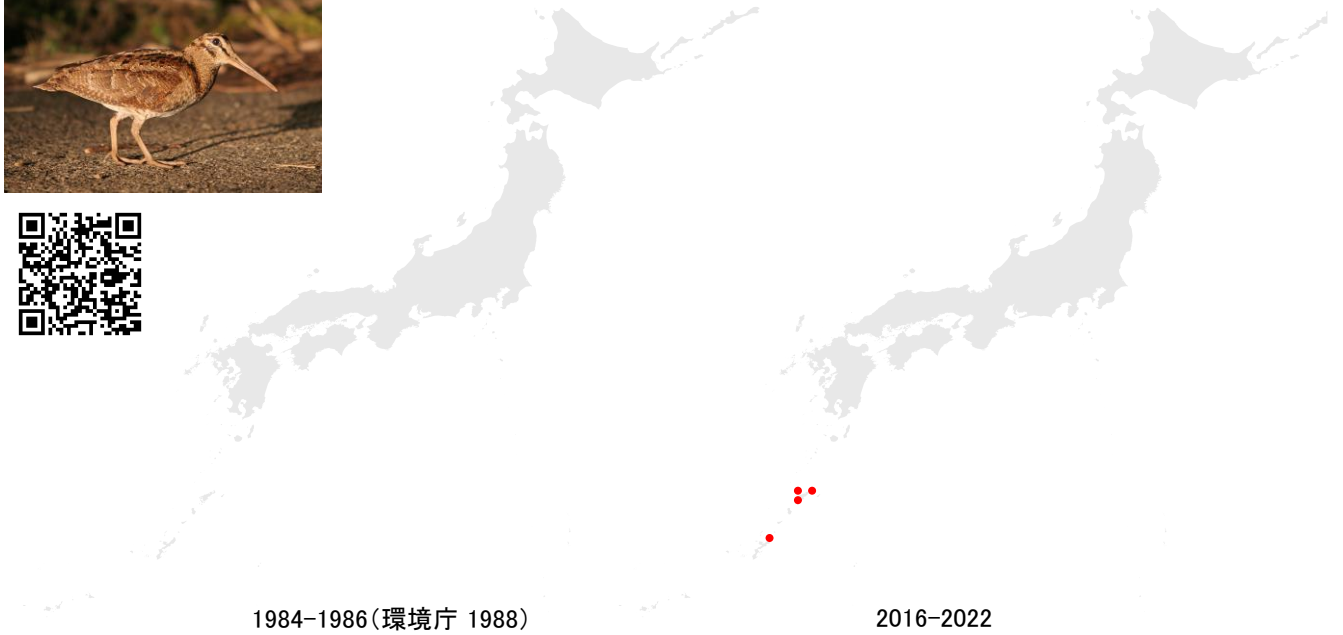
全長: 32.0-34.5cm

体重: 271-375g



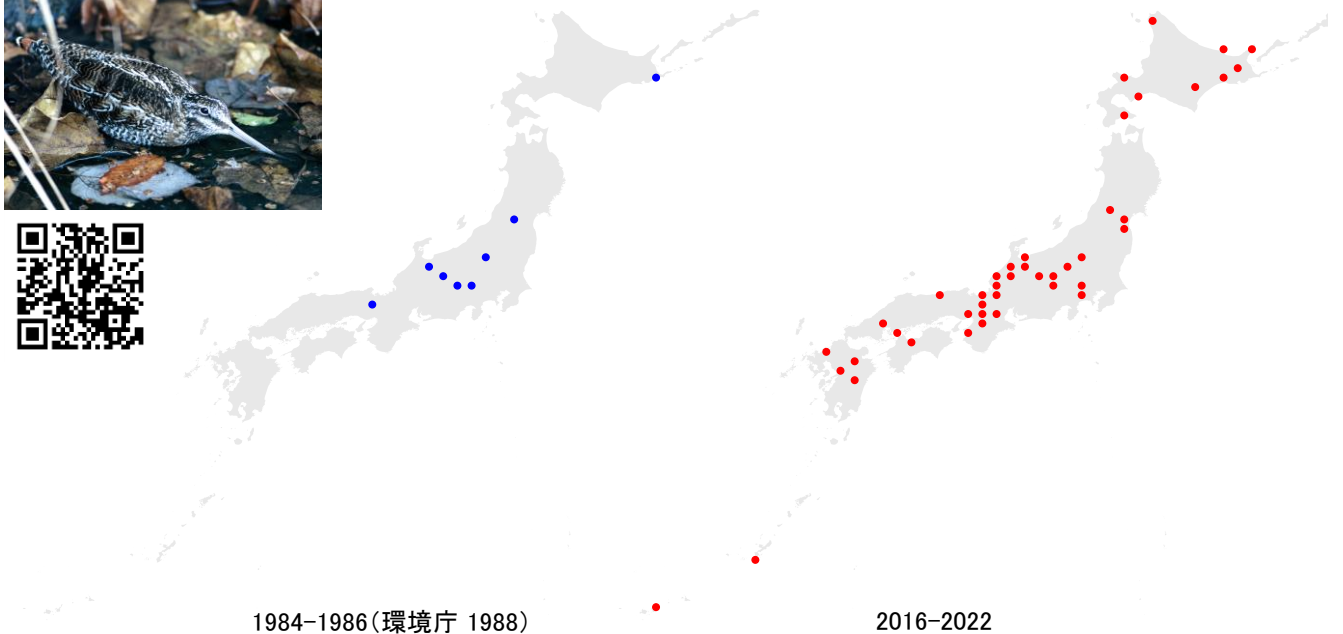
本州中部以北の林で繁殖し、越冬期は暖地へ移動する。北海道や南西諸島、関西で記録が増えたため、1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増加したが、個体数は減少している可能性がある(小田谷 2014)。

アマミヤマシギ *Scolopax mira* 全長：36cm 体重：400-500g



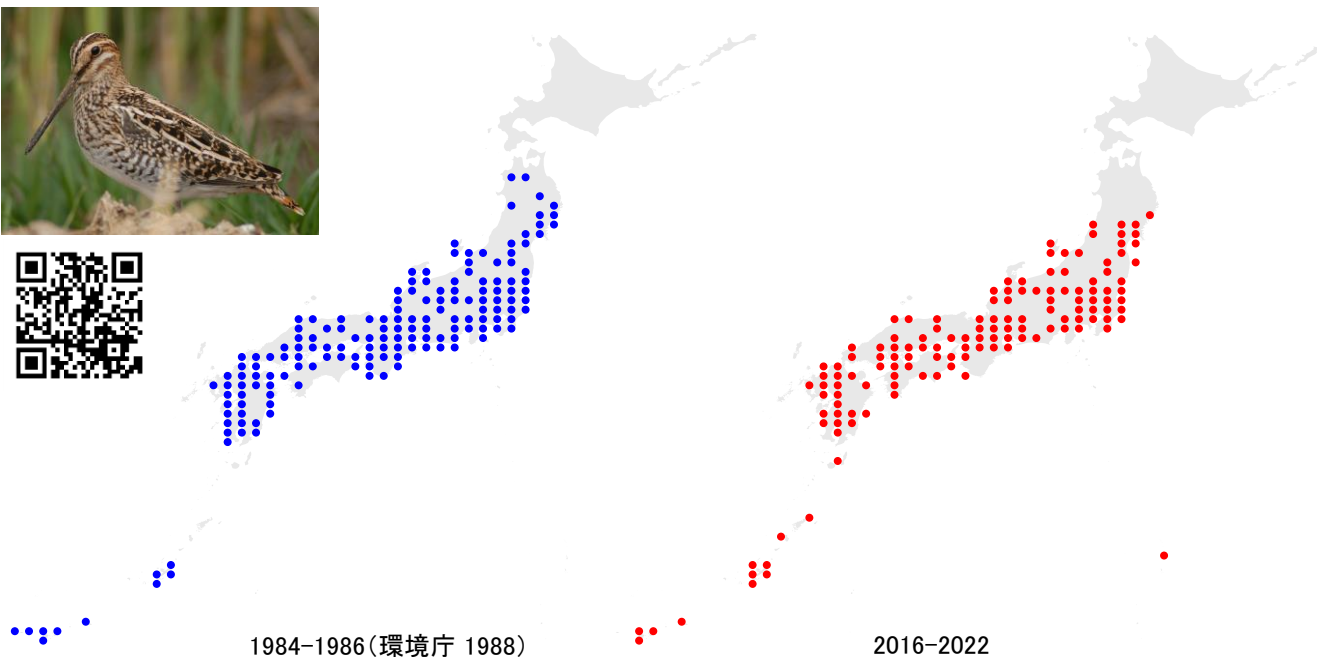
奄美諸島、沖縄本島、慶良間諸島に生息する。奄美大島などの繁殖個体は、一部は南へ渡る。1980年代に奄美大島にマングースが導入されて以降、個体数は減少したが、マングース駆除の成果で個体数は回復傾向にある(石田 2015)。1980年代は奄美での調査が行なわれておらず記録がなかった。

アオシギ *Gallinago solitaria* 全長：30cm 体重：127-245g



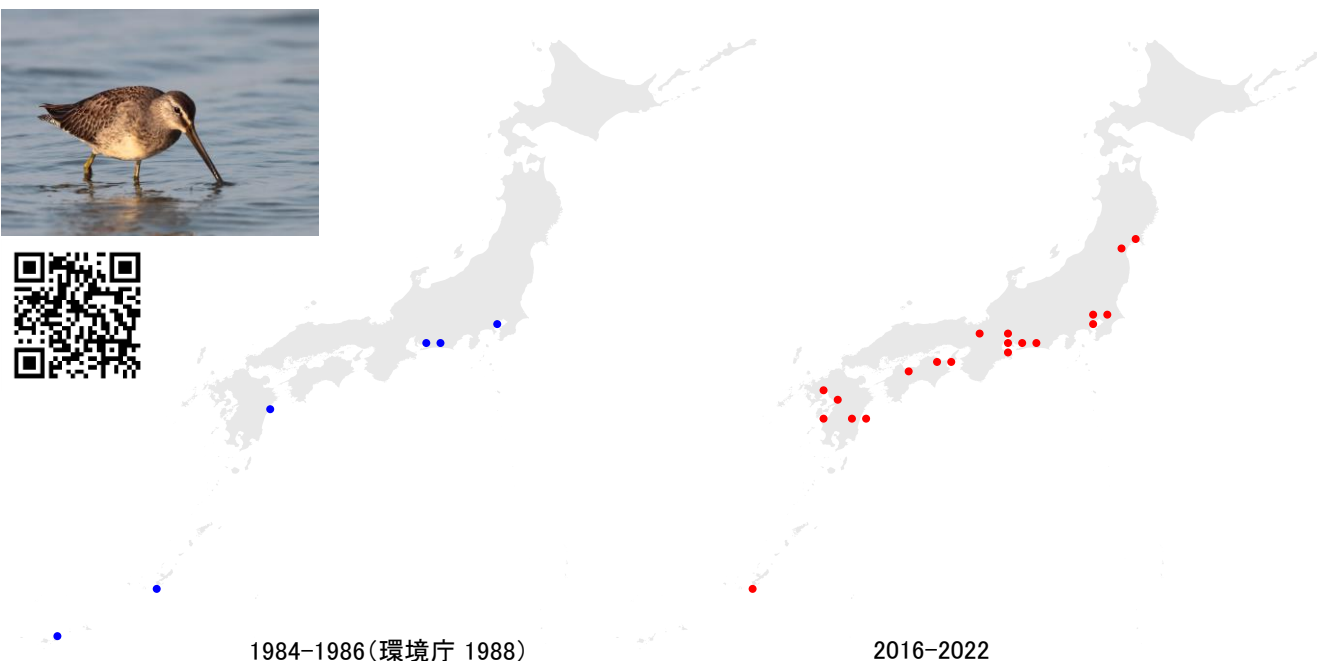
冬鳥として低地から山地の溪流や河川に渡来する。近年、生息環境が明らかになりつつあり(岸 2019)、観察例が増加したためか、1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増加した。観察方法がわかったため記録が増えたのか、実際に個体数が増加したり分布が拡大したりしているのかについてはよくわかっていない。

タシギ *Gallinago gallinago* 全長：24.2-28.9cm 体重：74.6-140.6g



冬鳥または旅鳥として、水田などの湿地に渡来する。1980年代と2010年代で記録メッシュ数や分布域に大きな変化はなかった。

オオハシシギ *Limnodromus scolopaceus* 全長：25-29cm 体重：90-135g



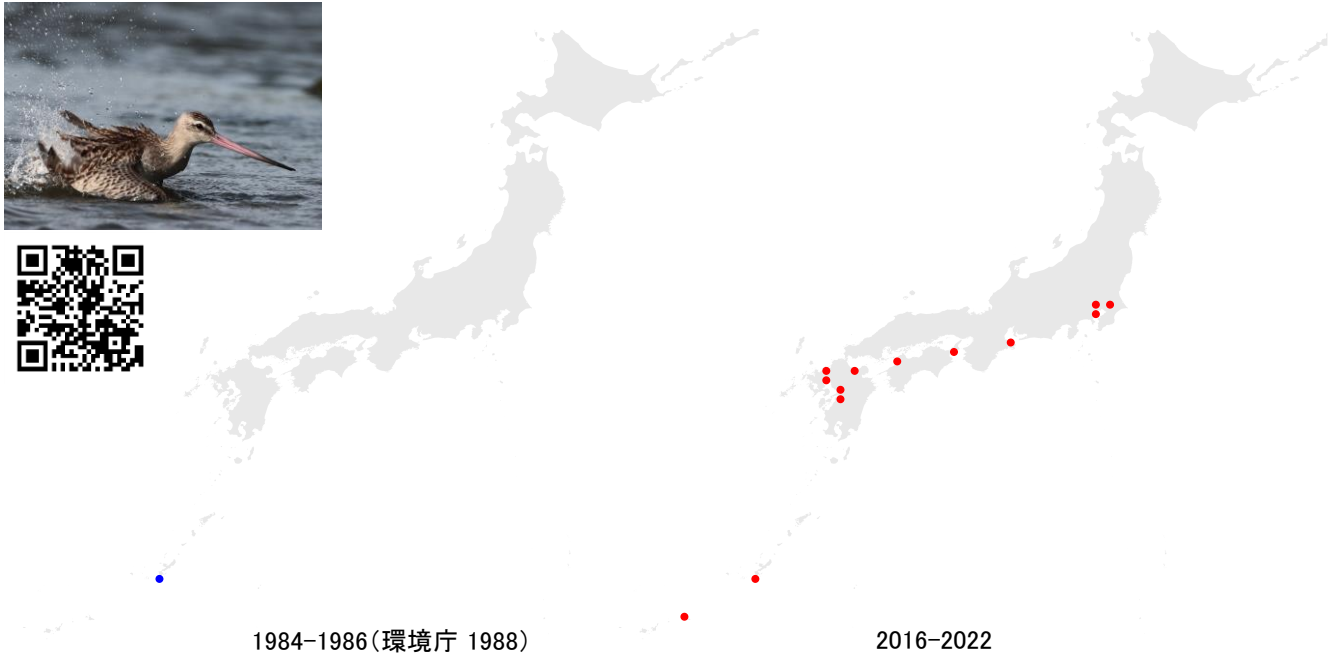
旅鳥または冬鳥として渡来する。主に、太平洋側で記録が増えたため、1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増加した。

オオソリハシシギ

Limosa lapponica

全長：33-39cm

体重：187-438g



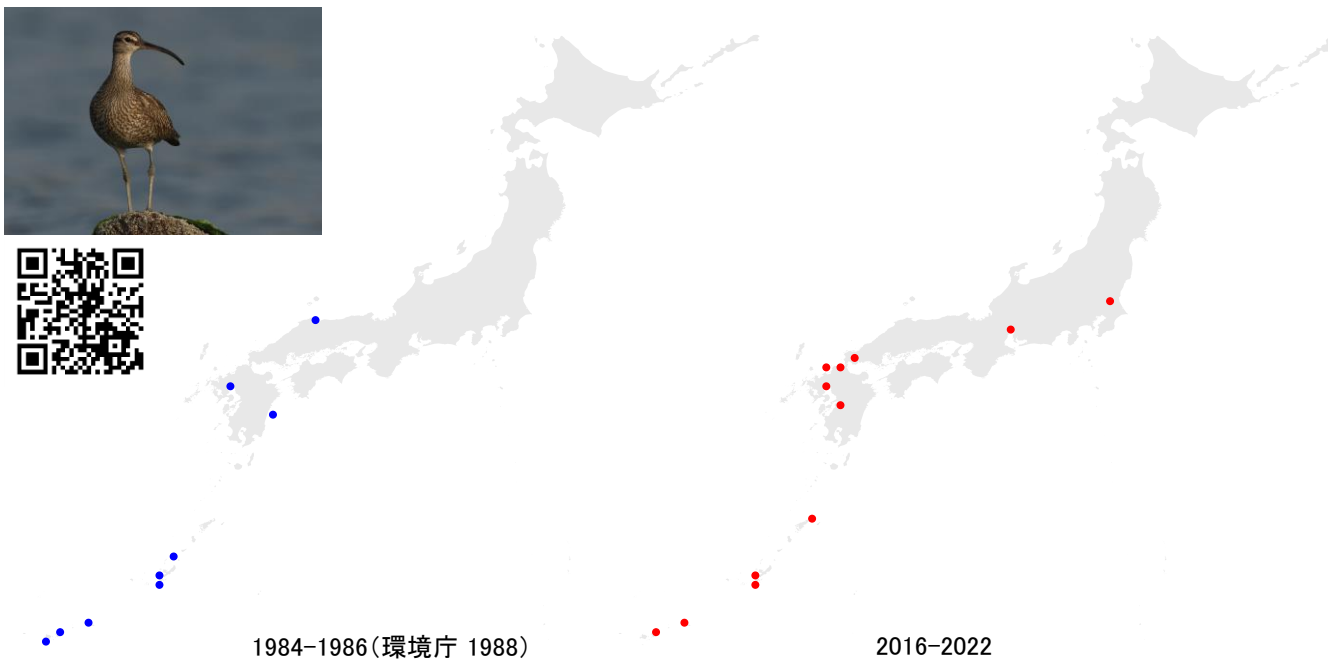
旅鳥として干潟などに渡来する。太平洋側での確認が増えたため、1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増加した。

チュウシャクシギ

Numenius phaeopus

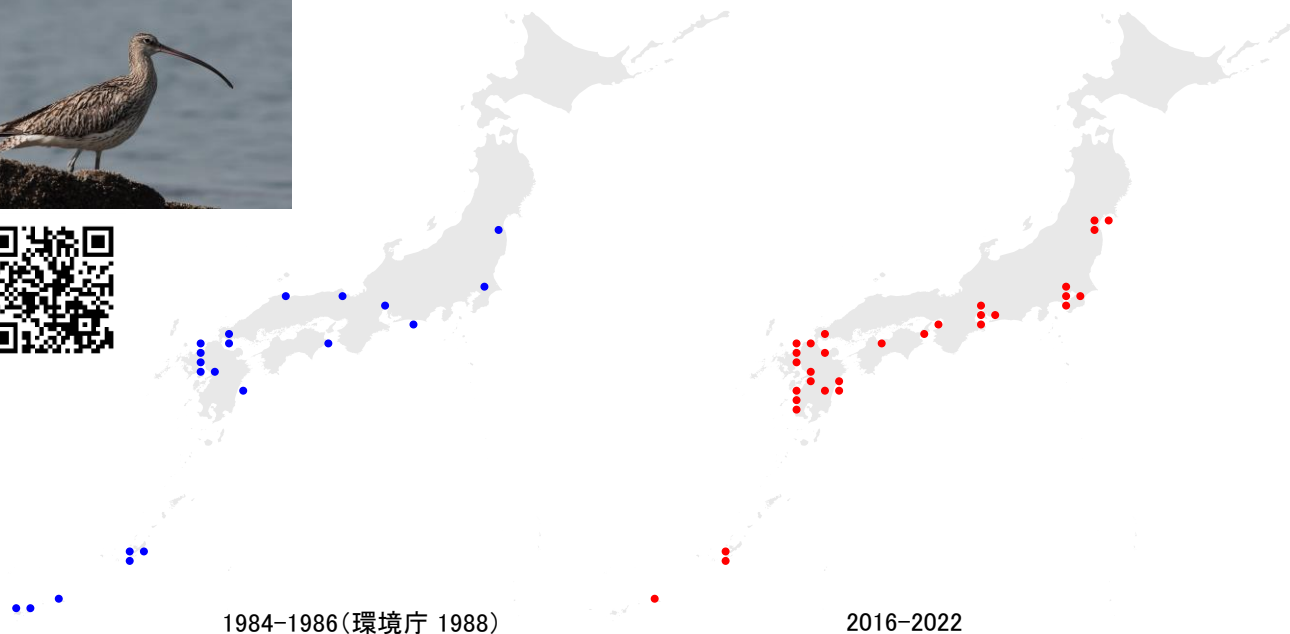
全長：39.6-44.6cm

体重：276.0-517.5 g



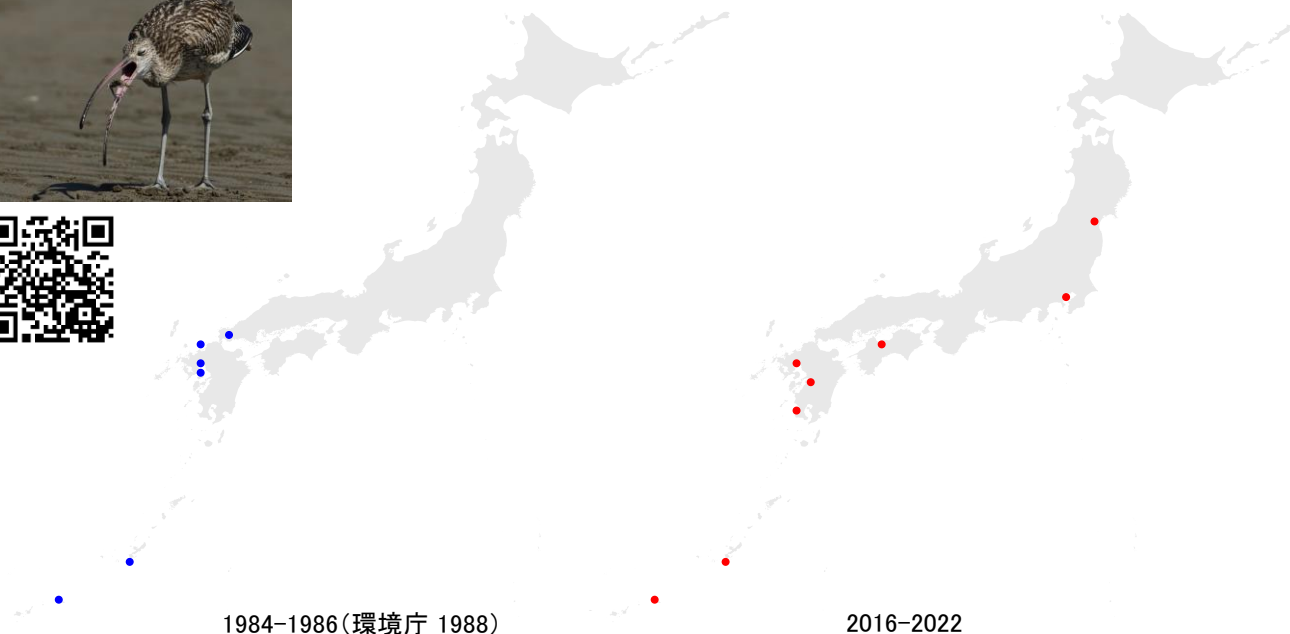
旅鳥として干潟や水田に渡来し、少数が主に南西諸島で越冬する。1980年代と2010年代では記録メッシュ数に大きな変化はなかったが、本土部の記録が増加した。

ダイシャクシギ *Numenius arquata* 全長：52-66cm 体重：555.8-1088.6g



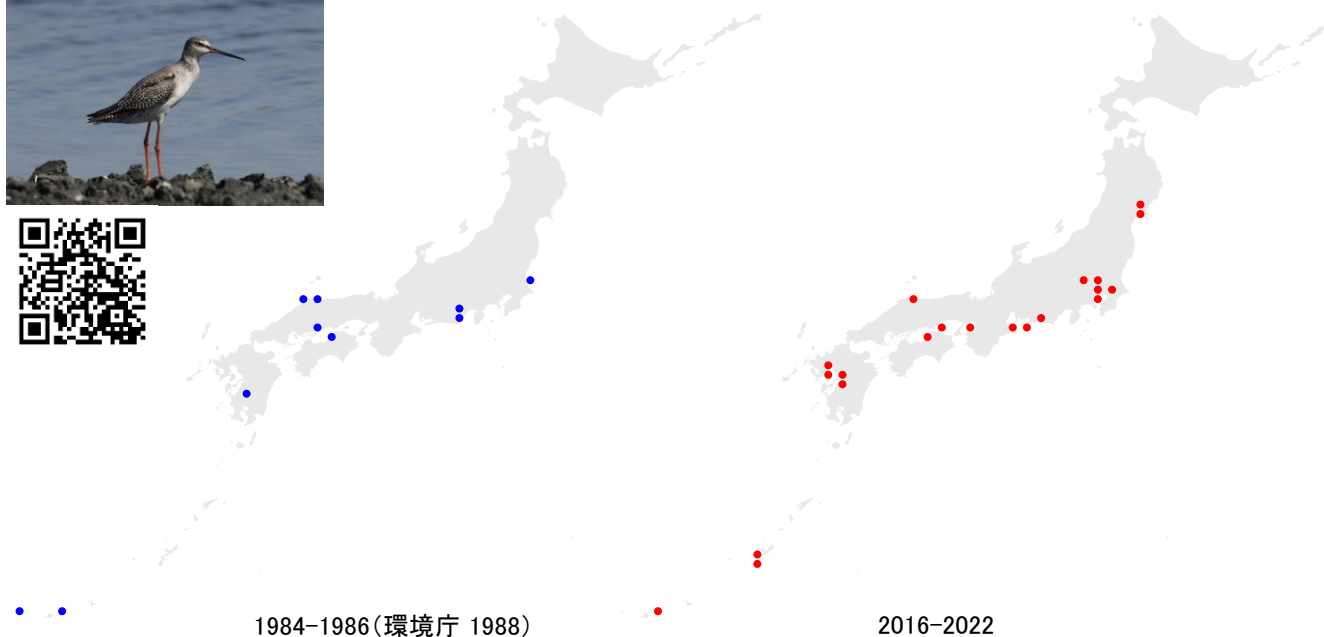
旅鳥または冬鳥として干潟などに渡来する。太平洋側や九州での確認が増えたため、1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増加した。

ハウロクシギ *Numenius madagascariensis* 全長：53.5-68.0cm 体重：740-1301g



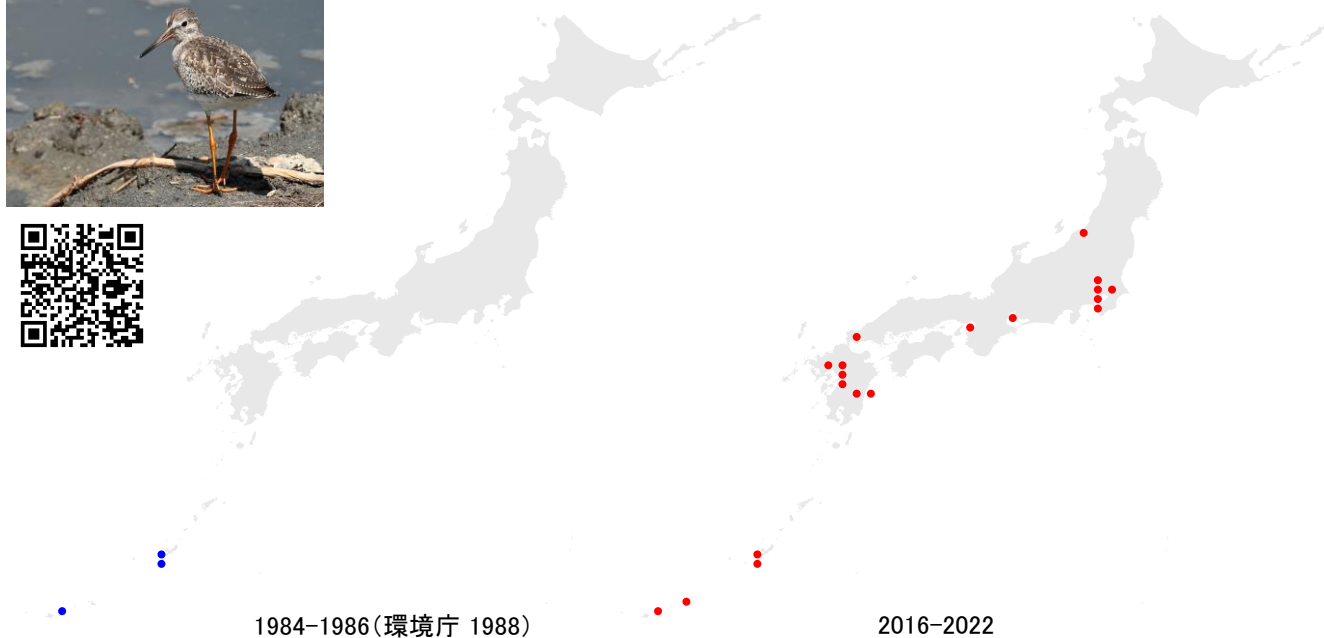
旅鳥または稀な冬鳥として干潟等に渡来する。2010年代には1980年代に記録のなかった関東や東北で記録されたが、もともと越冬個体数の少ない種であるため、分布に変化があったかははっきりしない。

ツルシギ *Tringa erythropus* 全長：30.5-33.7cm 体重：117-182.6g



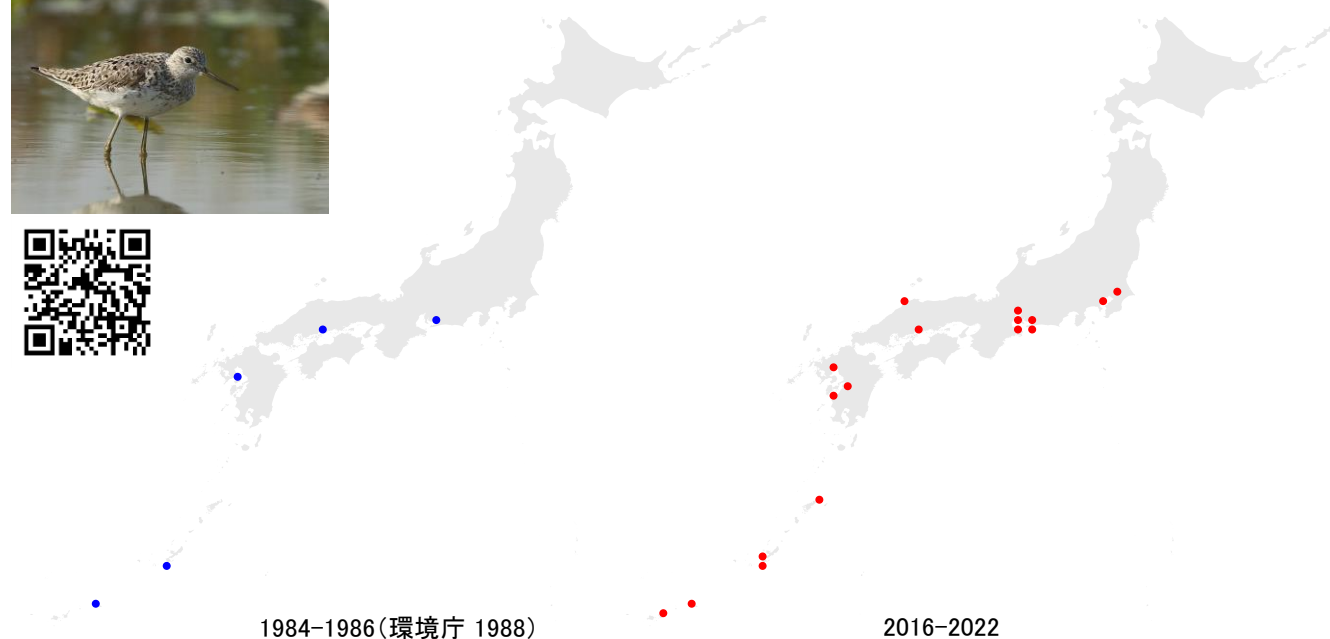
旅鳥として水田や蓮田、干潟などに渡来する。東北以南の本州太平洋側での確認が増えたため、1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増加し、北よりに分布は拡大した。

アカアシシギ *Tringa totanus* 全長：25.4-29.2cm 体重：105.8-157.5g



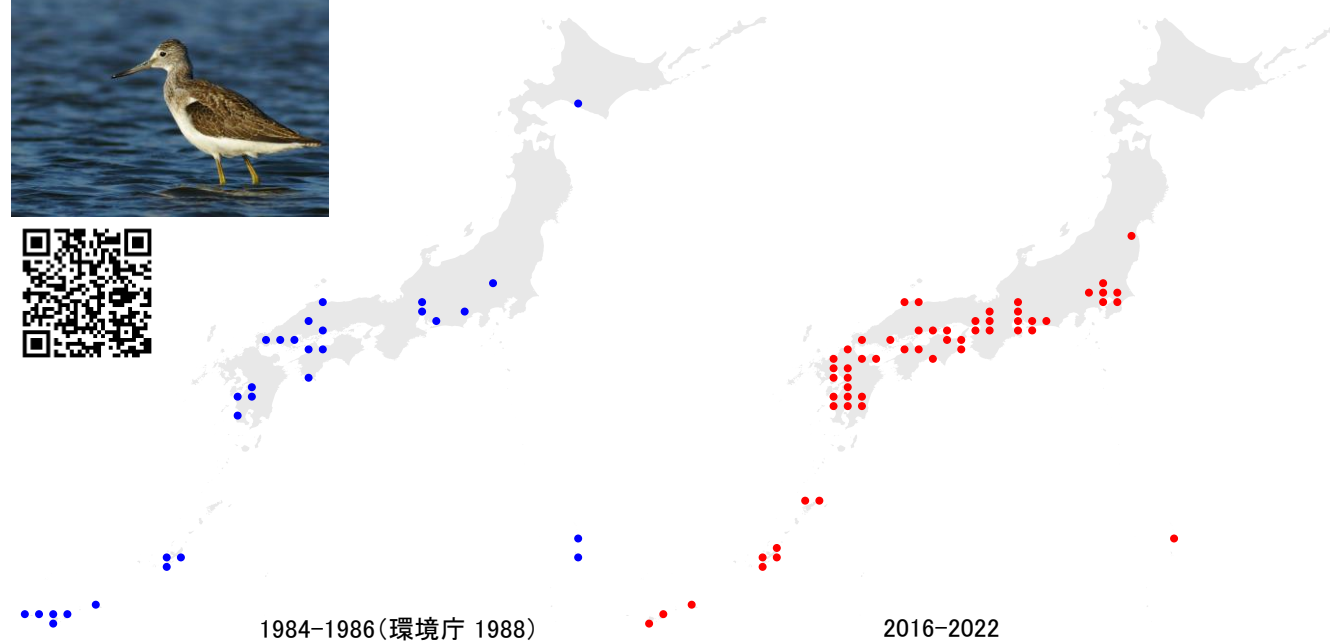
北海道東部で繁殖する以外では、主に旅鳥として干潟や水田に渡来する。南西諸島で少数が越冬する。関東と九州を中心に確認が増えたため、記録メッシュ数は増加し、分布も拡大した。モニタリングサイト1000の結果でも越冬個体数が増加していることが明らかになっている(環境省自然環境局生物多様性センター 2020)。

コアオアシシギ *Tringa stagnatilis* 全長：24cm 体重：55-120g



主に旅鳥として水田や干潟に渡来する。関東から南西諸島での確認が増えたため、1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増加したが、もともと記録が少ないため、分布に変化があったかははっきりしない。

アオアシシギ *Tringa nebularia* 全長：31.8-36.7cm 体重：147.8-223.9g



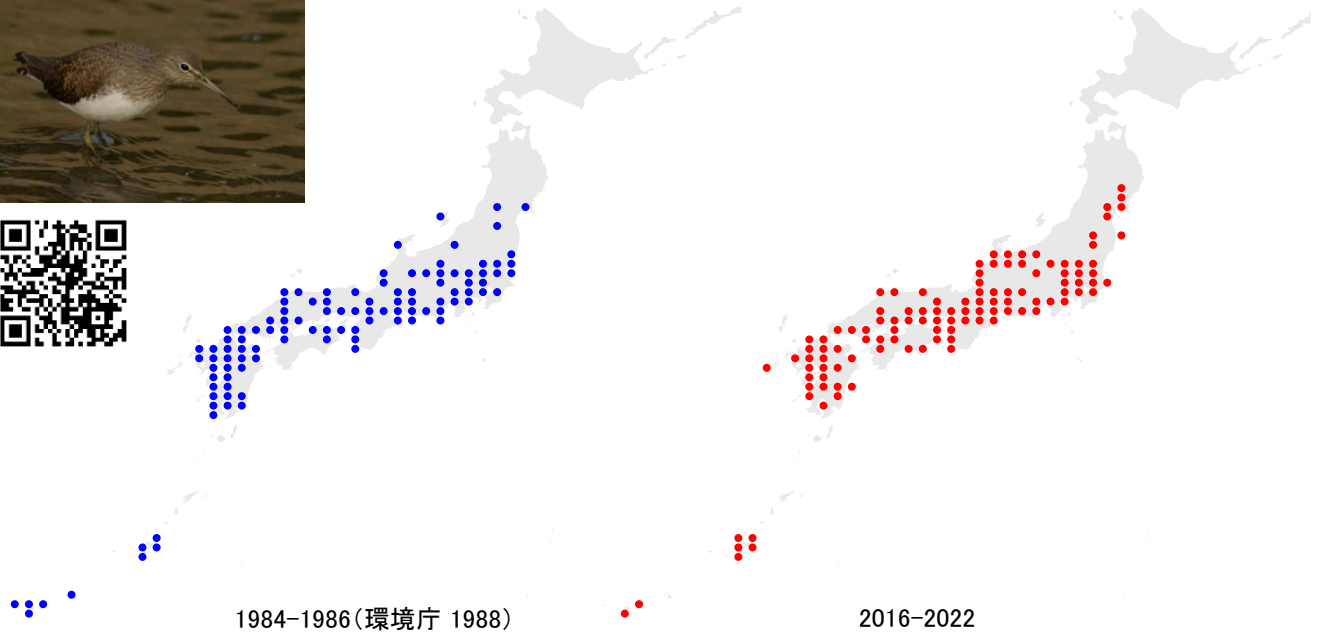
主に旅鳥として干潟や水田などに渡来し、少数は越冬する。関東から南西諸島での確認が増えたため、1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増加した。

クサシギ

Tringa ochropus

全長：22.7-25.4cm

体重：72.0-105.4g



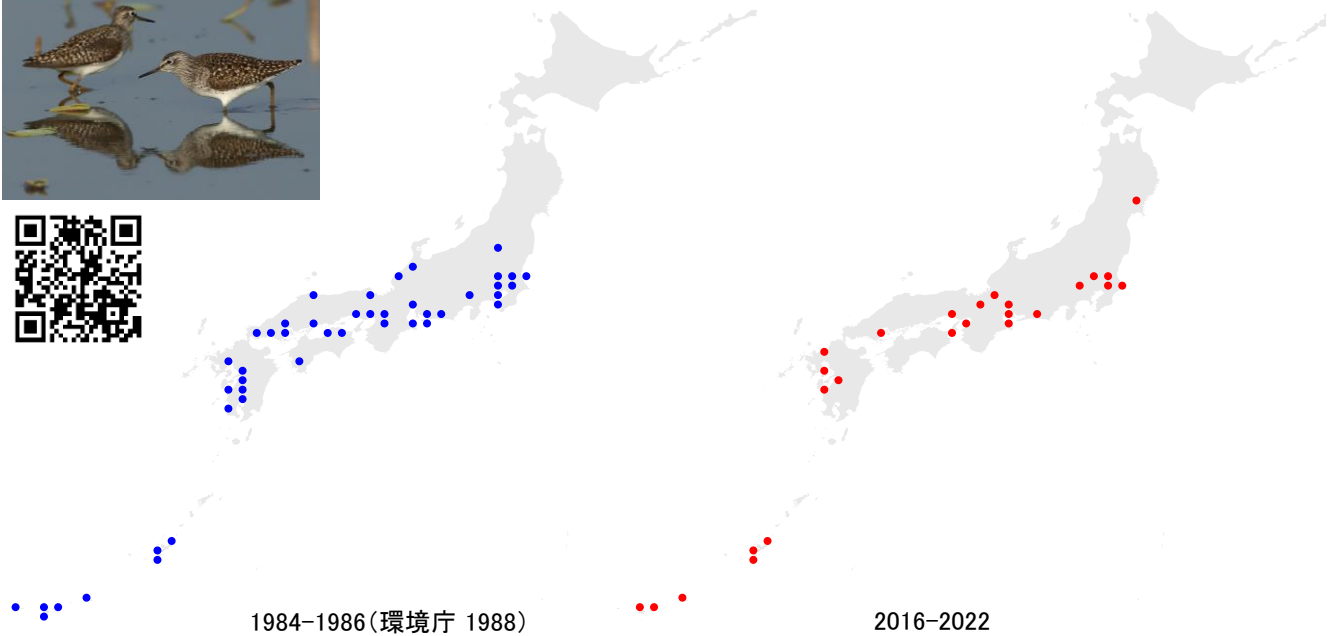
旅鳥または冬鳥として水田，川岸などに渡来し，東北以南で越冬する。1980年代と2010年代で記録メッシュ数や分布に大きな変化はなかった。

タカブシギ

Tringa glareola

全長：20.3-22.8cm

体重：53.6-81.8g



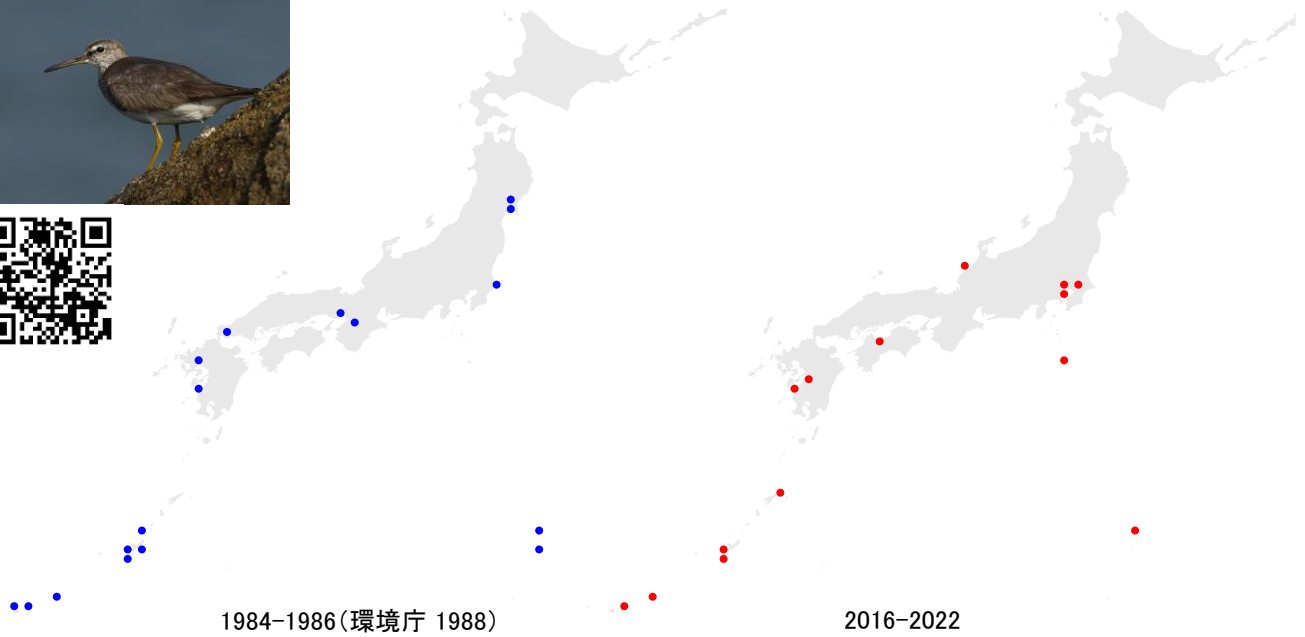
旅鳥として水田，蓮田，川岸などに渡来し，少数が越冬する。1980年代と2010年代では分布範囲に大きな変化はなかったが，記録メッシュ数は大きく減少した。

キアシシギ

Heteroscelus brevipes

全長: 24.1-28.5cm

体重: 75.4-171.0g



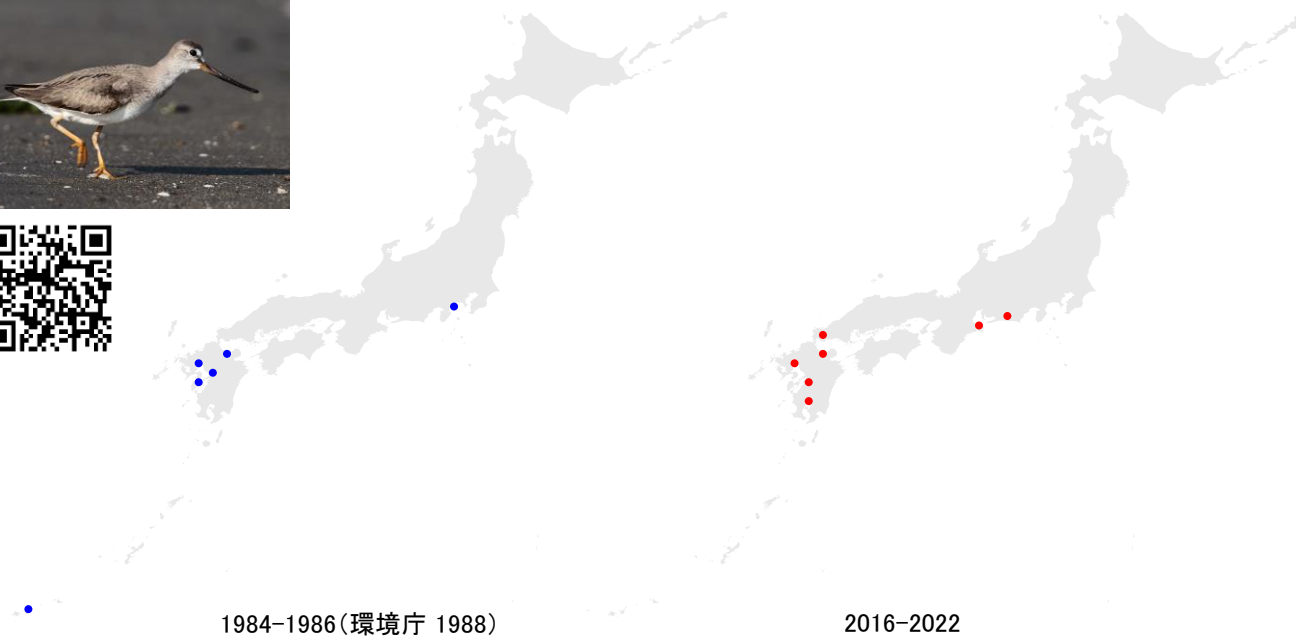
主に旅鳥として干潟, 岩礁, 川岸, 水田などに多数渡来する。1980年代と2010年代で記録メッシュ数や分布に大きな変化はなかった。

ソリハシシギ

Xenus cinereus

全長: 21.2-24.5cm

体重: 65.3-111.8g



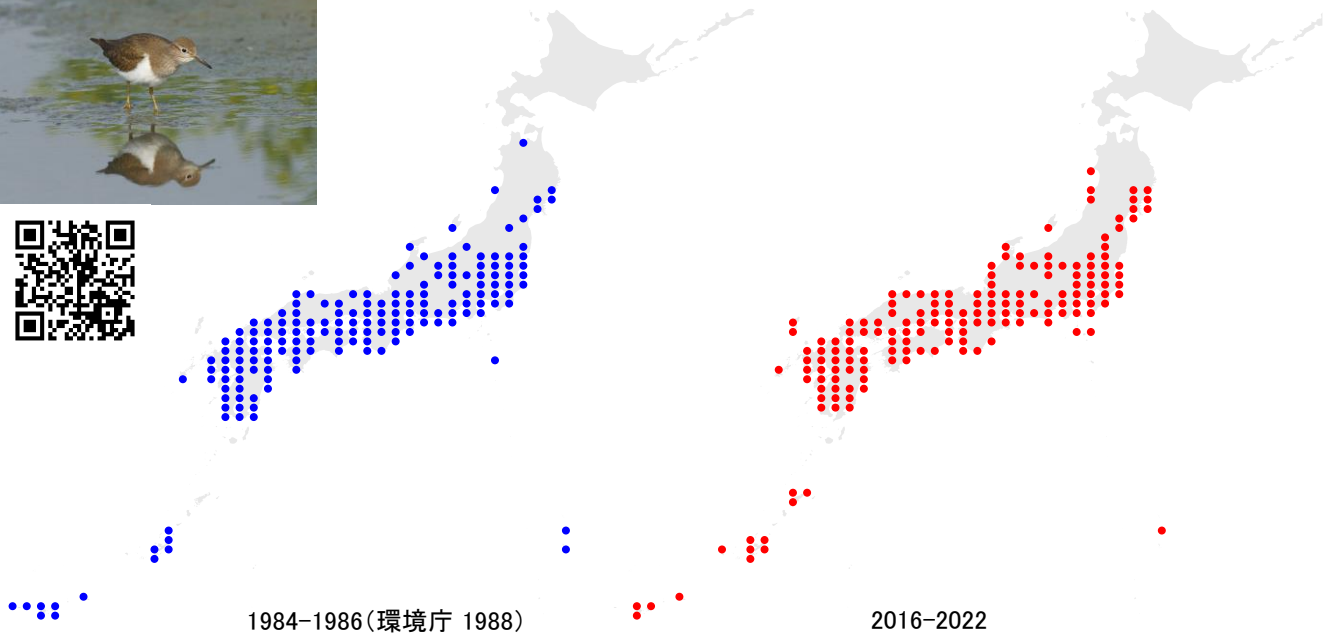
主に旅鳥として, 干潟などに渡来する。1980年代と2010年代で記録メッシュ数や分布に大きな変化はなかった。

イソシギ

Actitis hypoleucos

全長: 17.8-21.0cm

体重: 45.0-94.1g



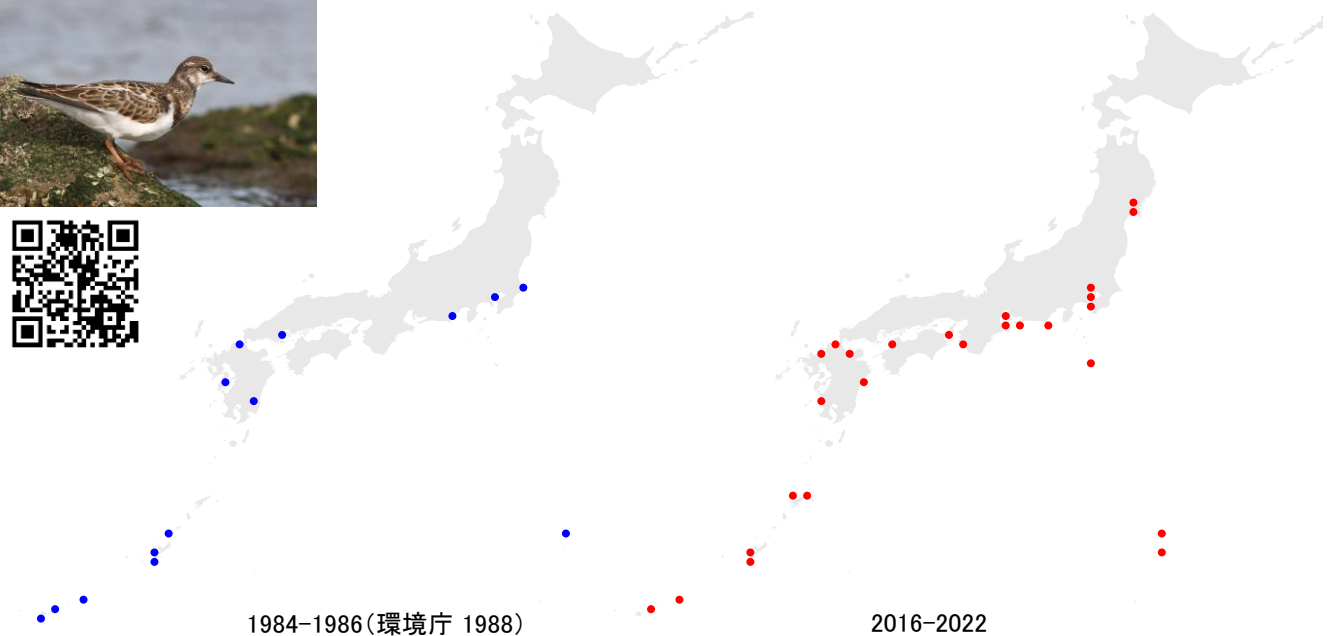
九州以北の川原の草地などで繁殖する。非繁殖期は、北日本のものは暖地に移動する。海岸の岩場や河川、干潟などの湿地で見られる。1980年代と2010年代で記録メッシュ数や分布に大きな変化はなかった。

キョウジョシギ

Arenaria interpres

全長: 20.5-24.0cm

体重: 97.5-176.3g



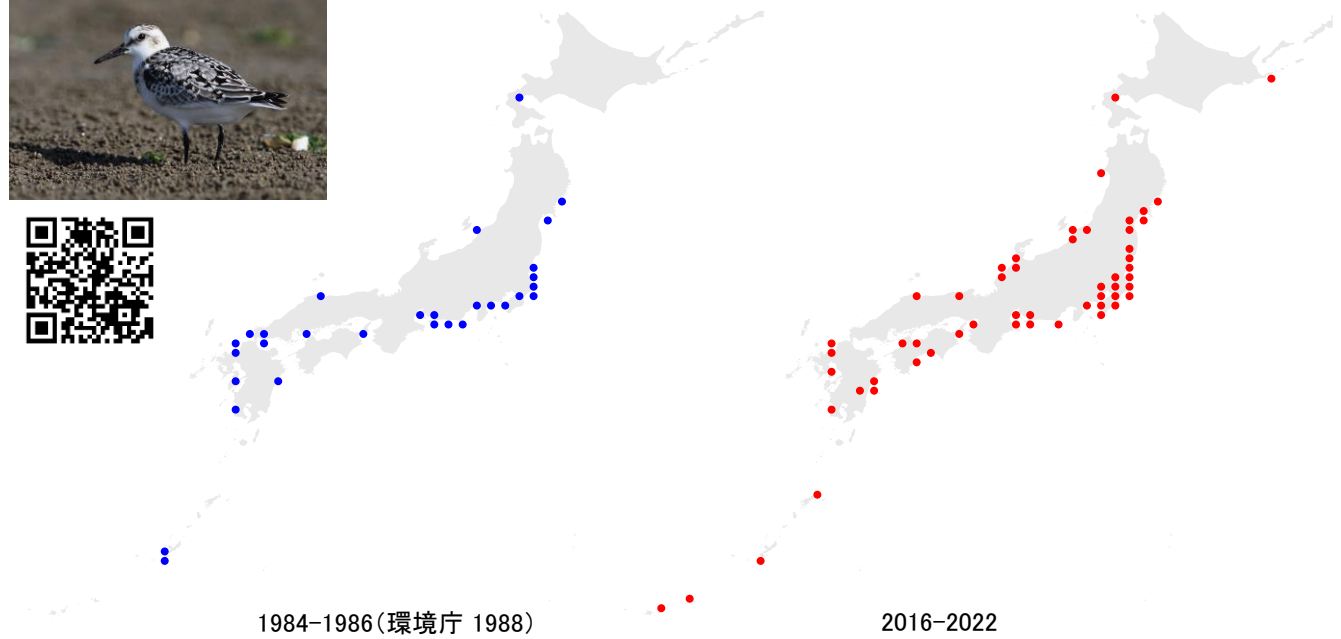
主に旅鳥として干潟、岩礁、砂浜、川原、水田などに渡来する。越冬記録は少ないが、東北や西日本で確認が増えたため、1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増え、分布は北よりに拡大した。

ミュビシギ

Calidris alba

全長：20.0-21.0cm

体重：♂44-75g ♀50-67g



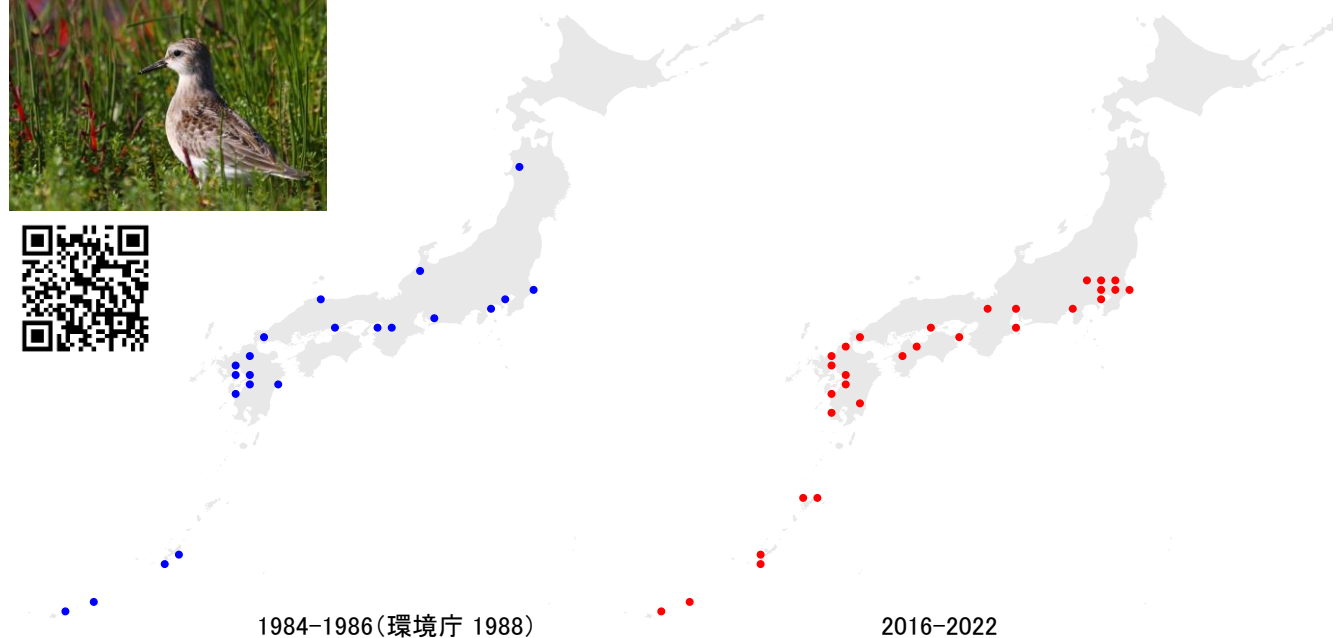
旅鳥または冬鳥として主に砂浜に渡来し、波打ち際で採食する。干潟や河口でも見られる。日本海側や東北、四国などで確認が増えたため、1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増えたが、分布に大きな変化はなかった。

トウネン

Calidris ruficollis

全長：13.5-16.4cm

体重：19.5-47.3g



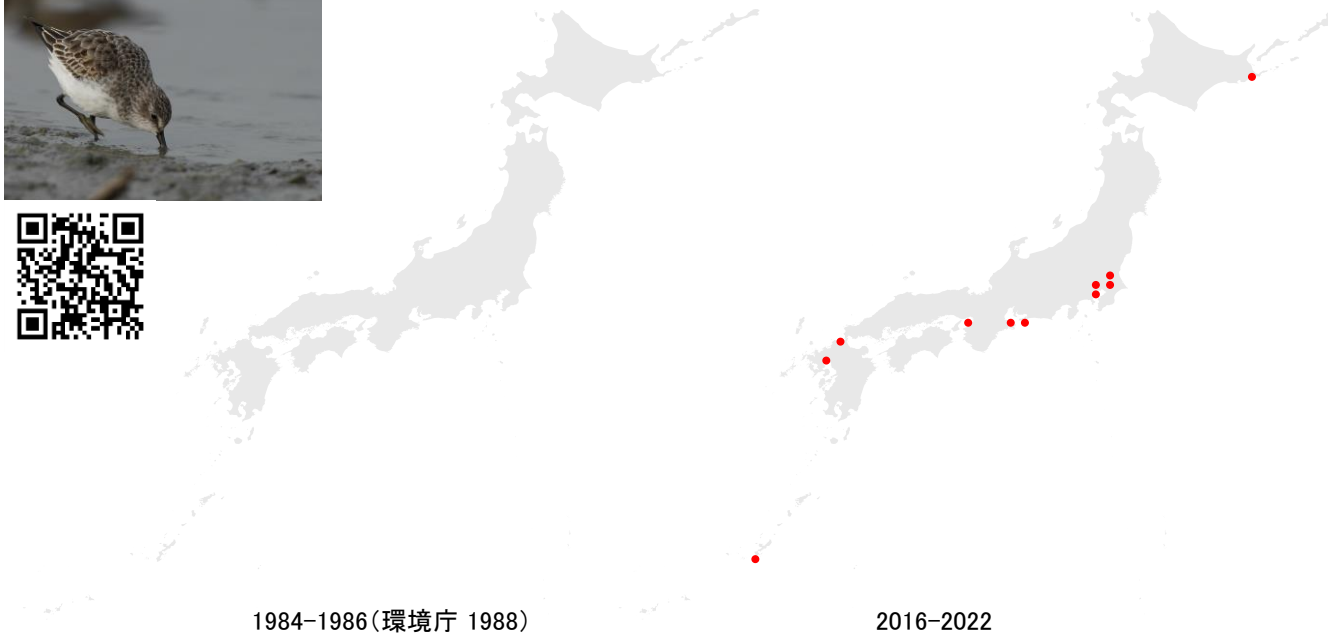
旅鳥として干潟や水田などに渡来する。個体数は減少傾向にある(環境省自然環境局生物多様性センター2020)。1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増加しており、特に関東地方の記録メッシュ数が増加していた。

ヨーロッパトウネン

Calidris minuta

全長: 12-14cm

体重: 17-44g



1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

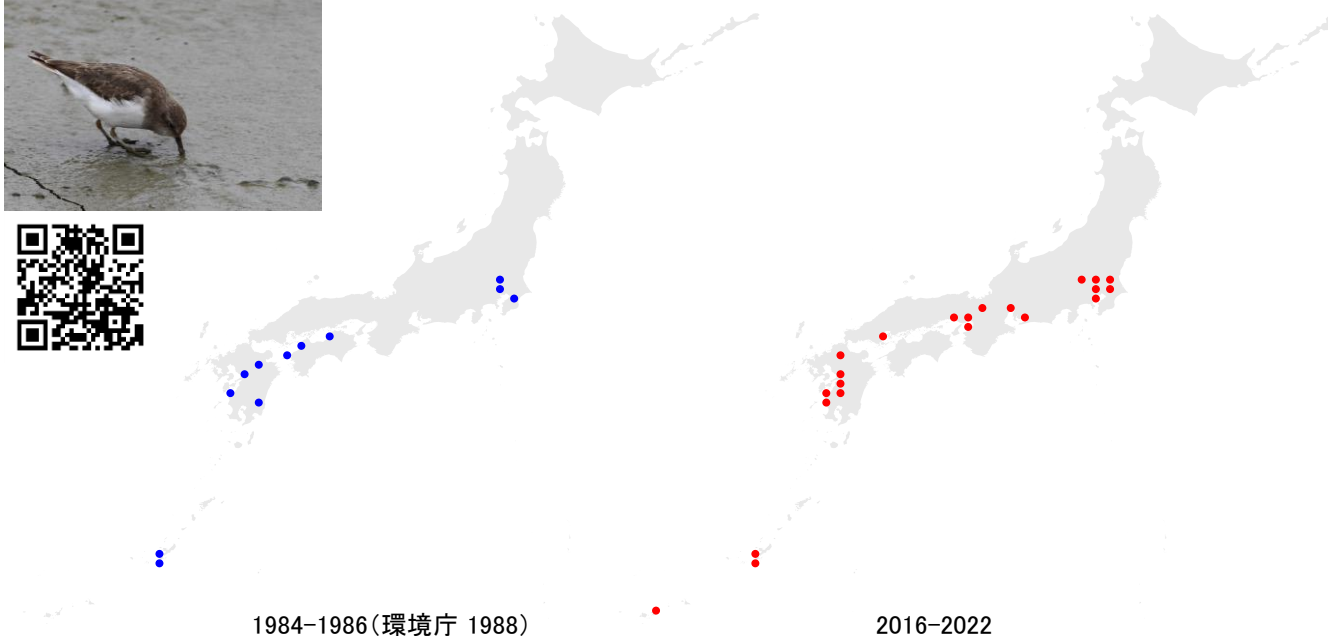
旅鳥または冬鳥として干潟や水田に少数が渡来する。1980年代と2010年代で記録メッシュは0から11に増加した。観察者の増加や識別能力の向上によって記録が増えた可能性が考えられ、分布に変化があったかははっきりしない。

オジロトウネン

Calidris temminckii

全長: 13-15cm

体重: 16-39g

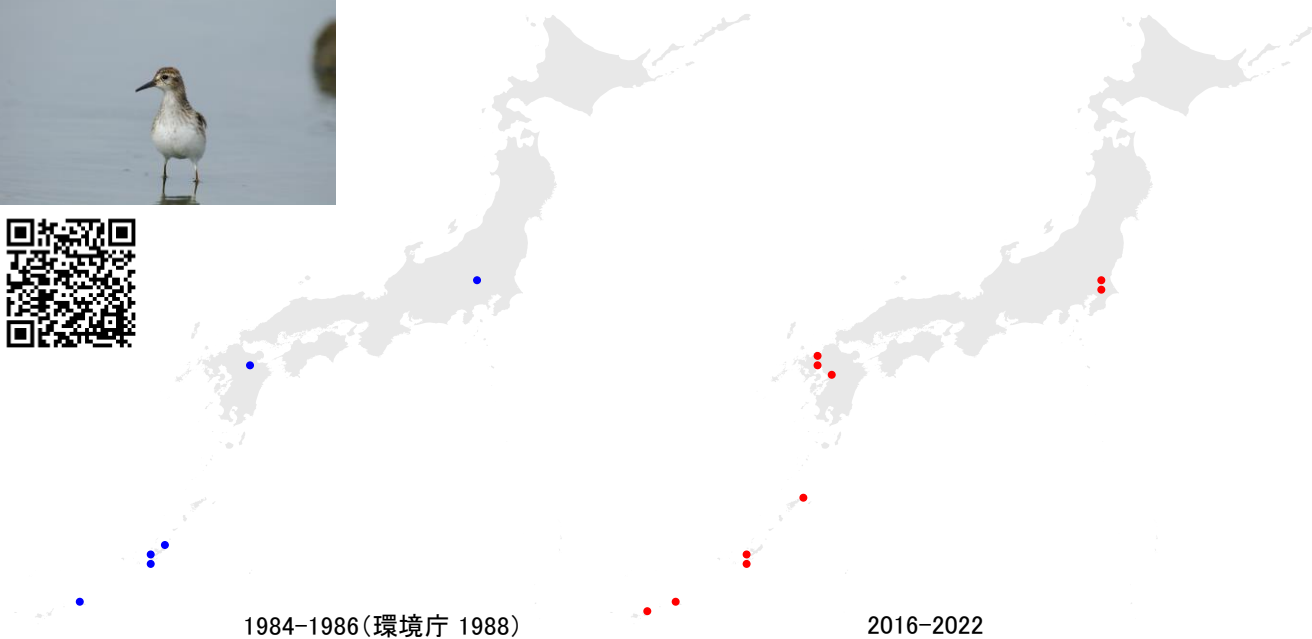


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

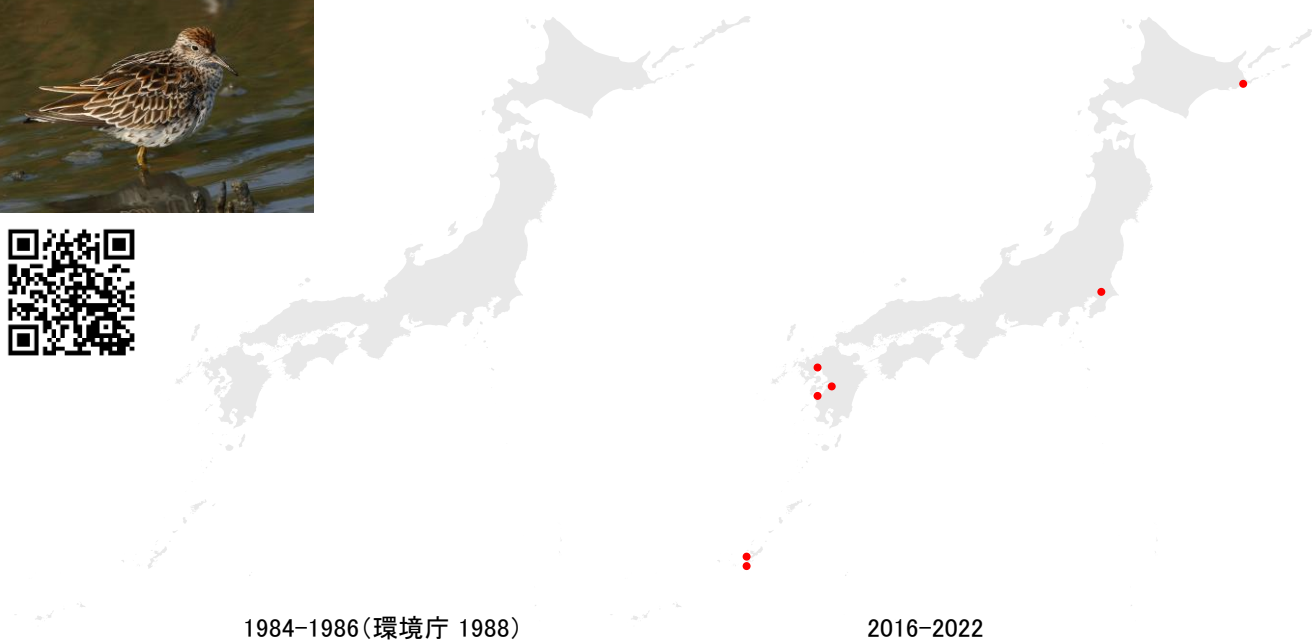
冬鳥または旅鳥として川岸や湿地に少数が渡来する。1980年代と2010年代で記録メッシュ数は増えたが、分布に大きな変化はなかった。

ヒバリシギ *Calidris subminuta* 全長：13-15cm 体重：23-40g



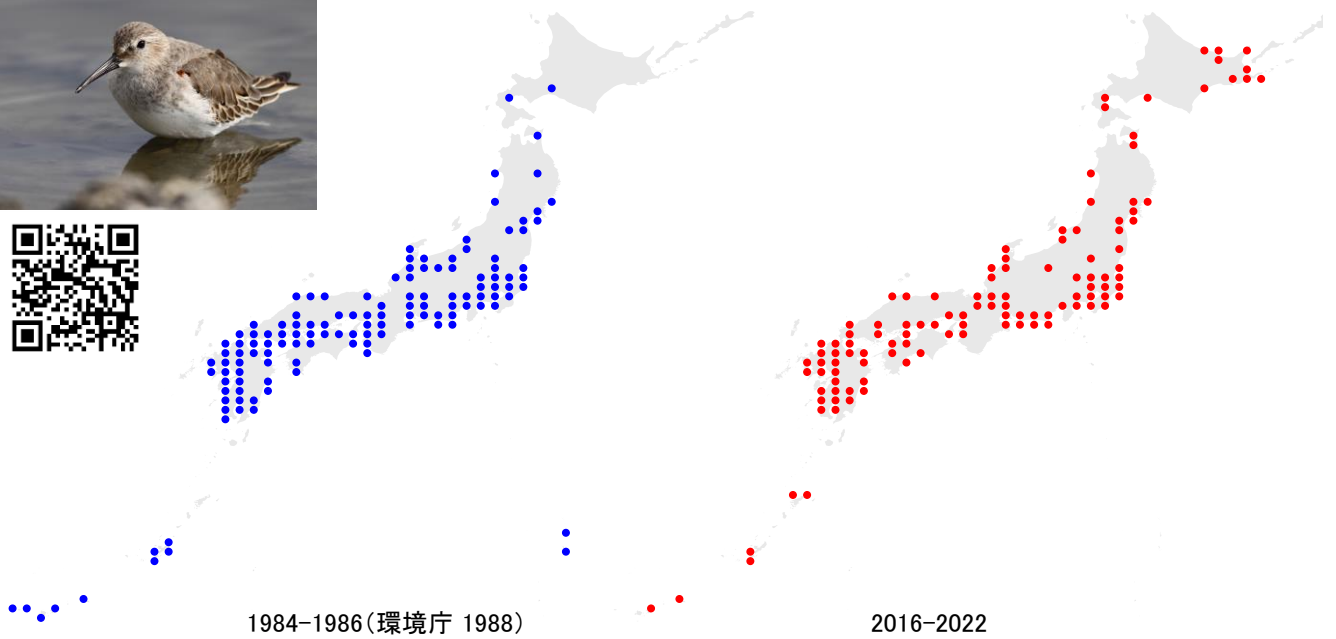
主に旅鳥として入江や水田などに渡来する。1980年代と2010年代で記録メッシュ数や分布に大きな変化はなかった。

ウズラシギ *Calidris acuminata* 全長：17-21cm 体重：42-117g



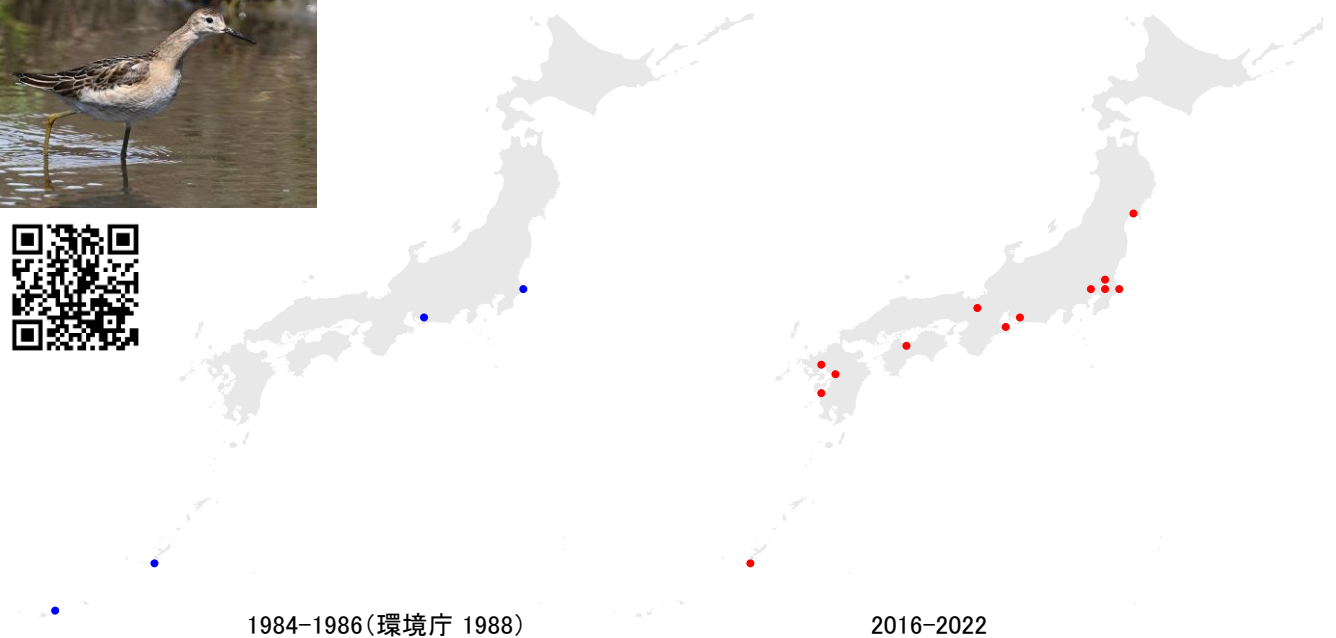
旅鳥として水田や入り江などに渡来する。1980年代と2010年代で記録メッシュ数は0から6に増えた。越冬する個体が増えていると考えられる。

ハマシギ *Calidris alpina* 全長：16-22cm 体重：37-88g



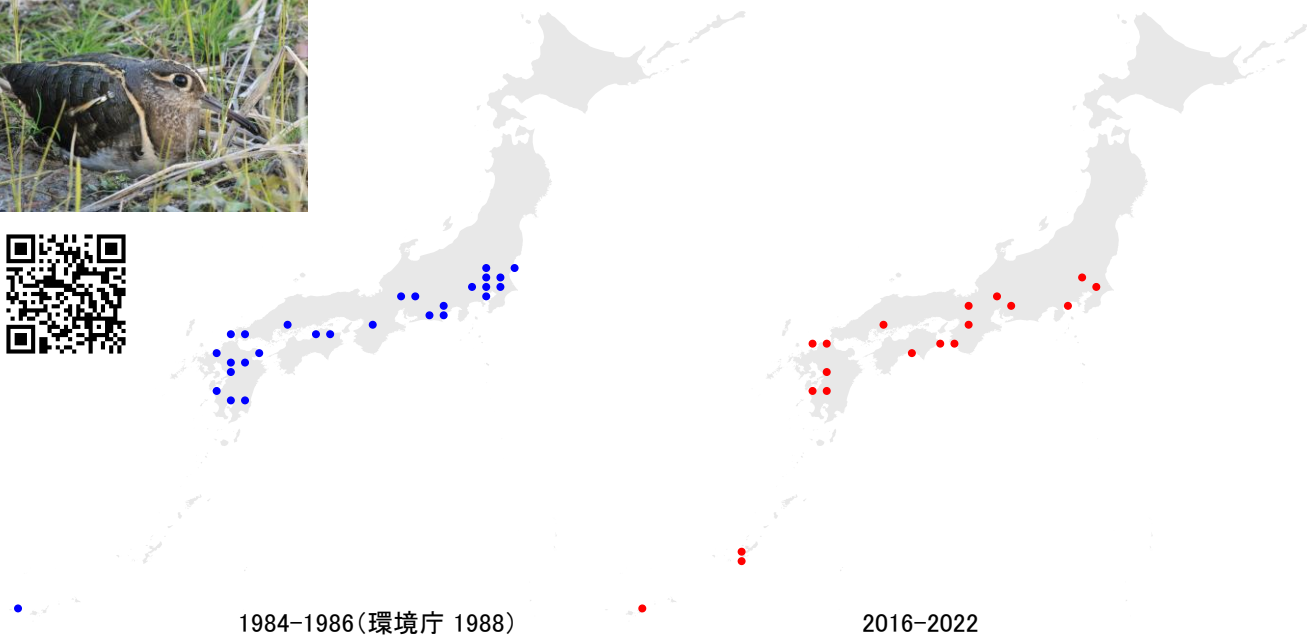
冬鳥または旅鳥として干潟、海岸、河口、水田などの湿地に渡来する。2000 年以降、個体数は減少傾向にある(環境省自然環境局生物多様性センター 2020)。1980 年代と 2010 年代で記録メッシュ数はやや減少していたが、北海道での確認が増え、分布は北よりに拡大した。

エリマキシギ *Philomachus pugnax* 全長：20-32cm 体重：130-254g



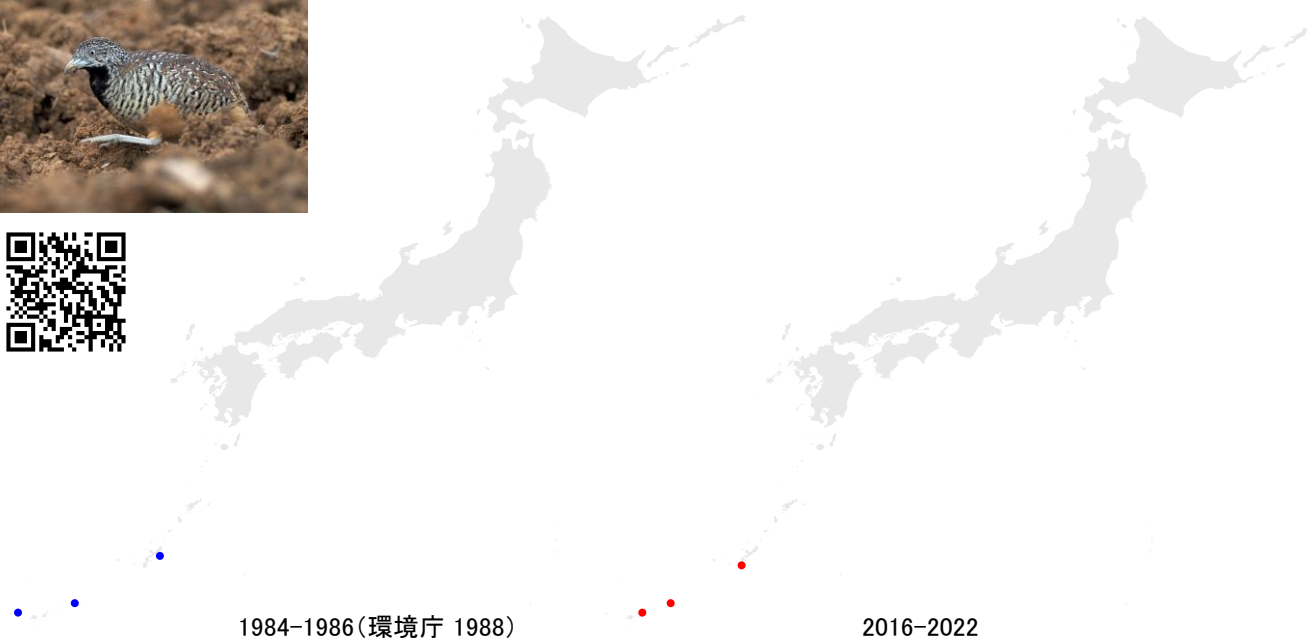
主に旅鳥として水田や入り江などに渡来する。1980 年代と 2010 年代で記録メッシュ数は増加したが、もともと記録が少ない種のため、分布に変化があったかははっきりしない。

タマシギ *Rostratula benghalensis* 全長：22.5-25.0cm 体重：♂131-155g ♀151-242g



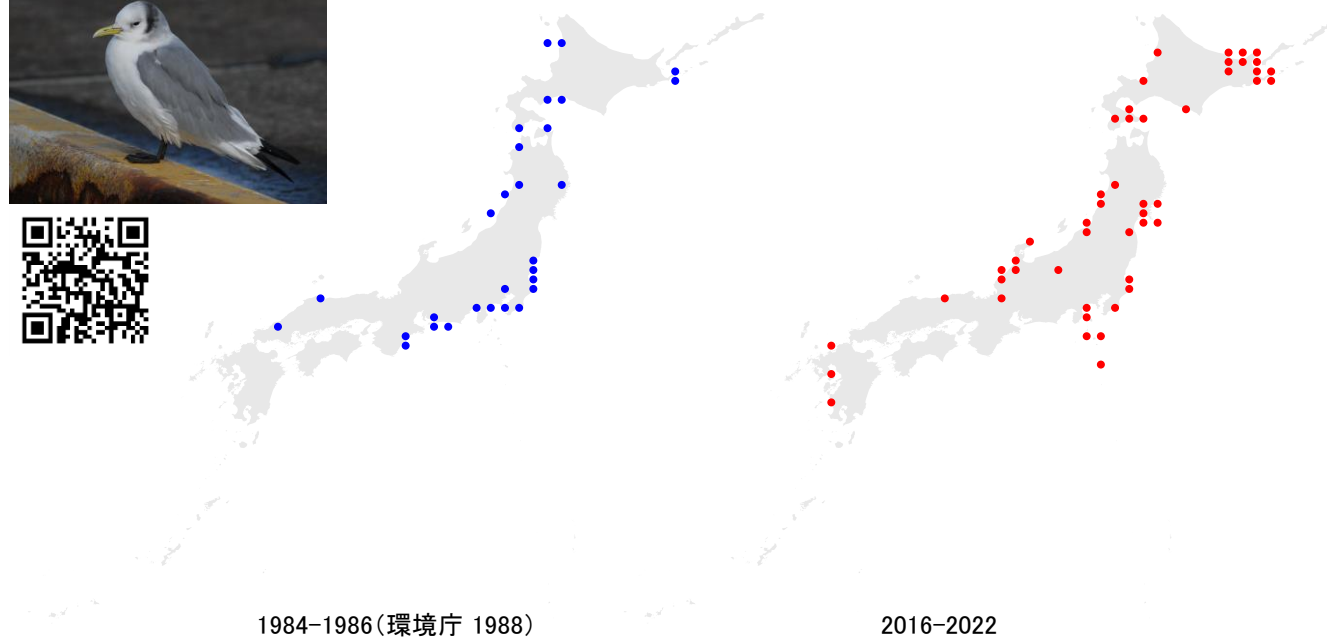
留鳥または漂鳥として水田や休耕田に生息する。1980年代と2010年代で記録メッシュ数は減少したが、分布に大きな変化はなかった。繁殖期にも全国的な分布の縮小や地域的な個体数の減少が報告されている (Amano et al. 2010)。

ミフウズラ *Turnix suscitator* 全長：14-17cm



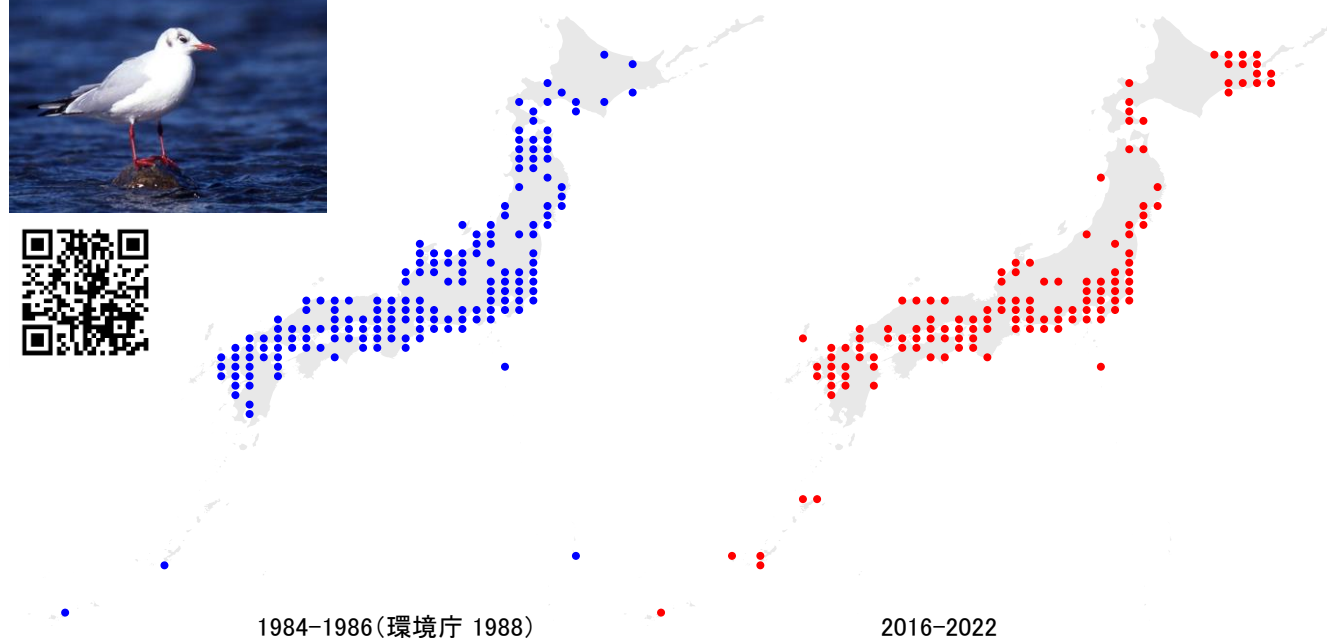
南西諸島に留鳥として生息する。その分布状況に変化はなかった。繁殖分布調査の結果では、現地調査で確認された地点数が12地点から3地点に減少しており(植田・植村 2021)、今後の変化を注視していく必要がある。

ミツユビカモメ *Rissa tridactyla* 全長:35.8-40.6cm 体重:304.9-398.3g



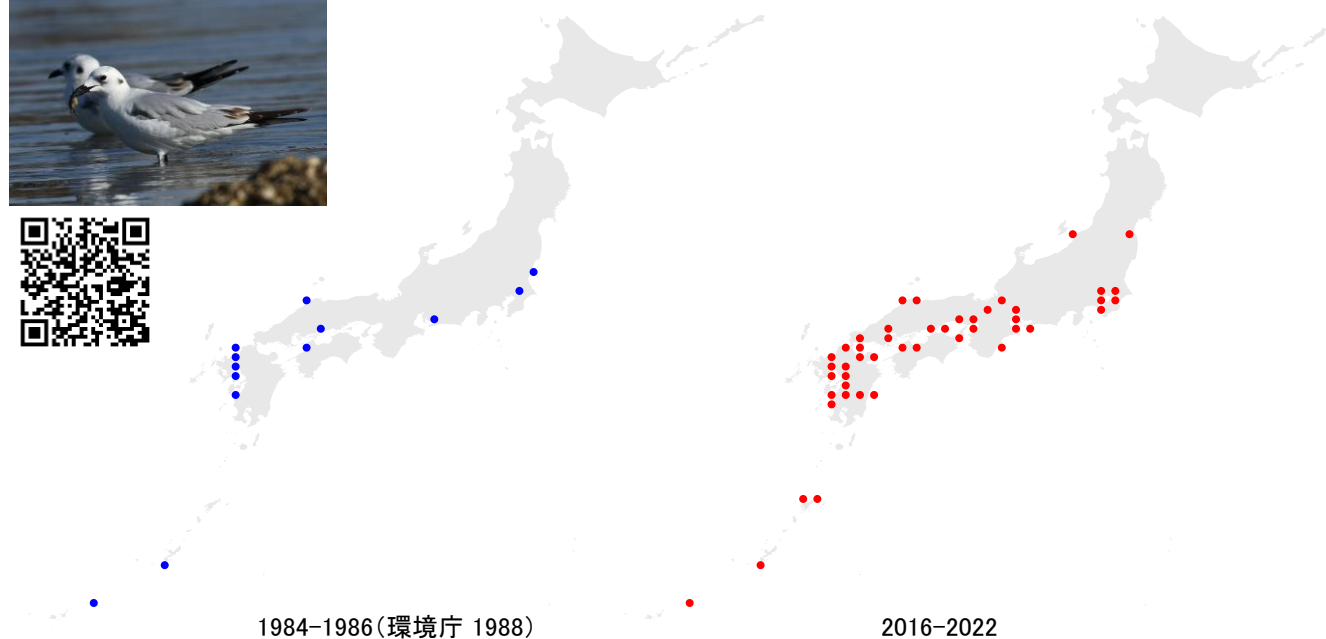
冬鳥として渡来し、岸から離れた海上に多い。1980年代から2010年代にかけて記録メッシュ数は増加した。北海道での記録メッシュが増え、九州でも新たに記録されたため、分布は南北に拡大した。

ユリカモメ *Larus ridibundus* 全長:37.0-41.2 体重:200-447g



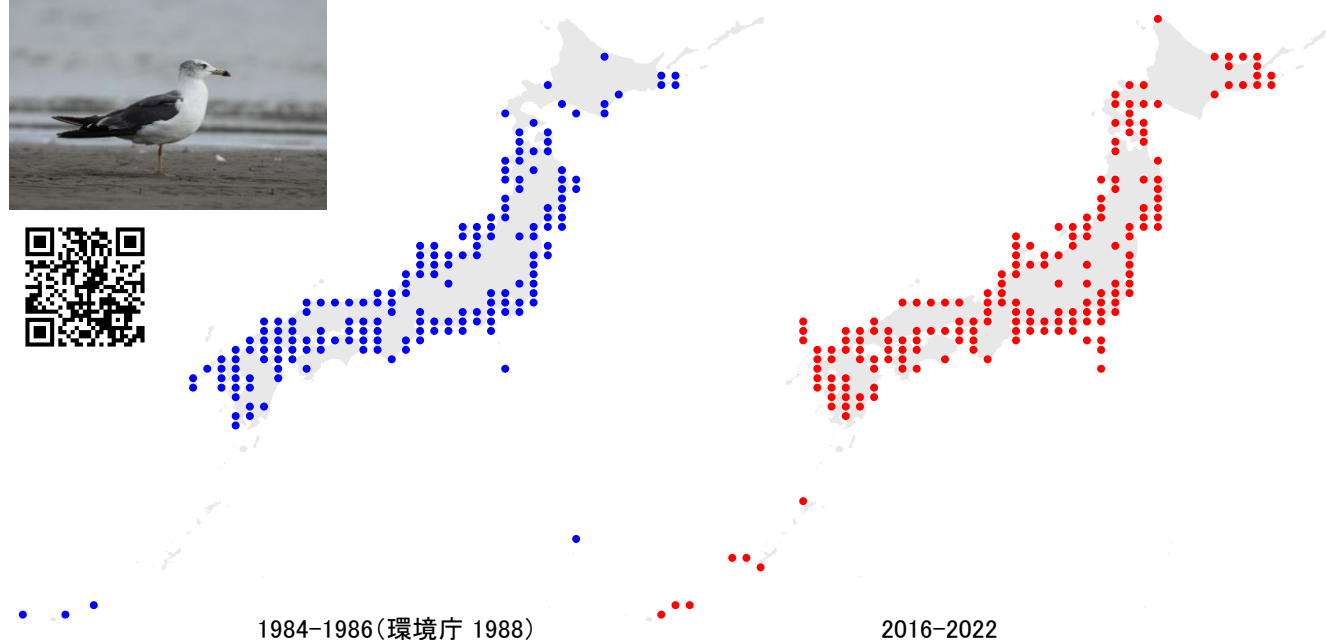
主に冬鳥として渡来する。日本海側の記録メッシュが少なくなり、1980年代と2010年代では記録メッシュ数が減少した。1970-80年代には急増し、2000年代以降は急減するなど越冬数には大きな変動が見られており(須川 2008, 和田 2021)、今後の動向が注目される。

ズグロカモメ *Larus saundersi* 全長: 31-32cm 体重: 200-215g



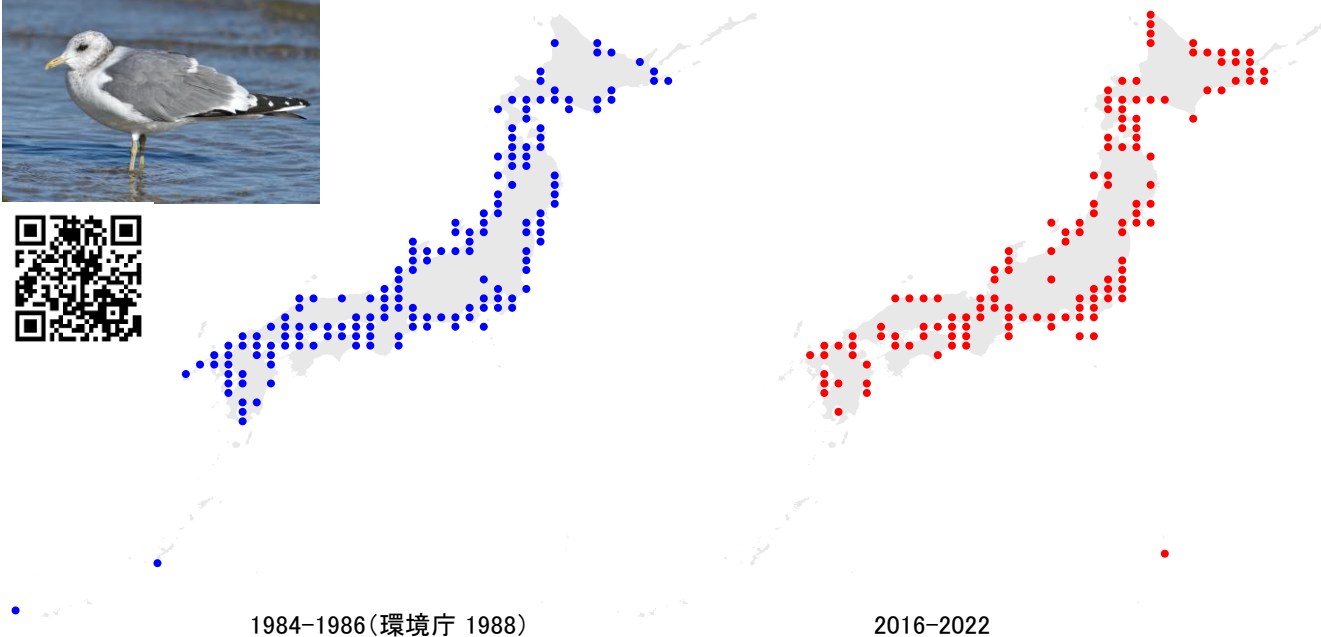
冬鳥として主に西日本に渡来する。1990年代に当時の分布の中心だった九州で個体数が増加し(武下ほか1993), その後, 分布が拡大している。それを反映し, 今回の調査でも, 九州以外の記録メッシュ数が増加していた。

ウミネコ *Larus crassirostris* 全長: 44-47cm 体重: 475.1-619.9g



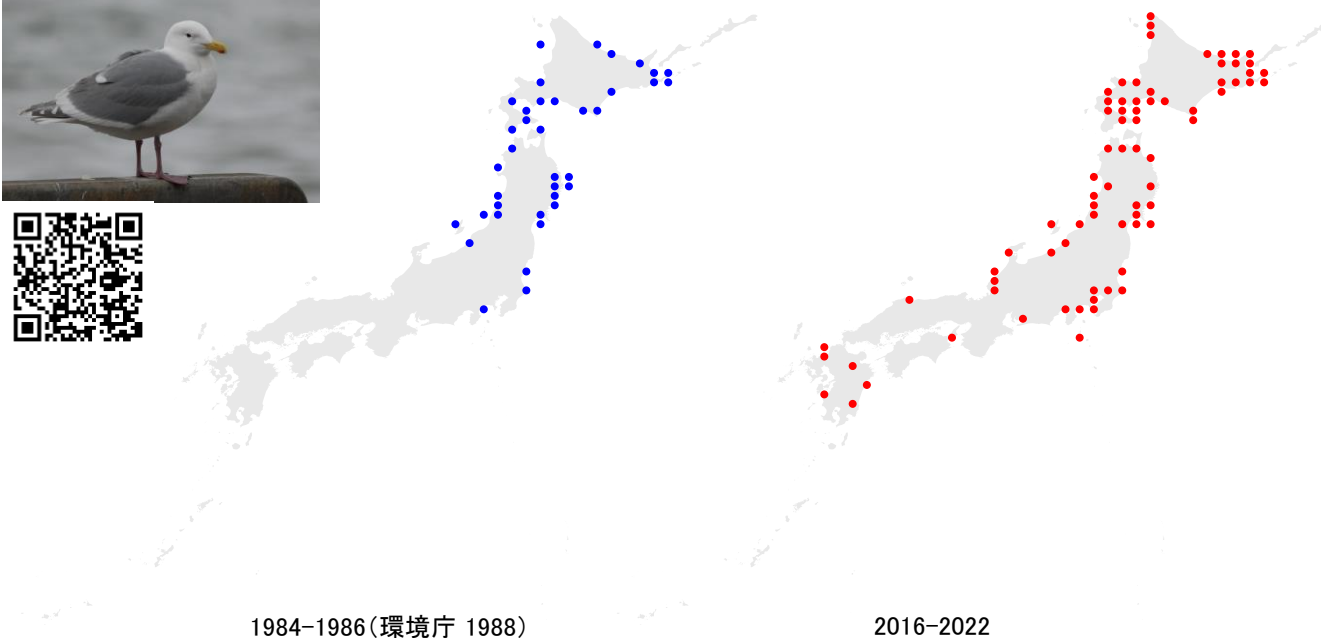
全国の沿岸や離島に局所的に集団繁殖地がある。越冬期は本州以南の海岸や河口に多い。1980年代と比べて2010年代に北海道での確認が増えたが, 記録メッシュ数や分布に大きな変化はなかった。

カモメ *Larus canus* 全長：42.1-46.3cm 体重：440.3-593.3g



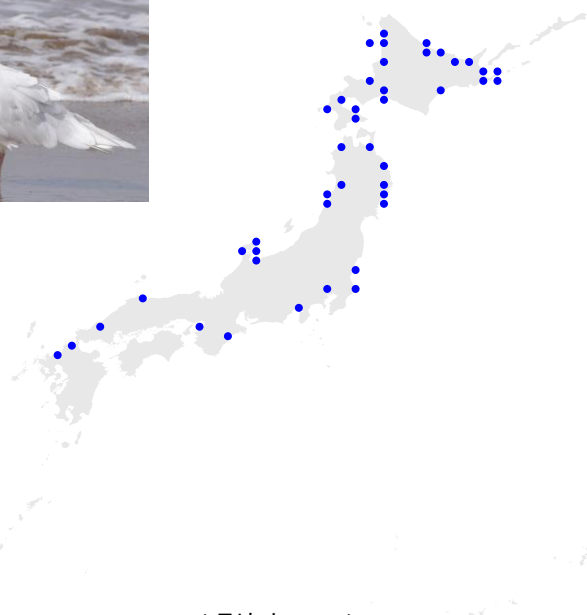
冬鳥として全国の海岸や河口などに渡来する。西日本での記録がやや減少し、北海道での記録が増えた。1980年代から2010年代にかけて記録メッシュ数はやや減少したが、分布に大きな変化はなかった。

ワシカモメ *Larus glaucescens* 全長：61-68cm 体重：900-1250g

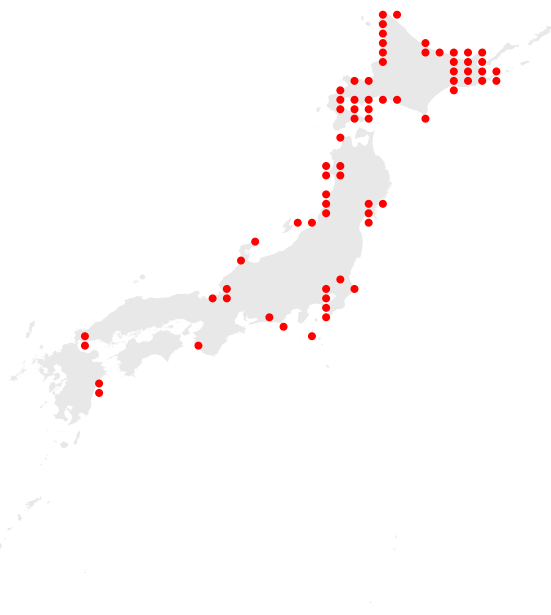


冬鳥として主に北日本の海岸や河口、漁港などに渡来する。北海道や関東、北陸での記録が増え、九州でも新たに確認されたため、1980年代から2010年代にかけて記録メッシュ数は増加した。分布は南よりに拡大した。

シロカモメ *Larus hyperboreus* 全長：68.5-74.6cm 体重：1801.5-2267.3g



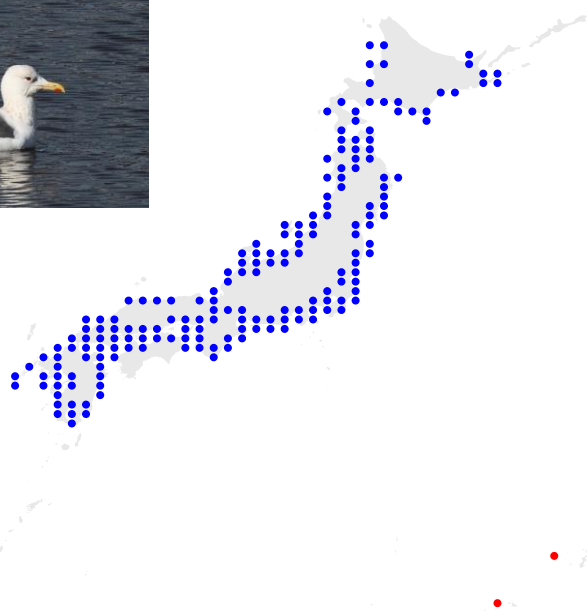
1984-1986(環境庁 1988)



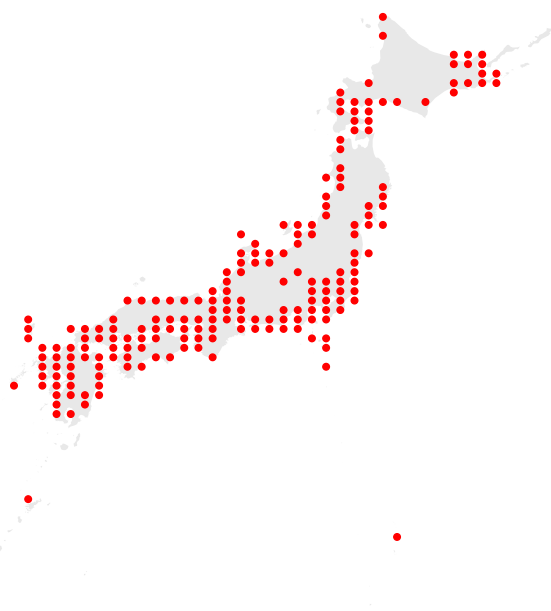
2016-2022

冬鳥として海岸や河口、漁港などに渡来する。北海道での記録が増えたため、1980年代から2010年代にかけて記録メッシュ数は増加したが、分布に大きな変化はなかった。

セグロカモメ *Larus argentatus* 全長：56-66cm 体重：865-1601g



1984-1986(環境庁 1988)



2016-2022

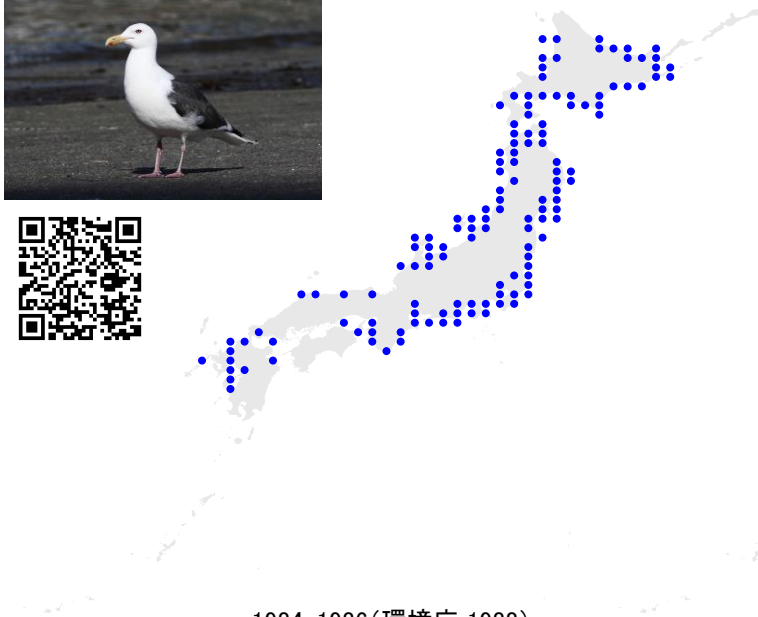
冬鳥として全国の海岸や河口に多数渡来する。1980年代と2010年代で記録メッシュ数や分布に大きな変化はなかった。

オオセグロカモメ

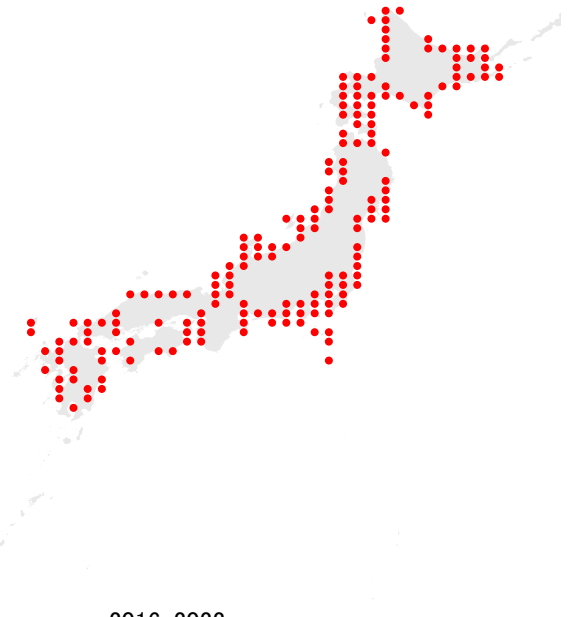
Larus schistisagus

全長：55-67cm

体重：1167.4-1616.3g



1984-1986(環境庁 1988)



2016-2022

青森県以北で繁殖し，越冬期は全国の海岸や河口，漁港などに渡来する。北海道や西日本での記録が増えたため，1980年代から2010年代にかけて記録メッシュ数は増加した。分布は南よりにやや拡大した。

ニシセグロカモメ

Larus fuscus

全長：52-64cm

体重：620-1000g



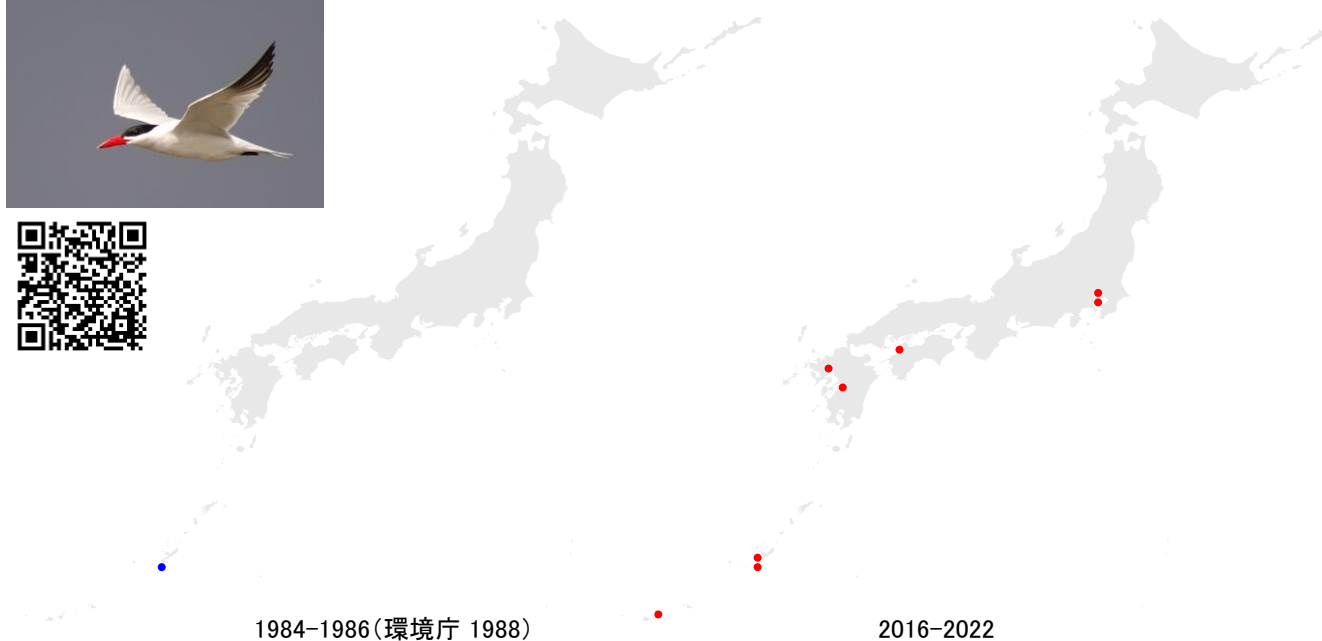
1984-1986(環境庁 1988)



2016-2022

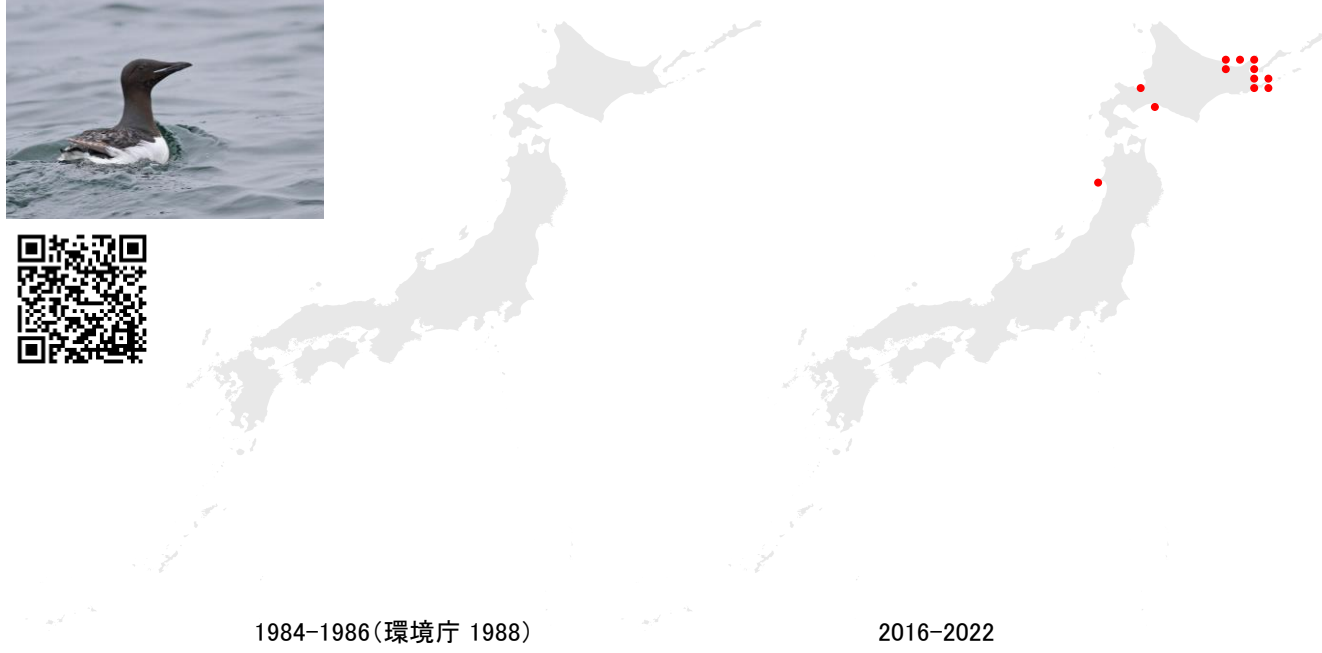
冬鳥として海岸や河口に渡来し，西日本に多い。1980年代と2010年代で記録メッシュ数は0から28に増加した。以前はセグロカモメの1亜種とされていたことや，観察者の増加や識別能力の向上によって記録が増えたと考えられ，分布に変化があったかははっきりしない。

オニアジサシ *Sterna caspia* 全長：47-54cm 体重：600-700g



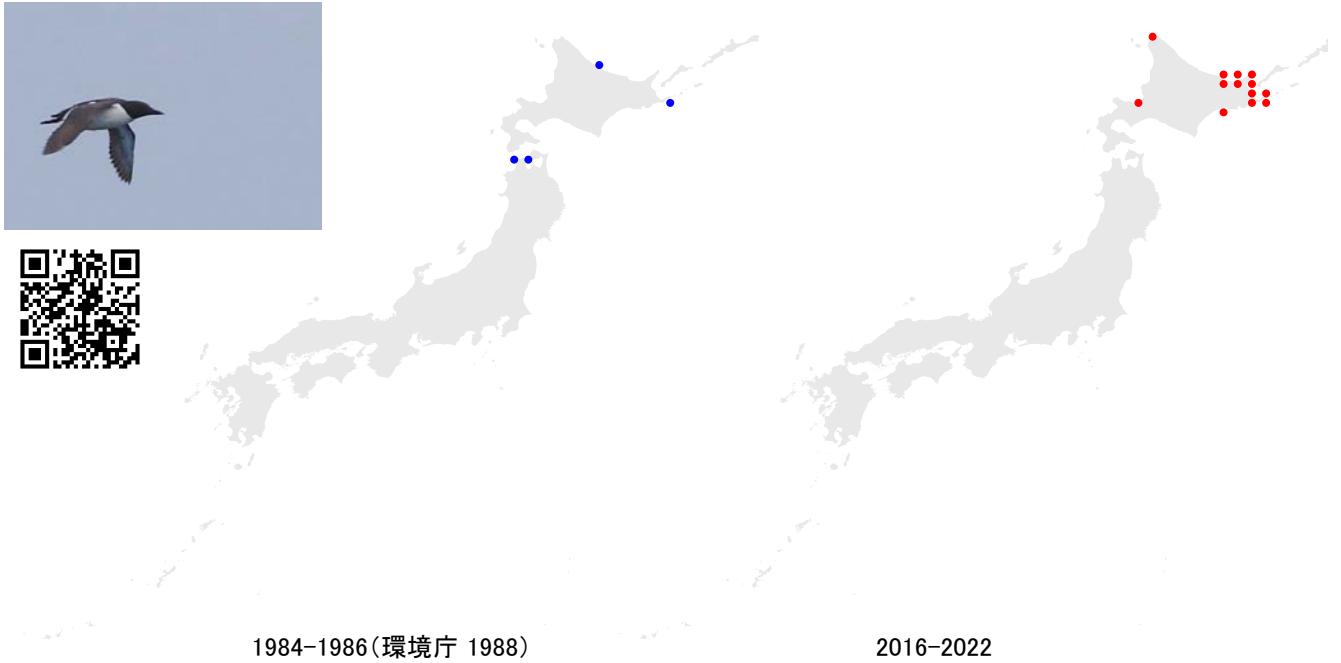
ユーラシア大陸から北米まで広く分布する鳥だが、日本には数少ない旅鳥、冬鳥として渡来する。1980年代は沖縄での記録のみだったが、2010年代は南西諸島のほか、九州、四国、関東の干潟で記録された。不定期な渡来ではあるが、越冬分布は拡大傾向にあると思われる。

ハシブトウミガラス *Uria lomvia* 全長：39.2-44.0cm 体重：♂1114±63.6g ♀1070±66.8g



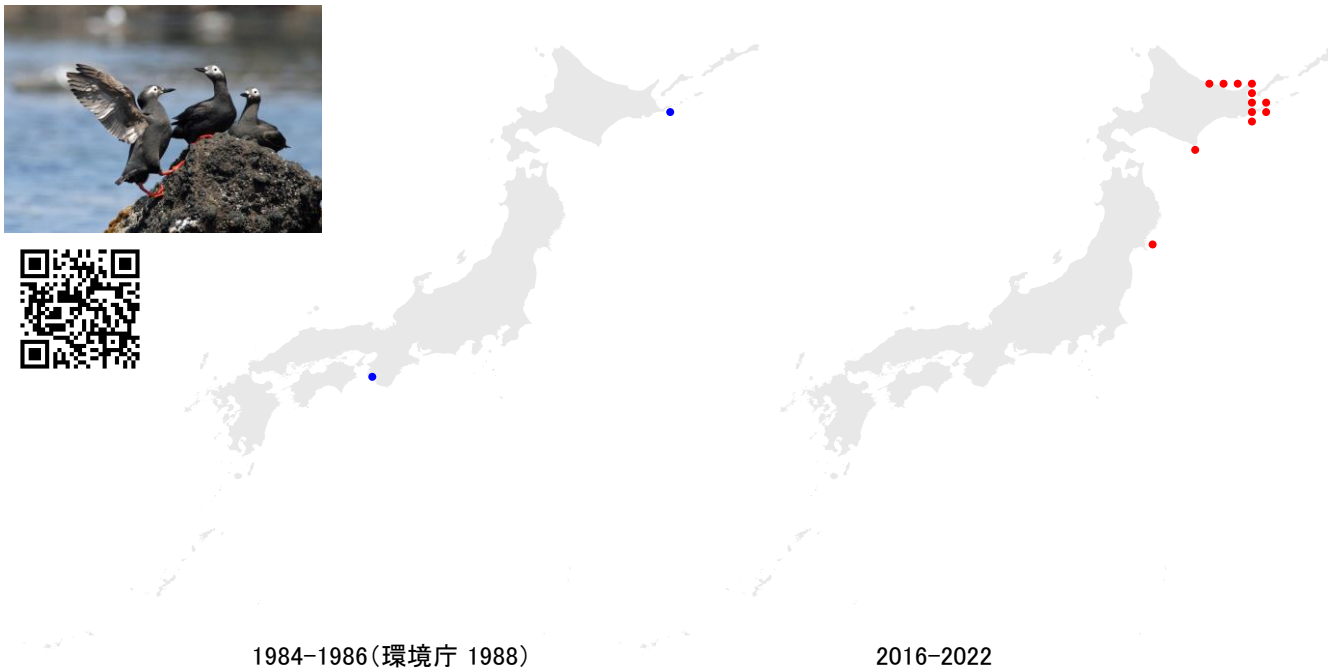
1980年代の記録はなく、2010年代は北海道を中心に記録された。1980年代は海上の鳥の観察はほとんど行なわれておらず、この変化は分布の変化を反映したものではないと考えられる。ただし1940年代から1980年代に漁業での混獲や海洋汚染で減ったのが回復傾向にあるともされている(伊藤 2014)。

ウミガラス *Uria aalge* 全長：42.0-47.2cm 体重：595.5-926.6g



北海道を中心とした北日本の海上で越冬する。天売島では環境省の保護増殖事業が実施されており繁殖個体数は増加している(長谷部 2015)。2010年代に道東の記録が増えたのは、そうした効果の可能性もあるが、2010年代には1980年代に比べて海上の鳥の観察が多く行なわれるようになった影響の可能性が高い。

ケイマフリ *Cephus carbo* 全長：37cm 体重：576-760g



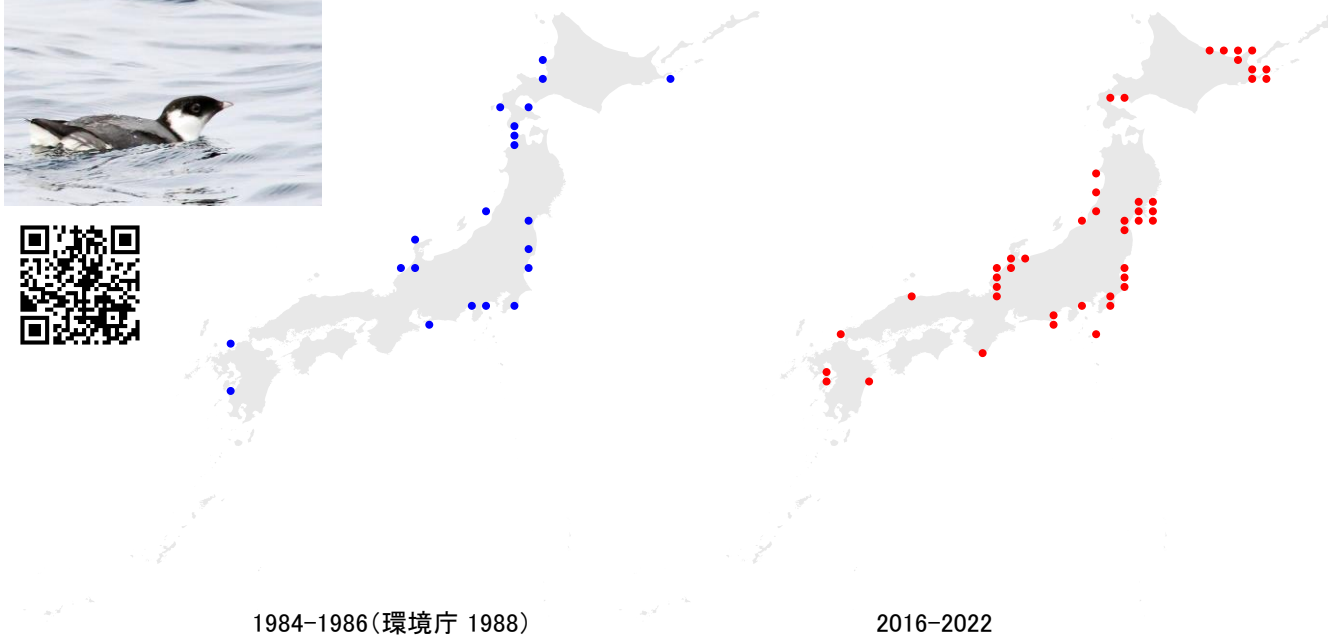
北海道を中心とした北日本の海上で越冬する。2010年代に道東の記録が増えたのは、1980年代に比べて海上の鳥の観察が多く行なわれるようになった影響の可能性が高い。

ウミスズメ

Synthliboramphus antiquus

全長：24.1-26.7cm

体重：191.3-295.1g



1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

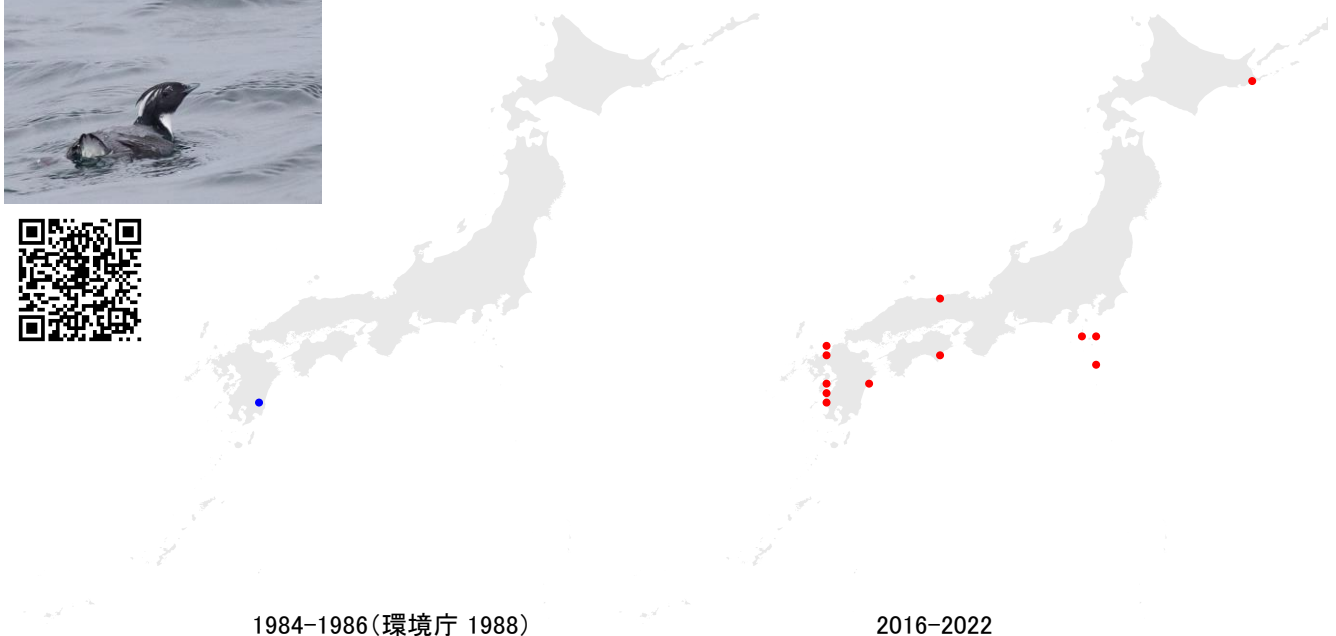
北日本を中心として、全国の海上で越冬する。2010年代に記録が増えたのは、1980年代に比べて海上の鳥の観察が多く行なわれるようになった影響の可能性が高い。

カンムリウミスズメ

Synthliboramphus wumizusume

全長：22.0-26.5cm

体重：139-213g

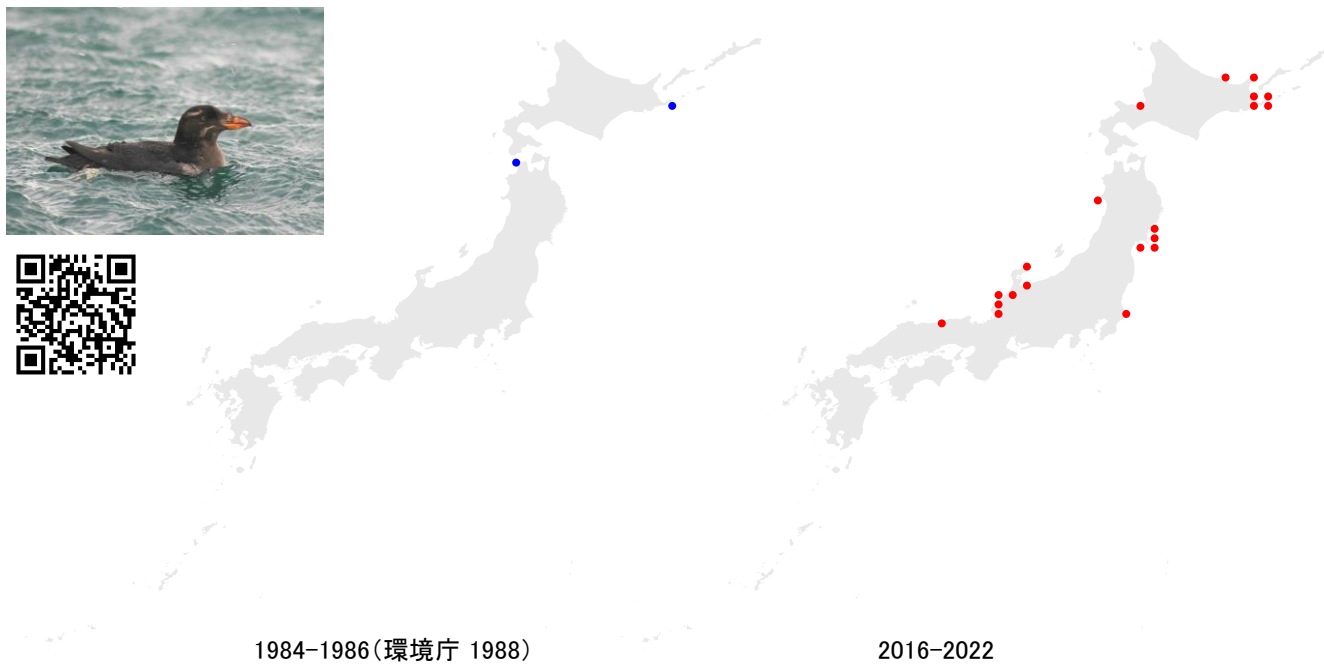


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

日本近海の離島で繁殖し、非繁殖期は三陸沖や北海道東部沖などで確認例がある。1980年代と2010年代で記録メッシュ数は1から12に増加したが、1980年代に比べて海上の鳥の観察が多く行なわれるようになった影響の可能性が高い。個体数は減少傾向にあると考えられている(Carter et al. 2002)。

ウトウ *Cerorhinca monocerata* 全長：35-38cm 体重：549±39g

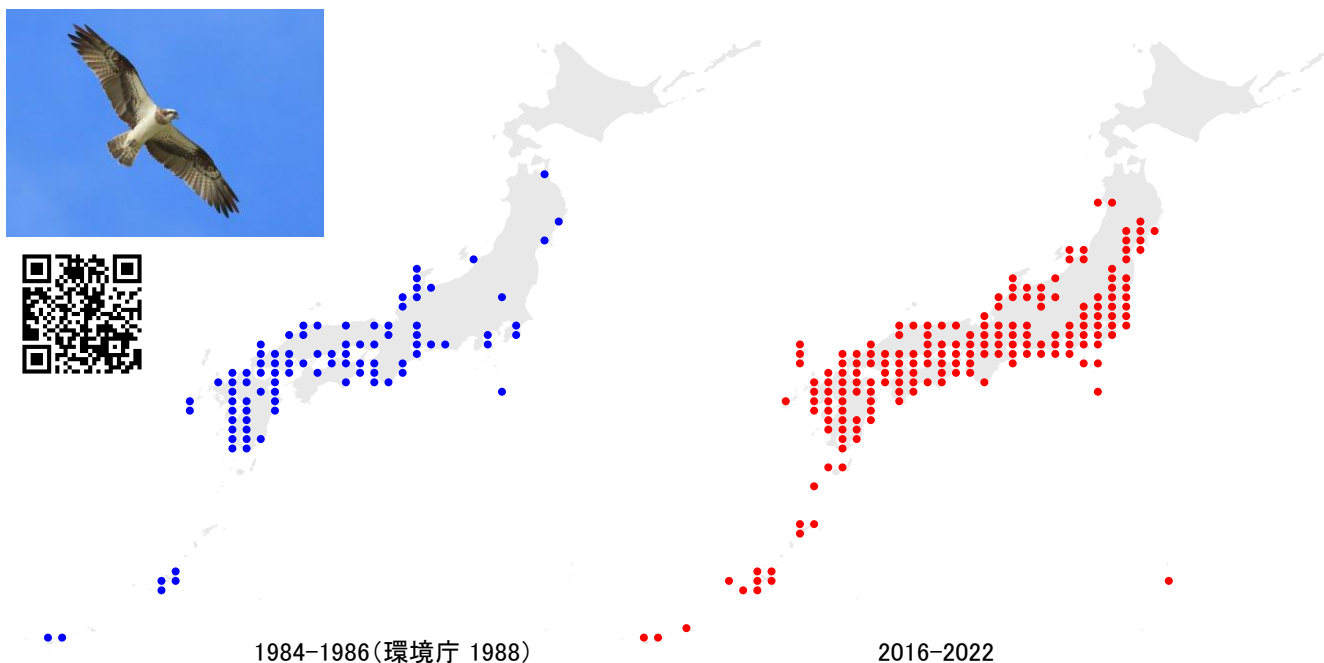


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

本州中部以北の海上で越冬する。2010年代に記録が増えたのは、1980年代に比べて海上の鳥の観察が多くなるようになった影響の可能性が高い。

ミサゴ *Pandion haliaetus* 全長：♂56-60cm ♀58-62cm 体重：♂2450-2718g ♀3160-4530g

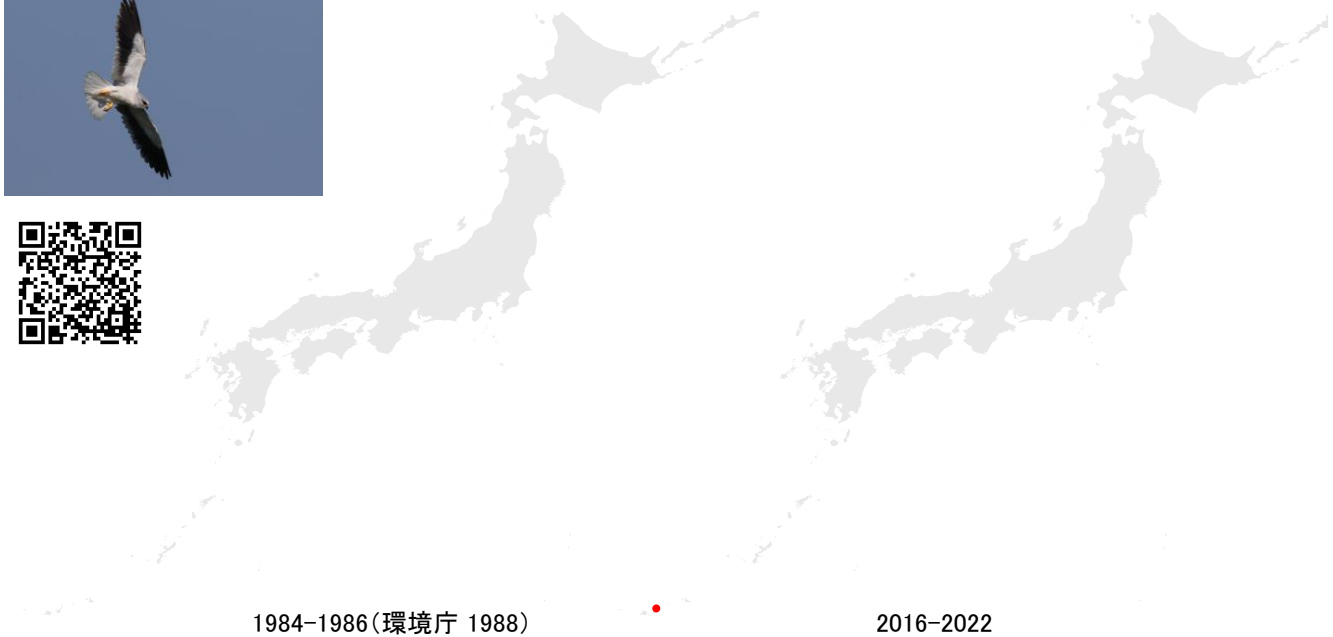


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

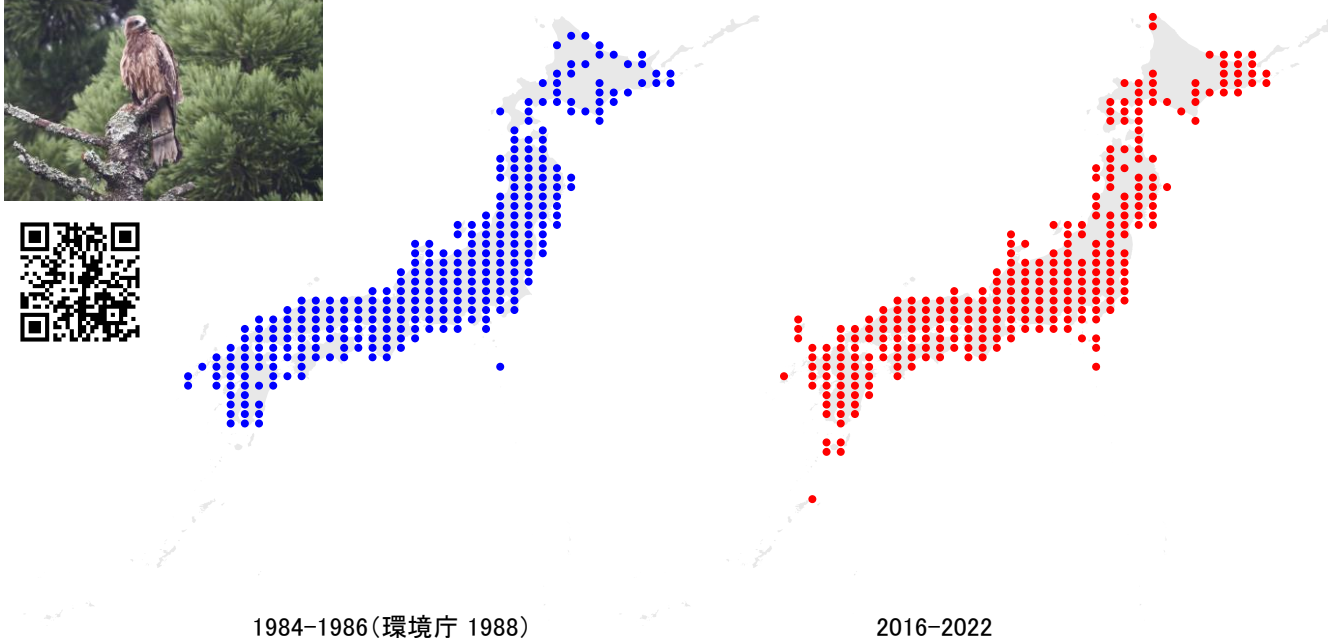
全国の海岸の崖で繁殖するが、最近では内陸で繁殖するものも増えてきた(榊原ほか 2021)。1980年代は主に西日本で越冬していたが、2010年代には南東北以南で普通に越冬するようになった。繁殖期も分布を拡大しており、関東東海地方の太平洋側を除き広く分布するようになった(植田・植村 2021)。

カタゲロトビ *Elanus caeruleus* 全長：84cm 体重：♂197-277g ♀219-343g



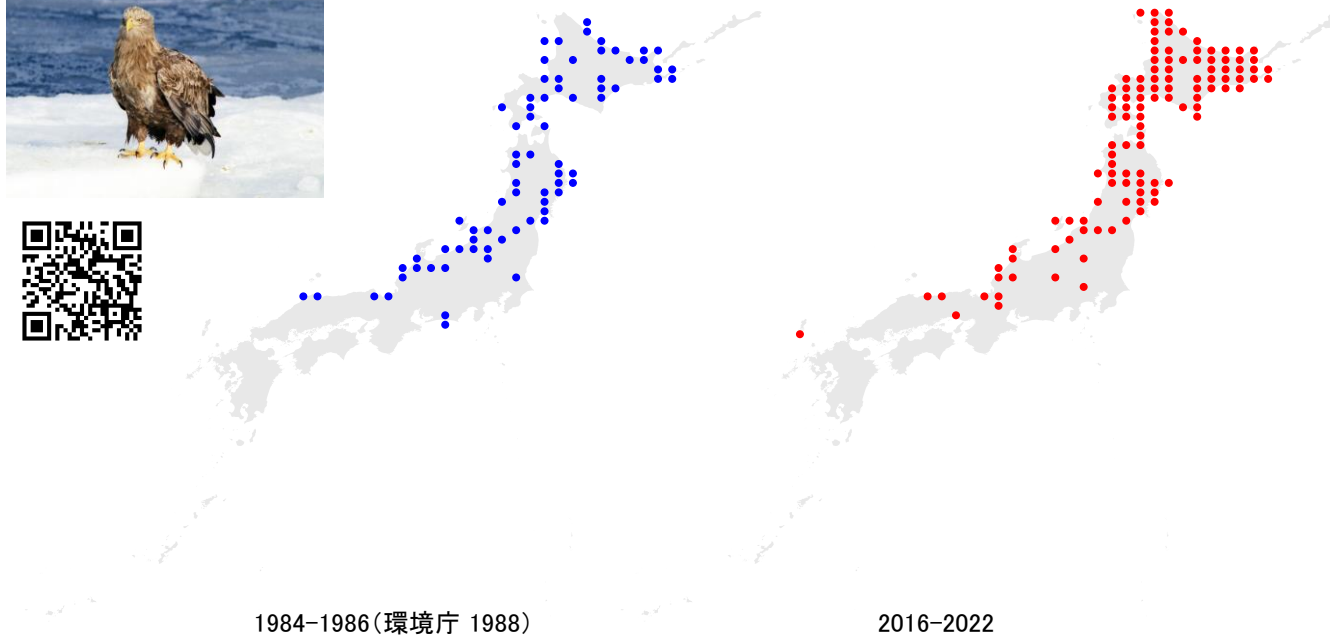
東南アジアからアフリカにかけて生息し、日本では迷鳥として記録される鳥だったが、2016 年から石垣島で繁殖が確認されるようになり(越山ほか 2020)、2010 年代の調査でも石垣島で記録された。

トビ *Milvus migrans* 全長：♂60.4±2.5cm ♀62.5±2.6cm 体重：♂857±186g ♀1132±168g



全国に留鳥として生息するが北海道北部では越冬期の記録メッシュ数は少なかった。全国鳥類繁殖分布調査では、分布に大きな変化はないものの、個体数が減っている場所が多く、その原因として漁港やゴミ捨て場の生ゴミの管理が徹底されたことで、食物が減っている可能性が指摘されている(植田・植村 2021)。

オジロワシ *Haliaeetus albicilla* 全長：70-90cm 体重：♂3075-5430g ♀4080-6920g

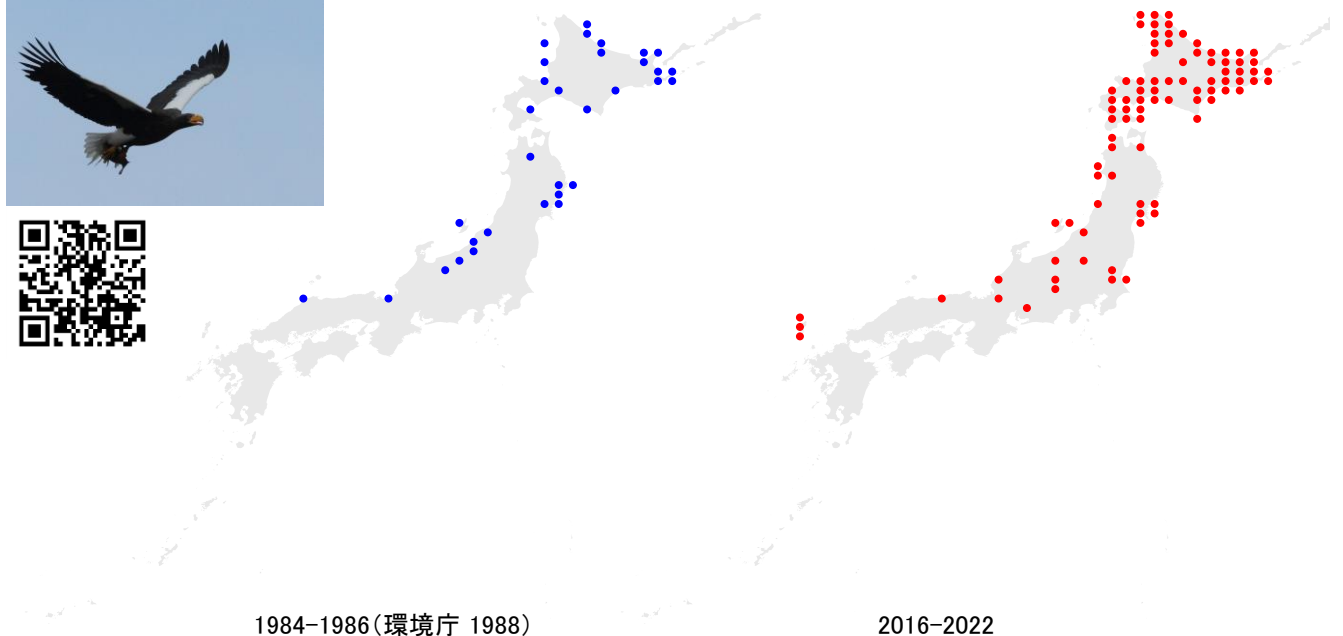


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

北海道に多く、北日本や日本海側の地域で越冬する。分布域に大きな変化はなかったが、記録メッシュ数は顕著に増加していた。繁殖分布も拡大しており(植田・植村 2021)、本州での繁殖も確認されている(吉岡ほか 2017)。

オオワシ *Haliaeetus pelagicus* 全長：85-94cm 体重：4900-9000g



1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

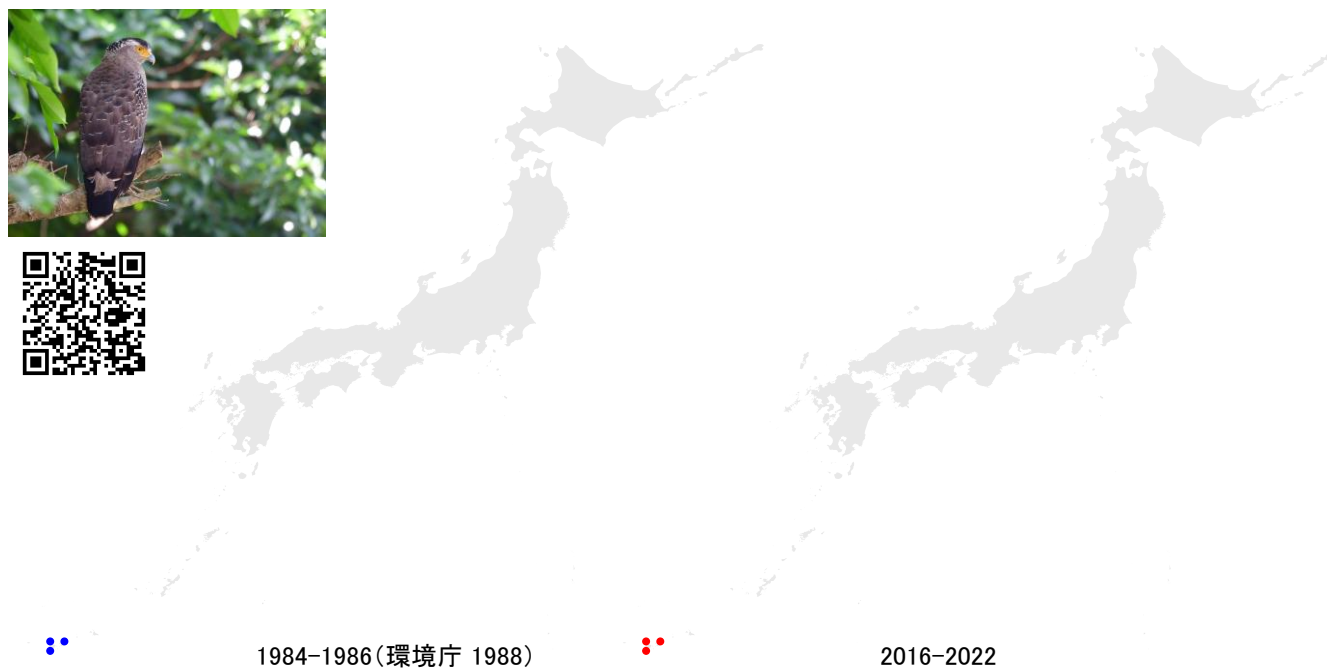
北海道に多く、北日本や日本海側の地域でも越冬する。1980年代と比べ、分布域、記録メッシュ数ともに増加した。1990年ごろまでは、スケトウダラ漁で網から外れた魚を狙って、知床半島羅臼沿岸に9割以上のオオワシが集中していたが、その漁獲量の減少とともに、各地に分散している(中川 2009)ためと考えられる。

カンムリワシ

Spilornis cheela

全長: ♂50-53cm ♀51-54cm

体重: ♂670-780g ♀700-840g



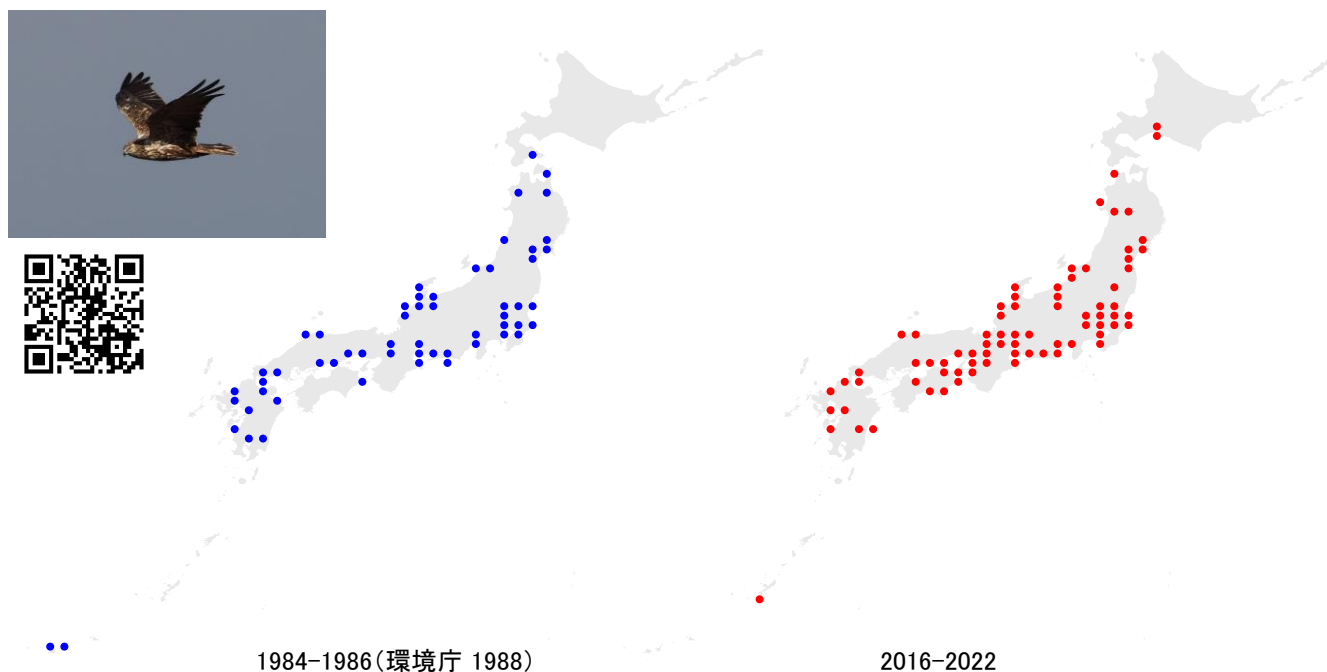
石垣島と西表島に留鳥として生息する。その分布に変化はなかったが、道路で交通事故により死んだ小動物を食べようとして、交通事故にあうカンムリワシが増加しており、減少が心配される(佐野 2012)。

チュウヒ

Circus spilonotus

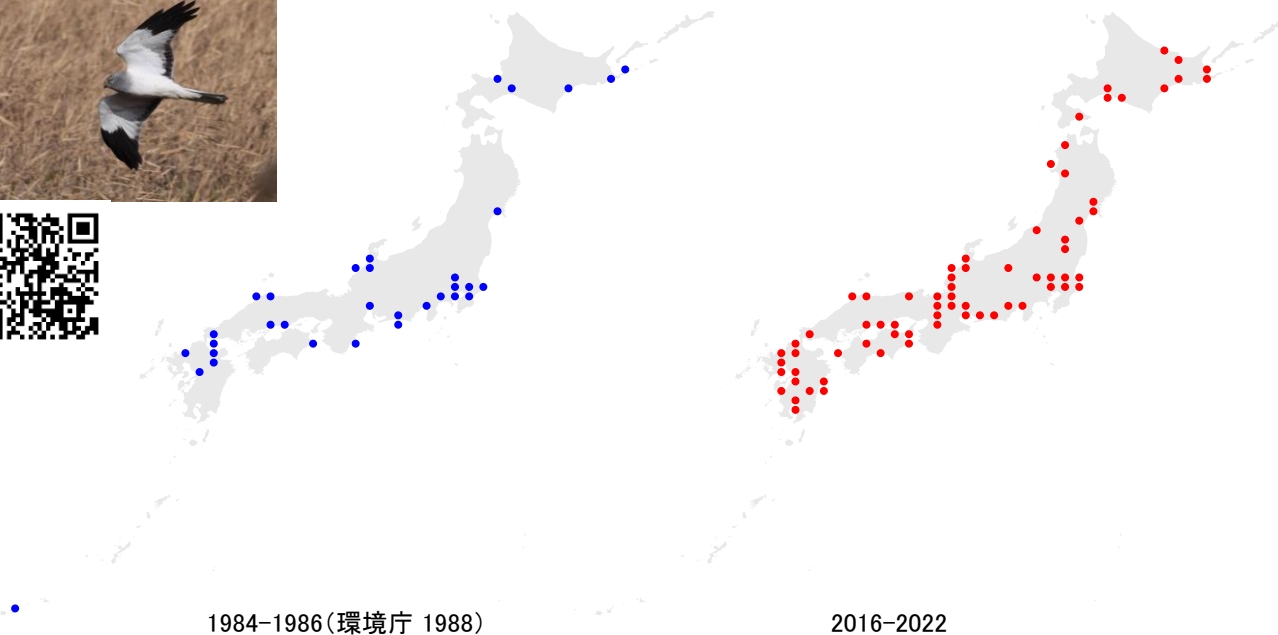
全長: ♂48cm ♀58.2cm

体重: 498-844g



本州以南のアシ原で越冬する。関東、関西、中国地方などでわずかに増加していた。チュウヒは主にカモ類など大型鳥類を捕食するが(平野ほか 2005)、これらの種は全国的に分布が拡大していた。そのため採食できる場所が増えているのかもしれない。

ハイロチュウヒ *Circus cyaneus* 全長：43-53cm 体重：200-540g

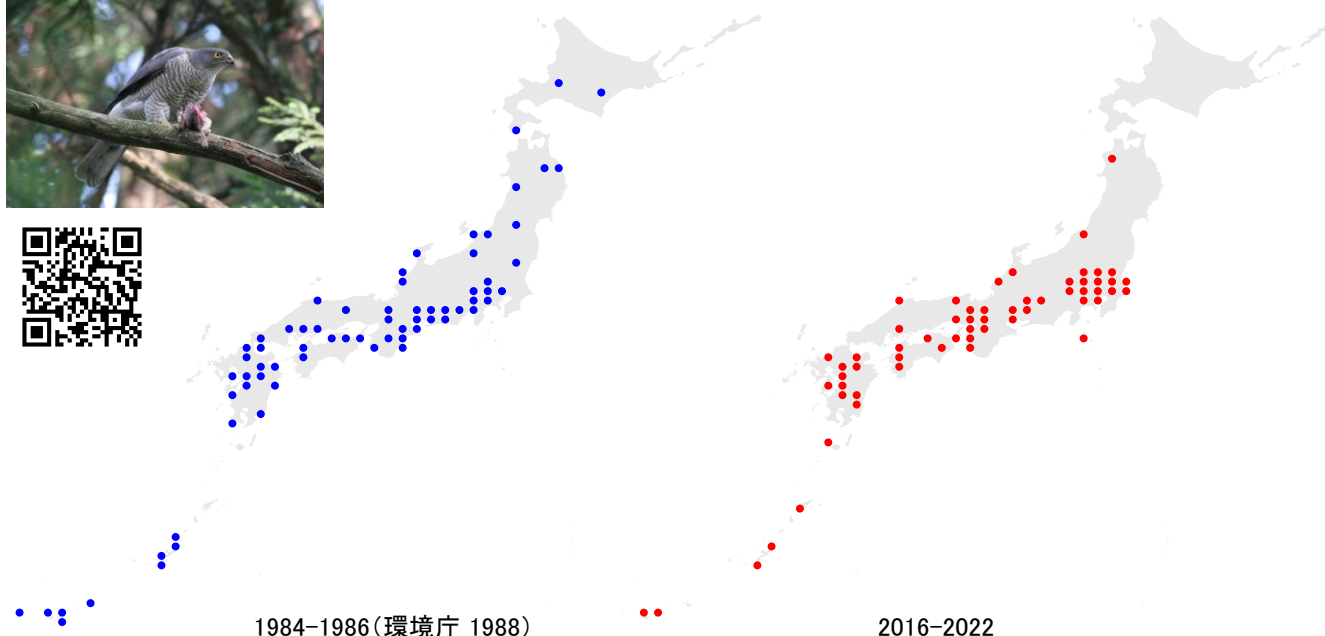


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

全国の草原，農耕地などで越冬し，ヒバリなど小鳥を主に捕食する(平野ほか 2005)。1980年代と比較して2010年代は全国的にやや増加していた。

ツミ *Accipiter gularis* 全長：♂26.5cm ♀30.4cm 体重：♂90g ♀135.8g

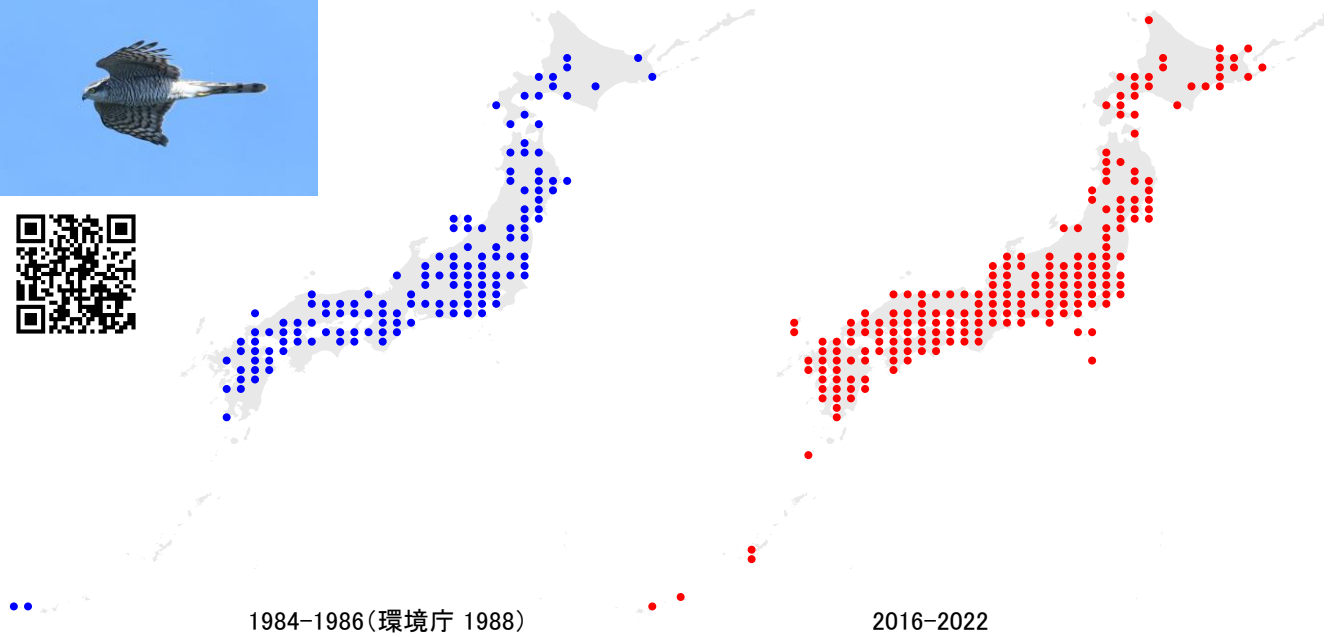


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

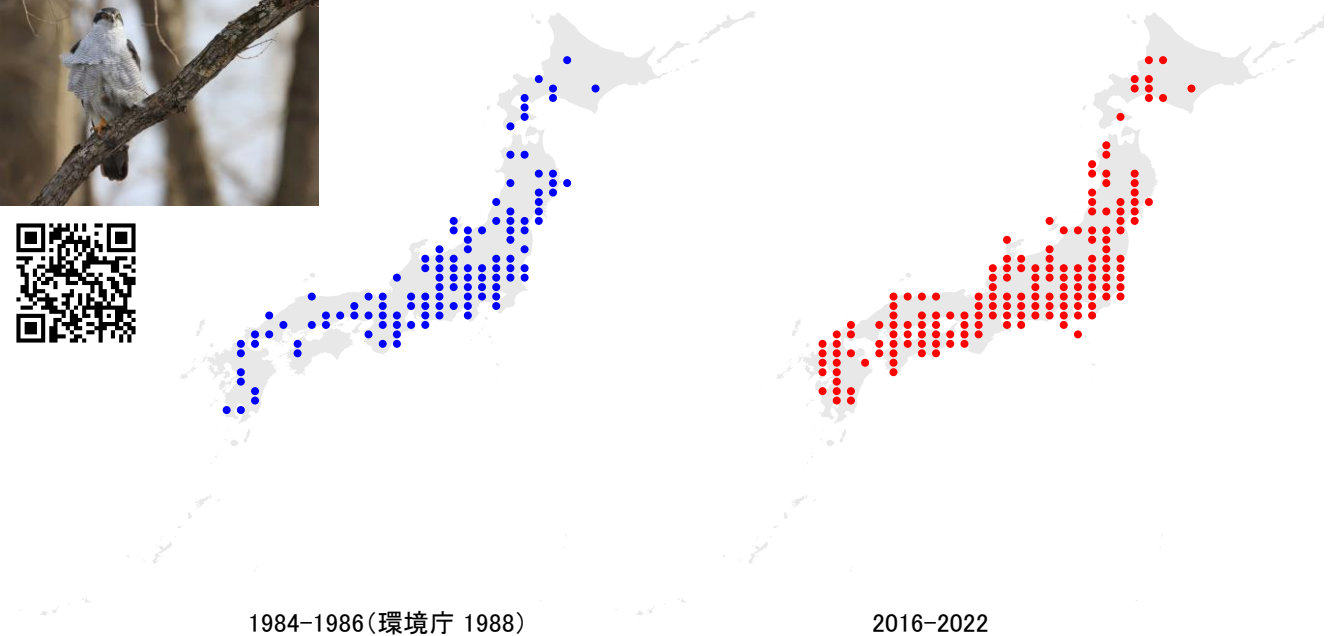
全国の森林，緑地で留鳥もしくは夏鳥として繁殖する。越冬期は主に関東以南で越冬する。1980年代と比べて，関東以北の記録が減少したが，ハイタカとの識別の難しい種であり，識別についての知見の少なかった1980年代の記録がハイタカの間違いであった可能性もあり，注意が必要である。

ハイタカ *Accipiter nisus* 全長: ♂30.2-32.7cm ♀37.2-40.2cm 体重: ♂107-138g ♀206-264g



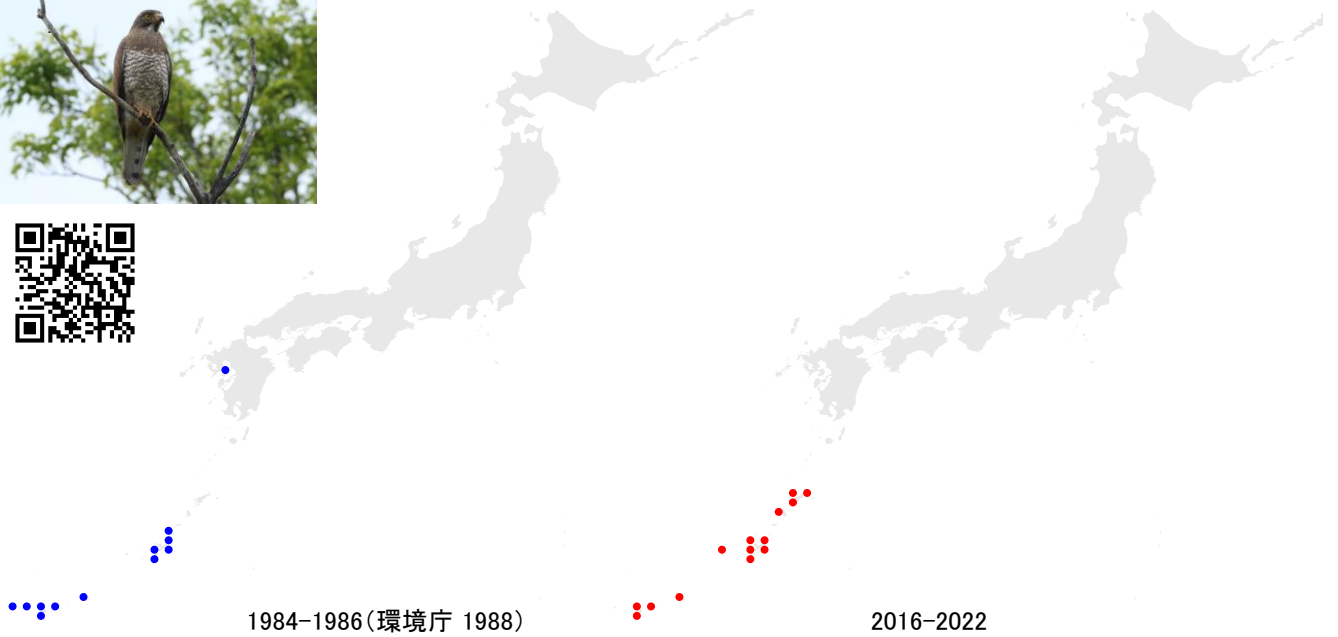
本州以北の森林で繁殖し、越冬期にはより開けた環境にも生息する。記録メッシュ数は1980年代と比べ大きく増加していた。繁殖期に減少が指摘されている(植田・植村 2021)こととは異なっていた。大陸で繁殖する個体が日本に渡ってきていると考えられるので(伊関 2004), そうした個体が増加している可能性がある。

オオタカ *Accipiter gentilis* 全長: ♂44.5-49.6cm ♀51.8-57.2cm 体重: ♂602-848g ♀929-1265g



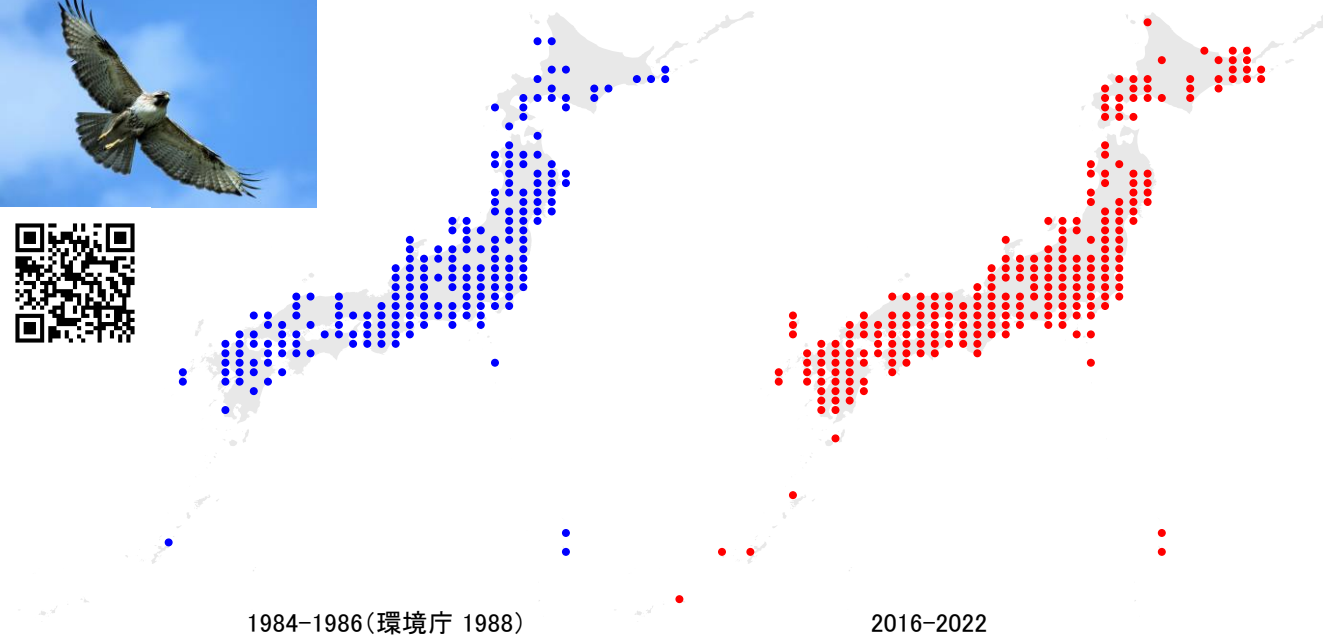
島嶼部を除く全国の低地から山地にかけての森林に生息する。1980年代と比べ特に西日本の記録メッシュ数が増加していた。オオタカは2000年代にかけて増加し、特に西日本で顕著なので(環境省野生生物課 2014), それを反映していると考えられる。

サシバ *Butastur indicus* 全長: ♂38.1-43.1cm ♀40.0-41.5cm 体重: ♂390-500g ♀430-575g



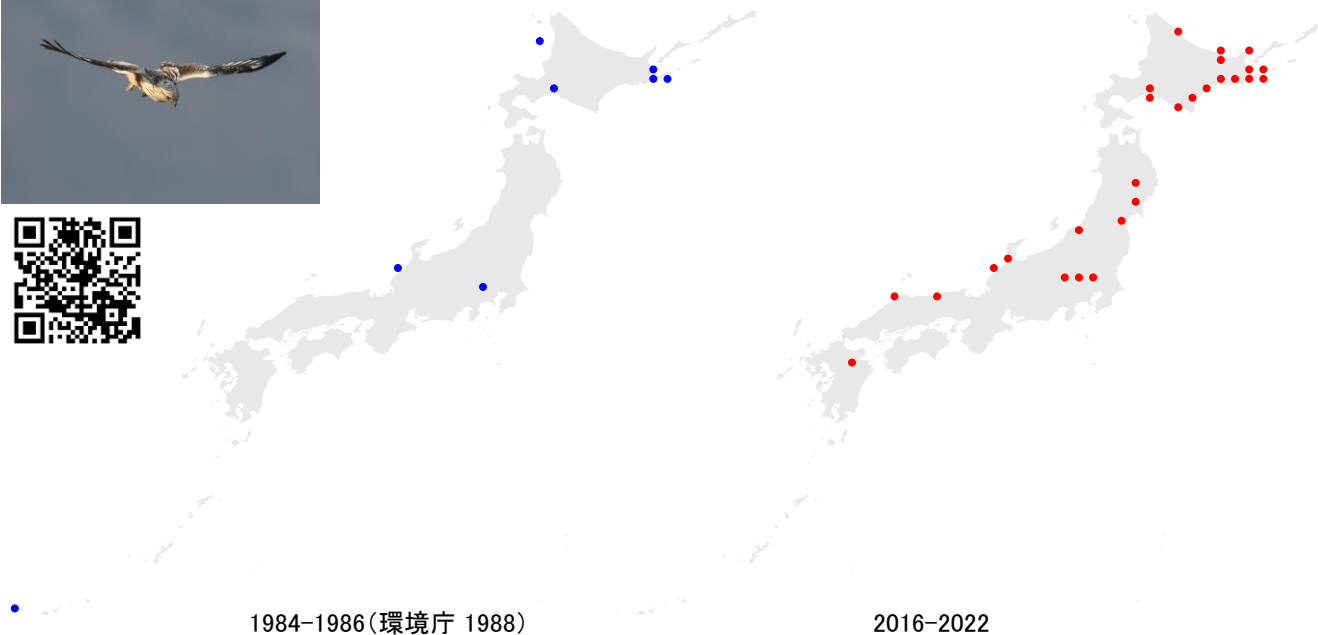
本州から九州にかけて夏鳥として繁殖し、南西諸島以南で越冬する。1980年代は、奄美大島や徳之島で越冬していなかったように見えるが、調査が行なわれていなかったため、分布の北上を意味するわけではない。

ノスリ *Buteo buteo* 全長: ♂50.3-53.0cm ♀53.5-59.5cm 体重: 748-970g



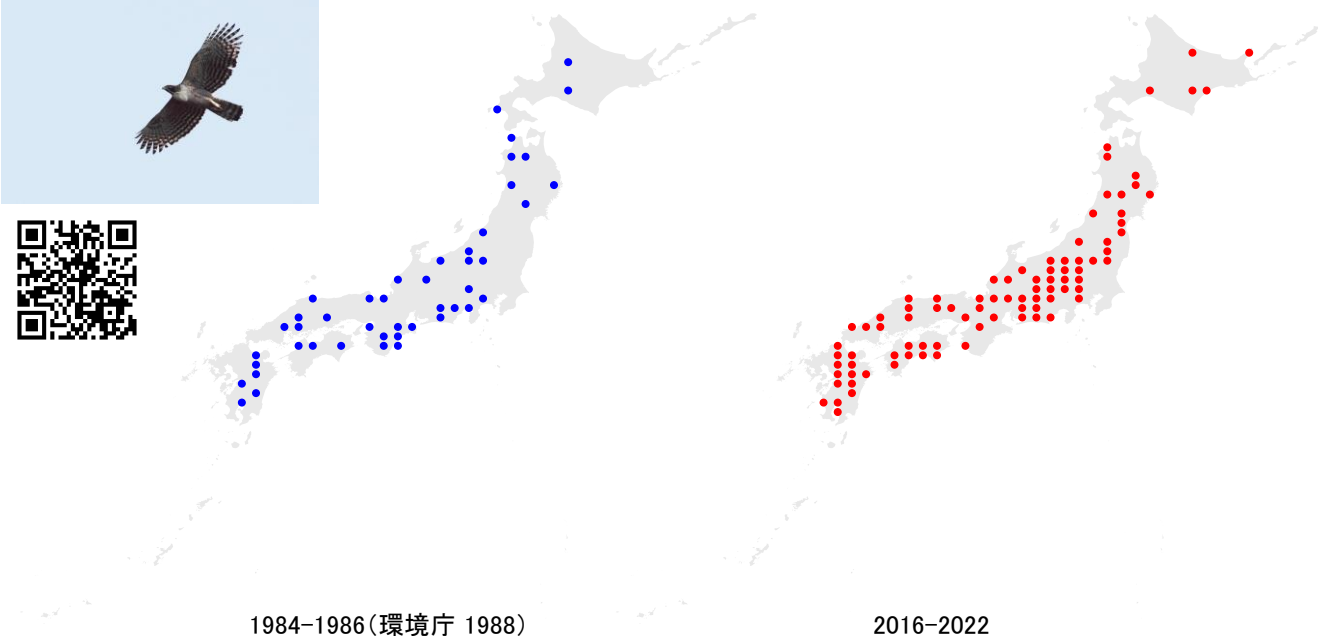
全国の山地や草原などで越冬する。西日本で記録メッシュ数の増加が見られた。繁殖期は主に東日本の山地で繁殖し、同様に記録の増加が見られている(植田・植村 2021)。

ケアシノスリ *Buteo lagopus* 全長: ♂53-57cm ♀58-61cm 体重: ♂730-990g ♀845-1152g



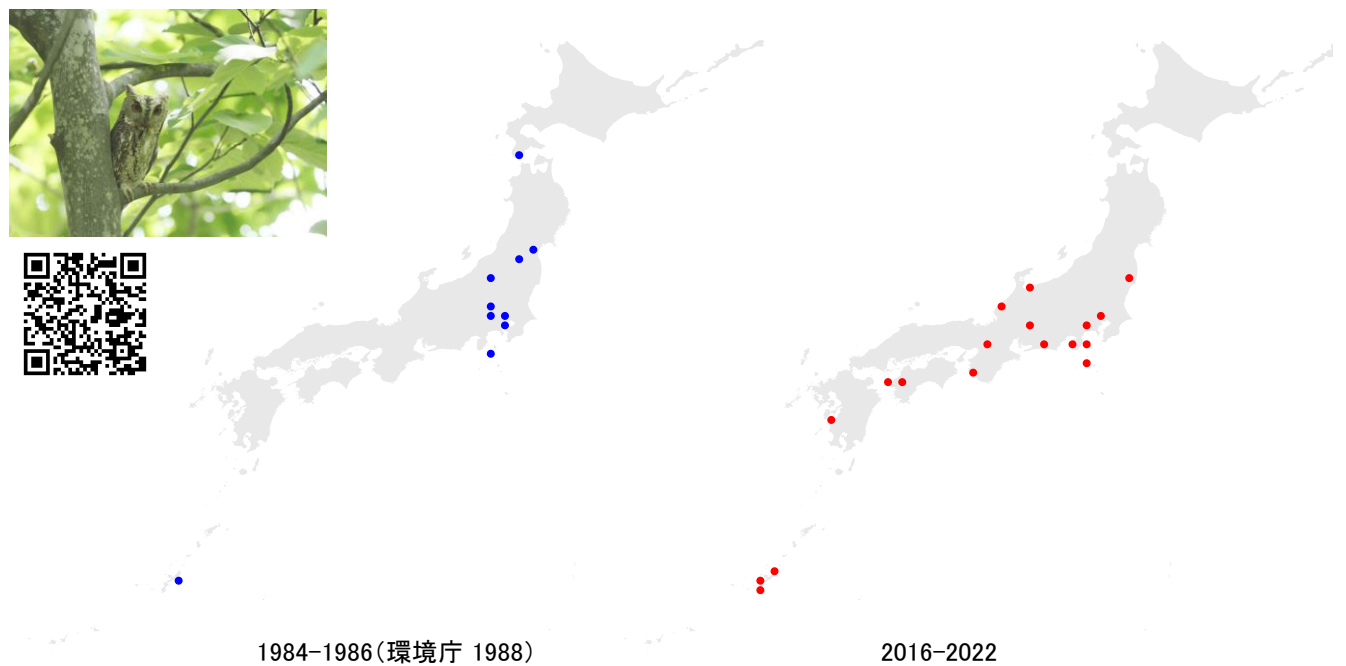
主に北日本で越冬するが、年により西日本でも多く記録されることがある。1980年代と比べて記録メッシュ数が大きく増加していた。

クマタカ *Nisaetus nipalensis* 全長: ♂70-73cm ♀73-81cm 体重: ♂2300-2700g ♀2500-3900g



九州以北の山地の森林で留鳥として生息する。森林地帯に広く分布していることがわかってきており、そうした知見の集積が、記録メッシュ数の増加につながったものと考えられる。

オオコノハズク *Otus lempiji* 全長：23-25cm 体重：120-200g

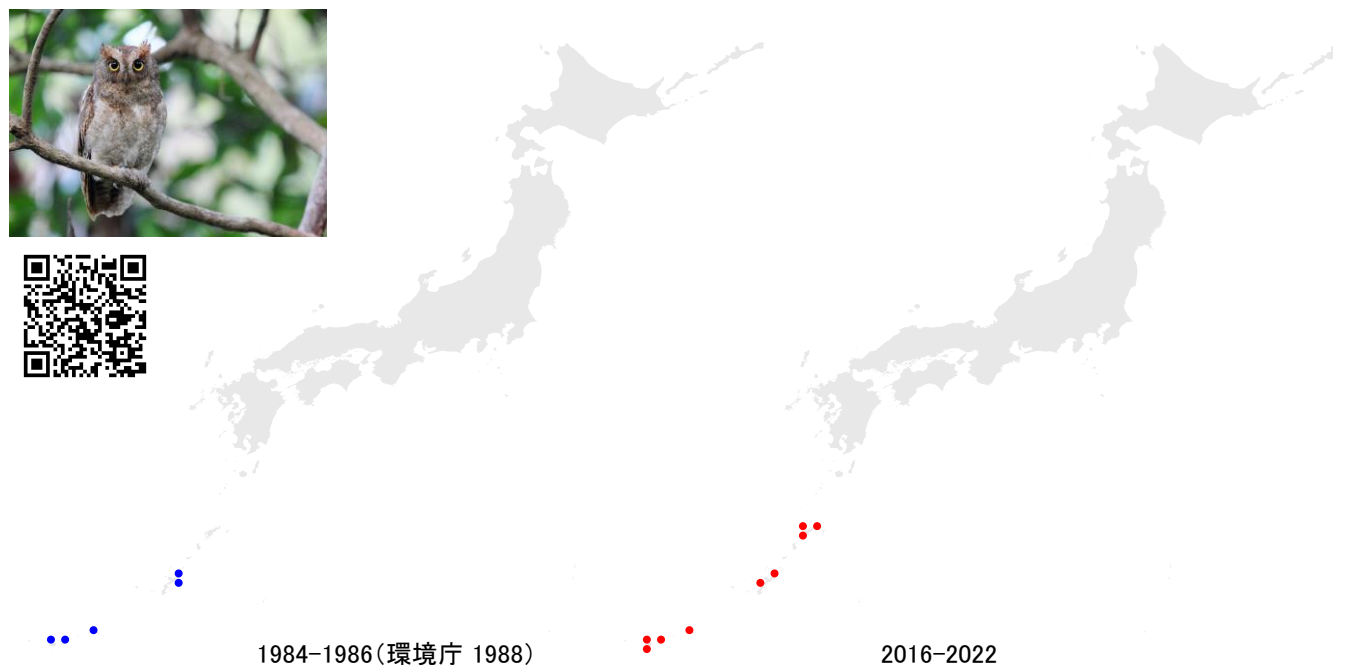


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

全国で留鳥として繁殖する。夜行性の鳥のため、記録は難しいが、トレイルカメラの普及で広く生息していることがわかってきて、それが2010年代に全国で広く確認されたことにつながっている。

リュウキュウコノハズク *Otus elegans* 全長：18-20cm 体重：♂70.0-102.0g ♀78.0-111.5g

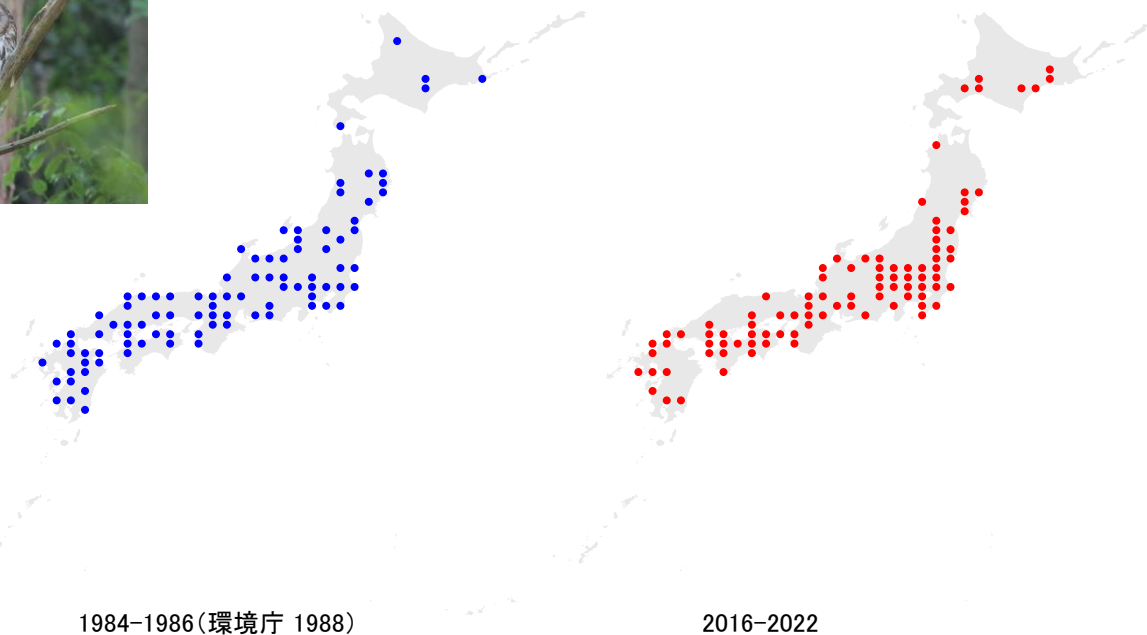


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

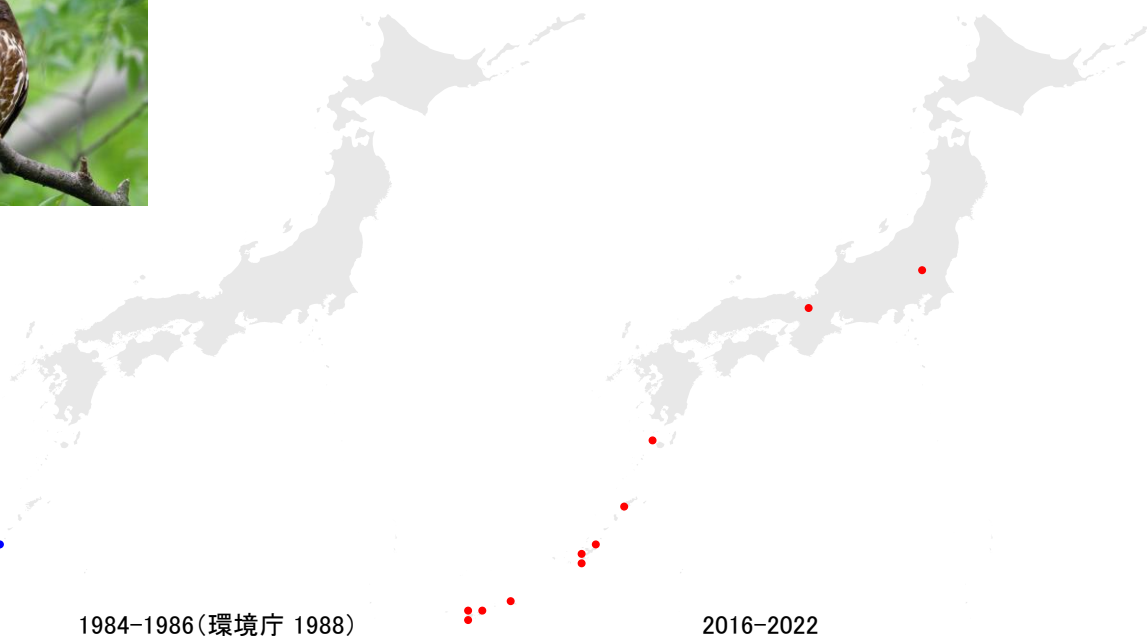
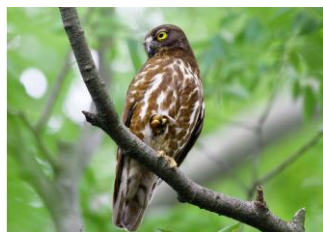
留鳥として南西諸島で繁殖する。1980年代には奄美大島での記録がなく、分布が北上しているように見えるが、奄美大島などで1980年代に調査が行なわれなかったため、分布の変化を示すわけではない。

フクロウ *Strix uralensis* 全長：50cm 体重：600-800g



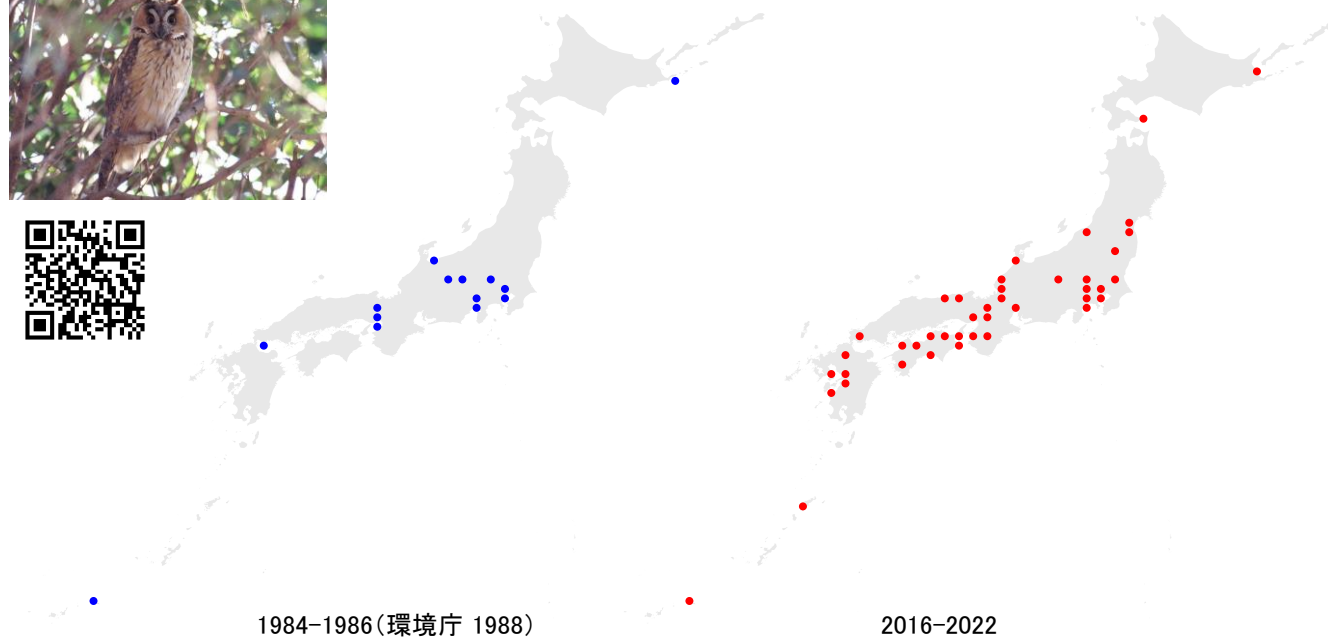
九州以北で留鳥として生息する。1980年代と2010年代で分布に大きな変化はなかった。繁殖期の調査では増加の可能性が示されている(植田・植村 2021)。

アオバズク *Ninox scutulata* 全長：29cm 体重：185-227g



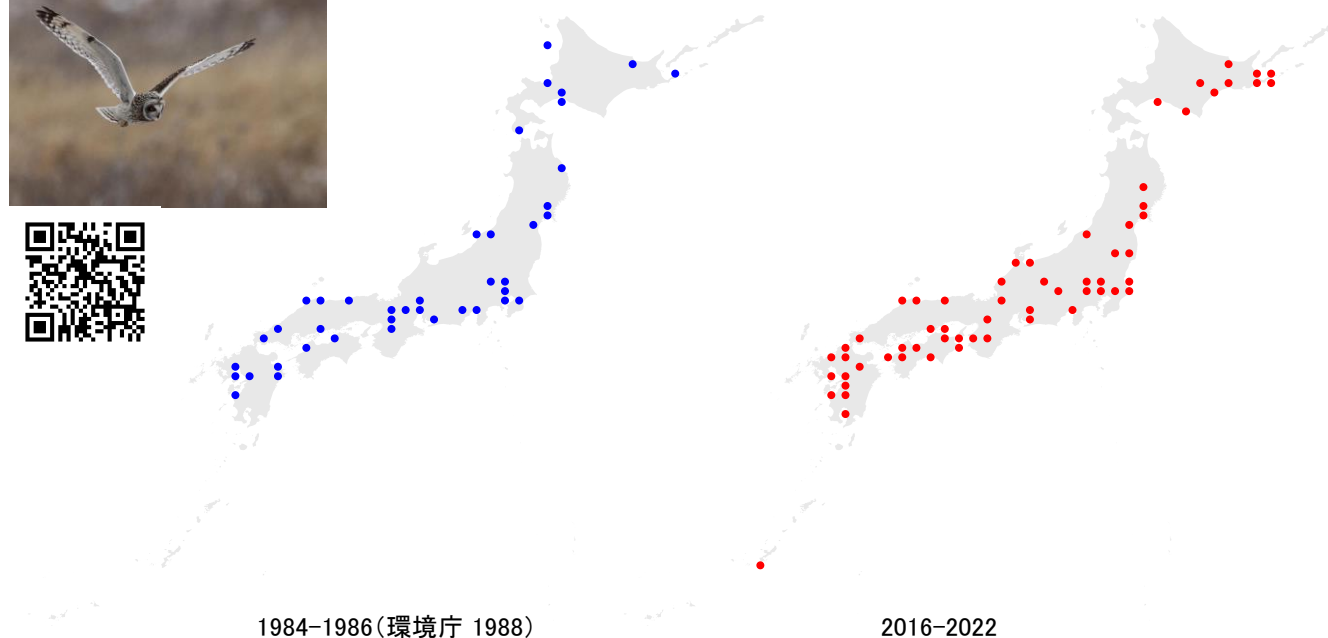
夏鳥として全国で繁殖し、南西諸島で越冬する。本土部でも越冬することがあり、近畿地方と関東地方で記録があった。夜行性の鳥で、また越冬期は繁殖期のように鳴かず、目立たないため、実際にはもっと多く越冬している可能性がある。

トラフズク *Asio otus* 全長：37cm 体重：300g



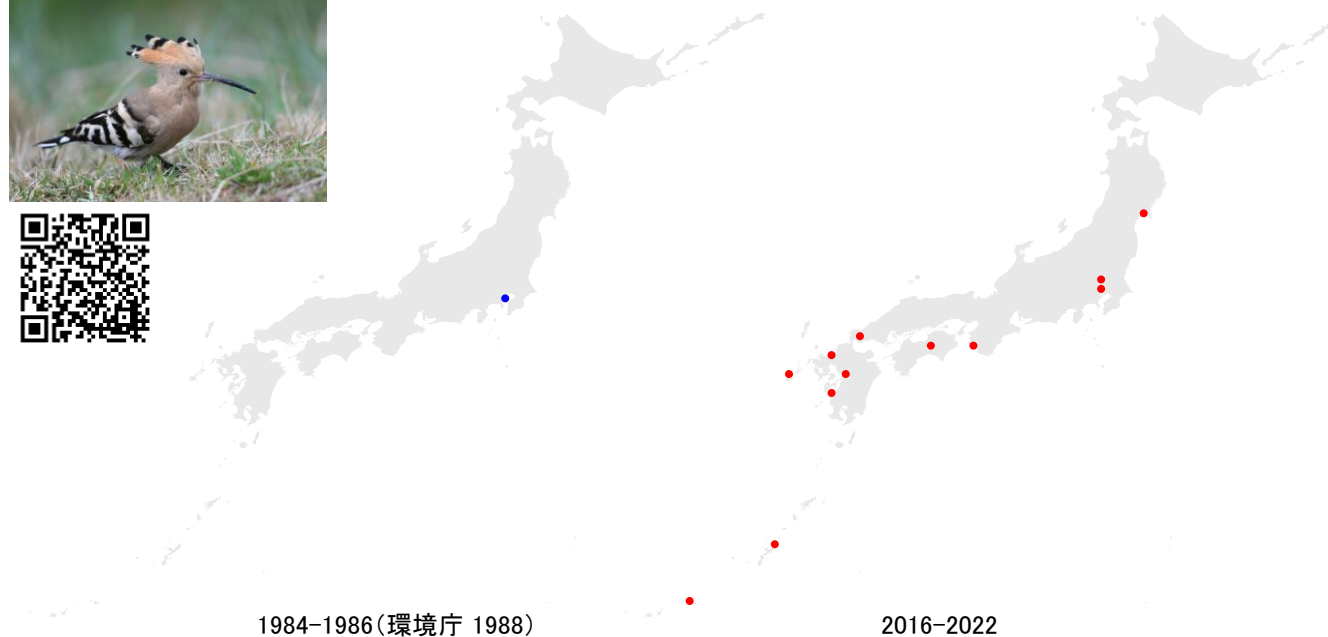
日本では全国で越冬し、局所的に繁殖もしている。1980年代に比べて、2010年代は記録メッシュ数が大幅に増加したが、夜行性で目立たない鳥のため、実際の分布変化を反映しているかどうかはよくわからない。

コミズク *Asio flammeus* 全長：38cm 体重：350g



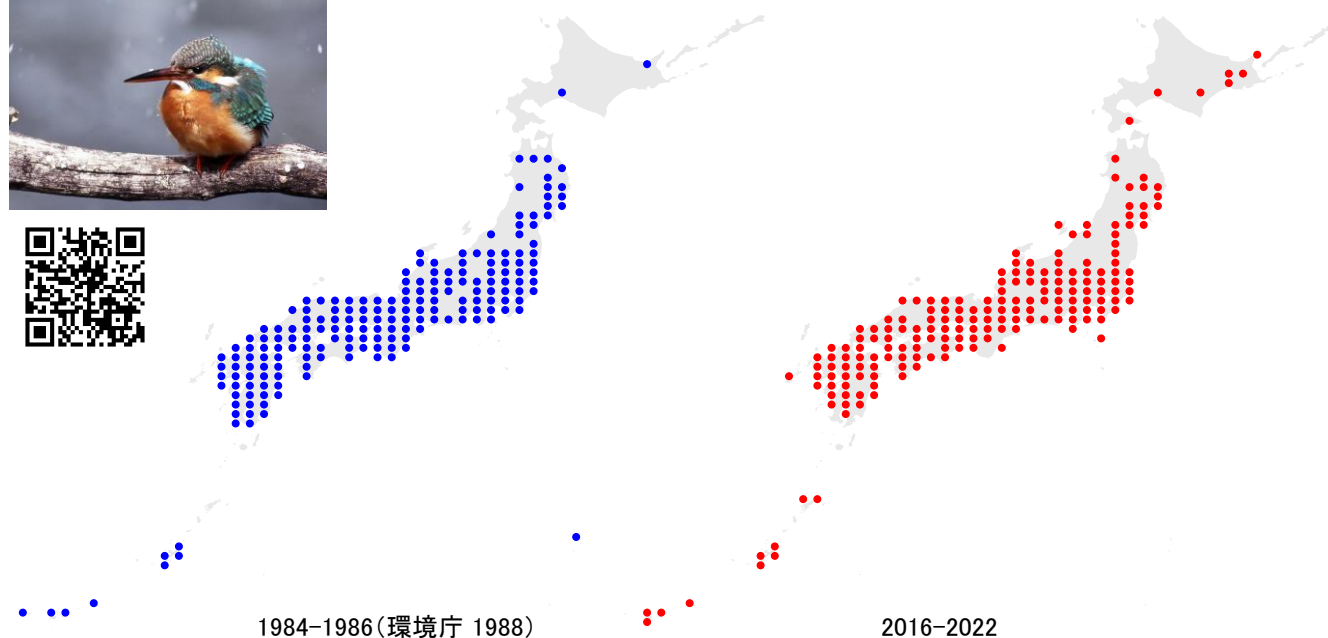
全国の草原で越冬し、2019年には北海道大黒島で繁殖が確認されている(田口ほか 2020)。1980年代に比べて、2010年代は記録メッシュ数が増加していたが、夜行性で目立たない鳥のため、実際の分布変化を反映しているかどうかはよくわからない。

ヤツガシラ *Upupa epops* 全長：25-30cm 体重：70g



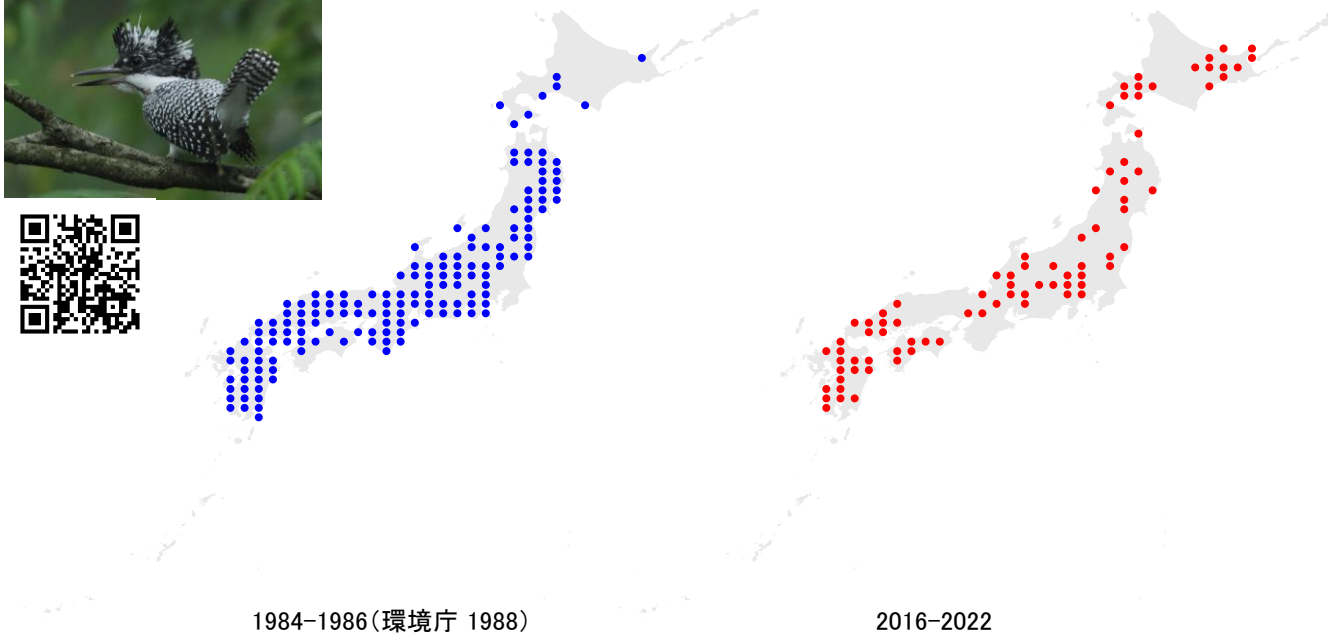
主に旅鳥として観察されるが、越冬することもある。1980年代は関東の1例のみだったが、2010年代は南東北から南西諸島まで12メッシュで記録された。長野、広島では繁殖例もある(飯田・田中 1993)。

カワセミ *Alcedo atthis* 全長：17cm 体重：30g



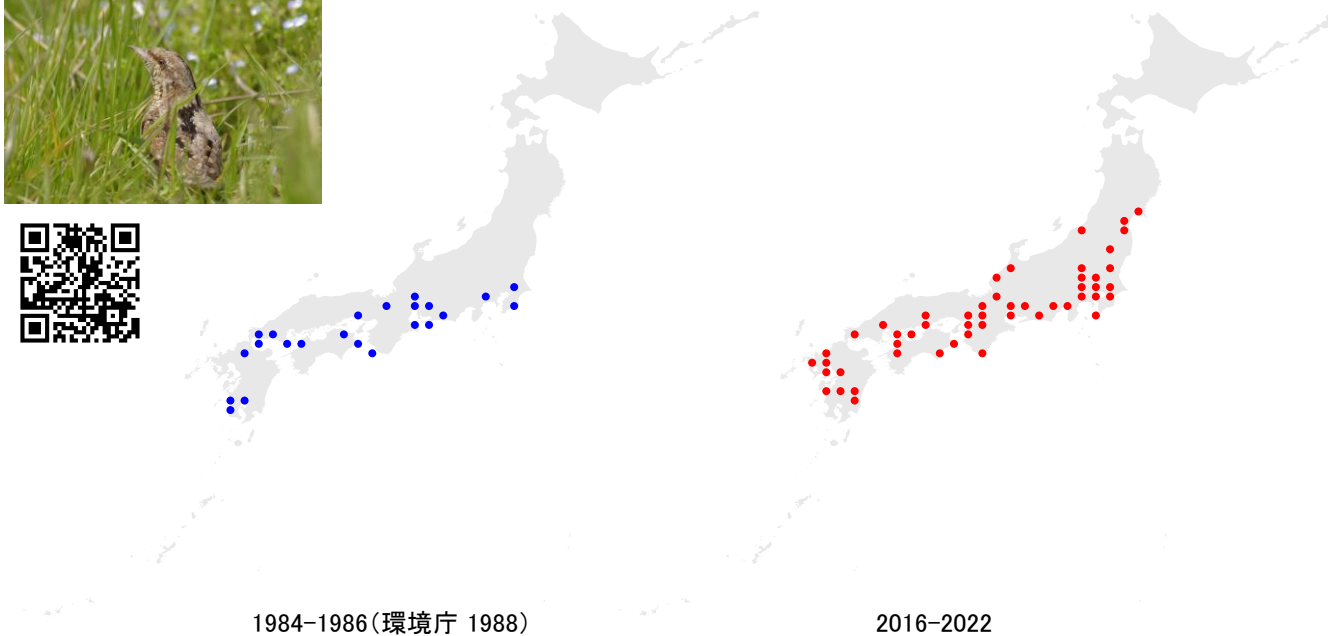
全国で繁殖し、主に本州以南で越冬する。北海道では夏鳥で、冬期の記録は少ないが、1980年代と比べ2010年代の記録メッシュ数は増加していた。

ヤマセミ *Megaceryle lugubris* 全長：41-43cm 体重：240-305g



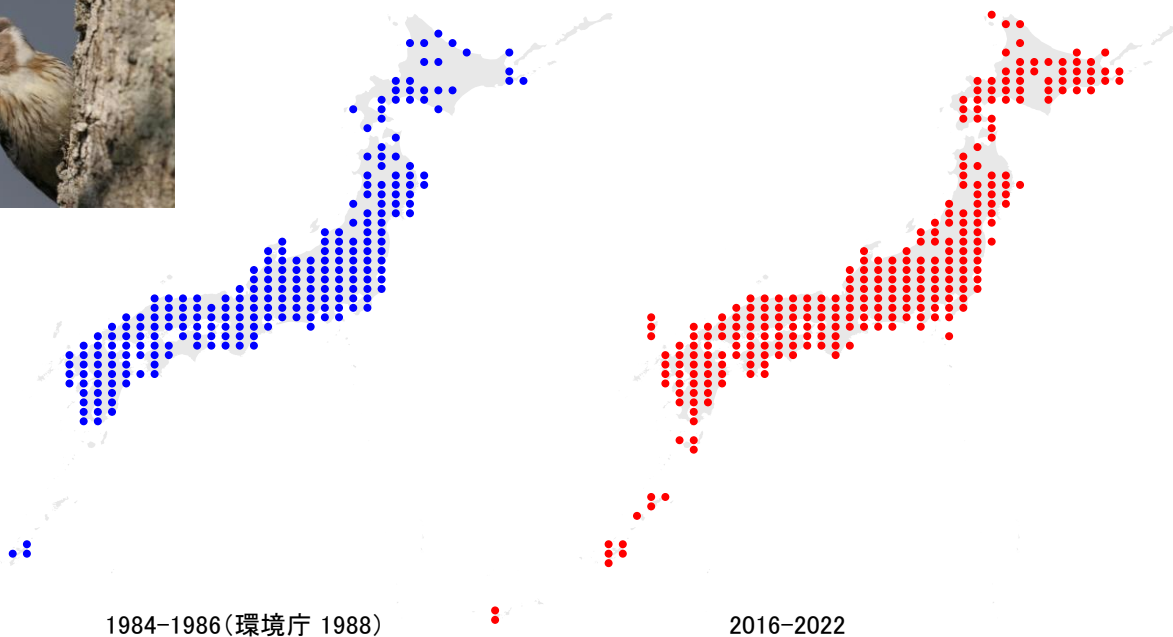
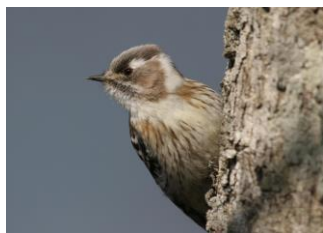
九州以北で留鳥として生息する。1980年代と比べ、特に本州の記録メッシュ数の減少が顕著である。繁殖期も北海道を除き減少していることが明らかにされており(植田・植村 2021), 越冬期にも同様の傾向が認められた。

アリスイ *Jynx torquilla* 全長：16.4-18.3cm 体重：♂32.6-46.0g ♀37.7-42.4g



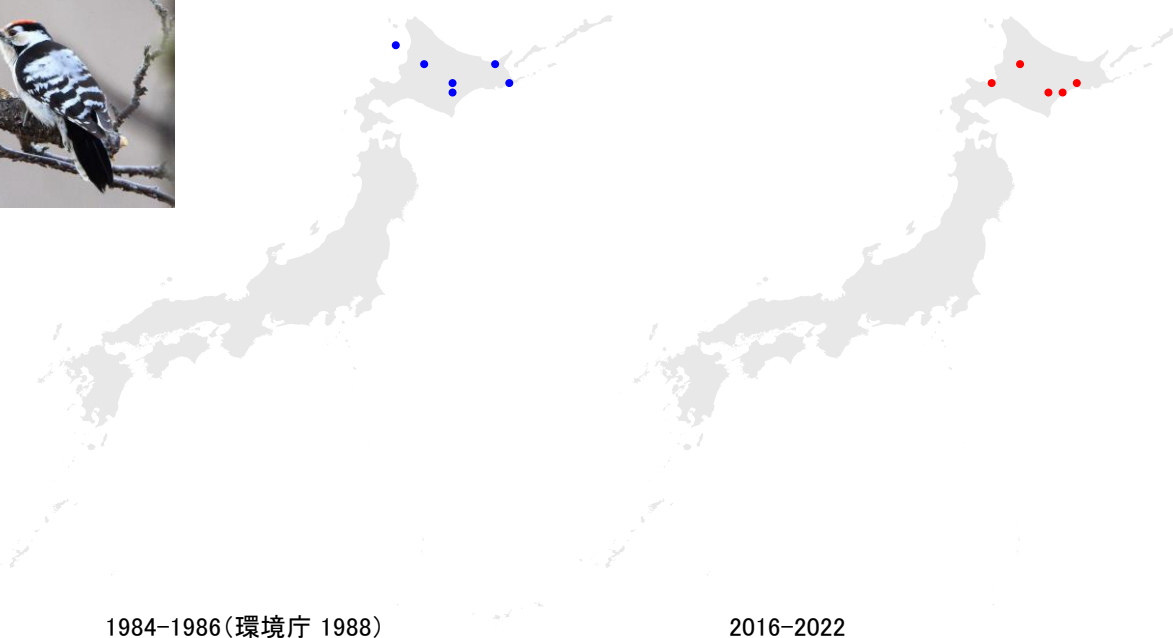
東北地方以北で繁殖し、以南で越冬する。1980年代は関東以南で越冬していたのに対し、2010年代は南東北でも記録されるなど、分布が北上していた。

コゲラ *Dendrocopos kizuki* 全長: 15cm 体重: ♂17.8-22.8g ♀19.3-26.4g



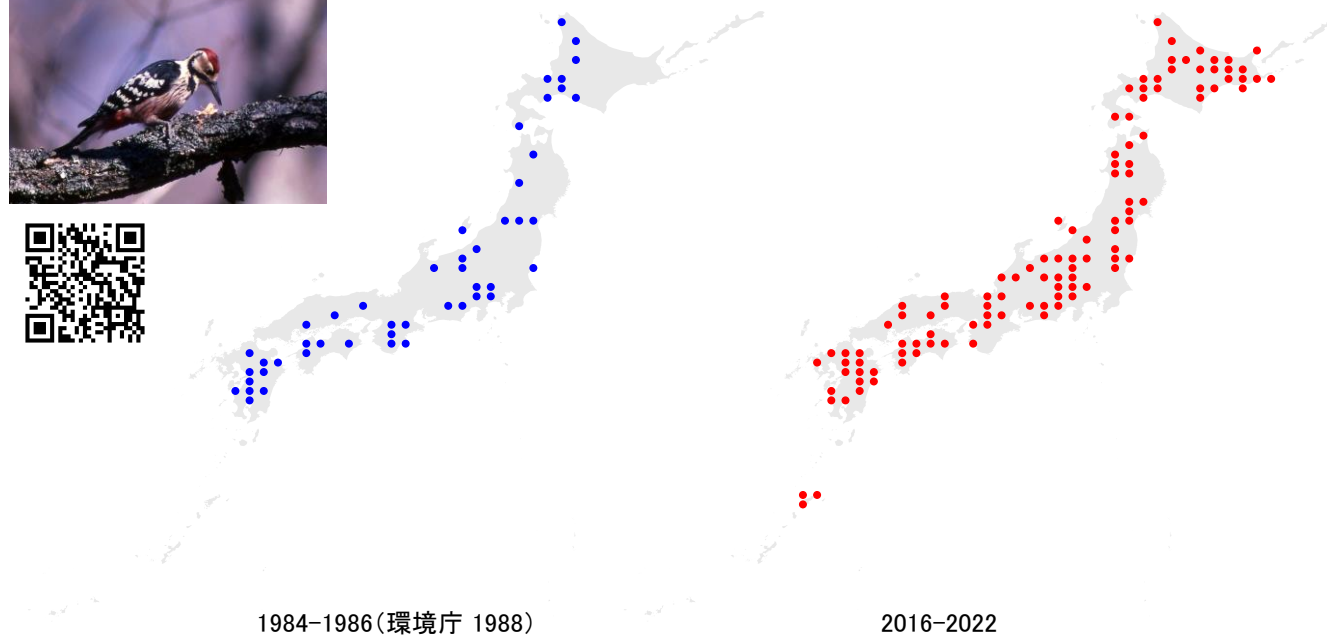
全国に留鳥として生息する。1980年代と比べて北海道東部や南西諸島で記録メッシュ数が増加していた。南西諸島北部については、1980年代に調査が行なわれておらず、分布が広がったことを示すわけではない。

コアカゲラ *Dendrocopos minor* 全長: 16cm 体重: 17-26g



北海道の平野部の緑地, 農耕地の残存林, 河畔林などに留鳥として局所的に生息する。1980年代と2010年代で分布や記録メッシュ数に大きな変化はなかった。

オオアカゲラ *Dendrocopos leucotos* 全長：28cm 体重：92-158g

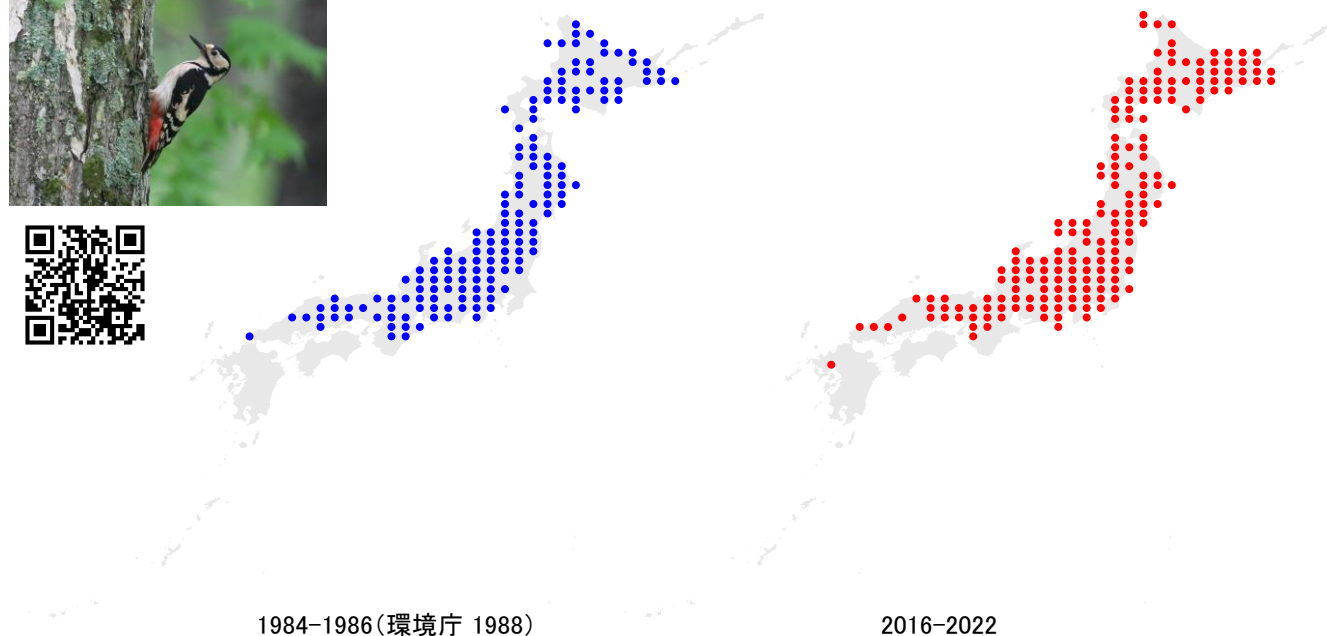


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

北海道から奄美大島にかけて、留鳥として生息する。1980年代と比べ、全国的に記録メッシュ数が増加しており、これは繁殖期も同様である(植田・植村 2021)。奄美大島は1980年代には調査が行なわれておらず、新たに分布するようになったことを示しているわけではない。

アカゲラ *Dendrocopos major* 全長：24cm 体重：61.0-86.0g

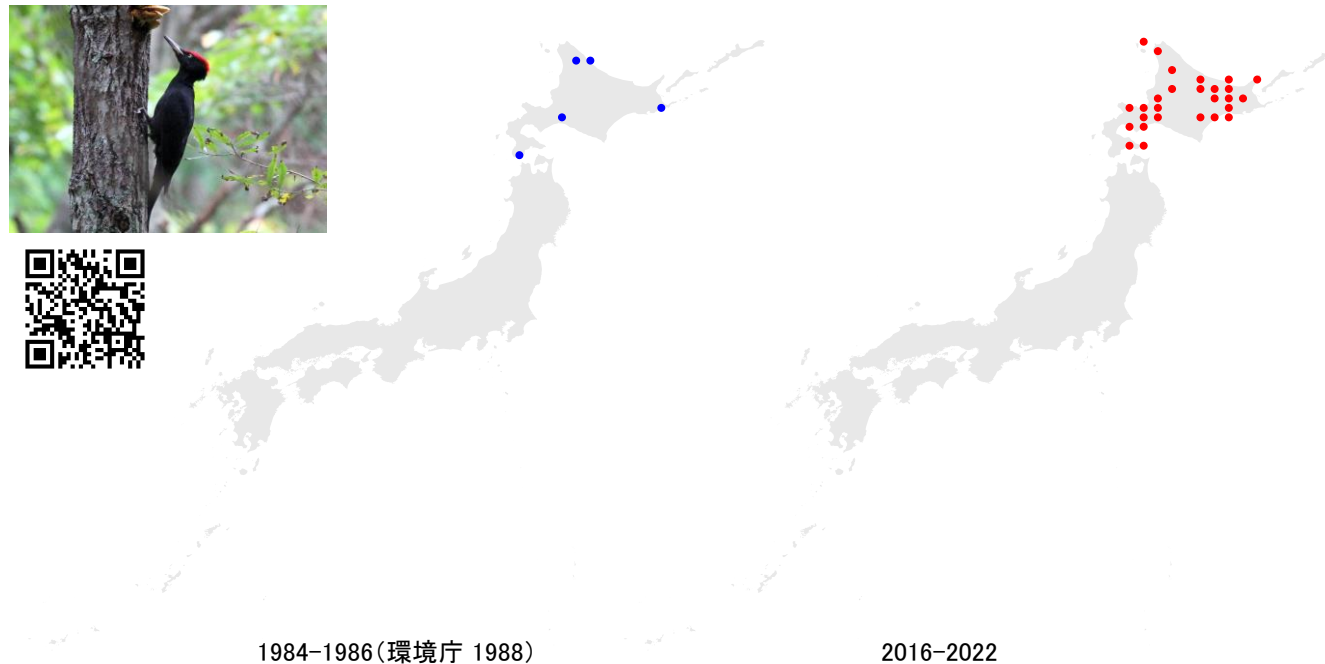
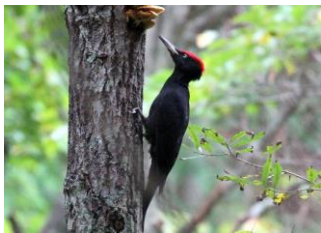


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

北海道および本州に留鳥として生息する。繁殖期も同様だが、分布が西に広がる傾向があり(植田・植村 2021)、冬期には九州でも記録されるようになった。また、関東地方の平野部は繁殖期には生息しないが、越冬期には生息するようになった。

クマゲラ *Dryocopus martius* 全長：45cm 体重：250-370g

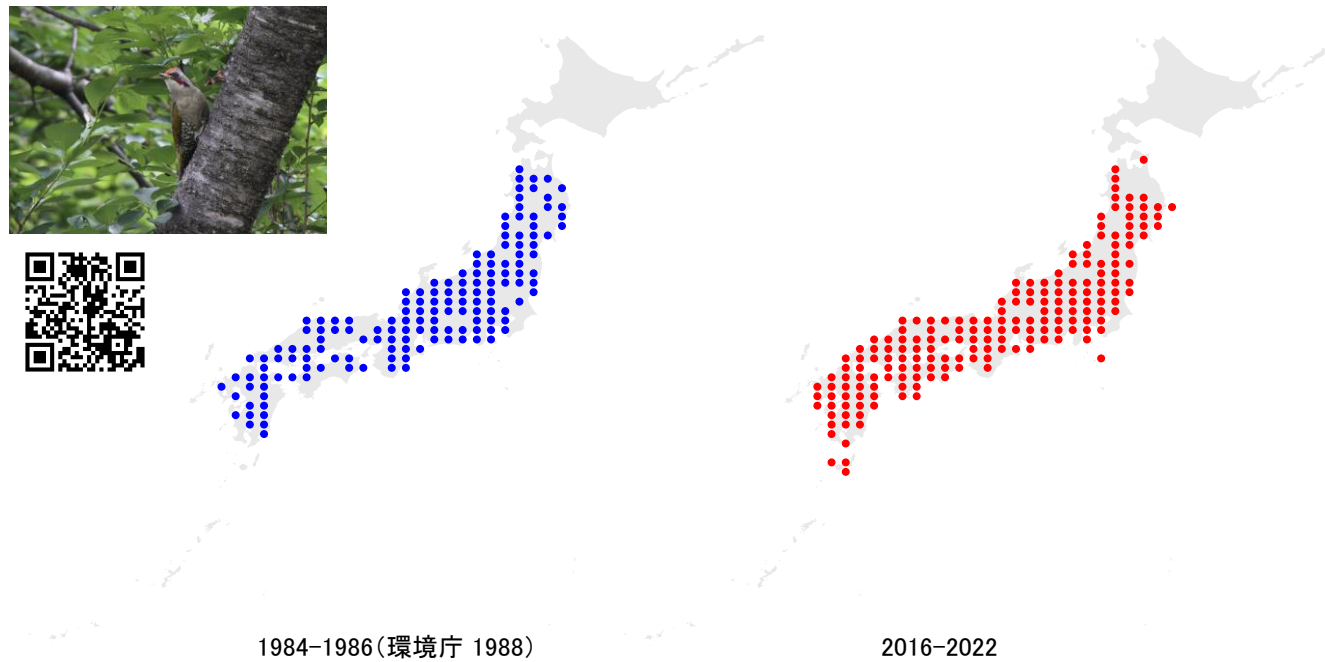
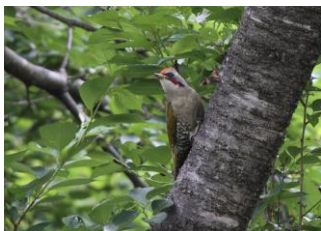


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

北海道および本州の一部に留鳥として生息する。本州での記録はなかったが、北海道の記録メッシュ数は1980年代と比べて大幅に増加した。同様の傾向は繁殖期でも見られている(植田・植村 2021)。

アオゲラ *Picus awokera* 全長：29cm 体重：103-138g

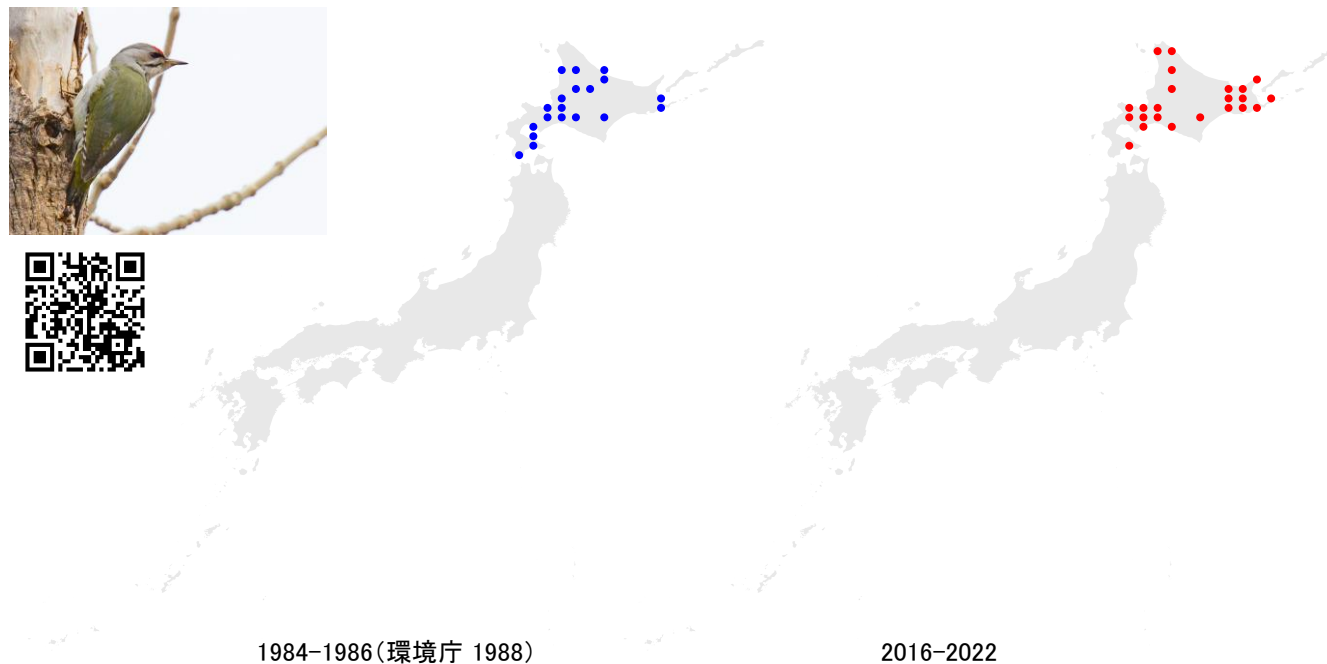


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

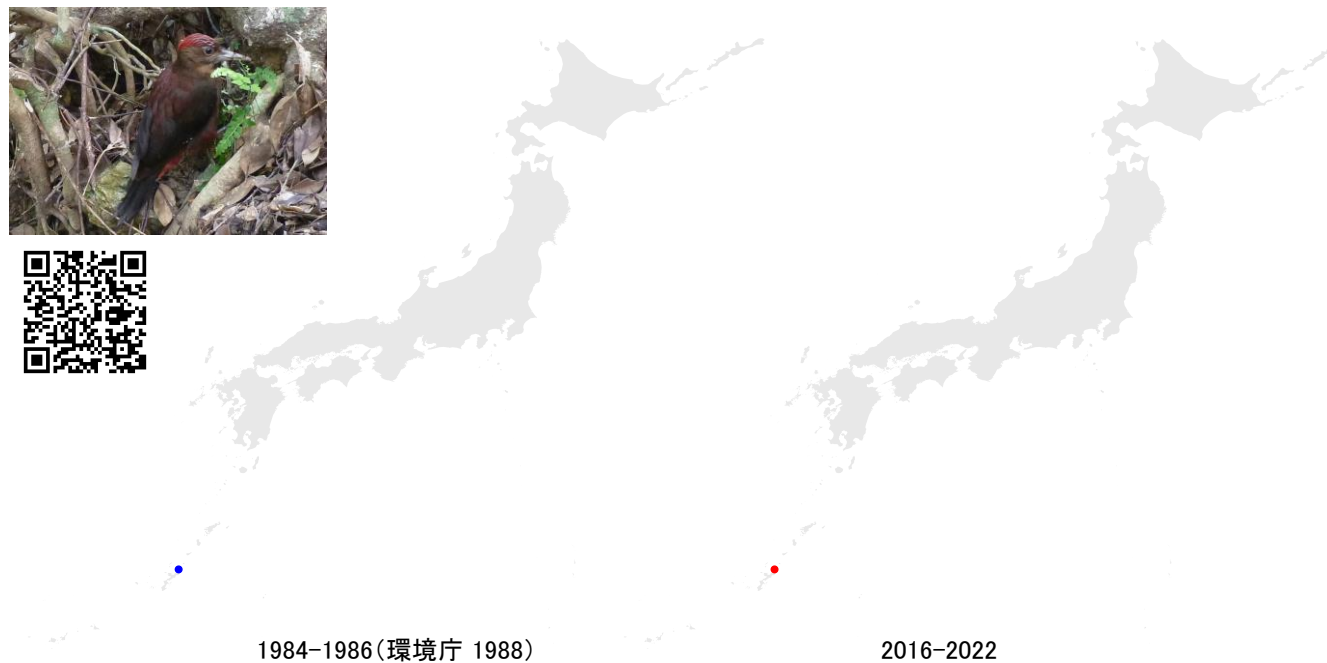
本州から九州にかけて留鳥として生息する。都市部の小規模な緑地にも生息するようになっており、記録メッシュ数は増加していた。同様の傾向は繁殖期でも見られている(植田・植村 2021)。

ヤマゲラ *Picus canus* 全長：26-30cm 体重：120-170g



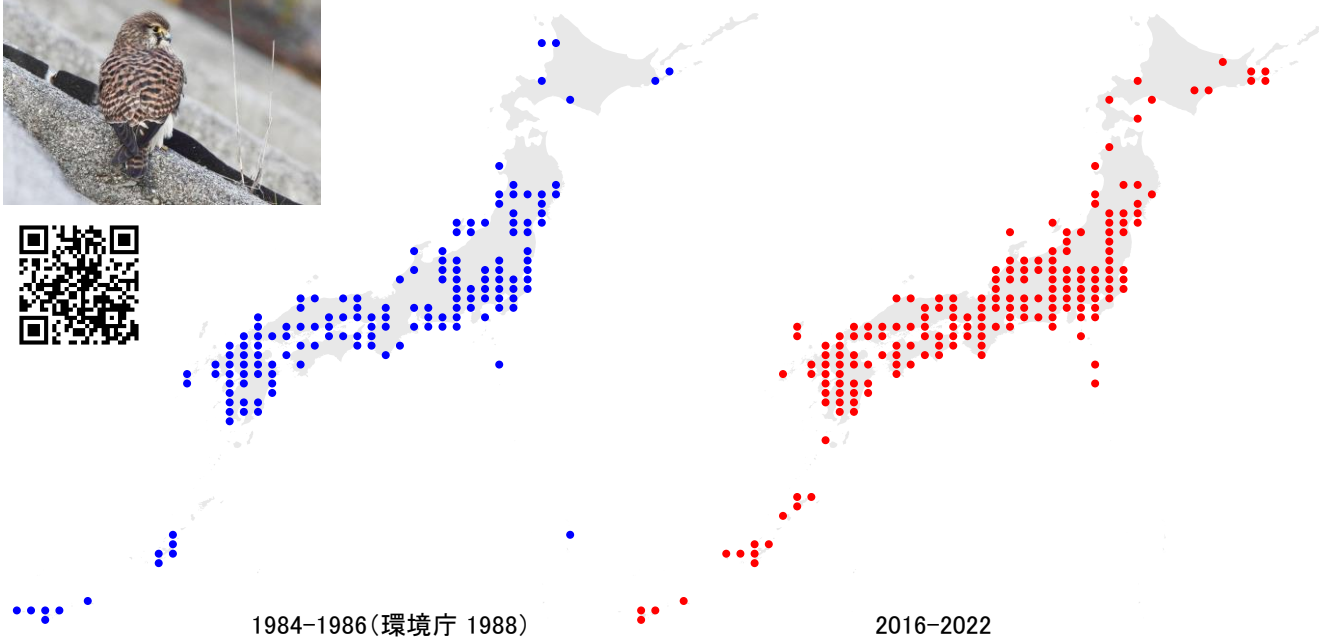
北海道の森林に留鳥として生息する。1980年代と2010年代で分布に大きな変化はなかったが、繁殖期の調査結果では、増加傾向が示されている(植田・植村 2021)。

ノグチゲラ *Sapheopipo noguchii* 全長：30cm 体重：♂133.0-162.0g ♀116.0-150.0g



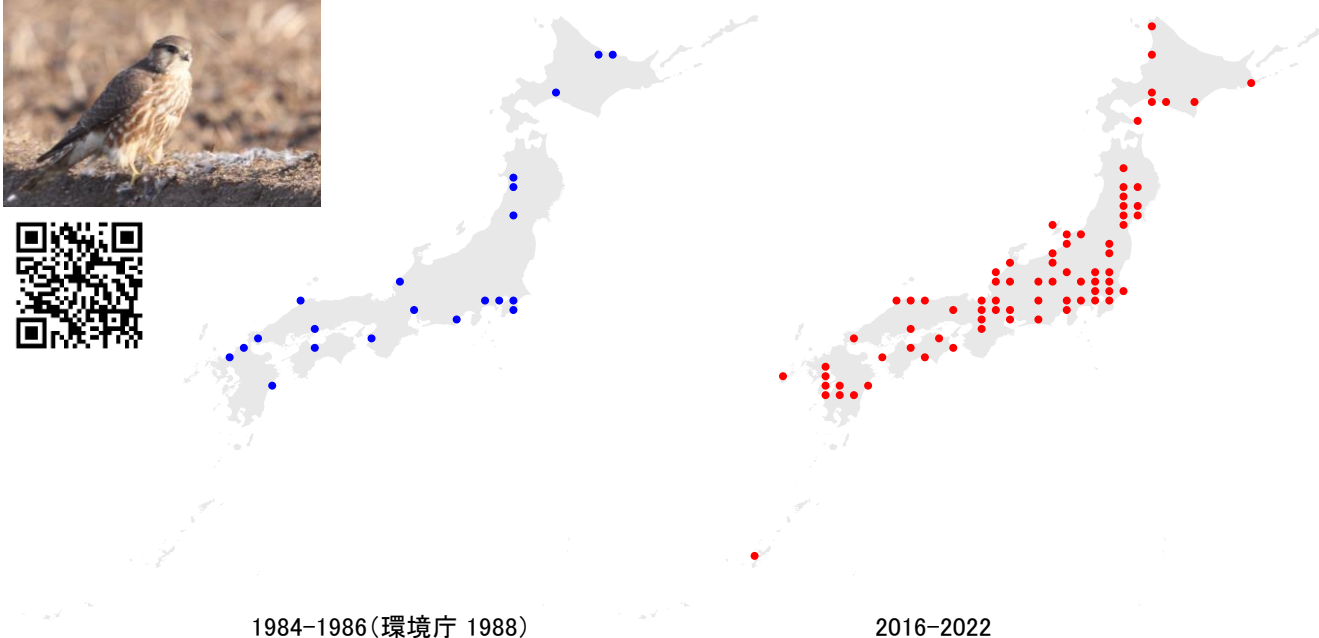
沖縄本島北部の照葉樹林に留鳥として分布する。近年は二次林やリュウキュウマツ林にも生息するようになってきている(小高 2011)。本調査では1980年代、2010年代ともに沖縄本島北部の1メッシュで記録された。

チョウゲンボウ *Falco tinnunculus* 全長：33.0-38.5cm 体重：♂170-210g ♀122-202g



主に東日本で繁殖し、全国で越冬するが、北東北から北海道にかけての地域は少ない。分布状況に変化はなかったが、記録メッシュ数は全体に増加傾向にあった。繁殖期も同様の傾向にある(植田・植村 2021)。

コチョウゲンボウ *Falco columbarius* 全長：♂28-31cm ♀32-34cm 体重：♂140-193g ♀205-274g



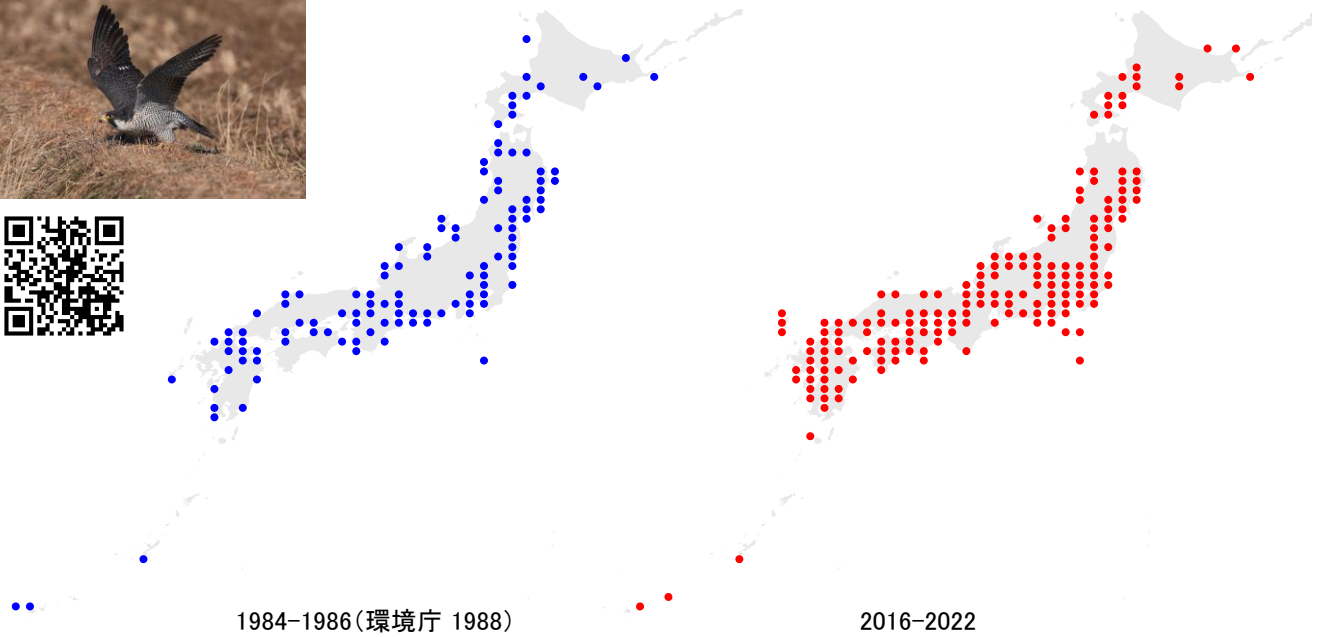
全国の草原や農耕地で越冬する。1980年代は局所的に見られる種だったが、2010年代には記録メッシュ数が大幅に増加し、広く見られる種となった。

ハヤブサ

Falco peregrinus

全長: ♂35-40cm ♀45-50cm

体重: ♂500-680g ♀800-1200g



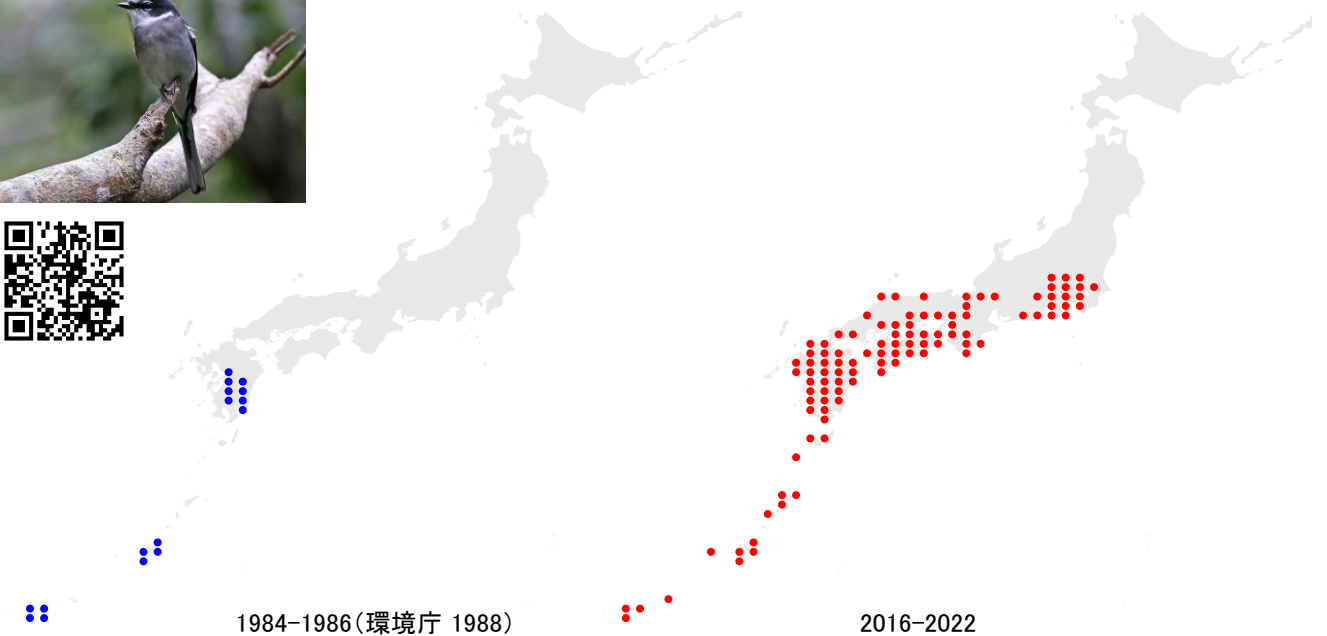
九州以北の海岸や内陸の崖, ビルなどで繁殖し, 全国で越冬する。分布域に大きな変化はなかったが, 記録メッシュ数が大幅に増加した。この傾向は繁殖期も同様で(植田・植村 2021), 特に内陸部への分布拡大が顕著である。

サンショウクイ

Pericrocotus divaricatus

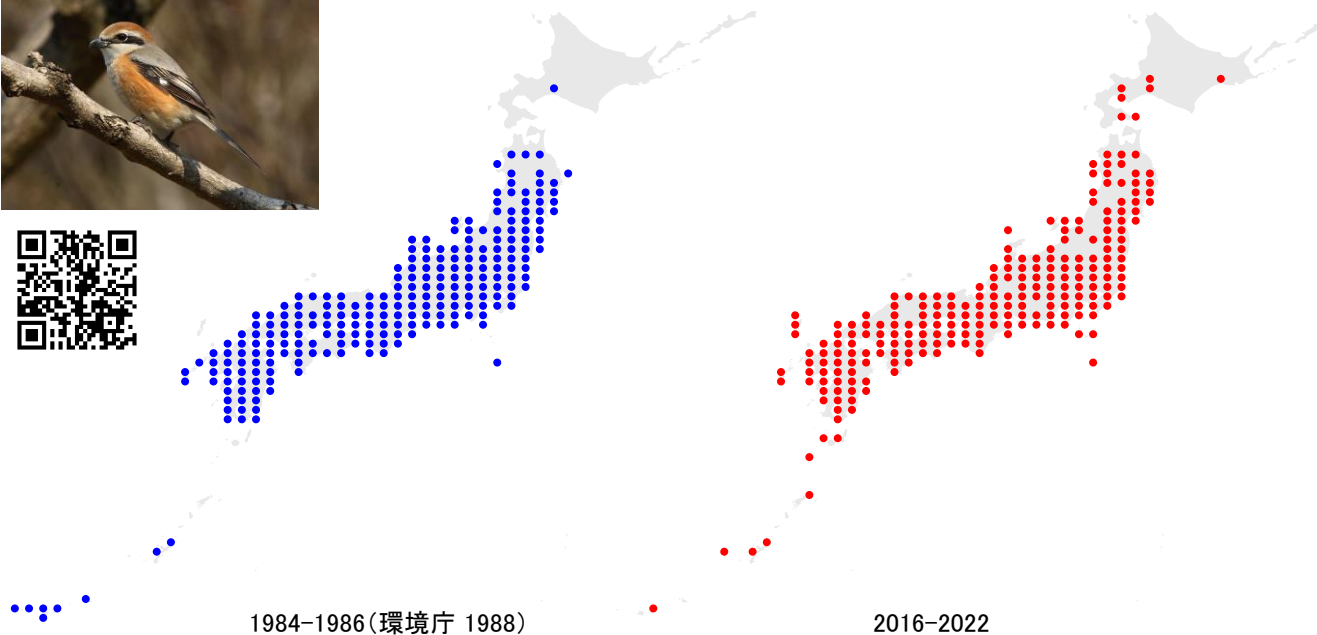
全長: 20cm

体重: 20-22g



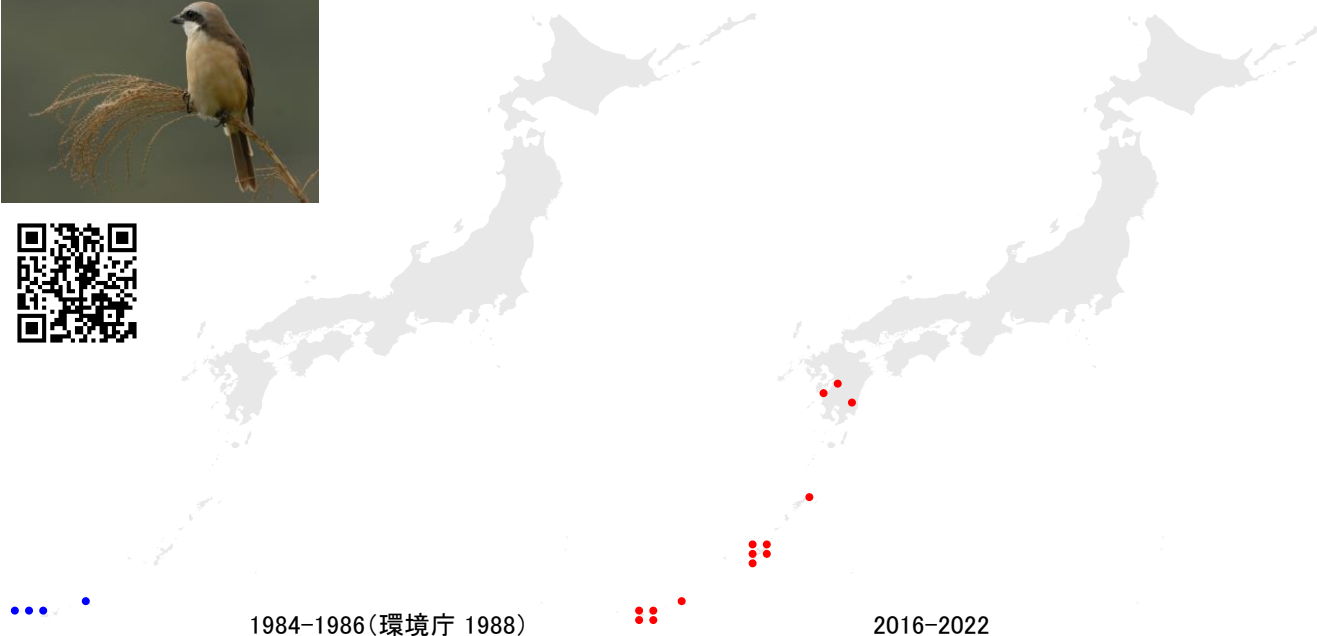
亜種サンショウクイが夏鳥として本州以南の山地の森林に渡来し, 亜種リュウキュウサンショウクイ(写真)が九州以南に留鳥として生息する。越冬期の記録は後者と考えられ, 2010年代までに分布を拡げ(三上・植田 2011), 今回の調査では, 関東地方でも普通に越冬するようになっていた。

モズ *Lanius bucephalus* 全長：18.5-21.2cm 体重：♂35-46g ♀34-52g



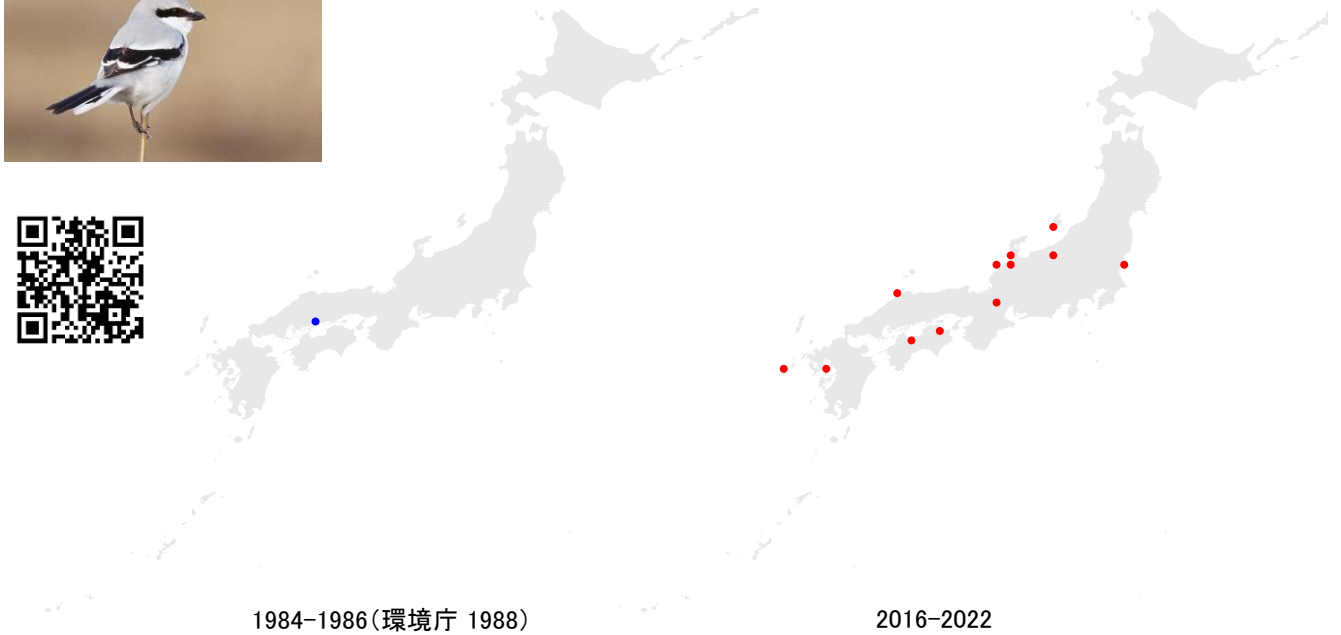
全国の平地から山地の疎林、農耕地などで繁殖し、主に本州以南で越冬する。1980年代は北海道では1メッシュのみの記録だったが、2010年代には7メッシュで記録された。北東北でのメッシュ数も増加しており、分布が北上していた。

アカモズ *Lanius cristatus* 全長：20cm 体重：♂23.9-30.3g ♀24.8-35.0g



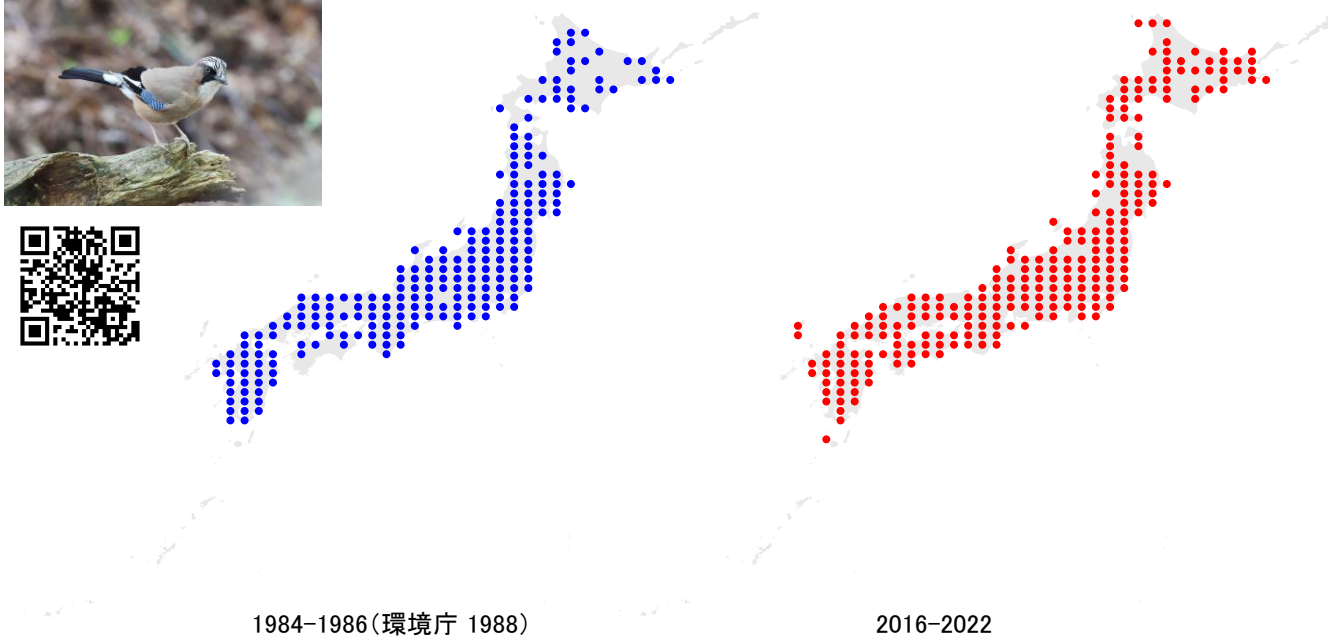
全国の平地から山地の疎林、果樹園などで繁殖し、南西諸島などで越冬する。冬期は亜種シマアカモズも渡来する。2010年代には九州でも記録された。

オオカラモズ *Lanius sphenocercus* 全長：31cm 体重：85-100g



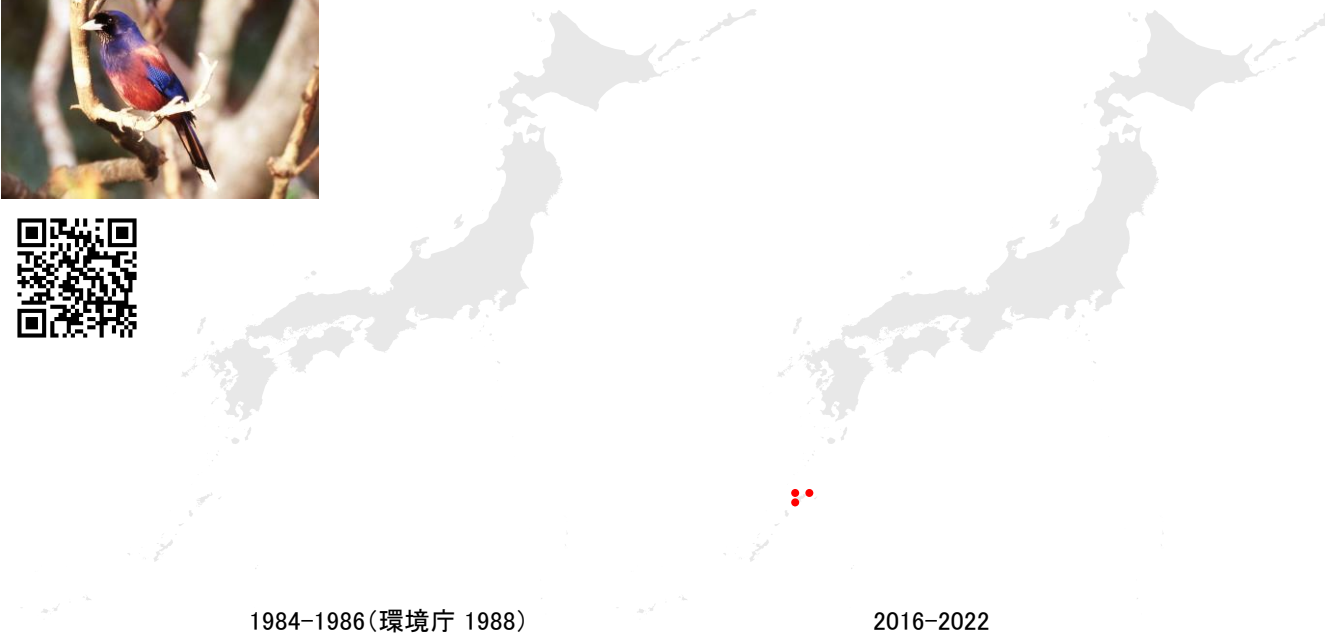
主に中国南部で越冬し、日本では数少ない冬鳥として越冬する。1980年代は稀な冬鳥だったが、2010年代には観察されることが多くなり、12メッシュで記録された。

カケス *Garrulus glandarius* 全長：33cm 体重：122-147g



九州以北の森林に留鳥として生息し、北海道には亜種ミヤマカケスが分布する。分布や生息メッシュ数に大きな変化はなかった。

ルリカケス *Garrulus lidthi* 全長：38cm 体重：♂164.8-210.4 g ♀170.5-194.7g

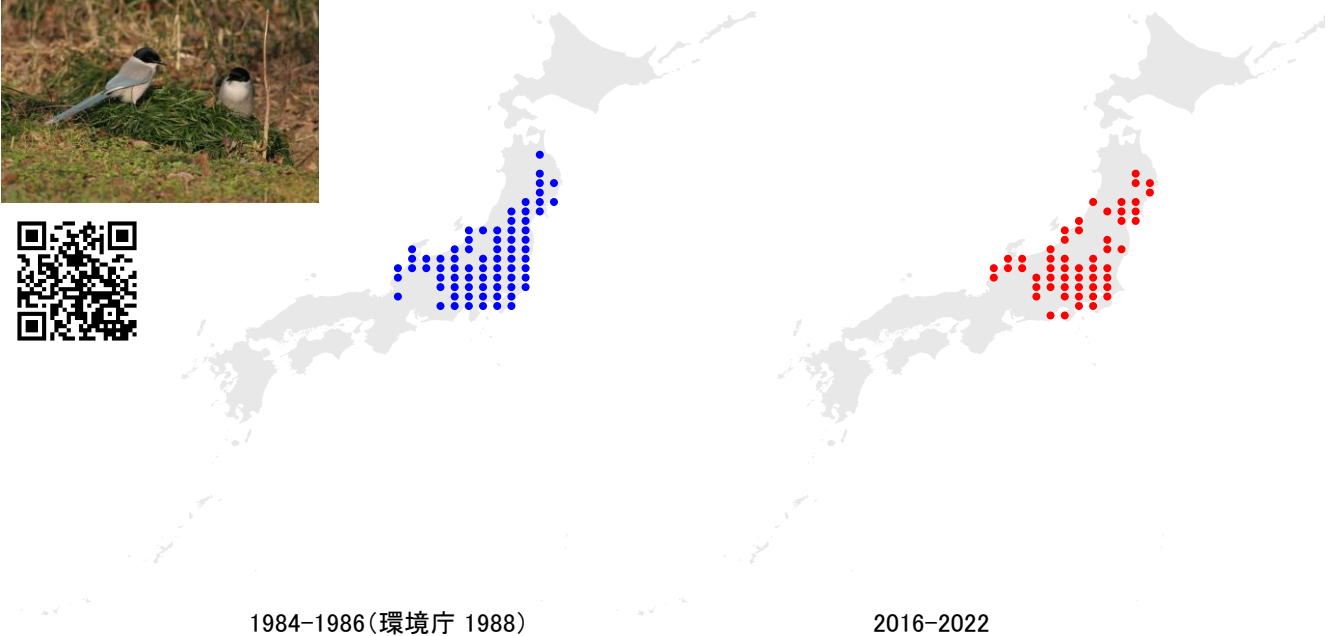


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

奄美諸島に留鳥として生息する。1980年代は奄美諸島で調査されなかったために記録がなく、2010年代になって分布するようになったわけではない。

オナガ *Cyanopica cyanus* 全長：31.9-39.0cm 体重：69-96g

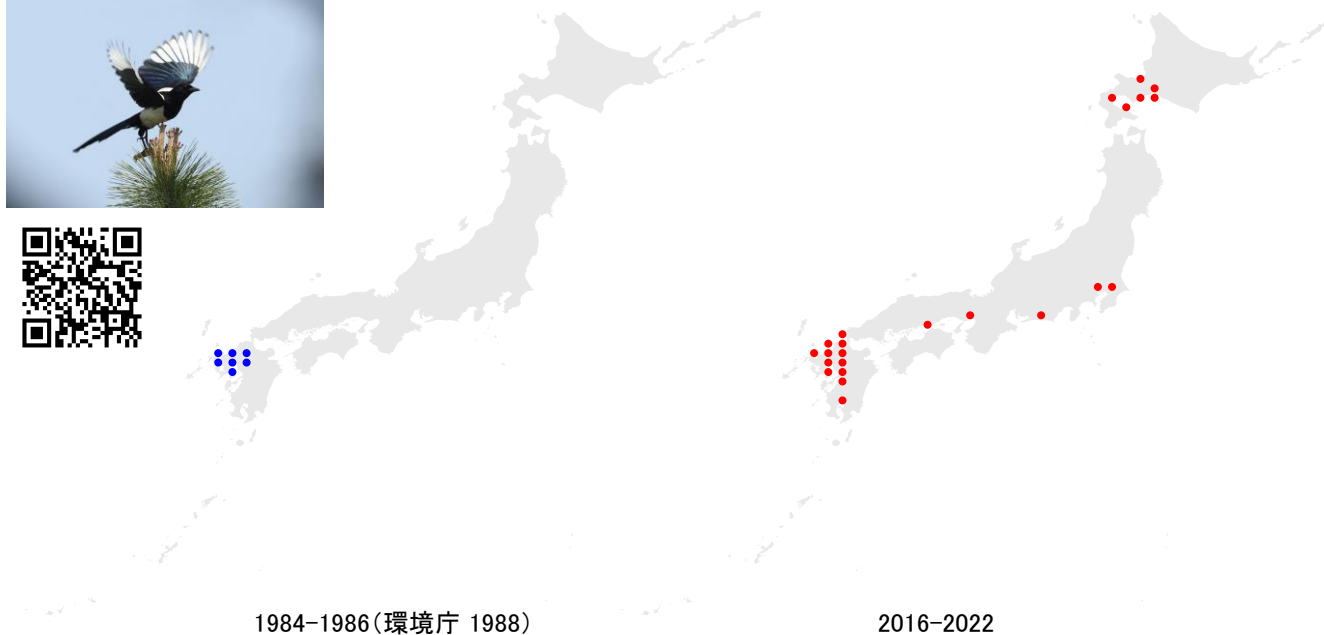


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

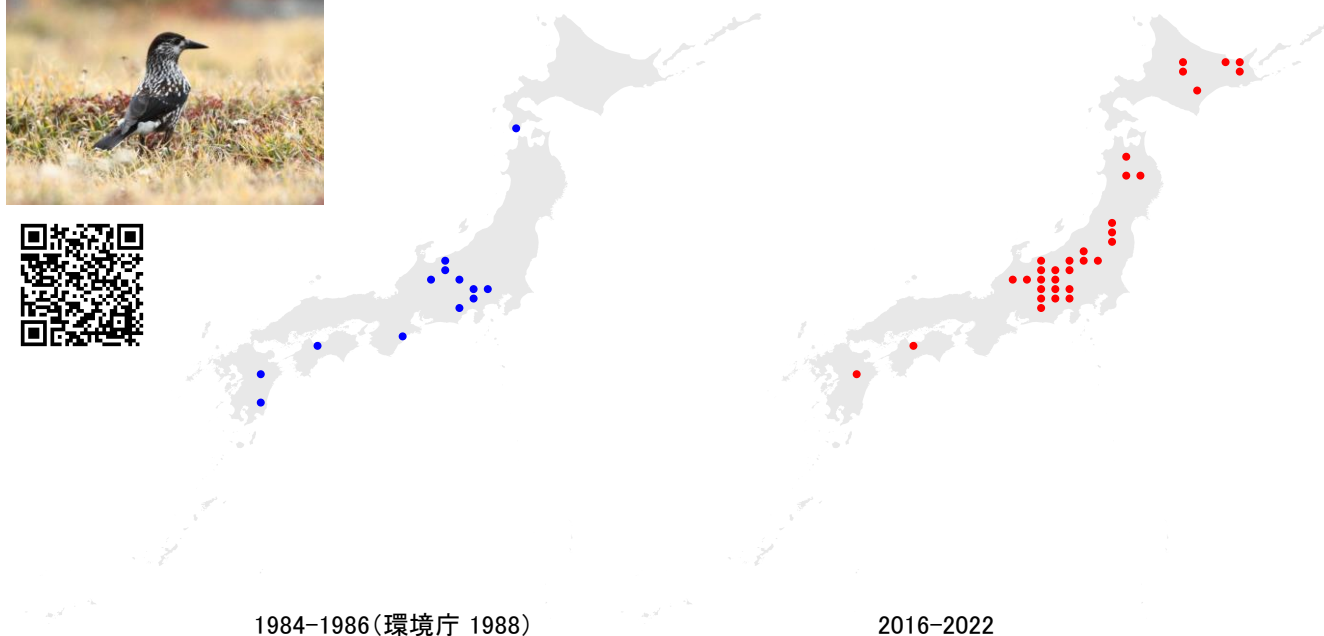
本州中部以北に留鳥として生息する。分布域に大きな変化はなかったが、記録メッシュ数は減っていた。この傾向は繁殖期も同様である(植田・植村 2021)。

カササギ *Pica pica* 全長：40.0-48.0cm 体重：190-287g



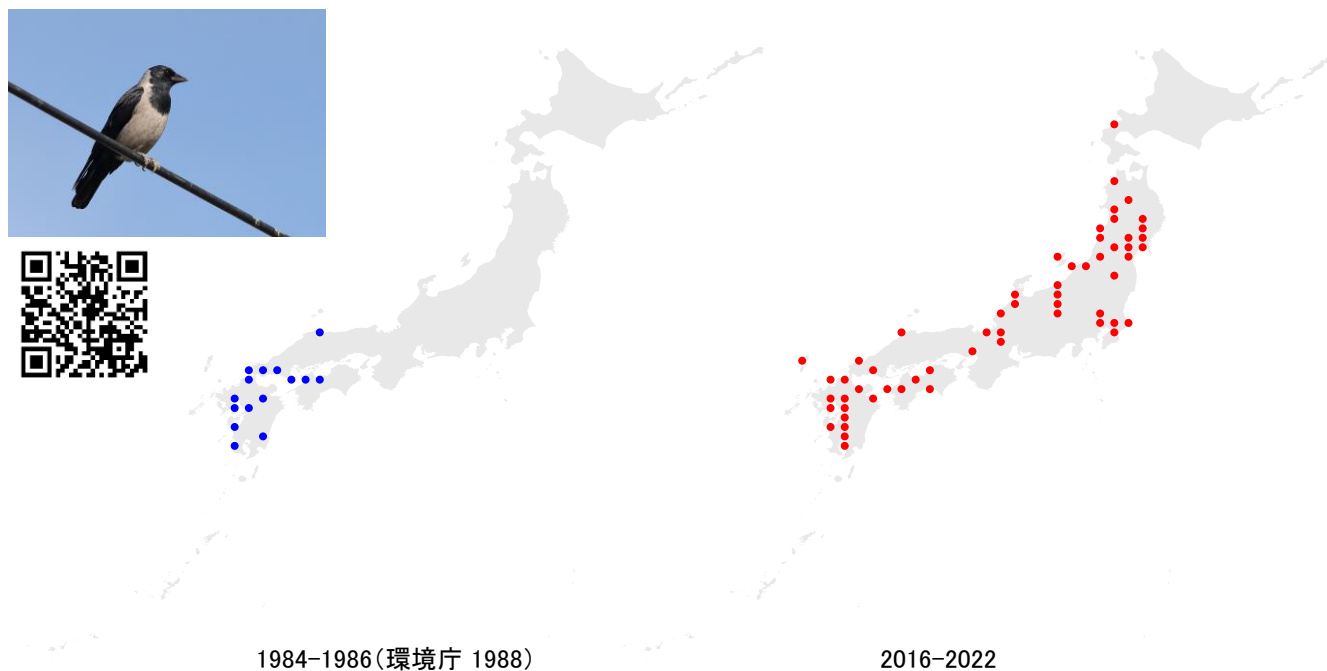
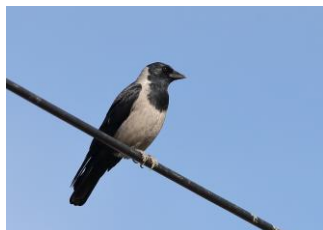
1980年代は九州北部に留鳥として生息していた。2010年代は九州でも分布が拡がり、北海道苫小牧周辺にも定着し、分布が拡大していた。それ以外にも局所的に記録されていた場所があったが、定着するかどうかは現時点ではわからない。

ホシガラス *Nucifraga caryocatactes* 全長：35cm 体重：145-213g



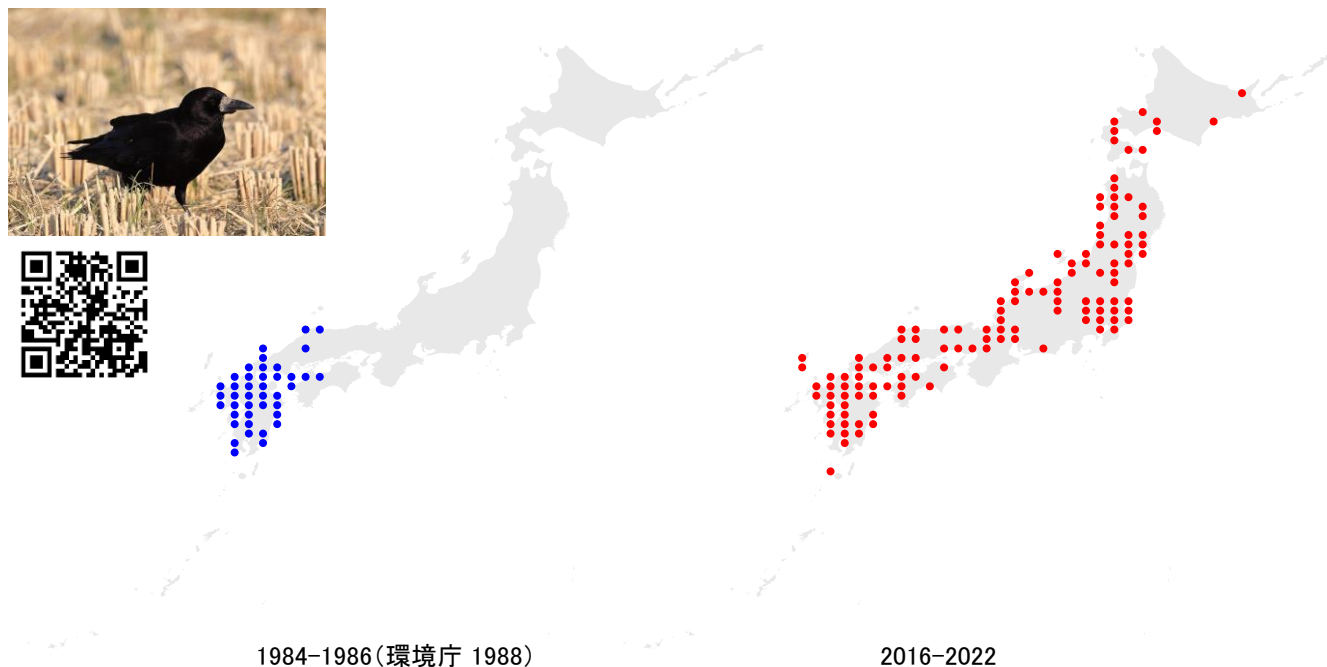
亜高山帯針葉樹林やハイマツ帯に分布する。2010年代は分布が大きく変化していたが、バードリサーチが実施したホシガラス調査の結果が追加されているため、実際の分布変化を示しているわけではない。

コクマルガラス *Corvus dauuricus* 全長：33cm 体重：154-275g



1980年代は九州周辺の水田地帯で越冬する種だったが、その後、分布が拡大し、全国的に記録されるまでになった。今回の調査で分布の北上が最も顕著な種となっていた。

ミヤマガラス *Corvus frugilegus* 全長：47cm 体重：325-516g



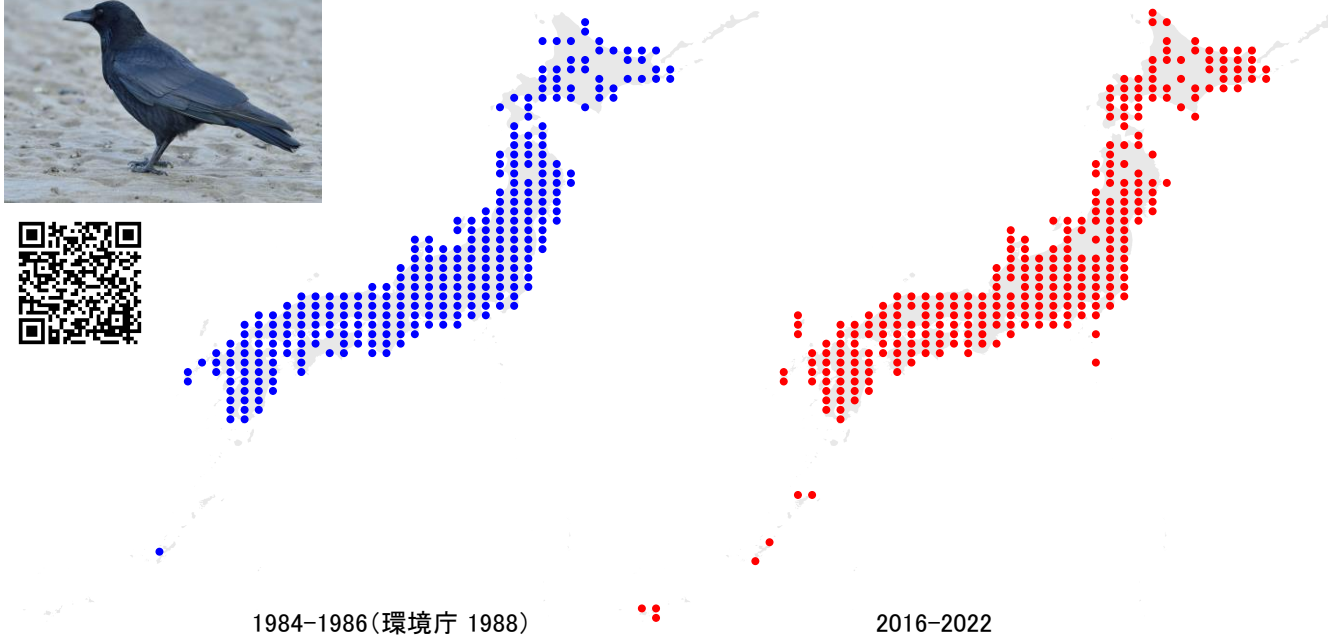
コクマルガラス同様、1980年代は、九州の水田地帯で見られる鳥だったが、分布が拡大し、全国で記録される種となった。積雪の減少とともに、有害な農薬が使用されなくなったことに伴う個体数の増加がその原因と考えられている(高木 2010)。

ハシボソガラス

Corvus corone

全長：46.2-54.0cm

体重：♂460-685g ♀370-620g



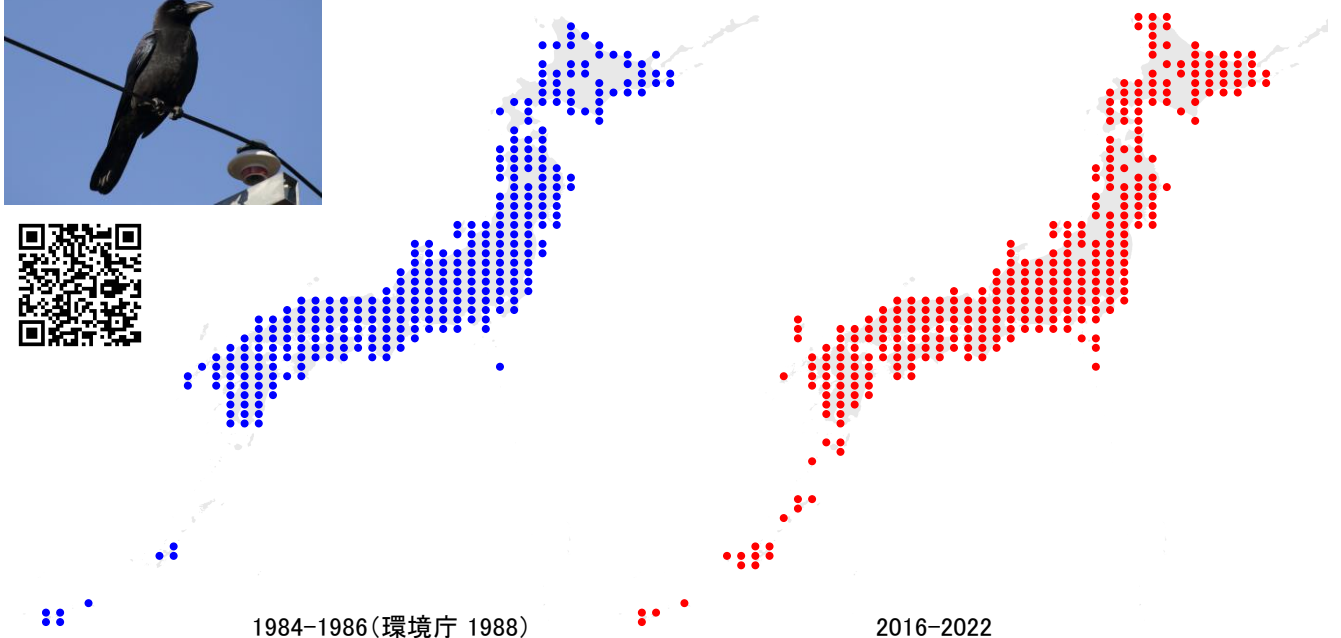
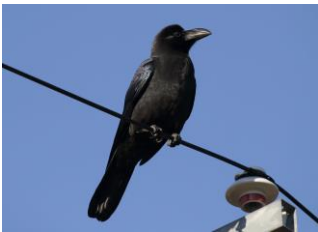
島嶼部を除く全国に留鳥として生息する。南西諸島では繁殖はしていないが、冬期には記録されることがあり、2010年代は7メッシュで記録があった。繁殖期の調査では、分布は広がっていたが総個体数は逆に減少していることが、報告されている(植田・植村 2021)。

ハシブトガラス

Corvus macrorhynchos

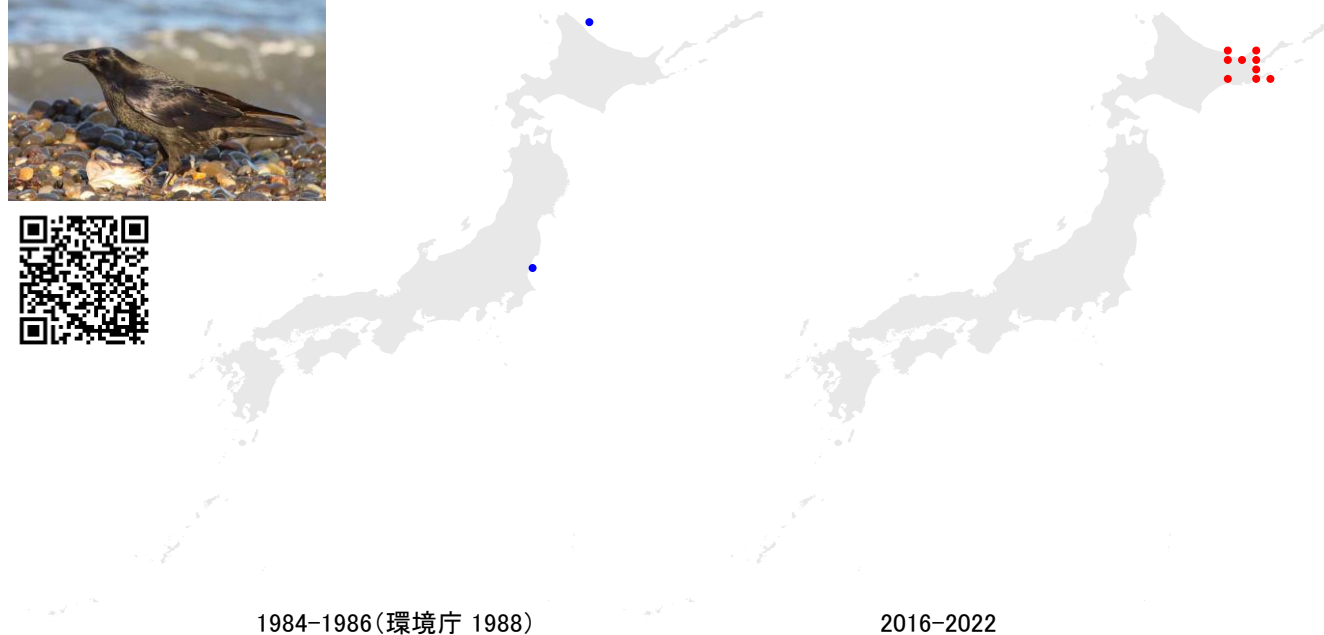
全長：54-60cm

体重：570-895g



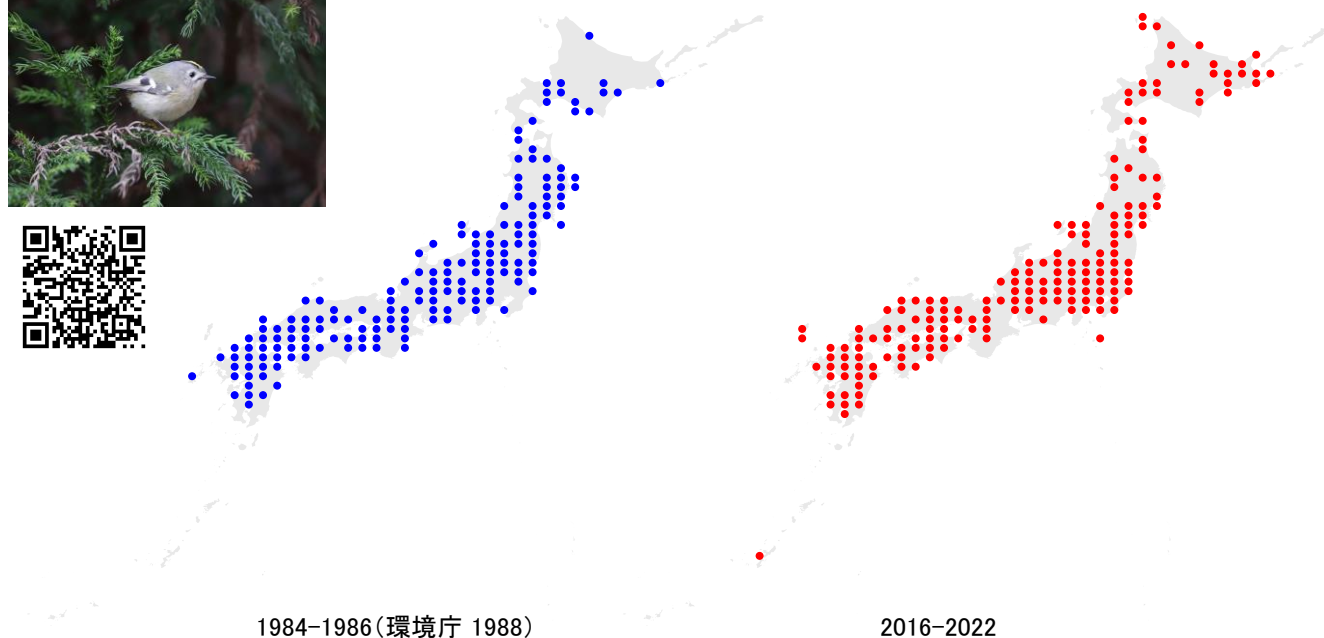
全国に留鳥として生息する。1980年代は南西諸島北部での記録がないが、この地域で調査が行なわれなかったため、分布していなかったことを示すわけではない。

ワタリガラス *Corvus corax* 全長：61cm 体重：1250g



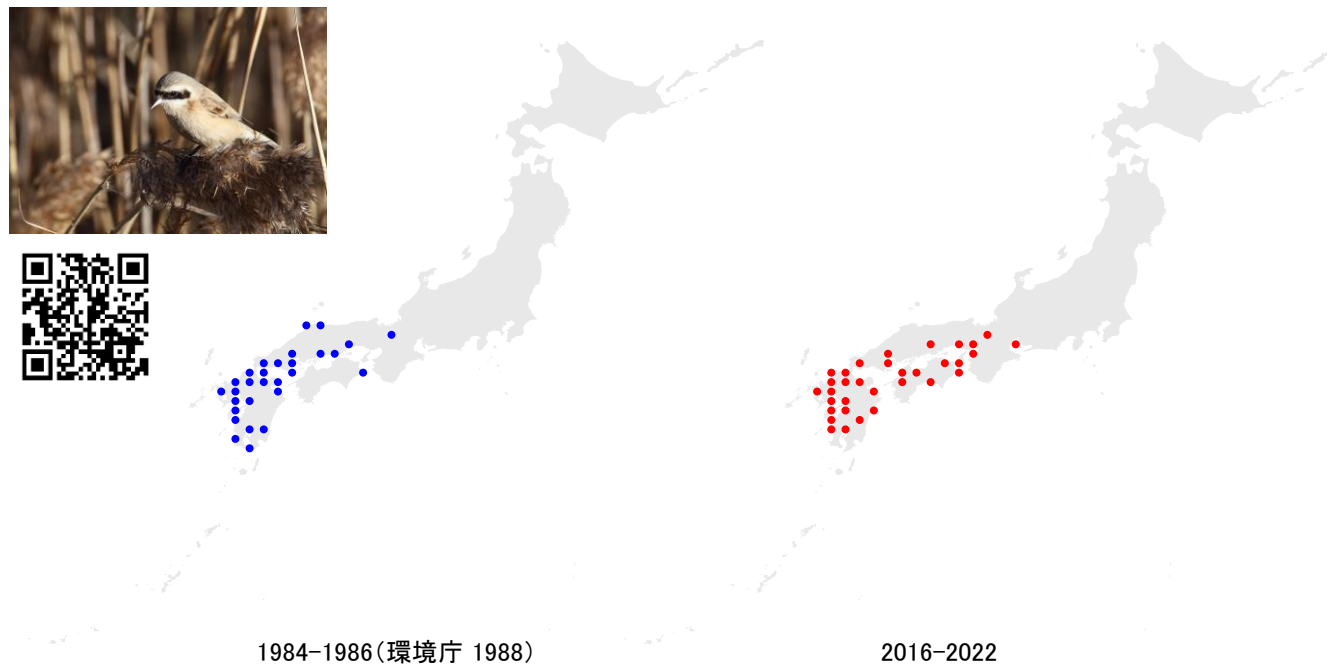
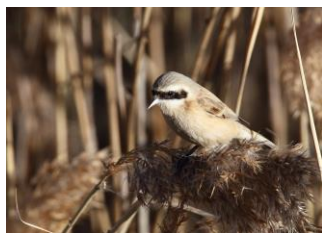
北海道に越冬期に渡来する冬鳥。1980年代と比べて2010年代は道東部を中心に記録メッシュ数が増加した。1990年代にシカの狩猟および駆除数が増加し、そのシカの残滓が食物となり渡来数が増えたと考えられている(玉田 2008)。

キクイタダキ *Regulus regulus* 全長：10cm 体重：3-6g



全国の針葉樹林帯で繁殖し、冬には低地でも見られる。1980年代に比べ、2010年代は北海道の北東部での記録メッシュ数が増加していた。

ツリスガラ *Remiz pendulinus* 全長: 11cm 体重: 7-11g

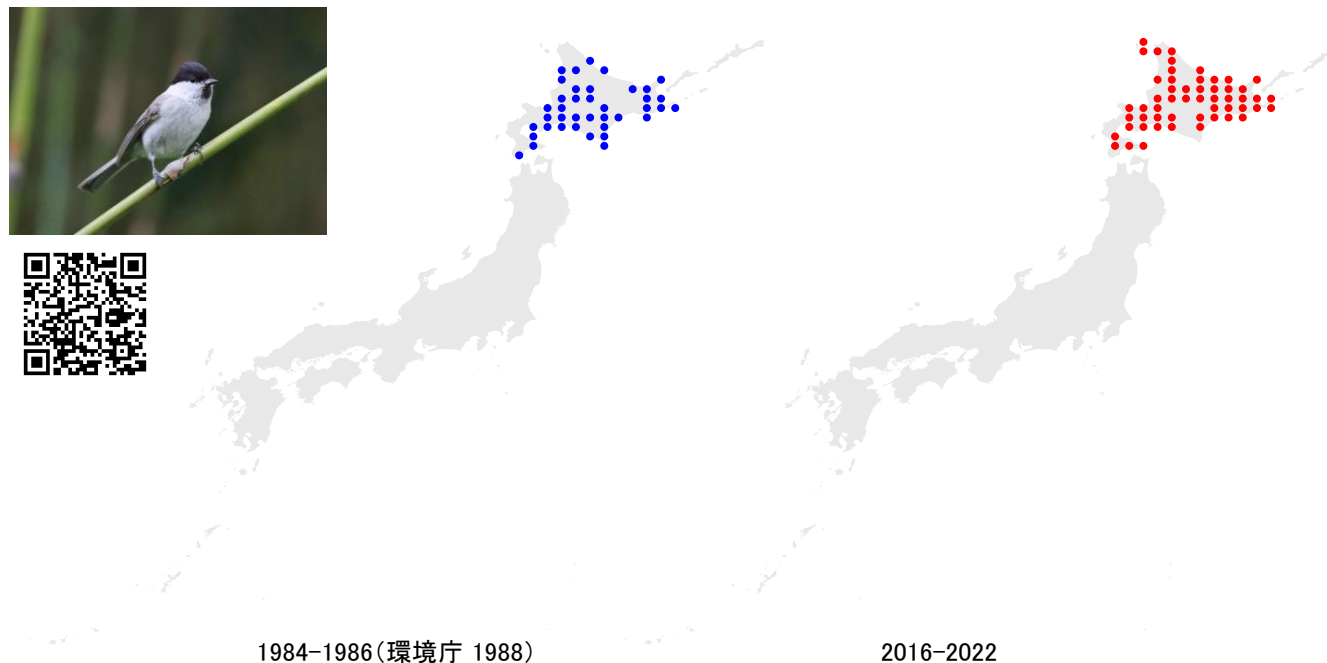


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

西日本のヨシ原に冬鳥として生息する。越冬分布が東へ拡大する傾向があり、1990年代には関東地方でも越冬するようになっていたが(環境省自然環境局生物多様性センター online), 2010年代は近畿地方以西まで再度分布が縮小していた。

ハシブトガラ *Poecile palustris* 全長: 12-14cm 体重: 12.1±0.7g

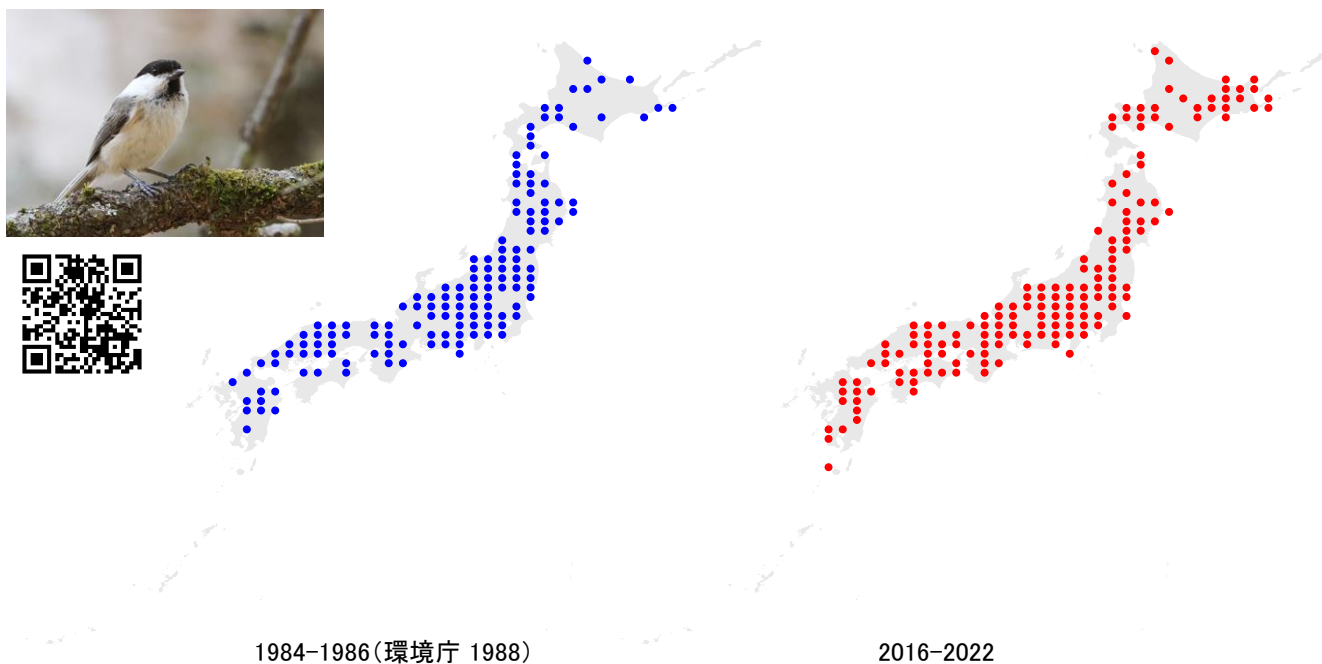


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

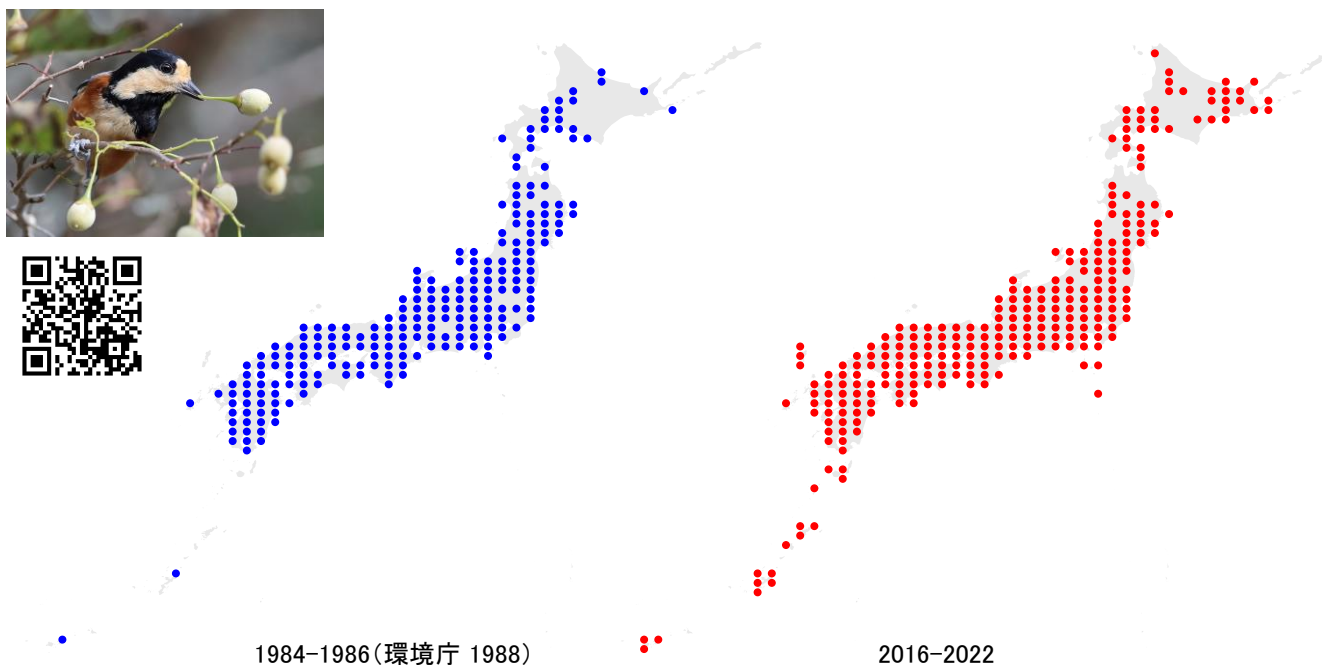
北海道に留鳥として生息する。繁殖期の調査では、確認されたコース数が大きく減少しているが(植田・植村 2021), 越冬期の分布には大きな変化は見られなかった。

コガラ *Poecile montanus* 全長：11.9–12.8 cm 体重：11.3±0.5g



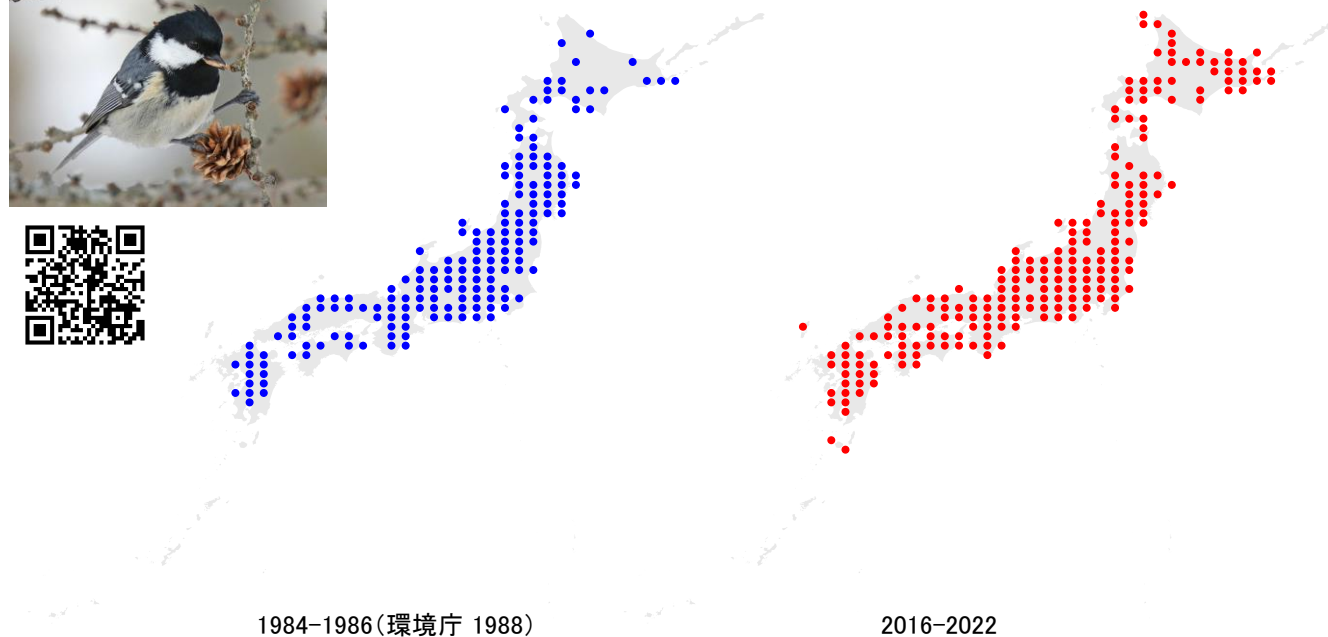
離島を除く全国に留鳥として分布する。繁殖期の分布は拡大傾向にあるが(植田・植村 2021), 越冬期の記録に目立った変化はなかった。

ヤマガラ *Poecile varius* 全長：14cm 体重：♂16.33±1.07g ♀15.33±0.60g



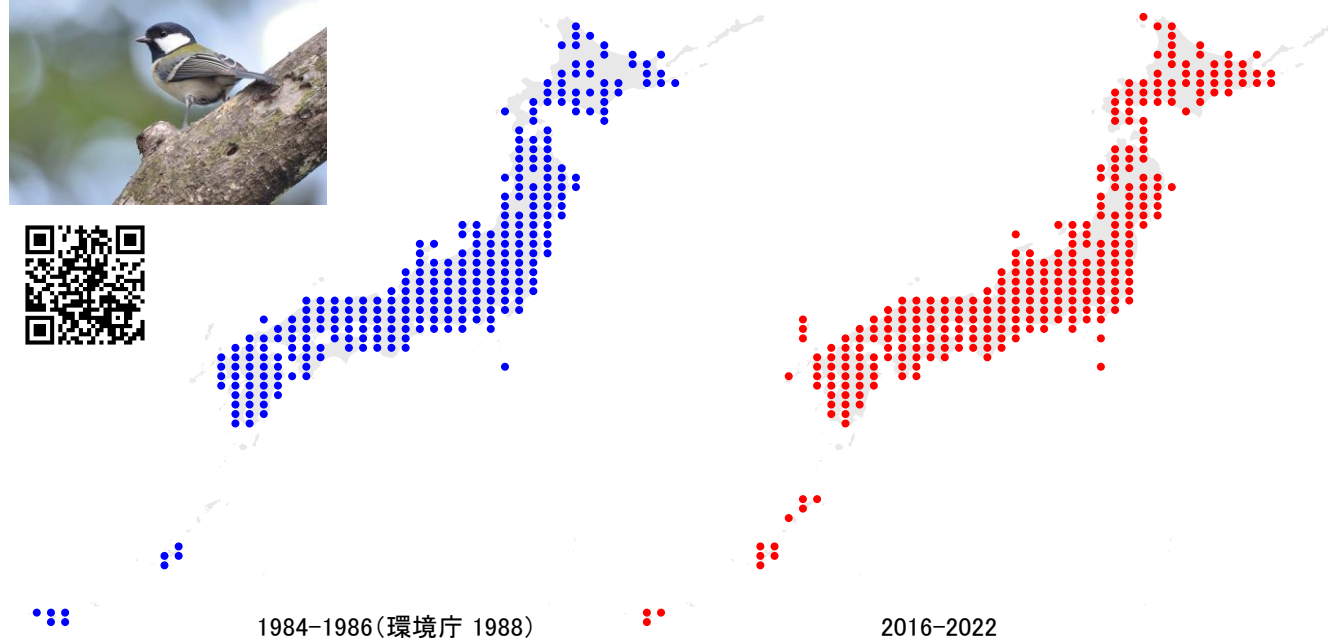
全国に留鳥として分布する。1980年代は北海道道東域, 道北域の記録は少なかったが, 2010年代はそれらの地域での記録メッシュ数が増加していた。

ヒガラ *Periparus ater* 全長：10-12cm 体重：6-10g



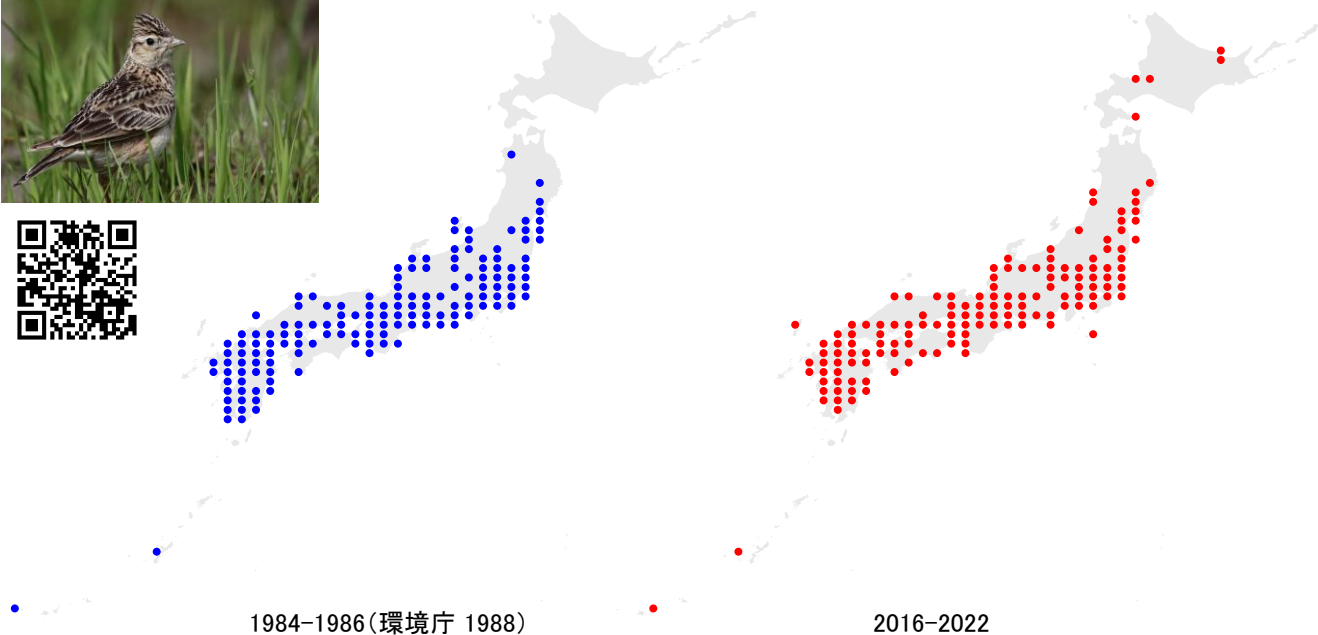
北海道から屋久島までの森林に留鳥として分布する。1980年代は北海道道東域、道北域の冬の記録は少なかったが、2010年代には記録メッシュ数が増加していた。

シジュウカラ *Parus minor* 全長：13.7-14.8cm 体重：♂15.7±0.9g ♀15.0±0.8g



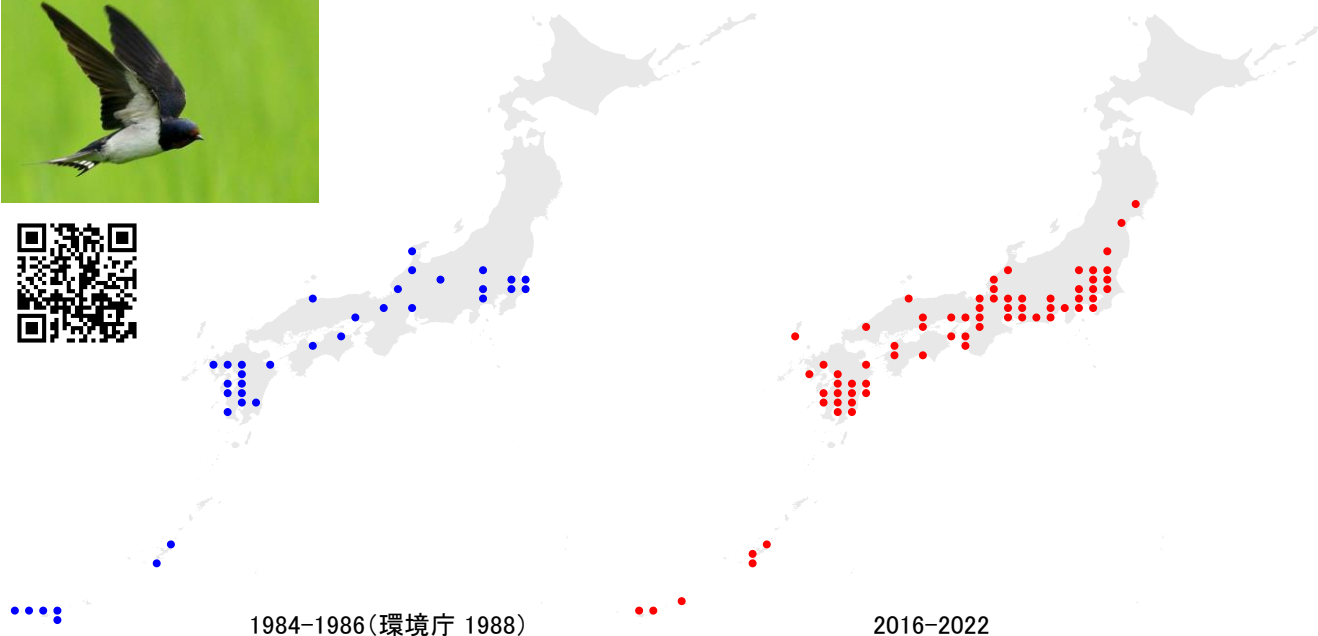
全国に留鳥として分布する。1980年代には奄美大島の記録がないが、奄美大島での調査が行なわれなかったため、2010年代に新たに分布するようになったわけではない。

ヒバリ *Alauda arvensis* 全長: 16.1-17.2cm 体重: 29.2-37.5g



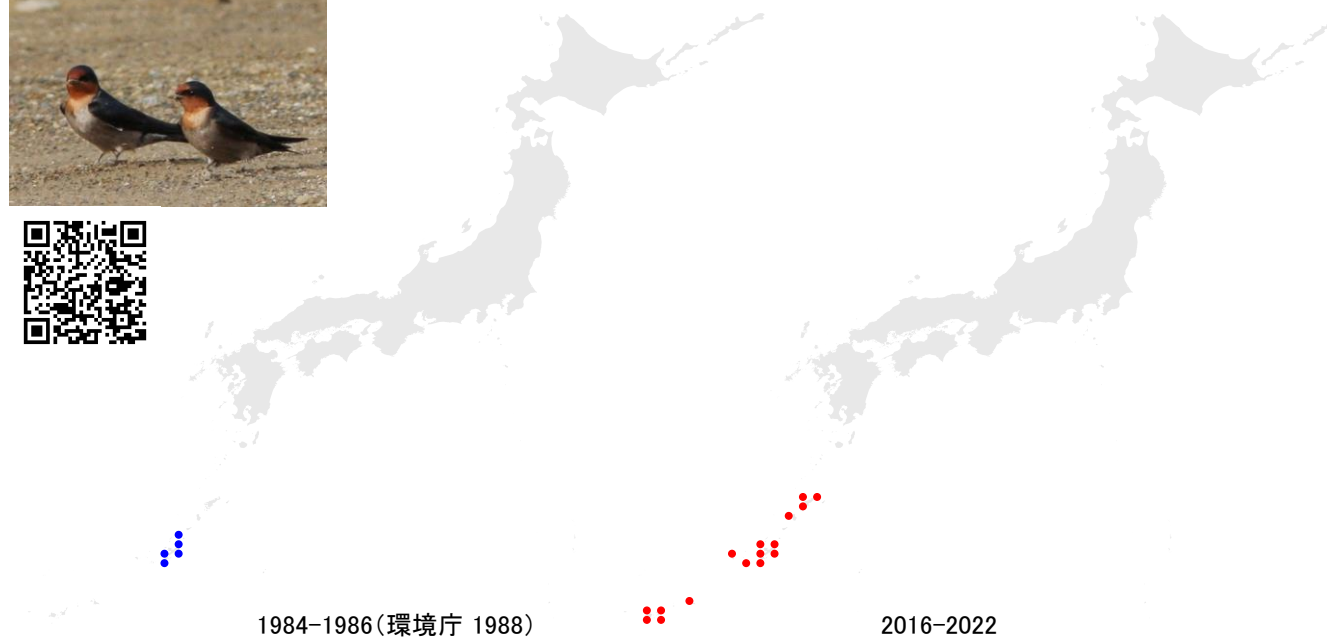
九州以北で繁殖し, 南東北以南で越冬する。北東北や北海道では夏鳥だが, 2010年代には, 5メッシュで記録があった。

ツバメ *Hirundo rustica* 全長: 14.6-18.5cm 体重: 15.6-24.0g



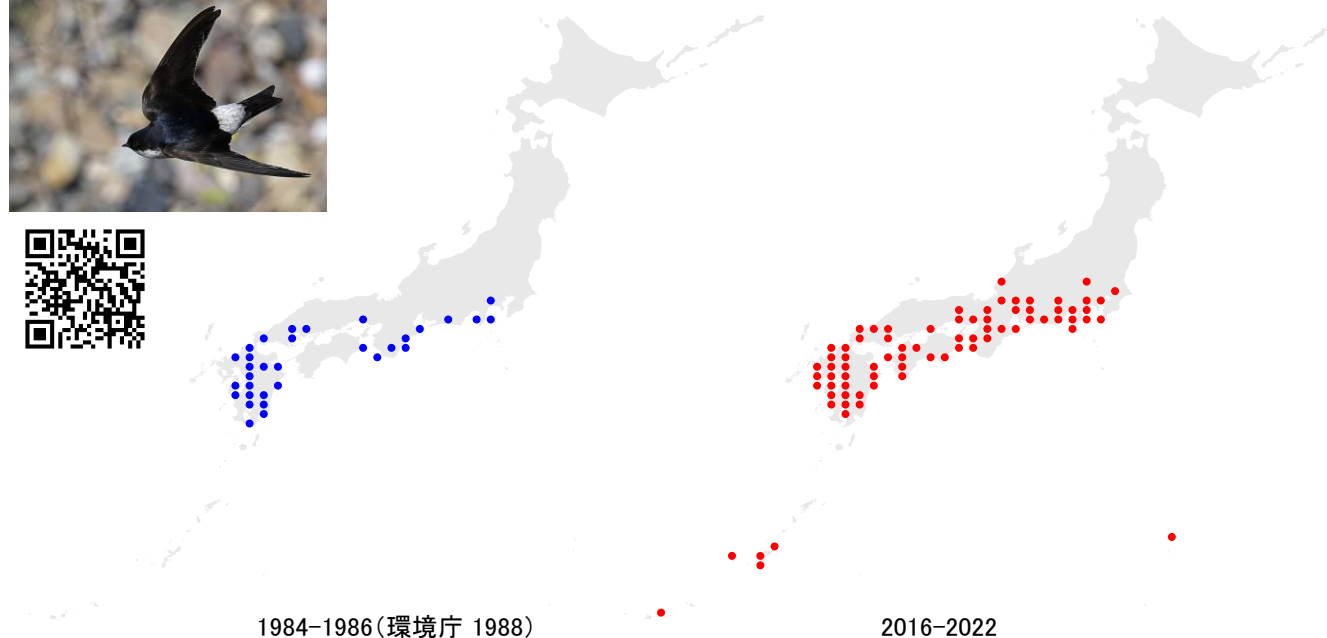
主に夏鳥として日本に渡来する鳥だが, 水域のそばなど越冬するところもある。そうした越冬地が 2010年代には太平洋側を中心に北上していた。秋から冬にかけて繁殖する例も出てきている(深瀬 2021)。

リュウキュウツバメ *Hirundo tahitica* 全長: 13cm 体重: 13g



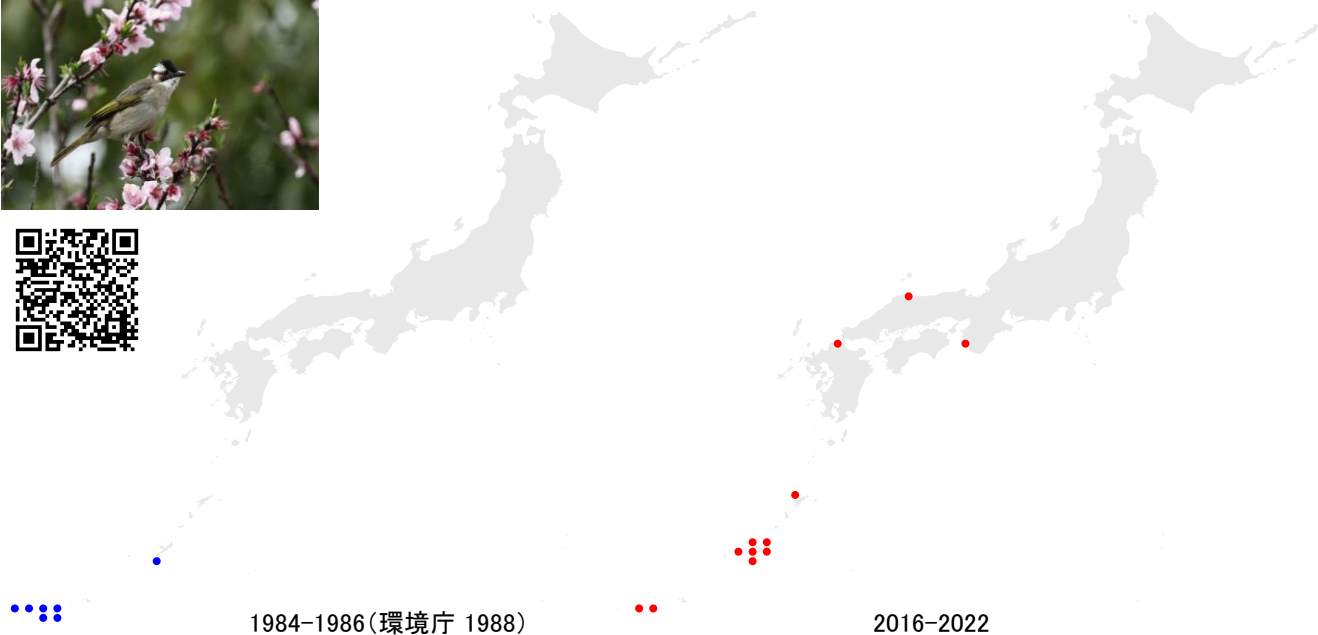
奄美諸島以南の南西諸島に留鳥として分布する。1980年代は奄美諸島に分布していないが、これは、調査が行なわれていなかったためで、分布していなかったことを示すわけではない。

イワツバメ *Delichon dasypus* 全長: 13cm 体重: ♂18.1±1.0g ♀ 17.7±0.9g



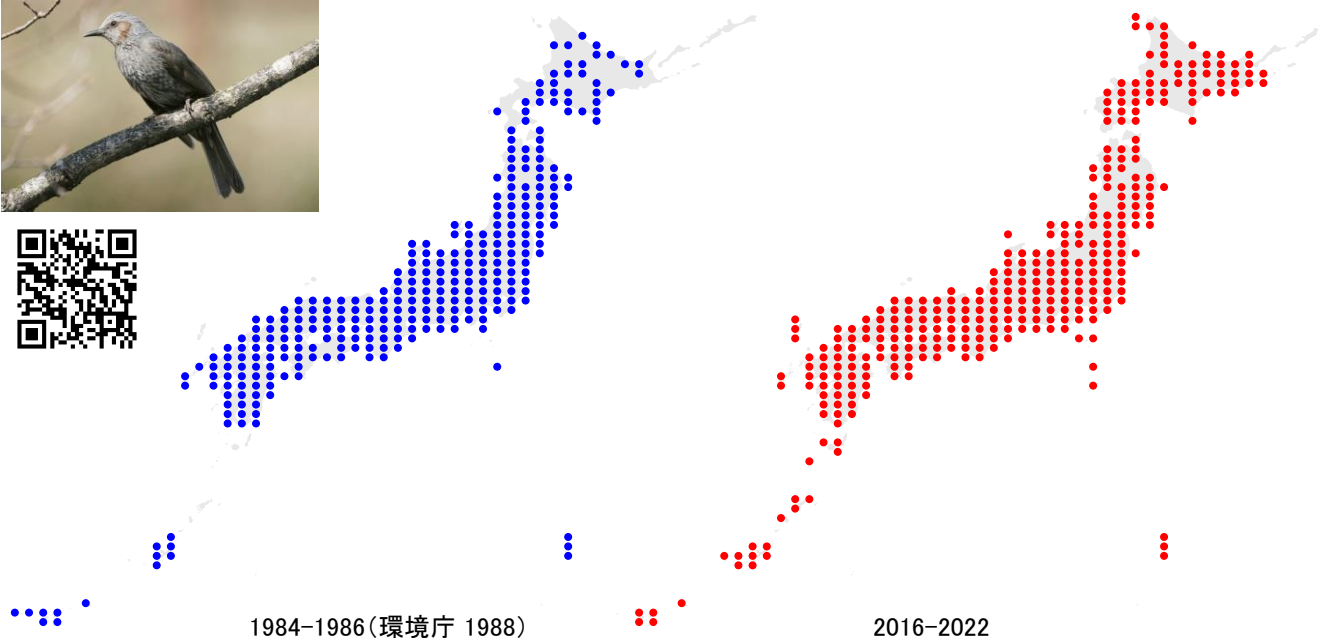
全国に主に夏鳥として渡来するが、太平洋側を中心とした地域で一部が越冬する。その越冬分布が1980年代に比べて2010年代は大きく拡大していた。

シロガシラ *Pycnonotus sinensis* 全長：19cm 体重：75g



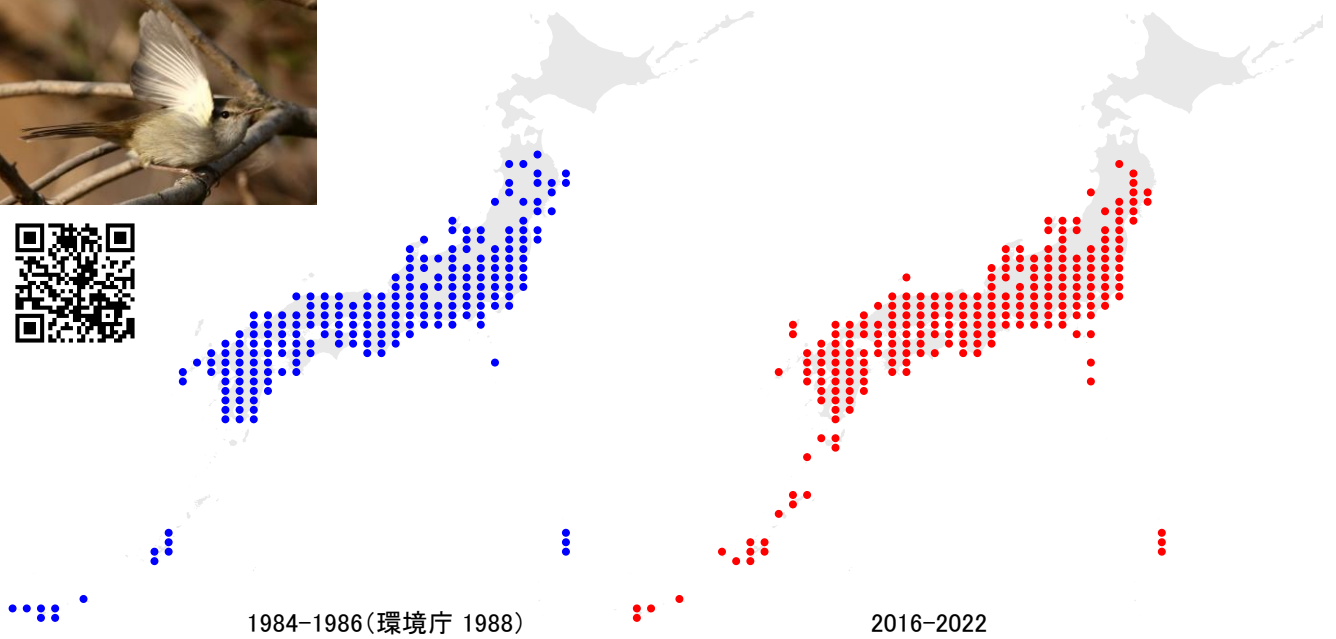
沖縄諸島や八重山諸島に留鳥として生息する。2010年代には、本土部の3メッシュで記録があった。これらは移入分布の可能性が高い。

ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis* 全長：24.9-29.0cm 体重：79.9±12.1g



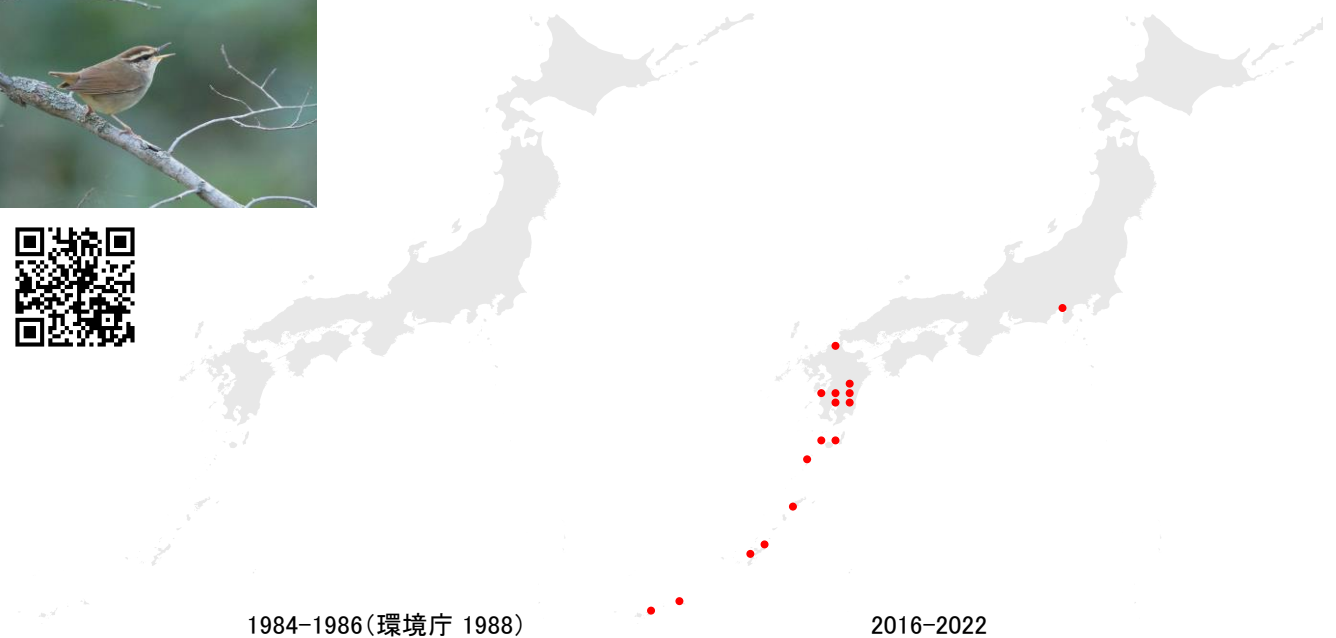
全国に留鳥として生息する。2010年代の調査では、全種の中で最も多くのメッシュで記録された鳥だった。1980年代は北海道道東域での記録は少なかったが、2010年代はほぼ全域で記録されていた。

ウグイス *Cettia diphone* 全長: 14.0-15.5cm 体重: ♂14.8-22.3g ♀10.0-13.7g



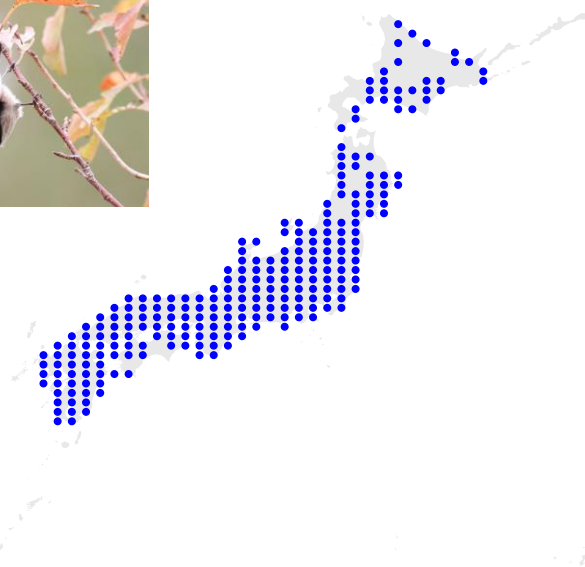
全国で繁殖し、主に南東北以南で越冬する。繁殖期には日本で最も広く分布する鳥だが(植田・植村 2021), 越冬期は北日本に生息しないところが多いため、上位に入らなかった。南西諸島北部で 1980 年代に記録がないのは、調査が行なわれなかったためで、分布していなかったことを示すわけではない。

ヤブサメ *Urosphena squameiceps* 全長: 10.5cm 体重: ♂9.3±0.6g ♀9.3±0.6g



夏鳥として屋久島以北で繁殖する鳥とされていたが、2010 年代には、越冬期に九州南部と南西諸島で記録され、静岡県でも記録があった。

エナガ *Aegithalos caudatus* 全長: 12.5-14.5cm 体重: 5.6-9.4g



1984-1986(環境庁 1988)



2016-2022

九州以北に留鳥として生息する。北海道には、亜種シマエナガが生息する。2010年代には北海道の記録メッシュ数がやや増加していたが、大きな変化はなかった。

ムジセツカ *Phylloscopus fuscatus* 全長: 11cm 体重: 6-13g



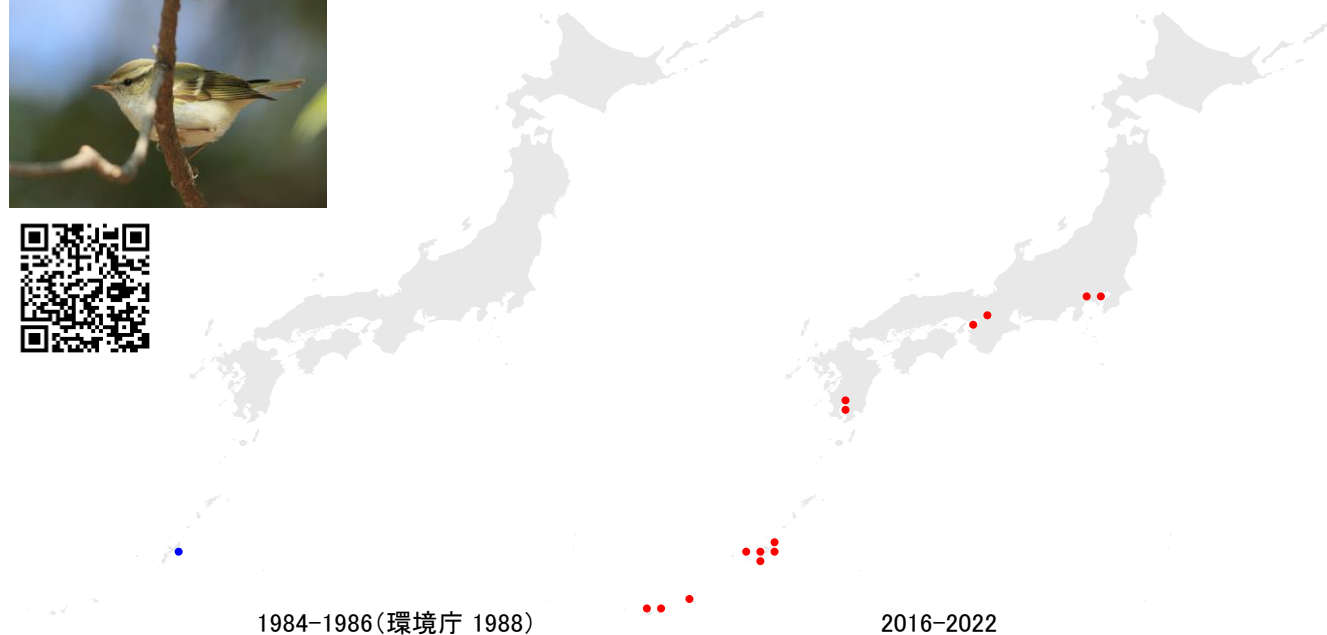
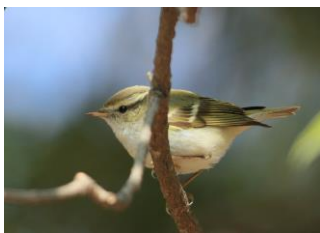
1984-1986(環境庁 1988)



2016-2022

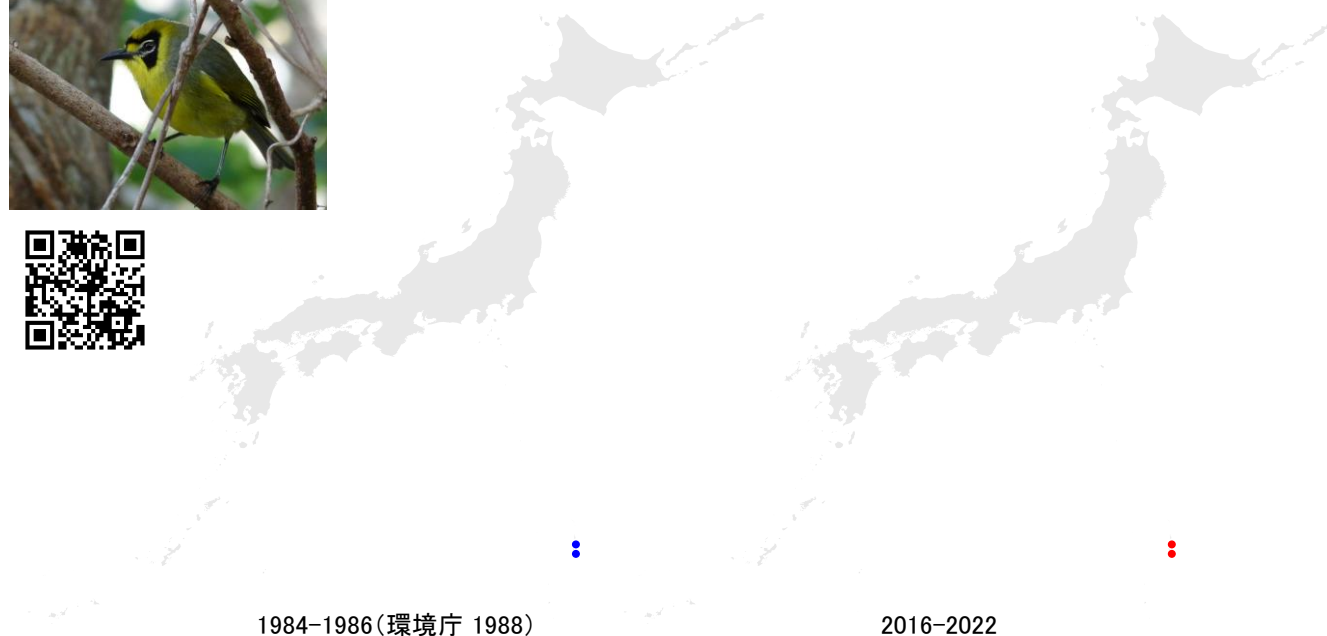
中国南部などで越冬し、日本では稀な旅鳥、冬鳥とされる。1980年代に記録はなかったが、2010年代には関東以西の20メッシュで記録された。藪の中などに生息し目立ちにくく、また、他種との識別も難しい種のため、識別方法や情報の蓄積により、記録が増えた可能性もある。

キマユムシクイ *Phylloscopus inornatus* 全長: 10-11 cm 体重: 5-9g



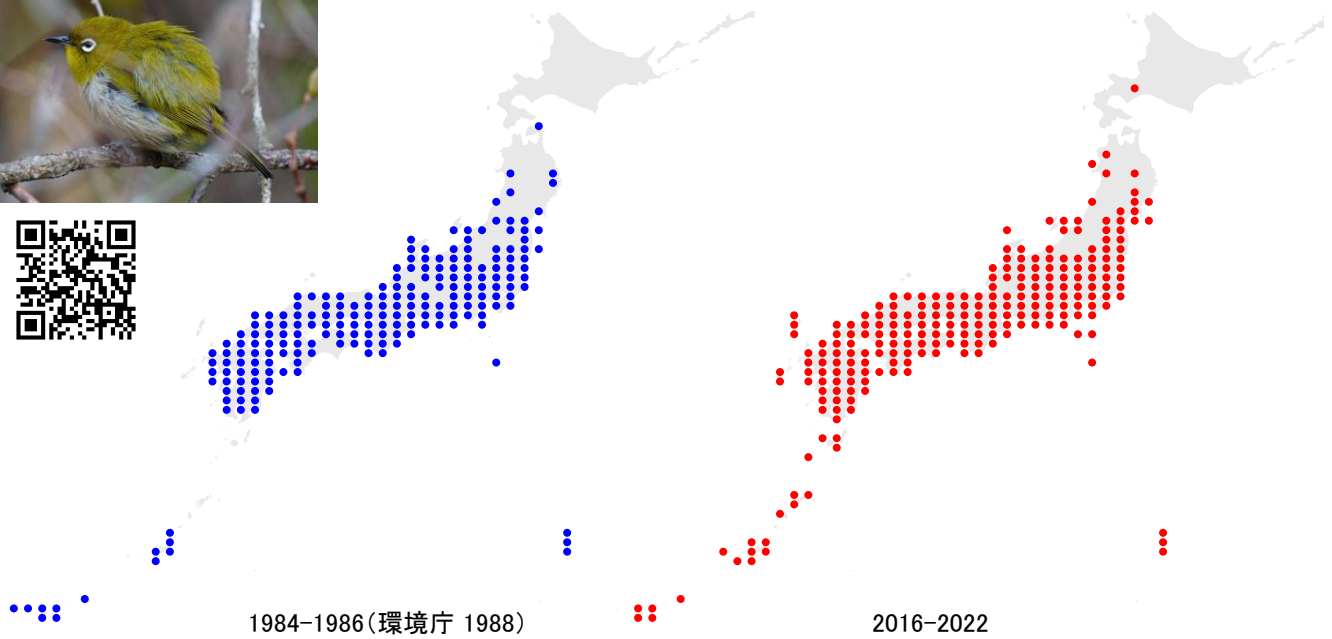
インドから東南アジアで越冬する。日本では旅鳥または、数少ない冬鳥とされ、1980年代は1メッシュのみの記録だったが、2010年代は、関東以西の14メッシュでの記録があった。識別方法や情報の蓄積により、記録が増えた可能性もあるが、越冬例は増加していると言われている(大西・五百澤 2014)。

メグロ *Apalopteron familiare* 全長: 14.0cm 体重: 13-17g



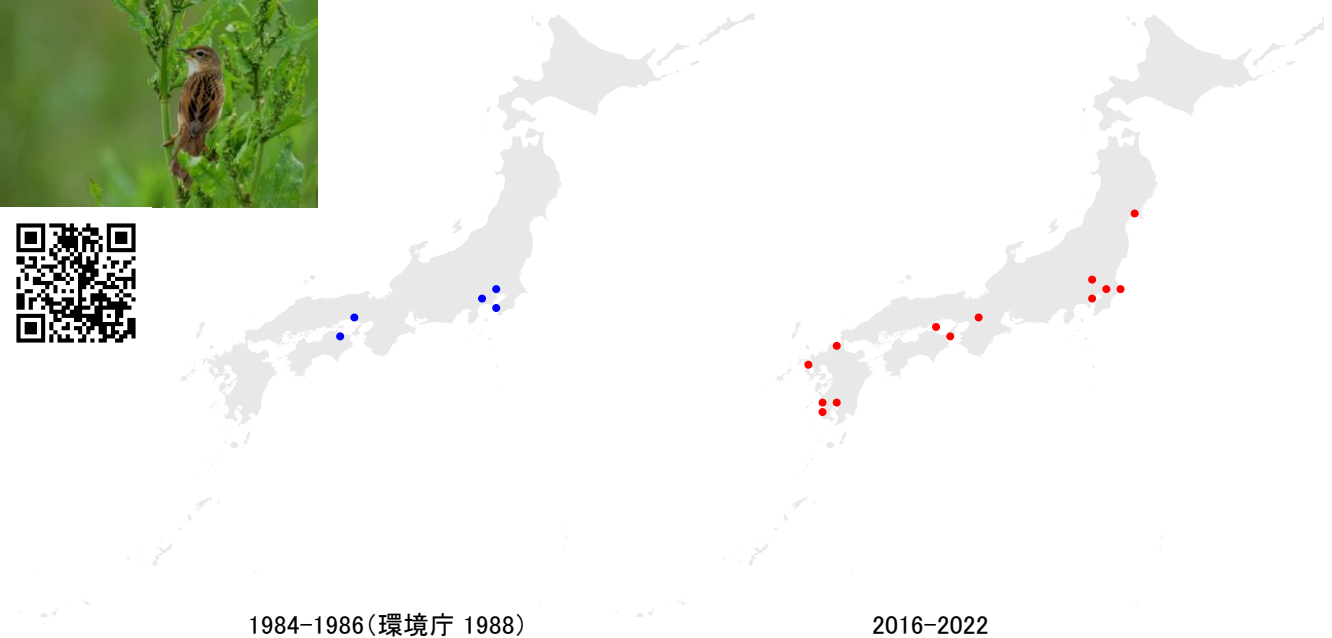
小笠原群島の母島、向島、妹島に留鳥として分布する。かつては姪島、聳島、媒島、父島にも生息していたが、現在は生息していない。本調査では、1980年代、2010年代ともに母島で記録された。

メジロ *Zosterops japonicus* 全長: 11.1 ± 0.3 cm 体重: 11.3 ± 1.9 g



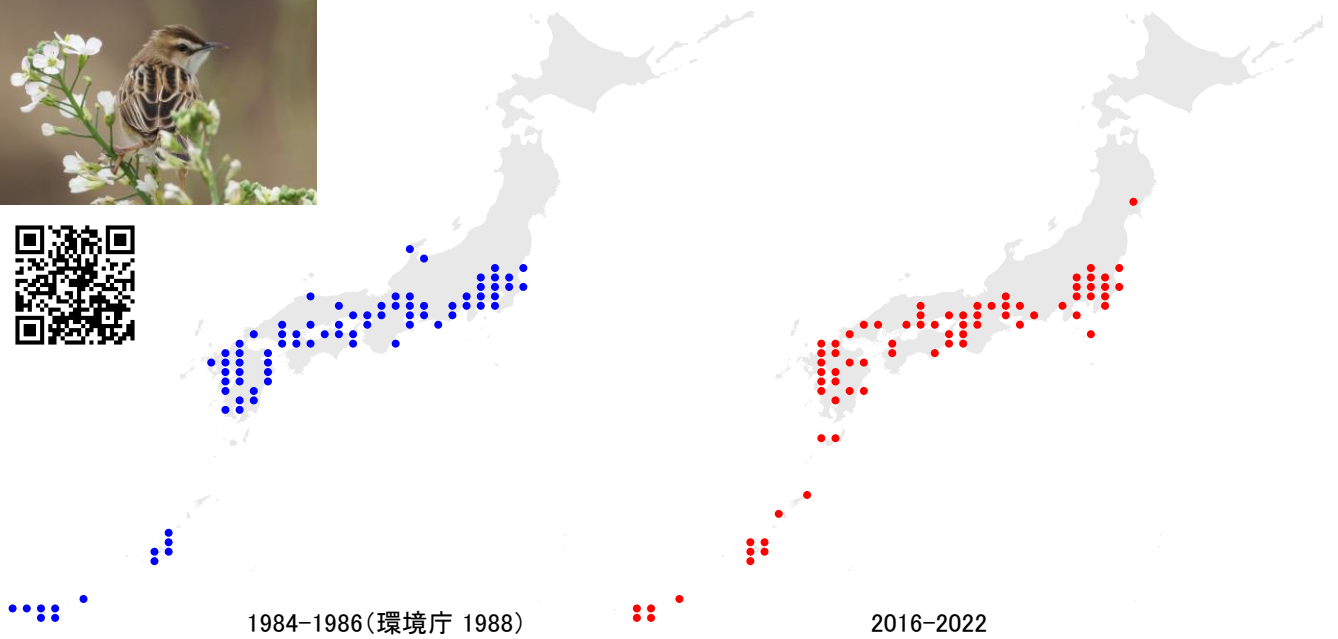
全国で繁殖し、主に南東北以南で越冬する。2010年代の調査では、北東北以北の記録がやや増加していた。2010年代には南西諸島北部の記録がないが、これは調査が行なわれなかったためで、分布していなかったことを示すわけではない。

オオセツカ *Locustella pryeri* 全長: ♂ 12.6 ± 0.4 cm ♀ 11.9 ± 0.4 cm 体重: ♂ 14.5 ± 0.8 g ♀ 12.6 ± 1.5 g



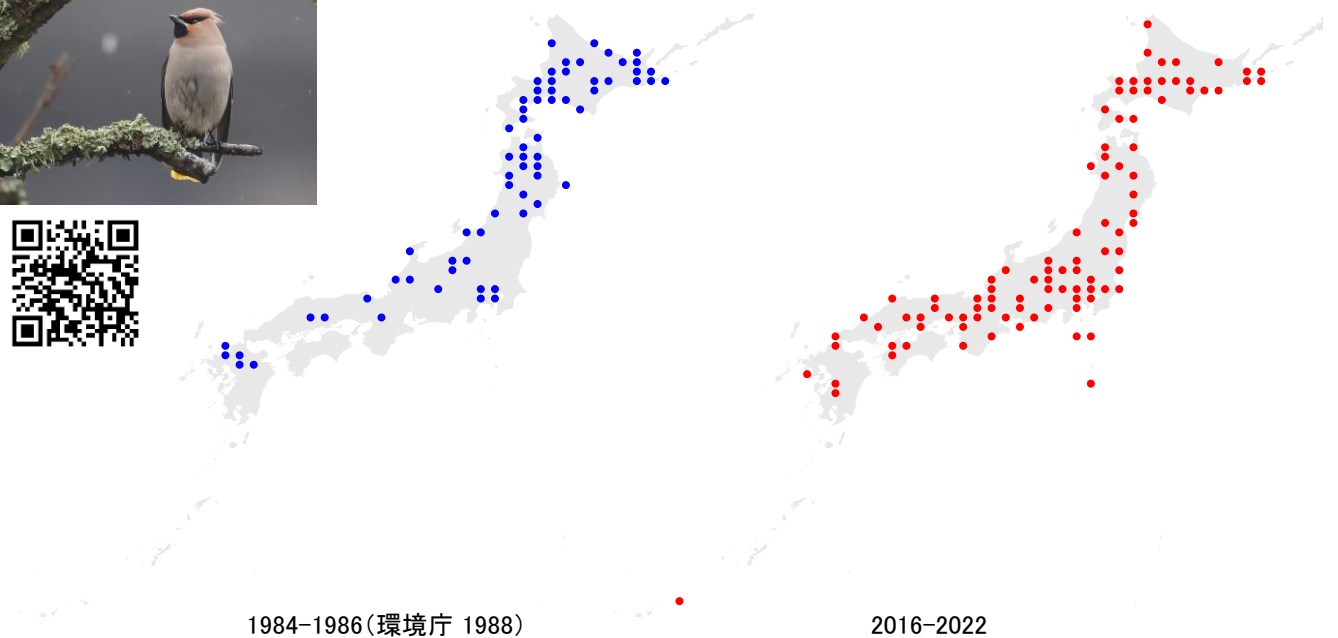
繁殖期は本州中部以北に局所的に分布しているが(植田・植村 2021), 西日本でも越冬している。関東地方の繁殖個体の一部が東海地方へと渡っていたのが確認されている(永田 1997)。冬期は確認の難しい鳥であるため、プレイバック法など確認方法が確立したため(高橋ほか 2022), 記録地点数が増えたのだと思われる。

セツカ *Cisticola juncidis* 全長：11.2-13.0cm 体重：10g



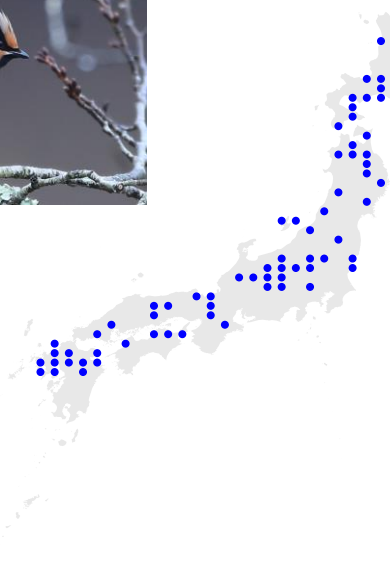
繁殖期は東北地方にも分布しているが(植田・植村 2021), 越冬期は主に関東以南の太平洋側で記録された。1980年代と比べてその分布に大きな変化はなかった。繁殖期は囀りながら草地の上を飛びまわるが, 越冬期はそのような派手な行動は行なわないため, 観察は困難となり, 記録メッシュ数は過小評価の可能性はある。

キレンジャク *Bombycilla garrulus* 全長：20cm 体重：31-70g

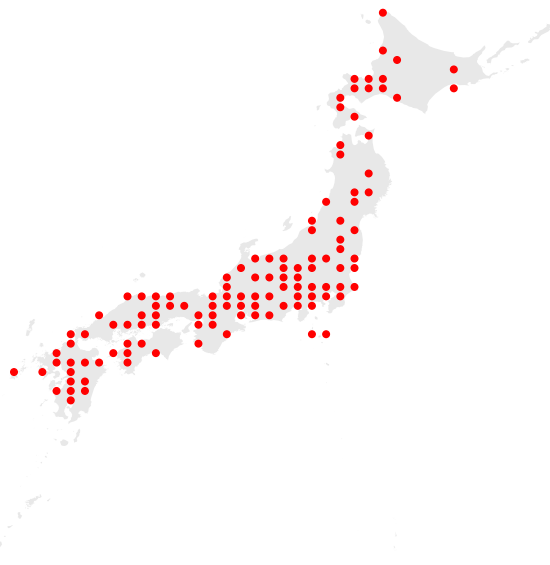


全国の平地から山地にかけて越冬し, 北日本に多く生息する。2010年代は1980年代と比べて, 関東以西の記録メッシュ数が増加していた。

ヒレンジャク *Bombycilla japonica* 全長: 18cm 体重: 40-47g



1984-1986(環境庁 1988)



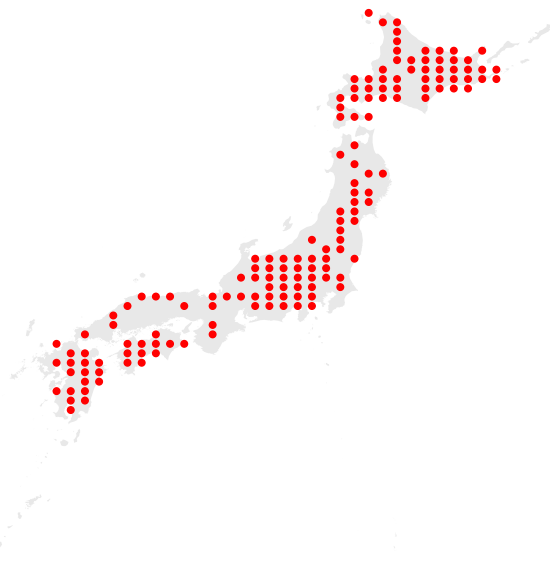
2016-2022

全国の平地から山地にかけて越冬し、キレンジャクとは逆に南日本で多い傾向がある。キレンジャクと同様に2010年代は1980年代と比べて、関東以西の記録メッシュ数が増加していた。

ゴジュウカラ *Sitta europaea* 全長: 14cm 体重: 18-21g



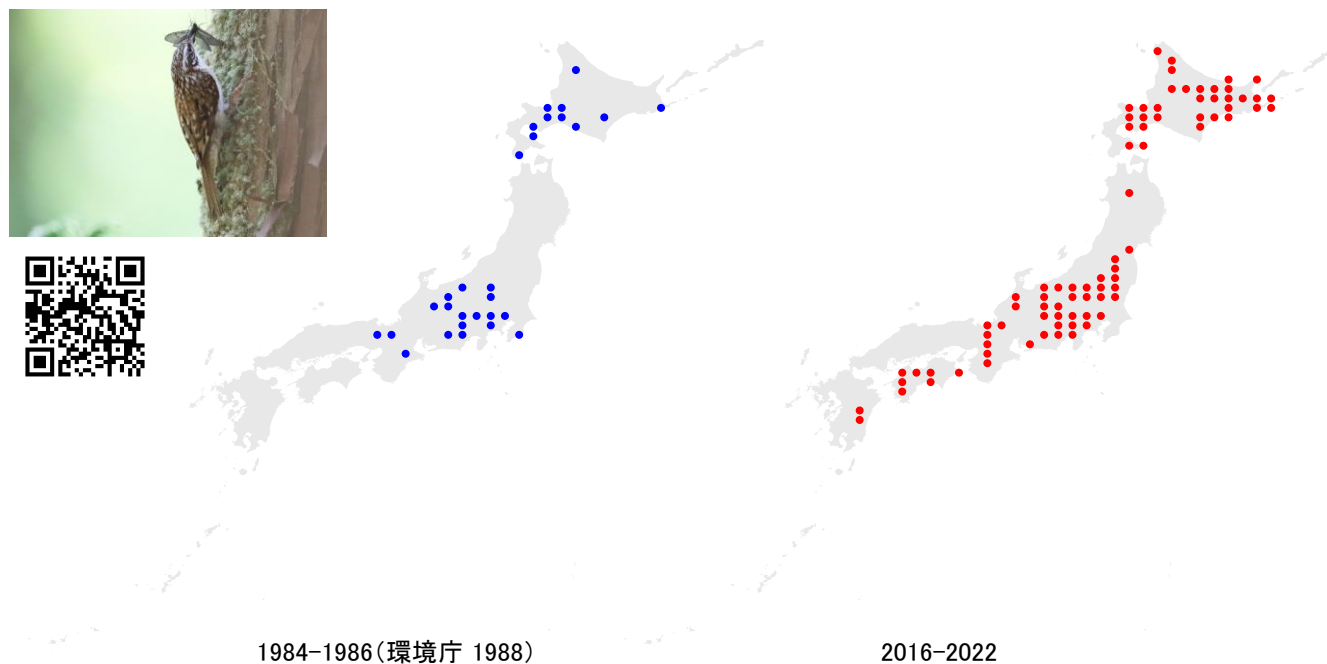
1984-1986(環境庁 1988)



2016-2022

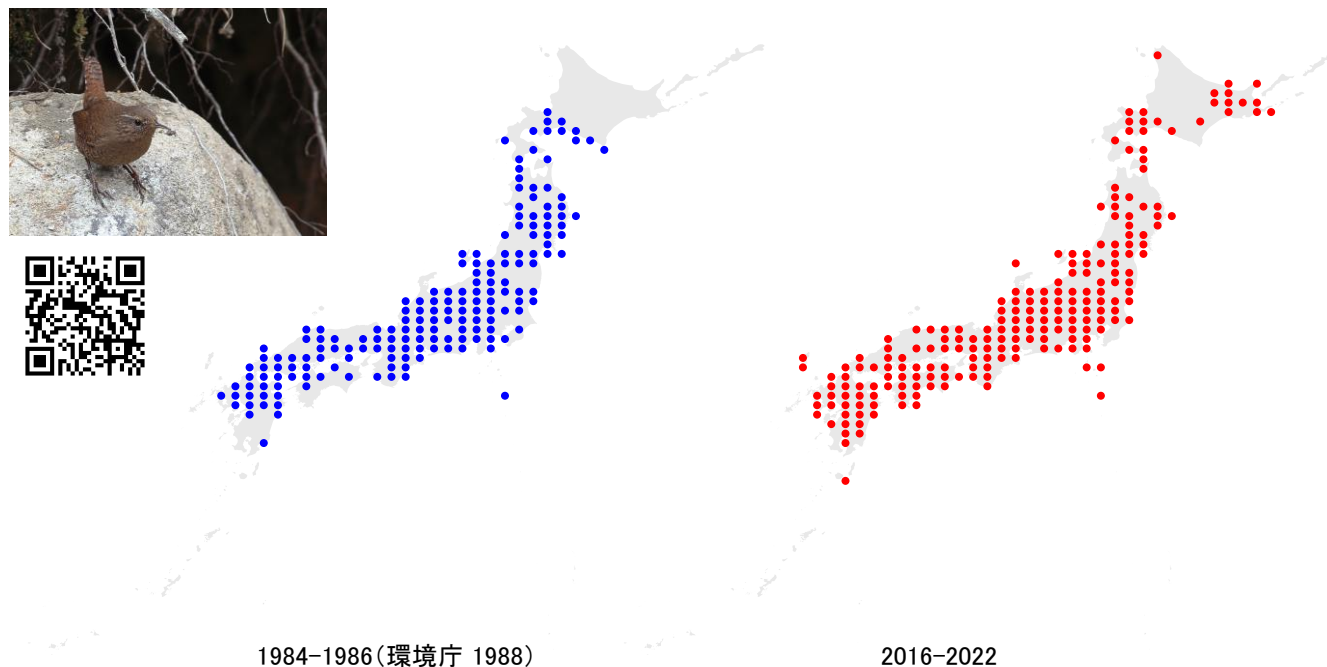
九州以北の全国に留鳥として生息する。1980年代と比べ、2010年代は全国的に記録メッシュ数が増加していた。繁殖期の分布も同様に拡大している。繁殖期においては、森林性の鳥の多くが分布を拡大しており、森林の成熟により生息環境が良くなったことが原因と考えられている(植田・植村 2021)。

キバシリ *Certhia familiaris* 全長：14cm 体重：7-9g



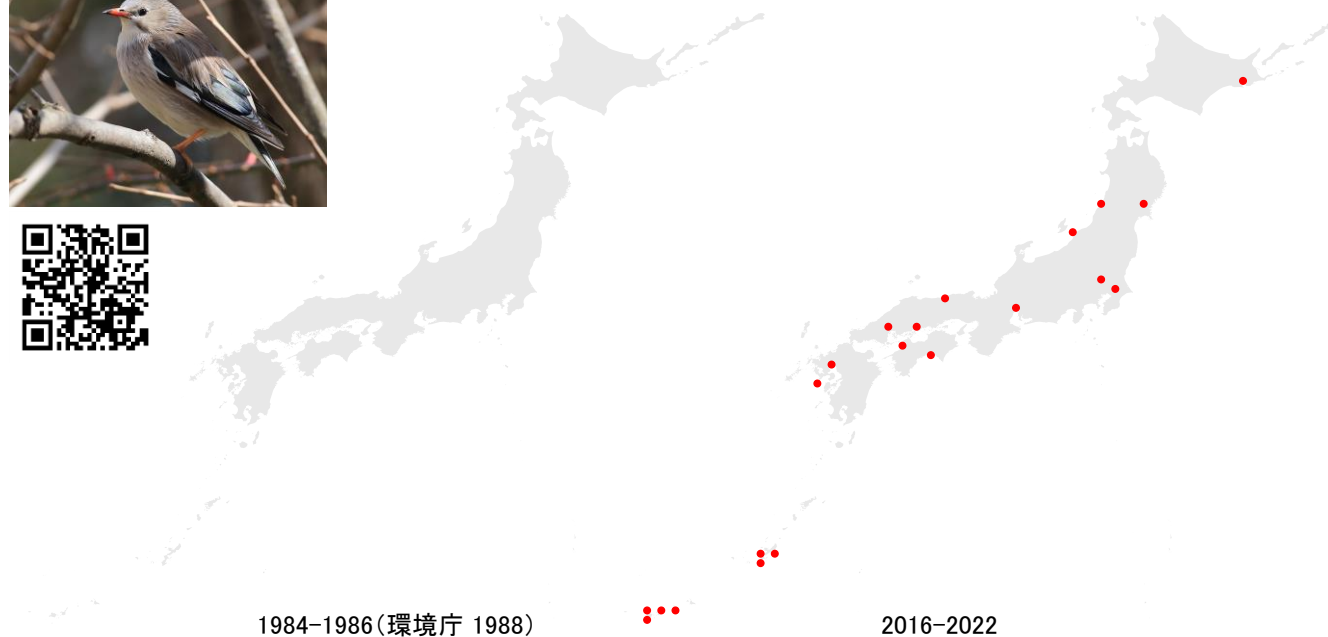
九州以北の全国に留鳥として生息する。1980年代と比べ、2010年代は全国的に記録メッシュ数が増加していた。繁殖期の分布も同様に拡大しており、特に低標高域への分布拡大が顕著である(植田・植村 2021)。

ミソサザイ *Troglodytes troglodytes* 全長：9.9-10.9cm 体重：6.8-10.9g



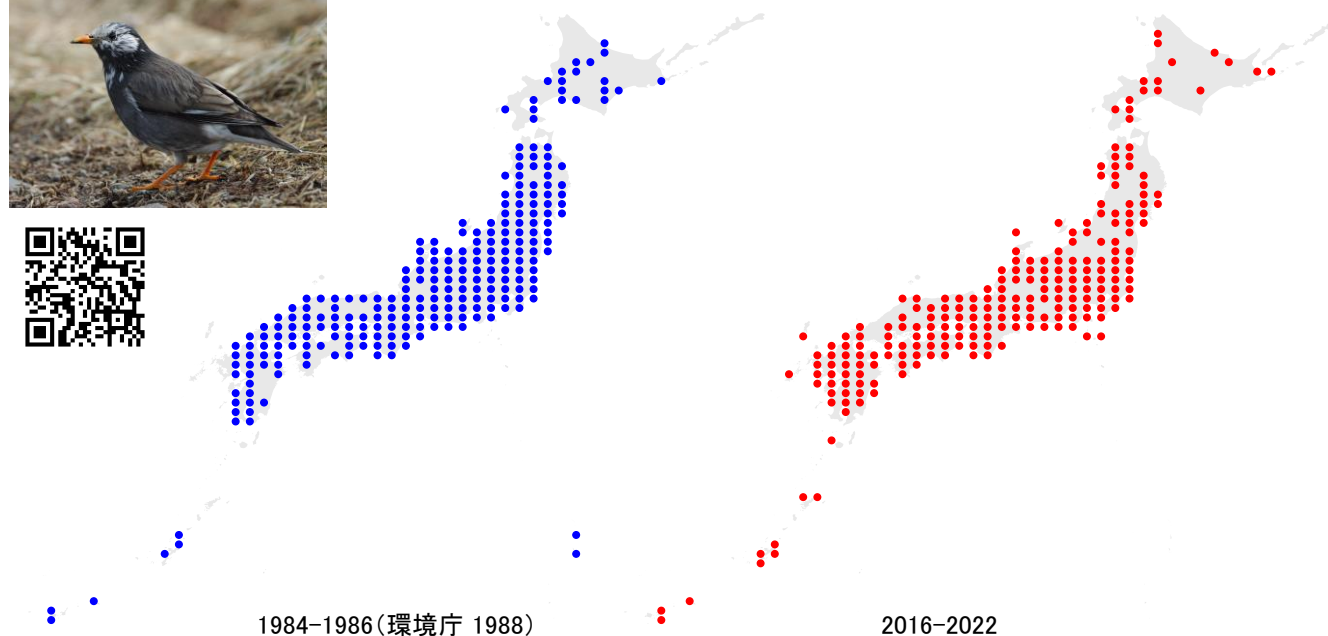
屋久島以北の全国に留鳥として生息する。1980年代までは、北海道道南以南で越冬していたが、2010年代は道東でも越冬するようになった。

ギンムクドリ *Spodiopsar sericeus* 全長：22-24cm 体重：65g



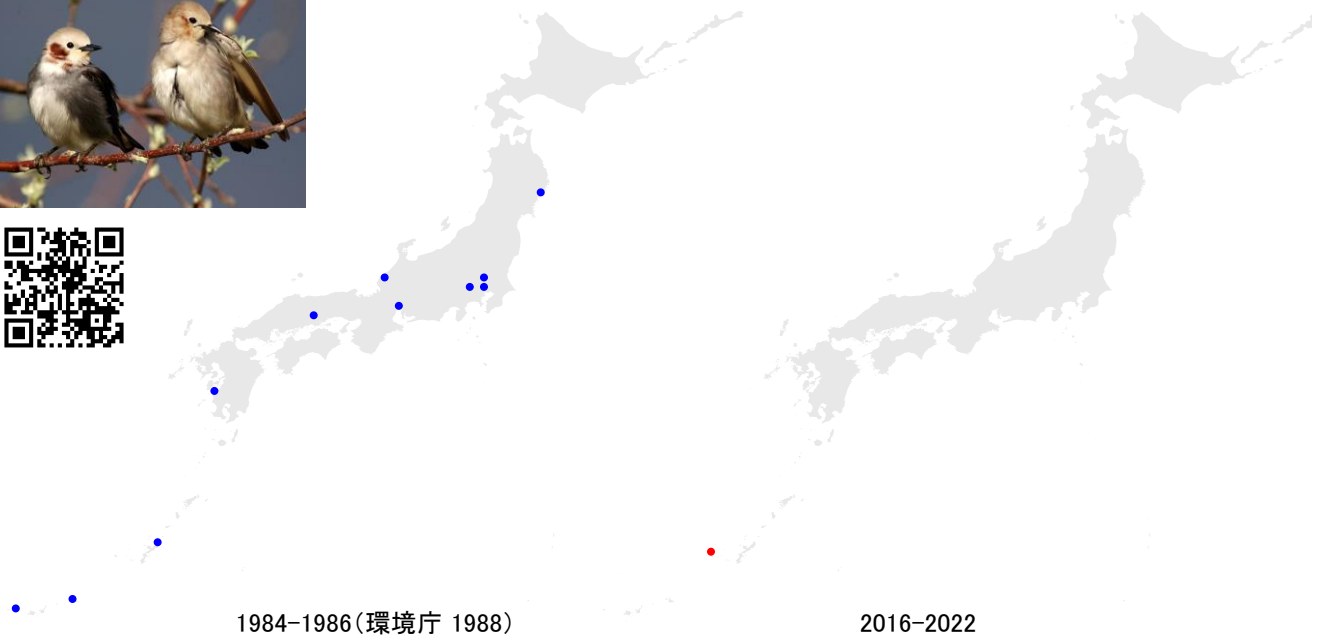
中国南部などに分布する。日本では数少ない旅鳥または冬鳥とされていて、1980年代には記録はなかったが、2010年代には南西諸島で越冬するようになり、本土部でも不定期に各地で記録されるようになっていた。

ムクドリ *Spodiopsar cineraceus* 全長：22.5-24.3cm 体重：67.5-97.5g



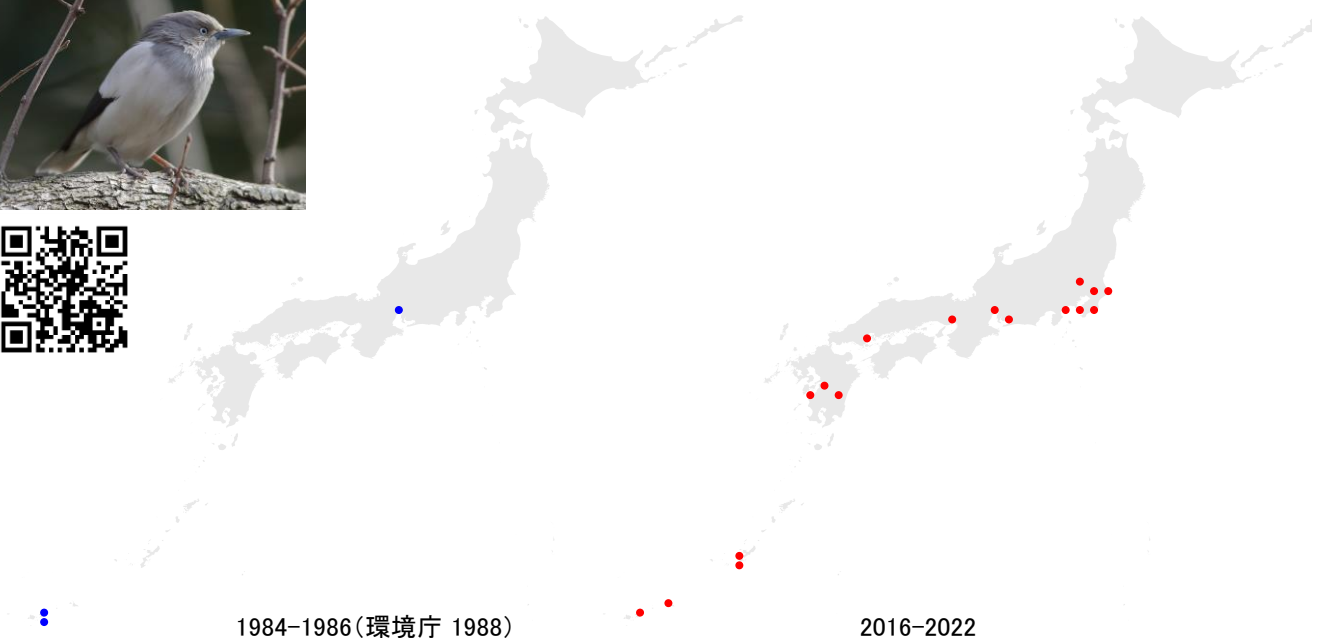
全国の平地から山地の村落に留鳥として生息し、北日本に生息するものは越冬期は南へ移動する。繁殖期の調査では、個体数が減少していることが示されており(植田・植村 2021)、2010年代は北日本で記録メッシュ数が減少していたが、繁殖期と同様の減少を反映している可能性がある。

コムクドリ *Agropsar philippensis* 全長：18.3-19.8cm 体重：♂46.7±2.8g ♀47.2±3.9g



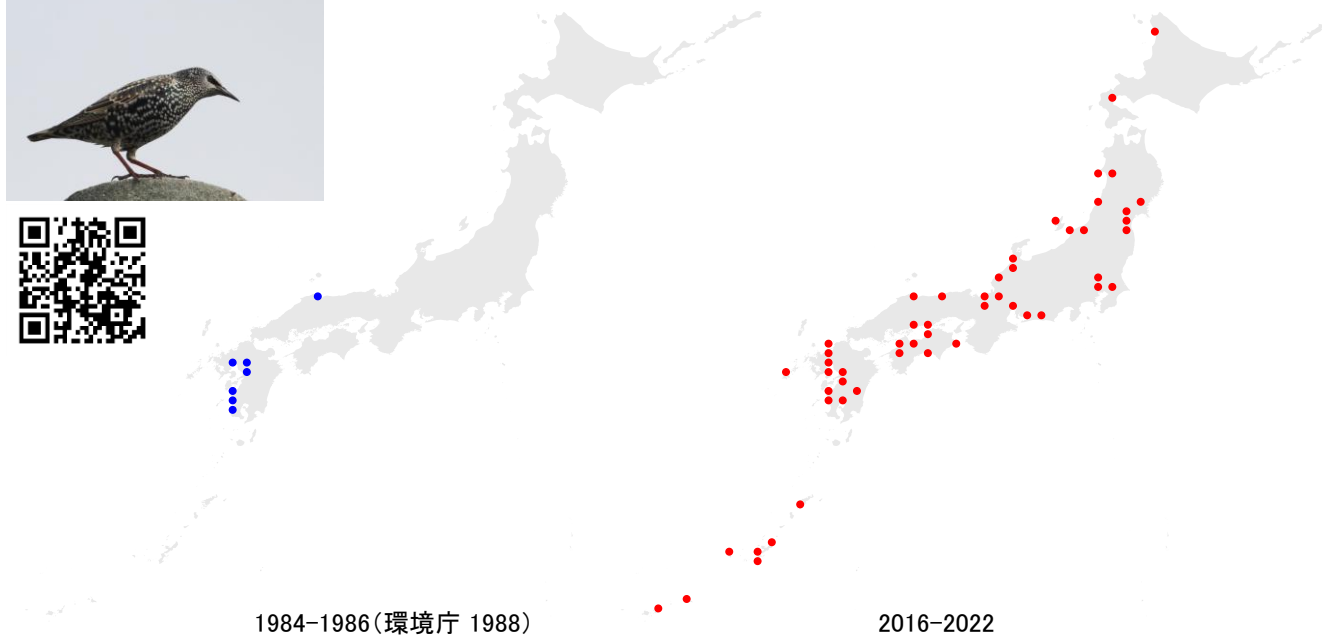
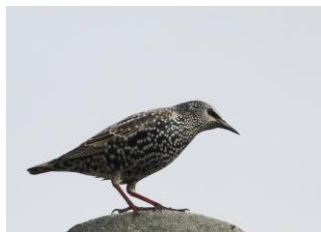
夏鳥として本州中部以北で繁殖する。越冬地はフィリピンなどだが、1980年代には、各地で記録があった。しかし、日本鳥類目録(日本鳥学会 2000, 2012)にも越冬についての記載はなく、また、1980年代にギンムクドリの記録がないことより、ギンムクドリ等の誤認の可能性も考えられる。

カラムクドリ *Sturnia sinensis* 全長：19-20cm 体重：61g



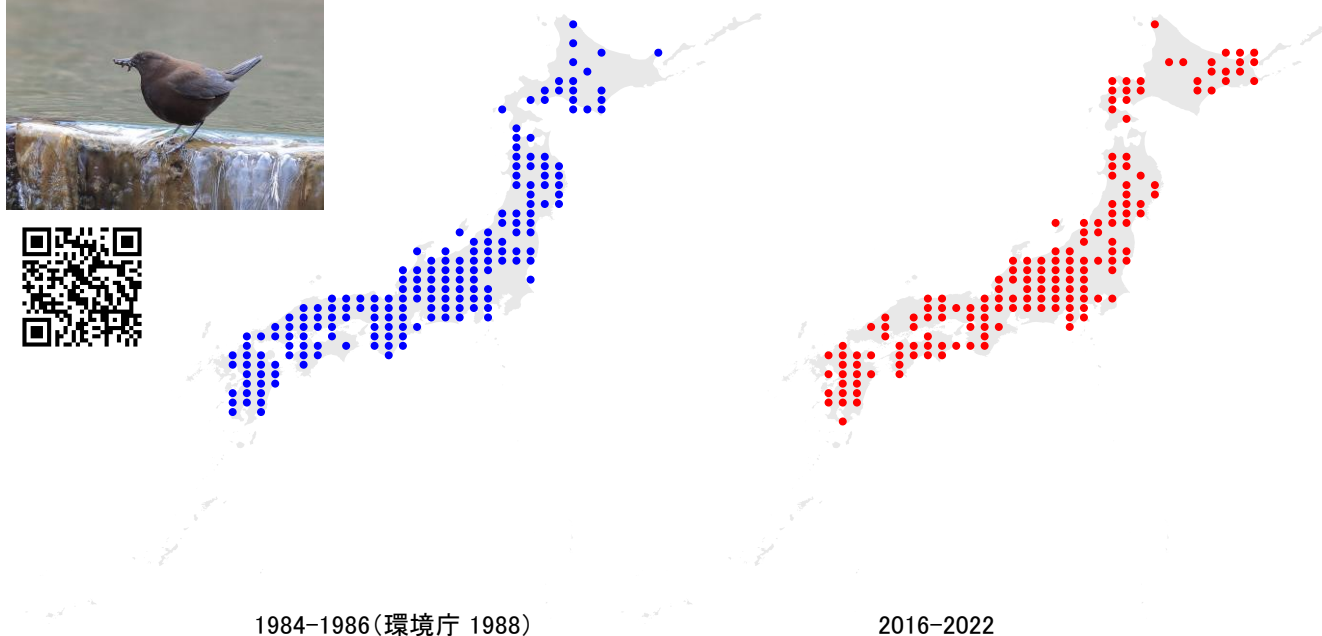
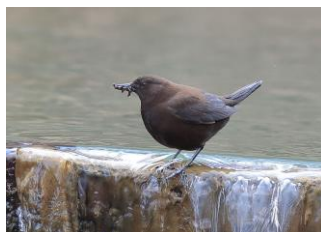
中国南部から東南アジアにかけて分布し、日本には数少ない冬鳥として渡来する。1980年代は、南西諸島の2メッシュで記録があったが、2010年代は南西諸島以外にも本土部で13メッシュの記録があった。越冬分布は拡大傾向にある。

ホシムクドリ *Sturnus vulgaris* 全長：22-24cm 体重：55-100g



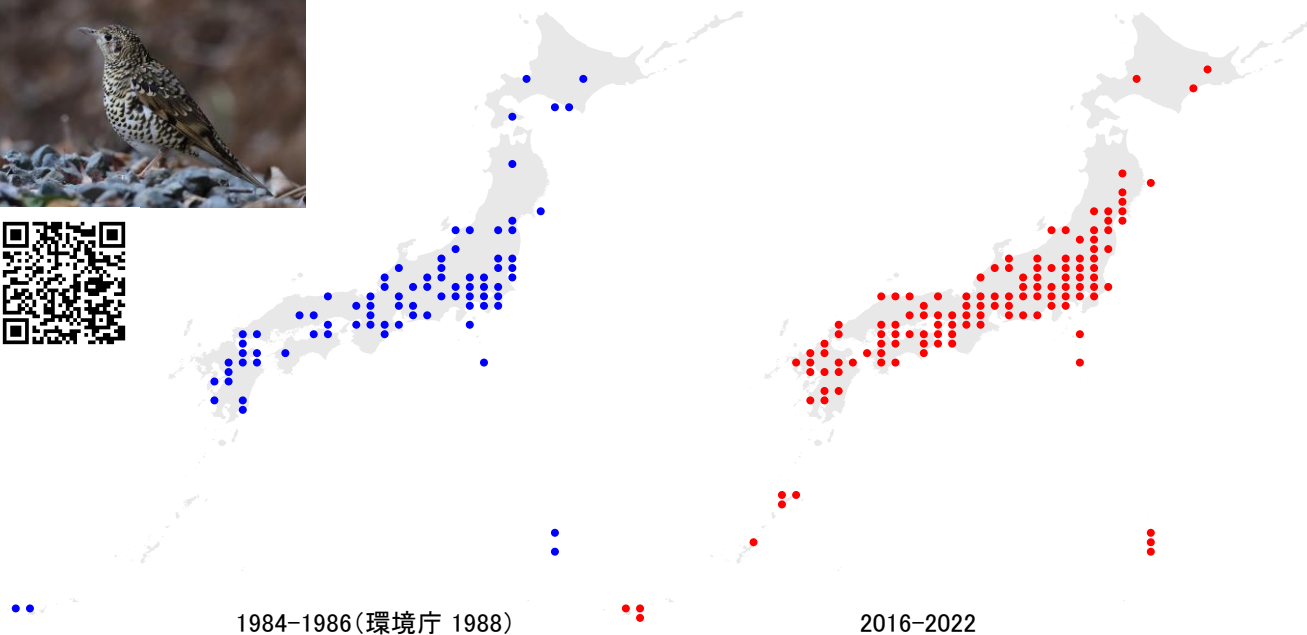
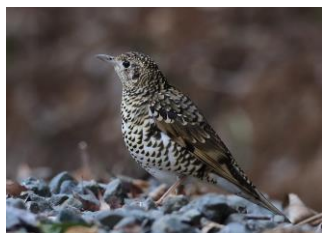
ヨーロッパから中央アジアにかけて越冬し、北米やオーストラリアなどでは移入個体が分布する。日本では数少ない冬鳥で、主に西日本で記録があり、1980年代は九州を中心に7メッシュで記録された。2010年代は分布が大きく拡がり、不定期ながら全国で記録されていた。

カワガラス *Cinclus pallasii* 全長：22cm 体重：50-70g



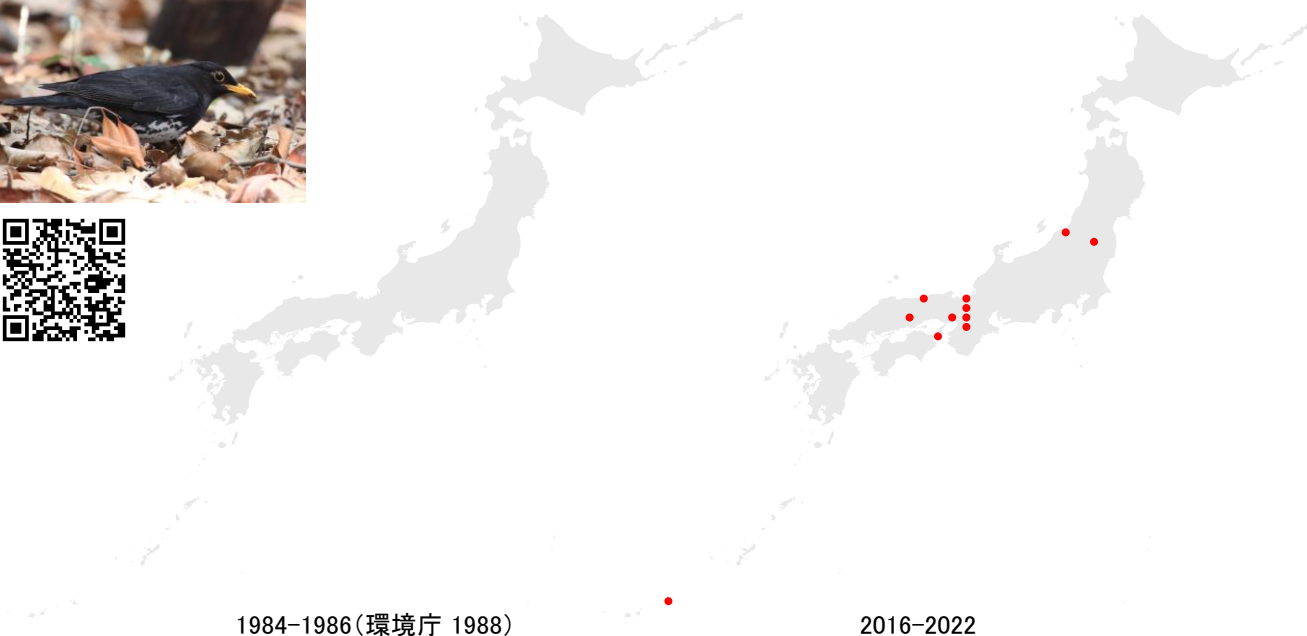
留鳥として、全国の河川に分布する。1980年代は北海道道東部の記録は少なかったが、2010年代は記録メッシュ数が大きく増加していた。

トラツグミ *Zoothera dauma* 全長: 29.5cm 体重: 130g



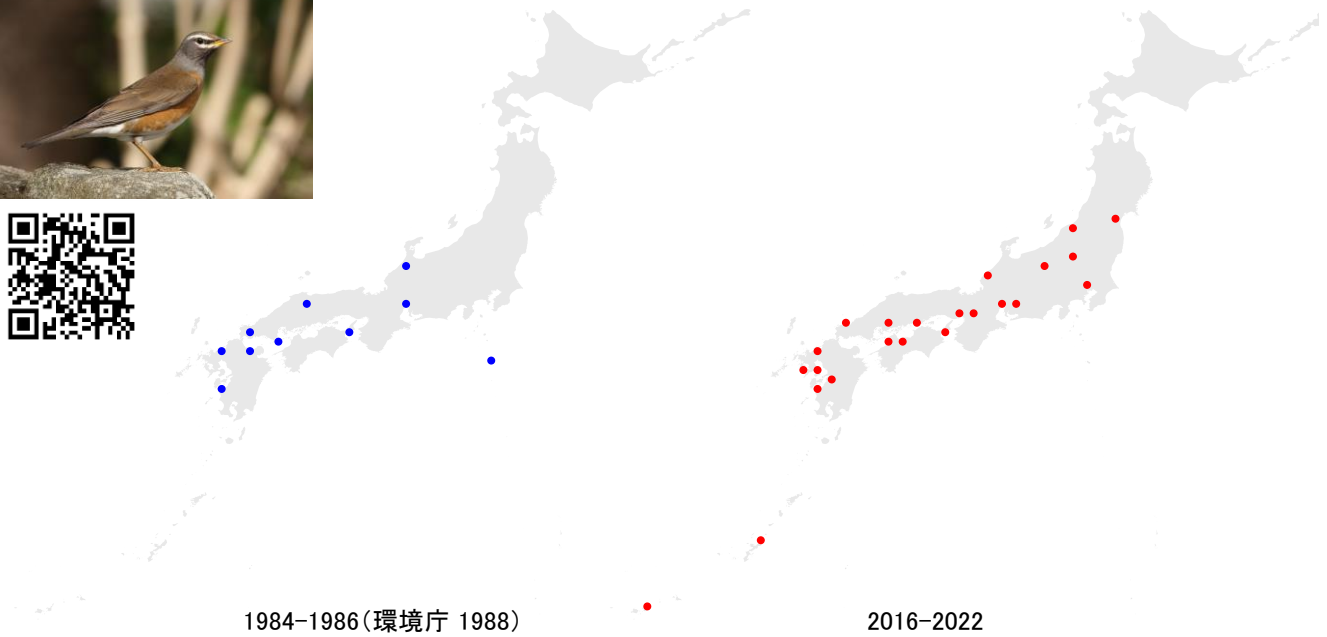
全国の平地から山地の林で繁殖し、越冬期は主に南東北以南で越冬する。1980年代と比べて、2010年代は東北地方の分布がやや北上していた。

クロツグミ *Turdus cardis* 全長: 21.0-22.5cm 体重: 50-65g



九州以北の全国の森林で繁殖し、中国南部からインドシナ半島北部で越冬する。1980年代には、越冬記録はなかったが、2010年代は不規則の越冬期が各地で記録された。

マミチャジナイ *Turdus obscurus* 全長：22cm 体重：58-73g

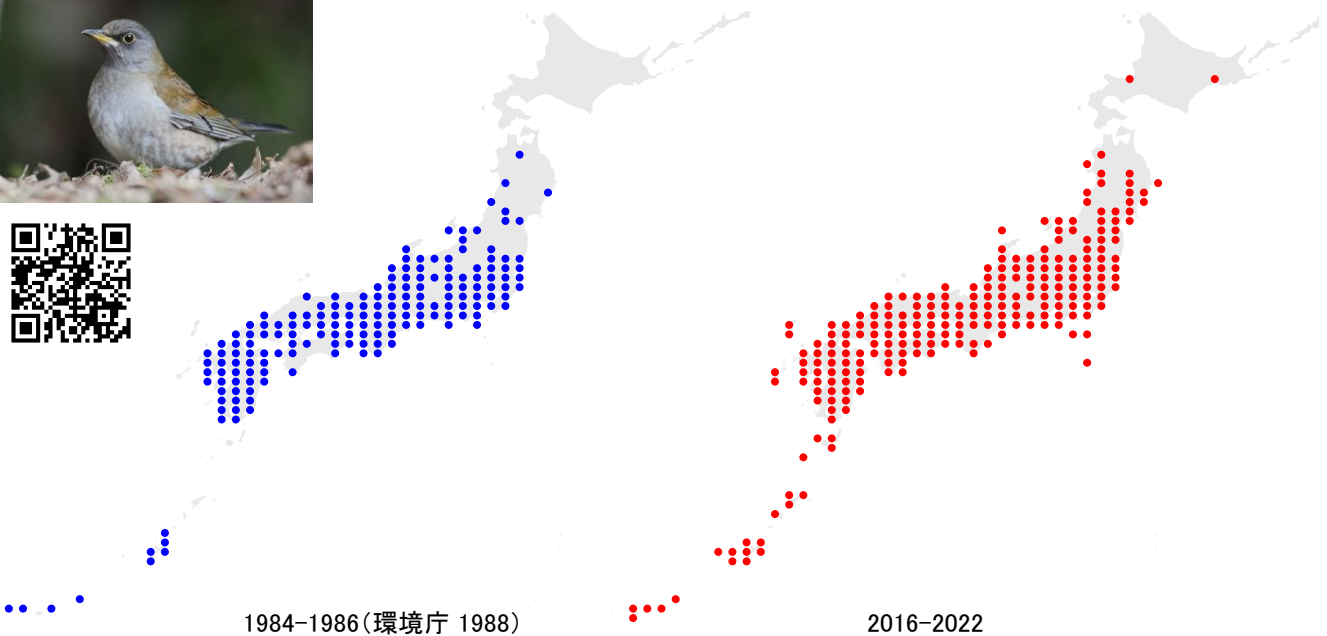


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

旅鳥として全国に渡来するが、その一部が越冬することがあり、西日本に多い。2010年代は東日本での記録メッシュも増加していた。

シロハラ *Turdus pallidus* 全長：24cm 体重：66-80g

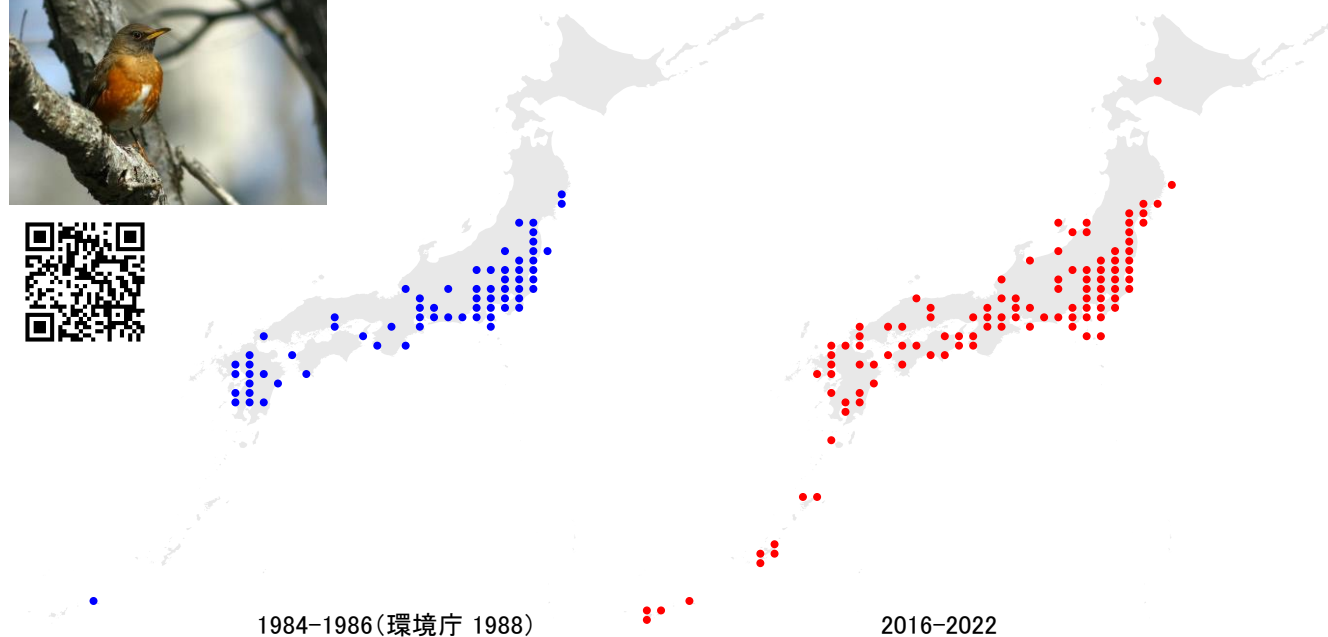


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

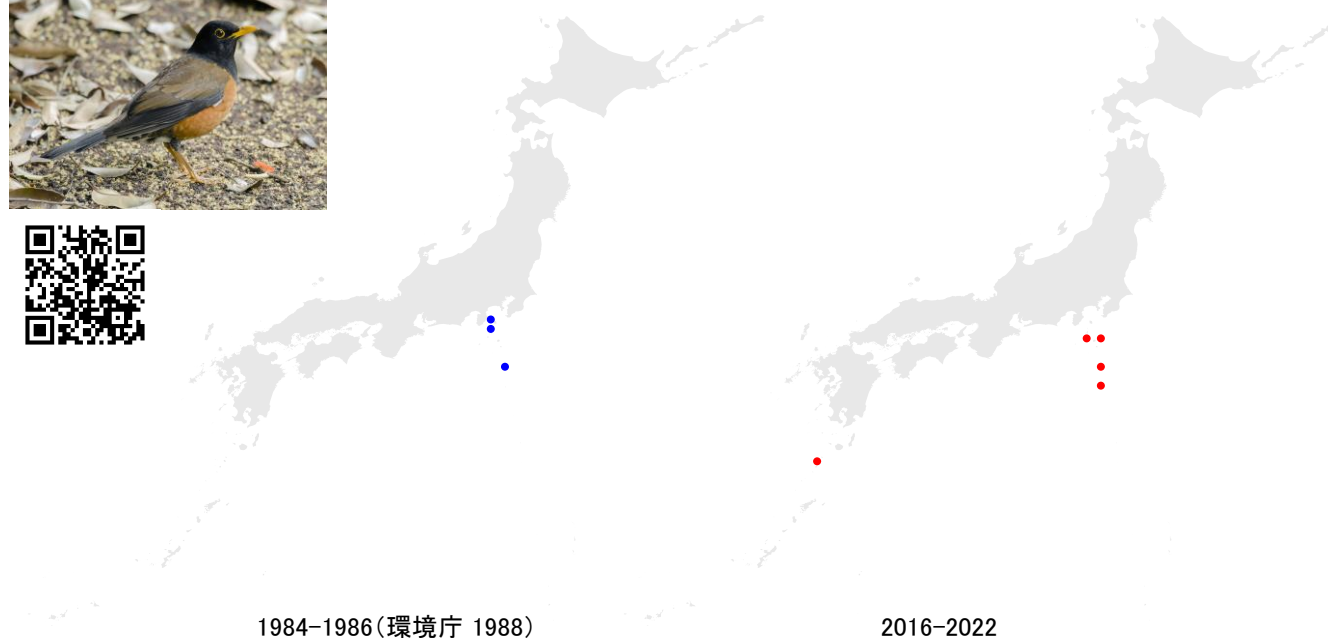
冬鳥として主に南東北以南の平地や山地の林、農耕地などで越冬する。中国山地や対馬では一部繁殖している場所もある。1980年代と比べて2010年代は東北地方の越冬範囲が北上する傾向があった。

アカハラ *Turdus chrysolaus* 全長：24cm 体重：55-70g



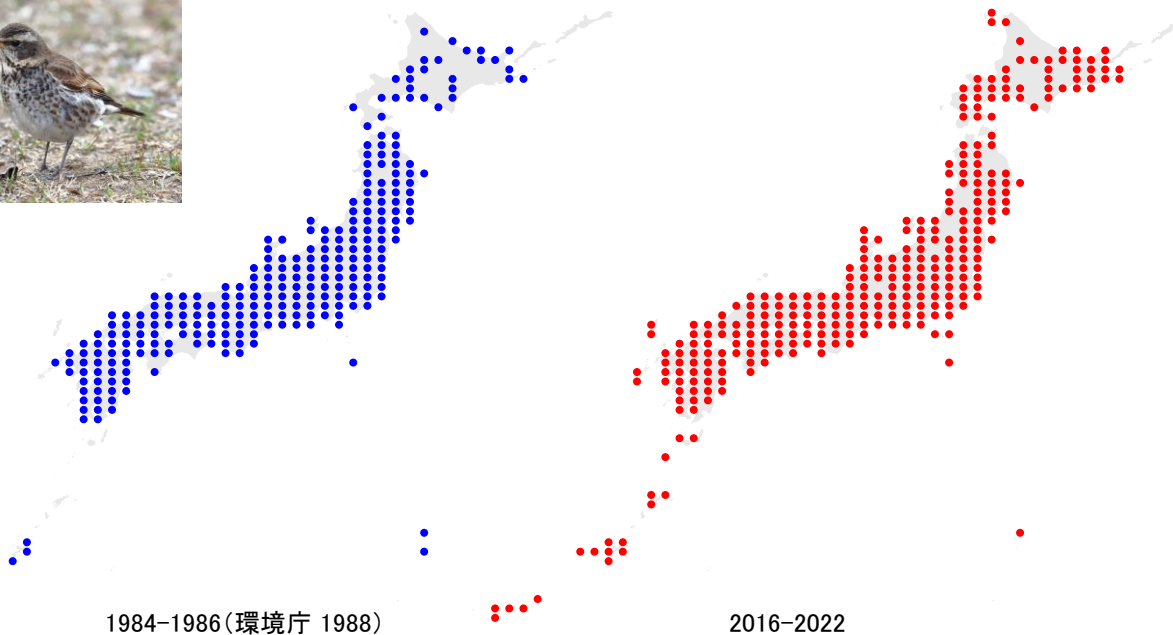
本州中部以北の山地で繁殖し、東北以南の主に太平洋側で越冬する。2010年代は1980年代と比べて分布が拡大しており、1980年代にはあまり見られなかった南西諸島や本州の日本海側でも見られるようになった。

アカコッコ *Turdus celaenops* 全長：23cm 体重：♂73.7-81.3g ♀65.9-93.1g



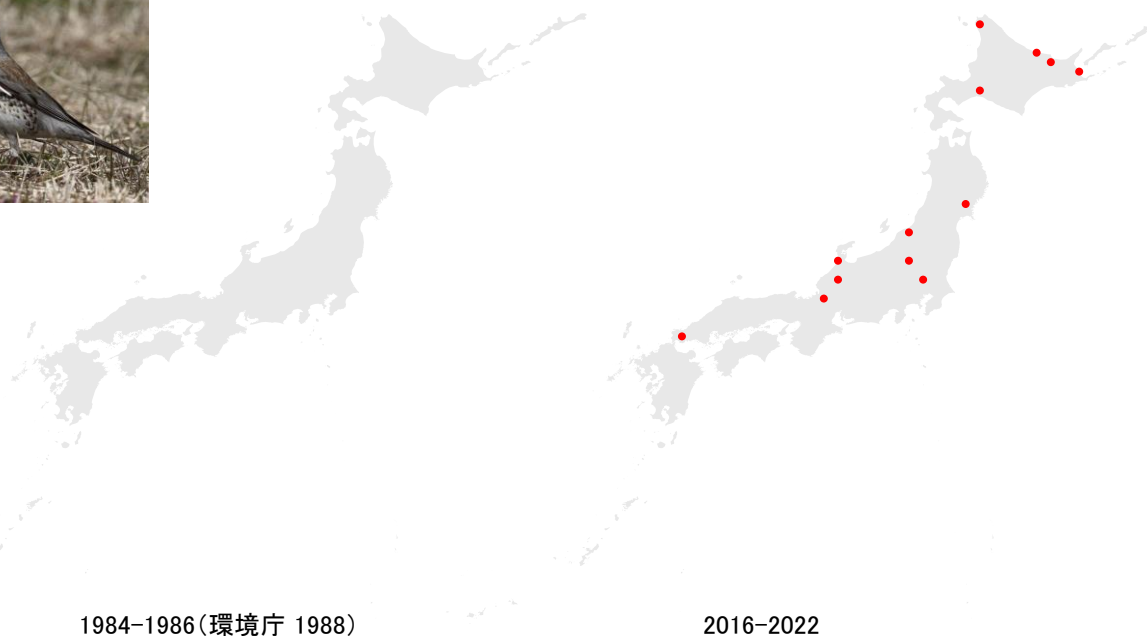
伊豆諸島およびトカラ列島に留鳥として分布する。三宅島では導入されたイタチによる捕食や2000年の火山活動による生息地減少で個体数は減少している。1980年代はトカラ列島の記録はなかったが、トカラ列島で調査がされなかったため分布していなかったわけではない。

ツグミ *Turdus naumanni* 全長：24cm 体重：65-107g



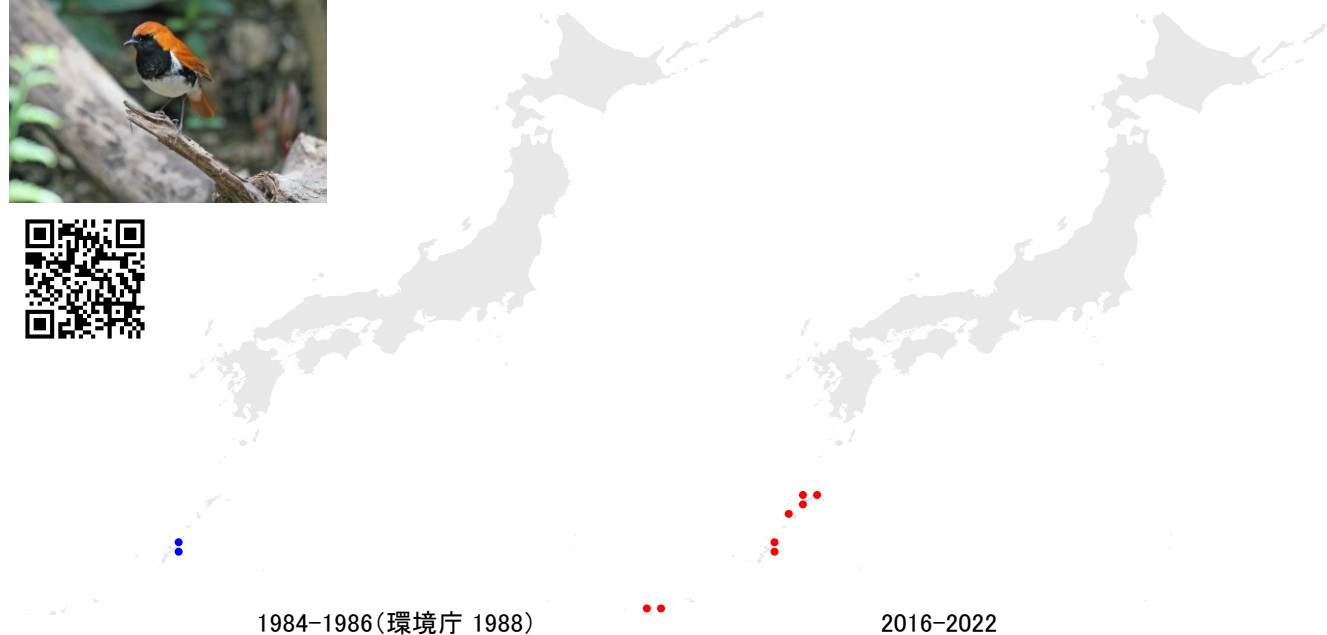
冬鳥として全国に渡来する。今回の調査での記録メッシュ数は、全種の中でヒヨドリ、ハシブトガラスに続く3番目の多さで、日本の代表的な冬鳥と言える。1980年代と比べて、2010年代は北海道の記録メッシュ数が増加していた。1980年代に南西諸島北部で記録されていないのは、調査が行なわれていなかったためである。

ノハラツグミ *Turdus pilaris* 全長：26cm 体重：76-141g



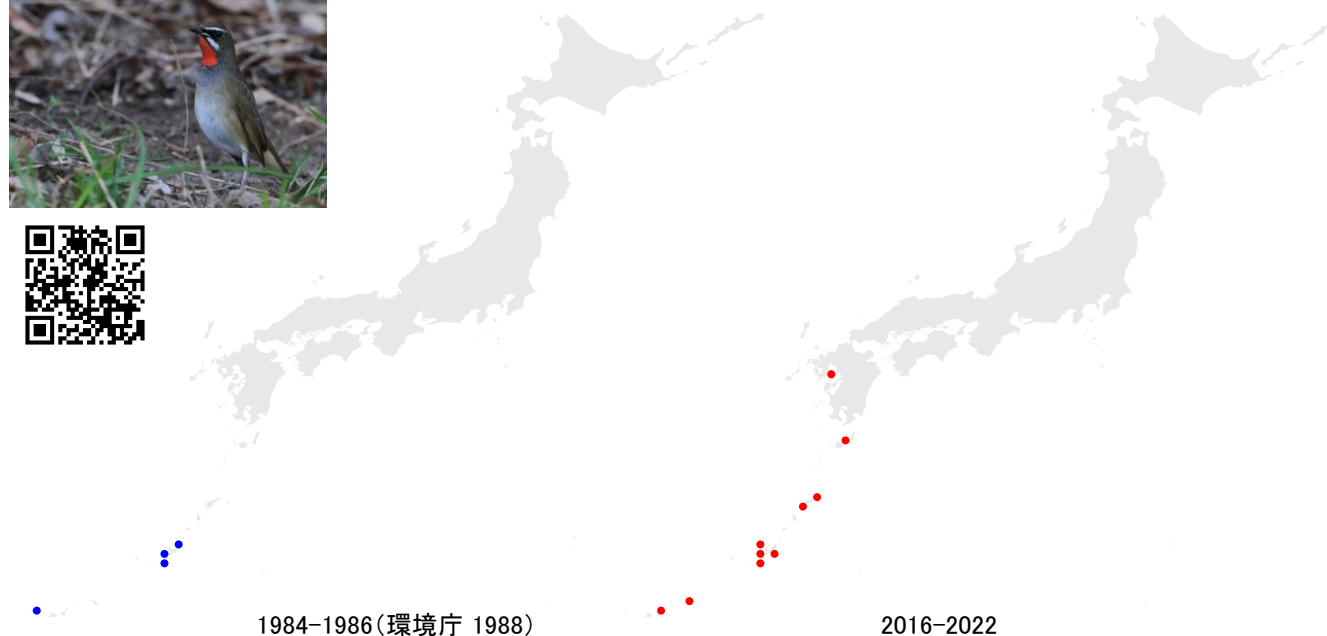
ヨーロッパからイランにかけて越冬し、日本ではこれまでは迷鳥とされていた。1980年代には記録メッシュはなかったが、近年、観察記録が増えており、2010年代は13メッシュで記録された。

アカヒゲ *Luscinia komadori* 全長：14cm 体重：♂23.0±1.3g ♀24.4±2.4g



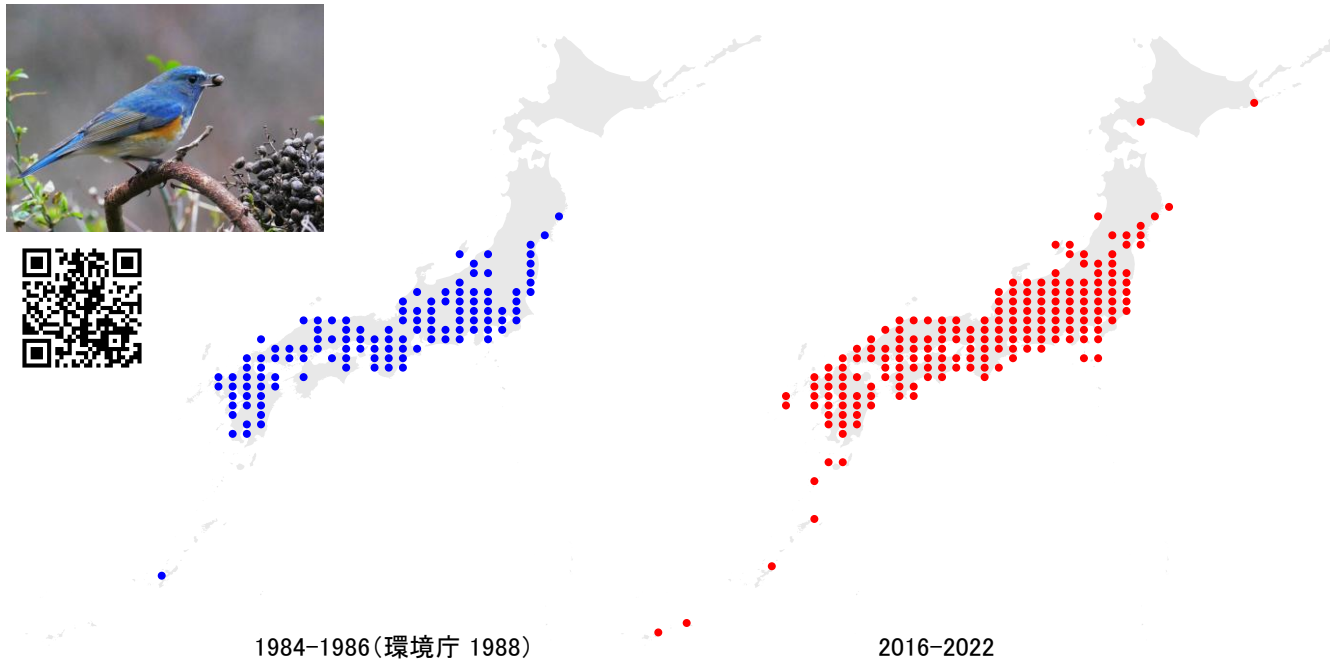
南西諸島に留鳥として生息し、一部は夏鳥である。1980年代に記録のない奄美諸島やトカラ列島については1980年代には調査が行なわれていなかったため、生息していなかったわけではない。

ノゴマ *Luscinia calliope* 全長：16cm 体重：24-25g



北海道で繁殖し、南西諸島で一部が越冬する。南西諸島北部では、1980年代には調査が行なわれていないために、分布が北上しているのかどうか分からないが、2010年代には九州でも記録があった。

ルリビタキ *Tarsiger cyanurus* 全長：14cm 体重：♂11.0-15.2g ♀10.0-17.8g

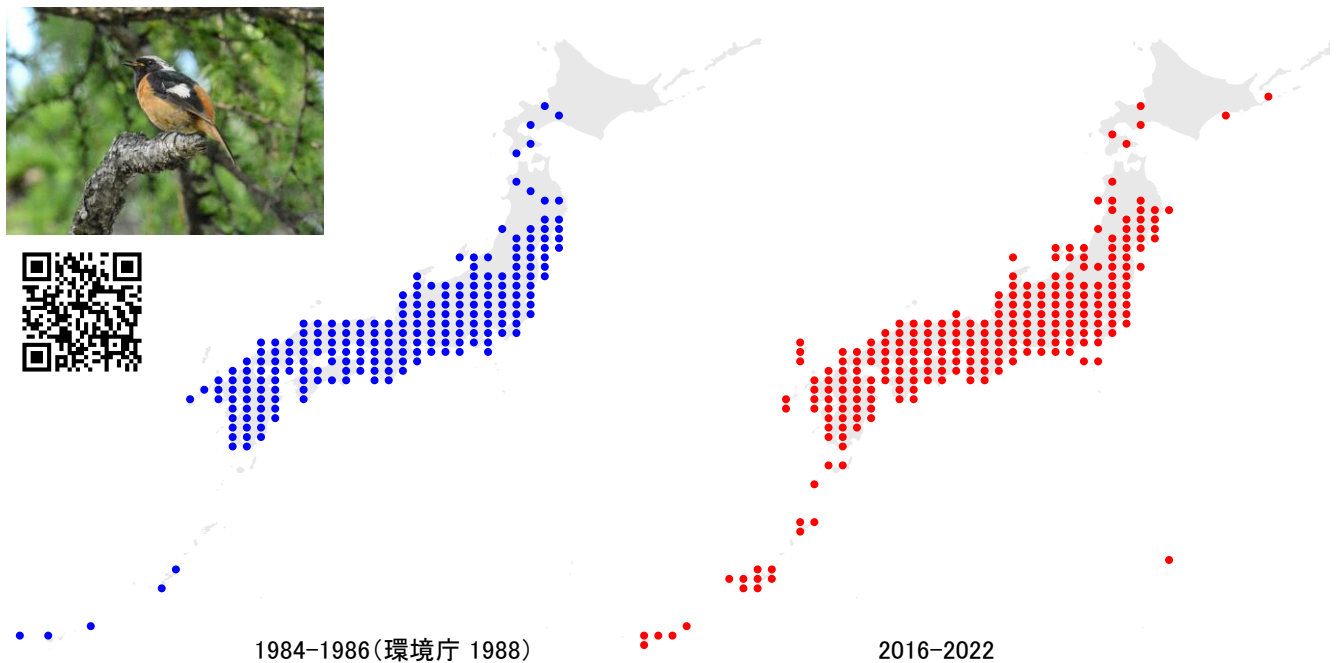


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

四国以北の寒冷な場所に成立する針葉樹林で繁殖し、南東北以南で越冬する。1980年代と比べて、2010年代は東北地方の分布がやや北上していた。

ジョウビタキ *Phoenicurus aureoreus* 全長：14-15cm 体重：11-20g

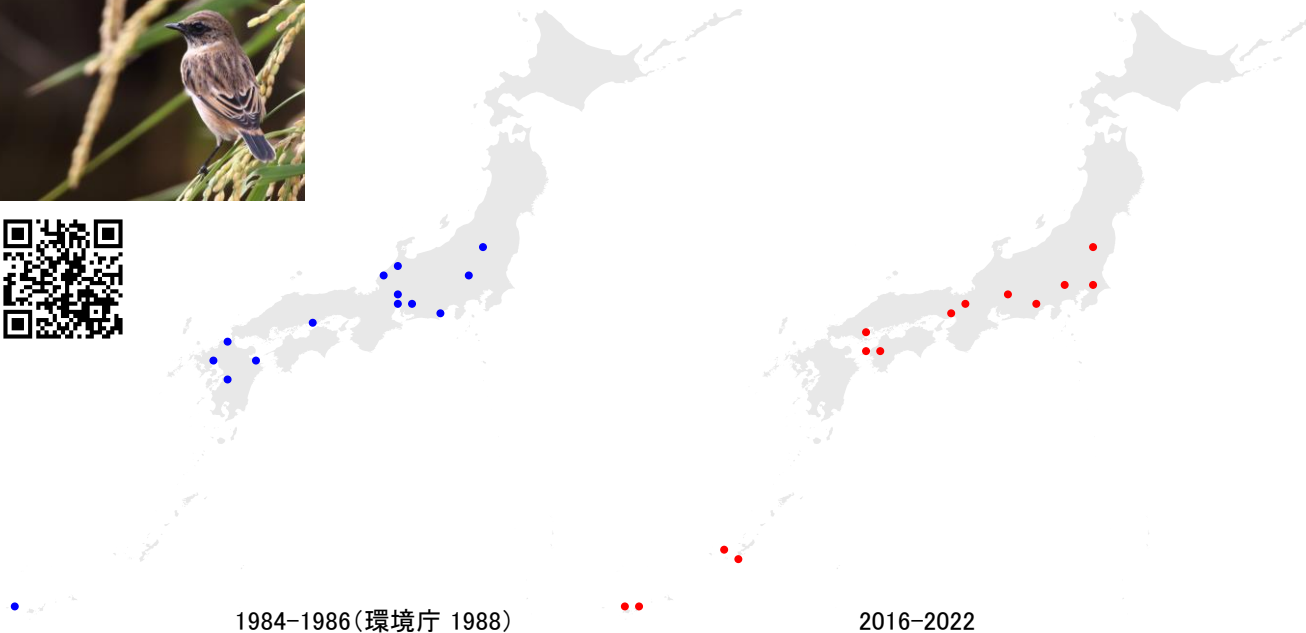


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

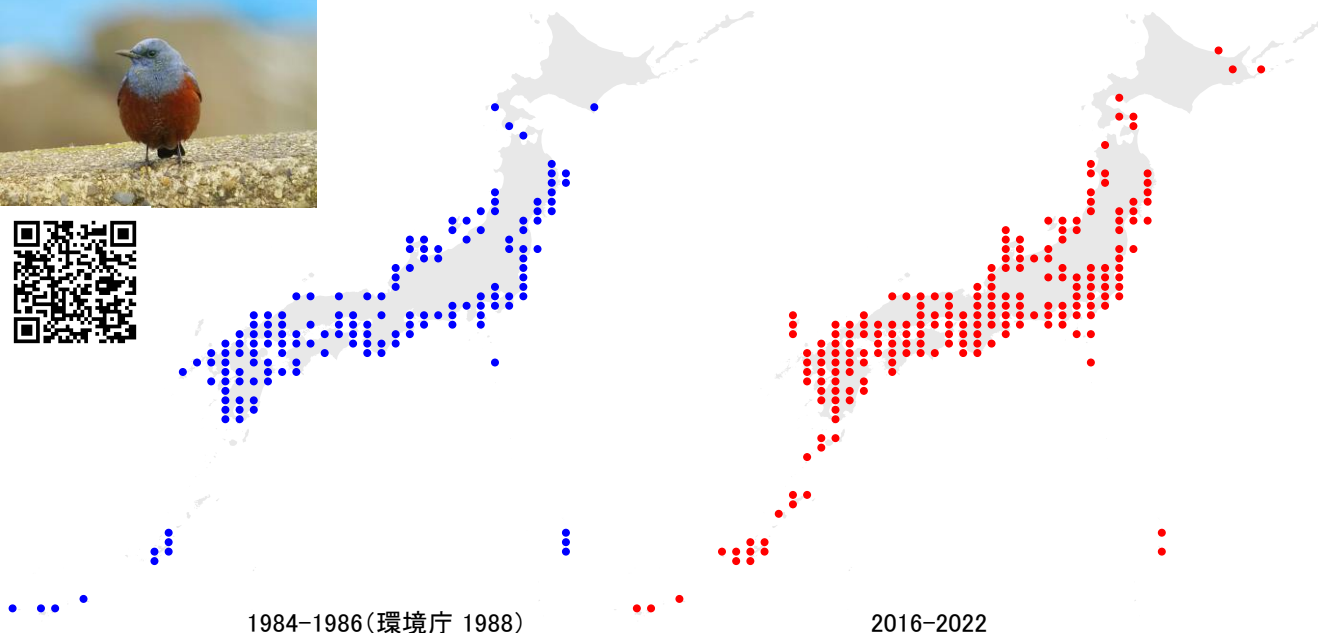
主に北海道および北東北を除く地域のやや開けた環境で越冬する。局所的だが、繁殖し、繁殖分布を拡げている地域も本州や北海道で出てきている(植田・植村 2021)。越冬期の分布はやや北上する傾向があったものの、大きな変化はなかった。

ノビタキ *Saxicola torquatus* 全長: 13cm 体重: 12-16g



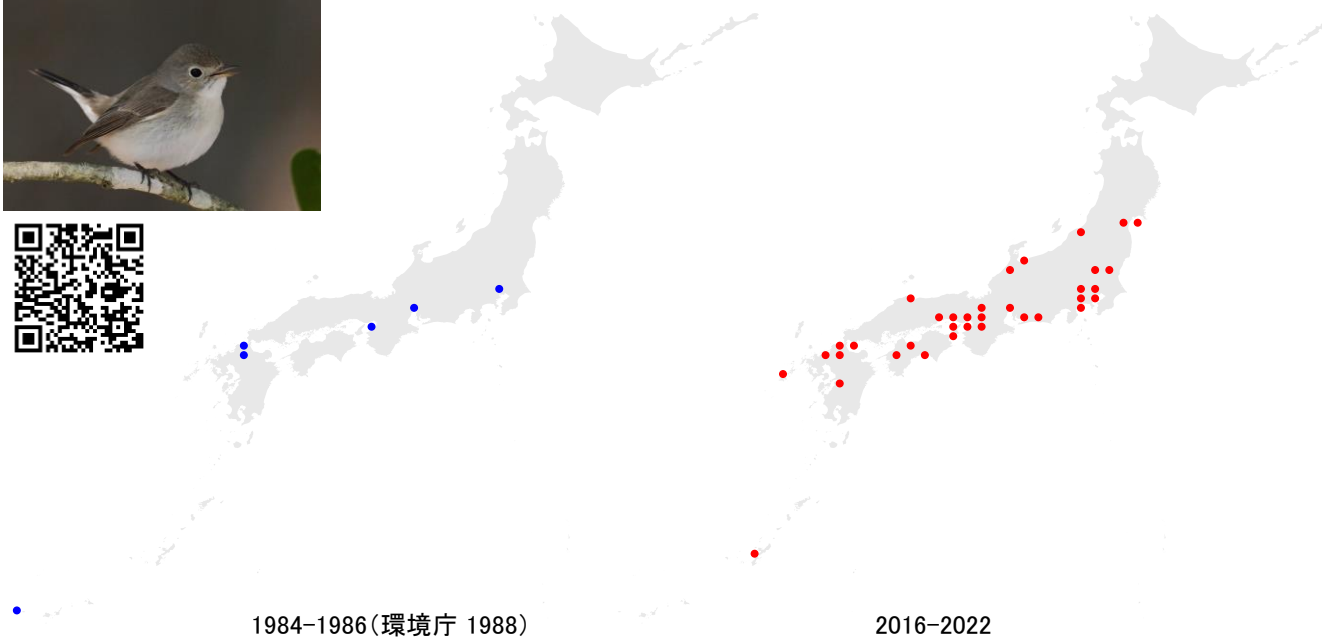
本州中部・北部の高地と北海道の全域に夏鳥として渡来し、中国南部やインドシナ半島で越冬する(先崎 2016)。日本でも局地的に越冬することがあり、1980年代、2010年代ともに局地的な記録があった。

イソヒヨドリ *Monticola solitarius* 全長: ♂22.5cm ♀22.1cm 体重: ♂62.0g ♀57.3g



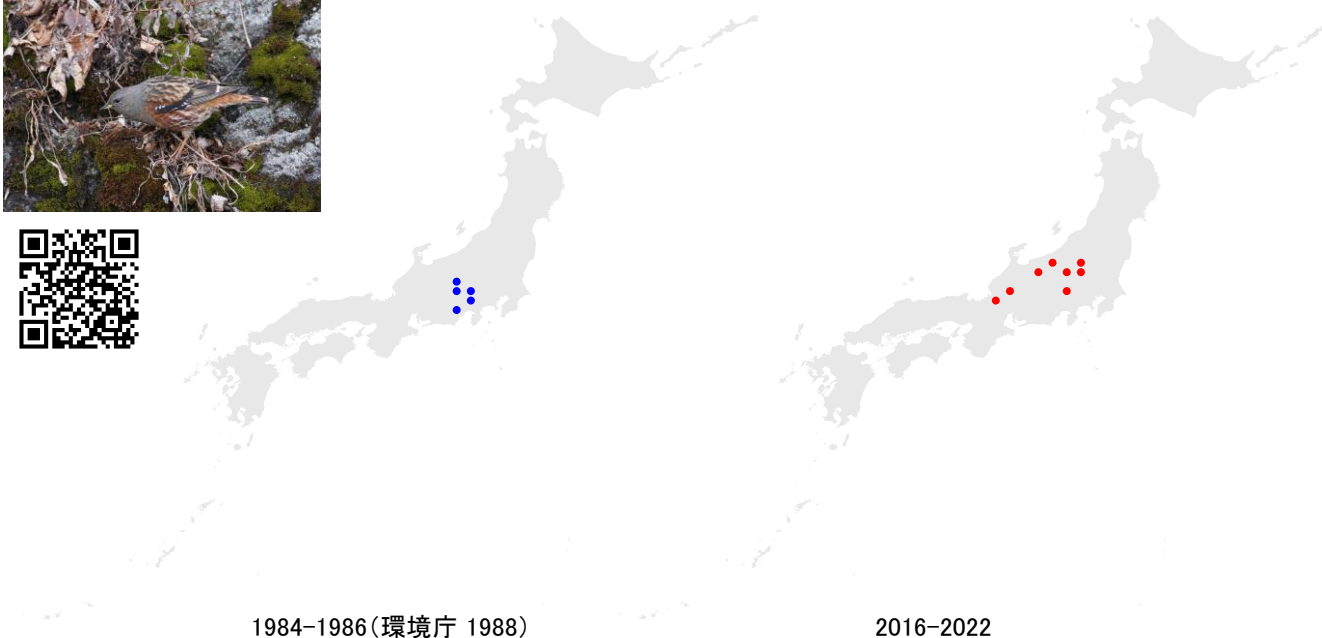
ほぼ全国の海岸の岩場に生息する。近年、海岸から離れた内陸への進出が著しく(鳥居・江崎 2014)、関東以西で内陸都市部での記録数が増え、1980年代と比べて2010年代は記録メッシュ数が増加した。現在も分布を拡げていると思われる。

(ニシ)オジロビタキ *Ficedula albicilla/parva* 全長: 12cm 体重: 10-14g



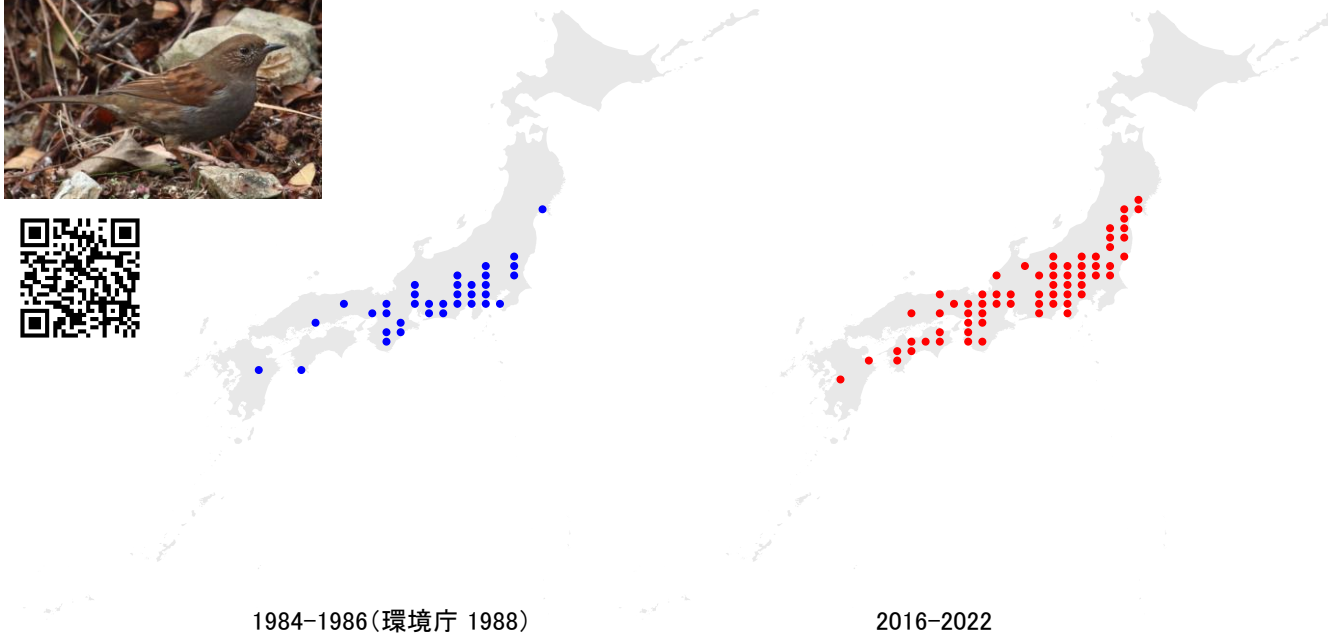
数少ない旅鳥、冬鳥として渡来する。1980年代にはオジロビタキとニシオジロビタキをあわせてオジロビタキとして記録していたため、本報告書では両種をあわせて表示した。1980年代は6メッシュのみだったが、今回は35メッシュと大きく増加し、越冬分布の拡大が顕著である。

イワヒバリ *Prunella collaris* 全長: 18cm 体重: 33-43g



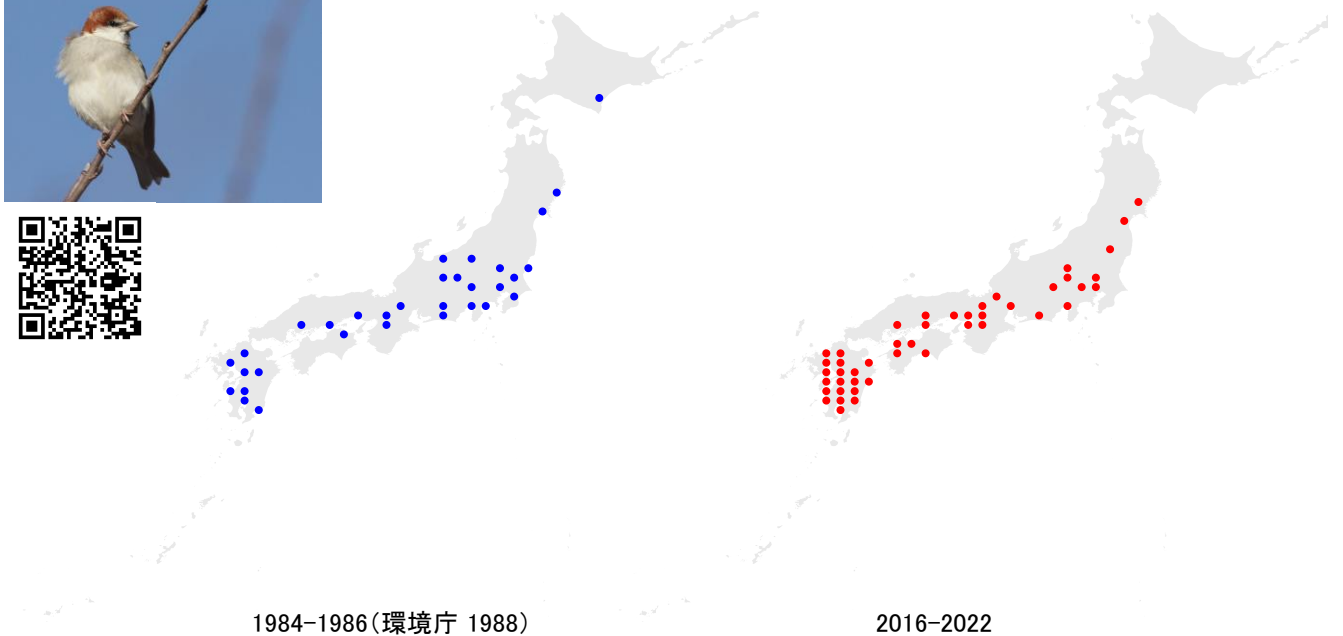
本州の高山帯の森林限界より標高の高い場所で繁殖し、冬は標高の低い岩場などに移動して越冬する。個体数が少なく、また鳥の観察があまり行なわれていないような環境で越冬するため、その動向はよくわからない。

カヤクグリ *Prunella rubida* 全長：14cm 体重：15-23g



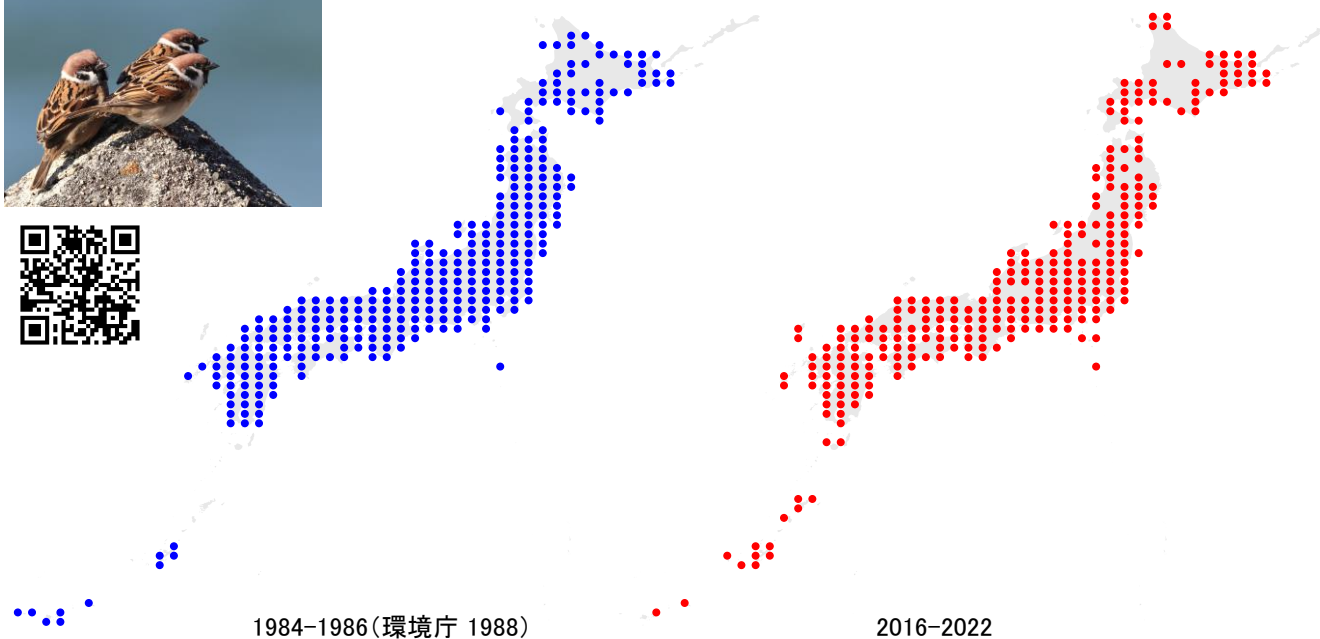
四国以北の亜高山帯の低木林やハイマツ林で繁殖し、冬は主に東北以南の太平洋側の地域の平地から山地の林などで越冬する。1980年代と2010年代で分布域には大きな変化はないが、2010年代は全域的に記録メッシュ数が増加していた。

ニューナイスズメ *Passer rutilans* 全長：14cm 体重：20g



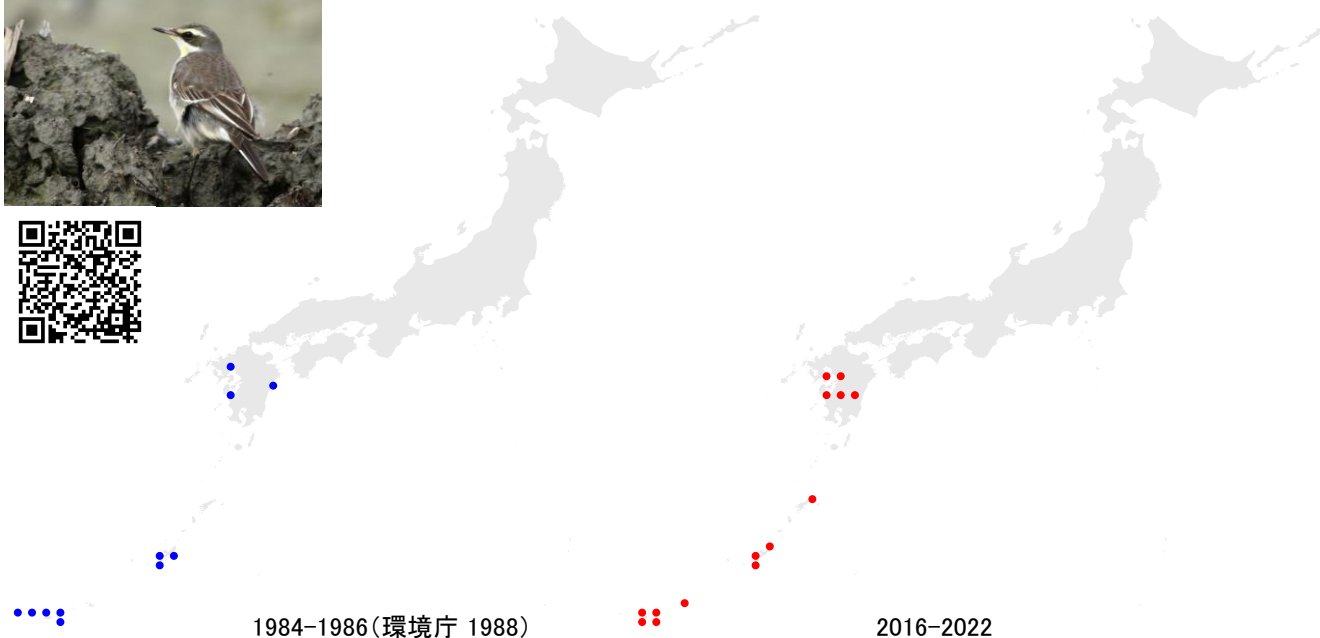
主に本州中部以北の寒冷な場所で繁殖し、南東北以南の太平洋側で越冬する。1980年代と2010年代で分布域には大きな変化はないが、2010年代は特に西日本で記録メッシュ数が増加していた。

スズメ *Passer montanus* 全長：14-15cm 体重：24g



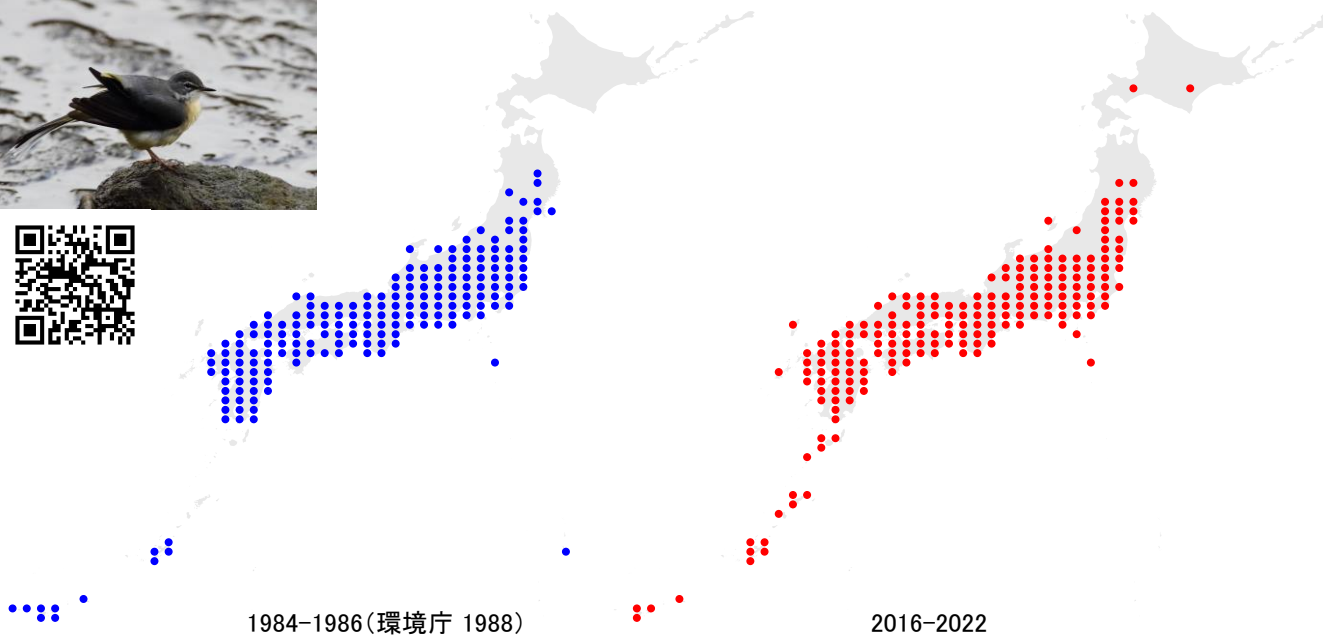
小笠原諸島を除く全国に留鳥として分布する。本調査では分布に大きな変化はなかったが、個体数が減少していることが示されている(三上 2009, 植田・植村 2021)。

ツメナガセキレイ *Motacilla flava* 全長：16.5cm 体重：18g



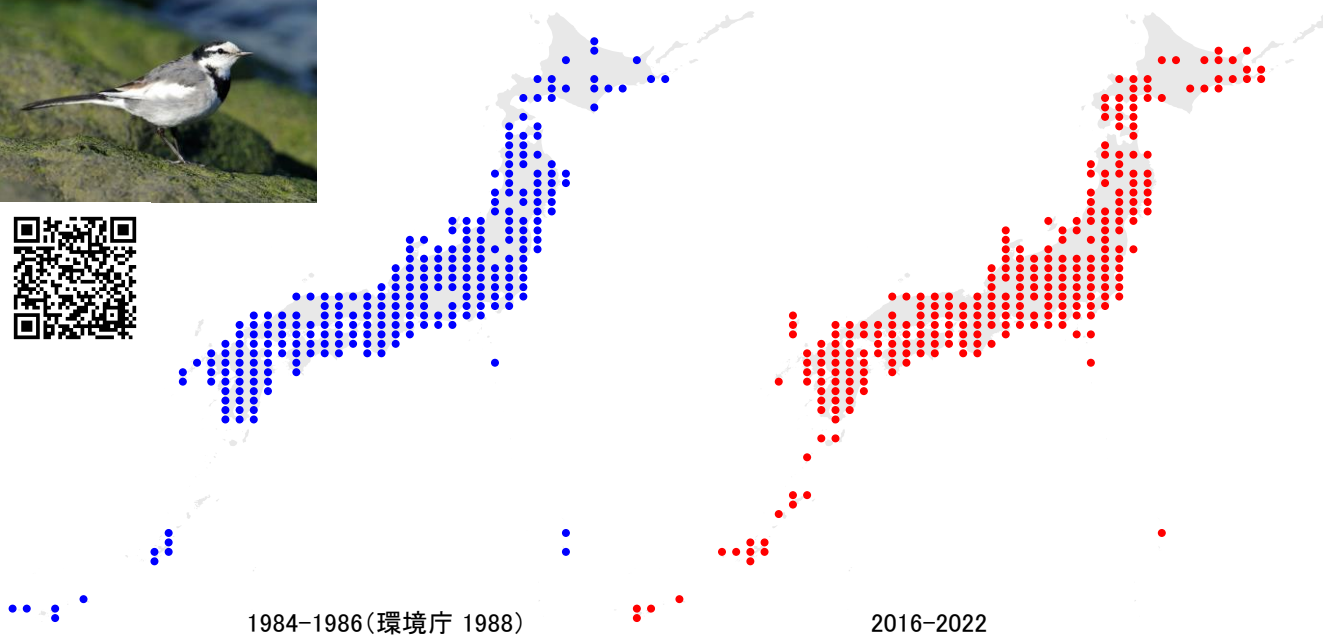
北海道北部で繁殖し、南西諸島で越冬する。1980年代には南西諸島北部の記録はないが、調査が行なわれていなかったため、分布していなかったことを示すわけではない。九州でも記録されていた。

キセキレイ *Motacilla cinerea* 全長：19cm 体重：17g



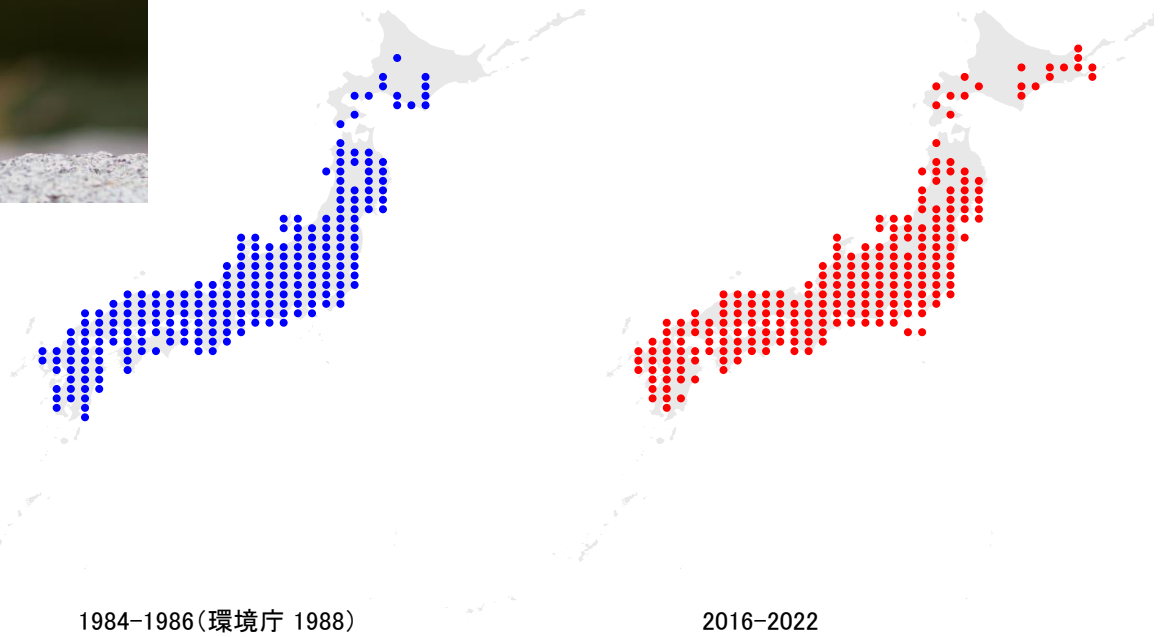
島嶼部を除く全国で繁殖し、南東北以南で越冬する。1980年代と2010年代で分布地域に大きな変化はなかったが、2010年代には北海道で2メッシュの記録があった。

ハクセキレイ *Motacilla alba* 全長：19.7-21.4cm 体重：25.5-34.5g



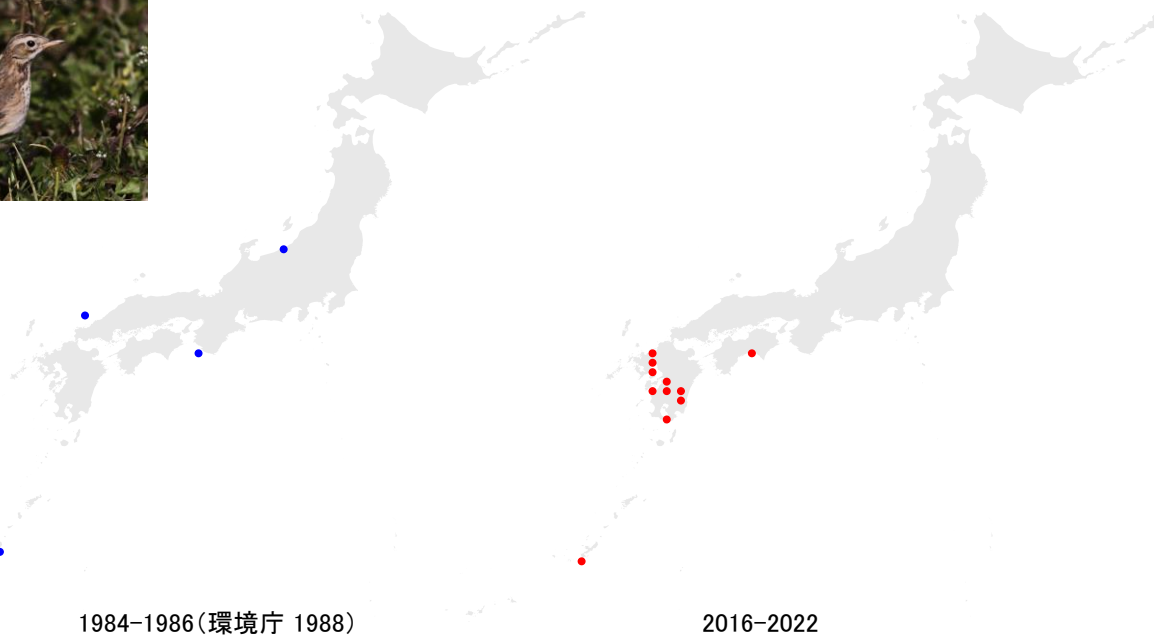
九州以北で繁殖し、越冬期は北の地域の個体は南に移動し、南西諸島など島嶼部にも生息するようになる。繁殖期の分布は西へと広がっているが(中村 2013, 植田・植村 2021), 越冬期の分布には大きな変化はなかった。

セグロセキレイ *Motacilla grandis* 全長：21cm 体重：♂31.2±2.3g ♀28.0±1.5g



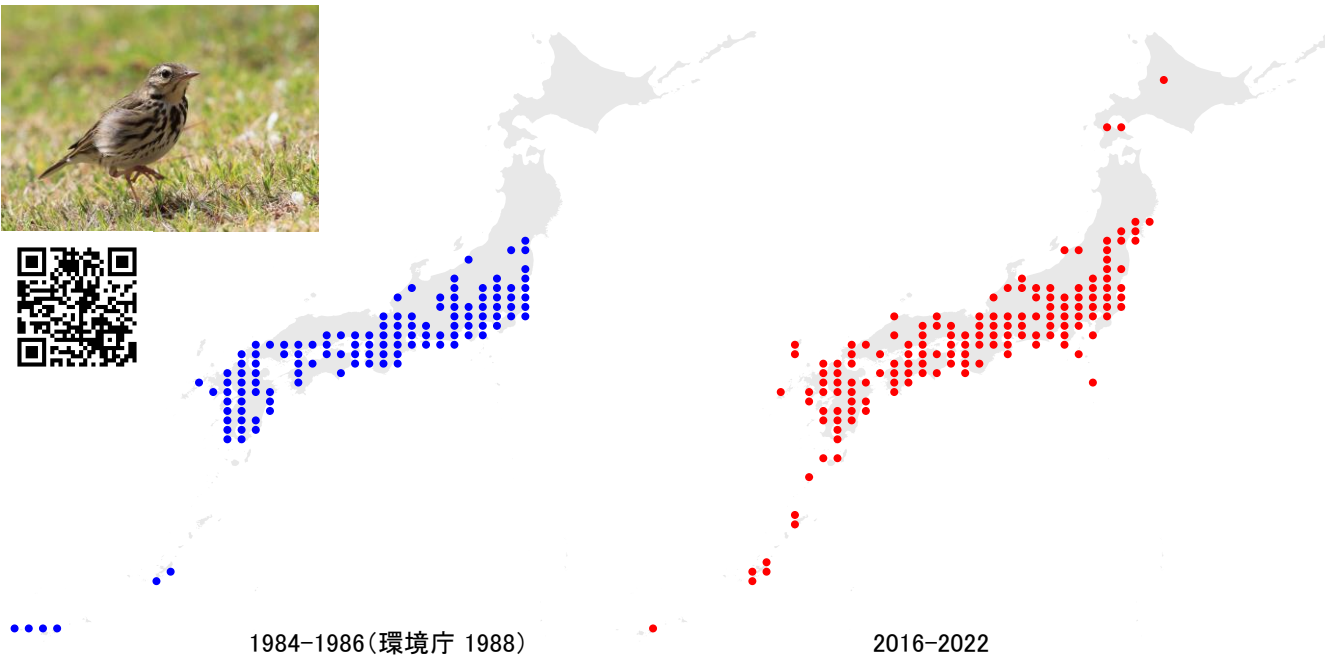
主に本州から九州で留鳥として生息し、北海道でも一部に生息する。1980年代は道東域の記録はなかったが、2010年代には記録メッシュ数が増加していた。

マミジロタヒバリ *Anthus richardi* 全長：18cm 体重：30g



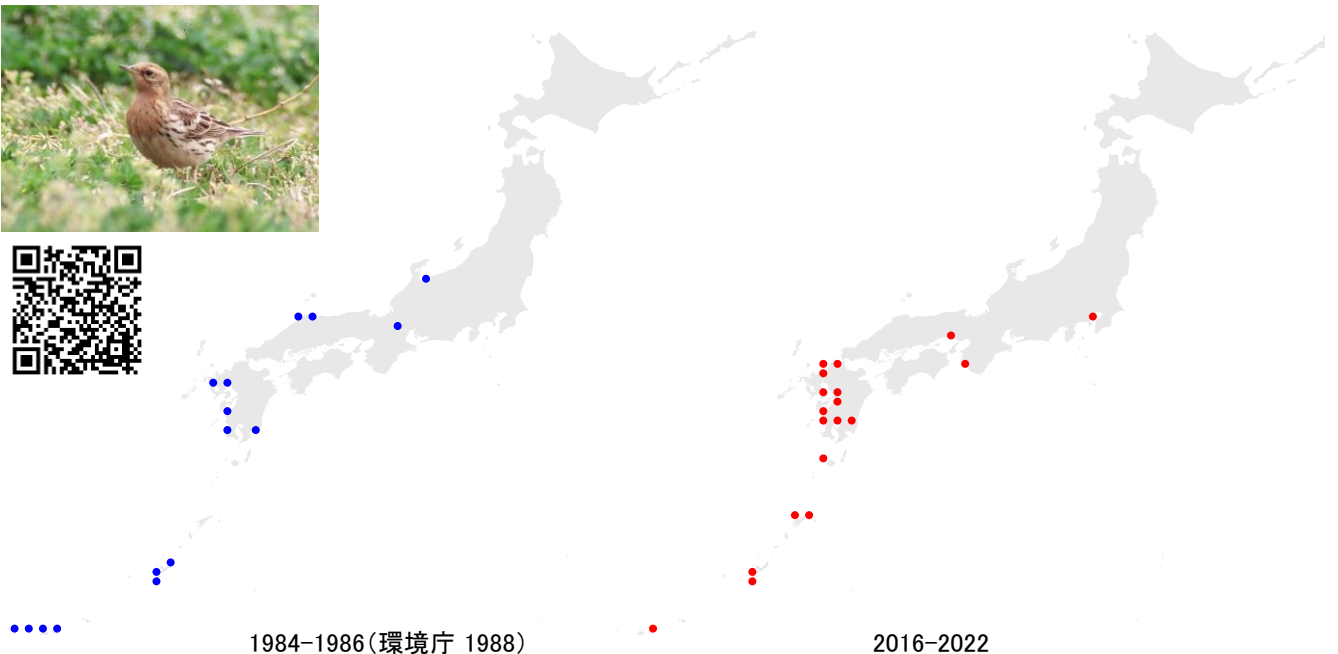
旅鳥または数少ない冬鳥として渡来し、西日本での記録が多い。1980年代には、5メッシュで記録されたが、2010年代は九州を中心に11メッシュで記録された。

ビンズイ *Anthus hodgsoni* 全長: 15cm 体重: 21g



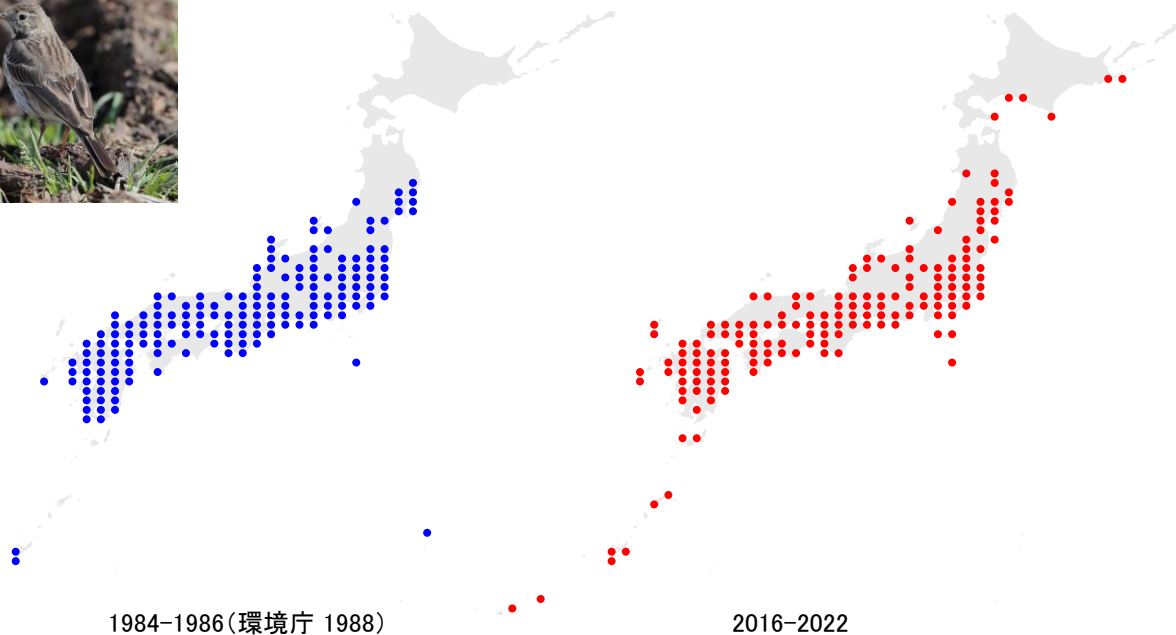
主に本州中部以北の寒冷な明るい林などで繁殖し、南東北以南で越冬する。日本海側では少ない。1980年代と比べ、2010年代には東北地方の分布がやや北上し、北海道でも3メッシュで記録された。

ムネアカタヒバリ *Anthus cervinus* 全長: 15cm 体重: 19-21g



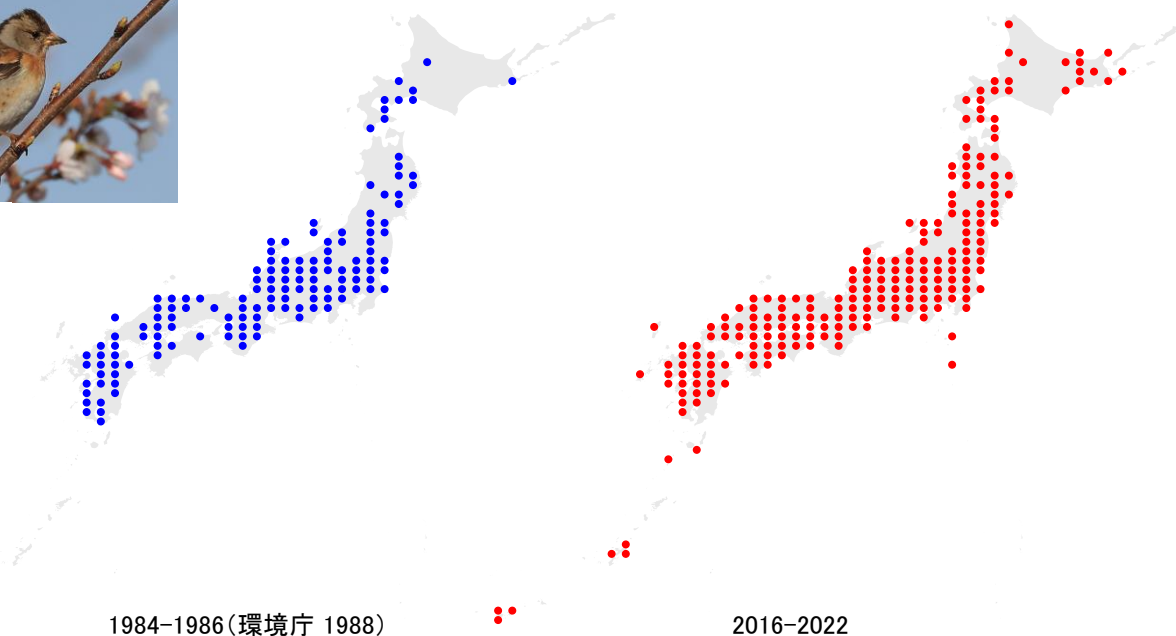
旅鳥または冬鳥として渡来し、西日本に多い。1980年代と比べ2010年代は九州の記録メッシュ数が増加していたが、全体の分布に大きな変化はなかった。

タヒバリ *Anthus rubescens* 全長：17cm 体重：25g



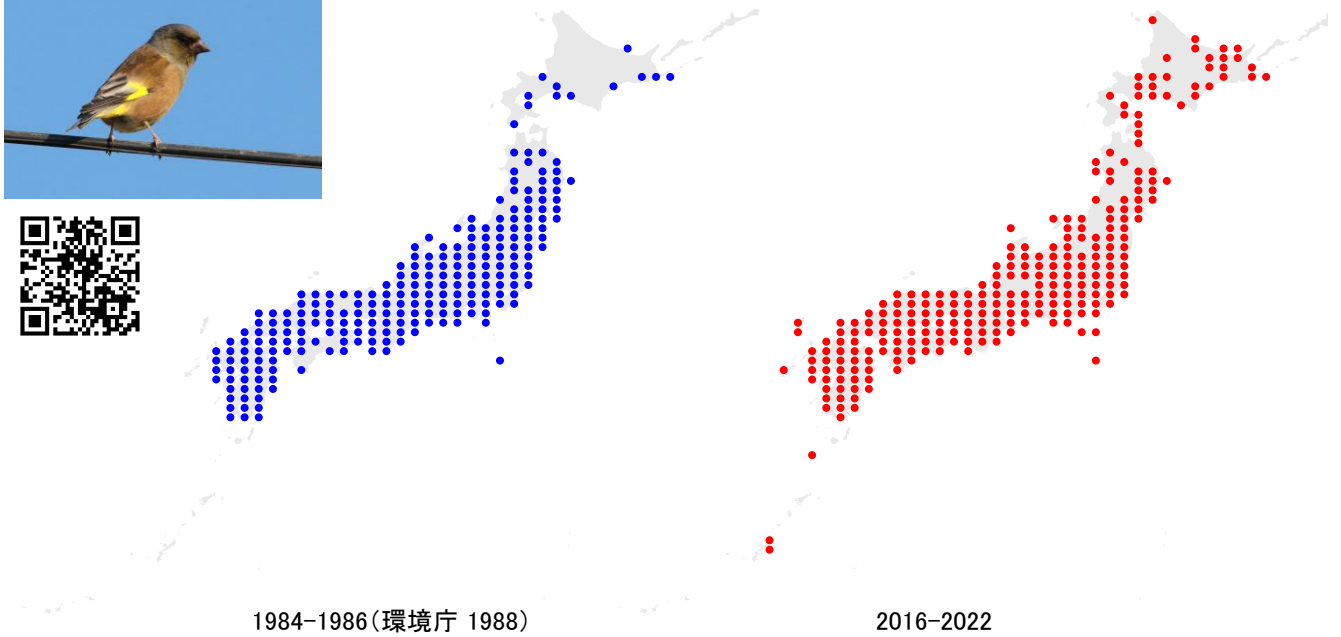
冬鳥として南東北以南の農耕地，河川など開けた環境で越冬する。2010年代には1980年代に記録のなかった北東北の日本海側や北海道でも記録があった。

アトリ *Fringilla montifringilla* 全長：16cm 体重：17-26g



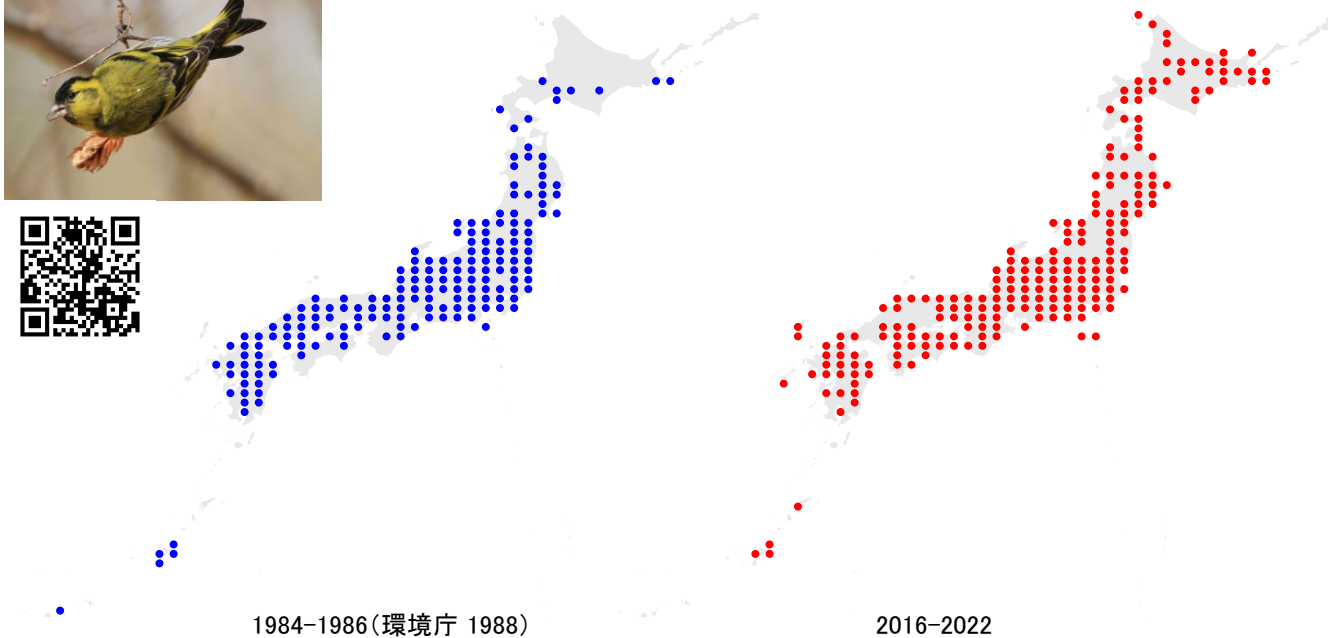
冬鳥として全国の山地，農耕地などで越冬する。年による越冬個体数の変動が大きく，数千羽以上の規模の群れが多く見られる年があれば，大きな群れがほとんど見られない年もある(山崎 2020)。1980年代と比較して2010年代は北海道など北日本で分布が拡大していた。

カワラヒワ *Chloris sinica* 全長：13-17cm 体重：17-30g



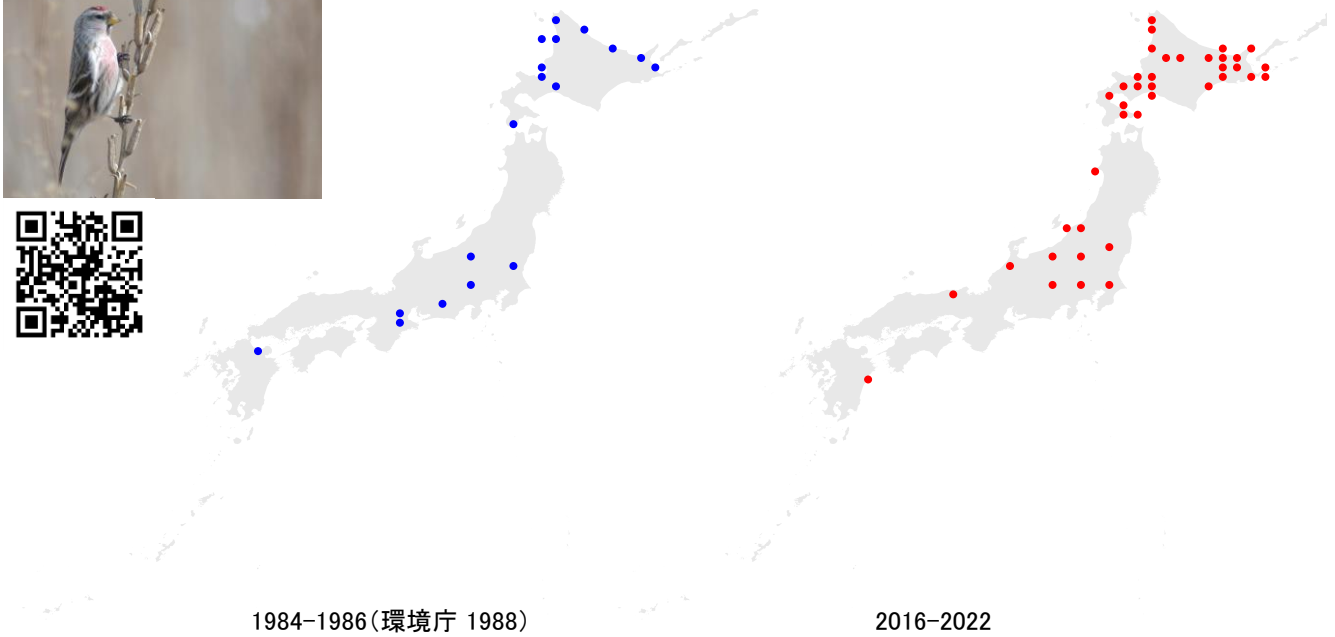
北海道や北東北では少なく、それ以外の全国に広く分布し、小群で越冬することが多いが、数百羽以上の群れで越冬することもある。1980年代と比較して2010年代は北海道の記録メッシュ数が増加していた。

マヒワ *Carduelis spinus* 全長：13cm 体重：9-17g



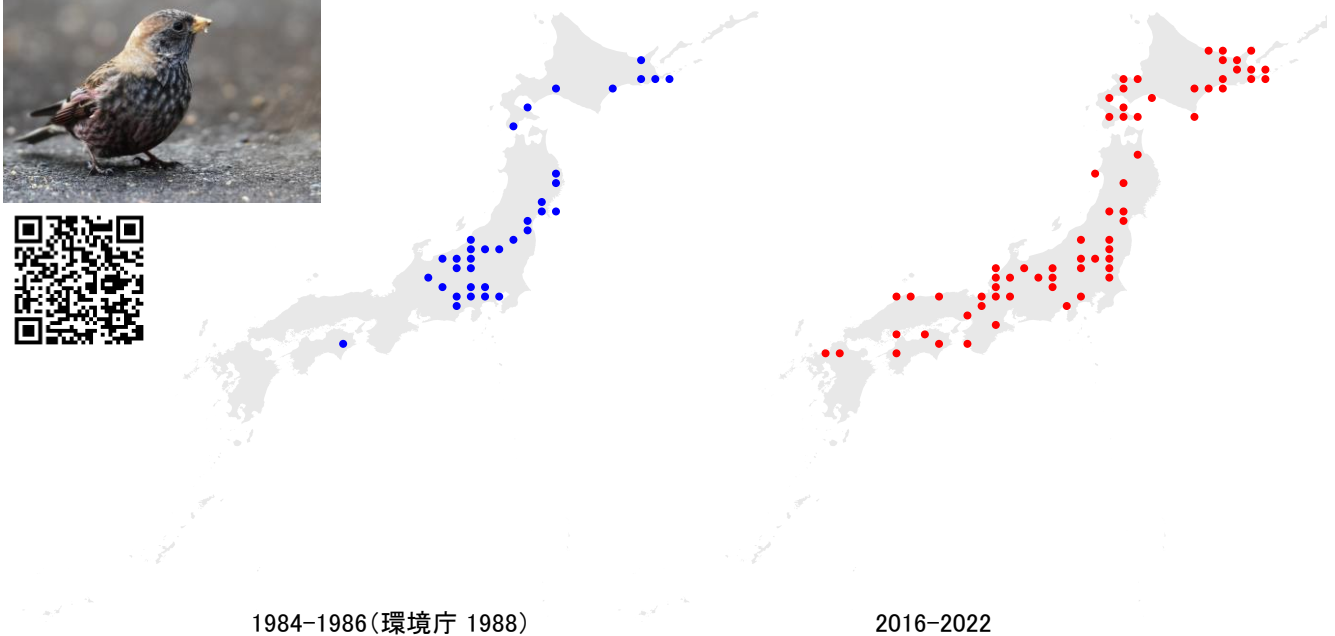
冬鳥として全国の山地や草地で越冬し、北海道や本州の一部では局所的に繁殖する(植田・植村 2021)。アトリほど越冬個体数の年変動は大きくないが、年によってはほとんど観察されないこともある。1980年代は北海道では少なかったが、2010年代は北海道の記録が増加した。

ベニヒワ *Carduelis flammea* 全長: 14cm 体重: 12-15g



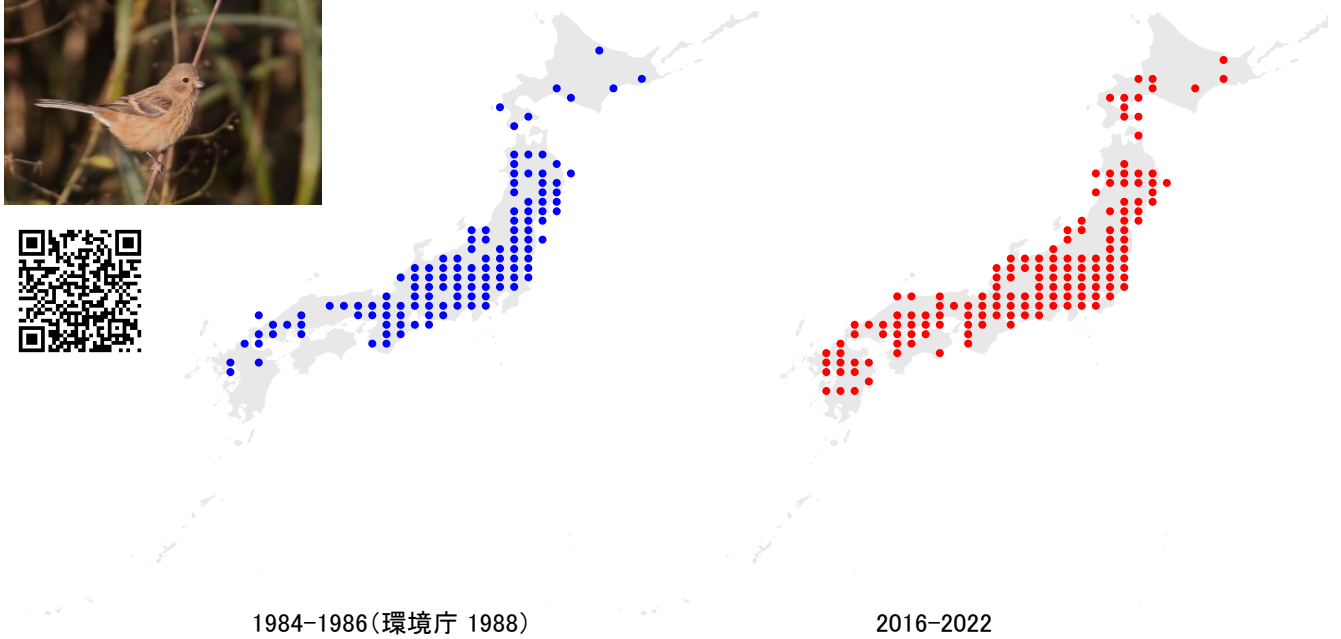
冬鳥として主に北海道の草原や灌木林などに渡来する。年により渡来数が大きく変動し、渡来数の多い年には本州でも見られる。2010年代は1980年代よりも記録メッシュ数が多かったが、2010年代の方が調査期間が長いので、渡来数の多い年の記録を十分に捉えられたため記録が多かった可能性がある。

ハギマシコ *Leucosticte arctoa* 全長: 16-19cm 体重: 30g



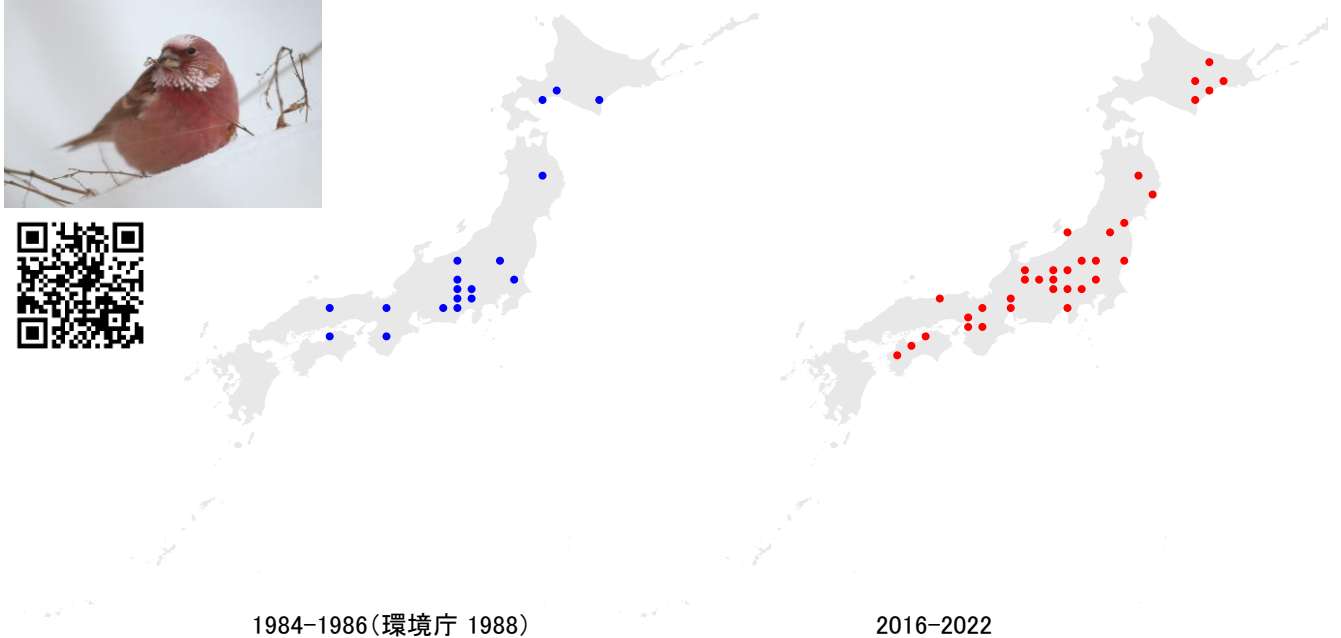
冬鳥として山地から平地の林、崖地、農耕地などに渡来する。農耕地や岩場などで100羽以上の群れが越冬することもあるが、年によっては飛来しない場所もある。1980年代は西日本の記録はほとんどなかったが、2010年代には複数の地域で越冬記録があった。また、北海道の分布も拡大していた。

ベニマシコ *Uragus sibiricus*



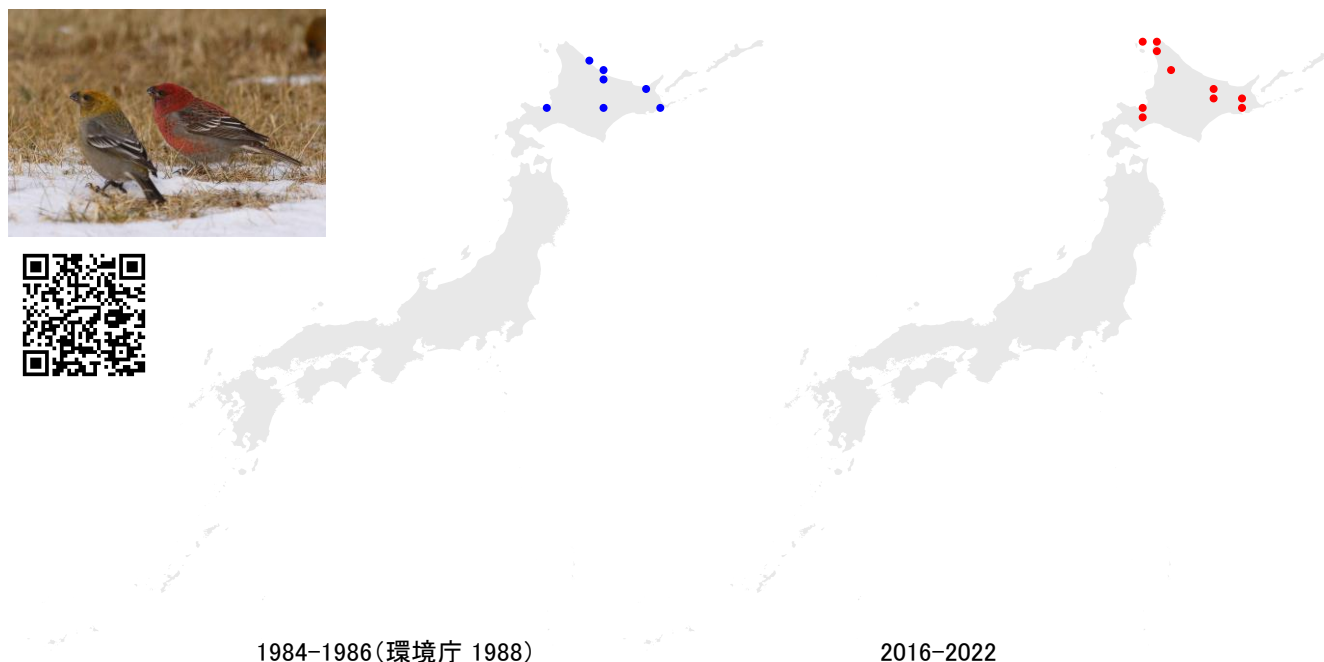
全国の草地や林縁などで越冬し、北海道では繁殖もしている(植田・植村 2021)。1980年代と比較して2010年代は北海道や四国、九州などで分布が拡大していた。

オオマシコ *Carpodacus roseus* 全長: 18cm 体重: 21-35g



冬鳥として全国の平地から山地の林, 低木林, 草地などに生息するが多くない。2010年代の記録メッシュ数は1980年代と比べて増加していた。

ギンザンマシコ *Pinicola enucleator* 全長：20cm 体重：40-62g

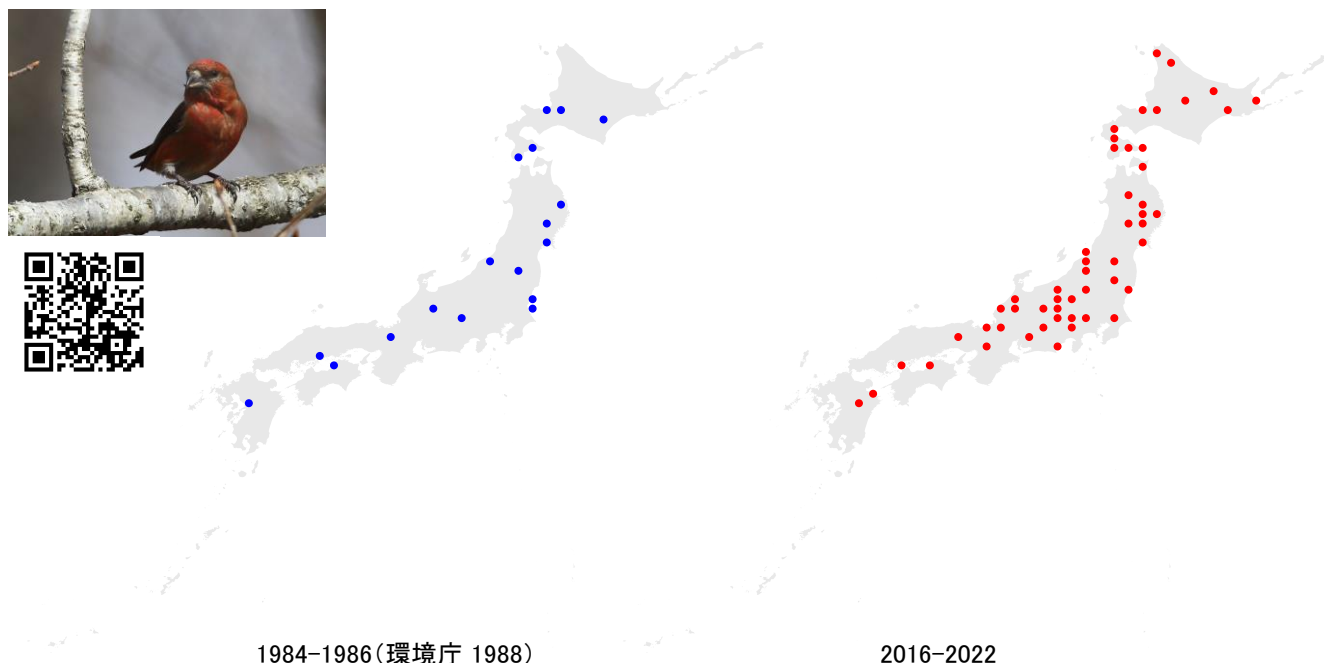


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

北海道の高山帯で繁殖し，冬期には平地でも見られる。市街地のナナカマドなどの街路樹の実を食べに群れで飛来することもある。本州でも稀に記録されることがある。1980年代と2010年代で分布や記録メッシュ数に大きな違いはなかった。

イスカ *Loxia curvirostra* 全長：17-19cm 体重：♂22.5-44.6g ♀25.8-47.2g

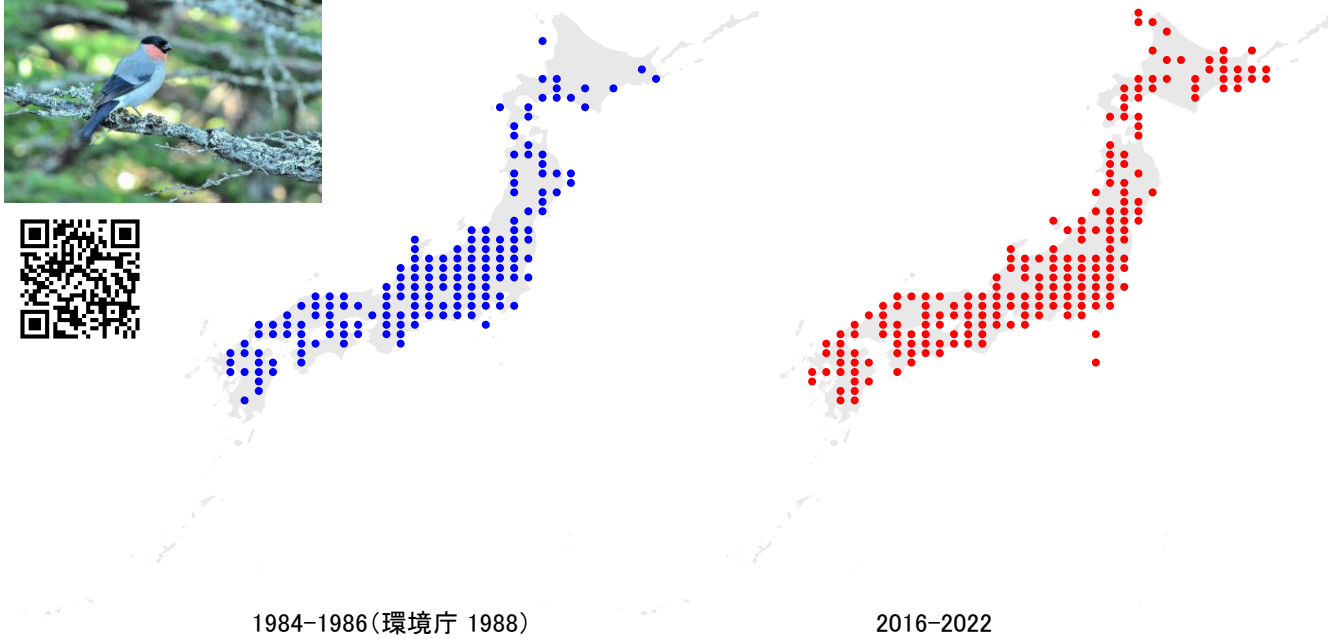


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

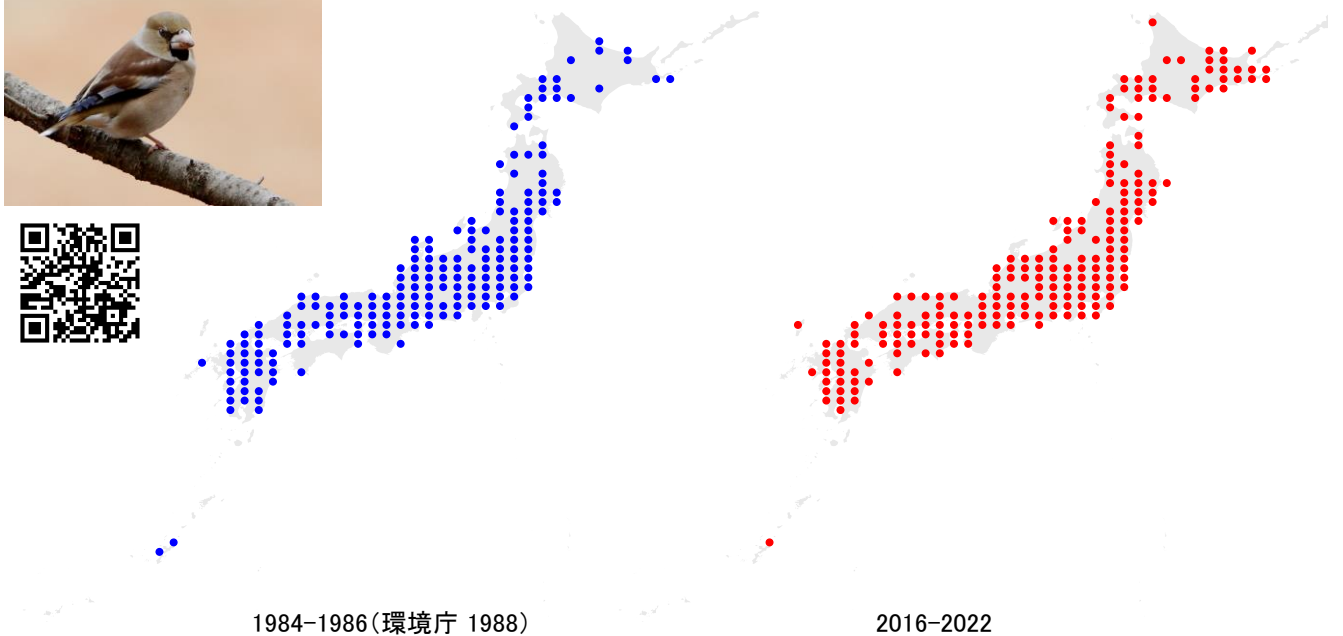
全国のマツ林などに冬鳥として渡来し，数十羽で越冬することもある。1980年代と比較して2010年代は記録地点が増加しており，中部地方以北で顕著だった。一部の地域では留鳥として繁殖しており，青森県下北地方では冬期に繁殖する(三上・蛭名 2018)。

ウソ *Pyrrhula pyrrhula* 全長：15-16cm 体重：21-34g



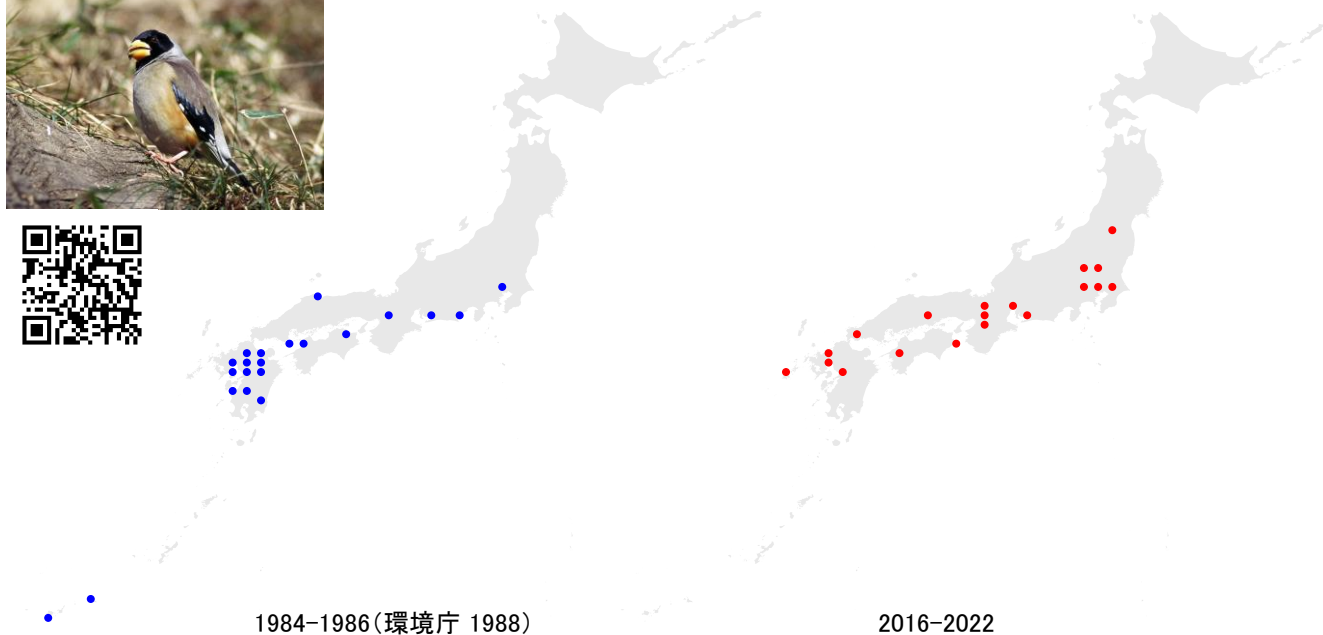
主に本州中部以北の寒冷な針葉樹林で繁殖し、冬期には標高の低いところでも越冬する。冬期には胸に赤みのある亜種アカウソが渡来し、平地で越冬する個体はアカウソの方が多い。1980年代と比べて、2010年代は道北や道東の記録メッシュ数が増加していた。

シメ *Coccothraustes coccothraustes* 全長：18-19cm 体重：45-65g



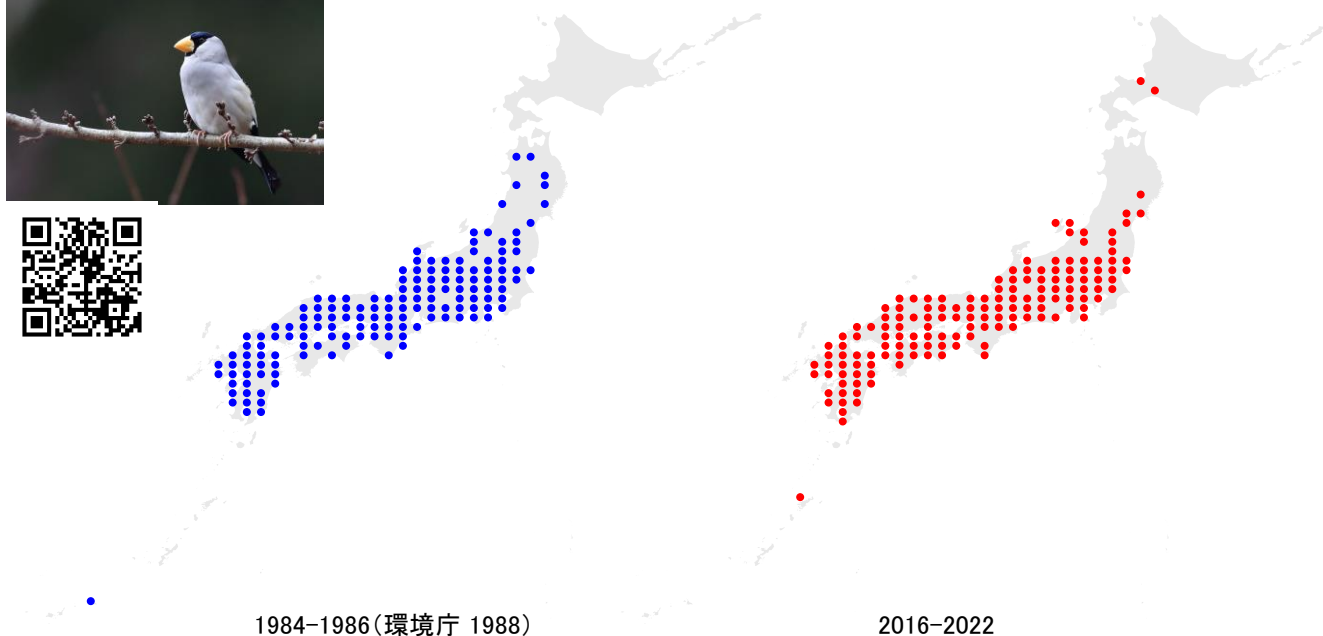
主に冬鳥として全国の山地や草地、市街地の公園などで越冬し、北海道や本州の一部の標高 500m 以下の落葉広葉樹林や針広混交林で繁殖する(植田・植村 2021)。1980年代と比較して 2010年代は、主に北海道や四国などで分布が拡大していた。

コイカル *Eophona migratoria* 全長：19cm 体重：47-50g



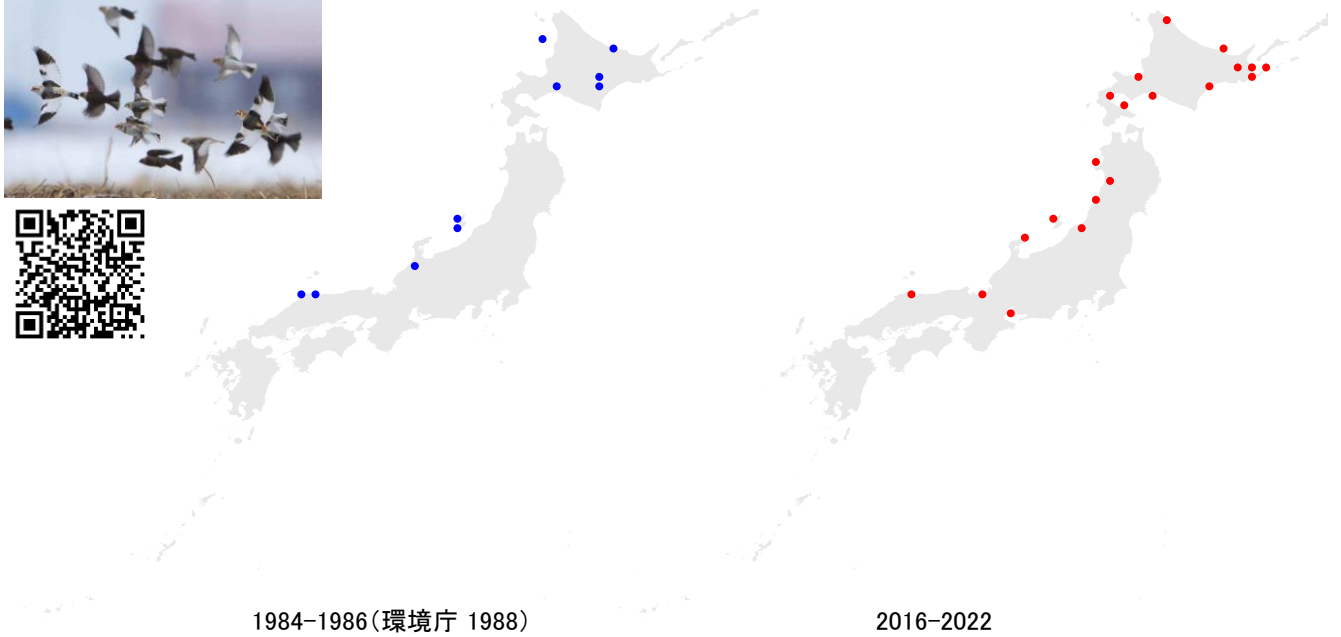
主に冬鳥として渡来し、西日本に多く、偶発的に繁殖することもある。1980年代は九州で多かったが、2010年代は、九州のメッシュ数が減り、東日本の記録メッシュ数が多くなった。

イカル *Eophona personata* 全長：22-24cm 体重：60-85g



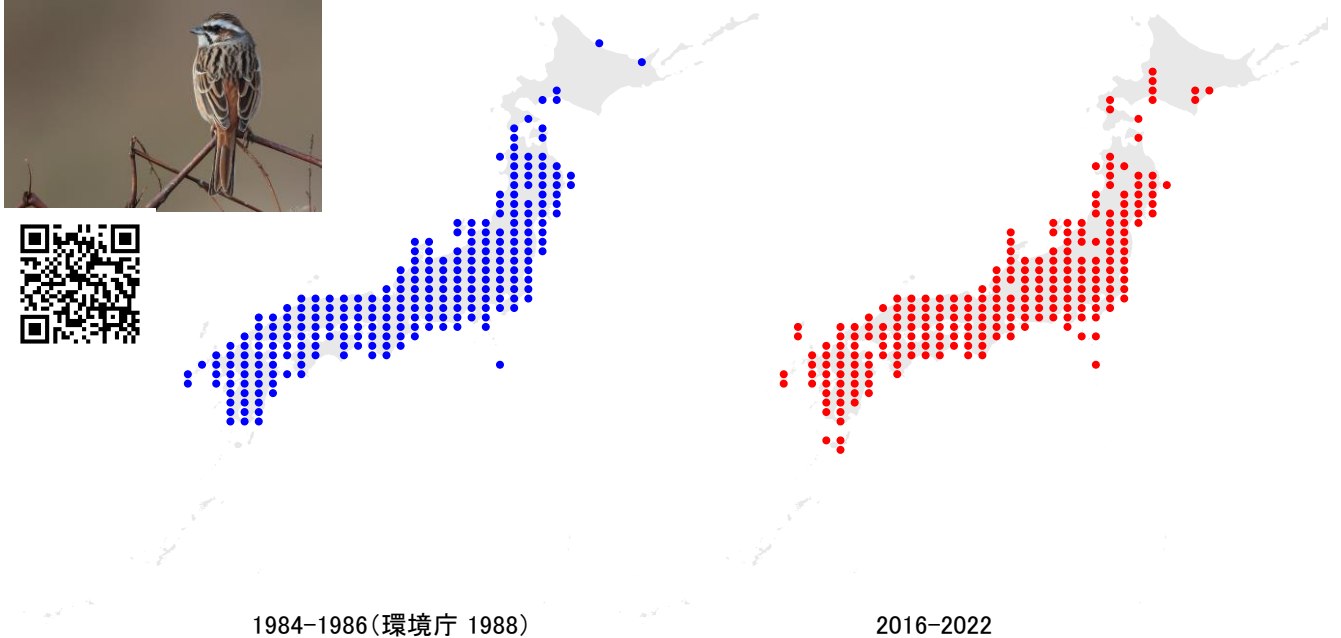
九州以北の全国で繁殖し、主に南東北以南で越冬する。2010年代には1980年代で記録のなかった北海道でも2メッシュの記録があった。

ユキホオジロ *Plectrophenax nivalis* 全長: 16cm 体重: 28-34g



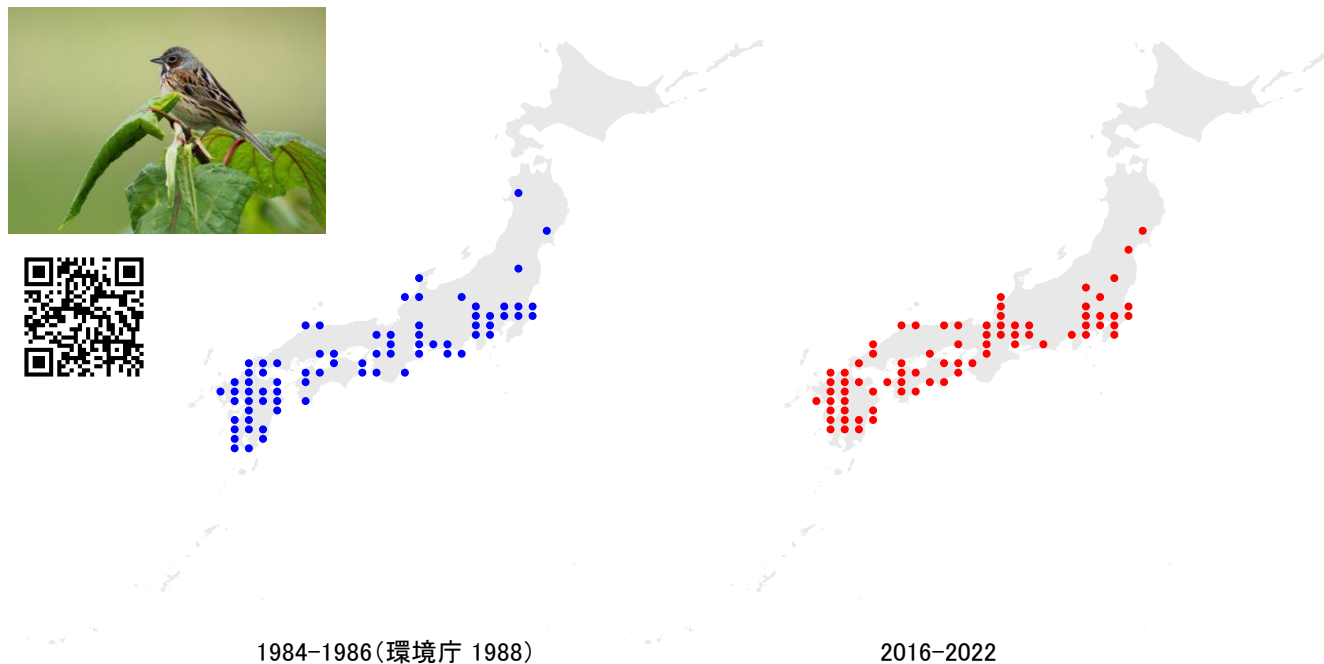
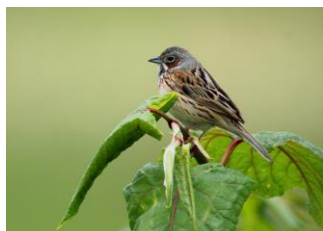
冬鳥として主に北海道の海岸の草地などで越冬し、本州の日本海側でも少数が記録される。1980年代と2010年代で分布傾向に大きな変化はなかった。

ホオジロ *Emberiza cioides* 全長: 17cm 体重: 20-26g



北海道の道東部や島嶼部を除く全国で繁殖するが、越冬期は北海道では少ない。1980年代と比較して2010年代は、東北地方北部で記録メッシュ数が減少していた。

ホオアカ *Emberiza fucata* 全長：16cm 体重：14-29g

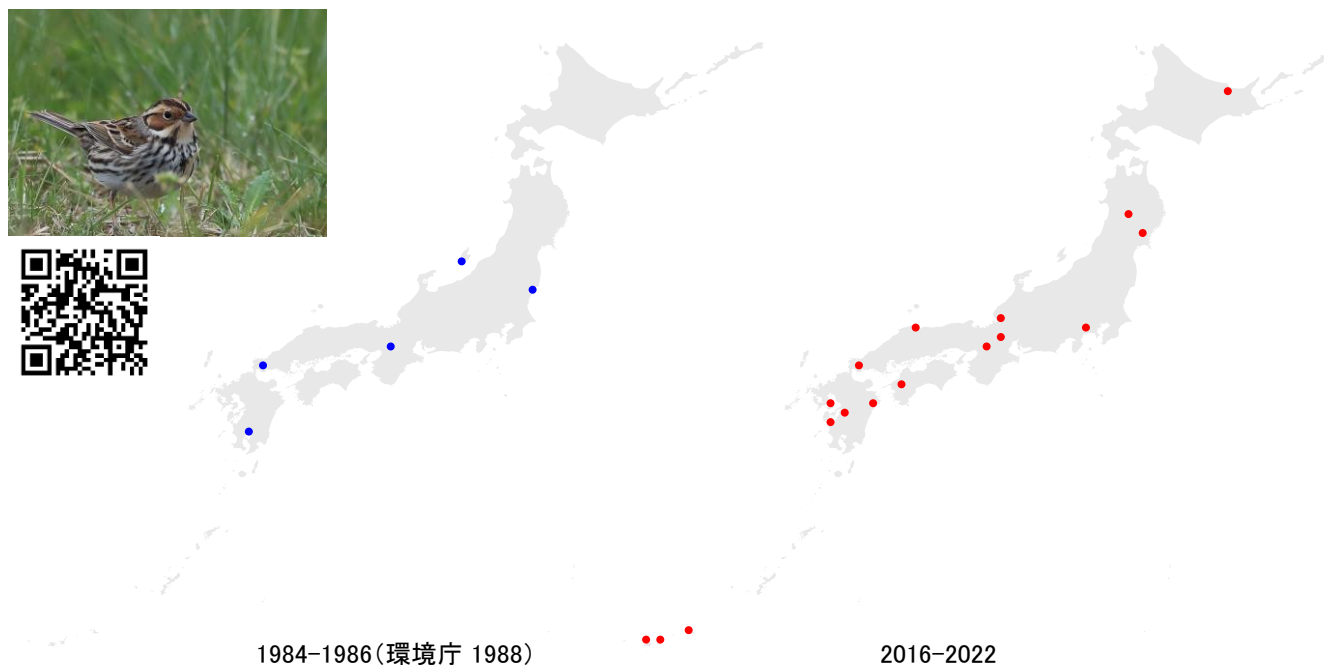


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

九州以北で繁殖し、主に関東以南で越冬する。2010年代には西日本の日本海側の記録メッシュ数がやや増えていたが、分布に大きな変化はなかった。

コホオアカ *Emberiza pusilla* 全長：13-14cm 体重：13-15g

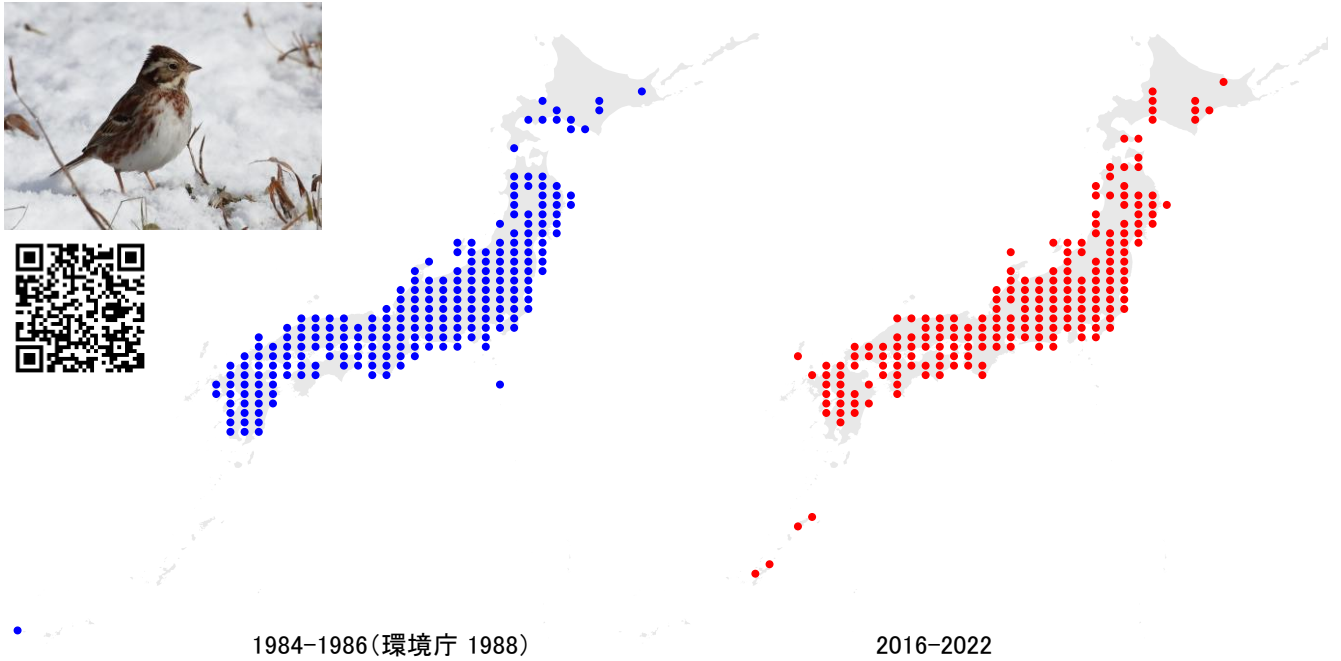


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

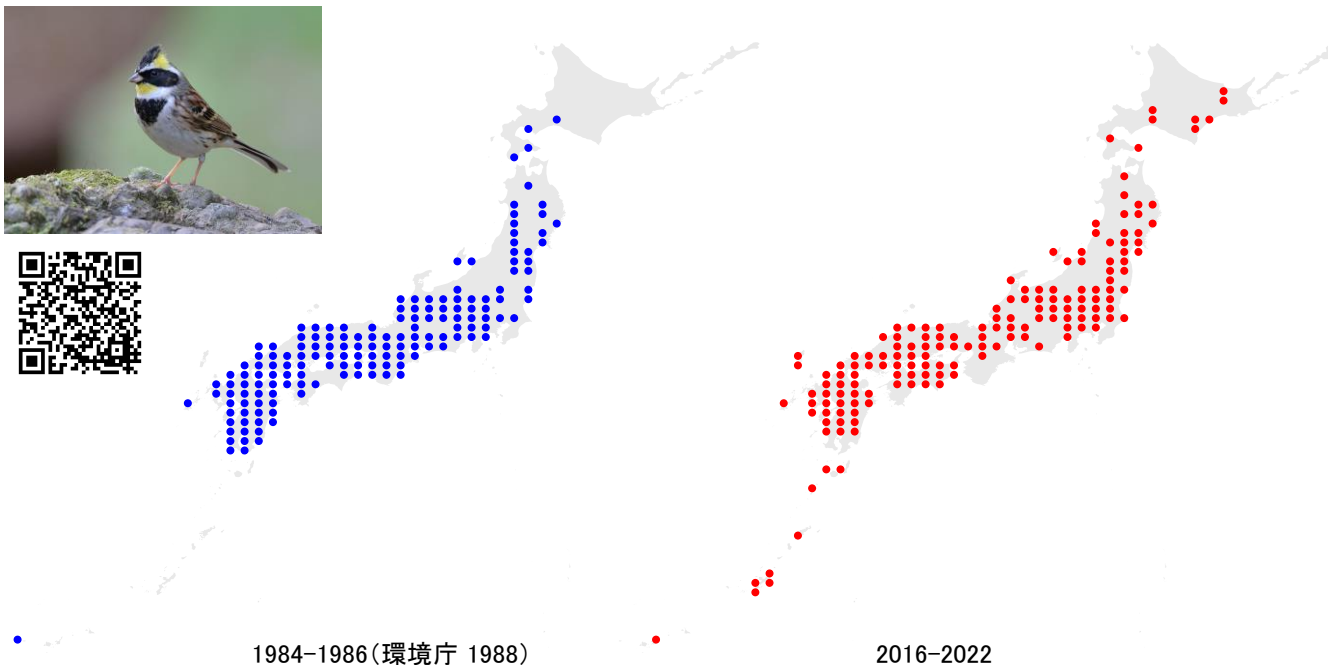
旅鳥または数少ない冬鳥として主に南西諸島や日本海側の地域で記録される。1980年代は点々と5メッシュで記録されたが、2010年代は、17メッシュと増加していた。

カシラダカ *Emberiza rustica* 全長: 15cm 体重: 14-28g



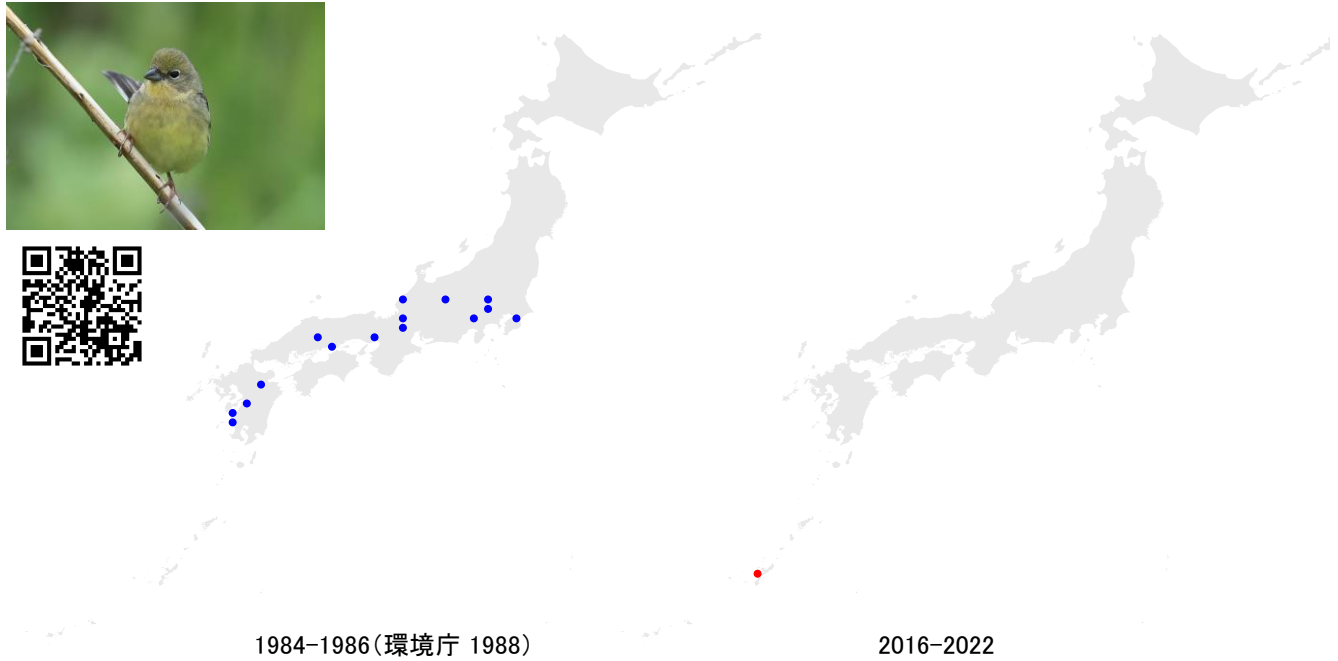
冬鳥として主に本州以南に渡来する。繁殖地での森林減少や越冬地での環境の悪化などが原因で個体数が激減していると考えられており、2016年からIUCNのレッドリストでVUに指定されている(BirdLife International 2016)。それを反映してか、1980年代と比較して2010年代は記録メッシュ数がやや減少していた。

ミヤマホオジロ *Emberiza elegans* 全長: 15-17cm 体重: 15-24g



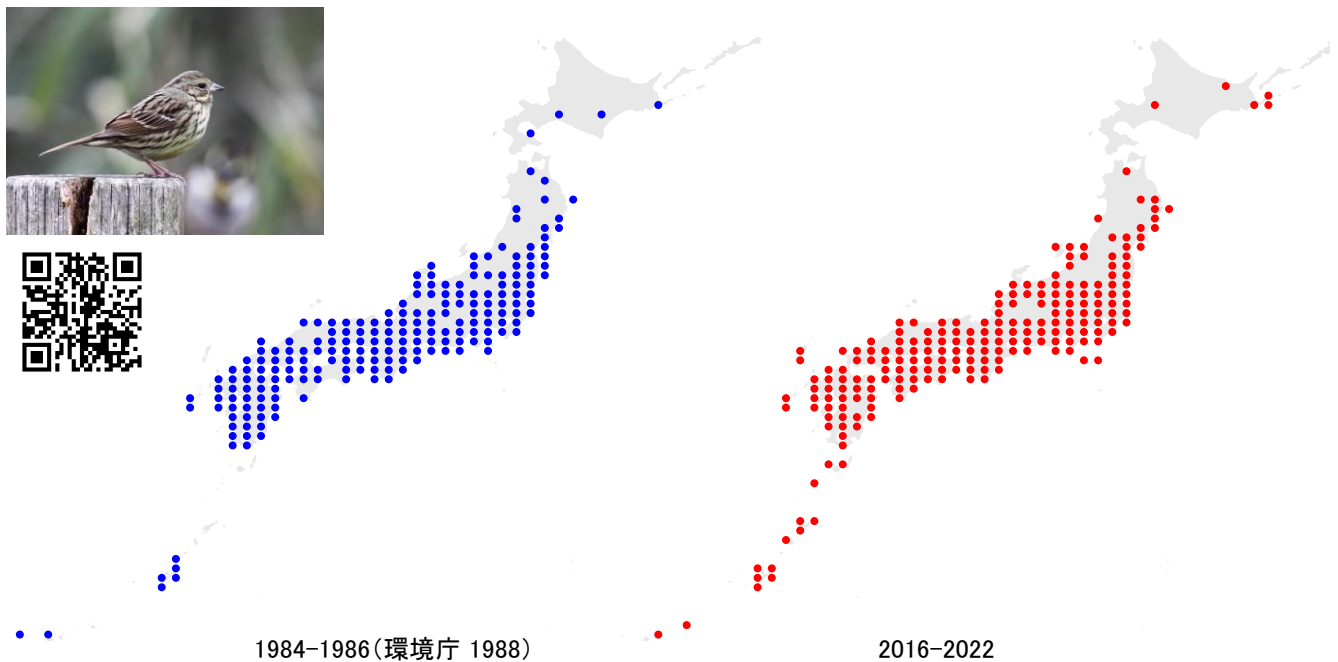
冬鳥として全国に渡来する。個体数は西日本で多い。対馬や山陰地方では繁殖もしている。1980年代と比べ、2010年代は北日本の記録メッシュが増加し、北海道道東部でも記録された。

ノジコ *Emberiza sulphurata* 全長：13-14cm 体重：♂13.4-18.3g ♀13.8-16.5g



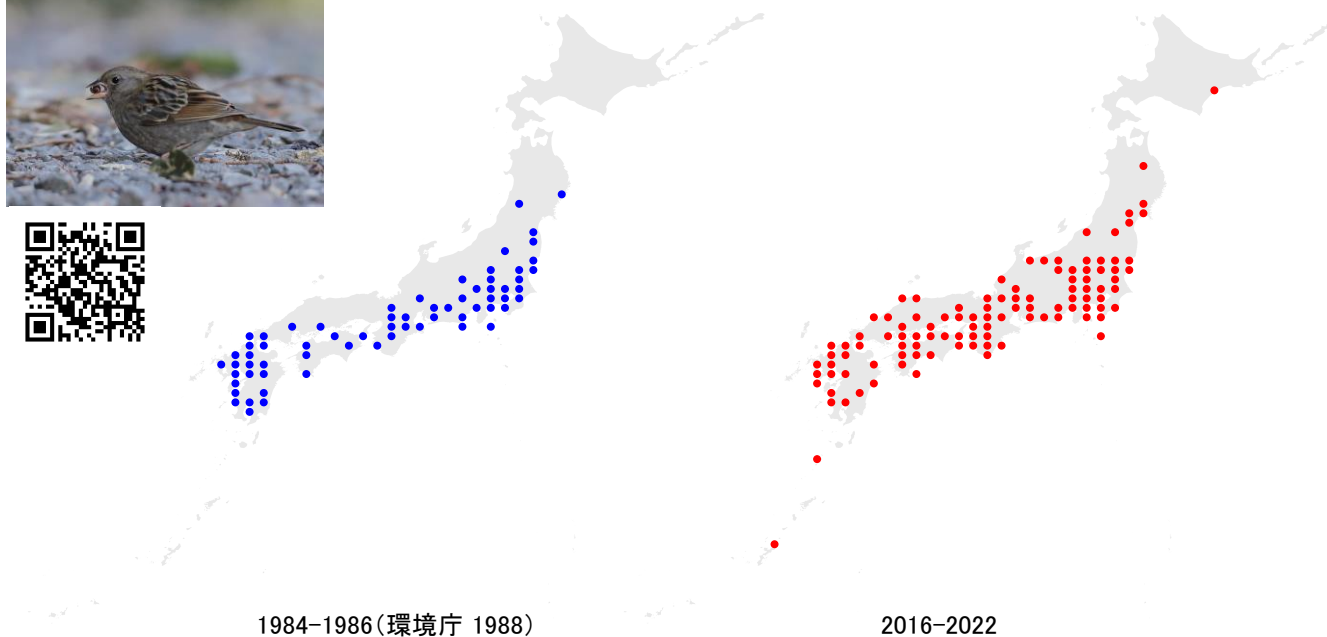
夏鳥として本州中部以北の多雪地帯に分布し、フィリピン、台湾、中国南部で越冬するとされる。2010年代は南西諸島の1メッシュの記録のみだったが、1980年代は関東以西で15メッシュ記録があった。しかし、日本鳥学会(2000, 2012)にも越冬についての記載はなく、1980年代の記録はアオジ等の誤認の可能性がある。

アオジ *Emberiza spodocephala* 全長：16cm 体重：21g



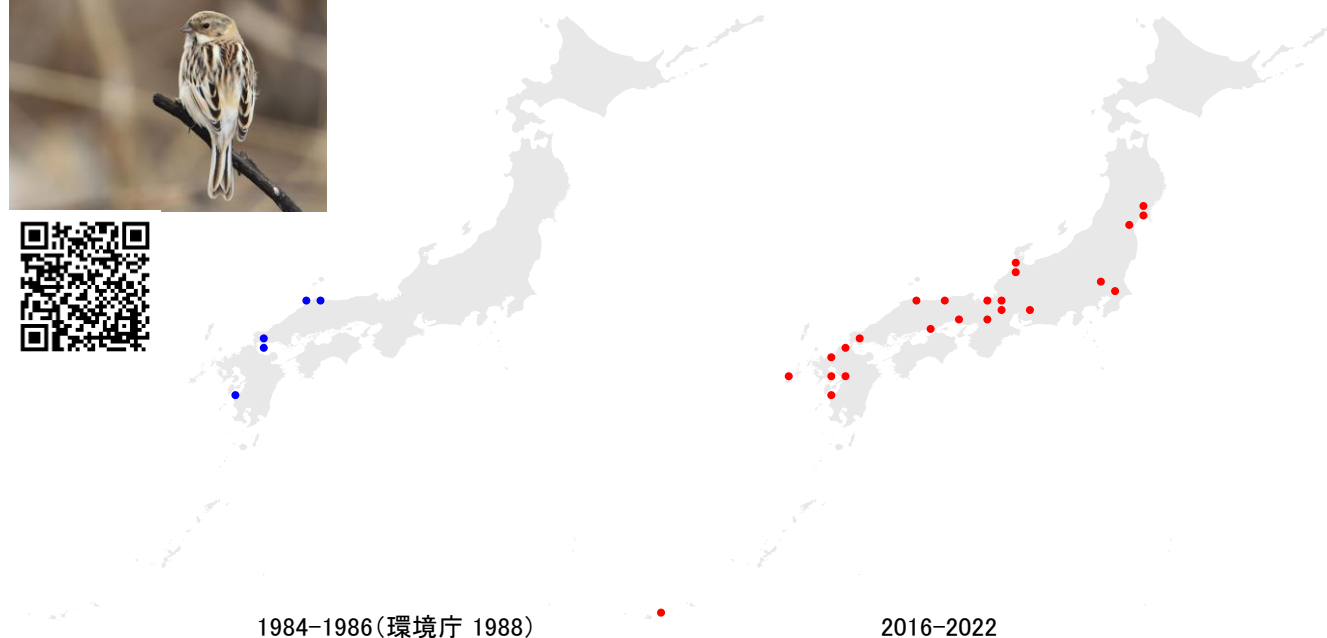
本州中部以北で繁殖する。北海道では全域的に分布し、繁殖期に一番記録メッシュ数の多い種だった(植田・植村 2021)。越冬期は主に南東北以南で越冬し、その分布域は1980年代と2010年代で大きな変化はなかった。

クロジ *Emberiza variabilis* 全長：17cm 体重：20-38g



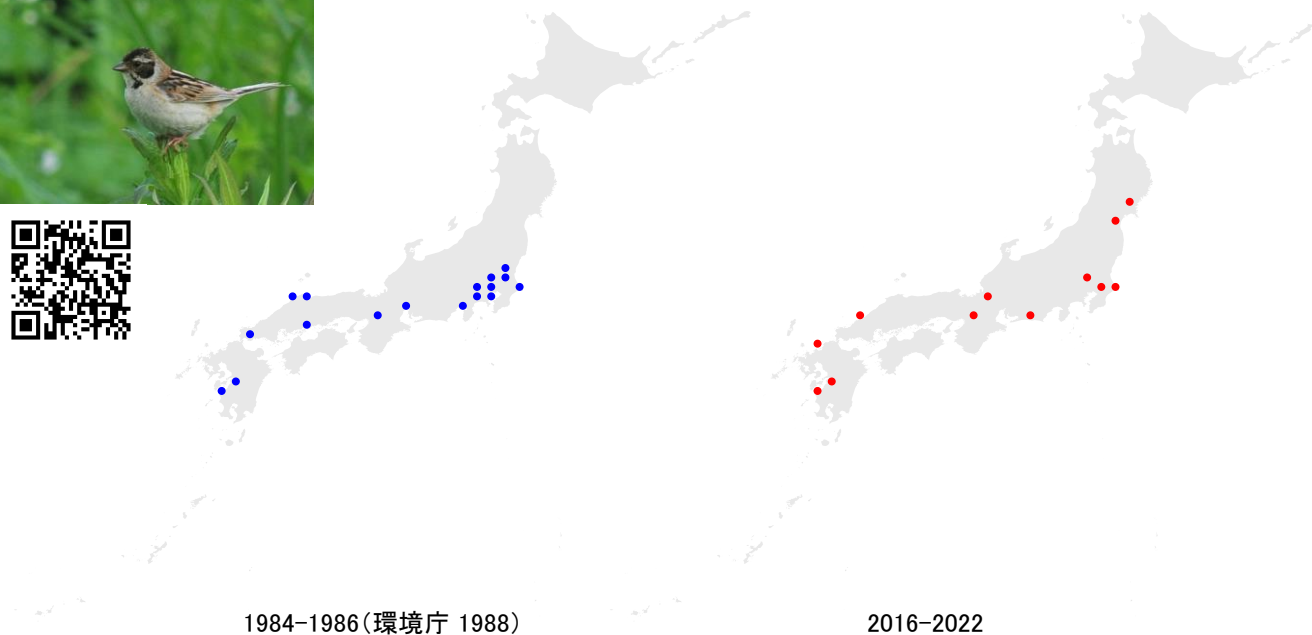
四国以西の比較的標高の高い、下層植生の発達した落葉広葉樹林や針広混交林で繁殖する。越冬期は主に南東北以南で越冬する。1980年代は主に太平洋側に分布していたが、2010年代には日本海側にも分布するようになった。

シベリアジュリン *Emberiza pallasi* 全長：13-14cm 体重：13.6-16.4g



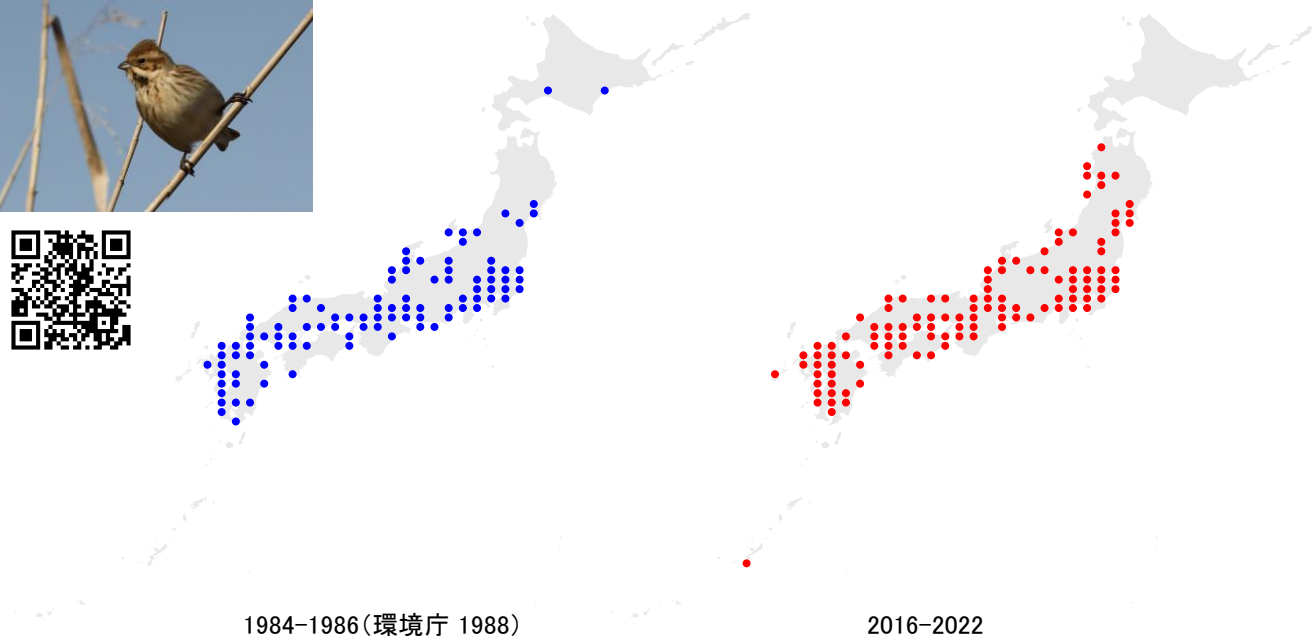
朝鮮半島から中国東部にかけて越冬し、日本には数少ない旅鳥または冬鳥として、主に九州や日本海側の地域のヨシ原、農耕地、草地などに生息する。2010年代は分布が東へと拡がり、南東北までの範囲で局所的に記録された。

コジュリン *Emberiza yessoensis* 全長: 15cm 体重: 13-14g



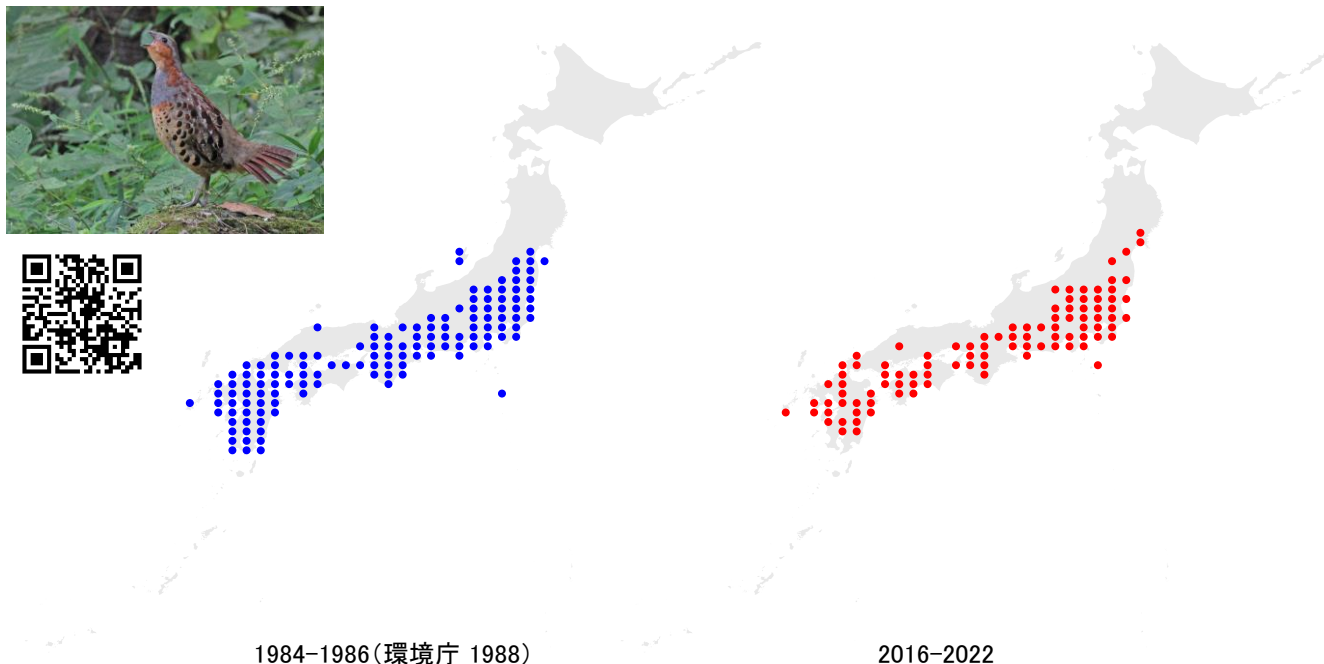
本州中部以北および熊本県阿蘇の開けた草原に局所的に繁殖し、本州中部以南で越冬する。2010年代には宮城での記録もあった。

オオジュリン *Emberiza schoeniclus* 全長: 16cm 体重: 20-21g



北海道や東北地方の一部で繁殖し、主に南東北以南で越冬する。1980年代と比較して2010年代は、東北地方の分布が拡大していた。ロシアや韓国から日本へ渡ってくる個体も多い(山階鳥類研究所 2002)。

コジュケイ *Bambusicola thoracicus* 全長：28-33cm 体重：200-350g

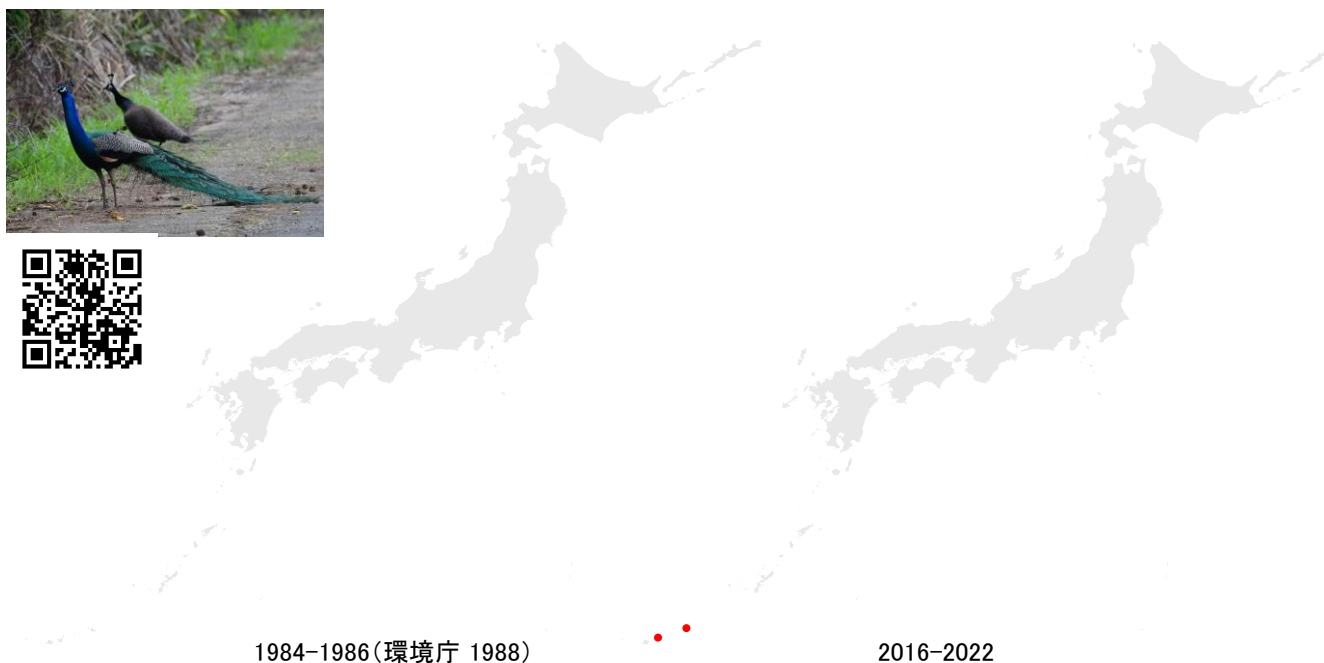


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

狩猟用に放鳥し、定着したものが南東北以南の太平洋側に分布する。2010年代は佐渡島での記録はなかったが、繁殖期には記録があり(植田・植村 2021)、生息はしていたものの、さえざらない時期で目立たずに、記録されなかったものと思われる。

インドクジャク *Pavo cristatus* 全長：90-130cm

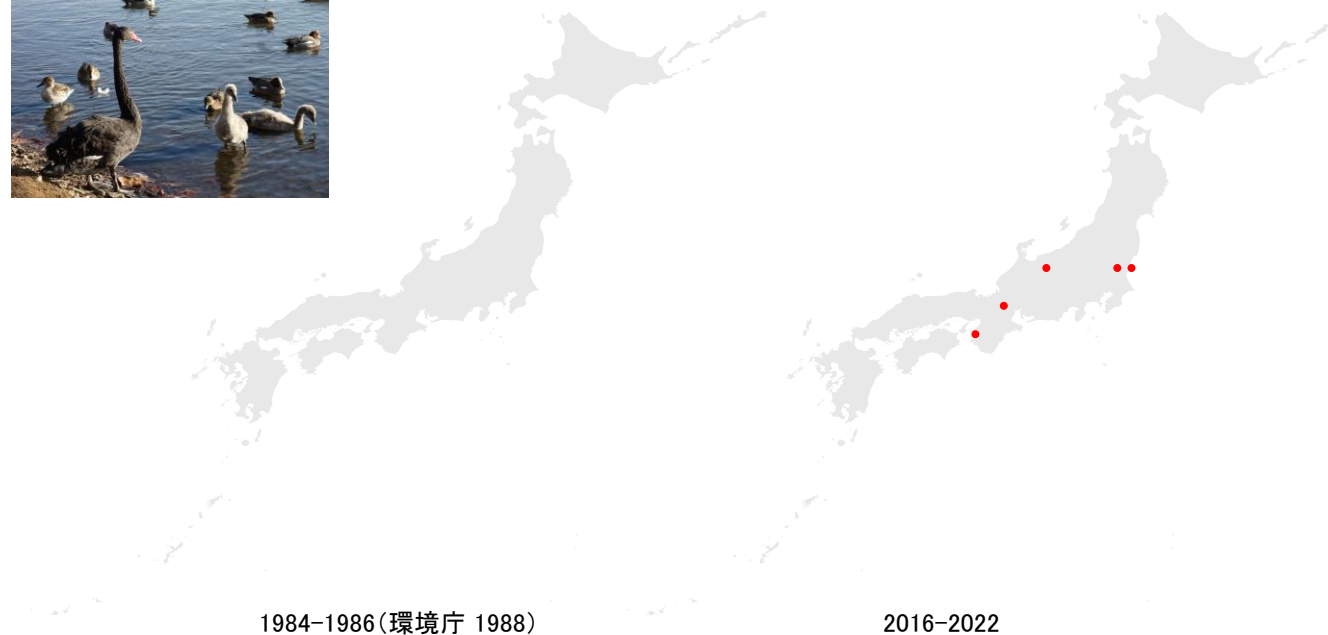


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

1980年代の記録はなかったが、与那国島、黒島、新城島、小浜島、石垣島、伊良部島、宮古島、鹿児島県硫黄島で、逃げ出した個体が定着しており、2010年代には2メッシュの記録があった。

コクチョウ *Cygnus atratus* 全長：110-140cm 体重：3700-8700g

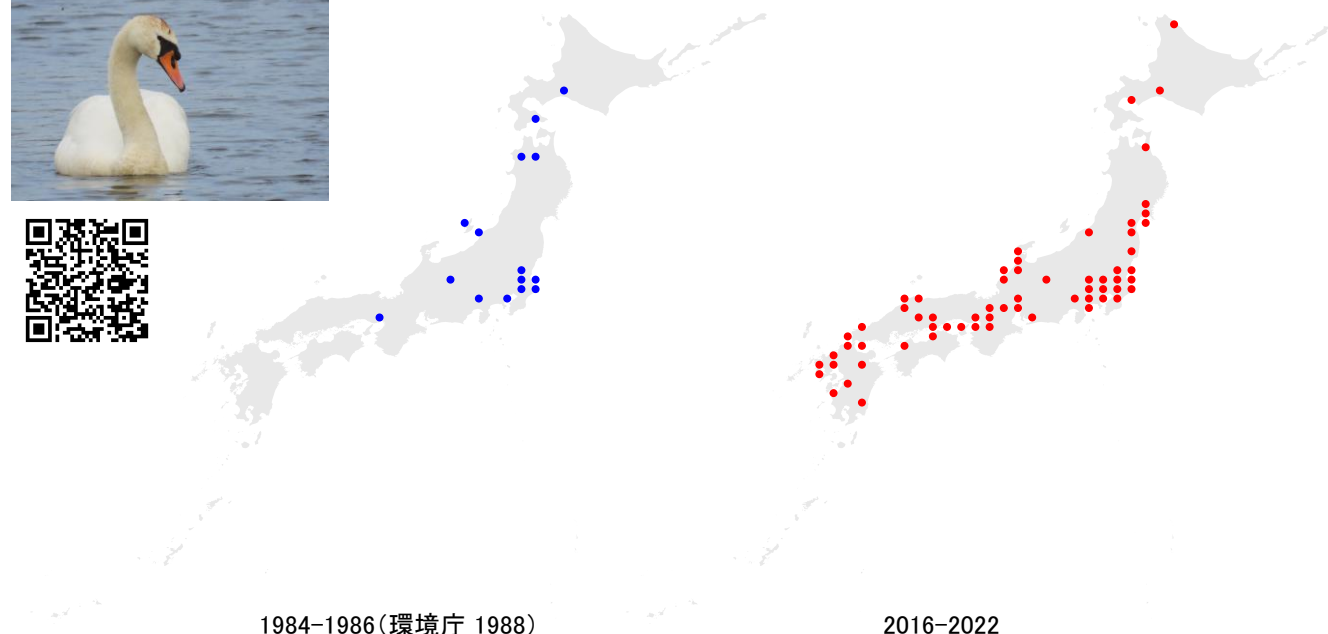


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

1980年代の記録はなかったが、2010年代には5メッシュで記録された。茨城県では、繁殖して定着している。もともと南半球のオーストラリアの鳥のためか、秋から冬にかけて繁殖する。

コブハクチョウ *Cygnus olor* 全長：160cm 体重：8000-16000g

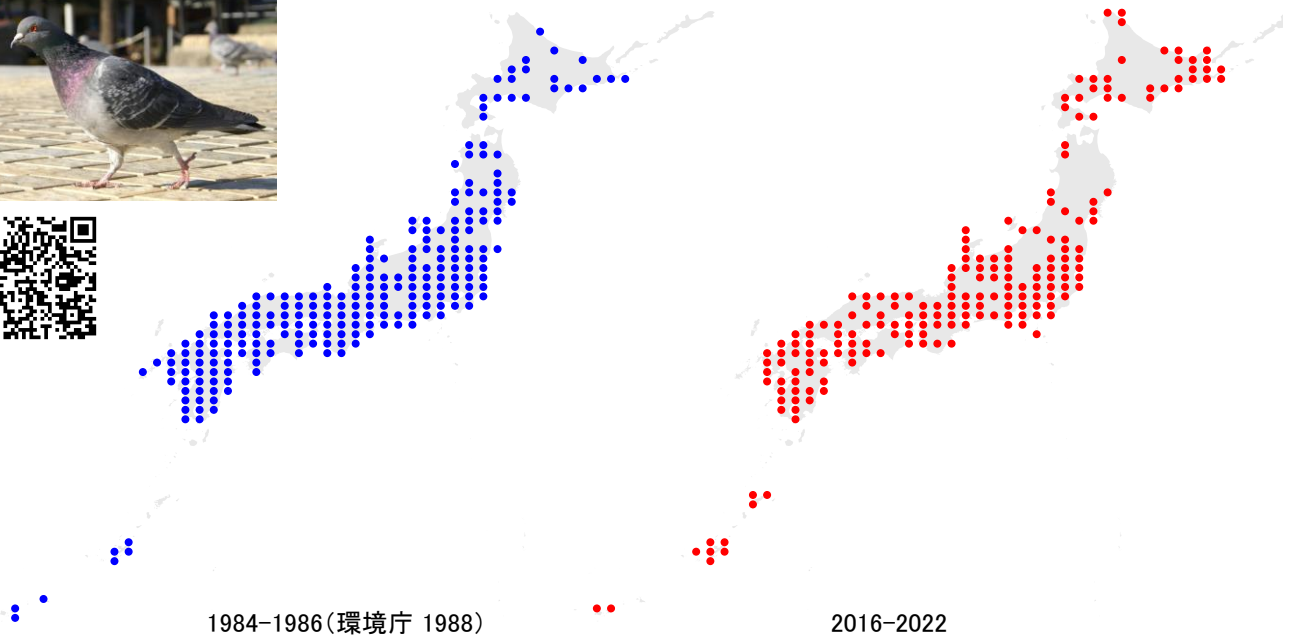


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

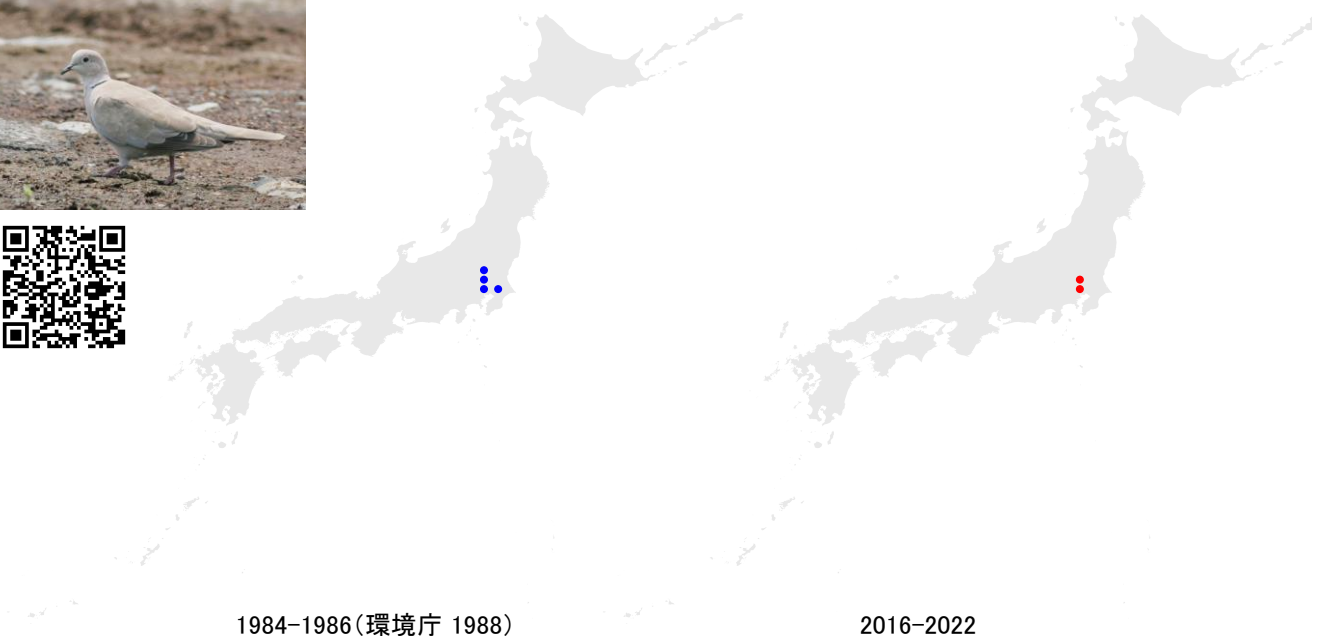
各地で飼育されており、放し飼い個体や逃げ出した個体が野外定着している。1980年代は主に東日本で記録されたが、2010年代は全国へと広がっていた。

カワラバト(ドバト) *Columba livia* 全長: 31-34cm 体重: 314.2±35.63g



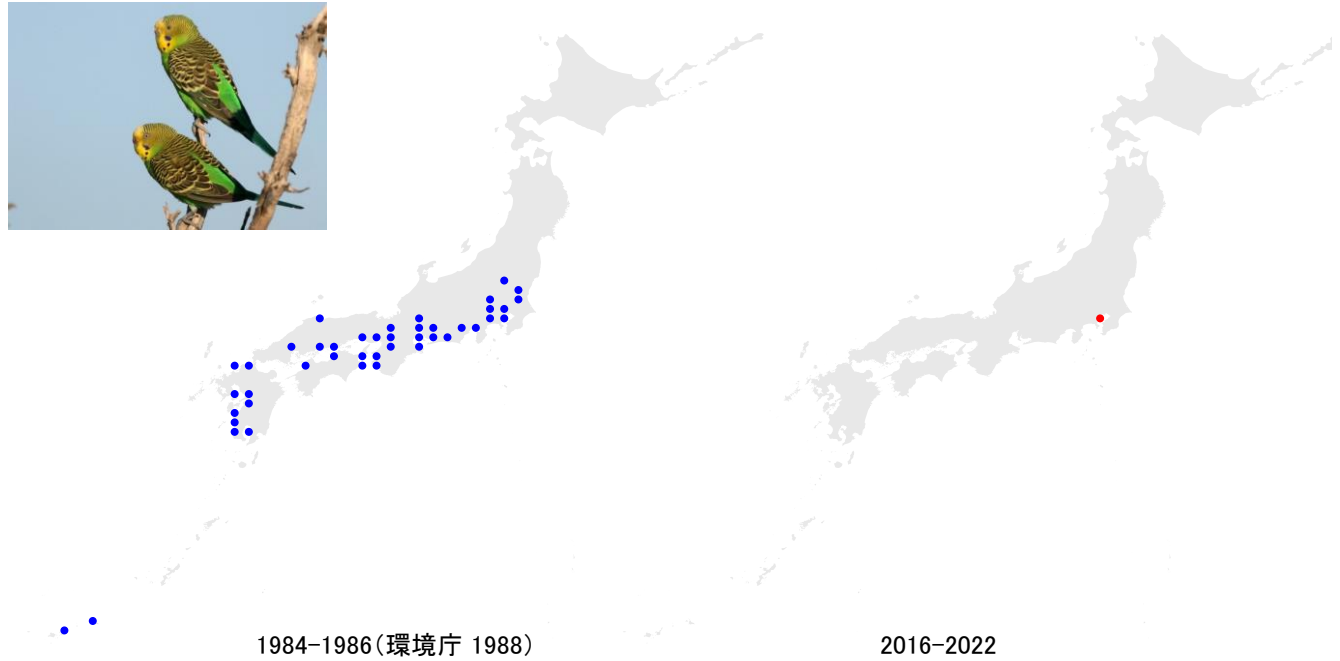
全国に留鳥として分布する。繁殖期の調査では、個体数が大きく減少しており、給餌の減少がその原因として考えられている(植田・植村 2021)。そうしたことを反映してか、2010年代には越冬環境の厳しいと考えられる北日本での記録メッシュ数が減少していた。

シラコバト *Streptopelia decaocto* 全長: 32.5cm 体重: 202-225g



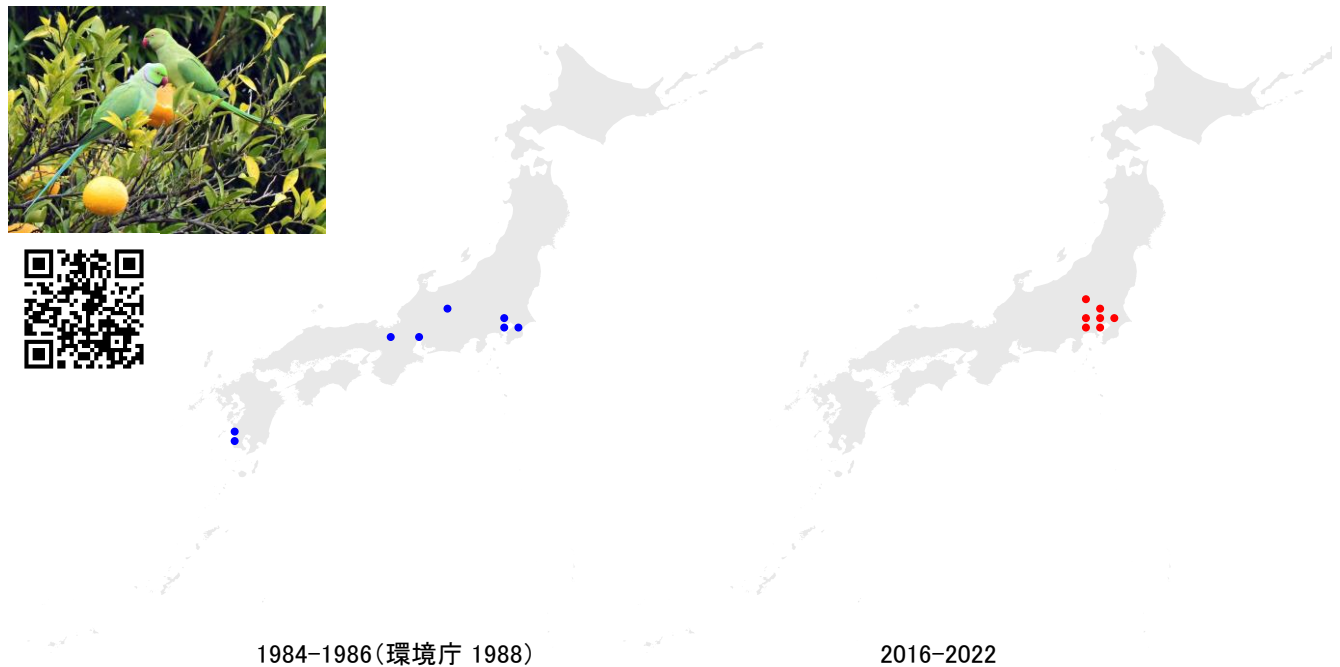
埼玉県越谷周辺に分布する。養鶏場や畜舎で穀類を食べることが多く、養鶏場の減少や、鳥インフルエンザ対策で鶏舎への出入りが困難になったことで個体数や分布が縮小していると推測されている(小峯 2016)。2010年代の記録メッシュ数は2メッシュに減少していた。

セキセイインコ *Melopsittacus undulatus* 全長: 18cm



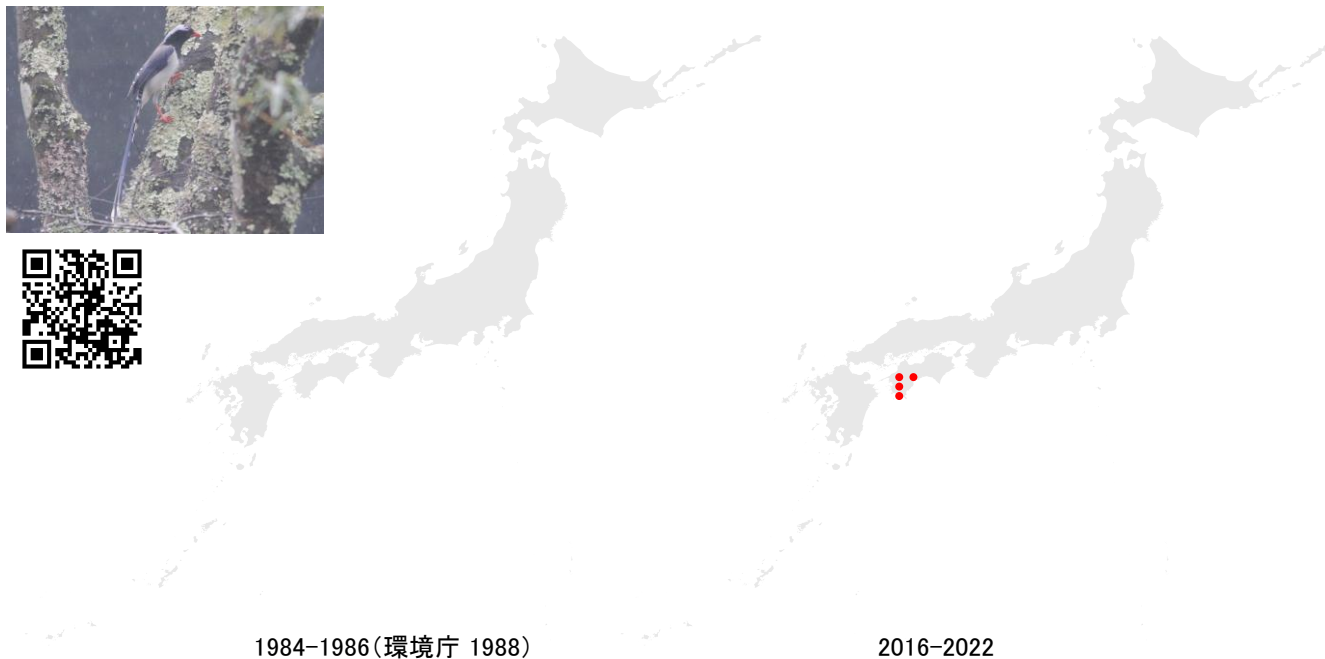
愛玩用の飼い鳥が逸出して、1980年代は太平洋側の地域で広く記録されたが、飼育数の減少のためか、2010年代の記録は1メッシュのみだった。

ホンセイインコ *Psittacula krameri* 全長: 37-43cm 体重: ♂145.6±11.6g ♀145.5±9.4g



愛玩用の飼い鳥が逸出して、1980年代は関東以西の複数地点で確認された。2010年代では関東のみとなったが、関東では東京を中心に、分布を大きく拡大させていた(植田・佐藤 2021)。

サンジャク *Urocissa erythroryncha*

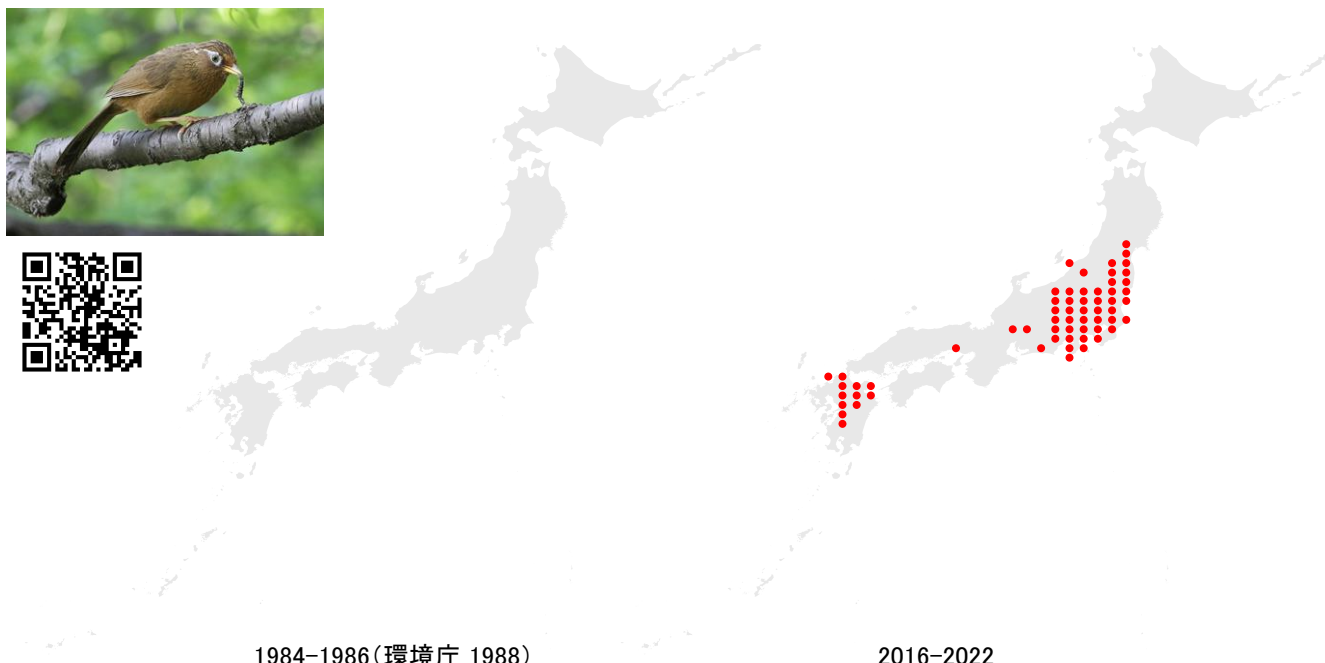


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

愛玩用・観賞用の飼い鳥が逸出し、2000年代から観察記録がある。現在は四国西部で確認されており、2015年と2016年には幼鳥と巣立ちビナが確認され、確実に定着している(佐藤ほか 2018)。2010年代には四国西部で4メッシュの記録があった。

ガビチヨウ *Garrulax canorus* 全長: 21-24cm 体重: 49-75g

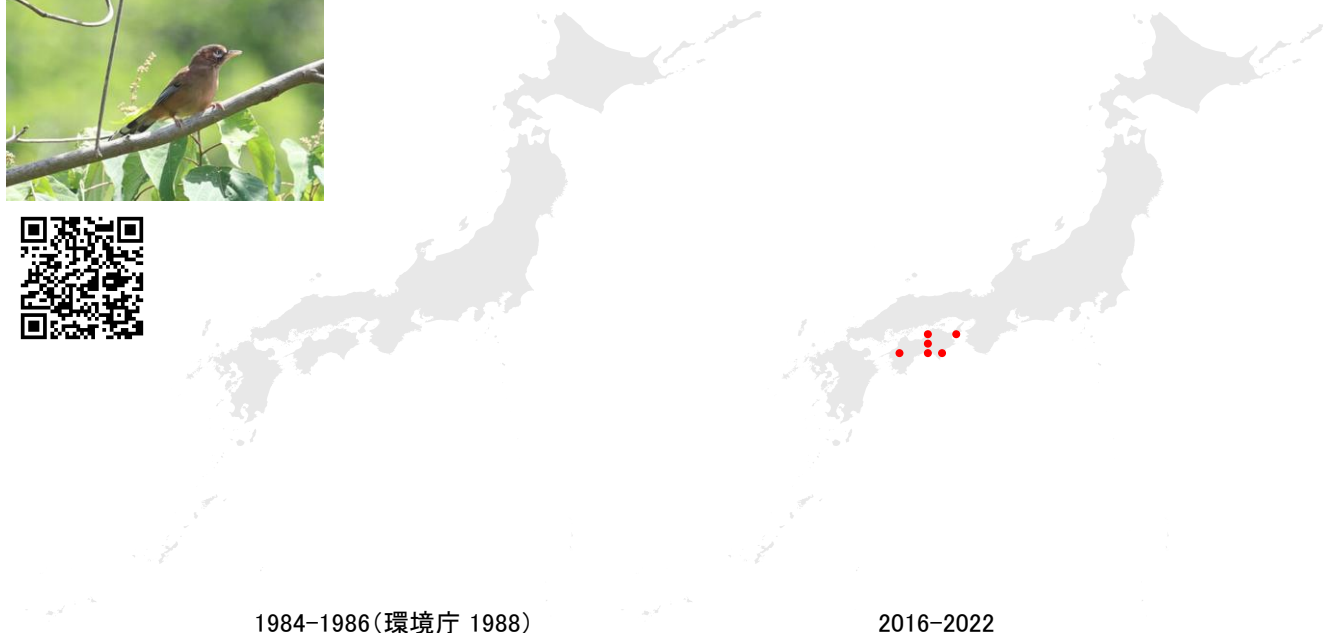


1984-1986(環境庁 1988)

2016-2022

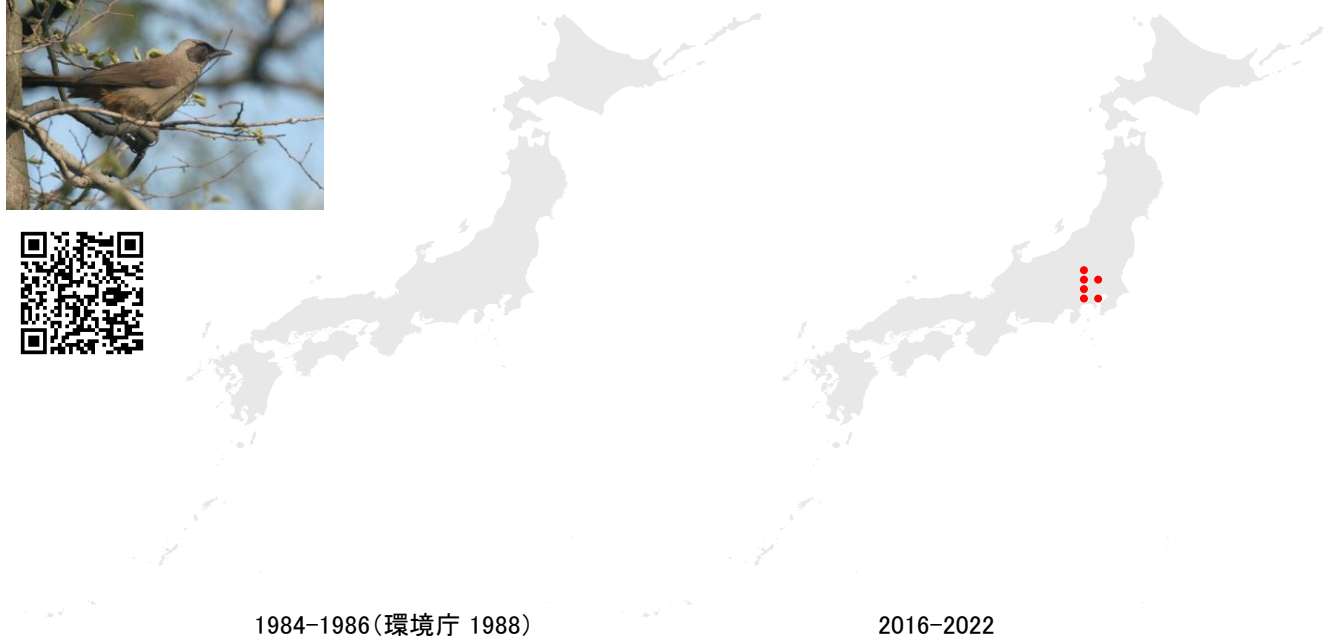
輸入された飼い鳥が逸出して野外で定着し、1980年代に北九州で確認されて以降、九州と関東から中部を中心に分布を拡げている。1980年代と2010年代で記録メッシュは0から61に増加した。地上で採食するが、積雪の深い場所での確認もされるようになっており(植田・植村 2021)、日本海側への分布拡大が懸念される。

ヒゲガビチョウ *Garrulax cineraceus* 全長：21-24cm 体重：43-55g



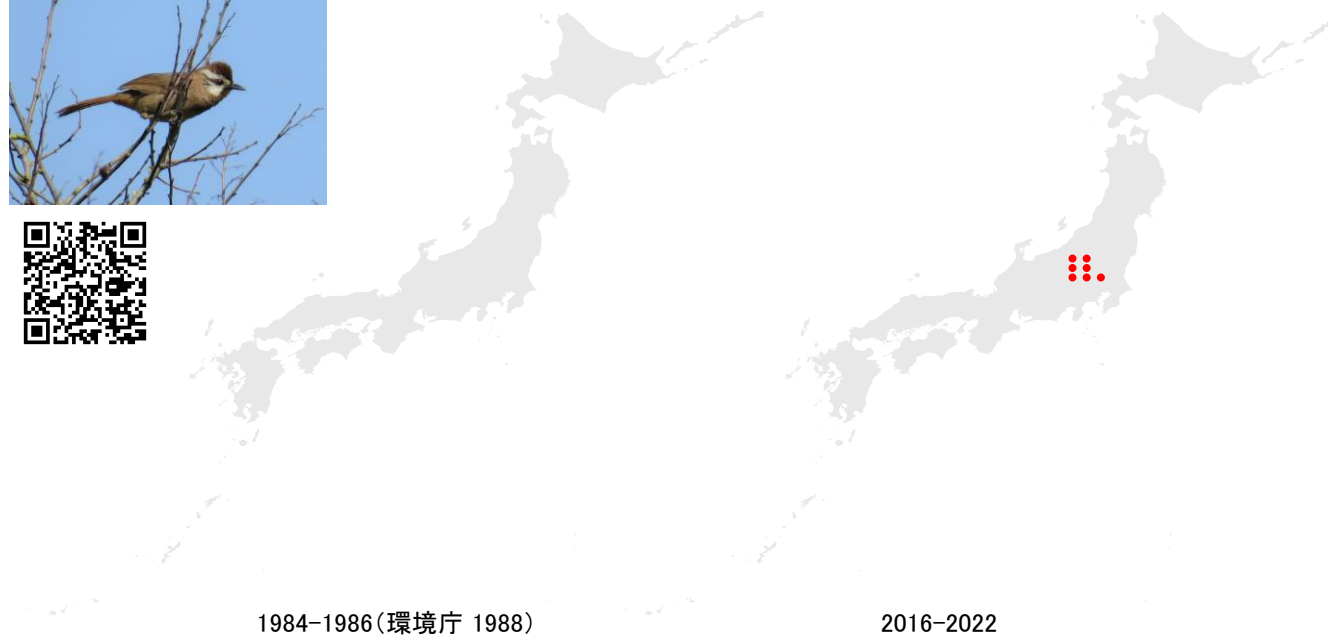
飼育用に輸入された個体が逸出したと考えられ、1998 年から記録がある。高知県、愛媛県、香川県で生息が拡大していた。

カオグロガビチョウ *Garrulax perspicillatus* 全長：30-34cm



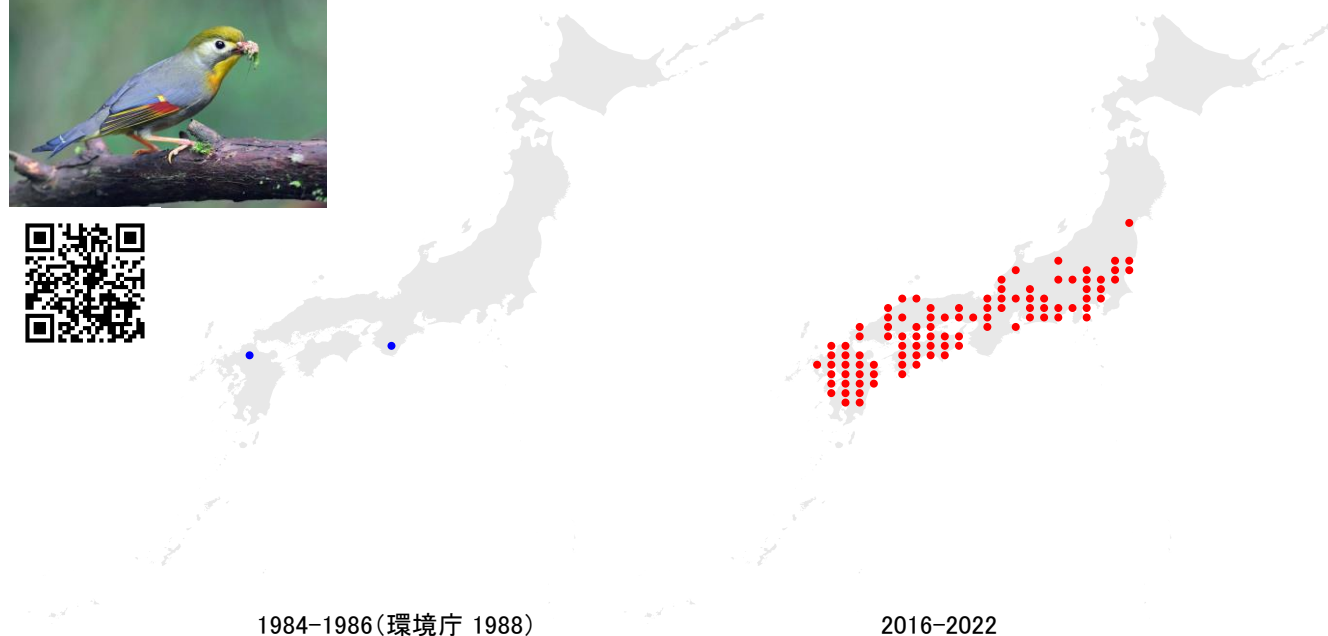
飼育用に輸入された個体が逸出したと考えられ、1980 年頃から神奈川県で記録され始め、東京では分布が大きく拡大している(植田・佐藤 2021)。2010 年代には 6 メッシュの記録があった。

カオジロガビチョウ *Garrulax sannio* 全長: 22-24cm 体重: 52-83g



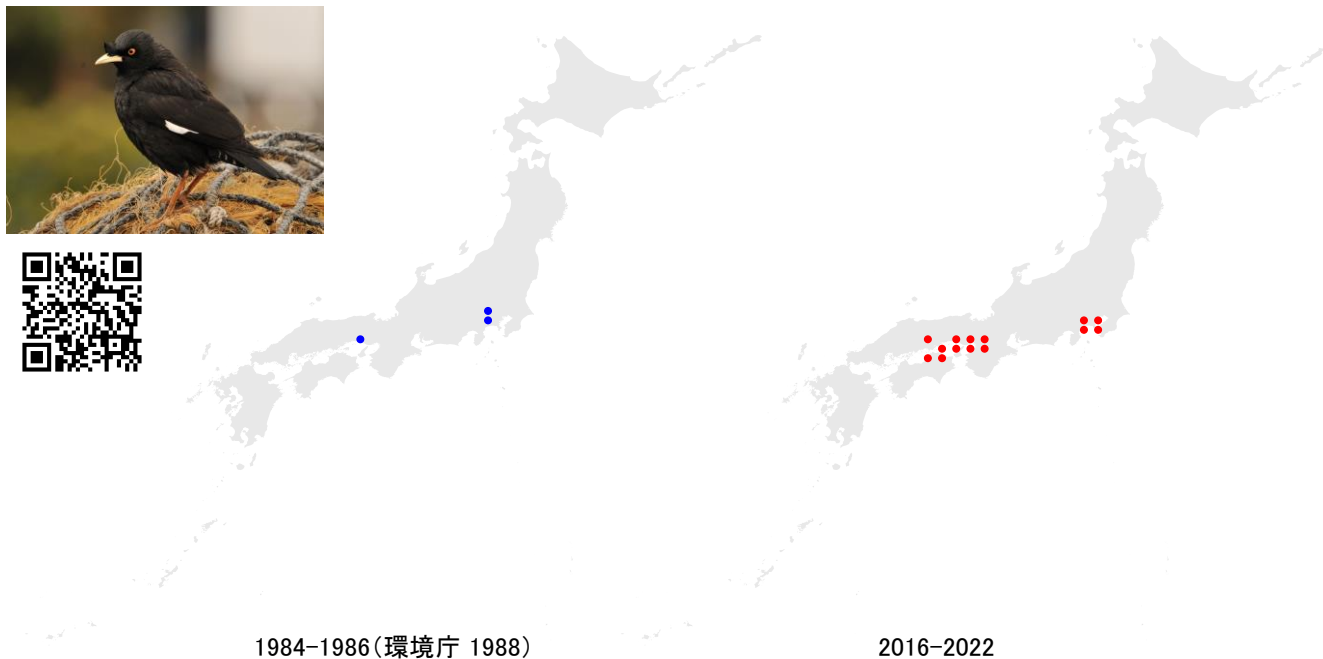
飼育用に輸入された個体が逸出したと考えられ、1994年に群馬県赤城山ではじめて記録され、その後分布が拡大している。2010年代には7メッシュの記録があった。

ソウシチョウ *Leiothrix lutea* 全長: 12.7-15.4cm 体重: ♂18.2-25.0g ♀19.6-24.2g



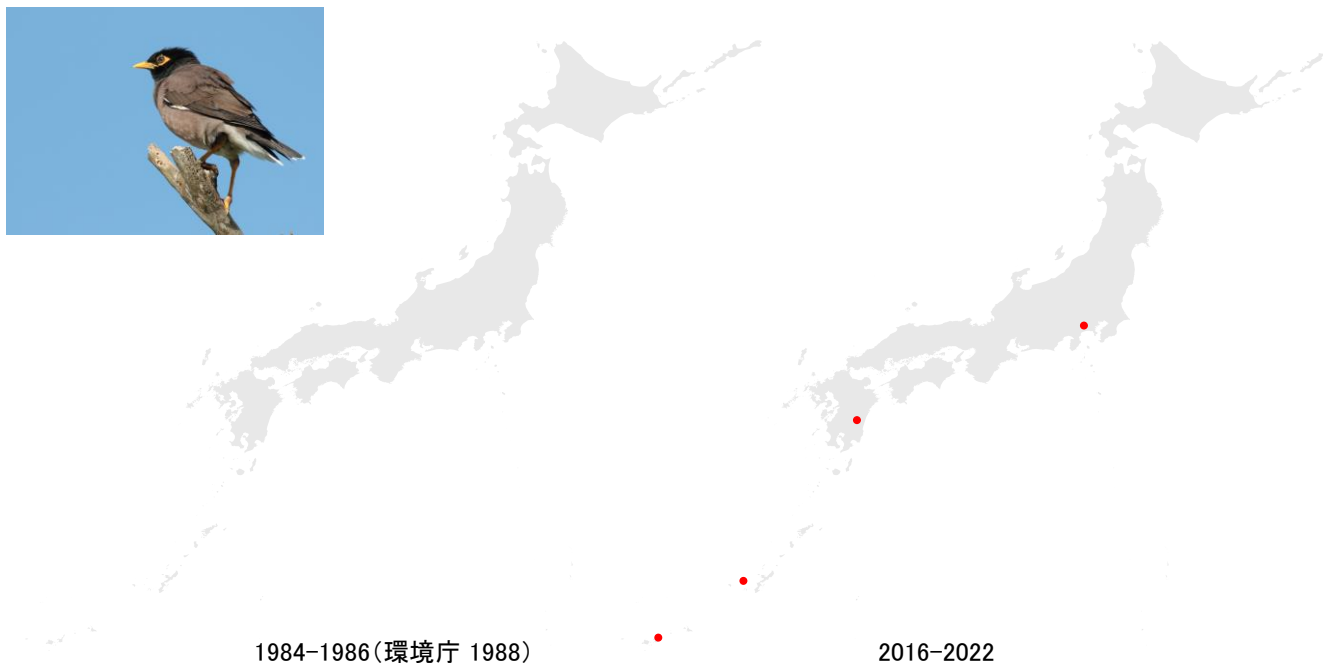
江戸中期から日本には飼い鳥として輸入されていたが、1980年代から急速に分布を拡大し、2010年代には関東以南にはほぼ面的に分布していた。移入初期には、標高1,000m程度の場所に生息していたが、現在は分布を標高の低い場所へと広げており、越冬期にはさらに標高の低い場所でも観察される。

ハッカチヨウ *Acridotheres cristatellus* 全長：26-27cm 体重：108-140g



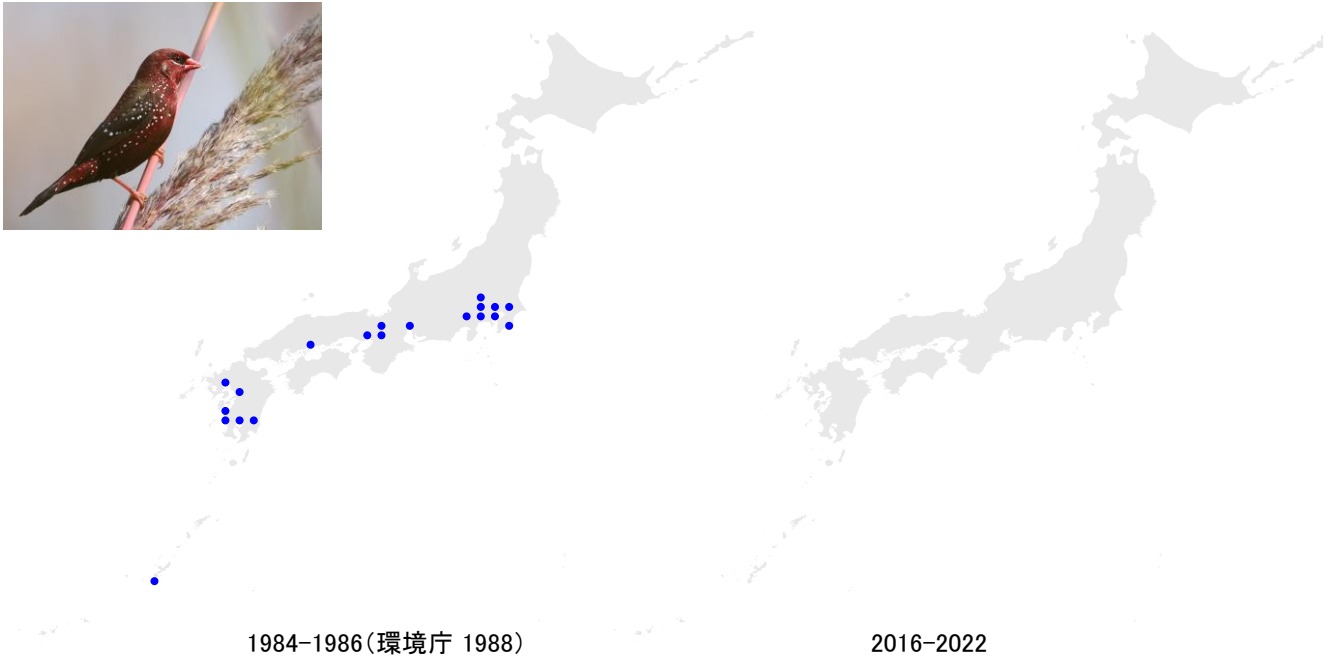
1980年代も2010年代も関東と関西で定着していたが、特に関西の瀬戸内海東部では分布を大きく拡大していた。

インドハッカ *Acridotheres tristis* 全長：25cm



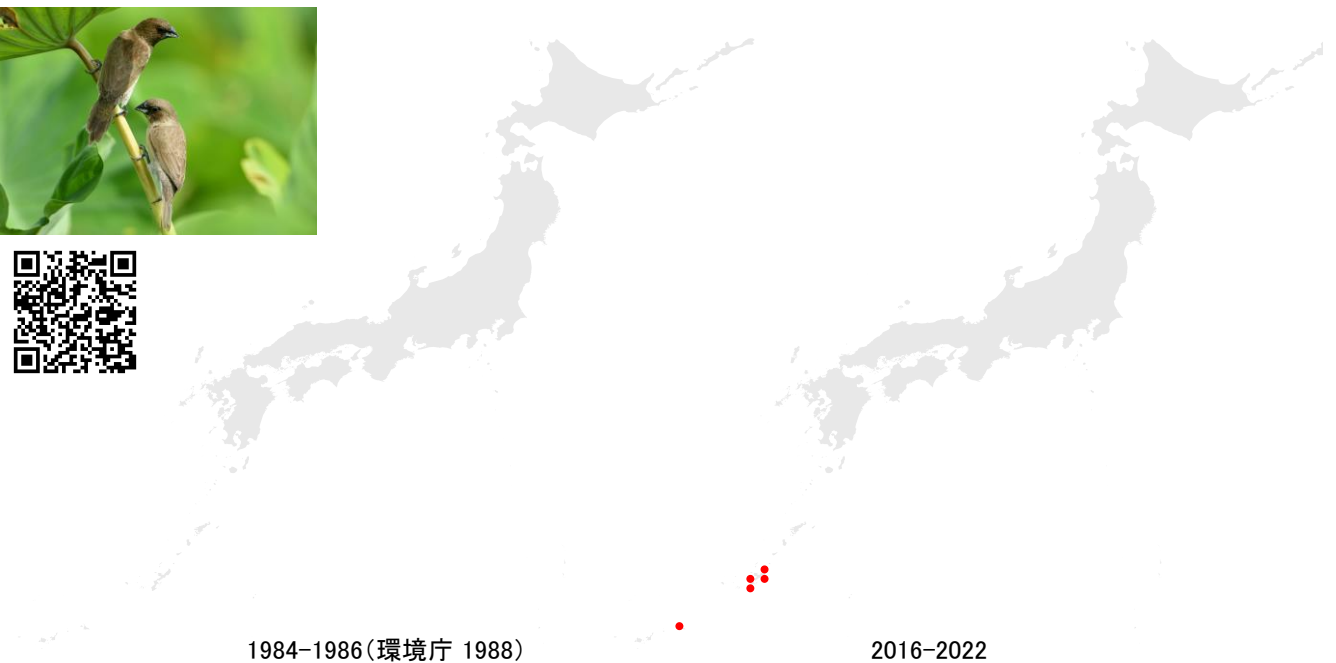
関東や九州、南西諸島で記録があり、2010年代には4メッシュで記録された。南西諸島に分布する個体は台湾に移入定着した個体が増加し、分布を拡大してきたものだと考えられる。

ベニスズメ *Amandava amandava* 全長：10cm



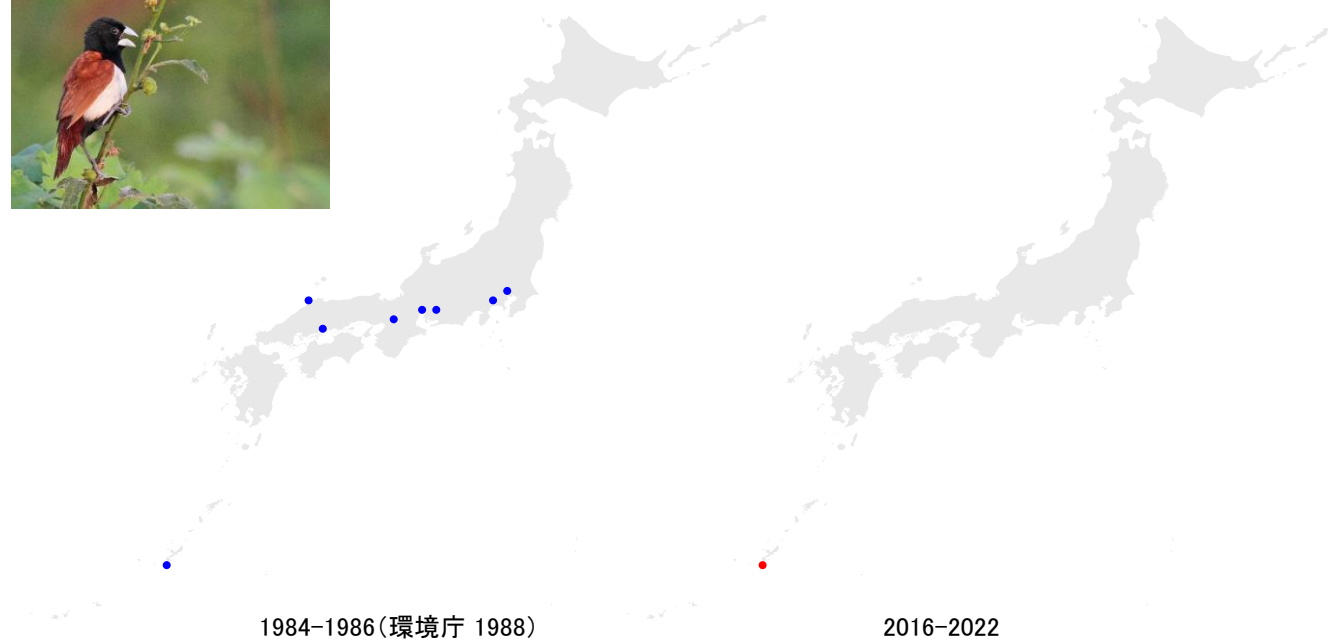
飼育用に輸入された個体が逸出したと考えられ、1980年代には太平洋側の埋め立て地や河川敷の草地で記録されていたが、2010年代の記録はなかった。輸入の減少および草地環境の減少が原因と考えられる。

シマキンパラ *Lonchura punctulata* 全長：10cm



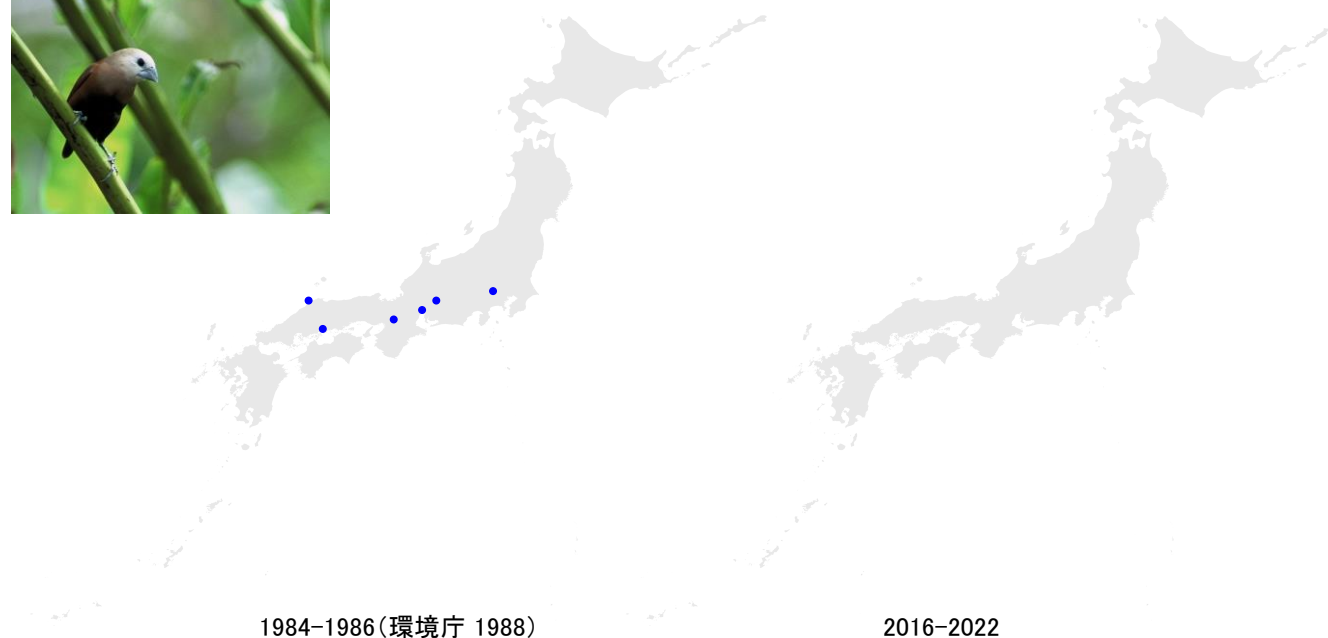
飼育用に輸入された個体が逸出したと考えられ、沖縄県では1988年から記録があり、それが増加して定着し、2010年代には5メッシュで記録された。

ギンバラ *Lonchura malacca* 全長：11-12cm



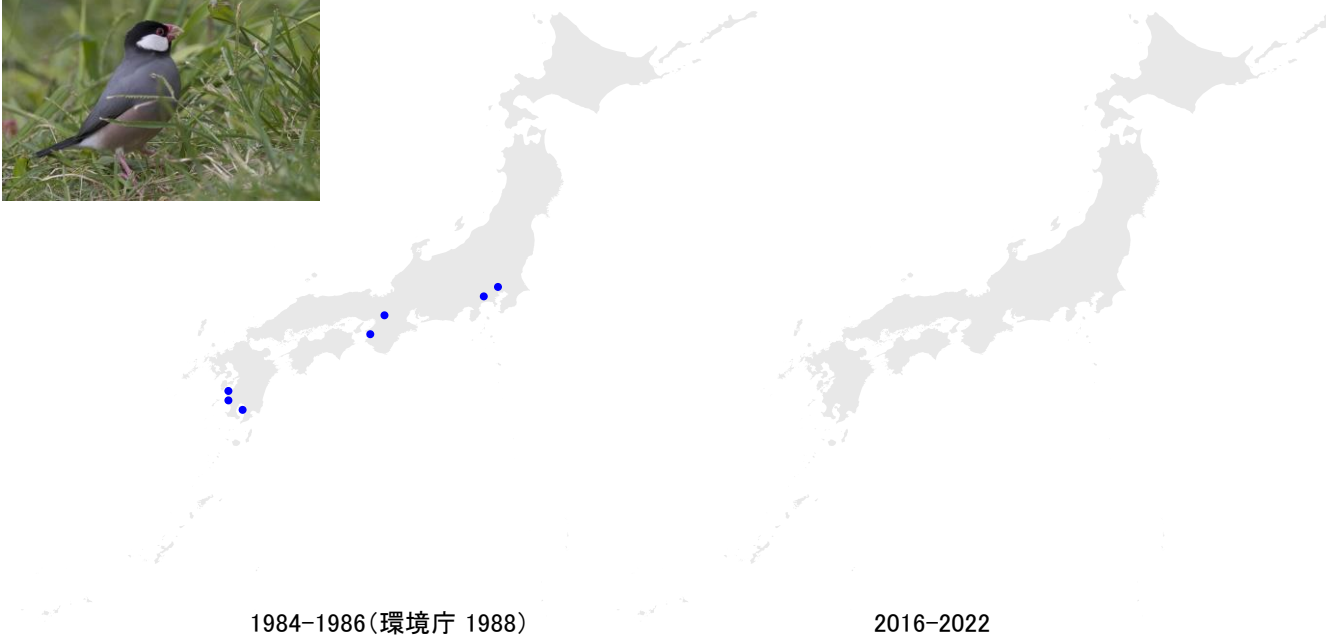
飼育用に輸入された個体が逸出したと考えられ、1980年代には太平洋側の埋め立て地や河川敷の草地で記録されていたが、ベニスズメと同様に減少し、2010年代は南西諸島の1メッシュで記録されただけだった。

ヘキチョウ *Lonchura maja* 全長：11.5-12.0cm



飼育用に輸入された個体が逸出したと考えられ、1980年代には太平洋側の埋め立て地や河川敷の草地で記録されていたが、ベニスズメと同様に減少し、2010年代の記録はなかった。

ブンチョウ *Lonchura oryzivora* 全長：14cm



飼育用に輸入された個体が逸出したと考えられ、1980年代には太平洋側の草地や住宅地などで記録された。2010年代の記録はなかった。

1. 日本の越冬鳥の現状

1) 緯度による越冬期の分布状況

日本は亜熱帯から亜寒帯まで南北で気候帯が異なる。そこで各メッシュの記録種数を緯度別に集計して示した(図 3)。また、合わせてモニタリングサイト 1000 の森林の調査地(2013-2017 年)の種数と個体数も示した。南西・小笠原諸島の島嶼部は種数が少ないが、本土部の南で多く、北で少ないのは共通していた。ただし、越冬分布調査の結果はモニタリングサイト 1000 の森林の結果よりもより南側(37-38° から

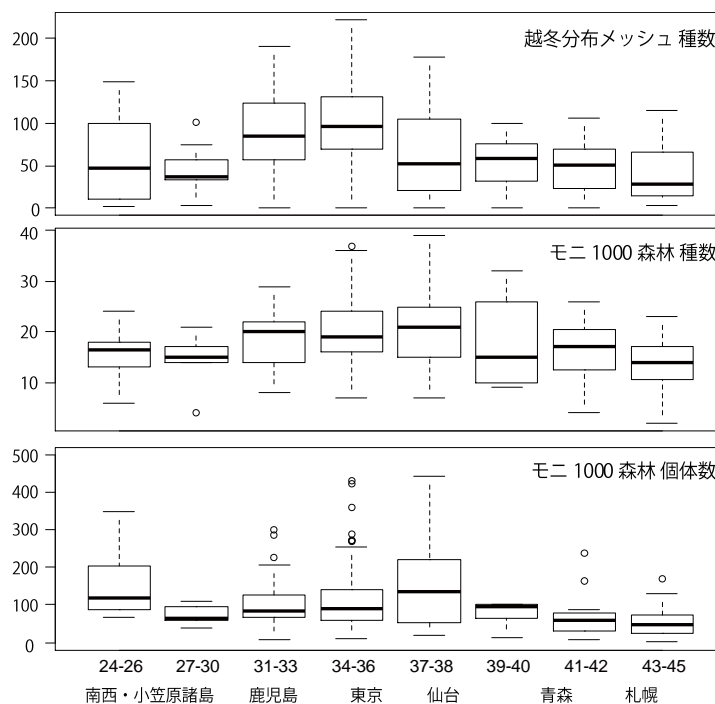


図 3. 各メッシュ・調査地で記録された鳥の種数や個体数と緯度との関係

凍結や積雪の影響をより受けやすい水鳥類が含まれているので、より南から種数が減少したことが考えられる。ただし、越冬分布調査は現地調査での情報収集を行なっておらず、アンケートベースの調査である。そのため、南の地域は積雪の影響がなくて観察しやすく情報が多いため、調査努力量の差による影響を受けた可能性もあり、注意が必要である。

凍結や積雪の影響をより受けやすい水鳥類が含まれているので、より南から種数が減少したことが考えられる。ただし、越冬分布調査は現地調査での情報収集を行なっておらず、アンケートベースの調査である。そのため、南の地域は積雪の影響がなくて観察しやすく情報が多いため、調査努力量の差による影響を受けた可能性もあり、注意が必要である。

2) 越冬期の優占種

越冬期の優占種をメッシュ数で示した(表 1)。2010 年代は、ヒヨドリ、ハシブトガラス、ツグミ、シジュウカラ、ハシボソガラスの順で多くのメッシュで記録され、こうした上位種は 1980 年代と変わらなかった。1980 年代には上位 20 種に入っておらず、2010 年代になって上位種に入った種には、コガモ、アオサギ、オオバン、ヒドリガモ、カワウといった水鳥が多くを占めていた。

表 1. 1980年代と2010年代の越冬期に記録された種 上位20種
1980年代には338メッシュ、2010年代は370メッシュの情報がある

1984-1986年		2016-2022年	
種名	メッシュ数	種名	メッシュ数
1 ハシブトガラス	312	ヒヨドリ	328
2 スズメ	311	ハシブトガラス	325
3 ヒヨドリ	299	ツグミ	301
4 ハシボソガラス	295	シジュウカラ	299
5 トビ	291	ハシボソガラス	293
6 シジュウカラ	284	トビ	286
7 ツグミ	264	マガモ	282
8 ハクセキレイ	263	スズメ	279
9 マガモ	259	コゲラ	279
10 キジバト	254	ハクセキレイ	273
11 ホオジロ	251	カルガモ	269
12 エナガ	247	ヤマガラ	266
13 ムクドリ	242	エナガ	257
14 カルガモ	240	コガモ	257
15 コゲラ	238	カワラヒワ	256
16 カワラバト(ドンバト)	235	アオサギ	255
17 モズ	235	ジョウビタキ	248
18 カワラヒワ	234	ノスリ	248
19 セグロセキレイ	232	オオバン	248
20 カシラダカ	229	ヒドリガモ	246
		カワウ	246

3) 分布が南北に偏った種

日本列島は北東方向に延びている。そこで、日本列島方向での位置を示すために緯度と経度を加算した値(緯度経度値とよぶ、大きい場所はより北東方向であることを意味する)をもとに、分布が北に偏った種、南に偏った種を示した。30 メッシュ以上の記録がある種を対象に、緯度経度値の南側の四分位点より北にある種、つまり分布の南側がより北に偏っている種を分布が北に偏った種として示し、北側の四分位点より南側にある種を分布が南に偏った種として抽出した(表 2)。

分布が北に偏った種は、ハシブトガラ、オオワシ、オジロワシ、ベニヒワといった北海道に分布の中心がある種が上位となり、海鳥類も上位種に多く含まれた。オナガは北の鳥というわけではないが、西日本に分布しない分布特性から、上位種に入っていた。

分布が南側に偏った種はクロツラヘラサギ、ツリスガラ、サンショウクイ、ツクシガモが上位となり、シギ・チドリ類など、干潟を利用する種が上位 20 種に多く含まれていた。

表 2. 分布の偏りの顕著な種。緯度と経度を加算した値の四分位数で示した

分布が北に偏った種			分布が南に偏った種		
種名	南側25%点	n	種名	北側25%点	n
ハシブトガラ	184.9	53	クロツラヘラサギ	167.6	42
オオワシ	180.0	87	ツリスガラ	168.4	33
オジロワシ	179.8	113	サンショウクイ	169.8	103
ベニヒワ	177.3	39	ツクシガモ	170.1	68
シロカモメ	176.5	72	アオアシシギ	170.9	57
ハクガン	175.7	34	ズグロカモメ	171.2	46
ワシカモメ	175.5	75	メダイチドリ	171.7	39
シジュウカラガン	175.5	34	ヘラサギ	171.8	45
クロガモ	174.5	100	ムナグロ	171.8	41
オナガ	174.4	55	イワツバメ	171.9	77
シノリガモ	174.2	110	ニューナイスズメ	171.9	45
アビ	174.1	57	ダイシャクシギ	172.0	31
ミツユビカモメ	174.0	48	セイタカシギ	172.2	36
ホシガラス	173.9	33	ヒクイナ	172.3	69
アカゲラ	173.9	183	アオバト	172.4	118
ミミカイツブリ	173.8	91	セッカ	172.4	74
アカエリカイツブリ	173.8	83	ダイゼン	172.6	58
コクガン	173.6	51	コウノトリ	172.6	45
キバシリ	173.6	81	ホオアカ	172.7	75
オオハクチョウ	173.5	135	ソウシチョウ	173.0	96

2. 分布の増減とその要因

1980年代と2010年代ともに情報を得ることのできている317メッシュを対象に、各種が記録されたメッシュ数をもとに、下記のとおり算出した増減率(数)の上位20種について示した。

(2010年代調査の記録メッシュ数－1980年代調査の記録メッシュ数)

÷1980年代調査の記録メッシュ数×100

表 3. 1980年代と2010年代ともに情報のあった317メッシュに基づく記録メッシュ数の変化 上位20種

分布が縮小した種				分布が拡大した種			
種名	1980年代	2010年代	変化	種名	1980年代	2010年代	変化
セキセイインコ	43	1	-97.7	ガビチョウ	0	60	
ウズラ	32	11	-65.6	ハクガン	0	34	
ササゴイ	31	13	-58.1	ソウシチョウ	2	95	4650.0
ヤマセミ	151	77	-49.0	シジュウカラガン	1	33	3200.0
ゴイサギ	171	98	-42.7	コウノトリ	2	44	2100.0
チュウサギ	73	43	-41.1	ヘラサギ	3	44	1366.7
タカブシギ	44	26	-40.9	ナベヅル	4	35	775.0
アマサギ	41	27	-34.1	ホシムクドリ	7	50	614.3
コジュケイ	130	95	-26.9	ツクシガモ	10	65	550.0
コサギ	209	154	-26.3	サンショウクイ	16	94	487.5
オナガ	73	55	-24.7	ヒシクイ	16	86	437.5
ユリカモメ	167	126	-24.6	アオシギ	8	42	425.0
タゲリ	133	104	-21.8	クロツラヘラサギ	8	39	387.5
カワラバト(ドバト)	230	187	-18.7	カワウ	51	234	358.8
クロサギ	75	63	-16.0	ヒクイナ	15	68	353.3
タンギ	157	132	-15.9	コブハクチョウ	15	63	320.0
カモメ	147	124	-15.6	セイタカシギ	9	35	288.9
カワガラス	177	151	-14.7	マガン	23	88	282.6
シロチドリ	112	96	-14.3	コクマルガラス	15	56	273.3
ツミ	65	56	-13.8	オオバン	63	231	266.7

1) 分布の縮小した種

分布の縮小した種の上位種はセキセイインコ、ウズラ、ササゴイ、ヤマセミ、ゴイサギなどが占めた。上位20種の多くは、全国鳥類繁殖分布調査(植田・植村 2021)、モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査(環境省自然環境局生物多様性センター 2020)などで減少の示されている種であり、個体群の縮小が分布の縮小にもつながっているものと考えられる。

2) 分布の拡大した種

分布の拡大した種の上位種は、ガビチョウ、ハクガン、ソウシチョウ、シジュウカラガン、コウノトリと、移入種や再導入種が上位を占めた。これらは定着の成功と増加が分布拡大として表れているものと考えられる。また、これら以外の上位20種の生態的な特性を見ると、水鳥類や、地上で採食する種が多かった。こうした特性を持つ種は、積雪や凍結の影響を受けやすい種で、温暖化により、冬の寒さが緩和されることで、分布が広がっている可能性が考えられた。

分布の拡大には、こうした分布の北上だけでなく、南側へも北側へも全体的に分布を拡大している種も含まれるため、分布の北上している種のみを抽出した。そして分布の北上度合いと生態的な特性との関係について検討した。日本列島は北東方向に延びているので、この列島方向の分布の

位置を示すために、159 ページで示した「分布が南北に偏った種」の抽出方法と同様に緯度と経度を加算した緯度経度値(この値が大きい方が北であることを意味する)をもとに分布を評価した。各種鳥類が記録されたメッシュの緯度経度値の中央値を 1980 年代、2010 年代で算出し、その中央値の 2010 年代と 1980 年代の差(値がプラスで分布が北上、マイナスで分布が南下)を示し、それと生態的な特性の関係を集計した。記録メッシュ数が少ない種は、分布の評価に偶然が左右するために、解析の対象から除外することにした。また、1980 年代の記録には南西諸島北部の記録がなく、小笠原諸島の情報も少ないなど、島の分布情報が少ないため、島を中心に分布する種は、分布変化の信頼性が低く、2010 年代との分布の比較に適さない。そこで、この解析では両年代ともに 10 メッシュ以上の記録がない種および島が主要な分布域である種(10 メッシュ以上の種ではカラスバトとズアカアオバト)を除外した。

分布の北上した種の上位種には、コクマルガラス、ミヤマガラス、サンショウクイなどが挙げられた(表 4)。シロエリオオハムについては、1980 年代には海鳥の情報が少なかったため、それが大きく影響しており、分布が北上したのではない可能性も考えられる。

生態的な特性でまとめると、樹上性、草索性、森林の地上性の鳥、海鳥、猛禽類では、0 を中心にした分布傾向を示しており、分布変化に方向性はなかった(図 4)。それに対して、セキレイ類やガン類やミヤマガラスのような開けた場所に生息する地上採食性の鳥や、クイナ類、シギ類、水面とともに地上でも採食する陸ガモ類などの浅水域の鳥、カイツブリ類やカワセミ類、陸水域でも見られる潜水ガモ類などの水中採食の鳥、そしてツバメ類やアマツバメ類といった空中採食の鳥は北へ分布を拡大している種が多かった。

前述したように、地上や水域は、積雪や凍結の影響を受けやすい場所なので、積雪や凍結の緩和により、北に分布が広がっていることを示していると考えられる。また、空中採食性の種は対象種数が 4 種と少ないことからわかるように、日本は越冬地として適さず、その多くは夏鳥である。温暖化はこうした生活史を持つ鳥が日本で越冬できるようになることにつながると考えられ、それを反映しているのではないかと思われる。

表 4. 分布(緯度+経度の値)の北上した種 上位10種

種名	中央値の変化		変化
	1980年代	2010年代	
コクマルガラス	164.6	174.0	9.4
ミヤマガラス	164.3	173.3	9.0
サンショウクイ	158.8	166.6	7.8
コイカル	164.3	170.6	6.3
ヒクイナ	162.4	168.6	6.2
キョウジョシギ	162.9	168.8	5.9
ツバメ	164.4	170.1	5.7
ウズラ	170.4	175.6	5.2
オジロトウネン	165.1	169.7	4.6
シロエリオオハム	175.4	179.4	4.0

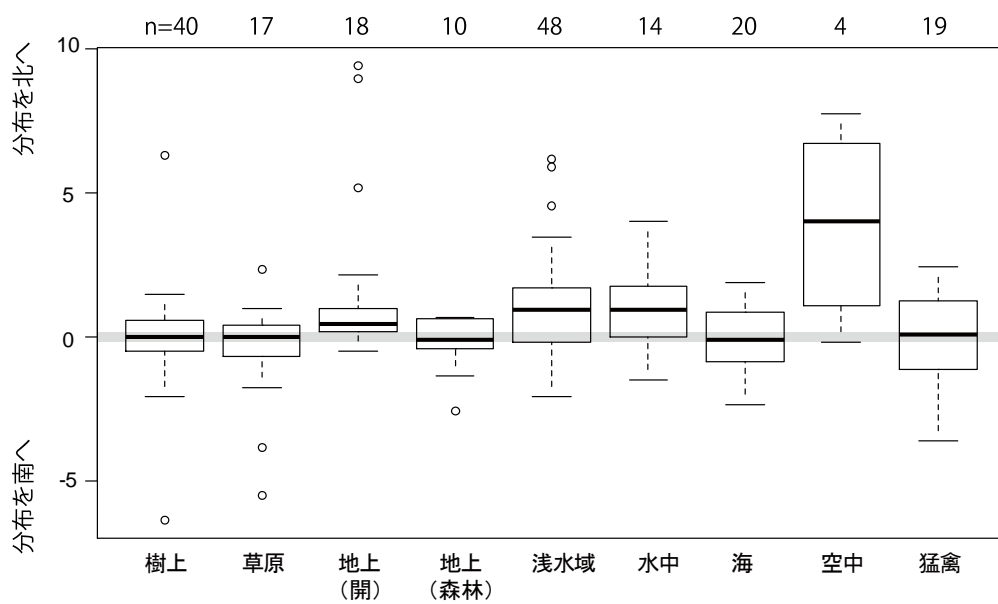


図 4. 生態的な特性と分布の中央値の変化との関係. 数値がプラスは分布が北へシフトしていることを示す。グラフ上部の数字は該当種数

3. データの公開

今回得られたデータは保全や研究, 気候変動の普及啓発等の目的で有用なものとする。データは Bird Research の「調査データ」の論文として公開されており, そこからデータを利用することができる。詳細は, 以下の論文をご覧ください。

植田睦之・奴賀俊光・山崎優佑・葉山政治 (2023) 全国鳥類越冬分布調査で収集された 40km メッシュの鳥類の分布データ. Bird Research 19: R1-R3. <https://doi.org/10.11211/birdresearch.19.R1>

引用文献

- Amano T, Mei-Hua LI & Yoshida H (2010) Silent night in Japanese rice fields? A population decline in the Greater Painted Snipe. *Ornithological Science* 9: 49-53.
- BirdLife International (2016) *Emberiza rustica*. The IUCN Red List of Threatened Species 2016: e.T22720960A89641304. <https://dx.doi.org/10.2305/IUCN.UK.2016-3.RLTS.T22720960A89641304.en>
- BirdLife International (2018) *Anser erythropus*. IUCN Red List of Threatened Species 2018: e.T22679886A132300164. <https://dx.doi.org/10.2305/IUCN.UK.2018-2.RLTS.T22679886A132300164.en>.
- BirdLife International (2019) *Aythya baeri*. The IUCN Red List of Threatened Species 2019: e.T22680384A154436811. <https://dx.doi.org/10.2305/IUCN.UK.2019-3.RLTS.T22680384A154436811.en>.
- Carter HR, Ono K, Fries JN, Hasegawa H, Ueta M, Higuchi H, Moyer JT, Leigh K, Chan LKO, de Forest LN, Hasegawa M & van Vliet GB (2002) Status and Conservation of the Japanese Murrelet (*Synthliboramphus wumizusume*) in the Izu Islands, Japan. *J Yamashina Inst Ornithol* 33: 61-87.
- del Hoyo, Elliott A & Sargatal J eds (1994) Handbook of the Birds of the World Volume 2. Lynx Edicions, Barcelona.
- 榎本佳樹 (1941) 野鳥便覧(下). 日本野鳥の会大阪支部, 大阪.
- 江崎保男・大迫義人 (2019) 野生復帰事業によるコウノトリ *Ciconia boyciana* 繁殖個体群の再生. *日本鳥学会誌* 68: 183-192.
- 深瀬徹 (2021) 宮城県仙台市における11月のツバメの繁殖. *Bird Research* 17: S9-S11.
- 長谷部真 (2015) 生態図鑑 ウミガラス. *バードリサーチニュース* 12(7): 2-3.
- 橋本啓史 (2013) 生態図鑑 オオバン. *バードリサーチニュース* 10(2): 6-7.
- 平野敏明 (2018) 渡良瀬遊水地における繁殖期のサンカノゴイ雄の減少. *Bird Research* 14: A13-A22.
- 平野敏明・小池勲・塚原千明 (2005) 渡良瀬遊水地におけるチュウヒとハイロチュウヒの冬期の食性. *日本鳥学会誌* 54: 29-36.
- 飯田知彦・田中晋 (1993) 広島県西部におけるヤツガシラ *Upupa epops* の繁殖生態. *Strix* 12: 53-60.
- 伊関文隆 (2004) 春期に九州北西部を西へ渡るハイタカと東へ渡るサシバ・ハチクマ. *Strix* 22: 81-88.
- 石田健 (2015) 奄美大島の侵略的外来種マングースの防除と鳥類の保護. *バードリサーチニュース* 2015年9月: 1.
- 伊藤元裕 (2014) 生態図鑑 ハシブトウミガラス. *バードリサーチニュース* 11(8): 4-5.
- Kanai Y, Ueta M, Germogenov N, Nagendran M, Mita N & Higuchi H (2002) Migration routes and important resting areas of Siberian cranes (*Grus leucogeranus*) between northeastern Siberia and China as revealed by satellite tracking. *Biological Conservation* 106: 339-346.
- 環境庁 (1988) 第3回自然環境保全基礎調査 動植物分布調査報告書(鳥類). 環境庁, 東京.
- 環境省 (2004) 特定鳥獣保護管理計画技術マニュアル(カワウ編). 日本野鳥の会, 東京.
- 環境省自然環境局生物多様性センター (2020) モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査 2004-2017年度とりまとめ報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
- 環境省自然環境局生物多様性センター (2022) 第52回ガンカモ類の生息調査 令和2年度 報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
- 環境省自然環境局生物多様性センター (online) 標識調査でわかること. <https://www.biodic.go.jp/banding/seen.html> 参照 2022-11-26
- 環境省野生生物課 (2014) 平成26年度オオタカに関する情報整理等委託業務報告書. 環境省野生生物課, 東京.
- Kasahara S, Morimoto G, Kitamura W, Imanishi S & Azuma N (2020) Rice fields along the East Asian-Australasian flyway are important habitats for an inland wader's migration. *Sci Rep* 10: 4118.

- 岸久司 (2019) アオシギは里山の身近な冬鳥です(茨城県における生息状況とその生態). 日本鳥学会 2019 年度大会講演要旨集.
- 北沢宗大・吉岡俊朗 (2021) 九州北部におけるシマクイナの越冬を示唆する記録. *Bird Research* 17: S13-S18.
- 小林篤・中村浩志 (2018) ライチョウの群れ構成と標高移動の季節変化. *日本鳥学会誌* 67: 69-86.
- 国立環境研究所 (online) 侵入生物データベース. <https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/> 参照 2022-11-26.
- 小峯昇 (2016) 生態図鑑 シラコバト. *バードリサーチニュース* 2016 年 11 月: 3.
- 越山洋三・伊関文隆・先崎啓究・渡辺靖夫 (2020) フィールドガイド日本の猛禽類 vol. 5 カタグロトビ. フィールドデータ, 赤磐市.
- 小高信彦 (2011) 生態図鑑 ノグチゲラ. *バードリサーチニュース* 8(4): 2-3.
- 神山和夫 (2016) 生態図鑑 ヒドリガモ. *バードリサーチニュース* 2016 年 1 月: 3.
- 神山和夫 (2018a) 千島列島に再導入されたシジュウカラガンー現地で初めて幼鳥を確認 シヤシコタン島沖で幼鳥づれの家族群が撮影されました. *バードリサーチニュース* 2018 年 10 月: 3.
- 神山和夫 (2018b) 給餌自粛によるオナガガモの分布変化ー続報. *バードリサーチニュース* 2018 年 12 月: 4.
- 神山和夫 (2021a) 北半球で増加するガン・ハクチョウ類 *バードリサーチニュース* 2021 年 1 月: 1.
- 神山和夫 (2021b) トモエガモ個体数が回復の兆し. *バードリサーチニュース* 2021 年 11 月: 1.
- 松井淳・守屋年史・三木敏史 (2022) 生態図鑑 セイタカシギ. *バードリサーチニュース* 2022 年 6 月: 3.
- 松宮裕秋・沼野正博 (2022) 中部地方および近畿地方の太平洋岸地域におけるシマクイナの越冬状況. *Bird Research* 18: A87-A97.
- 三上かつら・蛭名純一 (2018) 生態図鑑 イスカ. *バードリサーチニュース* 15(1): 4-5.
- 三上かつら・植田睦之 (2011) 西日本におけるリュウキュウサンショウクイの分布拡大. *Bird Research* 7: A33-A44.
- 三上修 (2009) 日本におけるスズメの個体数減少の実態. *日本鳥学会誌* 58: 161-170.
- 永田尚志 (1997) オオセッカの現状と保護への提言. *山階鳥研報* 29: 27-42.
- 中川元 (2009) 生態図鑑 オオワシ. *バードリサーチニュース* 6(2): 2-3.
- 中濱翔太 (2013) 生態図鑑 カンムリカイツブリ. *バードリサーチニュース* 10(7): 2-3.
- 中村一恵 (1987) シロハラクイナの日本列島への分布拡大と定着. *神奈川県立博物館研究報告(自然科学)* (17): 1-11.
- 中村一恵 (2013) 日本列島におけるセキレイ属近縁 2 種の分布変遷と種分化. *神奈川県立博物館研究報告(自然科学)* (42): 71-90.
- 日本クロツラヘラサギネットワーク・日本野鳥の会 (online) 2021 年クロツラヘラサギ世界一斉センサスの結果. <https://www.wbsj.org/activity/conservation/endangered-species/bfs-pj/bfs-census2021/> 参照 2022-12-02.
- 日本鳥学会 (2000) 日本鳥類目録改訂 6 版. 日本鳥学会, 帯広.
- 日本鳥学会 (2012) 日本鳥類目録改訂 7 版. 日本鳥学会, 三田.
- 小田谷嘉弥 (2014) 生態図鑑 ヤマシギ. *バードリサーチニュース* 11(11): 4-5.
- 岡久雄二・永田尚志・尾崎清明 (2017) 標識再観察法によるトキ *Nipponia nippon* の個体数推定. *山階鳥類学雑誌* 48: 51-63.
- 大西敏一・五百澤日丸 (2014) 決定版日本の野鳥 650. 平凡社, 東京.
- RSPB (online) Wildlife guides: Lesser black-backed gull. <https://www.rspb.org.uk/birds-and-wildlife/wildlife-guides/bird-a-z/lesser-black-backed-gull/> 参照 2022-11-23.
- 榎原貴之・森航大・佐藤和人 (2021) 生態図鑑 ミサゴ. *バードリサーチニュース* 2021 年 5 月: 2.
- 佐場野裕 (2013) 生態図鑑 ハクガン. *バードリサーチニュース* 10(3): 4-5.
- 佐野清貴 (2012) 生態図鑑 カンムリワシ. *バードリサーチニュース* 9(2): 4-5.
- 佐藤重穂・濱田哲暁・谷岡仁 (2018) 四国西部におけるサンジャクの野生化. *Bird Research* 14: S1-S5.

- 澤祐介 (2016) 生態図鑑 ミヤコドリ. バードリサーチニュース 2016年12月: 6
- 先崎理之 (2016) 生態図鑑 ノビタキ. バードリサーチニュース 2016年10月: 2.
- 須川恒 (2008) 生態図鑑 ユリカモメ. バードリサーチニュース 5(1): 2-3.
- 田口翔太・島田湧志・神尾三徳・大塚彩加・元永康誠・小林万里 (2020) 国内初のコミズク繁殖確認. 東京農大農学集報 65(3): 83-86.
- 高川晋一・植田睦之・天野達也・岡久雄二・上沖正欣・高木憲太郎・高橋雅雄・平野敏明・葉山政治・三上修・森さやか・森本元・山浦悠一 (2011) 日本に生息する鳥類の生活史・生態・形態的特性に関するデータベース「JAVIAN Database」. Bird Research 7: R9-R12.
- 高木憲太郎 (2010) 日本におけるミヤマガラスの越冬分布の拡大. Bird Research 6: A13-A28.
- 高橋雅雄・蛭名純一・宮彰男・磯貝和秀・古山隆・高田哲良・堀越雅晴・大江千尋・叶内拓哉 (2018) 関東地方におけるシマクイナ *Coturnicops exquisitus* の冬季の生息状況. 日本鳥学会誌 67: 109-116.
- 高橋雅雄・宮彰男・古山隆・磯貝和秀・三戸貞夫 (2022) 九州地方におけるオオセッカ *Locustella pyleri* の越冬状況. 日本鳥学会誌 71: 197-201.
- 武下雅文・佐本一雄・林修 (1993) 福岡県曾根干潟におけるズグロカモメの越冬数の年変化と季節変化. Strix 12: 107-114.
- 玉田克巳 (2008) 北海道東部地域におけるワタリガラスの越冬状況. 日本鳥学会誌 57: 11-19.
- 鳥居憲親・江崎保男 (2014) イソヒヨドリのハビタットとその空間構造—内陸都市への進出—. 山階鳥学誌 46: 15-24.
- 植田睦之・佐藤望 (2021) 東京都鳥類繁殖分布調査報告 2016-2021. バードリサーチ, 府中市. <https://www.bird-atlas.jp/news/bbstokyo2016-21.pdf>
- 植田睦之・植村慎吾 (2021) 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年. 鳥類繁殖分布調査会, 府中市. <https://www.bird-atlas.jp/news/bbs2016-21.pdf>
- 牛山克己・天野達也 (2006) 生態図鑑 マガン. バードリサーチニュース 3(3): 4-5.
- 和田岳 (2021) 大阪湾岸のカモメ類の分布の季節変化. バードリサーチニュース 2021年12月: 2.
- 渡辺朝一 (2010) 生態図鑑 コハクチョウ. バードリサーチニュース 7(3): 4-5.
- 山階鳥類研究所 (2002) 鳥類アトラス鳥類回収記録解析報告書 (1961-1995). 山階鳥類研究所, 我孫子.
- 山崎優佑 (2020) 群れを作る冬鳥の個体数変化 冬鳥ウォッチの課題とヨーロッパの調査事例. バードリサーチニュース 2020年11月: 2.
- 吉岡俊朗・蛭名純一・高橋雅雄・宮彰男・三戸貞夫・関下斉 (2017) 青森県東部におけるオジロワシ *Haliaeetus albicilla* の本州初の繁殖例. 日本鳥学会誌 66: 187-190.

調査協力者

調査にあたっては、396 人(団体を含む)の方の協力を得た。以下にお名前を列記して、御礼に代えさせていただく(敬称略、漢字コード順)。また、これらの方以外にも、バードリサーチのフィールドノート、日本野鳥の会の eBird Japan に情報をお寄せいただいた多くの方、探鳥会データベースに登録されている探鳥会を主催した日本野鳥の会の各支部およびその参加者などの多くの方の情報なしには、この調査は実施することはできなかった。これらの方々にも御礼申し上げたい。

ネイチャーリーダー江東、阿部清典、阿部智、渥美美保、伊藤加奈、伊藤信明、伊藤芳晴、為我井大河、井垣亜希子、井山明、井上佳祐、井上幹男、井上賢三郎、井上克之、井上勝巳、井上伸之、井上裕由、井尻雅己、井灘志げ子、稲田菊雄、宇野竜司、卯木達朗、浦達也、瓜生篤、越川重治、園村茂夫、猿子正彦、遠藤明美、横山由里子、岡かおる、岡望、加藤ゆき、加藤俱彦、加藤敬一、加藤俊哉、加藤太一、加藤美奈子、加藤和美、河合嗣生、河端正太郎、河端奈々美、河辺典子、花房ゆかり、海老原信一、海老原美夫、皆川昌人、梶浦敬一、関口佳子、関口律子、関孝、関伸一、丸山真理子、岸晃大、岩谷比呂子、岩本昌憲、岩本忠義、菊地直樹、菊池菊子、菊田雅晴、吉家奈保美、吉原俊雄、吉原由紀子、吉川明宏、吉田延雄、吉田直樹、吉田麻里子、吉田亮、吉田良平、久保賢一、宮島仁、宮林泰彦、橋越清一、橋口長和、橋本啓史、玉井正晴、筋木宏芳、近藤健一、近藤龍哉、金井裕、金子はる子、金子海太、金子凱彦、金野やよい、金澤晋一、熊谷潤、熊谷直美、桑森亮、源琢哉、古江之人、古川紀美子、古田浩行、戸澤章、五十嵐悟、五十嵐勉、後藤二三、後藤靖、工藤正義、工藤美佳子、広友詞子、江口初男、荒井浩、香川の野鳥を守る会、高井正明、高岡修史、高橋新一、高橋満子、高谷浩一、高谷三恵子、高田直紀、高畑晃、高野信久、黒沢信道、黒田慧史、黒田弘章、今井誠人、今川義康、佐々木均、佐藤賢二、佐藤元一、佐藤七重、佐藤重徳、佐藤由佳、佐野宏哉、佐野和宏、斎藤憲二、細野敦夫、在津誠、坂井博一、坂口里美、坂本里江、坂野恭子、笹原常雅、三浦隆、三間久豊、三好邦範、三好祐介、三宅武、三谷栄治、三田長久、山根眞一、山崎浩司、山崎智、山中式夫、山内啓治、山本貴仁、山本歩、山本芳夫、山本陽子、市原晨太郎、市川昭、時田賢一、篠崎雄彦、柴田栄、柴田絵里、若山千麻子、守高裕美、手井修三、酒向正美、舟山忠雄、住友順子、出口翔大、小栗克彦、小山裕行、小室智幸、小松恒、小西幸宏、小川加代、小泉金次、小泉俊江、小池一男、小嶋明男、小嶋隆太郎、小野安行、小野和加子、小林みどり、小林雅裕、小林正人、小林尹夫、松浦ほの花、松浦真理子、松下彩二、松前良彦、松村俊幸、松村茂生、松田映子、松田久司、松田美奈子、松本芳文、上沖正欣、上原健、上石富一、上村耕一郎、上田かおり、上田幹男、上田智子、上野あや、植田睦之、織田真理恵、新井巖、新井清雄、新谷幸嗣、新田和美、新野圭美、新野聡、森信博、森由香、森隆二、深井宣男、深瀬徹、深川文恵、深沢敬、神尾雄二、須崎聡、須田由美、水上健太、水村春香、菅原美奈子、成末雅恵、清水敏弘、西川雄太、西村四郎、青木正俊、青柳克、斉藤けい子、斉藤誠、石井瞭、石光章、石崎友紀子、石山健一、石川敏男、石塚敬二郎、石田静子、赤間善男、千島康幸、千葉浩志、千葉裕、川崎俊一、川島賢治、川路則友、泉水、浅井しおり、浅見徹、浅川崇典、前田潤一、前田洋一、前島健吾、組頭五十夫、相原修一、相原博行、村井みとい、村上亜都子、村上裕、村上良真、村尾雅宏、村本和之、多田英行、太田敦、大井智弘、大原庄史、大向あぐり、大坂英樹、大山里咲、大西五十二、大谷力、大塚育恵、大塚豊、大塚恵子、大内晴、大内美江、谷岡仁、谷口秀樹、谷口陽香、谷田部佑、谷本洋子、丹波澄子、池永祐二、竹丸勝朗、竹澤伊佐男、中塩一夫、中官亮

行, 中村健三, 中村公義, 中村秀実, 中村豊己, 中津弘, 中島直, 中尾禎志, 中尾文男, 中野晃生, 仲真晶子, 仲田立, 町田喜彦, 長久保定雄, 長沼麻紀子, 長谷部謙二, 長塚美代子, 長嶋宏之, 長野誠治, 津村真由美, 椎名和夫, 塚島律子, 辻義次, 鶴谷暢子, 田原博, 田川亨, 田中正晴, 田中美和子, 田中佑奈, 田中利彦, 田米希久代, 渡辺憲一, 渡邊敬逸, 奴賀俊光, 島崎康広, 島野紗帆, 嶋孝弘, 嶋田和明, 東出芳廣, 東常哲也, 東條秀徳, 湯川, 藤巻裕蔵, 藤原郁久, 藤原貞弘, 藤川勤一, 藤田薫, 藤波不二雄, 藤本尚子, 堂岸綾子, 徳永達郎, 徳田英雄, 内田慧, 楠健明, 二宮敏夫, 二宮敏雄, 日本野鳥の会徳島県支部, 入山博, 納村力, 八木茂, 板谷浩男, 菱沼一充, 菱沼洋子, 富田恵理子, 富島雄治, 富永誠, 布留川毅, 武田真澄美, 服部利也, 福家桃, 文成民, 平城常雄, 平野敏明, 平林千帆, 米山富和, 法橋弥生, 北川捷康, 北尾祐介, 堀孝敏, 堀江晶子, 堀内和啓, 本田敏夫, 末永やすこ, 茂木幸蔵, 茂木大樹, 木下淑子, 木村, 木本みき枝, 木本誠一, 木本野樹, 野口真磨子, 野村淳一, 矢本賢, 矢野正, 柳生博, 柳町邦光, 柳田一郎, 葉山政治, 林恵治, 鈴川文夫, 鈴木健司, 鈴木宏芳, 鈴木秀治, 鈴木遼太郎, 鈴木莉緒, 和田岳, 和田真理子, 和田裕美子, 脇坂英弥, 廣田純平, 櫻井佳明, 濱伸二郎, 籠島恵介, 築川堅治, 齊木孝, 高橋和也, 高崎康晃

付表 分布図掲載種と計測値の出典, 撮影者. 1 がバードリサーチの生態図鑑によるもの(詳細は QR コードや表中の URL から参照), 2 が JAVIAN データベース(高川ほか 2011)によるもの, 3 が榎本(1941), 4 が国立環境研究所(online), 5 が del Hoyo et al.(1994), 6 が RSPB(online)に基づくものである。

種名	計測値	撮影者	種名	計測値	撮影者	種名	計測値	撮影者
エゾライチョウ	1	藤井薫	ビロードキンクロ	2	渡辺美郎	チュウサギ	1	三木敏史
ライチョウ	1	堀田昌伸	クロガモ	2	三木敏史	コサギ	1	渡辺美郎
ウズラ	1	渡辺美郎	コオリガモ	2	大塚之稔	クロサギ	2	河端正太郎
ヤマドリ	1+2	三木敏史	ホオジロガモ	2	三木敏史	トキ	1	園村茂夫
キジ	1+2	三木敏史	ミコアイサ	2	三木敏史	ヘラサギ	2	三木敏史
サカツラガン	2	三木敏史	カワアイサ	2	藤井薫	クロツラヘラサギ	1	三木敏史
ヒシクイ	2	三木敏史	ウミアイサ	2	植田睦之	ソデグロヅル	2	木本誠一
ハイロガン	2	中尾禎志	コウライアイサ	2	三木敏史	カナダヅル	2	佐藤仁志
マガン	1	三木敏史	カイツブリ	1	三木敏史	マナヅル	1	大塚之稔
カリガネ	2	高橋ゆう	アカエリカイツブリ	2	三木敏史	タンチョウ	1	三木敏史
ハクガン	1	渡辺美郎	カムリカイツブリ	1	渡辺美郎	クロヅル	2	三木敏史
シジュウカラガン	2	藤井薫	ミカイツブリ	2	大塚之稔	ナベヅル	1	大塚之稔
コクガン	1	三木敏史	ハジロカイツブリ	2	三木敏史	アネハヅル	2	藤井薫
コハクチョウ	1	渡辺美郎	カラスバト	1	中村豊	シマクイナ	2	先崎理之
オオハクチョウ	1	三木敏史	キジバト	1	三木敏史	オオクイナ	2	小林雅裕
ツクシガモ	2	渡辺美郎	キンバト	2	高木昌興	ヤンバルクイナ	2	小高信彦
オシドリ	1	三ツ井政夫	アオバト	1	湯浅芳彦	クイナ	2	三木敏史
オカヨシガモ	2	渡辺美郎	ズアカアオバト	2	貞光隆志	シロハラクイナ	2	小林雅裕
ヨシガモ	2	渡辺美郎	アビ	3	貞光隆志	ヒクイナ	1	豊田敏則
ヒドリガモ	1	三木敏史	オオハム	3	三木敏史	バン	2	渡辺美郎
アメリカヒドリ	1	三木敏史	シロエリオオハム	3	三木敏史	オオバン	1	桑森亮
マガモ	1	渡辺美郎	コウノトリ	2	三木敏史	ヒメアマツバメ	1	宮本和也
カルガモ	1	渡辺美郎	カツオドリ	1	矢田新平	タゲリ	2	三木敏史
ハシビロガモ	2	渡辺美郎	ヒメウ	2	三木敏史	ケリ	1	三木敏史
オナガガモ	1	渡辺美郎	カワウ	1	渡辺美郎	ムナグロ	1	三木敏史
シマアジ	2	渡辺美郎	ウミウ	1	三木敏史	ダイゼン	2	三木敏史
トモエガモ	1+2	三木敏史	サンカノゴイ	2	三木敏史	ハジロコチドリ	2	三木敏史
コガモ	2	藤井薫	リュウキュウヨシゴイ	2	貞光隆志	イカルチドリ	1	三木敏史
オオホシハジロ	2	野村明	ズグロミゾゴイ	2	小林雅裕	コチドリ	1	三木敏史
ホシハジロ	1	渡辺美郎	ゴイスギ	1	湯浅芳彦	シロチドリ	1	三木敏史
アカハジロ	2	三木敏史	ササゴイ	1	三木敏史	メダイチドリ	3	三木敏史
メジロガモ	2	渡辺美郎	アカガシラサギ	2	三木敏史	オオメダイチドリ	2	三木敏史
キンクロハジロ	2	三木敏史	アマサギ	1	渡辺美郎	ミヤコドリ	1	三木敏史
スズガモ	1	三木敏史	アオサギ	1	三木敏史	セイタカシギ	1	三木敏史
コスズガモ	2	西村四郎	ムラサキサギ	2	小林雅裕	ソリハシセイタカシギ	2	三木敏史
シノリガモ	2	三木敏史	ダイサギ	2	三木敏史	ヤマシギ	1	三木敏史

付表 つづき

種名	計測値	撮影者	種名	計測値	撮影者	種名	計測値	撮影者
アマヤマシギ	1	貞光隆志	カワセミ	2	三木敏史	ツグミ	2	三木敏史
アオシギ	2	渡辺美郎	ヤマセミ	1	三木敏史	ノハラツグミ	2	三木敏史
タシギ	3	渡辺美郎	アリスイ	1	三木敏史	アカヒゲ	1+2	貞光隆志
オオハシシギ	2	三木敏史	コゲラ	1	藤井薫	ノゴマ	2	三木敏史
オオソリハシシギ	2	三木敏史	コアカゲラ	2	藤井薫	ルリビタキ	1	池永祐二
チュウシャクシギ	3	三木敏史	オオアカゲラ	2	平野敏明	ジョウビタキ	1	神尾雄二
ダイシャクシギ	3	三木敏史	アカゲラ	1	藤井薫	ノビタキ	1	三木敏史
ホウロクシギ	1	三木敏史	クマガラ	1+2	土屋尚	イソヒヨドリ	1	川崎慎二
ツルシギ	3	三木敏史	アオゲラ	2	三木敏史	(ニシ)オジロビタキ	2	三木敏史
アカアシシギ	3	三木敏史	ヤマゲラ	2	貞光隆志	イワヒバリ	2	内田博
コアカアシシギ	2	三木敏史	ノグチゲラ	1	小高信彦	カヤクグリ	2	三木敏史
アオアシシギ	3	三木敏史	チョウゲンボウ	1	三木敏史	ニューナイスズメ	2	大塚之稔
クサシギ	3	三木敏史	オオカラモズ	2	三木敏史	スズメ	1	三木敏史
タカブシギ	3	三木敏史	ハヤブサ	1	三木敏史	ツメナガセキレイ	2	三木敏史
キアシシギ	3	三木敏史	サンショウクイ	2	大塚之稔	キセキレイ	2	三木敏史
ソリハシシギ	3	三木敏史	モズ	1	三木敏史	ハクセキレイ	1	湯浅芳彦
イソシギ	3	三木敏史	アカモズ	1	渡辺美郎	セグロセキレイ	1	高橋ゆう
キョウジョシギ	3	三木敏史	オオカラモズ	2	三木敏史	マミジロタヒバリ	2	三木敏史
ミユビシギ	1	三木敏史	カケス	2	三木敏史	ピンズイ	2	三木敏史
トウネン	3	藤井薫	ルリカケス	1	三木敏史	ムネアカタヒバリ	2	三木敏史
ヨーロッパトウネン	1	三木敏史	オナガ	1	内田博	タヒバリ	2	三木敏史
オジロトウネン	2	三木敏史	カササギ	1	三木敏史	アトリ	2	三木敏史
ヒバリシギ	2	三木敏史	ホシガラス	2	三木敏史	カワラヒワ	2	三木敏史
ウズラシギ	2	三木敏史	コクマルガラス	2	三木敏史	マヒワ	2	三木敏史
ハマシギ	2	三木敏史	ミヤマガラス	2	三木敏史	ベニヒワ	2	三木敏史
エリマキシギ	2	三木敏史	ハシボソガラス	1	渡辺美郎	ハギマシコ	2	三木敏史
タマシギ	1	渡辺美郎	ハシブトガラス	1	三木敏史	ベニマシコ	2	三木敏史
ミフウズラ	2	高木昌興	ワタリガラス	2	藤井薫	オオマシコ	2	三木敏史
ミツユビカモメ	3	渡辺美郎	キクイタダキ	2	三木敏史	ギンザンマシコ	2	藤井薫
ユリカモメ	1+3	内田博	ツリスガラ	2	三木敏史	イスカ	1	三木敏史
ズグロカモメ	2	三木敏史	ハシブトガラ	1+2	三木敏史	ウソ	2	神尾雄二
ウミネコ	1+3	三木敏史	コガラ	1	小松周一	シメ	2	小松周一
カモメ	3	渡辺美郎	ヤマガラ	1	三木敏史	コイカル	2	三木敏史
ワシカモメ	2	渡辺美郎	ヒガラ	2	大塚之稔	イカル	2	三木敏史
シロカモメ	3	櫻井佳明	シジュウカラ	1	豊田敏則	ユキホオジロ	2	藤井薫
セグロカモメ	1	三木敏史	ヒバリ	1	三木敏史	ホオジロ	2	三木敏史
オオセグロカモメ	1+3	三木敏史	ツバメ	1	内田博	ホオアカ	2	佐々木均
ニシセグロカモメ	6	湯浅芳彦	リュウキュウツバメ	2	小松周一	コホオアカ	2	三木敏史
オニアジサシ	2	佐々木均	イワツバメ	1	大塚之稔	カシラダカ	1	三木敏史
ハシブトミガラス	1	大塚之稔	シロガシラ	2	三木敏史	ミヤマホオジロ	2	豊田敏則
ウミガラス	1+3	福田佳弘	ヒヨドリ	1	藤井薫	ノジコ	1	三木敏史
ケイマフリ	1	高木昌興	ウグイス	1	三木敏史	アオジ	2	三木敏史
ウミスズメ	3	貞光隆志	ヤブサメ	1	城石一徹	クロジ	2	三木敏史
カンムリウミスズメ	1	貞光隆志	エナガ	1	三ツ井政夫	シベリアジュリン	2	渡辺美郎
ウトウ	1	佐々木均	ムジセッカ	2	野村明	コジュリン	2	河端正太郎
ミサゴ	1	福家桃	キヤムムシクイ	2	三木敏史	オオジュリン	2	三木敏史
カタグロトビ	5	小林雅裕	メグロ	1	植田睦之	コジュケイ	2	大塚之稔
トビ	1	三木敏史	メジロ	1	藤井薫	インドクジャク	4	小林雅裕
オジロワシ	1	福井和二	オオセッカ	1	佐々木均	コクチョウ	4	植田睦之
オオワシ	1	三木敏史	セッカ	1+2	神尾雄二	コブハクチョウ	2	植村慎吾
カンムリワシ	1	小林雅裕	キレンジャク	2	三木敏史	カワラバト(ドバト)	1	植田睦之
チュウヒ	1	三木敏史	ヒレンジャク	2	三木敏史	シラコバト	1	内田博
ハイイロチュウヒ	2	三木敏史	ゴジュウカラ	2	福家桃	セキセイインコ	4	谷英雄
ツミ	1	内田博	キバシリ	2	平城常雄	ホンセイインコ	1	阿部仁美
ハイタカ	1	西村四郎	ミソサザイ	1	三木敏史	サンジャク		谷岡仁
オオタカ	1	藤井薫	ギンムクドリ	2	三木敏史	ガビチョウ	2	橋本和司
サシバ	1	加藤俊之	ムクドリ	1	藤井薫	ヒゲガビチョウ	2	谷岡仁
ノスリ	1	後藤二三	コムクドリ	1	佐々木均	カオグロガビチョウ	4	内田博
クエアノスリ	2	三木敏史	カラムクドリ	2	三木敏史	カオジロガビチョウ	2	平野敏明
クマタカ	1	三木敏史	ホシムクドリ	2	三木敏史	ソウシチョウ	1	所崎聡
オオコノハズク	2	三木敏史	カワガラス	2	三木敏史	ハッカチョウ	2	渡辺美郎
リュウキュウコノハズク	1	高木昌興	トラツグミ	1	三木敏史	インドハッカ	4	小林雅裕
フクロウ	2	小野安行	クロツグミ	1	三木敏史	ベニスズメ	4	祝原光雄
アオバズク	2	三木敏史	マミチャジナイ	2	三木敏史	シマキンバラ	4	渡辺美郎
トラフズク	2	三木敏史	シロハラ	2	三木敏史	ギンバラ	4	大塚之稔
コミズク	2	藤井薫	アカハラ	2	大塚之稔	ヘキチョウ	4	佐々木均
ヤツガシラ	2	三木敏史	アカコッコ	1	高須英之	ブンチョウ	4	小峯昇

全国鳥類越冬分布調査報告 2016-2022 年

2023 年 2 月 11 日 発行

植田睦之・奴賀俊光・山崎優佑（著）

表紙デザイン: 重原美智子

編集協力

渥美美保, 一色竜一郎, 石崎友紀子, 磯海弘子, 板垣杉子, 井守美穂, 井山明, 上野あや,
内田初江, 榎本博子, 大井智弘, 大坂英樹, 大橋美幸, 大島文雄, 小川加代, 柏木敦士,
北尾祐介, 吉家奈保美, 笹倉千江花, 笹野義一, 鈴木利幸, 瀬川隆司, 関口佳子, 関口律子,
善方和亮, 仲山洋一, 西川光一, 沼里和幸, 広友詞子, 深井宣男, 前澤昭彦, 松田久司, 松本明,
安ヶ平奈緒美, 谷田部佑, 山崎健, 矢本賢

特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒186-0002 国立市東 1-4-28 篠崎ビル 302

公益財団法人 日本野鳥の会
〒141-0031 品川区西五反田 3-9-23 丸和ビル



この報告は, 公益財団法人自然保護助成基金第 33 期(2022 年度)
プロ・ナトゥーラ・ファンド助成によって作成されました。

表紙: ギンザンマシコ(藤井薫), 裏表紙: アトリ(三木敏史)